

西晉文學研究―陸機を中心として―

佐藤利行

目次

序章

- 一 西晉文學について……………三
- 二 西晉時代の文學集團と陸機……………一七
- 三 陸機について——陸機の生涯……………一九
- (1) 入洛以前の陸機……………一九
- (2) 入洛以後の陸機……………二二

第一章 西晉の文學集團

- 一 文人の集團化……………二六
- 二 西晉における文學集團……………三三
- (1) 陸機入洛以前の西晉文壇……………三三
- (2) 陸機入洛以後の西晉文壇……………三五
- 1 愍懷太子府集團……………三五
- 2 陸機集團——南人集團……………四七
- 3 張華集團……………五〇
- 4 賈謐集團——二十四友……………六六
- 5 石崇集團——金谷の集い……………九〇
- 6 陸雲集團——古典派……………九七
- 7 成都王司馬穎集團……………一一三
- 三 集團相互の關連と各集團の特徴……………一二六
- 四 西晉文壇關係年譜……………一三五

第二章 陸機を中心とする文學集團——南人集團——

- 一 南人集團の形成過程と其の目的……………一三七
- (1) 二陸入洛以後の狀況——二陸に對する北人の態度……………一三七
- (2) 南人集團の形成……………一四五
- (3) 二陸入洛以前の狀況……………一五一

| | |
|----------------------------|-----|
| (4) 陸雲の働き | 一六二 |
| (5) 西晉朝廷の對南人政策—南人を南方統治に利用— | 一六八 |
| 二 呉における文人集團—陸典集團— | 一七七 |
| (1) 陸雲と陸典 | 一七七 |
| (2) 陸典入洛の計画 | 一八〇 |
| 三 南人集團の構成員 | 一八二 |
| (1) 陸機入洛以前 | 一八二 |
| (2) 陸機入洛の頃 | 一八四 |
| (3) 陸機入洛以後 | 一九六 |
| (4) 南人集團形成の據點—愍懷太子府— | 二二二 |
| 四 集團における活動 | 二二四 |
| (1) 政治活動 | 二二四 |
| (2) 文學活動 | 二二五 |

第三章 陸機の文學（南方文學）と北方文學

| | |
|------------------------|-----|
| 一 陸機の文學（南方文學）に對する從來の評價 | 二二二 |
| (1) 入洛以前の詩 | 二二三 |
| (2) 入洛に際しての詩 | 二三四 |
| 二 北方文學に對する從來の評價 | 二三八 |
| (1) 潘岳の詩 | 二四〇 |
| (2) 張華の詩 | 二四五 |
| 三 入洛後の陸機の文學 | 二四八 |
| (1) 陸機の文學について | 二四八 |
| 1 陸雲「與平原書」三十五首に見られる文學觀 | 二四九 |
| ① 文章表現について | 二五〇 |
| I 用語について | 二五〇 |
| a 新奇 | 二五一 |
| b 綺語 | 二五六 |
| c 出語・出言 | 二五七 |

| | |
|--------------------------------|-----|
| II 句について | 二五八 |
| a 對句 | 二五九 |
| b 轉句 | 二六〇 |
| c 押韻 | 二六三 |
| III 一篇の構成 | 二六五 |
| ② 文章の内容について | 二七三 |
| I 文章における「清」 | 二七三 |
| II 文章における「情」 | 二七七 |
| ③ その他 | 二八〇 |
| I 『呉書』の撰作について | 二八〇 |
| II 「三都賦」「二京賦」の創作について | 二八八 |
| 2 陸機の文學における北方文學の影響 | 三〇二 |
| (2) 陸機(南方)文學が北方文學に與えた影響 | 三〇五 |
| 四 従來の西晉文學批評に對する意見 | 三三一 |
| | |
| 第四章 陸機の文學——「文賦」を中心として | 三三四 |
| 一 「文賦」に見られる陸機の文學觀 | 三三四 |
| (1) 「文賦」について | 三三四 |
| 1 「文賦」の制作過程 | 三三四 |
| 2 「文賦」の内容 | 三三八 |
| ① 創作過程 | 三五六 |
| ② 表現・内容について | 三五七 |
| (2) 陸機の文學觀——「與平原書」に見られる文學觀との比較 | 三六三 |
| 1 表現面について | 三六三 |
| ① 語について | 三六三 |
| ② 句について | 三六六 |
| ③ 文章の長さについて | 三六七 |
| 2 内容面について | 三六八 |
| (2) 文學批評史における「文賦」の意味 | 三七三 |

終章

- 一 西晉文學の本質―西晉文學における陸機の位置付け―……………三七八
- (1) 西晉文學集團と陸機……………三七八
- (2) 西晉文壇における陸機……………三七九
- (3) 陸機の「文賦」と陸雲の「與平原書」……………三八一
- 二 中國文學史上における西晉文學の位置付け……………三八二
- (1) 建安・正始文學との関わり……………三八三
- (2) 東晉文學との関わり……………三九〇
- 三 今後の課題……………四〇一

序 章

西暦二六五年、魏・晉の間で禪讓が行なわれて司馬炎（武帝）が即位し、ここに西晉王朝が始まる。これより二年前の魏の元帝の景元四年（二六三）には蜀が滅んだが、呉は未だ降っておらず、西晉との間で戦いが續いていた。従って、西晉王朝が始まった武帝の泰始年間（二六五～二七四）、それに續く咸寧年間（二七五～二七九）は、世の中はなお混亂した状況であった。

西暦二八〇（武帝の太康元年）、ついに呉が西晉に滅ぼされ、ここに中國は西晉によって統一された。以後十年の間、すなわち武帝の太康年間（二八〇～二八九）が、西晉王朝にあつて、最も安定した時代であつた。そうして西晉に滅ぼされた呉國出身の陸機が、西晉の都洛陽に入ったのは、太康の末年（二八九）のことである。陸機は南方呉國を代表する文人であり、本論文ではこの人物の文學活動を中心にして西晉文壇の様子と、そこで生み出された文學の特質を見てゆこうとするわけであるが、西晉王朝が始まった二六五年から、この陸機が入洛した二八九年までの二十五年間が、西晉文學史の第一期であつて、ことに太康年間は、洛陽を中心に『楚辭』を據り所とした華美で輕快な文學が盛んに行なわれていた。

西暦二九〇、武帝司馬炎が死去し、惠帝司馬衷が即位した。以後、陸機が害に遇つた惠帝の太安二年（三〇三）までの十四年間は、西晉文學における第二期であつて、この時期は政治的に混亂をきたした時期でもあつた。すなわち、武帝の死後、その後であつた悼楊皇后之父として權勢を擅にしていた太傅の楊駿が、惠帝の永康元年（二九一）に惠帝の賈后によつて殺され、翌年には悼楊皇太后も殺害された。以後の八年間は賈后の專政が續くが、その賈后も惠帝の永康元年（三〇〇）に趙王司馬倫に誅殺され、翌永寧元年には趙王倫が惠帝を幽閉して、ここに「八王の亂」が始まつた。陸機は、まさしく此の八王の亂の最中に世を去つた。國內はこのように混亂していたが、時を同じくして外地では、元康六年（二九六）氐族の酋長齊萬年が反亂を起こし、それが鎮壓されたのは三年後の元康九年（二九九）のことである。

このような混亂した状況のなかで、文學の面では政治的中心人物のもとに幾つ

かの文學集團が構成され、その活動が行なわれていた。殊に注目されるのは、南方吳國出身の陸機・陸雲を始めとする南方文人が多くその活動に加わっていたということである。すなわち、吳においては『詩經』を規範とした古典的な文學が盛んであったが、そのような古典的な文學が北方文壇に持ち込まれたことによって、南北の文學が影響し合い、従來のものとは異なった新しい文學が生み出されたのである。本論文の主要な目的は、まさに此の時期、すなわち西晉文學における第二期（の文學を採ること）であり、性質の異なる南北の文學が、陸機の入洛を契機として交流を持ち、いかに變化し、その結果、いかなる文學が生まれたのかということを考察することにある。

さて、陸機の死後、西曆三〇七年には惠帝司馬衷が世を去り、懷帝司馬熾が即位し永嘉と改元した。此の永嘉五年（三一）には、石勒が西晉の軍を破り、前趙の劉曜・王彌らによって洛陽が攻められ、懷帝が平陽に連れ去られてしまう。世に言う「永嘉の亂」の始まりである。西曆三二三年には、懷帝司馬熾が殺されて、愍帝司馬業が長安で即位し、改元して建興とした。建興四年（三二六）、劉曜が長安を攻略し、愍帝は降伏して、ここに西晉王朝は滅亡した。陸機の死後、西晉の滅亡までの十三年間が、西晉文學の第三期であって、東晉になって盛んとなる玄言詩の流行が始まる。

西晉の文學は上記の如く、陸機の動きを中心に、

〔第一期〕（二六五～二八九）

二六五（武帝・秦始皇元年） 西晉王朝、誕生。

二八〇（武帝・太康元年） 吳、滅亡。

〔第二期〕（二八九～三〇三）

二八九（武帝・太康十年） 陸機、入洛。

三〇三（惠帝・太安二年） 陸機、殺される。

〔第三期〕（三〇三～三一六）

三一六（愍帝・建興四年） 西晉王朝、滅亡。

三二一（懷帝・永嘉五年） 永嘉の亂、始まる。

の三つの時期に分けることができると思われる。本論文では此の三期のうち第二期、すなわち陸機・陸雲が入洛し、不運な最期をとげるまでの十數年間を中心にして、西晉文壇の状況と、そこに生まれた西晉文學の特質について、考察を加えんとするものである。

一 西晉文學について

晉代の文學、特に西晉時代の文學について、從來どのような説明がなされているか、古代からの文學の流れについて、梁の劉勰『文心雕龍』、鍾嶸『詩品』、沈約『宋書』謝靈運傳論、檀道鸞『續晉陽秋』に記されている解説を取り上げて見てみよう。

まず劉勰の『文心雕龍』明詩篇では、漢代の詩について次のように述べている。

漢初四言、韋孟首唱、匡諫之義、繼軌周人。孝武愛文、柏梁列韻。嚴馬之徒、屬辭無方。至成帝、品錄三百餘篇。朝章國采、亦云周備。而辭人遺翰、莫見五言。所以李陵班婕妤、見疑於後代也。按召南行露、始肇半章、孺子滄浪、亦有全曲。暇豫優歌、遠見春秋、邪徑童謠、近在成世。閱時取證、則五言久矣。又古詩佳麗、或稱枚叔。其孤竹一篇、則傳毅之詞。比采而推、固兩漢之作也。觀其結體散文、直而不野、婉轉附物。悵悵切情、實五言之冠冕也。至於張衡怨篇、清典可味、仙詩緩歌、雅有新聲。

漢初の四言は、韋孟首めて唱へ、匡諫の義は、軌を周人に繼ぐ。孝武 文を愛し、柏梁 韻を列ぬ。嚴・馬の徒、屬辭 方無し。成帝に至り、三百餘篇を品録す。朝章 國采、亦た云に周備す。而れども辭人の遺翰に、五言を見る莫し。李陵・班婕妤、後代に疑はるる所以なり。按ずるに招南の行露、始めて半章を肇め、孺子の滄浪、亦た全曲有り。暇豫の優歌は、遠く春秋に見え、邪徑の童謠は、近く成の世に在り。時を閱て證を取れば、則ち五言は久し。又た古詩の佳麗なるは、或いは枚叔と稱す。其の孤竹の一篇は、則ち傳毅の詞なり。采を比べて推せば、固より兩漢の作か。其の結體と散文を觀るに、直にして野ならず、婉轉として物に附し、悵悵として情に切にして、實に五言の冠冕なり。張衡の怨篇に至りては、清典 味はふ可く、仙詩の緩歌は、雅にして新聲有り。

漢代初期の四言詩は、韋孟が最初に作ったが、匡救諷諫の精神は、周代の詩人を繼承するものである。孝武皇帝（劉徹）は文學を愛好し、柏梁臺で聯句を作った。嚴助や司

馬相如らの創作態度は自由なものであった。成帝（劉騫）の世になって、當代の歌詩を品評して三百餘篇を記録した。ために朝廷で用いる歌と民間に行なわれる詩とが、ここに完備した。しかし、詩人の作品の中に五言詩は見當たらぬ。李陵や班婕妤の五言詩が後世に疑われるのはこのためである。思うに、『詩經』召南の「行露」には、始めて全章の半分に五言句が用いられ、（『孟子』離婁に見える）兒童の歌「滄浪の歌」は、やはり全章が五言から成っている。（『國語』晉語に見える）「暇豫」という優施の五言詩は、早くも春秋の時代に見え、「邪徑」という五言の童謡は、近く漢の成帝の時代に現れた。このように時代をたどって證據を取り集めれば、五言詩の歴史は久しいのである。また「古詩」十九首（のうちの九首）は美しい作品で、枚乗の作であるとも言われる。ただ「冉冉として孤り生ゆる竹」の詩だけは、傳毅の作である。これらの作品を修辭の面から推定するならば、もとより兩漢の作品であろう。その構成と修飾を見ると、率直ではあるが野鄙ではなく、纏わるように對象に密着して、悲哀を切々と詠い、實に五言詩の最初の一級品である。張衡の「怨詩」は、清麗典雅な趣があつて味わうに足り、その仙詩は緩やかな調子の歌で、温雅であつて清新さもある。

劉勰は、漢の詩に對して、「直而不野、婉轉附物、怛悵切情、實五言之冠冕也」（率直ではあるが野鄙ではなく、纏わるように對象に密着して、悲哀を切々と詠い、實に五言詩の最初の一級品である）という評價を與えており、これに續けて、建安から晉に至るまでの詩風について、次のように言う。

暨建安之初、五言騰踊。文帝陳思、縱轡以騁節、王徐應劉、望路而爭驅。竝憐風月、狎池苑、述恩榮、敘酣宴、慷慨以任氣、磊落以使才。造懷指事、不求纖密之巧、驅辭逐貌、唯取昭晰之能。此其所同也。及正始明道、詩雜仙心。何晏之徒、率多浮淺。唯秘志清峻、阮旨遙深。故能標焉。若乃應璩百一、獨立不懼、辭譎義貞、亦魏之遺直也。

建安の初めに暨び、五言 騰踊す。文帝・陳思は、轡を縱ちて以て節を騁せ、王・徐・應・劉は、路を望んで驅を争ふ。竝びに風月を憐れみ、池苑に狎れ、恩榮を述べ、酣宴を敘し、慷慨 以て氣に任じ、磊落 以て才を使ふ。懷ひを造し事を指すに、纖密の巧を求めず、辭を驅り貌を逐ふに、唯だ昭晰の能を取る。此れ其の同じき所なり。正始 道を明らかにするに及んで、詩は仙心を雜ふ。何晏の徒、率ね浮淺多し。唯だ秘志清峻にして、阮は旨 遙深なり。故に能く標す。乃の應璩の百一の、獨立して懼れず、辭譎にして義貞なるが若きは、亦た魏の遺直なり。

建安時代の初めになると、五言詩が盛んになった。魏の文帝と陳思王曹植は、手綱をゆるめて思う存分に馬を走らせ、王粲・徐幹・應瑒・劉楨らは、前路を望んで争い駆けつた。彼らは風月を愛で、池苑に戯れ、恩寵榮華を述べ、宴の盛況を敘し、激昂しては意氣の躍るに任せ、細かい事にこだわること無く才能を發揮した。胸中の思いを述べ眼前の景物を描くに當たっては、繊細で緻密なる技巧を求めず、修辭を盡くして形容を求めるとに際しても、ただ文意の明らかであることを重視した。これは彼らすべての共通點である。魏の正始年間に、老莊の道が流行するに及んで、詩にも神仙的發想が入り混じってきた。何晏一派には、おおむね淺薄な作品が多い。ただ嵇康だけは志が清らかで峻しく、阮籍は旨が深遠であった。それで二人は際立った存在となっている。應璩の「百一詩」が、獨立不羈にして懼れず、文辭が婉曲で内容が確かであるのは、魏の遺風を繼承したものである。

「建安時代の初めになって、五言詩が盛んになり、魏の文帝・陳思王曹植、王粲・徐幹・應瑒・劉楨らの文人が活躍した。魏の正始年間、老莊思想が流行するようになって、詩の中に神仙を慕う懐いを歌う作品が多く生まれ、何晏・嵇康・阮籍らが活躍した。また應璩の『百一詩』は、魏の遺風を繼承したものと云える」と言う。

そうして、晋から宋に至るまでの詩風の變遷について、以下の如く述べる。

晋世羣才、稍入輕綺。張左潘陸、比肩詩衢。采緝於正始、力柔於建安、或析文以爲妙、或流靡以自妍。此其大略也。江左篇製、溺乎玄風、嗤笑徇務之志、崇盛亡機之談。袁孫已下、雖各有雕采、而辭趣一揆、莫與争雄。所以景純仙篇、挺拔而爲俊矣。

晋世の羣才は、稍や輕綺に入る。張・左・潘・陸は、肩を詩衢に比ぶ。采は正始よりも緝にして、力は建安よりも柔に、或いは析文以て妙と爲し、或いは流靡以て自ら妍とす。此れ其の大略なり。江左の篇製は、玄風に溺れ、徇務の志を嗤笑し、亡機の談を崇盛す。袁・孫已下、各々雕采有りと雖も、辭趣は揆を一にして、與に雄を争ふもの莫し。景純の仙篇、挺拔して俊と爲る所以なり。

晋の世の作家たちは、(その作風が)次第に柔弱の美に流れていった。張(載・協・亢)、潘(岳・尼)、左(思)、陸(機・雲)らが、肩を詩壇に並べたが、文飾は正始時代よりも華麗で、氣力は建安よりも柔弱。分析的に文辭を細かくすることを巧妙と考える者もあり、文辭を流麗にすることを美しいと考える者もあった。これが西晋時代のあらましである。東晋時代の作品は、老莊の思想に溺れた結果、眞面目に世事に務める精神をさげすみ、清談を崇んだ。袁宏・孫綽をはじめとする作品には、それぞれに形式的な美

しさはあるけれども、その内容は畫一的で、これといった勝れたものはない。郭璞の「遊仙詩」がひとときわ優れているとされる所以はここにある。

西晉の代表的な文人として、「張」即ち張載・張協・張亢、「左」即ち左思、「潘」即ち潘岳・潘尼、「陸」即ち陸機・陸雲らを挙げ、「迫力は建安時代よりも柔弱で、文辭を細かく分析することを巧妙と考えたり、文辭を流靡にすることを美しいと考えたりする者がいた」と言い、「東晉になって、その作品は老莊の思想に溺れ、眞面目に仕事に励むことを嘲笑し清談が盛んになった」と言う。ついで六朝・宋の文學については、

宋初文詠、體有因革。莊老告退、而山水方滋。儷采百字之儷、爭儷一句之奇。情必極貌以寫物、辭必窮力而追新。此近世之所競也。

宋初の文詠は、體に因革有り。莊老退くを告げて、山水は方に滋し。采を百字の儷に儷べ、儷を一句の奇に爭ふ。情は必ず貌を極めて以て物を寫し、辭は必ず力を窮めて新を追ふ。此れ近世の競ふ所なり。

宋代初期の作品は、その體に變革がある。すなわち老莊思想が退潮して山水を歌うものが多くなってきた。多くの對儷を用いて文彩を誇示し、一句の新奇さを目指して作品の價值を競い、内容面では對象の姿を完全に捉えて描寫し、表現面では必ず力の限り新奇を追い求めた。このような點で近世の詩人は力を競いあつたのである。

「宋代初期の作品は、老莊思想が後退して山水を歌うものが多くなってきた。たくさん對儷を用いたり、一句の新奇さを争つたりして、詩人たちはその才能を競い合った」と記す。

劉勰は、このように漢代から宋代に至るまでの詩風變遷の狀況を概観しているが、そのうち晉代のそれについては、

晉世羣才、稍入輕綺。

晉世の羣才 稍や輕綺に入る。

と、晉代の多くの文人たちは、次第に繊細微弱の美を追い求めるようになってゆき、建安の頃の「慷慨 以て氣に任じ、磊落 以て才を使ふ」が如き風の無くなったことを、その特徴として捉えている。

次に、五言詩の歴史を記し、各代の作家に評價を加えている鍾嶸の『詩品』を見てみよう。

う。その序のなかで鍾嶸は、五言詩の歴史について以下の如く論じている。先ず、その濫觴について、

夏歌曰、爵陶乎予心。楚詞曰、名余曰正則。雖詩體未全、然是五言之濫觴也。

「夏歌」に曰く、「爵陶乎予心」と。「楚詞」に曰く、「余に名づけて正則と曰ふ」と。詩體 未だ全からずと雖も、然れども是れ五言之濫觴なり。

夏の（時代に遊情な生活をして政治をかえりみない夏王太康に對して、五人の弟は五首の歌を作ってそれを批判したが、その）歌の中に、「爵陶乎予心」という五言の句がある。また、『楚辭』の「離騷」の中に、「名余曰正則」という五言句がある。これらの例は、まだ五言詩の體裁は完成してはいないが、五言詩の濫觴といえる。

と述べている。そうして、漢代に入って五言詩が成立したことについて、次のように言う。

逮漢李陵、始著五言之目矣。古詩眇邈、人世難詳。推其文體、固是炎漢之製、非袁周之倡也。

漢の李陵に逮び、始めて五言の目を著はす。古詩は眇邈として、人世 詳らかにし難し。其の文體を推すに、固よりはれ炎漢の製にして、袁周の倡に非ざるなり。

漢の李陵の時になって、始めて五言詩が創作された。いわゆる「古詩」は遙か昔のことなので、作者も制作時期も明らかにはしがたい。しかし、その文體から推測すれば、もとより漢代の作品であって、周の末期の歌ではない。

これに續けて、以下は時代を逐いながら、それぞれの時代における五言詩の發達および代表的作家について、次のように概観している。

自王楊枚馬之徒、辭賦競爽、而吟詠靡聞。從李都尉、迄班婕妤、有婦人焉、一人而已。詩人之風、頓已闕喪。東京二百載中、惟有班固詠史、質木無文。

王・楊・枚・馬の徒より、辭賦は競爽すれども、而も吟詠は聞ゆること靡し。李都尉從り、班婕妤に迄るまで、婦人有り、一人のみ。詩人の風は、頓に已に闕喪す。東京二百載中、惟だ班固の詠史有るのみ、質木にして文無し。

王褒・楊雄・枚乘・司馬相如らの文人が世に出て以後、辭賦は盛んに作られたが、詩歌はさっぱり振るわなかった。李陵から班婕妤に至るまで（見るべき詩人は此の二人だけであるが）、班婕妤は女性であるから、李陵ただ一人ということになる。『詩經』の詩を作った人たちの歌聲は、にわかに途絶えてしまった。後漢の二百年の間には、ただ

班固の「詠史の詩」があるだけで、この作品は文飾の少ない素朴な詩である。

「王・楊・枚・馬」というのは、前漢末、宣帝時代の文人である王褒・楊雄、及びこれよりさき武帝時代の文人、枚乘・司馬相如を指し、この時代には辭賦の文學が盛んであつて、詩は振るわなかつたと述べ、そうしてその詩の振るわなかつた前漢時代にあつては、婦人である班婕妤を除けば、李都尉すなわち李陵がいるだけであるといひ、ついで後漢の二百年の間は、ただ班固の「詠史詩」があつただけであると言ふ。

續いて建安の文學について、次のように述べる。

降及建安、曹公父子、篤好斯文。平原兄弟、爵爲文棟、劉楨王粲、爲其羽翼。次有攀龍託鳳、自致於屬車者、蓋以百計。彬彬之盛、大備于時矣。爾後、陵遲衰微、迄于有晉。

降りて建安に及び、曹公父子は、篤く斯文を好む。平原兄弟は、爵として文棟爲り、劉楨・王粲は、其の羽翼爲り。次に龍に攀じ鳳に託し、自ら屬車に致す者有り、蓋し百を以て計ふ。彬彬の盛、大いに時に備はれり。爾の後、陵遲衰微して、有晉に迄る。

下つて建安年間に至ると、曹操父子が、篤く文學を愛好した。曹丕・曹植兄弟は、傑出した文壇の棟梁であり、二人の配下にあつた劉楨・王粲は、その翼とでもいふべき存在であつた。そうしてかかる龍や鳳のごとき天才に従つて、供の車に乗る者は、百人を超えるほどであつた。かくして形式・内容ともに備わつた詩が、大いに盛んとなつた。それから後、五言詩は次第に衰微し、晉にまで至つた。

「曹公父子」とは、曹操と、その子の曹丕・曹植を指す。「平原兄弟」というのも、平原侯曹植と、兄の文帝曹丕を指す。建安時代、彼らを中心に所謂「建安の七子」と呼ばれる文人たちが集まつたが、中でも劉楨と王粲とを、鍾嶸は高く評價するのである。そうして此の建安文壇こそは、五言詩の第一の隆盛期なのであつた。その後、西晉王朝が始まるまでの約一世紀の間は、五言詩は衰微の一途を辿る。

やがて、西晉の太康年間(二八〇〜二八九)になつて、五言詩は第二の隆盛期を迎えることになる。

太康中、三張二陸、兩潘一左、勃爾俱興、踵武前王。風流未沫、亦文章之中興也。

太康中、三張・二陸、兩潘・一左、勃爾として俱に興り、武を前王に踵ぐ。風流未だ沫まず、亦た文章の中興なり。

大康年間になつて、三張・二陸・兩潘・一左らの詩人が、にわかには輩出して、建安の盛時を受け継いだ。風雅の傳統は失われることなく、ここに文學（五言詩）の中興を迎えた。

「三張」とは、張載・張協・張亢の三兄弟、「二陸」は陸機・陸雲兄弟、「兩潘」とは潘岳とその従子の潘尼、「一左」は左思を指す。これらの文人が、建安以後、衰微していった五言詩を再び隆盛にしたと言うのである。これについて、やはり西晉末の懷帝の永嘉年間（三〇七〜三一三）の文學について、

永嘉時、貴黃老、稍尚虛談。於時篇什、理過其辭、淡乎寡味。

永嘉の時、黄老を貴び、稍く虚談を尚ぶ。時に於いて篇什は、理 其の辭に過ぎ、淡乎として味はひ寡なし。

永嘉年間には、老莊の學が貴ばれ、虚無の談論を尊重する風潮が高まつていった。この頃の詩歌は、哲學性が文學性を越えて過剰となり、道家的な淡泊さに支配されて文學的な風味に乏しくなつた。

と、老莊の學や虚無の談が流行したことを言う。

その後、東晉になつて、建安時代の風力は盡きてしまつた。西晉末から東晉初めにかけては、もっぱら玄言詩が一世を風靡した時代であつたが、郭璞（字は景純）と劉琨（字は越石）の二人は、玄言の風に流されることなく、文學の美の完成に力を注いだ。尋いで東晉末の安帝の義熙年間（四〇五〜四二〇）には、謝混（字は叔源、幼時の字を益壽といつた）が、郭璞・劉琨のあとを受け継いだ。そのことについて、次のごとく述べる。

爰及江左、微波尚傳。孫綽許詢桓庾諸公、詩皆平典、似道德論、建安風力盡矣。先是郭景純用儻上之才、創變其體、劉越石仗清剛之氣、贊成厥美。然彼衆我寡、未能動俗。逮義熙中、謝益壽斐然繼作。

爰に江左に及び、微波 尚ほ傳はれり。孫綽・許詢・桓・庾の諸公、詩は平典にして、道德論に似、建安の風力は盡きたり。是より先、郭景純は儻上の才を用て、其の體を創變し、劉越石は清剛の氣に仗りて、厥の美を賛成す。然れども彼は衆として我は寡なく、未だ俗を動かす能はず。義熙中に逮び、謝益壽 斐然として繼ぎ作こる。

やがて東晉の時代になつても、玄言の風潮は依然として傳わつていた。孫綽・許詢や桓温・庾亮の諸公は、その詩は平板で、内容は道家の哲學論文のごときものであり、かくして建安の活力は盡きてしまつた。この時期（西晉末から東晉初め）より先、郭璞は

その天才によって、五言詩の風を變革し、劉琨は清澄剛直の氣によって五言詩の美の完成に努力した。しかし、衆寡敵せずであつて、世の趨勢を動かすことはできなかつた。義熙年間になつて、謝混が華々しく（郭璞・劉琨の後を）繼いで現れた。

これに次ぐ宋の文帝の元嘉年間（四二四～四五三）に、謝靈運が現われて、建安・太康につぐ五言詩の第三期黄金時代を迎える。そのことについて、次のように述べる。

元嘉中、有謝靈運。才高詞盛、富艷難蹤。固已含跨劉郭、凌轍潘左。

元嘉中、謝靈運有り。才高くして詞盛んに、富艷 蹤ひ難し。固已り劉・郭を舍跨し、潘・左を凌轍す。

元嘉年間、謝靈運が現れた。高博な才能と豊かな詞藻の持ち主で、持ち前の富艷さは容易に人の追隨を許さなかつた。もとより劉琨・郭璞の變革の成果を吸収しつつその水準を乗り越え、潘岳・左思をも壓倒するほどであつた。

ここに「劉」というのは、西晉の劉琨、「郭」は郭璞のことで、靈運は此の二人を乗り越え、また「潘」すなわち潘岳、「左」すなわち左思をも凌駕するものであると云う。

鍾嶸は、このように漢代から宋代に至るまで五言詩の演變を概観し、そのうち西晉の文學については、

太康中、三張二陸、兩潘一左、勃爾俱興、踵武前王。風流未沫、亦文章之中興也。

太康中、三張・二陸、兩潘・一左、勃爾として俱に興り、武を前王に踵ぐ。風流 未だ沫まず、亦た文章の中興なり。

と、この時期を五言詩の歴史における中興の時であると位置付けている。

次に、沈約の「宋書謝靈運傳論」（『文選』卷五〇）を取り上げてみる。沈約は、詩歌の發生について、次のように述べる。

史臣曰、民稟天地之靈、含五常之德、剛柔迭用、喜愠分情。夫志動於中、則歌詠外發。六義所因、四始攸繫、升降謳謠、紛披風什。雖虞夏以前、遺文不覩、稟氣懷靈、理或無異。然則歌詠所興、宜自生民始也。

史臣曰く、民は天地の靈を稟け、五常の徳を含み、剛柔 迭ひに用ひられ、喜愠 情を分かつ。夫れ志 中に動けば、則ち歌詠は外に發す。六義の因る所、四始の繫る攸にして、謳謠を升降し、風什を紛披す。虞夏以前は、遺文 覩えずと雖も、氣を稟け靈を懷

く、理 或いは異なる無し。然らば則ち歌詠の興る所、宜しく生民自ら始まるべきなり。史臣のことばに、「人々は天地の靈なる力を身に受け、五行の徳を内に持ち、剛と柔が互いに作用して、喜びと怒りの感情が分かれるのである。志が内に動くと、それが歌となって外に現れる。これが『詩經』の六義が生ずる本であり、こうして『詩經』の詩が盛んに作られ、さまざまに歌われたのである。舜や禹以前の詩歌は、今に残されてはいないけれども、人間が天地の靈氣を身に受けているからには、それ以前においても事情は同じであつたらう。とすると、詩歌の發生は、人類の發生とともにあつたとすべきである。

「志 中に動けば、則ち歌詠は外に發す」、志が内に動くと、それが歌となつて外に現れる、これが『詩經』の六義（風・雅・頌・賦・比・興）と四始（風・小雅・大雅・頌）の本であり、こうして『詩經』の詩が盛んに作られ、さまざまに歌われたという。續いて、『詩經』以後、漢・魏に至る詩歌の變遷について、

周室既衰、風流彌著。屈平宋玉、導清源於前、賈誼相如、振芳塵於後。英辭潤金石、高義薄雲天。自茲以降、情志愈廣、王褒劉向、楊班崔蔡之徒、異軌同奔、遞相師祖。雖清辭麗曲、時發乎篇、而蕪音累氣、固亦多矣。若夫平子艷發、文以情變、絕唱高蹤、久無嗣響。至建安曹氏基命、三祖陳王、咸蓄盛藻。甫乃以情緯物、以文被質。自漢至魏、四百餘年、辭人才子、文體三變。相加工爲形似之言、二班長於情理之說、子建仲宣、以氣質爲體、竝標能擅美、獨映當時。是以一世之士、各相慕習。原其飄流所始、莫不同祖風騷。徒以賞好異情、故意製相詭。

周室 既に衰ふるや、風流は彌々著はる。屈平・宋玉は、清源を前に導き、賈誼・相如は、芳塵を後に振ふ。英辭は金石を潤し、高義は雲天に薄る。茲自り以降、情志 愈々廣く、王褒・劉向、楊・班・崔・蔡の徒は、軌を異にし奔を同じくし、遞ひに相ひ師祖す。清辭 麗曲は、時に篇に發すと雖も、而も蕪音 累氣は、固より亦た多し。夫れ平子の艷發、文 情を以て變ずるが若き、絶唱 高蹤、久しく響きを嗣ぐ無し。建安に至りて、曹氏 命を基め、三祖・陳王、咸な盛藻を蓄ふ。甫めて乃ち情を以て物を緯し、文を以て質に被らしむ。漢自り魏に至るまで、四百餘年、辭人 才子、文體 三變す。相如は工みに形似の言を爲し、二班は情理の說に長じ、子建・仲宣は、氣質を以て體と爲し、竝びに能を標し美を擅にし、獨り當時に映く。是を以て一世の士、各々相ひ慕習す。其の飄流の始まる所を原ぬるに、祖を風騷に同じくせざるは莫し。徒だ賞好 情を異にするを以て、故に意製は相ひ詭ふ。

周王朝が衰えると、詩歌の流れはいよいよ盛んになった。屈原・宋玉は、清き源を導き出し、賈誼や司馬相如は、それを受けてかぐわしい薫りを振りまいた。彼らの美しい言葉は金石をも潤し、優れた内容は大空に迫った。これより後、詩に託される気持ちはますます廣がって、王褒・劉向・楊雄・班固・崔駰（蔡邕）といった人々が、それぞれ個性を異にしながら俱に活躍し、次々と詩の傳統を繼承していった。しかし、清新な表現、美麗な言い回しが、折々に作品に見られはするが、粗雑な音律や、すっきりしない調子も、もとより多かつた。しかし張衡の作品は、つややかさにあふれ、情感のままに變化を見せる點で絶妙であり、はるかに他を引き離し、その跡を繼ぐ者は久しく現れなかつた。建安年間になり、曹氏が國を建てると、曹操・曹丕・曹叅と曹植が現れたが、いずれも盛んな文才に恵まれており、ここにはじめて情性に基づいて物事を表現し、美しい表現で内容を包むようになった。漢から魏に至るまで、四百年餘り、文人才子が現れ、詩文のスタイルは三たび變化した。すなわち、司馬相如は、寫實の表現に巧妙であり、次いで班彪・班固は、事のわけを説く點で優れており、曹植・王粲は、強い個性を特徴とした。おのおの、その優れた能力を十分に發揮し、それぞれの時代に獨り輝きをあげた。ために世の人々はそれぞれ、彼らの詩文を慕い模範としたのであるが、その源を尋ねてみるに、ともに『詩經』と『楚辭』を本にしていないものはない。ただ、それぞれに好み
が異なっているために、作品に違いが生じているのである。

「周王朝が衰えると、詩がいよいよ盛んになり、屈原・宋玉・賈誼・司馬相如といった文人が優れた作品を多く作った。やがて、王褒・劉向・楊雄・班固・崔駰・蔡邕らが、それぞれに個性を持ちながらも、傳統を繼承した。建安年間になり、曹操・曹丕・曹叅・曹植が現れ、美しい表現で内容を包み込むようになった。このように、漢から魏に至る四百年餘りの間、司馬相如は寫實に巧妙であり、班彪・班固は情理の説に長じ、曹植・王粲は強い個性を特徴とし、詩文のスタイルは三たび變化したが、それらはともに『詩經』『楚辭』を基本としたものであった」という。

次いで沈約は、西晉・東晉・宋における詩の流れについて、

降及元康、潘陸特秀。律異班賈、體變曹王。緝旨星稠、繁文綺合。綴平臺之逸響、采南皮之高韻。遺風餘烈、事極江右。在晉中興、玄風獨扇、爲學窮於柱下、博物止乎七篇。馳騁文辭、義殫於此。自建武暨于義熙、歷載將百。雖比響聯辭、波屬雲委、莫不寄言上德、託意玄珠。遒麗之辭、無聞焉爾。仲文始革孫許之風、叔源大變太元之氣。爰逮宋氏、顏謝騰聲。靈運之興會擢舉、延年之體裁明密、竝方軌前秀、垂範後昆。降りて元康に及ぶや、潘・陸 特（ひよく）り秀づ。律は班・賈に異なり、體は曹・王に變ず。緝

旨は星のごとく稠く、繁文は綺のごとく合ふ。平臺の逸響を綴り、南皮の高韻を采る。遺風 餘烈、事は江右に極まれり。晋の中興に在りて、玄風 獨り扇んに、學を爲すや柱下に窮まり、物を博むるや七篇に止る。文辭を馳騁する、義は此に殫く。建武自り義熙に暨ぶまで、載を歷ること將に百ならんとす。比響 聯辭、波のごとく屬き雲のごとく委ると雖も、言を上徳に寄せ、意を玄珠に託せざるは莫し。遺麗の辭、聞く無きのみ。仲文は始めて孫・許の風を革め、叔源は大いに太元の氣を變ず。爰に宋氏に逮んで、顔・謝は聲を騰ぐ。靈運の興會の擢擧なる、延年の體裁の明密なる、並びに軌を前秀に方べ、範を後昆に垂る。

下って晋の元康年間になると、潘岳と陸機が、ずばぬけた存在であったが、その調子は班固や賈誼とは異なっており、様式は曹植や王粲とは變わっていて、美しい内容が星のようにちりばめられ、飾りたてた表現があや絹のように織り成された。平臺に侍った司馬相如のすばらしい響きがつづられ、南皮に遊んだ建安の文人たちの高い調べが奏でられて、前代の遺風は、西晋の世において最後の輝きをあげた。晋が中興すると、老荘の風だけが盛んで、學問をするといえば『老子』だけ、廣く知るといっても『莊子』の七篇にすぎず、文章をいくら書いても、その内容は老荘ばかりということになった。建武年間から義熙年間に及ぶまで、百年近くを經過し、たくさんの文章が作られて、波のごとく續き、雲のごとく重ねられたが、いずれも言葉を『老子』の「上徳」に借り、思いを『莊子』の「玄珠」に託すものばかりで、美しい文章は見ることができなかった。ただ、殷仲文がはじめて孫綽・許詢の玄言詩の風を改めようとし、謝混が太元年間の老荘の氣風を大いに變えたのみであった。こうして宋代になると、顔延之と謝靈運が名を揚げた。謝靈運の着想は高く抜き出ており、顔延之の構成力は嚴密で、どちらも前人の傳統を受け継ぎ、後輩に規範を傳えた。

「西晋の元康年間には、潘岳と陸機が突出した存在であつて、その音律は班固や賈誼と異なっており、その様式は曹植や王粲とは變わっていて、美しく飾りたてた詩文が生まれた。やがて東晋になると、老荘の風だけが盛んになり、建武年間（三一七―三一八）から義熙年間（四〇五―四一八）に及ぶまで、百年近くの間には多くの詩文が作られたが、それらはいずれも老荘の言葉を借りたものばかりであった。そのなかにあつて、ただ殷仲文が孫綽・許詢の玄言詩の風を改め、謝混が太元年間（三七六―三九六）の老荘の氣風を變えた。こうして宋代になると、顔延之と謝靈運が名を揚げ、前人の傳統を受け継ぎ、後輩の規範となつた」という。

沈約は、詩歌の發生から宋代に至るまでの文學の変遷を以上のように述べているが、そ

のうち、西晉の文學については、他とかけはなれた存在として潘岳と陸機の名を挙げ、その文學を、

綱旨星稠、繁文綺合。

綱旨は星のごとく稠く、繁文は綺のごとく合ふ。

と特徴づけている。

最後に、檀道鸞の『續晉陽秋』（『世說新語』文學篇注所引）を見てみよう。

自司馬相如王褒楊雄諸賢、世尚賦頌、皆體則詩騷、傍綜百家之言。及至建安、而詩章大盛。逮乎西朝之末、潘陸之徒、雖時有質文、而宗歸不異也。正始中、王弼何晏、好莊老玄勝之談、而世遂貴焉。至過江、佛理尤盛。故郭璞五言、始會合道家之言而韻之。詢及太原孫綽、轉相祖尚。又加以三世之辭、而詩騷之體盡矣。詢綽並爲一時文宗、自此作者悉體之。至義熙中、謝混始改。

司馬相如・王褒・楊雄の諸賢自り、世々賦頌を尚び、皆な體は『詩』『騷』に則り、百家の言を傍綜す。建安に至るに及び、詩章大いに盛んなり。西朝の末に逮ぶや、潘陸の徒は、時に質文有りと雖も、宗歸は異ならざるなり。正始中、王弼・何晏は、莊老玄勝の談を好み、世は遂に焉を貴ぶ。江を過ぐるに至り、佛理尤も盛んなり。故より郭璞の五言は、始めて道家の言を會合して之を韻す。詢及び太原の孫綽は、轉た相ひ祖尚す。又た加ふるに三世の辭を以てし、而して『詩』『騷』の體は盡きたり。詢・綽は並びに一時の文宗爲りて、此れ自り作者は悉く之を體す。義熙中に至り、謝混始めて改む。

司馬相如・王褒・楊雄の諸賢以來、世々賦頌をたつとび、みな『詩經』『楚辭』の體に則つて、百家の言を網羅していた。建安に至つて、詩文がいよいよ盛んになった。西晉の末になると、潘岳・陸機らは、時に質と文の違いはあつたが、その依據した基本は異なることはなかつた。正始年間、王弼・何晏は、老莊の玄談を好み、世の中は遂にこれを貴ぶようになった。東晉になつてからは、仏教がもっとも盛んになった。もとより郭璞の五言詩は、始めて道家の言を集めてこれを詠じたものであつた。許詢や太原の孫綽がそれを受け継ぎ、さらに仏家三世の説を加えたために、『詩經』『楚辭』の體は盡きてしまった。許詢と孫綽は共に當時の文壇の領袖であり、それより後、文人たちは全てこれに倣つた。義熙年間に至り、謝混がようやくこれを改めた。

檀道鸞は、漢代から東晉に至るまでの詩風の變遷をこのように述べているが、そのうち、西晉の詩については、潘岳と陸機を取り上げて、

潘陸之徒、雖時有質文、而宗歸不異也。

潘・陸の徒は、時に質文有りと雖も、宗歸は異ならざるなり。

と、「時に質と文の違いはあったが、その依據した基本は異なることはなかった」と言う。

以上のように、劉勰によって「稍や輕綺に入る」と言われ、鍾嶸によって「文章の中興なり」とされ、また沈約に「縟旨は星のごとく稠く、繁文は綺のごとく合ふ」と評され、檀道鸞に「時に質文有りと雖も、宗歸は異ならざるなり」と言われる西晉時代の文學ではあるが、これら諸家の西晉文學評は、その特徴を總括的に述べたものであって、極めて抽象的で分かりにくい。

さて、それでは現代の中國文學史では、此の西晉の文學をどのように捉えているのだろうか。二・三の例を示してみよう。先ず、劉大杰『中國文學發展史』（一九八二年・上海古籍出版社）の説明は次のようである。

太康詩人、雖成就不同、然而他們有一個共同的傾向、是偏重修鍊辭藻、初步形成華麗的風氣。兩漢詩歌、篇目雖少、然皆文字質樸、內容充實。建安・正始、辭華漸富、猶有兩漢遺風。至於太康、時會所趨、無論詩歌辭賦、趨於藻飾。在這方面最有代表性的
是陸機與潘岳。

太康の詩人は、その個々の作品には違いがあるけれども、彼らには共通した傾向が見られる。すなわち、修辭を偏重し、華麗な風趣を持つというものである。兩漢の詩歌は、篇目こそ少ないものの、文辭は質朴であり、内容は充實していた。建安・正始年間になって、次第に修辭が凝らされていったが、なおも兩漢の遺風を有していた。太康年間に至り、詩歌辭賦すべてが裝飾的な傾向に流れたが、その最も代表的な詩人は、陸機と潘岳である。

すなわち、「太康の詩人には、個々に違いはあるものの、修辭に偏った華麗な趣きを持つという共通した傾向があった。建安・正始年間には、まだ漢代の遺風があったが、太康年間になると、それもなくなり、もっぱら修辭に務めた。そうして此の代表的な詩人が陸機と潘岳である」と言っている。また、林庚『中國文學簡史』（一九八八年・北京大學出版

社)では、太康の文學を次のように説明する。

太康之初、當時天下統一、罷州郡兵、一時呈現着太平氣象。詩壇在長久沈寂之後、又逐漸熱鬧起來。這時期的作家、除傑出于一代的左思外、還有史稱三張・二陸・兩潘、及傅玄・張翰等。其中以陸機・潘岳・張協爲代表、說明五言詩由于建安以來詩人們的努力、已無疑的成爲最普遍的文學形式、而太康的詩人們就在各方面把五言詩鍛練得更爲得心應手、或者更爲精緻、或者更爲流暢、或者言情、或者寫景、在整個生活中、乃無往而不是五言詩了。

太康の初め、天下は統一され、州郡の兵が廢止されると、一時に太平の氣運が高まった。詩壇は長期に亙る沈滞の後、再び活況を呈してきた。此の時期の作家としては、當代に傑出した左思を除いては、歴史に所謂、三張・二陸・兩潘、および傅玄・張翰らがいる。そのうち、陸機・潘岳・張協を例に、五言詩が建安以來の詩人たちの努力によって、その當時すでに最も普遍的な文學形式となっており、そうして太康の詩人たちは、それぞれに五言詩を得意として、或る者は精緻に、或る者は流暢に、また或る者は心情を述べること、或る者は景物を寫すことにと、生活の中の至るところで五言詩が作られたということを説明したい。

太康の初めになって、詩壇はようやく活況を呈し、當代に傑出した左思のほか、三張・二陸・兩潘、および傅玄・張翰らの詩人が活躍した。中でも、陸機・潘岳・張協の三人は、五言詩の普及に務めたと、文學形式としての五言詩の隆盛期として、太康年間を捉えている。

これらの説明は、いずれも先の劉勰・鍾嶸の文學論を踏襲した論で、甚だ抽象的で大雑把なものとなっている。

いったい西晉文學とは、いかなる状況のもとに生み出され、そうして具體的にはどのような表現、内容の文學であったのか、劉勰・鍾嶸らの解説、或いは現代の文學史の著述の中での説明でも、なお其の詳細については明らかにされていない。思うに、その原因は、當時の文學界の状況が十分に把握できておらず、個々の作家および作品のみを捉えての論評となっているためであろう。

すなわち、西晉文學の本質を明らかにするためには、當時の文學界の實態を捉え、文人の動きを詳細に調べて、その上に各々の文學活動を見てゆく必要があるように思われる。そうして初めて、西晉文學の本質が、具體的に鮮やかに浮かび上がってくるのである。本論文の主要な目的は、かかる作業を通して西晉文學の實際の姿、性格を解明することであ

り、更にその成果を踏まえて従來の説を検討し、補足訂正を加えることにある。

二 西晉時代の文學集團と陸機

西晉文學の本質を解明するためには、先ず、西晉時代の文人の實態、その文學活動の状況を詳細に調べる必要がある。そのためには、個々の文人の活動の様子を個別に見ていったのでは成果はあがらない。すなわち、當時の文壇では、いくつかの文學集團が存在しており、文學活動はその集團を基盤として行なわれていた。したがって先ず、それら文學集團の實態を把握しなければならぬ。そうすればその集團に所屬していた文人の文學活動の状況が、おのずから明らかになってくると思われる。先に取り上げた中國文學史の著作の説明が、甚だ表面的で抽象的であったのも、此の文學集團の實態を把握していないところに、その原因があると思われる。

ところで、西晉文壇において、文學集團が存在していたことについては、夙に森野繁夫博士が、その『六朝詩の研究』（一九七六年・第一學習社）の中で、賈誼の「二十四友」と石崇の「金谷の集い」を例に、その集團における文學活動の實態、及び集團の性格について詳細に述べておられる。西晉文壇には、此のほかにも、張華を中心とした文學集團、愍懷太子司馬遜を中心とした文學集團、成都王司馬穎を中心とした文學集團などがあり、さらには陸機を中心に、南方文人によって構成された文學集團や、陸雲を中心とした古典的な文學を目指す集團などもあった。これらの文學集團が、それぞれにどのような性格を持っており、またそれらの文學集團が、いかなる關係にあったのか、そうして、そこではいかなる文學活動が行なわれており、どのような詩文が作られていたのか。本論文では『三國志』『晉書』などの正史、および『世說新語』『語林』などの逸話集、また、類書に引く諸家の古『晉書』、更に當代作家の詩文からの資料を踏まえて、それらの疑問を解明せんとした。

そうしてその次に、西晉文學の特色はどのような点にあるのか、という問題については、南方呉の文學を代表し、後に北方の晉の文壇に加わって、やがて此の時期の文學の代表的作家となった陸機を取り上げ、その文學を通して考えてゆくことにした。

劉勰は、『文心雕龍』明詩篇のなかで、

晉世羣才、稍入輕綺。張左潘陸、比肩詩衝。

晉世の羣才は、稍^ヤや輕綺に入る。張・左・潘・陸は、肩^{ほら}を詩衝に比ぶ。

と述べ、西晉を代表する文人として、張載・張協・張亢・潘岳・潘尼・左思・陸機・陸雲の名を挙げる。また鍾嶸は、『詩品』の序において、

太康中、三張二陸、兩潘一左、勃爾俱興、踵武前王。

太康中、三張・二陸、兩潘・一左、勃爾として俱に興り、武を前王に踵ぐ。

といい、西晉太康年間の代表的詩人として、やはり張載・陸機・潘岳・左思らの名を連ねている。更に鍾嶸は、

故知陳思爲建安之傑、公幹仲宣爲輔。陸機爲太康之英、安仁景陽爲輔。謝客爲元嘉之雄、顏延年爲輔。斯皆五言之冠冕、文辭之命世也。

故に知る、陳思は建安の傑爲り、公幹・仲宣は輔爲り。陸機は太康の英爲り、安仁・景陽は輔爲り。謝客は元嘉の雄爲り、顏延年は輔爲り。斯れ皆な五言の冠冕にして、文辭の命世なり。

と、陸機こそが西晉太康期の傑出した文人であると認めている。すなわち、陸機の、西晉文學集團との関わりと、その文學活動を詳細に見てゆけば、西晉文壇のあらましが把握できるとともに、陸機を通して西晉文學の性格をとらえることが可能であろうと考えられるからである。

南方呉を代表する陸機の文學は、陸機が入洛する以前から、すでに洛陽の人士の知るところであった。すなわち臧榮緒の『晉書』（『文選』卷十七「文賦」李善注所引）に、

年二十而呉滅。退臨舊里、與弟雲勤學、積十一年。譽流都華、聲溢四表。

年二十にして呉滅ぶ。退きて舊里に臨み、弟の雲と學に勤め、積むこと十一年。譽は都華に流れ、聲は四表に溢る。

と伝える通りである。そうして、このような豊かな文才を持つ陸機を迎え入れた北方文學集團の反應、すなわち晉によって滅ぼされた南方呉の文人として入洛した陸機への對應の仕方に、それら集團、或いは所屬人士の、ありのままの姿を見てとることができるのではないかと思われる。

また逆に、北方人士の文學に對する陸機の反應を見ることによって、すなわち入洛後の陸機の文學を考察することによって、却って北方文學の性格も分かり、更には陸機の入洛によって生じた南北文學の影響關係をも明らかにすることができよう。そうしてまたそれらを通して、西晉文學を代表する陸機文學の本質を明らかにすることが可能である。

うと思つわけである。

以上のような方法によって本研究を進めてゆくことにするが、本論に入る前に、先ず陸機について、その生涯のあらましを見ておくことにする。

三 陸機について——陸機の生涯——

陸機は、祖國呉が晉の太康元年（呉の天紀四年・二八〇）に晉によって滅ぼされた後、太康の末年（二八九）、弟の雲とともに、かつての敵國晉に入る。その生涯を、以下、

- (1) 入洛以前
- (2) 入洛以後

とに分けて紹介する。

(1) 入洛以前の陸機

陸機（二六一―三〇三）は、字を士衡といい、呉の永安四年（二六一）に呉の大司馬であった陸抗（二二六―二七四）の第四子として生まれた。そもそも陸氏は、呉にあっては名門で、抗の父、すなわち機の祖父の陸遜（一八三―二四五）は、呉國の重鎮であった。『呉志』陸遜傳によれば、遜は字は伯言で、もとの名を議といった。陸氏は代々、江東の大族であったが、遜は若くして父を失い、二十一歳の時に、孫権の幕府に出仕した。以後東西曹の令史を歴任し、海昌の屯田郡尉となった。のち、孫権の兄である策の女を妻とし、その間に生まれたのが陸抗、すなわち機の父である。

陸遜の軍事面における活躍は枚擧にいとまがない。呉の黄武元年（二二二）、孫権の命によって大都督・假節となった遜は、朱然・潘璋・宋謙・韓當・徐盛・鮮于丹・孫桓ら五萬人を率いて、進攻してきた蜀の劉備の大軍を撃ち破った。同七年（二二八）、孫権は鄱陽の太守であった周魴に命じて、魏の大司馬の曹休を譎かせた。果たして曹休は、兵を擧げて皖に入ってきた。そこで孫権は陸遜に黄鉞を授けて大都督と爲し、曹休の軍を迎え撃たせた。陸遜の軍は一萬餘りの首を斬り、多くの戦利品を得た。この黄武七年の戦いに関するは、陸機の「呉丞相陸遜銘」（『呉志』陸遜傳注所引）に、次のように記されている。

魏大司馬曹休、侵我北鄙。乃假公黄鉞、統御六師及中軍禁衛、而攝行王事。主上執鞭、

百司屈膝。

魏の大司馬曹休は、我が北鄙を侵す。乃ち公に黃鉞を假し、六師及び中軍の禁衛を統御して、王事を攝行せしむ。主上 鞭を執れば、百司 膝を屈す。

その後、呉の黃龍元年（二二九）には、上大將軍・右都護を拜せられ、太子を輔佐し、荊州および豫章三郡の事を掌った。赤烏七年（二四四）には、顧雍に代わって丞相と爲り、陸氏は隆盛を極めたが、孫權の太子を廢せんとする全琮と對立し、ために遜の甥である顧譚・顧承・姚信の三人は流徙され、遜と交わりのあった太子太傅の吾粲も獄死した。遜自身も孫權から責められ、ついに憤りのあまり卒してしまった。時に六十三歳であった。

陸遜の亡き後、陸氏を嗣いだのが抗であった。『吳志』陸抗傳によれば、抗は字は幼節で、孫策の外孫である。父の遜が卒した時、二十歳であった。その年、建武校尉に拜せられ、父遜の兵五千人を領した。

この陸抗の軍事面における活躍も、父の遜に引けを取らぬものがあつた。呉の建興元年（二五二）には、奮威將軍となり、のち太平二年（二五七）には、柴桑の督として、壽春を攻略した魏の將諸葛誕を破り、征北將軍となつた。永安二年（二五九）に鎮軍將軍を拜せられ、西陵を都督した。元興元年（二六四）、孫皓が即位すると、鎮軍大將軍を加えられ、益州牧となつた。鳳皇元年（二七二）には都護を拜し、同二年春、大司馬・荊州牧となつた。

このように、父の遜と同じく吳國の中心的人物であつた抗は、鳳皇三年（二七四）秋、病のために卒した。抗が卒した後、長子の晏が嗣いだ。その後の様子については、『吳志』陸抗傳に、次のようにある。

（陸抗、鳳皇三年）秋遂卒。子晏嗣。晏及弟景・玄・機・雲、分領抗兵。晏爲裨將軍・夷道監。……景、字士仁。以尚公主拜騎都尉、封毗陵侯。既領抗兵、拜偏將軍・中夏督。澡身好學、著書數十篇也。

秋、遂に卒す。子の晏嗣ぐ。晏及び弟の景・玄・機・雲は、抗の兵を分領す。晏は裨將軍・夷道の監と爲る。……景、字は士仁。公主を尙るを以て騎都尉に拜せられ、毗陵侯に封ぜらる。既に抗の兵を領し、偏將軍・中夏の督に拜せらる。身を澡め學を好み、書數十篇を著すなり。

すなわち、父抗の死後、その兵を晏・景・玄・機・雲の五子が分割し統率したのである。ところで、ここにあるように、第二子の景は學問を好み、なかなかの文章家であつたらしい。此の記述の後の裴松之注に引く『文士傳』には、

陸景母張承女、諸葛恪外生。

陸景の母は張承の女、諸葛恪の外生なり。

とある。もし、抗の六子が同生の子であるとするとするならば、機の母は張承の女ということになる。張氏とは、呉の四姓「朱・張・顧・陸」の一つで、呉國にあっては名門であり、張承の父の張昭（『呉志』七）は、『春秋左傳』に通じた學者でもあり、孫權の長史・撫軍郎將となり、その創業に貢献し、孫權の下では輔吳將軍となった呉の重鎮である。機や弟の雲が、學問にすぐれ文章の名手であった所以は、或いは張昭の血を繼ぐためであったのであろうか。

かかる名門の出である陸機は、二十歳の時に呉の滅亡という悲運に見舞われる。呉の滅亡は、そのまま陸氏一族の滅亡でもあった。呉の鳳皇二年（二七四）父抗の亡き後、父の兵を分領していた抗の五子のうち、長子の晏は天紀四年（二八〇）、西晉の龍驤將軍王濬の別軍に殺され、次子の景もまた害に遇ってしまった。時に景は三十一歳であった。二人の兄を相次いで失った陸機の悲しみは、いかばかりであったか。祖國の滅亡、血を分けた二人の兄の死を目のあたりにして、陸機は弟の雲とともに、舊里の華亭に退居した。華亭については『世說新語』尤悔篇注に引く『八王故事』に、

華亭、吳由拳縣郊外墅也。有清泉茂林。吳平後、陸機兄弟共遊於此十餘年。

華亭は、呉の由拳縣の郊外の墅なり。清泉茂林有り。吳平げられし後、陸機兄弟は共に此に遊ぶこと十餘年なり。

とある。退居した期間については、『晉書』本傳には、

退居舊里、閉門勤學、積有十年。

舊里に退居し、門を閉ざして學に勤め、積みて十年有り。

といい、また『文選』卷十七「文賦」注に引く臧榮緒『晉書』では、

退臨舊里、與弟雲勤學、積十一年。

退きて舊里に臨み、弟の雲と學に勤め、積むこと十一年なり。

という。十年、十一年、十餘年と、いささかの違いはあるけれども、およそ十年の間、舊里の華亭に退居していたものと思われる。此の間の二陸の状況を史書は傳えてくれないが「辨亡論」二篇は、この時に書かれたものである。「辨亡論」とは、「亡びたるを辨ずるの論」で、呉國の興隆と滅亡の原因を論じたものである。まず漢末の董卓の亂に對し、群雄が義兵を擧げたことから説き起し、わけても孫堅のごとき忠節の士はいなかったことを述べる。つづいて孫堅のあとを嗣いだ孫策は、張昭・周瑜の二傑を得て、江外の地を安定させたが、大業なかばにして死に、そのあとを嗣いだ孫權が、祖父陸遜ら多くの賢能の士を招き、荆吳の地に割據して、魏・蜀と對抗し、天下三分の業を成したことを述べる。

しかし孫權の死後、孫亮・孫休・孫皓と続くが、すでに補佐の老臣はなく、晉軍によって呉國は滅ぼされてしまう、というのが上篇の内容である。下篇では、孫權が呉を隆盛に導いたのは、多くの賢臣を擧げ用いたからであるが、その後、呉國が滅亡してしまうのは、我が父陸抗のごとき良將がいなかったからであると言う。陸機は、祖國の滅亡に對する口惜しさを語り、同時にまた祖父陸遜・父陸抗の功業を稱揚して、過去の榮光に對する無念さを述べるのである。

以上が、入洛までの状況であるが、次に入洛後の陸機の行跡を見てみよう。

(2) 入洛以後の陸機

太康十年(二八九)、洛陽入りした陸機は、まず張華(二三二―三〇〇)の許を訪れた。その當時、西晉王朝にあって政界・文壇の中心的存在であった張華は、多くの優秀な人材を進んで招き集めていた。張華は弟の雲とともに入洛してきた陸機を、しばしば高官たちに推薦した。陸機を最初に擧用したのは、楊駿であった。時に太傅であった楊駿は、永熙元年(二九〇)機をとりたてて祭酒とした。翌元康元年(二九一)、楊駿が賈后に殺されると、機は愍懷太子司馬遜の洗馬となり、弟の雲とともに、太子府に仕えた。この時、賈后の甥の賈謐は、散騎常侍として太子府に仕えており、陸機の太子府勤務も、張華の後押しと賈謐の推輓によるものと思われる。陸機と賈謐との交わりは、この頃から始まったものと推測されるが、やがて陸機は元康三年(二九三)頃に、著作郎に轉じている。雲と俱に賈謐の「二十四友」に名を連ねることになったのも、この頃のことである。

元康四年(二九四)、陸機は弟雲とともに、吳王司馬晏の郎中令として洛陽を離れ、吳王府のある淮南に赴いた。洛陽に入った陸機は、時々望郷の念にかられていたが、いったん洛陽を出て故郷に還ってみると、今度は地方勤めの悲哀を感じるのであった。

元康六年(二九六)、陸機は尚書中兵郎として、再び入朝し、やがて殿中郎に轉じている。その後、元康八年(二九八)には、著作郎になっている。

永康元年(三〇〇)、趙王司馬倫が政治を輔佐するや、陸機は招かれてその相國參軍となった。倫は、字を子彝といい、宣帝司馬懿の第九子である。賈謐や郭彰らと交わりがあり、賈后の絶大な信任を受けていた。そこで倫は、賈后に録尚書・尚書令の官に就くことを求めたのであるが、張華や裴頠の反對にあり、それがかなわなかった。ために趙王倫は賈后を廢して庶人とし、賈謐を殺した。陸機はといえば、この時、賈謐を誅した功績によって、關内侯の爵を賜わっている。かつてはそのサロンで、「二十四友」の遊びに連なった機にとって、賈謐誅殺に加わったことは、心の大きな傷となっていた。いつまでも消えることはなかったであろうが、それと同時に、このことは西晉という時代を象徴する一つの出来事でもある。この前年(二九九)には、かつて陸機が洗馬として仕えた愍懷太子が、賈后

の手によって廢嫡され、翌年(三〇〇)、賈后の派遣した宦官の手にかかって殺されている。同じ年(三〇〇)、陸機ら南人の後楮として、彼らを常に暖かく見守ってきた張華も死刑になっている。

永寧元年(三〇一)、趙王司馬倫は、惠帝司馬衷を幽閉し、自ら帝を稱した。倫はこのとき陸機を中書郎とした。趙王倫は帝位を篡奪して僅か三か月あまりで、齊王司馬冏をはじめとする諸王の反亂によって帝位を失い、死を賜わったのであるが、冏は、陸機が中書に勤務していたから、倫の下で、九錫文や禪位の詔の作制に、機が必ずや關與してゐるであらうとの嫌疑をかけたのである。捕えられて裁判にかけられた陸機は、みずからの無罪を懸命に訴えた。「平原内史を謝するの表」(『文選』卷三七)には、次のようにある。

而横爲故齊王冏所見枉陷、誣臣與衆人共作禪文、幽執圜圍、當爲誅始。臣之微誠、不負天地、倉卒之際、慮有逼迫、乃與弟雲及散騎侍郎袁瑜、中書侍郎馮翊、尚書右丞崔基、廷尉正顧榮、汝陰太守曹武、思所以獲免、陰蒙避迴、岐嶇自列。片言隻字、不關其間。事蹤筆跡、皆可推校。

而も横(むら)まに故(こ)の齊王冏(けい)の爲に枉(ま)げ陥(おと)られ、臣は衆人と共に禪文を作ると誣(い)はれ、圜(れ)に幽執(ゆうしつ)せられ、誅(せ)始(は)せ爲(な)るに當(あた)る。臣の微誠(ゑいせい)、天地に負(お)かざるも、倉卒(そうそく)の際、逼迫(ひつぱく)有らんことを慮(おぼ)り、乃ち弟の雲及び散騎侍郎袁瑜(えんよ)、中書侍郎馮翊(ほうやく)、尚書右丞崔基(さいき)、廷尉正顧榮(こうらう)、汝陰太守曹武(じゆんたうそうぶ)と、免(ま)るるを獲(う)る所以を思(おも)ひ、陰(かげ)かに避迴(ひきかい)を蒙(ま)り、岐嶇(きこ)として自ら列(れい)す。片言隻字(ぺんげんじくじ)も、其の間に關(かん)らず。事蹤筆跡(じそうへんせき)、皆(みな)推校(すいこう)す可(べ)し。

この表は、陸機の命を救ってくれ、機を大將軍の軍事に參與させ、表して平原内史とした成都王司馬穎に對して、感謝の氣持を述べたものであるが、この中で「片言隻字も、其の間に關らず。事蹤筆跡、皆な推校す可し」と言っているように、自分は九錫文や禪文には關與していなかったと、機は必死で辯明している。また李善注に引く王隱『晉書』には、機の「吳王晏に與ふる表」があり、その中でも、

禪文本草、今見在中書。一字一迹、自可分別。

禪文の本草は、今見(ま)に中書に在(あ)り。一字一迹、自ら分別(べんべつ)す可(べ)し。

と、同様のことを述べている。頼みとなる張華もすでにこの世になく、もはやこれまでと思われた時、陸機を救ってくれたのは吳王晏と成都王穎であった。

政治の實権が趙王倫から齊王冏に移っても、世の混亂は少しも改善されることはなかった。倫を倒した功績を自慢し、爵を受けても議することを知らない冏に對し、陸機は「豪士の賦」を書いて、それを諷刺した。しかし、冏は機の言わんとしていることが理解できず、ついに惠帝の弟の長沙王司馬乂によって討たれてしまった。太安元年(三〇二)のことである。以後、長沙王乂・成都王穎・河間王顥の三人が権力の中樞を構成することになる。

時に陸機は、みずからの命を救ってくれたこともあり、あわせてその人柄が謙虚であり必ずや晉王室を興隆してくれるであろうとの考えから、弟の雲とともに、その身を成都王穎に委ねていた。穎は上表して機を平原内史、雲を清河内史とした。

長沙王乂・成都王穎・河間王顥の鼎立政権は、もろくも崩壊してしまった。そもそも、それぞれ内に野心を抱いていた三者の関係が、いつまでも均衡を保ち続けるのは無理なことであった。成都王穎は河間王顥と共に兵を挙げ、長沙王乂を討つたのである。『晉書』卷四・惠帝紀には、

(太安二年)八月、河間王顥、成都王穎、舉兵討長沙王乂。

八月、河間王顥・成都王穎は、兵を舉げて長沙王乂を討つ。

とあり、同じく『晉書』卷五九・成都王穎傳には、

穎方恣其欲、而憚長沙王在內、遂與河間王顥、表請誅后父羊玄之、左將軍皇甫商等、檄又使就第。

穎は方に其の欲を恣まにし、長沙王乂の内に在るを憚り、遂に河間王顥と、表して后の父の羊玄之・左將軍の皇甫商らを誅せんことを請ひ、又に檄して第に就かしむ。

とある。此のとき穎は、陸機を後將軍・河北大都督に任命し、北中郎將の王粹や冠軍の牽秀らの諸軍二十餘萬人を、機の麾下に置いた。機は「三世に將たるは、道家の忌むところである。あわせて亡國呉の出である私が官位にあり、群士の右に居ることになってしまった。王粹や牽秀らは、きつと私を怨んでいよう」と思い、都督となることを固辭した。機と同郷の孫惠も、都督を王粹に譲るように機に勧めた。しかし、穎はそれを認めず、機の方も結局は軍を率いる決意を固めた。弟の雲は、此の度の兄の晴れの出兵を誇りに思い、「南征の賦」を作つて、それを讃えた。

さて、陸機が大軍を率いて戰場に立つや、突如、軍旗が折れてしまった。この不吉な出来事に、さすがの機も、心中、何らかの不安を感じていた。朝歌を出發した陸機の軍は、出陣の太鼓の音を數百里の彼方まで響かせて、河橋へと向かった。太安二年(三〇三)八月のことである。それから二か月後の十月、鹿苑で長沙王乂の軍と戦ったが、機の軍は大敗し、七里澗(洛陽の東、穀水の一部)に退いた。死者は川面を埋め盡くし、ために川の水が流れなくなったほどであった。この朝歌から七里澗に至るまでの「河橋の役」の様子は、『晉書』惠帝紀には、次のように記されている。

(太安二年八月)穎遣其將陸機、牽秀、石超等、來逼京師。……冬十月壬寅、帝旋于宮。石超焚緱氏、服御無遺。丁未、破牽秀、范陽王虓于東陽門外。戊申、破陸機于建春門。石超走。斬其大將賈崇等十六人、懸首銅駝街。

穎は其の將の陸機・牽秀・石超らを遣はし、來たりて京師に逼らしむ。……冬十月壬寅、

帝は宮に旋る。石超は緱氏を焚き、服御遺す無し。丁未、牽秀・范陽王琨を東門の外に破る。戊申、陸機を建春門に破る。石超は走ぐ。其の大將の賈崇（陸機傳は賈綏に作る）ら十六人を斬りて、首を銅駝街に懸く。

また、『水經』穀水注に引く『晉後略』には、

成都王穎、使吳人陸機爲前鋒都督、伐京師。輕進爲洛軍所乘、大敗于鹿苑。人相登躡、死于塹中及七里澗。澗爲之滿。

成都王穎は、吳人の陸機をして前鋒都督と爲し、京師を伐た使む。輕しく進みて洛軍の乗ずる所と爲り、鹿苑に大敗す。人は相ひ登り躡みて、塹中に死して七里澗に及ぶ。澗は之が爲に滿つ。

とある。軍旗が折れたことが豫兆となつて、機は軍はあつてなく敗れてしまつた。かねてより陸機兄弟を怨んでいた孟玖や牽秀らの讒言により、陸機は軍中で處刑された。時に四十三歳であつた。

第一章 西晉の文人學子集團

一 文人の集團化

西晉の文學を語る上で、その時代に存在した文學集團を抜きにしては、それを理解することはできないと思われる。すなわち、西晉文壇では幾つかの文學集團が存在し、各々の文學集團が独自の文學活動を展開するとともに、他の文學集團と関わりを持ちながら、西晉文學といものが生まれたのであって、かかる文學集團を考察して、はじめて西晉文學の特徴を把握することができるのである。

さて、文學集團とは、時の政治的指導者のもとに文人達が集まり、その指導者を中心に文學活動が行なわれていた、そのような集團のことをいう。そもそも政治と文學とは車の兩輪のごときものであって、兩者を切り離して考えることはできない。例えば、「上林の賦」を奏上して武帝によって郎に任じられた前漢の司馬相如は、唐蒙が巴・蜀を占領せんとした時に、巴・蜀の民に對して檄文を作っているし、神仙を好む武帝のために「大人の賦」を著している。また後漢末の陳琳は、袁紹が曹操と對立し、官渡で天下分け目の戦いをした時、袁紹の幕僚として、この戦いに臨む前に「袁紹の爲に豫州に檄す」（『文選』卷四四）を作つて豫州、即ち劉備に、袁紹にこそ歸屬すべきであつて曹操に附くべきではないことを述べている。このように、政治にとって文學は不可欠なものであつて、そのために政治の領袖は優れた文人を必要としたのである。また、かかる領袖を中心とした宴會の席では、娯樂としては詩文と音楽があるだけであつて、そのためにも、すぐれた詩文を作ることのできる文人が必要とされたのである。

また、このような政治的指導者のもとにある集團では、往々、談論が行なわれていたようである。^注例えば、後漢の光武帝の時、元旦の朝賀の席で、帝が學者をして經史の意味について相互に質問をさせ、もしその人が質問に答えられない場合には、その人の敷物を取り上げて、うまく解決した人に敷かせることにしたところ、よく難問を解決した戴馮は五十餘枚もの敷物を重ねたということが、次のように記されている。

戴馮字次仲、舉明經徵博士。正旦朝賀、帝令羣臣能說經史者、更相難詰、義有不通、輒奪其席以益通者。馮遂坐五十餘席。

戴馮、字は次仲は、明經に擧げられ博士に徴さる。正旦 朝賀のとき、帝は羣臣の能く經史を説く者をして、更に相ひ難詰し、義に通ぜざること有れば、輒ち其の席を奪ひて以て通ずる者に益す。馮は遂に坐は五十餘席なり。

(『北堂書鈔』卷九八所引謝承『後漢書』)

此のほか、曹丕を中心とした宴會の席でも、君臣の義と父子の義と、いずれを先にすべきであるか、という問題についての談論がなされたことが、『魏志』邴原傳注に引く『邴原別傳』に、次のようにある。

太子燕會、衆賓百數十人。太子建議曰、君父各有篤疾。有藥一丸、可救一人、當救君邪、父邪。衆人紛紜、或父或君。時原在坐、不與此論。太子諮之于原、原惇然對曰、父也。太子亦不復難之。

太子の燕會に、賓百數十人を衆む。太子 議を建てて曰く、「君と父と各々篤疾有り。藥一丸有りて、一人を救ふ可きに、當に君を救ふべきか、父か」と。衆人 紛紜として、或いは父 或いは君とす。時に原は坐に在るも、此の論に與らず。太子 之を原に諮ふに、原は惇然として曰く、「父なり」と。太子 亦た復た之を難せず。

このような談論は、たびたび行なわれていたのであり、その席ではやはり文人が必要とされたわけで、このことも文學集團が形成されることの一因であったように思われる。

さらに、政治的指導者(例えば、魏の文帝曹丕や陳思王曹植ら)は、往々、自身が優れた文人であることも稀ではなく、そのような人を中心とした文學集團では、いっそう活発な文學活動が展開されたものと考えられる。

以下、西晉時代までに、どのような文學集團があったのか、時代を逐って見てゆくことにする。

文人の集團化については、古く戰國時代、楚の襄王のもとに、宋玉らの賦の作家が集まったということがあったようである。すなわち、宋玉の「大言賦」(『古文苑』卷二)に、

楚襄王、與唐勒・景差・宋玉、遊於陽雲之臺。王曰、能爲寡人大言者上座。

楚の襄王、唐勒・景差・宋玉と與に、陽雲の臺に遊ぶ。王曰く、「能く寡人の爲に大言する者は座に上れ」と。

とあり、同じくその「小言賦」にも、

楚襄王、既登陽雲之臺、令諸大夫景差・唐勒・宋玉等、竝造大言賦。

楚の襄王、既に陽雲の臺に登り、諸大夫景差・唐勒・宋玉らをして、竝びに「大言の賦」を造らしむ。

とあって、楚の襄王のもとに宋玉・景差・唐勒といった文人が集い、創作活動をしていたことを窺わせる。やはり宋玉の「風の賦」（『文選』卷十三）にも、

楚襄王、游於蘭臺之宮。宋玉・景差侍。

楚の襄王、蘭臺の宮に遊ぶ。宋玉・景差 侍す。

とあり、そこでは賦を中心とした文學活動が行なわれていたようであるが、その言態については、はっきりとは分からない。

ついで漢代には、高祖の兄劉仲の子である呉王劉濞（『漢書』卷三五）が、鄒陽・嚴忌・枚乗らの文人を集めていたことが、『漢書』卷五一・鄒陽傳に、次のように記されている。

鄒陽、齊人也。漢興、諸侯王皆自治民聘賢。呉王濞、招致四方游士、陽與呉嚴忌・枚乗等俱仕呉、皆以文辯著名。

鄒陽は、齊の人なり。漢の興るや、諸侯王は皆な自ら民を治め賢を聘く。呉王濞は、四方の游士を招致し、陽は呉の嚴忌・枚乗らと俱に呉に仕へ、皆な文辯を以て名を著す。やがて鄒陽・嚴忌・枚乗らの文人は、孝文帝の子で景帝の弟の梁孝王劉武（『漢書』卷四七）の許に身を寄せた。呉王濞は太子のことで朝廷を怨み、病と稱して入朝せず、陰かに邪謀を抱いていたので、鄒陽は書翰を奉って濞を諫めたのであるが、この諫言は納れられず、そこで鄒陽らの文人は濞のもとを去って、梁孝王のもとへ赴いたのである。『漢書』鄒陽傳には、次のようにある。

是時、景帝少弟梁孝王貴盛、亦待士。於是鄒陽・枚乗・嚴忌知呉不可説、皆去之梁、從孝王游。

是の時、景帝の少弟の梁孝王は貴盛にして、亦た士を待す。是に於いて鄒陽・枚乗・嚴忌は呉の説く可からざるを知り、皆な去りて梁に之き、孝王に従ひて遊ぶ。

後に、司馬相如も此の文人集團に加わっている。すなわち『漢書』卷五七上・司馬相如傳上には、次のように記されている。

是時、梁孝王來朝、從游說之士齊人鄒陽・淮陰枚乘・吳嚴忌夫子之徒。相如見而說之、因病免、客游梁。

是の時、梁孝王 來朝し、游說の士の、齊人の鄒陽・淮陰の枚乘・吳の嚴忌夫子の徒を從へり。相如は見て之を説とらひ、病に因よりて免れ、梁に客游す。

そうして、この頃に作られたのが、司馬相如の「子虛賦」であり、此のほかにも、枚乗の「七發」「梁王菟園賦」などが、この時期に作られた作品である。

さて、此の梁孝王のサロンにおける文學活動の一端を窺うことのできるのが、『西京雜記』卷四に傳える以下の記述である。

梁孝王遊於忘憂之館、集諸遊士、各使爲賦。枚乘爲柳賦、其辭曰、忘憂之館、垂條之木。枝逶遲而含紫、葉萋萋而吐綠。……

路喬如爲鶴賦、其辭曰、白鳥朱冠、鼓翼池干。舉修距而躍躍、奮皓翅之猗猗。……

公孫詭爲文鹿賦、其詞曰、麇鹿濯濯、來我槐庭。食我槐葉、懷我德聲。……

鄒陽爲酒賦、其詞曰、清者爲酒、濁者爲醴。清者聖明、濁者項駭。……

公孫乘爲月賦。其辭曰、月出皎兮、君子之光。鷓鴣舞於蘭渚、蟋蟀鳴於西堂。……

羊勝爲屏風賦、其辭曰、屏風輪匝、蔽我君王。重葩累繡、沓壁連璋。……

韓安國作几賦不成、鄒陽代作、其辭曰、高樹凌雲蟠朽、煩冤旁生附枝。王爾公舒之徒、

荷斧斤援葛藟。……

鄒陽・安國、罰酒三升。賜枚乘・路喬如、絹人五匹。

梁孝王 忘憂の館に遊び、諸遊士を集めて、各々賦を爲つくら使しむ。枚乘は「柳賦」を爲り、其の辭に曰く、「忘憂の館、垂條の木。枝は逶遲として紫を含み、葉は萋萋として緑を吐く。……」。

路喬如は「鶴賦」を爲り、其の辭に曰く、「白鳥 朱冠、翼を池の干ほとりに鼓す。修距を舉げて躍躍たり、皓翅の猗猗たるを奮ふ。……」。

公孫詭は「文鹿賦」を爲り、其の詞に曰く、「麇鹿 濯濯、我が槐庭に來り。我が槐葉を食ひ、我が德聲に懷く。……」。

鄒陽は「酒賦」を爲り、其の詞に曰く、「清める者は酒と爲し、濁れる者は醴と爲す。清める者は聖明、濁れる者は項駭たり。……」。

公孫乘は「月賦」を爲り、其の辭に曰く、「月は出でて皎たり、君子の光。鷓鴣は蘭渚に舞ひ、蟋蟀は西堂に鳴く。……」。

羊勝は「屏風賦」を爲り、其の辭に曰く、「屏風は匝輪して、我が君王を蔽ふ。葩を重ね

繡を累ね、壁を沓ね璋を連ぬ。……」。

韓安國は「几賦」を作るも成らず、鄒陽 代作す、其の辭に曰く、「高樹は雲を凌ぎて蟠紆し、煩冤は旁らに生じて枝に附く。王爾公舒の徒、斧斤を荷ひて葛藟を援く。……鄒陽・安國は、罰酒三升。枚乘・路喬如に、絹を人ごとに五匹賜ふ。

これに據って、梁孝王のサロンでは、題を設けて賦を作り合うという遊戯的な文學活動が行なわれていたことが知られる。

時代が降り、後漢末の建安文壇に於いても、文學集團があつて、文學活動が行なわれていた。建安文壇において文學集團が存在していたことについては、『三國志』卷二一「魏書」王粲傳に、

始文帝爲五官將、及平原侯植皆好文學。粲與北海徐幹字偉長、廣陵陳琳字孔璋、陳留阮瑀字元瑜、汝南應瑒字德璉、東平劉楨字公幹、竝見友善。

始め文帝 五官將爲りしとき、平原侯植と皆な文學を好む。粲は、北海の徐幹 字は偉長、廣陵の陳琳 字は孔璋、陳留の阮瑀 字は元瑜、汝南の應瑒 字は德璉、東平の劉楨 字は公幹と、竝びに友とせられて善し。

と、魏の文帝曹丕が五官中郎將であつたころ、弟の平原侯曹植とともに、文學を愛好しており、王粲は、徐幹・陳琳・阮瑀・應瑒・劉楨とともに、友人として親愛されたことが記されている。

また、文帝の「呉質に與ふる書」(『文選』卷四二)には、

昔年疾疫、親故多離其災、徐陳應劉、一時俱逝。痛可言邪。昔日遊處、行則連輿、止則接席。何曾須臾相失。每至觴酌流行、絲竹並奏、酒酣耳熱、仰而賦詩。當此之時、忽然不自知樂也。謂百年已分、可長共相保。何圖數年之間、零落略盡。言之傷心。頃撰其遺文、都爲一集。觀其姓名、已爲鬼錄。追思昔遊、猶在心目。而此諸子、化爲蕪壤。可復道哉。

昔年の疾疫に、親故は多く其の災ひに離り、徐・陳・應・劉、一時に俱に逝く。痛み言ふ可けん邪。昔日の遊處には、行けば則ち輿を連ね、止まれば則ち席を接す。何ぞ曾て須臾も相ひ失けんや。觴酌の流れ行き、絲竹の竝び奏するに至る毎に、酒は酣に耳は熱く、仰ぎて詩を賦す。此の時に當たり、忽然として自ら樂しむを知らざるなり。謂へらく 百年は己の分なり、長く共に相ひ保つ可しと。何ぞ圖らん 數年の間に、零落して略ぼ盡きんとは。之を言へば心を傷ましむ。頃る其の遺文を撰し、都て一集と爲す。其

の姓名を觀れば、已に鬼録と爲る。昔遊を追思すれば、猶ほ心目に在り。而るに此の諸子、化して糞壤と爲る。復た道ふ可けん哉。

とあり、文帝曹丕のもとに集う徐幹・陳琳・應瑒・劉楨らが、興をつらね席をならべて、酒を酌み交わし、音楽を楽しみながら、詩を作っていた様子が述べられている。

さらに『初學記』卷十（儲宮部・皇太子門）に引く『魏文帝集』に、

爲太子時、北園及東閣講堂、竝賦詩、命王粲、劉楨、阮瑀、應瑒等同作。

太子爲りし時、北園及び東閣の講堂にて、竝びに詩を賦し、王粲・劉楨・阮瑀・應瑒らに命じて同作せしむ。

とあって、やはり曹丕が皇太子であったときにも、王粲・劉楨・阮瑀・應瑒らとともに、詩を作るといふことが記されている。

また、兄の曹丕とともに文學を好んだ植は、建安十九年（二一四）、二十三歳の時に臨菑王に封ぜられ、丁儀・丁廙・楊脩らがその側近となった。すなわち、『三國志』卷十九「魏書」陳思王曹植傳には、次のようにある。

（建安）十九年、徙封臨菑侯。太祖征孫權、使植留守鄴、戒之曰、吾昔爲頓邱令、年二十三。思此時所行、無悔於今。今汝年亦二十三矣。可不勉與。植既以才見異、而丁儀、丁廙、楊脩等、爲之羽翼。

十九年、徙して臨菑侯に封ぜらる。太祖は孫權を征するや、植をして留めて鄴を守らしめ、之に戒めて曰く、「吾は昔、頓邱の令爲りしとき、年は二十三なり。此の時の行なふ所を思ふに、今に悔ゆること無し。今、汝の年も亦た二十三。勉めざる可けんや」と。植は既に才を以て異とせられ、而も丁儀・丁廙・楊脩等は、之が羽翼と爲る。

そうして曹植のもとでは、彼を中心とした文學集團が存在していたと思われる。そのことを示すように、植が楊脩に與えた書翰「楊徳祖に與ふる書」（『文選』卷四二）の中では當時の文人のことに言及し、次のように述べられている。

昔仲宣獨歩於漢南、孔璋鷹揚於河朔、偉長擅名於青土、公幹振藻於海隅、徳璉發跡於此魏、足下高視於上京。

昔、仲宣は漢南に獨歩し、孔璋は河朔に鷹揚し、偉長は名を青土に擅にし、公幹は藻を海隅に振ひ、徳璉は跡を此の魏に發し、足下は上京に高く視る。

このように、建安の時代には、曹氏一族を中心とした文學集團が存在し、そこでは集團的な文學活動が行なわれていたのである。

鈴木修次博士は『漢魏詩の研究』（一九六七年・大修館書店）のなかで、建安詩について、次のように述べておられる。

世にいう建安詩は、後漢から魏に移る過程の新興勢力でやがては魏の王朝を開く曹氏一族の宮廷を背景にして文學者が集い、集團的に創作活動が行なわれようとしたところに、みのがすことのできない特色が存在する。詩と文という作品形態において、ある特定の環境を背景にして、署名を有する詩人たちの集團的な創作活動が行なわれたのは、中國において、實は建安詩をもっておおむねの始めとする、ということができ

る。

このような、建安において始まった文學集團の活動は、そのまま西晉においても引き繼がれていく。すなわち、西晉時代には、いくつかの文學集團が存在し、ここでは文學を中心とした様々な活動が行なわれていた。

以下、西晉文壇の状況について、まず陸機入洛以前の様子を見てゆき、次に陸機入洛後の様子を、その當時に存在していた文學集團、すなわち、

- 1 愍懷太子府集團
- 2 陸機集團 — 南人集團 —
- 3 張華集團
- 4 賈謐集團 — 二十四友 —
- 5 石崇集團 — 金谷の集い —
- 6 陸雲集團 — 古典派 —
- 7 成都王司馬穎集團

について、それぞれの集團の、構成メンバーや活動の状況等を考察し、その後で、各集團の成立過程や活動の時期、および集團相互の関連と、その集團の特色などについて、時代背景と併せて考えてみたい。

(注)

① 斯波六郎「後漢末の『談論』について」(『廣島大學文學部紀要』第八號)

(1) 陸機入洛以前の西晉文壇

陸機は大康の末年（二八九）に入洛するが、それ以前の西晉文壇においては、張華を中心とした文學集團が、その活動を始めていたと推測される。張華は、『晉書』本傳に、

華性好人物、誘進不倦。至于窮賤候門之士、有一介之善者、便咨嗟稱詠、爲之延譽。

華は性 人物を好み、誘進して倦まず。窮賤候門の士に至りては、一介の善き者有れば、便ち咨嗟稱詠して、之が爲に譽れを延ぶ。

とあるように、みずから進んで優秀なる人材を推舉した。張華にその才能を認められた文人に、成公綏（字は子安）がいる。すぐれた才能を持ちながら、家が貧しいために、世に出る機會のなかった綏に、手を差し伸べたのが張華なのであった。『晉書』卷九二・文苑傳のなかにある綏の傳には、次のように記されている。

張華雅重綏、每見其文、歎伏以爲絶倫。薦之太常、徵爲博士。歷秘書郎、轉丞、遷中書郎。每與華受詔並爲詩賦。又與賈充等參定律律。泰始九年卒。年四十三。

張華は雅より綏を重んじ、其の文を見る毎に、歎伏して以て絶倫と爲す。之を太常に薦め、徵して博士と爲す。秘書郎を歴、丞に轉じ、中書郎に遷る。毎に華と詔を受け並びに詩賦を爲る。又た賈充等と法律を參定す。泰始九年 卒す。年は四十三。

ところで、張華が綏を推薦した時の文章が、『太平御覽』卷六三二に引く『文士傳』のなかにある。すなわち、

張華薦成公綏曰、竊見處士東郡成公綏、年二十五、字子安。……

張華は成公綏を薦めて曰く、竊かに見るに處士の東郡の成公綏は、年は二十五、字は子安。……

というのがそれであるが、此れに據れば、張華が綏を薦めた時、綏は二十五歳であったことが分かる。綏は泰始九年（二七三）に四十三歳で亡くなっているから、張華が綏を推薦したのは、魏の正元二年（二五五）ということになる。『晉書』卷三六・張華傳に

郡守鮮于嗣、薦華爲太常博士。

郡守の鮮于嗣は、華を薦めて太常博士と爲す。

とあるのは、此の時のことと思われ、張華は綏を同僚として太常府に推薦したものと考えられる。

此の他に、張華に推舉された文人としては、『三國志』の著者として知られる陳壽（字は承祚）がいる。『華陽國志』卷十一にある陳壽傳には、次のようにある。

中書監荀勗、令張華、深愛之、以班固史遷不足方也。出爲平陽侯相。華又表令次定諸葛亮故事集爲二十四篇。

中書監の荀勗・令の張華は、深く之を愛し、以へらく班固・史遷も方ぶるに足らざるなりと。出でて平陽侯の相と爲る。華は又た表して次ぎて『諸葛亮故事集』を定めしめ二十四篇と爲す。

『晉書』張華傳には、

晉受禪、拜黃門侍郎、封關内侯。

晉の禪を受くるや、黃門侍郎を拜せられ、關内侯に封ぜらる。

とあって、魏・晉の間で禪讓が行なわれた時、すなわち武帝の太始元年（二六五）に、華が黃門侍郎となったことが記されている。ただ、『北堂書鈔』卷五八に引く王隱『晉書』には、

泰始三年、詔張華爲黃門侍郎。

泰始三年、詔して張華を黃門侍郎と爲す。

と、それが泰始三年（二六七）のことであると言う。そうして『晉書』張華傳では、

數歲、拜中書令、後散騎常侍。

數歲にして、中書令に拜せられ、後に散騎常侍たり。

と言う。従って、多少のずれはあるが、張華が中書令となったのは、泰始六年（二七〇）の頃のことではないかと考えられる。つまり、陳壽が張華に見出されたのも、陸機入洛以前のことであり、この頃から張華を中心に、成公綏や陳壽といった文人が集まって文學集團が構成され、その活動が始まったものと思われる。そうして此の張華を中心とした文學

集團は、陸機をメンバーに加え、さらに賈誼の「二十四友」が集められた惠帝の元康六年（二九六）の頃から、その活動を活発化させていったのである。

張華を中心とした文學集團の他にも、多くの人材を集めた楊駿（字は文長）を中心とした文學集團があつたものと想像される。楊駿は、武帝の悼楊后の父として、その権力を擅にした。『晉書』卷四〇・楊駿傳には、次のようにある。

（武）帝自太康以後、天下無事、不復留心萬機。惟耽酒色、始寵后黨、請謁公行。而駿及珣濟、勢傾天下、時人有三楊之號。

帝は太康自り以後、天下 無事なれば、復た心を萬機に留めず。惟だ酒色に耽り、始めて后黨を寵し、請謁 公に行なはる。而して駿 及び珣・濟は、勢ひ天下を傾け、時人に「三楊」の號有り。

これは陸機の入洛後のことではあるが、機は楊駿に招かれてその酒祭となり、時を同じくして潘岳は、楊駿の主簿となっている。このようなこと、すなわち楊駿が文人を集めたということは、陸機の入洛以前にもあつたはずで、そうしてそこでは、楊駿の主催する宴席や文會が設けられ、その場では、詩文のやりとりもあつたことと思われる。

このように、陸機入洛以前の西晉文壇においても、張華や楊駿を中心とした文學集團が存在し、それぞれに活動を行なつていたものと考えられる。

(2) 陸機入洛以後の西晉文壇

1 愍懷太子府集團

陸機は、惠帝（司馬衷）の元康元年（二九一）に、愍懷太子（司馬遼）の洗馬となつた。愍懷太子は惠帝の長子で、母を謝才人といつた。太子は幼くして聡明で、武帝（司馬炎）はたいへん太子を可愛がり、いつも傍においていた。そうして、『晉書』卷五三・愍懷太子傳に、

（帝）嘗對羣臣稱太子似宣帝。於是令譽流於天下。

嘗て羣臣に對して太子は宣帝（司馬懿）に似たると稱す。是に於て令譽は天下に流る。

とあるように、その將來を囑望されていた。初め廣陵王に封ぜられ、惠帝が即位するや、皇太子に立てられた。『晉書』本傳に言う。

惠帝即位、立爲皇太子。盛選德望以爲師傅。以何劭爲太師、王戎爲太傅、楊濟爲太保、裴楷爲少師、張華爲少傅、和嶠爲少保。

惠帝 位に即くや、立てて皇太子と爲す。盛んに德望を選びて以て師傅と爲す。何劭を以て太師と爲し、王戎を太傅と爲し、楊濟を太保と爲し、裴楷を少師と爲し、張華を少傅と爲し、和嶠を少保と爲す。

何劭・王戎・楊濟・裴楷・張華・和嶠といった時の名士を集め、太子の教育に當たらせたことを見ても、太子に對する期待の程が窺われる。

元康元年に東宮に出たが、その時には、次のような詔が出されている。

逸尚幼蒙、今出東宮、惟當頼師傅羣賢之訓。其游處左右、宜得正人使共周旋、能相長益者。

逸は尚ほ幼蒙にして、今 東宮に出づれば、惟だ當に師傅羣賢の訓へに頼るべし。其の左右に游處するには、宜しく正人の共に周旋し、能く相ひ長益せしむる者を得べし。

これによって、太保衛瑾の子の庭・司空泰の子の略・太子太傅楊濟の子の斐・太子少師裴楷の子の憲・太子少傅張華の子の稜・尚書令華廩の子の恒らが選ばれて太子を輔導するこ
とになった。

時を同じくして、陸機も太子の洗馬として太子府に入った。陸機には「皇太子宴玄圃宣猷堂有令賦詩」(『文選』卷二〇)があるが、此の詩は感懷太子が、東宮の北、玄圃園の中に
ある宣猷堂で宴を催した時に、それに集った陸機が、令に應じて作ったものである。

『太平御覽』卷一七六に、

陸機四言詩序曰、太子宴朝士於宣猷堂、皇遂命機賦詩。

陸機の四言詩の序に曰く、太子 朝士と宣猷堂に宴し、皇 遂に機に命じて詩を賦せしむ。

とあるが、或いは此の詩の序であろうか。

皇太子宴玄圃宣猷堂有令賦詩(皇太子の玄圃の宣猷堂に宴するに令有りて詩を賦す)

三正送紹 三正 送ひに紹ぎ

洪聖啓運 洪聖 運を啓く

自昔哲王 昔自り 哲王は

先天而順 天に先んじて順へり

羣辟崇替

羣辟 崇替し

降及近古

降りて近古に及ぶ

黄暉既渝

黄暉 既に渝り

素靈承祜

素靈 祜ひを承く

乃眷斯顧

乃ち眷みて斯に顧み

祚之宅土

之に祚いて土に宅らしむ

三后始基

三后 始めて基し

世武丕承

世武 丕いに承く

協風傍駭

協風 傍く駭り

天畀仰澄

天畀 仰ぎて澄し

淳曜六合

六合に淳いに曜かにして

皇慶攸興

皇慶 興る攸なり

自彼河汾

彼の河汾自りして

奄齊七政

奄いに七政を齊ふ

時文惟晉

時れ文にして 惟れ晉み

世篤其聖

世々其の聖を篤くす

欽翼昊天

昊天を欽翼し

對揚成命

成命を對揚す

九區克威

九區 克く威ぎ

讌歌以詠

讌歌して以て詠ず

皇上纂隆

皇上 隆を纂ぎ

經教弘道

教へを經め道を弘む

于化既豐

化に于て既に豊かに

在工載考

工に在りて載ち考す

俯釐庶績

俯して庶績を釐め

仰荒大造

仰ぎて大造を荒いにす

儀刑祖宗

祖宗に儀刑して

妥綏天保

天保に妥綏す

篤生我后

篤く我が后を生み

克明克秀

克く明らかに 克く秀づ

體輝重光

輝りを重光に體し

承規景數

規を景數に承く

茂德淵沖

茂徳 淵のごとく沖く

天姿玉裕

天姿 玉のごとく裕かなり

叢爾小臣 叢爾たる小臣は
 邈彼荒遐 彼の荒遐に邈かなり
 弛厥負擔 厥の負擔を弛め
 振纓承華 纓を承華に振ふ
 匪願伊始 願ふこと伊れ始めよりするに匪ず
 惟命之嘉 惟れ命の嘉ければなり

晉朝が道義に基づくものであることから歌い起し、太子の徳が深く、その將來におおいに期待し、洗馬として仕えることの喜びをうたうものであるが、一坐の者が、太子を稱賛する内容の詩を作り合つたものと思われる。

また、『北堂書鈔』卷八二には、陸機の「祖會大極東堂詩」が引かれている。

祖會大極東堂詩（大極の東堂に祖會する詩）

帝謂御事 帝は御事を謂ひ
 及爾同歡 爾と同一に歡ばる
 我有嘉禮 我に嘉禮有り
 以壽永觀 壽を以て永く觀ん
 思樂華殿 思に華殿に樂しみ
 祗承聖顏 祗んで聖顏を承けん

此の詩は、おそらく大極殿の東堂で送別の宴會が開かれたときに、陸機が作ったものであろう。『北堂書鈔』卷八二には、さらに同題の詩として、「於是四坐具醉」（是に於て四坐は具な醉ふ）の句を載せているが、あるいは此の詩の序であろうか。

この他、陸機には「蟹賦」があり、その序に次のように言う。

皇太子幸于釣臺。漁人獻蟹、命侍臣作賦。

皇太子 釣臺に幸す。漁人 蟹を獻ずれば、侍臣に命じて賦を作らしむ。

（『陸士衡文集』卷四）

これは、或いは皇太子に同行した文人に、太子が「蟹」を主題とした賦を同作させたものかも知れない。また、陸機には「桑賦」があり、これもその序に、

皇太子便坐、蓋本將軍直廬也。初世祖武帝爲中壘將軍、植桑一株。世更二代、年漸

三紀、扶疏豐衍、抑有瑰異焉。

皇太子の便坐は、蓋し本と將軍の直廬なり。初め世祖武帝 中壘將軍と爲るや、桑一株を植う。世 二代を更め、年 漸く三紀にして、扶疏 豐衍にして、抑も瑰異有り。

（『陸士衡文集』卷四）

とあって、これも『警賦』と同様の作品ではないかと思われる。

このように、愍懐太子の府においては、折りあるごとに宴が催されて、太子府下の文人が集っては、詩や文を作っていたようである。

やがて陸機は、三年の後、元康四年（二九四）に呉王晏の郎中令として、呉に赴く。その赴任に際し、愍懐太子は送別の宴會を開いてくれたが、陸機は「皇太子賜謙詩」を作つて太子の恩に報いている。『北堂書鈔』卷六六では詩題を「皇太子清宴詩」に作つて、次のような序を載せているが、おそらく此の時のものである。

元康四年秋、余以太子洗馬出補吳王郎中。以前事倉卒、不得宴。三月十六（日）、有命清宴。感聖恩之罔極而賦此詩。

元康四年秋、余は太子洗馬を以て出でて吳王の郎中に補せらる。前事の倉卒たるを以て、宴するを得ず。三月十六（日）、命有りて清宴あり。聖恩の極まり罔きに感じて此の詩を賦せり。

皇太子賜謙詩（皇太子 謙を賜はるの詩）

明明隆晉 明明たる隆晉

茂徳有赫 茂徳 赫たる有り

思媚上帝 思に上帝を媚み

配天光宅 天に配し 光宅す

誕育皇儲 皇儲を誕育するに

儀刑在昔 在昔に儀刑せり

徽言時宣 徽言 時に宣べられ

福祿來格 福祿 來格す

勞謙降貴 勞謙して貴を降し

肆敬下臣 肆敬して臣に下る

肇彼先驅 肇め彼の先驅たるに

翻成嘉賓 翻りて嘉賓と成す

（『陸士衡文集』卷五）

末聯の「先驅」とは、さきがげのことをいい、陸機自身のことを指している。『晉書』職官志には、洗馬について、

出則直者前驅、導威儀。

出づるときには則ち直なる者前驅して、威儀を導く。

というが、そういう職にあった私までも、佳客としてくださったと、と感謝の気持ちを表しているのである。

さて、それでは愍懷太子の府には、陸機の他に、どのような人達がいたのであろうか。實は陸機の弟の陸雲も、太子の舎人として太子府に仕えていた。『晉書』陸雲傳には、

俄（にわか）以公府掾爲太子舎人、出補浚儀令。……尋拜吳王晏郎中令。
俄（にわか）にして公府の掾を以て太子舎人と爲り、出でて浚儀の令に補せらる。……尋いで吳王（晏）の郎中令に拜せらる。

陸雲が陸機とともに吳王晏の郎中令となったのは、元康四年のことであるから、雲が太子舎人となったのも、陸機が太子の洗馬となったのと、ほぼ同じ頃ではないかと思われる。

二陸と時を同じくして愍懷太子府にいた文人として、馮文翽がいる。彼は魏國出身の馮純の子で、北人でありながら南方人士に對して好意的な人物の一人であった。陸機に「贈馮文翽遷斥丘令」詩（『文選』卷二四）がある。

贈馮文翽遷斥丘令（馮文翽の斥丘の令に遷るに贈る）

〔其の一〕

於皇聖世 於皇しきかな 聖世
時文惟晉 時れ文にして惟れ晉む
受命自天 命を受くること天自りし
奄有黎獻 奄いに黎獻を有つ
閭閻既闢 閭閻は既に闢き
承華再建 承華は再び建つ
明明在上 明明として上に在り
有集惟彦 集ふ有るは 惟れ彦なり

〔其の二〕

奕奕馮生 奕奕たる馮生
哲問允迪 哲く問ねて 允に迪む
天保定子 天は子を保んじ定めて
靡德不鏤 徳として鏤からざるは靡し
邁心玄曠 心を邁ふこと 玄曠にして
矯志崇邈 志を矯ぐること 崇邈なり
遵彼承華 彼の承華に遵ひて
其容灼灼 其の容は灼灼たり

〔其の三〕

嗟我人斯 嗟我 人なる
載翼江潭 翼を江潭に載む
有命集止 命有りて集れば

翻飛自南
出自幽谷
及爾同林
雙情交映
遺物識心

翻り飛びて南自りす
幽谷自り出でて
爾と林を同じくす
雙情は 交々映し
物を遺れて心を識る

〔其の四〕

人亦有言
交道寔難
有頌者弁
千載一彈
今我與子
曠世齊歡
利斷金石
氣惠秋蘭

人亦た言へる有り
交はりの道は 寔に難しと
頌たる有る者は弁
千載に一たび彈けり
今 我と子と
世を曠しくして 歡びを齊しくす
利は金石を斷ち
氣は秋蘭よりも惠なり

〔其の五〕

羣黎未綏
帝用勤止
我求明德
肆于百里
僉曰爾諧
俾民是紀
乃眷北徂
對揚帝祉

羣黎 未だ綏んぜず
帝は用て勤む
我 明德を求め
百里に肆ねしめんと
僉な曰く 爾 諧げん
民をして是に紀め俾めん
乃ち眷みて北に徂き
帝祉を對揚す

〔其の六〕

疇昔之遊
好合纏綿
借曰未洽
亦既三年
居陪華幄
出從朱輪
方驥齊鑑
比迹同塵

疇昔の遊は
好合 纏綿たり
借ひ未だ洽ねからずと曰ふとも
亦た既に三年なり
居りては華幄に陪し
出でては朱輪に從ふ
驥を方べて鑑を齊しくし
迹を比べて塵を同じくす

〔其の七〕

之子既命

之子 既に命ぜられ

四牡項領
 逶迤遠蹈
 騰軌高騁
 慶雲扶質
 清風承景
 嗟我懷人
 其邁惟永

四牡 項領たり
 塗に違ひて遠く踏み
 軌を騰げて高く騁す
 慶雲は 質を扶け
 清風は 景を承く
 嗟 我 人を懷ふ
 其の邁くこと 惟れ永し

「其の八」

否泰苟殊
 窮達有違
 及子春華
 後爾秋暉
 逝將去我
 陟彼朔垂
 非子之念
 心孰爲悲

否泰 苟に殊なり
 窮達 違ふ有り
 子の春華に及ぶも
 爾が秋暉に後る
 逝きて將に我を去り
 彼の朔垂に陟らんとす
 子を之れ念ふに非ずして
 心は孰が爲にか悲しまん

詩の第一章で、「閭閻既闢、承華再建」というのは、惠帝が即位して、愍懷太子が立ったことをいい、「有集惟彦」とは、太子府に俊秀の士が集まったことを言う。また第三章で「出自幽谷、及爾同林」とあることからみて、陸機と馮文龍とは、太子府で知り合ったのであり、第五章に「借曰未洽、亦既三年」ということから、太子府における付き合いが三年にわたることが分かる。そうして、その間の交遊は、第三章に「雙情交映、遺物識心」（二人は互いに友情を照らし合い、外物を忘れて深く心を知り合った）といい、第四章に「利斷金石、氣惠秋蘭」（二人の友情の利いことは金や石をも斷ち切るほどであり、その香氣は秋の蘭よりもよい）というものであった。

この「馮文龍」について、李善は『晉百官名』を引いて「外兵郎馮文龍」と云い、さらに「集云、文龍爲太子洗馬、遷斥丘令。贈以此詩」（集に云ふ、文龍は太子洗馬爲りて、斥丘の令に遷る。贈るに此の詩を以てす）というが、今の『陸士衡文集』には、此の文は無い。『晉書』卷三九・馮純傳には、

太康七年、純疾。詔以純爲散騎常侍、賜錢二十萬、牀帳一具。尋卒。二子播、熊。播大長秋。熊、字文龍、中書郎。

太康七年、純は疾む。詔して純を以て散騎常侍と爲し、錢二十萬・牀帳一具を賜ふ。尋いで卒す。二子播・熊あり。播は、大長秋たり。熊、字は文龍は、中書郎たり。

とあり、馮文龍は馮純の子の熊で、「文龍」はその字であることが分かる。そもそも馮純

は、魏國出身の北人であり、賈充・荀勳とともに呉を伐つことに反対し、呉討伐を唱えた張華とは、政敵であった。このことについて『晉書』馮紇傳には、次のようにある。

初謀伐呉、(馮)紇與賈充荀勳、同共苦諫不可。呉平、紇内懷慚懼、疾張華如讎。及華外鎮、威德大著。朝論嘗徵爲尚書令。紇從容侍帝、論晉魏故事、因諷帝言、華不可授以重任。帝默然而止。

初め呉を伐つを謀るに、紇は賈充・荀勳と、同共に苦りに諫めて不可とす。呉の平ぐや、紇は内に慚懼を懷き、張華を疾むこと讎の如し。華の外鎮に及ぶや、威徳は大いに著はる。朝論 當に徵して尚書令と爲すべしと。紇は從容として帝に侍り、晉魏の故事を論じ、因りて帝に諷して言ふ、「華は授くるに重任を以てす可からず」と。帝は默然として止む。

また、『晉書』張華傳には、

初(張)華毀徵士馮恢於帝。紇即恢之弟也。

初め華は徵士の馮恢を帝に毀る。紇は即ち恢の弟なり。

とある。すなわち馮紇は、自分の兄である馮恢を、張華が帝に毀つたというところで、個人的にも華を憎んでいたのである。しかるにその子の文顯の方は、張華同様、南方出身者に對して好意的であつた。

太子府にはまた、馮文顯とともに北人でありながら陸機・陸雲に好意的であつた潘尼がいた。潘尼は『晉書』本傳に、

元康初、拜太子舍人。

元康の初め、太子舍人に拜せらる。

とあつて、愍懷太子の舍人として太子府に仕えていた。太子府における詳しい状況はよく分からないけれども、陸機とは相當に親しく交わっていたらしく、陸機が弟の雲とともに呉王晏の郎中令となつて呉に赴任する時には、次の如き詩を贈っている。

贈陸機出爲呉王晏郎中令(陸機の出でて呉王晏の郎中令と爲るに贈る)

〔其の一〕

東南之美

東南の美なるものは

曩惟延州

曩には惟れ延州あり

顯允陸生

顯かに允ある陸生は

於今尠儔

今に於て儔ひ尠なし

振鱗南海

鱗を南海に振ひ

濯翼清流
婆娑翰林
容與墳丘

翼を清流に濯ぐ
翰林に婆娑たり
墳丘に容與たり

〔其の二〕

玉以瑜潤
隨以光融
乃漸上京
迺儀儲宮
玩爾清藻
味爾芳風
泳之彌廣
挹之彌沖

玉は瑜あるを以て潤ひ
隨は光あるを以て融かなり
乃ち上京に漸み
迺ち儲宮に儀たり
爾の清藻を玩で
爾の芳風を味す
之に泳べば彌々廣く
之に挹めば彌々沖し

〔其の三〕

崑山何有
有瑤有珉
及爾同僚
具惟近臣
予涉素秋
子登青春
愧無老成
廁彼日新

崑山に何か有る
瑤有り 珉有り
爾と同僚にして
具に惟れ近臣なり
予は素秋を涉り
子は青春に登れり
愧づらくは老成する無く
彼の日新に廁れるを

〔其の四〕

祁祁大邦
惟桑惟梓
穆穆伊人
南國之紀
帝曰爾諧
惟王卿士
俯僕從命
奚恤奚喜

祁祁たる大邦
惟れ桑 惟れ梓
穆穆たる伊の人
南國の紀なり
帝曰く 爾 諧げよ
惟れ王の卿士たれよと
俯僕して命に従ふ
奚をか恤へ 奚をか喜ばん

〔其の五〕

我車既巾
我馬既秣
星陳夙駕

我が車は 既に巾り
我が馬は 既に秣へり
星の陳なるに夙に駕し

載脂載轄

載^{すなは}ち脂^{あぶら}さし 載^{すなは}ち轄^{くさ}さす

婉孌二宮

二宮^{にみやう}に婉孌^{えんらん}す

徘徊殿闈

殿闈^{てんたい}に徘徊^{はいはい}す

醪澄莫饜

醪^{さけ}は澄^あみて饜^あくる莫^なし

孰慰飢渴

孰^{たれ}か飢渴^{きかく}を慰^{なぐさ}めん

〔其の六〕

昔予忝私

昔^{むかし}予^{われ}は私^{ひみ}みを忝^{かたじけ}なくし

貽我蕙蘭

我^{われ}に蕙^{けい}と蘭^{らん}とを貽^{あづ}けり

今子徂東

今^{いま}子^しは東^{あづま}に徂^ゆかんとす

何以贈旃

何^{なに}を以^{もつ}てか旃^{えん}に贈^{あづ}らん

寸尋惟寶

寸尋^{すんじん}は 惟^{ただ}れ寶^{たから}なり

豈無瓊瑤

豈^あに瓊^{じゆう}と瑤^{じゆう}と無^なからんや

彼美陸生

彼^かの美^{うつく}なる陸^{りく}生^{せい}

可與晤言

與^{とも}に晤^ご言^{げん}す可^べし

(『文選』卷二四)

此の詩には、その文才をもって天下に鳴り渡る陸機と、これまで太子の下でともに仕えた日々をなつかしみ、今は地方官として赴任してゆく機を励ましつつ、再會の日が訪れることをひたすら願う潘尼の友情があふれており、二人の交遊の深さというものが感じられる。詩の第三章で、「予涉素秋、子登青春」(予は素秋を涉り、子は青春に登れり)というように、潘尼は陸機よりも十數歳年長であったが、二人はその年齢の差を越えた交際をしてきたように思われる。

陸機のほうは、潘尼の此の詩に對し、次のような詩で答えている。

答潘尼(潘尼に答ふ)

於穆同心

於^あ穆^{ぼく}たる同心^{どうしん}

如瓊如琳

瓊^{じゆう}の如^{ごと}く 琳^{りん}の如^{ごと}し

我東曰徂

我^{われ}の東^{あづま}して曰^いに徂^ゆかんとするに

來餞其琛

來^きりて其^{その}の琛^{ちん}を餞^{みく}る

彼美潘生

彼^かの美^{うつく}なる潘^{はん}生^{せい}

實綜我心

實^{まこと}に我^{われ}が心^{こころ}を綜^なべり

探子玉懷

子^こが玉^{たま}懷^{なご}を探^{たづ}なり

疇爾惠音

爾^{なんぢ}の惠^{めぐみ}音^ねに疇^{なご}へん

(『陸士衡文集』卷五)

陸機と潘尼との交際は、この後も續いていたようで、趙王倫が帝位を篡奪し、孫秀が政事を専らにしたとき、尼は病氣を理由に暇を願い出て、先祖の墓参りをしようとしたが、次に擧げる詩は、その時に陸機から潘尼に贈られたと思われるものである。

贈潘尼（潘尼に贈る）

水會于海 水は海に會し
 雲翔于天 雲は天を翔ぶ
 道之所混 道の混ざる所
 孰後孰先 孰れか後に 孰れか先ならん
 及子雖殊 子と殊なると雖も
 同升太玄 同に太玄に升る
 舍彼玄冕 彼の玄冕を捨てて
 襲此雲冠 此の雲冠を襲る
 遺情市朝 情を市朝に遺てて
 永志丘園 永く丘園を志す
 靜猶幽谷 靜かなること幽谷の猶く
 動若揮蘭 動くこと揮蘭の若し

（『陸士衡文集』卷五）

詩中に「及子雖殊」とあるのは、趙王倫が輔政したとき、陸機は倫に招かれて相國參軍となり、やがて倫が帝位を篡奪するや、機は中書郎となったが、潘尼の方は、病氣を理由に暇を願って先祖の墓參りをしようとしたことを指していると思われる。

ところで、陸機が太子府から吳王晏の郎中令として呉に赴くにあたって、愍懷太子が送別の宴を催してくれたことは、先にも述べた通りであるが、その宴席では、おそらく陸機を祖道する詩が作られたのであろう。陸機には、「祖道畢雍孫劉邊仲潘正叔」詩（『陸士衡文集』卷五）があり、これは祖道してくれた潘尼らに答えたものと考えられる。

祖道畢雍孫劉邊仲潘正叔（畢雍孫・劉邊仲・潘正叔に祖道せらる）

皇儲延髦俊 皇儲 髦俊を延き
 多士出幽遐 多士 幽遐に出づ
 適逢時來運 適逢時來の運に逢ひ
 與子遊承華 子と與に承華に遊ぶ
 執笏崇賢内 笏を崇賢の内に執り
 振纓層城阿 纓を層城の阿に振へり
 畢劉贊文武 畢・劉は 文武を贊へられ
 潘生並邦家 潘生は 邦家に並む
 感別懷遠人 別れに感じては遠人を懷ひ
 願言歎以嗟 願ひて言に歎きて以て嗟む

潘尼（字は正叔）以外の二人、畢雍孫・劉邊仲については、陸機との詳しい関係は分からないが、愍懷太子府に集う文人集團のメンバーであったものと思われる。

2 陸機集團 ― 南人集團 ―

入洛後の陸機は、北方人士の冷淡な對應に苦しみながらも、南人のよき理解者である張華の庇護を受けながら、次第に北方社會のなかに入っていた。このように、北方社會全體が、南方出身者を抑壓せんとしていた状況の中にあつて、弱い立場にある南方出身者たちは、當然のことながら、北人に對抗するための南人の集團を形成してゆくことになる。そのため、陸機は弟の雲と力を合わせて、さらには張華の援助を仰ぎながら、積極的に同郷の人士を北方社會へと引き入れていった。

そのなかの一人に戴淵（字は若思）なる人物がいる。戴淵は廣陵出身の南人であるが、陸機との出會いは、次の如くであつた。

戴淵少時、遊俠不治行檢。嘗在江淮間、攻掠商旅。陸機赴假還洛、輜重甚盛。淵使少年掠劫。淵在岸上、據胡牀指麾左右、皆得其宜。淵既神姿峯穎、雖處鄙事、神氣猶異。機於船屋上遥謂之曰、卿才如此、亦復作劫。淵便泣涕、投劍歸機。辭厲非常。機彌重之、定交、作筆薦焉。

戴淵 少き時、遊俠にして行檢を治めず。嘗に江淮の間に在りて、商旅を攻掠す。陸機は假に赴きて洛に還るに、輜重 甚だ盛んなり。淵 少年をして掠劫せしむ。淵は岸上に在り、胡牀に據りて左右を指麾し、皆な其の宜しきを得たり。淵 既に神姿峯穎にして、鄙事に處ると雖も、神氣は猶ほ異なり。機は船屋の上より遙かに之に謂ひて曰く、「卿が才 此の如くして、亦復た劫を作すか」と。淵は便ち泣涕し、劍を投じて機に歸す。辭の厲しきこと常には非ず。機は彌々之を重んじ、交はりを定め、筆を作りて焉を薦む。

（『世説新語』自新篇）

戴若思の才を認め、共に洛に入った陸機は、彼を趙王倫に推薦したが、その時の牋は『晋書』戴若思傳に収められている。

ところで陸雲の書翰の中に、次のような記述がある。

近聞若思、未有通塗、每用於邑。

近ごろ聞くに若思は、未だ通塗有らず、毎に用於於邑すと。（「與戴季甫書」其五）

これに據れば、陸雲も同郷の戴若思の就職に心を配っていたということが分かる。また、戴若思に関する次のような書翰もある。

戴會稽、如是便發、分別恨然。一時名士、唯當有此君耳。失分重勞、令人歎息。善得日夕、眞家人。若思望之、清才俊類。一時之彦、善竝得接。九月中、可得達東禮。衡陽長沙甚快、東人近未復有見敘者。公進屈久、恒爲邑囹。黨方有清塗、薄國議、在內中、大有好稱。此家一時美德也。在事又佳。甚快甚快。

戴會稽は、是の如くして便ち發し、分別してより恨然たり。一時の名士、唯だ當に此の君有るべき耳。分を失ひ重ねて勞すれば、人をして歎息せ令む。善く日夕を得ば、眞に家人なり。若思・望之は、清才ありて俊類なり。一時の彦にして、善く竝びに接せらるるを得たり。九月中、東に達して禮するを得可けん。衡陽・長沙は甚だ快なるも、東人は近ごろ未だ復た敘せらるる者有らず。公は進屈すること久しく、恒に爲に邑囹たり。黨し方に清塗有らば、國議に薄り、内中に在りて、大いに好稱有らん。此の家は一時の美德なり。事に在りても又た佳ならん。甚だ快なり。甚だ快なり。

(「與楊彦明書」其六)

書き出しの「戴會稽」とは、戴若思の父の戴昌のことと思われる。その戴昌が、職に就くことができず、郷里の廣陵に帰ってしまったことを、陸雲が嘆いているのである。手紙では、さらに戴昌の二人の子、若思・望之について触れ、二人は清才があり立派な人物で、どちらも(上の者に)目をかけてもらっており、九月中には東へ歸つて、郷里の廣陵で、父子の對面が可能であろう、というのである。「戴若思」については言えば、陸機の方は、それを趙王倫に推薦し、その一方で、陸雲は同郷の人士と連絡を取り合うということがあったのであろう。

此の手紙は、「楊彦明」に宛てたものであるが、この楊彦明も、『晋書』顧榮傳にある次の記述によつて、會稽出身の人であることが知られる。すなわち、

時南土之士、未盡才用。榮又言、……會稽楊彦明、謝行言、皆服膺儒教、足爲公望……

時に南土の士、未だ盡くは才として用ひられず。榮は又た言ふ、「……會稽の楊彦明、謝行言は、皆な儒教を服膺し、公望を爲すに足る……」。

さらに陸雲の彼宛ての書翰には、次のように言う。

雲白。欽明去書不悉。彦先來得書、以爲慰。時去蕚荏、歲行復半。悲此推移、終然何及。漸已欲熱、想自如常。悠悠守限、良談未日。眇然東望、思以敘至。及反憤罔不多。行矣愛德。往來相聞。

雲白す。欽明 書を去るも悉さず。彦先 來りて書を得、以て慰めと爲す。時の去ること蕚荏たるも、歳の行くこと復た半ばなり。此の推移を悲しむも、終然に何ぞ及ばん。漸已く熱うならんと欲るも、想ふに自ら常の如からん。悠悠として限を守り、良談 未

だ日あらず。眇然として東望し、以て絃の至らんことを思ふ。反するに及んで憤罔多からざらん。行け 徳を愛せよ。往來 相ひ聞せよ。 (「與楊彥明書」其一)

此のなかで、「遙か遠く東の方(會稽)を望んでは、任命書の到らんことを思っておりませぬ」といい、同じく「與楊彥明書」其二では、

階塗尚否、通路今塞、令人惘然。名論允進、遠而有光者。

階塗は尚ほ否にして、通路は今や塞がれ、人をして惘然たら令む。名論は允に進むも、遠くして光有る者なり。

といっている。すなわち、「官吏に就く道はやはり閉ざされ、世に出る道は今や塞がれてしまい、私をがっかりさせております。評判は非常に高いのですが、遠く地方にいて輝いている者です」と、その任官がなかなかうまく行かないことについて、洛にいる陸雲が、呉にいる楊彥明にその状況を説明しているのである。

このように、入洛後の陸機・陸雲兄弟は、北方社會における自らの立場が安定してゆくにつれ、ここに取り上げた戴淵・楊彥明といった南人を北方社會に導き入れていったのと同じように、次々と南人を洛陽へと引き入れていったのである。そうして入洛した南人は、すでに洛陽入っていた南人たちと力を合わせ、また新しい南人を北方社會へと導いてゆくのである。

さて、このような陸機を中心とした南人集團のなかでは、もちろん南人の就職や、その動向に関する話し合いが持たれ、様々な情報が交換されていたわけであり、活動の中心はやはり政治的なものが多かったことが考えられる。しかし、それとともに文學活動も行なわれていたようである。陸雲の書翰のなかに、次のようなものがある。

雲再拜。巨卿在臺、高誉洋溢。洛邑之内、無不欽敬。東南之貴賈、眞不但會稽之襍蕩也。每會常共歌詠、信無一面不歎吟也。想方周旋攜手、散今日之思耳。雲再拜。

雲 再拜。巨卿は臺に在り、高誉 洋溢たり。洛邑の内、欽敬せざる無し。東南の貴賈は、眞に但に會稽の襍蕩のみならざるなり。會する毎に常に共に歌詠し、信に一面として歎吟せざるは無きなり。方に周旋して手を攜へ、今日の思ひを散せんことを想ふ耳。

雲 再拜。

(「與陸典書」其八)

前半では、巨卿なる呉國出身者が、中央にあって甚だ評判がよいことを述べ、後半に「會する毎に共に歌詠し、信に一面として歎吟せざるは無きなり」と、洛陽にいる南方出身者が、しばしば集まっては詩を詠じていることを記している。

このような南人の集會が、たびたび行なわれていたことについては、陸雲の「與楊彥明書」其二に、

各爾永高、良會每闌。

各爾おのづから 永くた爾だたるも、良會は毎つねにたげなほ闌なり。

とあり、また「與戴季甫書」其六にも、

在此會同、每言高重武陵。

此に在りて會同しては、毎つねに武陵を高重せんことを言ふ。

とあつて、そのことが分かる。

陸機を中心とした、この南方文人集團の形成過程やその構成メンバー、集團における活動の状況についての詳細は、次章で述べることにする。

3 張華集團

賈謐の文學集團が活動を始めた元康六年（二九六）頃、張華を中心とした文學集團も、その活動を盛んにしていた。そもそも張華の文學集團は、泰始六年（二七〇）頃から已にその活動が始まっていたと考えられるが、賈謐集團に對抗すべく、その動きを活発化していったのである。

張華（二三三―三〇〇）は字を茂先といい、范陽・方城の人である。幼くして孤児となり、牧羊をしていたが、盧欽（盧毓の子で字は子若）に擧げ用いられた。同郷の劉放もまた華の才能を認め、娘をその妻とした。まだ名を知られていないときに「鷓鴣の賦」を著した。陳留の阮籍がこれを見て、「王佐の才」有る人であると稱賛してから、その名聲が高まった。郡守の鮮于嗣が、華を推薦して太常博士とした。盧欽は華を文帝に薦め、河南の尹丞に轉ずることになったが、拜命しないまま、左著作郎に除せられ、ほどなくして長史に遷り、中書郎を兼務した。その後、中書郎が本務となり、晉が禪讓を受けてのち、黃門侍郎に拜され、關内侯に封ぜられた。

その後、武帝に重用され、惠帝が即位したときには、その太子少傅となった。以後、西晉朝にあつて、政治の中樞に關わり、力を盡くしていたけれども、趙王倫に怨まれて、永康元年（三〇〇）、六十九歳のときに處刑された。

そもそも張華は、泰始の初年（二六五）頃から、魏の人材のみならず、蜀や呉の人士を

多く集めていた。そうしてそこには自ずと張華を中心とする文人集團が形成されたものと考えられる。

入洛後の二陸は、南人に對して非常に冷淡である北方社會において、張華の庇護によつて、その仲間入りをしていった。洛陽に入った陸機は、弟の雲とともに張華の許を訪れた。『晉書』陸機傳にはこのときの様子が次のように記されている。

至太康末、與弟雲俱入洛。造太常張華。華素重其名、如舊相識曰、伐吳之役、利獲二俊。

太康の末に至り、弟の雲と俱に洛に入る。太常張華に造る。華は素より其の名を重んじ、舊くより相ひ識るが如し。曰く、「吳を伐つ役、利は二俊を獲しことなり」と。

同じく『晉書』張華傳には、

初陸機兄弟志氣高爽、自以吳之名家。初入洛、不推中國人士。見華一面如舊。

初め陸機兄弟は志氣高爽にして、自ら吳の名家なるを以てす。初めて洛に入るも、中國の人士に推らず。華を見て一面舊の如し。

とある。かねてよりその評判を聞いていたであろう張華は、機雲兄弟に會うや、たちまち意氣投合したのであった。

また、『晉書』陸雲傳には、此の時のこととして、次のようなエピソードを載せている。

機初詣張華。華問、雲何在。機曰、雲有笑疾。未敢自見。俄而雲至。華爲人多姿制。

又好帛繩纏鬚。雲見而大笑、不能自己。

機は初め張華に詣る。華問ふ、「雲は何くに在りや」と。機曰く、「雲は笑疾有り。未だ敢て自ら見えず」と。俄にして雲至る。華は人と爲り姿制多し。又た帛の繩もて鬚を纏ふを好む。雲は見て大いに笑ひ、自ら已むこと能はず。

張華が格好をつけて、そのうえ絹ひもで、あごひげをくくるものだから、陸雲はそれを見て思わず大笑いし、自制できなかったというのである。

『晉書』には更に、喪服を着て船に乗り、水に映る自分の姿を見て大笑いし、水中に落ちて危うく命を落しかけたことがあった、ということも記されている。

先是、嘗著纒經上船、於水中顧見其影、因大笑落水、人救獲免。

是より先、嘗て纒經を著て船に上り、水中に其の影を顧見し、因りて大笑して水に落ちるも、人救ひて免るるを獲たり。

陸雲はいささか笑い上戸の度が過ぎていたようであるが、それにしても、初対面の席で張華を見て大笑いしたというのは、それができるほどに、張華と二陸とが打ち解けた感情を抱き、その場の雰囲気^{きふき}が和やかなものであったからであろう。

當時、入洛してきた呉人たちは、まず張華のもとを訪れたらしく、たとえば『晉書』薛兼傳には、次のようにある。

呉平、爲散騎常侍。兼清素有器宇、少與同郡紀瞻、廣陵閔鴻、呉郡顧榮、會稽賀循齊名、號爲五儁。初入洛、司空張華見而奇之曰、皆南金也。

呉平ぐや、散騎常侍と爲る。兼は清素にして器宇^{ぶく}有り、少くして同郡の紀瞻・廣陵の閔鴻・呉郡の顧榮・會稽の賀循と名を齊しくし、號して「五儁」と爲す。初め洛に入るや、司空張華は見て之を奇として曰く、「皆な南金なり」と。

顧榮をはじめ薛兼・紀瞻・閔鴻・賀循らの呉人が、そろって張華の許を訪れ、華もまた彼らを快く迎え入れたようである。亡國の徒が晉朝にあって新しい世界を切り拓いてゆくには、當然のことながら自分達の後楯が必要であった。當時、晉朝にあって政界・文壇の中心的な存在であった張華こそは、その後楯として十分な人物であった。

以上、見てきたように、もとより入洛後の陸機・陸雲兄弟を庇護し、西晉朝に引き入れていったのは張華であったが、二陸のほかにも、たとえば成公綏・束皙・左思・陳壽といった名だたる文人達が、張華にその才を認められて北方社會へ登場したのである。以下、それぞれの文人について張華との関わりを見てみよう。

① 成公綏（子安）

後世、賦家として文學史上にその名を留める成公綏（二三二～二七三）の傳は、『晉書』卷九二・文苑傳のなかにある。

成公綏、字子安、東郡白馬人也。幼而聰敏、博涉經傳。性寡欲、不營資產。家貧歲飢、常晏如也。少有俊才、詞賦甚麗。閑默自守、不求聞達。

成公綏、字は子安は、東郡・白馬の人なり。幼にして聰敏、博く經傳を渉る。性寡欲にして、資産を營まず。家貧にして歲に飢うるも、常に晏如たり。少くして俊才有り、詞賦甚だ麗し。閑黙にして自ら守り、聞達を求めず。

「東郡白馬」とは、『晉書』地理志に「廢東郡立頓丘」（東郡を廢して頓丘を立つ）とあ

り、晉の司州頓丘県であり、言うまでもなく成公綏は、魏國出身の文人であった。しかし優れた文才を持ちながらも、家が貧しいために、世に出る機会がなかった。このような綏に注目したのが張華なのであった。

張華雅重綏、每見其文、歎伏以爲絶倫。薦之太常、徵爲博士。歷秘書郎、轉丞、遷中書郎。每與華受詔並爲詩賦。又與賈充等參定律律。泰始九年卒。年四十三。

張華 雅より綏を重んじ、其の文を見る毎に、歎伏して以て絶倫と爲す。之を太常に薦め、徵して博士と爲す。秘書郎を歴、丞に轉じ、中書郎に遷る。毎に華と詔を受け並びに詩賦を爲る。又賈充等と法律を參定す。泰始九年 卒す。年は四十三。

もとより張華はその文才に目を着けたわけである。

ところで、張華が綏を推薦した時の文章が、『太平御覽』卷六三二に引く『文士傳』のなかに見える（中ほどに脱落がある）。

張華薦成公綏曰、竊見處士東郡成公綏、年二十五、字子安。體珪璋之質、資不器之量。知深慮明、足以妙見、研思篤好、則仲舒之精、引之……世貞幹、足以敦風篤俗、淵才達學、足以宏道世教。固逸倫之殊俊、摯紳之檢式也。

これに據れば、張華が綏を薦めた時、綏は二十五歳であった。綏は泰始九年（二七三）に四十三歳で亡くなっているから、張華が綏を推薦したのは魏の正元二年（二五五）ということになる。張華の生年は魏の明帝の太和六年（二三二）であるから、時に張華二十四歳のことである。

また、陸機の入洛は『晉書』陸機傳によれば、太康の末ということであるから、成公綏と陸機とが張華の坐で顔を合わせるといったことは考えにくい。

ただ、陸雲の兄宛ての書翰のなかには、成公綏の文章を取り上げて、雲が文學論を語るものがある。

近日視子安賦、亦對之歎息絶工矣。兄誨又爾。故自是高手。謹啓。

近日、子安の賦を視て、亦た之に對して絶工なるを歎息す。兄の誨へも又た爾り。故自り是れ高手なり。謹啓。

（「與平原書」其十八）

これは、陸雲が成公綏の賦を見て、そのすばらしさに感嘆し、陸機の意見も同じであったというものである。また、次のようなものもある。

張公父子亦語雲、兄文過子安、子安諸賦、兄復不皆過。其便可、可不與供論。

張公父子も亦た雲に語る、「兄の文は子安に過ぐるも、子安の諸賦は、兄は復た皆は過ぎず」と。其れ便ち可ならんも、與に論に供せざる可し。 (「與平原書」其十九)

これは、陸雲が張華父子が、「陸機の文章は大體のところ成公綏よりはすぐれているが、その賦については、陸機の及ばないものがある」と言ったのを聞いて、いささかその意見に不満をもらしているのである。

このように、成公綏の死後も、その文章を取り上げては議論するということが、張華のサロンでは行なわれていたのかも知れない。

② 東 哲(廣微)

東哲の傳は、『晉書』卷五一にある。

東哲、字廣微、陽平元城人。漢太子太傅疎廣之後也。王莽末、廣曾孫孟達避難、自東海徙居沙鹿山南、因去疎之足、遂改姓焉。祖混、隴西太守、父龜、馮翊太守、竝有名譽。

東哲、字は廣微、陽平・元城の人なり。漢の太子太傅疎廣の後なり。王莽の末、廣の曾孫孟達は難を避け、東海自り居を沙鹿山の南に徙し、因りて疎の足を去りて、遂に姓を改む。祖は混、隴西の太守たり、父は龜馮翊の太守たり、竝びに名譽有り。

東哲は前漢の疎廣の後裔であり、後に「疎」の「足」(正は足に同じ)を除き去って、姓を「東」と改めた、という。

哲博學多聞、與兄璆俱知名。少遊國學。或問博士曹志曰、當今好學者誰乎。志曰、陽平東廣微好學不倦、人莫及也。還鄉里、察孝廉、舉茂才、皆不就。璆娶石鑿從女、棄之。鑿以爲憾、諷州郡公府不得辟、故哲等久不得調。

哲は博學多聞、兄の璆と俱に名を知らる。少くして國學に遊ぶ。或ひと博士の曹志に問ひて曰く、「當今の學を好む者は誰か」と。志曰く「陽平の東廣微は學を好んで倦まず、人及ぶもの莫きなり」と。郷里に還り、孝廉に察せられ、茂才に擧げらるも、皆な就かず。璆は石鑿の從女を娶り、之を棄つ。鑿は以て憾みを爲し、州郡の公府に諷して辟くことを得ざらしめば、故に哲等久しく調せらるるを得ず。

哲は、兄の璆が石鑿の從女を離縁したために、石鑿に憎まれて仕官することができなかつた、というのであるが、才がありながら世に出ることができずにいた哲を擧用したのが、張華であった。哲はかつて「勸農賦」「藝賦」などを作ったが、その文章が鄙俗であったた

めに、當時の人々はそれを軽んじた。生來、榮利を慕わない哲は、「客難」に擬して「玄居釋」を作ったが、これが張華の目にとまったのである。

張華見而奇之。石鑿卒、王戎乃辟璆。華召哲爲掾。又爲司空、下邳王晃所辟。華爲司空、復以爲賊曹屬。

張華は見て之を奇とす。石鑿 卒するや、王戎 乃ち璆を辟く。華は哲を召して掾と爲す。又た司空・下邳王晃の辟く所と爲る。華 司空と爲るや、復た以て賊曹の屬と爲す。石鑿が卒すると、王戎が兄の璆を召し、張華は弟の哲を掾とした。張華が司空となったのは、元康六年（二九六）のことである。

③ 左 思（太沖）

「三都賦」で有名な左思も張華に見出された文人の一人である。彼の傳は、『晉書』卷九二・文苑傳および『世說新語』文學篇注に引く『左思別傳』にある。いまは『左思別傳』を見てみよう。

思、字太沖、齊國臨淄人。父雍、起於筆札、多所掌練、爲殿中御使。思蚤喪母、雍憐之、不甚教其書學。及長、博覽名文、遍閱百家。司空張華辟爲祭酒、賈謐舉爲秘書郎。謐誅、歸鄉里、專思著述。齊王冏請爲記室參軍、不起。時爲三都賦未成也。後數年疾終。其三都賦改定、至終乃止。初作蜀都賦云、金馬電發於高岡、碧雞振翼而雲披。鬼彈飛丸以礮礮、火井騰光以赫曦。今無鬼彈、故其賦往往不同。思爲人無吏幹而有文才、又頗以椒房自矜、故齊人不重也。

思、字は太沖、齊國・臨淄の人なり。父は雍、筆札より起こり、掌練する所多く、殿中御使と爲る。思は蚤に母を喪ひ、雍は之を憐れみ、甚だしくは其の書學を教へず。長ずるに及んで、博く名文を覽、遍く百家を閲す。司空張華は辟きて祭酒と爲し、賈謐は擧げて秘書郎と爲す。謐の誅せらるるや、郷里に歸り、専ら著述を思ふ。齊王冏 請ひて記室參軍と爲すも、起たず。時に「三都賦」を爲りて未だ成らざるなり。後、數年にして疾み終はる。其の「三都賦」の改定は、終はりに至るまで乃ち止めず。初め「蜀都賦」を作りて云ふ、「金馬 高岡に電發し、碧雞 翼を振ひて雲披す。鬼彈 丸を飛ばして以て礮礮たり、火井 光を騰げて以て赫曦たり」と。今、「鬼彈」無く、故より其の賦は往往同じからず。思は人と爲り吏幹無きも、文才有り、又た頗る椒房を以て自ら矜れば、故に齊人 重んぜざるなり。

ここにあるように、左思はその「三都の賦」の完成に精根を使い果たしたのであるが、此の賦は出来上がった當初は、あまり評判がよくなかった。その後、張華に此の賦を見せたところ、華は、「これは『二京賦』と肩を並べることのできるほどの出来栄である。しかるに、君の文章は未だ世に認められていないから、高名の人士を介するのがよからう」といい、そこで思は皇甫謐に序文を書いてもらったというのであるが、これは次に挙げる『世説新語』文學篇に傳えるところである。

左太沖作三都賦、初成、時人互有讖^ひ。思意不^愜。後示張公、張曰、此二京可三。然君文未重於世。宜以經高名之士。思乃詢求於皇甫謐。謐見之嗟歎、遂爲作敘。於是先相非貳者、莫不斂^{そま}衽讚述焉。

左太沖、「三都の賦」を作り、初めて成るや、時人互ひに讖^{まじ}する有り。思は意に愜^{かた}はず。後に張公に示すに、張曰く、「此れ二京を三とす可し。然れども君の文は未だ世に重んぜられず。宜しく以て高名の士を経^よべし」と。思は乃ち皇甫謐に詢^{きん}求す。謐は之を見て嗟歎し、遂に爲に敘を作る。是に於て先に相ひ非^ひ貳^いせし者、衽^{そり}を斂^まめて讚述せざる莫^なし。

ただ劉注に引く『左思別傳』によれば、敘を書いたのは皇甫謐ではなく、作品を權威づけるために、左思みずから書いたのだと、次のように記している。

皇甫謐西州高士、摯仲治宿儒知名、非思倫^正。劉淵林、衛伯輿並蚤^終。皆不爲思賦序注也。凡諸注解、皆思自爲。欲重其名、故假時人名姓也。

皇甫謐は西州の高士、摯仲治は宿儒にして名を知られ、思の倫^正に非ず。劉淵林・衛伯輿は並びに蚤^ひに終^つふ。皆な思の賦の爲に序注せざるなり。凡そ諸々の注解は、皆な思自^{みづか}ら爲^{つく}る。其の名を重んぜしめんと欲して、故に時人の名姓を假^かるなり。

序文や注を誰が記したのかという眞偽は別にしても、寒門出身の人士が世に出るために、いかに苦勞があったかということがよく分かる話である。

④ 陳 壽 (承祚)

「魏書」「吳書」「蜀書」の『三國志』の著者として名を残す陳壽も、張華に見出された文人のひとりである。陳壽の傳は、『晉書』卷八二、及び『華陽國志』卷十一（『漢魏叢書』所収）にある。いま、『華陽國志』陳壽傳を見てみよう。

陳壽、字承祚、巴西安漢人也。少受學於散騎常侍譙周、治尚書、三傳、銳精史漢、聰

警敏識、屬文富艷。初應州命衛將軍主簿、東觀祕書郎、散騎黃門侍郎。大同後察孝廉、爲本郡中正。

陳壽、字は承祚、巴西・安漢の人なり。少くして學を散騎常侍譙周に受け、『尚書』・三『傳』を治め、『史』・『漢』に鋭精し、聰警 敏識にして、文を屬ること富艷なり。初め州に應じて衛將軍の主簿・東觀祕書郎・散騎黃門侍郎に命ぜらる。大同の後に孝廉に察せられ、本郡の中正と爲る。

このように、壽は若い頃から經書や史書を学び、すばらしい文章を書いていたようである。そうして、壽が『三國志』を著述したことについては、次のように記してある。

吳平後、壽乃鳩合三國史、著魏吳蜀三書六十五篇、號三國志。

吳 平らぎて後、壽は乃ち三國の史を鳩合し、魏・吳・蜀の三書六十五篇を著し、『三國志』と號す。

この陳壽の史家としての才に注目したのが、荀勳と張華であった。

中書監荀勳、令張華、深愛之、以班固史遷不足方也。出爲平陽侯相。華又表令次定諸

葛亮故事集爲二十四篇。

中書監の荀勳・令の張華は、深く之を愛し、以へらく 班固・史遷も方ふるに足らざるなりと。出でて平陽侯の相と爲る。華は又た表して次ぎて『諸葛亮故事集』を定めしめ二十四篇と爲す。

陳壽を、班固や司馬遷も及ばないほどであると褒め、さらに張華は、陳壽に『諸葛亮故事集』を書かせている。『晉書』本傳には、張華が壽に『三國志』のほかにも『晉書』までも書かそうとしていたことが記されている。

以上、張華の文人集團の主なメンバーを取り上げて、彼らと張華との関わりを見てきたが、張華はここに挙げた文人の外にも、實に多くの人士を見出している。次には、そういった人達について見てみよう。

試みに『晉書』を繙いてみるに、張華に推舉された人として、以下の如き人士の名を擧げることができる。

皇甫重（倫叔）

皇甫重、字倫叔、安定朝那人也。性沈果、有才用。爲司空張華所知、稍遷新平太守。

元康中、華版爲秦州刺史。

皇甫重、字は倫叔、安定・朝那の人なり。性は沈果にして、才用有り。司空張華の知る所と爲り、稍く新平太守に遷る。元康中、華版して秦州刺史と爲す。(卷六〇)

劉弘(和季)

劉弘、字和季、沛國相人也。祖馥、魏揚州刺史。父靖、鎮北將軍。弘有幹略政事之才。少家洛陽、與武帝同居永安里。又同年共研席。以舊恩起家太子門大夫。累遷率更令、轉太宰長史。張華甚重之。由是爲寧朔將軍、假節、監幽州諸軍事。

劉弘、字は和季、沛國・相の人なり。祖は馥、魏の揚州刺史。父は靖、鎮北將軍。弘は幹略政事の才有り。少くして洛陽に家し、武帝と同一に永安里に居す。又た年を同じくして、研席を共にす。舊恩を以て家より太子の門大夫に起つ。累りに率更令に遷り、太宰の長史に轉る。張華甚だ之を重んず。是に由りて寧朔將軍、假節、監幽州諸軍事と爲る。

(卷六六)

褚陶(季雅)

褚陶、字季雅、吳郡錢塘人也。弱不好弄。少而聰慧、清談閑默、以墳典自娛。……州郡辟、不就。吳平、召補尚書郎。張華見之、謂陸機曰、君兄弟龍躍雲津、顧彥先鳳鳴朝陽。謂東南之寶已盡、不意復見褚生。曰、公但未覩不鳴不躍者耳。

褚陶、字は季雅、吳郡・錢塘の人なり。弱にして弄を好まず。少くして聰慧、清談閑默、墳典を以て自ら娛む。……州郡辟すも、就かず。吳の平ぐや、召されて尚書郎に補せらる。張華之を見て、陸機に謂ひて曰く、「君が兄弟は龍のごとく雲津に躍り、顧彥先は鳳のごとく朝陽に鳴く。東南の寶は已に盡きたりと謂ひしに、意はざりき復た褚生を見んとは」と。機曰く、「公は但だ未だ鳴かず躍らざる者を觀らざる耳」と。

(卷九二)

前の二人、皇甫重・劉弘は、いずれも舊魏國出身の人、後の褚陶は亡國吳の人である。先に取り上げた人達と同じように、張華はその出身に拘ることなく、有能な人士を次々と引き入れていったようである。

更に『三國志』卷四七「吳書」吳主傳に引く『文士傳』には、

(鄭胄)子豐、字曼季、有文學操行、與陸雲善、與雲詩相往反。司空張華辟、未就、卒。

(鄭胄の)子の豐、字は曼季は、文學操行有りて、陸雲と善く、雲に詩を與へて相ひ往反す。司空張華 辟すも、未だ就かずして、卒す。

とあり、陸雲と仲のよかった鄭曼季を張華が招いたことが記されている。

張華が何人の人士を擧げ用いたかということについては、『晉書』卷九四・范喬傳に、興味深い記述がある。すなわち、

時張華領司徒、天下所舉凡十七人、於喬特發優論。

時に張華は司徒を領し、天下の擧ぐる所は凡そ十七人、喬に於て特に優論を發す。

とあり、張華が司徒であった時に、十七人の人材を擧げたと記されている。ただ、張華が司徒の任に在ったという記事は『晉書』本傳には見えないので、或いはこれは司空在任の時のことかもしれない。もしそうであるとすれば、『晉書』卷四・惠帝紀に、

(永平)六年正月、司空、下邳王晃薨。以中書監張華爲司空。

六年正月、司空・下邳王晃 薨す。中書監張華を以て司空と爲す。

とあり、張華が司空になったのは永平すなわち元康六年(二九六)のことであり、同じく惠帝紀に、

(永康元年)夏四月辛卯、司空張華、尚書僕射裴頌、皆遇害。

夏四月辛卯、司空張華・尚書僕射裴頌、皆な害に遇ふ。

とあることから、張華は害に遇うまで司空の職にあったことが知られる。従つて、元康六年(二九六)から永康元年(三〇〇)までの五年間に、十七人の人材を擧げ用いたといふことになる。

ところで、先の鄭曼季のように、張華の招きを辭退した人も無いわけではなかった。たとえば『晉書』卷八九・忠義列傳に見える韋忠なる人物もその一人である。

韋忠、字子節、平陽人也。少慷慨、有不可奪之志。……(裴)頌爲僕射、數言之於司

空張華。華辟之、辭疾不起。人問其故、忠曰、吾茨簷賤士、本無宦情。且茂先華而不

實、裴頌愆而無厭、棄典禮而附賊后。若此、豈大丈夫之所宜行邪。裴常有託我。常

恐洪濤蕩嶽、餘波見漂、況可臨尾閭而闕沃焦哉。

韋忠、字は子節、平陽の人なり。少くして慷慨にして、奪ふ可からざるの志有り。……

頌の僕射と爲るや、數々之を司空張華に言ふ。華は之を辟くも、疾と辭して起たず。人

其の故を問ふに、忠曰く、「吾は茨菘の賤士にして、本より宦情無し。且つ茂先は華にして實ならず、裴頴は慾にして厭ふ無く、典禮を棄てて賊后に附く。此の若きは、豈に大丈夫の宜しく行くべき所ならんや。裴は常に我に託するに心有り。常に恐るは、洪濤嶽を蕩さば、餘波に漂はれん、況や尾閭に臨んで沃焦を闢ふ可けんや。

つまり韋忠は、張華はうわべだけの實の無い者であり、裴頴は欲深い者であり、どちらも賊后すなわち賈后に諂う仲間であるとしているのである。たしかに『晉書』張華傳には、

賈謐與后共謀、以華庶族、儒雅有籌略。進無逼上之嫌、退爲衆望所依。欲倚以朝綱、訪以政事。疑而未決、以問裴頴。頴素重華、深贊其事。

賈謐は后と共に謀り、以へらく華は庶族にして、儒雅にして籌略有り。進んでは上に逼るの嫌無く、退きては衆望の依る所と爲る。倚るに朝綱を以てし、訪ぬるに政事を以てせんと欲すと。疑して未だ決せず、以て裴頴に問ふ。頴は素より華を重んずれば、深く其の事を賛く。

とあり、張華に政治を執らせたのは、賈謐と賈后であり、そのことに口添えしたのが裴頴ではあったが、これに續いて、

華遂盡忠匡輔、彌縫補闕。雖當闇主虐后之朝、而海内晏然、華之功也

華は遂に忠を盡くし匡輔し、彌縫して闕けたるを補ふ。闇主虐后の朝に當たると雖も、而も海内の晏然たるは、華の功なり。

と『晉書』に記す通り、張華は國家人民のために力を盡くしたのであり、これを見るかぎり其の人となりは「華にして實ならざる」ものではなかったようである。むしろ張華は賈氏一族には煙たい存在であった。『晉書』張華傳には、張華が「女史の箴」を作って賈后一族を諷刺したことや、傲慢な賈后も張華には一目置いていたということが、次のように記されている。

華懼后族之盛、作女史箴以爲諷。賈后雖凶妒、而知敬重華。

華は后族の盛んなるを懼れ、「女史の箴」を作りて以て諷と爲す。賈后は凶妒なりと雖も、華を敬重するを知る。

しかし、韋忠の目には、張華は「華にして實ならざる」者に映ったのであり、『晉書』には記載されていない華のそのような一面もあったのかも知れない。

そもそも、張華の人材登用は、實にさまざまな人に及んでいる。たとえば『三國志』卷二六「魏書」牽招傳注に引く荀綽の『冀州記』には、次のようである。

(牽) 秀有雋才、性豪俠有氣、弱冠得美名。於太康中爲衛瑾、崔洪、石崇等所提攜、以新安令博士爲司空從事中郎。與帝舅黃門侍郎王愷素相輕侮。愷諷司隸荀愷、令都官誣奏秀夜在道中載高平國守士田興妻。秀即表訴被誣陷之由、論愷穢行、文辭尤厲。于時朝臣雖多證明、秀名譽由是而損。後張華請爲長史、稍遷至尚書。

秀は雋才有り、性は豪俠にして氣有り、弱冠にして美名を得たり。太康中、衛瑾・崔洪・石崇等の提攜する所と爲り、新安令・博士を以て司空の從事中郎と爲る。帝の舅の黃門侍郎王愷と素より相ひ輕侮す。愷は司隸の荀愷に諷し、都官をして秀は夜道中に在りて高平國の守士の田興の妻を載すと誣奏せしむ。秀は即ち表して誣陷せらるるの由を訴へ、愷の穢行を論ずるに、文辭は尤も厲し。時に于て朝臣證明するもの多しと雖も、秀の名譽は是に由りて損はる。後、張華請ひて長史と爲し、稍く遷りて尚書に至る。

つまり、かねてから仲の悪い王愷に誣告され陥れられて、名譽を損なわれてしまった牽秀に手を差し伸べたのが、張華なのであった。張華は、その出身や評判を氣にすることなく、有能な人士を集めたようである。

また、張華は人物批評にも長けていたようで、『晉書』卷一〇八・慕容廆載記に次のようにある。

安北將軍張華、雅有知人之鑒。廆童冠時、往謁之。華甚嘆異、謂曰、君至長必爲命世之器、匡難濟時者也。

安北將軍張華、雅より人を知するの鑒有り。廆童冠の時、往きて之に謁す。華は甚だ嘆異して、謂ひて曰く、「君は長ずるに至れば必ず命世の器と爲り、難を匡し時を濟ぶ者ならん」と。

同じく『晉書』卷六一・成公簡傳には、

成公簡、字宗舒、東郡人也。家世二千石。性朴素、不求榮利、潛心味道、罔有干其志者。默識過人。張茂先每言、簡清靜比楊子雲、默識擬張安世。

成公簡、字は宗舒、東郡の人なり。家は世々二千石なり。性は朴素にして、榮利を求めず、心を味道に潛め、其の志を干す者罔し。默識人に過ぎたり。張茂先毎に言ふ、「簡は清靜楊子雲に比し、默識張安世に擬す」と。

とあり、張華が成公簡の人物評をしている。

このような張華のことは知ってか、亡國呉の出身である陶侃などは、みずから張華の許を訪れている。

陶侃、字士衡、本鄱陽人也。吳平、徙家廬江之尋陽。父丹、吳揚武將軍。……(張) 變察侃爲孝廉。至洛陽、數詣張華。華初以遠人、不甚接遇。侃每往、神無忤色。華後與語、異之、除郎中。伏波將軍孫秀以亡國支庶、府望不顯、中華人士恥爲掾屬。以侃寒宦、召爲舍人。

陶侃、字は士衡は、本と鄱陽の人なり。吳の平らぐや、家を廬江の尋陽に徙す。父は丹、吳の揚武將軍たり。……變 侃を察して孝廉と爲す。洛陽に至り、數々張華に詣る。華初め遠人なるを以て、甚だしくは接遇せず。侃は毎に往き、神として忤る色無し。華は後に與に語り、之を異とし、郎中に除す。伏波將軍孫秀は亡國の支庶にして、府望顯れざるを以て、中華の人士は掾屬と爲るを恥ず。侃の寒宦たるを以て、召して舍人と爲す。

(『晉書』卷六六)

入洛した陶侃は、張華の許を訪れたが、華の方は初めはあまり相手にしなかった。それでも侃はたびたび足を運び、ついには郎中に除せられた、というのである。この張華と陶侃のやりとりは、『世說新語』言語篇に引く『陶氏叙』には、

察孝廉入洛。司空張華見而謂曰、後來匡主寧民、君其人也。

孝廉に察せられて洛に入る。司空張華は見えて謂ひて曰く、「後來 主を匡げ民を寧んずるは、君 其の人ならん」と。

とあり、最初は冷淡な態度をとった張華も、やがては侃の才を認めたといい状況がよくわかる。

以上、張華の下に集まった文人達を見てきたが、それでは何故、張華はこのように多くの人士を集めたのであろうか。

その理由の一つとして、當時の政治状況が考えられる。此の當時、人材を登用する方法として、「九品中正法」が採用されていた。しかし此の方法も次第に弊害が現われ始め、その弊害を指摘するものも出た。その代表的なものは、『晉書』卷四五・劉毅傳にある「中正八損の議」である。この中で劉毅は、次のように述べている。

今之中正、不精才實、務依黨利。不均稱尺、務隨愛憎。所欲與者、獲虛以成譽、所欲

下者、吹毛以求疵。高下逐強弱、是非由愛憎。隨世興衰、不顧才實、表則削下、與則扶上、一人之身、旬日異狀。或以貨賂自通、或以計協登進。附託者必達、守道者困悴。無報於身、必見割奪、有私於己、必得其欲。是以上品無寒門、下品無勢族。

今の中正は、才實を精にせず、務めて黨利に依れり。稱尺を均しくせず、務めて愛憎に隨へり。與らんと欲する所の者は、虚を獲て以て誉れを成し、下さんと欲する所の者は、毛を吹いて以て疵を求む。高下強弱を逐ひ、是非愛憎に由る。世の興衰に隨ひて、才實を顧ず、衰ふれば則ち削下し、與れば則ち扶上し、一人の身、旬日に状を異にす。或いは貨賂を以て自ら通じ、或いは計協を以て登進す。附託する者は必ず達し、道を守る者は困悴す。身に報ざる無ければ、必ず割奪せられ、己に私有れば、必ず其の欲を得たり。是を以て上品に寒門無く、下品に勢族無し。

此の上疏は、劉毅が尚書左僕射であつたときのもので、人事を担当する側の意見であるだけに、いかに當時の人事が停滯していたかが窺える。

かかる「上品に寒門無く、下品に勢族無き」状態では、それを打破するためには、思い切つた人材の登用が必要であり、張華はそのようなことを考へて、出自に關係なく人材を集めたのではなからうか。これは例えば、晉の武帝の中頃に官吏登用の選舉を掌つた山濤(注1)が、彼自身が名族の出身ではなかつたために、比較的公平な人事を行つたのと似ている。實は張華自身も寒門の出身なのであつた。『晉書』張華傳の書き出しは、次の如くである。

張華、字茂先、范陽方城人也。父平、魏漁陽郡主。華少孤貧、自牧羊。同郡盧欽、見而器之。鄉人劉放、亦奇其才、以女妻焉。

張華、字は茂先、范陽・方城の人なり。父は平、魏の漁陽の郡主たり。華は少くして孤貧、自ら牧羊す。同郡の盧欽は、見て之を器ぐ。郷人の劉放も、亦た其の才を奇とし、女を以て妻す。

みずからが寒門出身である張華は、ために權勢の中心から遠くにある人を進んで採用したことが考えられる。

次に考えられる理由として、賈氏一族に對抗するため、多くの人士を集めたということである。次に見るように、賈謐のもとに集まつた文人は、言ってみれば、謐の權勢に追隨した人達である。そこには當然、時の流れにうまく乗つた人々が集まつた。張華のところには、むしろ時流にうまく乗れなかつた人々、言葉を替へるならば、時の権力からはみ出した人士が集まつたとも言えよう。そこには勿論、陸機・陸雲のように、賈謐の文會にも出入りしていた、時の一級の文人もいるし、あまり名を知られていない文人もいた。ま

た亡國呉人・蜀人もいれば、舊魏國出身の人もいた。言うなれば、このような雑多人々の集まったサロンでは、むしろ賈誼のところには無かつたような、活発なものがあつたのではなからうか。南人と北人との交流の場も、時には對立の場となり、當然のことながら、そこでは詩文のやりとりがあり、作品を競い合うということもあつたであらう。このような雰圍氣を窺わせるのが、『世說新語』排調篇に見える次の話である。

荀鳴鶴、陸士龍二人、未相識。俱會張茂先坐。張令共語、以其並有大才、可勿作常語。

陸舉手曰、雲間陸士龍。荀答曰、日下荀鳴鶴。陸曰、既開青雲觀白雉、何不張爾弓、

布爾矢。荀答曰、本謂雲龍駢駢、定是山鹿野麋。獸弱弩彊、是以發遲。張乃撫掌大笑。

荀鳴鶴・陸士龍の二人、未だ相ひ識らず。俱に張茂先の坐に會す。張は共に語らしめ、其の並びに大才有るを以て、常語を作すこと勿る可からしむ。陸 手を舉げて曰く、「雲間の陸士龍なり」と。荀は答へて曰く、「日下の荀鳴鶴」と。陸曰く、「既に青雲を開きて白雉を觀るに、何ぞ爾の弓を張りて、爾の矢を布へざる」と。荀 答へて曰く、「本より雲龍は駢駢たりと謂ひしに、定めて是れ山鹿野麋ならんとは。獸は弱くして弩は彊し、是を以て發すること遲し」と。張は乃ち掌を撫して大いに笑ふ。

荀鳴鶴と陸雲の二人は、それまで面識はなかつた。ある時、張華の席で一緒になつた。張華はこの二人に談論させようとしたが、二人ともすぐれた才能の持ち主なので、ありきたりの言葉を使つてはならないことにした。陸雲は手を舉げて「雲間の陸士龍である」と言つた。すると荀鳴鶴は「日の下の荀鳴鶴である」と答えた。陸雲が「青雲を開いて白い雉を目にしたからには、どうして君の弓を引きしほり、矢をつがえないのか」と言うと、荀鳴鶴は「これまで雲間の龍は強く壯んなものと思つていたのに、なんとまあ山野の鹿麋のようであつたとは。獲物は弱いのに我が弩は強い。それで矢を放つのをためらつたのだ」と答えた。二人のやりとりを聞いていた張華は、手を打って大笑した、という。それまで面識のなかつた荀隱（字は鳴鶴）と陸雲が、張華の坐でやりあつたという此の話は、張華サロンの雰圍氣を傳えていて興味深い。劉注に引く『晉百官名』に、

荀隱、字鳴鶴、潁川人。

荀隱、字は鳴鶴、潁川の人なり。

と云い、荀隱が潁川出身の人であるというが、潁川は『晉書』地理志に據れば豫州に屬し、もとの魏の地である。つまり二人は舊魏の出身者と亡國呉の出ということになり、このやりとりの背後には、そのような複雑な心理があつたものと想像される。荀隱との談論では、陸雲はいつも旗色がよくなかつたようである。

隱與陸雲在張華坐語、互相反覆、陸連受屈。隱辭皆美麗、張公稱善。

隱は陸雲と張華の坐に在りて語り、互いに相ひ反覆し、陸は連りに屈を受く。隱の辭は皆な美麗なれば、張公は善しと稱す。
(劉注所引『荀氏家傳』)

と傳えられている。

陸雲が兄の陸機に與えた「與平原書」三十數首は、主に文章制作について述べられたものであるが、その中に次のようなものがあつて、或いはこれらの書翰の内容については、張華の文會でのことを言うものかも知れない。

往日論文、先辭而後情、尚繁而不取悅澤。嘗憶、兄道張公父子論文、實自欲得。今日便欲宗其言。

往日 文を論ずるや、辭を先にして情を後にし、繁を尚びて悅澤を取らず。嘗に憶ふ、兄の「張公父子の論文は、實自に得んと欲す」と道ふを。今日 便ち其の言を宗ばんと欲す。
(「與平原書」其十一)

これは、以前は辭を第一にして情を後回しにし、簡潔さを重んじて潤いを取らなかつた陸雲が、兄が語る張華父子の文學論を聞いて、今になって、その言葉の大切さを知つた、というものである。或いは、張華の文會において、華が語つた文學に就いての議論を、その場にいなかつた陸雲に、陸機が話したのかも知れない。

仲宣文如兄言、實得張公力、如子桓書、亦自不乃重之。

仲宣の文は兄の言の如く、實に張公の力を得たるも、子桓の書の如きは、亦た自ら乃ち之を重んぜず。
(「與平原書」其十二)

これも、恐らく張華の文會で王粲(字は仲宣)の文章を取り上げて、それを批評するといつたようなことがあつたときのものであろう。このように、張華のサロンにおいては、詩文の制作のみならず、文學批評なども行なわれていたように思われる。そうして、このように互いの文學論を語り合うことによつて、それぞれの文章を高めていったのであろう。

以上、見てきたように、張華の文學集團は、みずからが優れた文人であつた張華が、その出身や家柄に拘ることなく、有能なる人士を集めた集團であつて、このことは次に取り上げる賈謐の文學集團が非常に政治的な色彩の濃いものであつたのとは、その性格を異にする。従つて張華集團では、相當に眞剣な文學に關する議論が交わされたことであろうし、

特に、張華が陸機ら南方文人に對しても非常に好意的であったということから、その文會には少なからず南方出身の文人も参加していたであろうことが考えられる。そうして必然的に南方文學と北方文學とが、そこでぶつかり合うことになり、そのような過程が、實はその後の西晉文學を方向付けることにもなったわけで、その意味からも、張華の文學集團は、晉代文學史上で重要な役割を担った集團と言うことができよう。

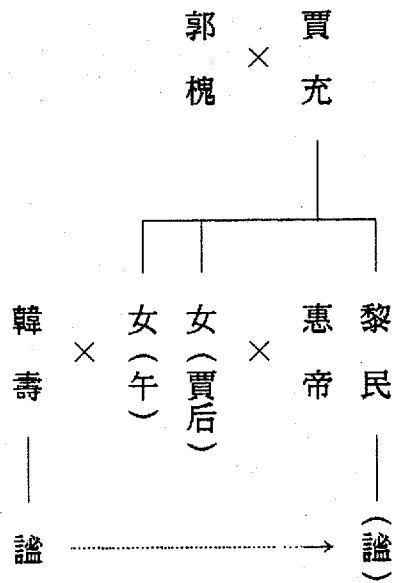
(注)

① 宮崎市定『九品官人法の研究』(同朋社)第二章「魏晉の九品官人法」参照。

4 賈謐集團—二十四友—

西晉にはいくつつかの文學集團があつたが、中でも賈謐(？—三〇〇)のもとに集まった文學集團「二十四友」は有名である。陸機は弟の雲とともに、この賈謐の二十四友のメンバーであつた。

賈謐は、西晉の元勳である賈充(二二七—二八二)の娘の午を母に持ち、父は韓壽であるが、賈充の子の賈黎民を嗣いだ。系圖で示せば、次の如くである。



賈謐は佐命の巨充の後嗣として、また惠帝賈后の甥として、絶大なる権力を有しており、言ってみれば、その権力にものをいわせて、當代一流の文人をそのサロンに集めたのであつた。賈謐の「二十四友」については『晉書』卷四〇・賈謐傳に、次のように記されている。

或著文章稱美謐、以方賈誼。渤海石崇・歐陽建、滎陽潘岳、吳國陸機・陸雲、蘭陵繆

徵、京兆杜斌・摯虞、琅邪諸葛詮、弘農王粹、襄城杜育、南陽鄒捷、齊國左思、清河崔基、沛國劉瓌、汝南和郁・周恢、安平牽秀、潁川陳瞻、太原郭彰、高陽許猛、彭城劉訥、中山劉興・劉琨、皆傳會於謚、號曰二十四友。其餘不得預焉。

或いは文章を著して謚を稱美し、以て賈誼に方ぶ。渤海の石崇・歐陽建、滎陽の潘岳、吳國の陸機・陸雲、蘭陵の繆徵、京兆の杜斌・摯虞、琅邪の諸葛詮、弘農の王粹、襄城の杜育、南陽の鄒捷、齊國の左思、清河の崔基、沛國の劉瓌、汝南の和郁・周恢、安平の牽秀、潁川の陳瞻、太原の郭彰、高陽の許猛、彭城の劉訥、中山の劉興・劉琨は、皆な謚に傳會し、號して二十四友と曰ふ。其餘は預るを得ず。

石崇・歐陽建・潘岳といった、いわば賈謚直系の人物の名がその初めに示され、それに続いて陸機・陸雲の名が列ねられているように、陸機・陸雲は二十四友の中心メンバーであったようであるが、先ずはこれら二十四友のうち、『晉書』に傳のある人を取り上げて、その状況を見てみよう。

① 石崇(季倫)

石崇(二四九〜三〇〇)の傳は、『晉書』卷三三にあり、その書き出しは、次のようである。

(石)崇、字季倫、生於青州。故小名齊奴。少敏惠、勇而有謀。苞臨終、分財物與諸子、獨不及崇。其母以爲言。苞曰、此兒雖小、後自能得。

崇、字は季倫、青州に生まる。故に小名を齊奴といふ。少くして敏惠、勇にして謀有り。苞終はるに臨み、財を分かちて諸子に與ふるに、獨り崇に及ばず。其の母 以て言を爲す。苞曰く、「此の兒 小なりと雖も、後に自ら能く得ん」と。

父苞の臨終の際に、「この子は小さいが、將來きつと財を得るであろうから」と言つて、崇だけには財産を分與しなかつたというが、父の予言どおり、崇はその財にものをいわせ奢侈な生活をしたことで、後世にその名をとどめている。すなわち、『世說新語』汰侈篇には、石崇の奢侈ぶりを傳えるいくつかの逸話が記されている。

石崇廁、常有十餘婢侍列。皆麗服藻飾。置甲煎粉、沈香汁之屬、無不畢備。

石崇の廁には、常に十餘婢の侍列する有り。皆な麗服藻飾す。甲煎粉・沈香汁の屬を置き、畢く備はらざるは無し。

石崇の家の廁には、いつも十人あまりの侍女がおり、それがみな綺麗な服をつけて着飾つ

ていた。甲煎粉・沈香汁といった香が置かれていて、備えてないものはなかった。——劉注に引く『語林』には、訪ねてきた劉寔が、廁へ行って、あまりの豪華さに、部屋を間違えたと思ったということが、次のごとく述べられている。

劉寔詣石崇、如廁、見有絳紗帳大牀。茵蓐甚麗、兩婢持錦香囊。寔遽反走、即謂崇曰、向誤入卿室內。崇曰、是廁耳。

劉寔 石崇に詣り、廁に如き、絳紗帳の大牀有るを見たり。茵蓐 甚だ麗しく、兩婢 錦の香囊を持つ。寔は遽に反り走り、即ち崇に謂ひて曰く、「向に誤りて卿の室内に入れり」と。崇曰く、「是れ廁なる耳」と。

次に擧げる話も、その傲慢奢侈ぶりを伝えるものである。

石崇每要客燕集、常令美人行酒。客飲酒不盡者、使黃門交斬美人。

石崇 客を要へて燕集する毎に、常に美人をして酒を行はしむ。客 酒を飲むに盡くさざれば、黃門をして交々美人を斬らしむ。

石崇は客を招いて宴會をするたびに、いつも美人に酒をつがせ、もし客が酒を飲み干さなかつたら、美人を斬らせていたというのである。此のほかにも、やはり豪華を誇った晉の外戚の王愷（字は君夫）とその奢侈を競い合った話がいくつか伝えられている。ただ、劉注に引く王隱『晉書』には、

石崇爲荊州刺史、劫奪殺人、以致巨富。

石崇 荊州の刺史と爲るや、劫奪して人を殺し、以て巨富を致す。

とあり、その巨万の富を得た手段が正當ではなかったことを記している。

さて、その石崇と賈謐の二十四友との関わりについて『晉書』石崇傳には、次のようにある。

（崇）與潘岳諂事賈謐、謐與之親善、號曰二十四友。

潘岳と與に賈謐に諂事し、謐は之と親善にして、號して「二十四友」と曰ふ。

これによれば、石崇は潘岳とともに、謐の御機嫌をうかがって、諂っていたようである。さらに此れに續いて、

廣城君每出、崇降車、路左望塵而拜。其卑佞如此。

廣城君 出づる毎に、崇は車を降りて、路左に塵を望みて拜す。其の卑佞すること此の

如し。

とあり、廣城君に媚び諂っているさまがよく分かる。廣城君とは、郭槐のことである。郭槐は賈充の妻であり、諡は母である賈充の娘の賈午の兄弟の賈黎民を嗣いだのであり、諡に توسطして郭槐は祖父の妻にあたるわけで、いかに石崇や潘岳が賈氏一族に諂っていたのが見てとれる。

② 歐陽建（堅石）

歐陽建（？～三〇〇）の傳は、『晉書』石崇傳の次に附されている。石崇傳に、「崇甥歐陽建」と見えることから、建は崇の甥であることが分かる。建の傳は百字に満たない短いものである。今それを見てみよう。

歐陽建、字堅石、世爲冀方右族。雅有理思、才藻美贍、擅名北州。時人爲之語曰、渤海赫赫、歐陽堅石。辟公府、歷山陽令、尚書郎、馮翊太守、甚得時譽。及遇禍、莫不悼惜之。年三十餘。臨命作詩、文甚哀楚。

歐陽建、字は堅石、世々冀方の右族爲り。雅より理思有りて、才藻美贍、名を北州に擅にす。時人、之が爲に語りて曰く、「渤海に赫赫たり、歐陽堅石」と。公府に辟され、山陽の令・尚書郎・馮翊の太守を歴、甚だ時譽を得たり。禍ひに遇ふに及び、之を悼惜せざる莫し。年は三十餘。命に臨んで詩を作り、文は甚だ哀楚たり。

『晉書』には、これ以上の詳しい事を記さないが、『世說新語』文學篇には、

舊云、王丞相過江左、止道聲無哀樂、養生、言盡意三理而已。然宛轉關生、無所不入。舊云ふ、王丞相は江左に過りてより、止だ「聲無哀樂」・「養生」・「言盡意」の三理を道ふ而已。然れども宛轉關生して、入らざる所無し。

とあり、王丞相（王導）が江南に渡ってからは「聲無哀樂論」「養生論」「言盡意論」を語るだけであった、という記事を載せているが、ここにある「聲無哀樂論」「養生論」を書いたのは嵇康であり、「言盡意論」を著したのが、歐陽建なのであった。すなわち劉注に次のように云う。

歐陽堅石言盡意論畧曰、夫理得於心、非言不暢。物定於彼、非名不辨。名逐物而遷、言因理而變。不得相與爲一矣。苟無其二、言無不盡矣。

歐陽堅石の「言盡意論」に畧ぼ曰く、「夫れ理は心に得ても、言に非ざれば暢びず。物

彼に定まりても、名に非ざれば辨たれず。名は物を逐ひて遷り、言は理に因りて変はる。相ひ與に二と為すを得ず。苟も其れ二無ければ、言は盡くさざる無からんや」。

つまり、歐陽建はなかなかの理論家であったようであるが、この建が、張華・西潘・二陸らを比較して、

歐陽生曰、張茂先・潘正叔・潘安仁、文遠過二陸。或曰張潘與二陸爲比、不徒步驟之間也。歐陽曰、二陸文詞源流、不出俗檢。

歐陽生曰く、「張茂先・潘正叔・潘安仁は、文は遠かに二陸に過る」と。或ひと曰く、「張・潘は二陸と比を爲すに、徒に步驟の間のみにあらざるなり」と。歐陽曰く、「二陸の文詞の源流は、俗檢を出でず」と。

ここで興味深いのは、歐陽建が、潘岳の方が陸機よりもすぐれている点である。建自身は石崇の甥ということもあり、崇と仲の好い潘岳の肩を持ったとも考えられる。

③ 潘岳(安仁)

潘岳(?)三〇〇)の傳は、『晉書』卷五五にあり、次のように書き出されている。

潘岳、字安仁、滎陽中牟人也。祖瑾、安平太守。父范、琅邪内史。岳少以才穎見稱、鄉邑號爲奇童、謂終賈之儔也。早辟司空太尉府、舉秀才。

潘岳、字は安仁、滎陽・中牟の人なり。祖は瑾、安平の太守たり。父は范、琅邪の内史たり。岳は少くして才穎を以て稱せられ、郷邑 號して奇童と爲し、終・賈の儔と謂ふなり。早に司空太尉の府に辟され、秀才に擧げらる。

若いころからその才を現わした潘岳は、「奇童」と稱され、「(前漢の)終軍・賈誼のたぐいである」と評されたという。潘岳と賈誼との関わりについて、『晉書』潘岳傳は次のように傳えている。

岳性輕躁、趨世利。與石崇等諂事賈謐、每候其出、與崇輒望塵而拜。構愍懷之文、岳之辭也。謐二十四友、岳爲其首。謐晉書限斷、亦岳之辭也。

岳は性 輕躁にして、世利に趨る。石崇等と與に賈謐に諂事し、毎に其の出づるを候ひ、崇と與に輒ち塵を望んで拜す。愍懷を構ふるの文は、岳の辭なり。謐の二十四友、岳は其の首爲り。謐の『晉書』限斷も、亦た岳の辭なり。

ここに「謐二十四友、岳爲其首」というように、潘岳は二十四友のリーダー的存在であつ

たようである。

また、岳は美貌の持ち主でもあり、次のようなエピソードが伝えられている。

少時常挾弹出洛陽道、婦人遇之者、皆連手縈繞、投之以果、遂滿車而歸。

少き時、常て弾を挾んで洛陽の道に出づるに、婦人の之に遇ふ者、皆な手を連ねて縈繞し、之に投ずるに果を以てし、遂に車に満ちて歸る。

このようなことも、謚の二十四友の中心的な存在として、意を得ていた頃のことなのであろうか。

④ 摯 虞（仲治）

摯虞（？～三一）の傳は、『晉書』卷五一にある。

摯虞、字仲治、京兆長安人也。父模、魏太僕卿。虞少事皇甫謐、才學通博、著述不倦。郡檄主簿。

摯虞、字は仲治、京兆・長安の人なり。父は模、魏の太僕卿たり。虞は少くして皇甫謐に事へ、才學 通博、著述して倦まず。郡 主簿に檄ふ。

ここに「著述不倦」とあり、虞が著述に励んでいたことを云うが、摯虞が文筆に長じていたということは、『世說新語』文學篇にある次の話によっても分かる。

太叔廣甚辯給、而摯仲治長於翰墨、俱爲列卿。每至公坐廣談、仲治不能對。退著筆難廣、廣又不能答。

太叔廣は甚だ辯給にして、摯仲治は翰墨に長じ、俱に列卿爲り。公坐に至る毎に、廣談ずれば、仲治は對ふる能はず。退きて筆を著けて廣を難ずれば、廣は又た答ふ能はず。

口がたつ太叔廣（字は季思）に對し、摯虞（字は仲治）に作る（は筆）が達者で、公の場で廣が論ずれば仲治は應對することができず、退出して仲治が筆をとつて廣を論難すると、廣は答えられなかった、というのである。

また摯虞は文學論にも長けていたらしく、文章理論に関する專著があったということが、『晉書』本傳には、次のように記されている。

虞撰文章志四卷、注解三輔決錄。又撰古文章、類聚區分爲三十卷、名曰流別論、各爲之論。辭理愜當、爲世所重。

虞は「文章志」四卷を撰し、「三輔決錄」を注解す。又た古文章を撰して、類聚 區分

して三十卷と爲し、名づけて「流別論」と曰ひ、各々之が論を爲る。辭理愜當にして、世の重んずる所と爲る。

今、その所謂「文章流別志論」は散逸してしまっているが、たとえば劉勰の『文心雕龍』には、

摯虞述懷、必循規以溫雅。其品藻流別、有条理焉。

摯虞は懐かひを述ぶるには、必ず規したかに循したがひて以て溫雅なり。其の「流別」を品藻するは、条理有り。(才略篇)

流別精而少巧、翰林淺而寡要。

「流別」は精なれども巧たくましくなく、「翰林」は淺にして要やく寡くなし。(序志篇)

などとあり、また鍾嶸の『詩品』の序には、

陸機文賦、通而無貶、李充翰林、疏而不切。王微鴻寶、密而無裁、顏延論文、精而難曉。摯虞文志、詳而博贖、顏曰知言。觀斯數家、皆就談文體、不顯優劣。

陸機の「文の賦」は、通にして貶と無く、李充の「翰林」は、疏しにして切きならず。王微の「鴻寶」は、密ひにして裁さい無く、顏延の「論文」は、精せいにして曉きり難がし。摯虞の「文志」は、詳しょうにして博贖はく、頗おる知言ちごんと曰いふ。斯このの數家すうかを觀かんるに、皆みなな就ききて文體ぶんたいを談だんじ、優劣ゆうりつを顯けんはさず。

とあって、陸機の「文賦」、李充の「翰林論」などととも、後世の文學論にも影響を及ぼしていたことが分かる。

⑤ 左 思 (太沖)

左思の傳は、『晉書』卷九二・文苑傳のなかに立てられている。

左思、字太沖、齊國臨淄人也。其先齊之公族有左右公子、因爲氏焉。家世儒學。

左思、字は太沖、齊國・臨淄の人なり。其の先は齊の公族にして左右の公子有り、因よりて氏と爲す。家は世々儒學せり。

「家世儒學」という記述から見て、左思にとって儒學は言わば家學とでもいえるものであった。これは陸機がやはり儒學に基づき禮教を身に付けていたことと共に、賈誼集團の中にあつては注目すべき事柄である。

左思は容貌が悪く、うまく話ができなかったので、あまり交遊を好まず、家にじっとしていたらしい。すなわち『晉書』には、次のようにある。

貌寝、口訥、而辭藻壯麗。不好交遊、惟以閑居爲事。

貌は寝にして、口は訥なるも、辭藻は壯麗なり。交遊を好まず、惟だ閑居を以て事と爲す。

このような左思をして、その名聲を高からしめたのが「三都賦」であった。「三都賦」が完成するや、皇甫謐はそのすばらしさを讃えて序文を作り、さらに張載は「魏都賦」に、また劉逵は「呉都賦」「蜀都賦」に注を加えたと、『晉書』左思傳は傳えているが、もともと『世説新語』文學篇注に引く『左思別傳』には、

皇甫謐西州高士、摯仲治宿儒知名、非思倫疋。劉淵林、衛伯輿並蚤終。皆不爲思賦序注也。凡諸注解、皆思自爲。欲重其名、故假時人名姓也。

皇甫謐は西州の高士、摯仲治は宿儒にして名を知られ、思の倫疋に非ず。劉淵林・衛伯輿は並びに蚤に終ふ。皆な思の賦の爲に序注せざるなり。凡そ諸々の注解は、皆な思自ら爲る。其の名を重んぜしめんと欲して、故に時人の名姓を假るなり。

とあって、左思が、己の名聲を高くせんがために、自分で序や注を書いたと言う。

さて、張華は左思の「三都賦」を見て、班固・張衡の流れを嗣ぐものであると称賛し、爲に洛陽の紙価を高めたと、『晉書』左思傳には、次のように記している。

司空張華見而歎曰、班張之流也。使讀之者盡而有餘、久而更新。於是豪貴之家、競相傳寫、洛陽爲之紙貴。

司空張華は見て歎じて曰く、「班・張の流なり。之を読む者をして盡きて餘り有り、久しくして更に新たならしむ」と。是に於て豪貴の家は、競ひて相ひ傳へ寫し、洛陽之が爲に紙貴し。

『晉書』には、これに續けて次のようにある。

初陸機入洛、欲爲此賦。聞思作之、撫掌而笑、與弟雲書曰、此間有傖父、欲作三都賦。須其成、當以覆酒甕耳。及思賦出、機絕歎伏、以爲不能加也、遂輟筆焉。

初め陸機は洛に入り、此の賦を爲らんと欲す。思の之を作るを聞き、掌を撫ちて笑ひ、弟の雲に書を與へて曰く、「此の間に傖父有りて、『三都の賦』を作らんと欲す。其の成るを須ちて、當に以て酒甕を覆ふべき耳」と。思の賦の出づるに及び、機は絶だ歎伏

し、以て加ふること能はずと爲して、遂に筆を輟く。

左思の「三都賦」が出来上がったら、それで酒壺を覆う蓋にしよう、と弟の雲に手紙で語っていた陸機も、その素晴らしい出来栄に筆を置いてしまったという。やる氣のなくなつた陸機に對し、陸雲は次のような書翰を送っている。

又思三都世人已作是語。觸類長之、能事可見。

又た思ふに「三都」は世人已に是の語を作る。類に觸れて之を長ずれば、能事見はる可し。
(「與平原書」其十九)

すなわち陸雲は、「三都賦」は、世人(即ち左思)が已に作つてはいるが、兄が作れば、きつと左思のもの以上の作品ができるであろう、というのであつて、陸雲が兄陸機になんとかして「三都賦」を作らせようとしていたことが分かる。この手紙の内容も、あるいは此の頃のものであらうか。

⑥ 牽秀(成叔)

牽秀の傳は『晉書』卷六〇にある。

牽秀、字成叔、武昌觀津人也。祖招、魏雁門太守。秀博辯有文才、性豪俠、弱冠得美名。爲太保衛瓘、尚書崔洪所知。太康中、調補新安令、累遷司空從事中郎。與帝舅王愷素相輕侮。愷諷司隸荀愷、奏秀夜在道中載高平國守士田興妻。秀即表訴被誣、論愷穢行、文辭亢厲、以譏抵外戚。于時朝臣雖多證明其行、而秀盛名美譽、由是而損、遂坐免官。後司空張華請爲長史。

牽秀、字は成叔、武昌・觀津の人なり。祖は招、魏の雁門太守たり。秀は博辯にして文才有り、性は豪俠、弱冠にして美名を得たり。太保衛瓘・尚書崔洪の知る所と爲る。太康中、新安の令に調補せられ、司空從事中郎に累遷す。帝の舅の王愷と素より相ひ輕侮す。愷は司隸荀愷に諷して、秀は夜道中に在りて高平國の守士田興の妻を載すと奏せしむ。秀は即ち誣せらるると表訴し、愷の穢行を論ずるに、文辭亢厲にして、以て外戚を譏抵す。時に于て朝臣多く其の行ひを證明すと雖も、秀の盛名美譽、是に由りて損なはれ、遂に坐して官を免ぜらる。後、司空張華請ひて長史と爲す。

すなわち、牽秀は王愷と仲が悪かった。『世說新語』汰侈篇に、

石崇與王愷爭豪、竝窮綺麗、以飾輿服。武帝、愷之甥也。

石崇は王愷と豪を争ひ、並びに綺麗を窮め、以て輿服を飾る。武帝は、愷の甥なり。

とあり、王愷は、石崇と豪奢を競ったことで『世説新語』汰侈篇には度々その名を現している人物であるが、彼はまた武帝・司馬炎の舅でもあった。その王愷が、牽秀は夜、道中にあつて高平國の守備兵田興の妻を同じ車に乗せたと、司隸の荀愷にはのめかして奏上させたのである。牽秀は、即座に陥れられたことを上表し、朝臣の多くもその無實を證明してくれたけれども、秀の名譽はこれによって失われてしまった。そうしてその牽秀を再び任用したのが、賈謐とは政治的に對立關係にあつた張華なのであつた。

さらに『晉書』には、河橋の役に敗れた陸機を、牽秀が成都王穎に諂つたことを、次のように記している。

機戰敗、秀證成其罪。又詔事黃門孟玖。故見親於穎。

機の戰敗するや、秀は其の罪を證成す。又た黃門の孟玖に詔事す。故に穎に親しまる。

かねてより機の悪言を聞かされていた穎は、ひどく怒り、ついに牽秀に命じて機を捕えさせた。『世説新語』尤悔篇注引く『機別傳』には、

及機於七里澗大敗、玖誣機謀反所致。穎乃使牽秀斬機。

機の七里澗に大敗するに及び、玖は機の謀反の致す所と誣る。穎は乃ち牽秀をして機を斬らむ。

とある。つまりは、やがては己れの命を奪うことになる人物と、陸機は賈謐のサロンで席をともにしていたわけであるが、この事が賈謐集團の性格をよく象徴しているといふことができる。

⑦ 劉興（慶孫）

劉興は琨の兄で、その傳は『晉書』卷六二・劉琨傳に附されている。

興、字慶孫。儁朗有才局、與琨並尚書郭奕之甥、名著當時。京都爲之語曰、洛中奕奕慶孫・越石。

興、字は慶孫。儁朗にして才局有り、琨と並びに尚書郭奕の甥たりて、名は當時に著はる。京都之が爲に語りて曰く、「洛中 奕奕たり、慶孫・越石」。

弟の琨と俱に、その才能と、更に尚書の郭奕の甥ということもあり、洛陽でその名を馳せていたようである。『晉書』卷四五・郭奕傳には、

太康中、徵爲尚書。奕有重名、當世朝臣皆出其下。……太康八年、卒。
太康中、徵されて尚書と爲る。奕は重名ありて、當世の朝臣は皆な其の下より出づ。…
…太康八年、卒す。

とあり、郭奕は恐らく太康の初め頃に尚書となり、太康八年（二八七）に卒するまで、その職にあつて権勢を誇っていたものと思われ、劉輿・劉琨兄弟が華々しくしていたのも、この頃のことと考えられる。

⑧ 劉琨（越石）

『晉書』卷六二にある劉琨傳の書き出しは、次のようである。

劉琨、字越石、中山魏昌人、漢中山靖王勝之後也。祖邁、有經國之才、爲相國參軍、散騎常侍。父蕃、清高冲儉、位至光祿大夫。琨少得儁朗之目、與范陽祖納俱以雄豪著名。年二六、爲司隸從事。

劉琨、字は越石は、中山・魏昌の人、漢の中山の靖王勝の後なり。祖は邁、經國の才有りて、相國參軍・散騎常侍と爲る。父は蕃、清高冲儉にして、位は光祿大夫に至る。琨は少くして儁朗の目を得、范陽の祖納と俱に雄豪を以て名を著す。年二六、司隸從事と爲る。

劉琨（二七〇～三一七）と賈謐の「二十四友」との關わりについては、同じく『晉書』本傳に、次のごとく記されている。

祕書監賈謐參管朝政、京師人士無不傾心。石崇、歐陽建、陸機、陸雲之徒、竝以文才降節事謐、琨兄弟亦在其間、號曰二十四友。

祕書監賈謐 朝政に參管するや、京師の人士 心を傾けざるは無し。石崇・歐陽建・陸機・陸雲の徒は、竝びに文才を以て節を降して謐に事へ、琨の兄弟も亦た其の間に在りて、號して「二十四友」と曰ふ。

『晉書』のなかで、「二十四友」に言及しているのは、賈謐傳の他には、石崇傳・潘岳傳と此の劉琨傳だけであり、このことから考えてみるに、劉琨も二十四友の中心メンバーの一人であったということができよう。

以上、見てきたように、賈謐の「二十四友」のうち、『晉書』に傳を載せる人物は、賈

謚・陸機・陸雲兄弟のほかには、石崇・歐陽建・潘岳・摯虞・左思・牽秀・劉興・劉琨の八人だけであるが、彼らの傳を見るかぎり、全ての人士に共通する要素は見當らない。

賈謚の文學集團の性格については、『太平御覽』卷四〇七に引く『晉中興書』にある次の記述がそれをよく物語っている。

年皆長謚、竝以文才、降節事謚、共相朋昵、號曰二十四友。

年は皆な謚より長じたるも、竝びに文才を以て、節を降して謚に事へ、共に相ひ朋昵し、號して「二十四友」と曰ふ。

また、『晉書』本傳には、

負其驕寵、奢侈踰度、室宇崇僭、器服珍麗。歌僮舞女、選極一時。開閣延賓、海內輻湊、貴游豪戚、及浮競之徒、莫不盡禮事之。

其の驕寵を負みて、奢侈は度を踰え、室宇は崇僭にして、器服は珍麗なり。歌僮舞女は、選は一時を極む。閣を開きて賓を延くや、海内輻湊し、貴游豪戚より、浮競の徒に及ぶまで、禮を盡くして之に事へざる莫し。

と、惠帝賈后の甥として絶大な権勢を有していた、當時の様子が記されている。要するに賈謚のもとに集まった文人は、謚の権勢をはばかり、「或いは文章を著はして謚を稱美」して、あわよくば政治の中樞に参畫しようという意圖を、すくなく持っていたものと思われる。

潘岳の従子の潘尼は、『晉書』本傳に、

尼少有清才、與岳俱以文章見知。性靜退不競、唯以勤學著述爲事。

尼は少くして清才有り、岳と俱に文章を以て知らる。性は靜退にて競はず、唯だ勤學著述を以て事と爲す。

とあるように、表立って行動する従父の潘岳とはその性格を異にして、おとなしく名利を慕わない性格であったようであるが、彼などは、賈謚の文人集團には加わっていない。

賈謚の「二十四友」はこのように、非常に政治的色彩の強いものであった。以下に述べた「晉書限斷」をめぐる話は、そのことを如實に物語っている。

當時、朝廷では『晉書』の起年をいつにするかという「晉書限斷」についての議論がなされていた。正史の編纂にとって限斷、すなわち何時のことから書き始めるかということ

は、重要な問題であった。朝廷では『晉書』の限断に關して、これまでもたびたび議論が繰り返されていたが、惠帝の即位後、再びそのことが議論された。この時、秘書監の職にあり、國史の編纂を掌っていたのが賈謐であった。『晉書』賈謐傳には、そのときのこと
が次のように記されている。

惠帝立、更使議之。謐上議、請從泰始爲斷。於是事下三府。司徒王戎、司空張華、領軍將軍王衍、侍中樂廣、黃門侍郎嵇紹、國子博士謝衡、皆從謐。騎都尉濟北侯荀勗、侍中荀藩、黃門侍郎華混、以爲宜用正始開元。博士荀熙、刁協、謂宜嘉平起年。謐重執奏華之議、事遂施行。

惠帝立つや、更めて之を議せしむ。謐は議を上り、泰始より断を爲さんことを請ふ。是に於て事は三府に下さる。司徒王戎・司空張華・領軍將軍王衍・侍中樂廣・黃門侍郎嵇紹・國子博士謝衡は、皆な謐の議に従ふ。騎都尉濟北侯荀勗・侍中荀藩・黃門侍郎華混は以爲へらく宜しく正始を用て元を開くべしと。博士荀熙・刁協は、宜しく嘉平もて起年とすべしと謂ふ。謐は重ねて戎・華の議を執奏し、事は遂に施行せらる。

此の時、二十四友の中心であった潘岳が、「晉書限断の議」を作ったことが、『晉書』潘岳傳に記されている。

謐二十四友、岳爲其首。謐晉書限断、亦岳之辭也。

謐の二十四友、岳は其の首たり。謐の「晉書限断」も、亦た岳の辭なり。

これより前、陸機の方も、秘書監虞潛の著作郎として、「晉書限断の議」を作っていたやうで、『北堂書鈔』卷五七に引く王隱『晉書』には、次のようにある。

陸機字士衡、以文學、爲秘書監虞潛所請、爲著作郎、議晉書限断。

陸機、字は士衡は、文學を以て、秘書監虞潛の請ふ所と爲り、著作郎と爲りて、『晉書』の限断を議す。

いま、『初學記』卷二二に、以下のごとく陸機の「晉書限断の議」の断片を見ることはできぬが、この中には『晉書』の起年については觸れられていない。

三祖實終爲臣、故書爲臣之事、不可不如傳、此實錄之謂也。而名同帝王、故自帝王之籍、不可不稱紀、則追王之義。

三祖は實に終に臣たれば、故より臣たるの事を書し、傳の如くせざる可からず、此れ實錄の謂なり。而も名は帝王に同じければ、故より自ら帝王の籍あり、以て紀と稱せざる

可からず、則ち王の義を追へり。

此の陸機の作っていた「晉書限斷の議」に對して、賈謐は新しく潘岳に「晉書限斷の議」を作らせたわけであり、このような政治に關わりのある文章の制作も、或いは賈謐の坐で話題になつていたのかも知れない。

此の陸機の「晉書限斷」について、賈謐はさらに束皙を著作左郎として、それを非難させたことが、『北堂書鈔』卷五七に引く干寶『晉紀』に、

秘書監賈謐、請束皙爲著作左郎、難陸機晉書限斷。

秘書監賈謐は、束皙に請ひて著作左郎と爲し、陸機の「晉書限斷」を難ぜしむ。

のように記されているが、このようなことは、賈謐や潘岳ら北人の、南方出身者である陸機に對する意識の現れであり、南人に對する北人の對立意識といふことができよう。

陸機にとっては、賈謐のサロンは決して居心地のよいものではなかつたであらうが、南方出身者が北方社會にあつて生きてゆくためには、仕方のないことであつた。『晉書』陸機傳では、機の文學的才能を高く評價する一方で、

然好游權門、與賈謐親善、以進趣獲譏。

然れども好んで權門に遊び、賈謐と親善し、進趣を以て譏りを獲たり。

と、賈謐らの權勢におもねつたことで非難されるけれども、當時の社會狀況、ことに南人の置かれた立場を考えると、陸機のつた行動は決してみずからが望んだものというのではなく、そうせざるを得なかつたといふことが多くあつたように感じられる。

賈謐のサロンに於いては、どのような文學活動が行なわれていたのか、といふことについては、それを示す資料が殆ど無い。ただ、謐の坐に於いてのことであろうと想像される幾つかのことがあるにはある。その一つが次に擧げる『漢書』をめぐる潘岳と陸機との詩である。すなわち、潘岳には「賈謐の坐に於て漢書を講ずる詩」が、陸機には「漢書を講ずる詩」があり、この二首の詩が賈謐の坐における同作の詩と考えられるのである。

潘岳の詩は『初學記』卷二一に引かれている。

於賈謐坐講漢書詩（賈謐の坐に於て漢書を講ずる詩）

理道在儒 道を理むるは儒に在り

弘儒由人 儒を弘むるは人に由る

光矣魯侯 光かしい矣 魯侯

文質彬彬」 文質 彬彬かんべんたり
 筆下搗藻 筆下に藻を搗つべ
 席上敷珍 席上に珍を敷いく
 前疑惟辨 前疑を惟ただれ辨わじ
 舊史惟新」 舊史を惟ただれ新たにす
 將分爾疑 將まさに爾なんぢの疑ぎひを分わかかたんとし
 既辨爾疑 既に爾の疑ぎひを辨わず
 延我僚友 我が僚友を延ひき
 講此微辭 此の微辭を講ず

詩の末聯に「延我僚友、講此微辭」とあるから、二十四友のメンバーが集まっていたのであろう。

次に陸機の詩を見てみよう。此の詩は『陸士衡文集』（四部叢刊）には収められておらず、『北堂書鈔』卷九八に引かれている。

講漢書詩（漢書を講ずる詩）
 税駕金華 駕を金華に税とき
 講學秘館 學を秘館に講ず
 有集惟髦 集あふる有るは惟ただれ髦
 芳風雅宴 雅宴に芳風あり

第三句の「髦」とは、俊士のこと、賈誼の坐に集まった俊逸の士をいう。要するに、賈誼の坐において『漢書』が講義され、その後でその坐にいた人達が、それぞれの感想を詩に詠いこんだのであろう。

ところで、『晉書』卷九二・左思傳には、

秘書監賈誼請講漢書。

秘書監賈誼、『漢書』を講ぜんことを請ふ。

と、賈誼が左思に『漢書』の講義を依頼したことが記されている。或いは賈誼の招請によつて、やはり二十四友のメンバーであった左思が『漢書』を講義し、そのあとで作られた詩が、先の陸機と潘岳の詩なのかも知れない。

さらに陸機には「詠老」「秋詠」（いずれも張溥『百三家集』所収）という詠物詩が残されており、やはり賈誼の坐において、そこに集まった人士が、「老」「秋」といった同じ題材を用いて作詩したのであろうか。

軟らかき顔は 紅の葉を収め
玄鬢吐素華 素き華を吐く
冉冉逝將老 冉冉として 逝きて將に老いんとす
咄咄奈老何 咄咄 老いを奈何んせん

秋詠

蕭蕭素秋節 蕭蕭たり 素秋の節
湛湛濃露凝 湛湛として 濃き露は凝る
太陽夙夜降 太陽は 夙に夜に降り
少陰忽已升 少陰は 忽ち已に升る

森野繁夫博士は、『六朝詩の研究』（一九七六年・第一學習社）のなかで、此の點に關して次のように言われている。

或いは、「老」「秋」などを共通の題材として、賈誼の坐において人人が同作したのかもしれないが、他の人人の現存する作品の中には、それを證明するようなものはない。しかしながら、「並びに文才を以て、節を降して諡に事え、共に相い朋呢す」（『晉中興書』）という記事から推測される此の文人集團の性格からみて、時、場所を同じくし、題材を共通にし、遊びとして、社交として同作するようなことがあったとしても、不思議ではないであろう。ただしそれは、あくまでも賈誼の權勢ゆえのものであるから、他の場所、すなわち極端に言うならば獨りである時、また同好の士との文会などにおいては、個人の真情の發露した作品は生まれる。「二十四友」の中、陸機、陸雲、潘岳、左思らの作品を見れば、そのことは自づから明らかである。

森野博士の言われるような、このような文會がたびたび行なわれていたものと推測されるが、政治的な立場も、また文學上の考えも異なる人たちの集まりであったから、その場はいつも和やかであったというわけでもなさそうである。恐らく、このような席でのことと思われるが、『裴子語林』には、次のような話が傳えられている。

士衡在坐。安仁來、陸便起去。潘曰、清風至、塵飛揚。陸應聲答曰、衆鳥集、鳳皇翔。士衡 坐に在り。安仁 來るや、陸は便ち起ちて去る。潘曰く、「清風至りて、塵飛揚す」と。陸は聲に應じて答へて曰く、「衆鳥集ひて、鳳皇翔る」と。

北方文人の代表としての潘岳と、南方出身の文人の代表である陸機との、對立的な關係を端的にあらわしている話といえよう。そうしてこのような陸機と潘岳の對立は、次に取り上げる詩（いずれも『文選』卷二四所収）のなかにおいても表れている。

賈誼は散騎常侍の任にあって東宮のことをも掌っていたが、そのとき（元康元年・二一九一）、陸機も愍懷太子の洗馬として太子府に仕えることとなった。陸機が太子洗馬となつたのも、あるいは誼の推擧によるものであったかもしれない。やがて元康四年（二九四）陸機は呉王晏の郎中令となつて赴任したが、同六年、尚書中兵郎となつて再び入朝した。そのころ賈誼が潘岳に代作させて陸機に贈つたのが、次に挙げる詩である。

爲賈誼作贈陸機（賈誼の爲に作りて陸機に贈る）

「其の一」

肇自初創 肇め初創せし自り
 二儀烟燼 二儀 烟燼たり
 粵有生民 粵に生民有りて
 伏羲始君 伏羲 始めて君たり
 結繩闡化 繩を結びて化を闡き
 八象成文 八象 文を成す
 芒芒九有 芒芒たる九有
 區域以分 區域 以て分かたる

「其の二」

神農更王 神農 更りて王たり
 軒轅承紀 軒轅 紀を承く
 畫野離壇 野を畫りて壇を離ち
 爰封衆子 爰に衆ろの子を封ず
 夏殷既襲 夏殷 既に襲ぎ
 宗周繼祀 宗周 祀を繼ぐ
 綿綿瓜瓞 綿綿たる瓜瓞のごとく
 六國互峙 六國 互ひに峙つ

「其の三」

強秦兼并 強秦は兼ね并せて
 吞滅四隅 四隅を吞滅す
 子嬰面虜 子嬰は面虜し
 漢祖膺圖 漢祖は圖に膺る
 靈獻微弱 靈と獻とは微弱にして
 在湮則渝 湮に在りて則ち渝る
 三雄鼎足 三雄は鼎の足のごとく
 孫啓南吳 孫は南吳を啓く

〔其の四〕

南呉伊何 南呉は伊れ何ぞ
 僭號稱王 僭號して王と稱す
 大晉統天 大晉 天を統べ
 仁風遐揚 仁風 遐く揚がる
 偽孫銜璧 偽孫 璧を銜み
 奉土歸壙 土を奉げて壙を歸す
 婉婉長離 婉婉たる長離
 凌江而翔 江を凌りて翔る

〔其の五〕

長離云誰 長離 云れ誰ぞ
 咨爾陸生 咨 爾 陸生なり
 鶴鳴九臯 鶴 九臯に鳴くも
 猶載厥聲 猶ほ厥の聲を載す
 況乃海隅 況や乃ち海隅にありて
 播名上京 名を上京に播けるをや
 爰應於招 爰に於の招きに應へ
 撫翼宰庭 翼を宰の庭に撫ふ

〔其の六〕

儲皇之選 儲皇の選には
 實簡惟良 實に惟良を簡ぶ
 英英朱鸞 英英たる朱鸞
 來自南岡 來るや南岡自りす
 曜藻崇正 藻を崇正に曜かし
 玄冕丹裳 玄冕 丹裳す
 如彼蘭蕙 彼の蘭と蕙の如く
 載採其芳 載ち其の芳を採る

〔其の七〕

藩岳作鎮 藩岳は鎮と作りて
 輔我京室 我が京室を輔く
 旋反桑梓 桑梓に旋り反りて
 帝弟作弼 帝の弟に弼と作る
 或云國宦 或いは云ふ 國の宦は
 清塗攸失 清塗の失つる攸と

吾子洗然
恬淡自逸

吾子は洗然たり
恬淡にして自ら逸んず

〔其の八〕

廊廟惟清
俊乂是延
擢應嘉舉
自國而遷
齊轡羣龍
光讚納言
優遊省闈
珥筆華軒

廊廟は惟れ清く
俊乂は是れ延む
擢でられて嘉舉に應じ
國自りして遷る
齊轡を羣龍に齊しくし
光いに納言を讚く
省闈に優遊し
筆を華軒に珥む

〔其の九〕

昔余與子
繾綣東朝
雖禮以賓
情同友僚
嬉娛絲竹
撫絲舞韶
脩日朗月
攜手逍遙

昔余と子と
東朝に繾綣たり
禮するに賓を以てすと雖も
情は友僚に同じ
絲竹を嬉び娛み
絲を撫ちて韶を舞ふ
脩き日と朗き月に
手を攜へて逍遙す

〔其の十〕

自我離羣
二周于今
雖簡其面
分著情深
子其超矣
實慰我心
發言爲詩
俟望好音

我羣を離れて自り
今に二周なり
其の面を簡かにすと雖も
分は情の深きに著す
子其れ超り
實に我が心を慰む
言に發して詩を爲り
好音を俟ち望む

〔其の十一〕

欲崇其高
必重其層
立德之柄
莫匪安恒

其の高きを崇くせんと欲すれば
必ず其の層を重む
徳を立つるの柄は
恒を安るに匪ざる莫し

在南稱甘 南に在りては甘と稱するも

度北則橙 北に度れば則ち橙

崇子鋒穎 子の鋒穎を崇くして

不頽不崩 頽かず崩れざれ

全十一章から成る此の詩は、晉が國を建てて呉が滅び、入洛した陸機と結んだ友情の深さをうたったもので、機の才能を讃えながら、それを励ますかたちで結んでいる。しかし、此の詩を、陸機と敵對していた潘岳が作ったということを見てみると、そこには岳の、陸機に對するあからさまな敵意を感じ取ることができる。その第三章で、秦・漢・三國と移ってゆき、孫權が南なる呉の國を建てたことをいい、續く第四章では、その呉の建國について、

南呉伊何 南呉は伊れ何ぞ

僭號稱王 僭號して王と稱す

と、表現している。呉の孫權は、黃龍元年（二二九）に帝位に即いたが、そのことを潘岳は「僭號」と言ったのであり、ここには明らかに陸機に對する侮蔑の意圖が込められているように思われる。またこれに續いて、晉が國を建てて呉が降伏したことを、

偽孫銜璧 偽孫 璧を銜み

奉土歸壇 土を奉げて壇を歸す

と言い、呉の孫皓を「偽孫」と表現している。

さらに第十章に、

發言爲詩 言を發して詩を爲り

俟望好言 好言を俟ち望む

と言つのは、潘岳の陸機に對する挑戦のようにも思われる。更に終わりの第十一章で、

在南稱甘 南に在りては甘と稱するも

度北則橙 北に度れば則ち橙

と言つのも、南のかた呉國にあつては評判が高かつたかもしれないが、北のかた洛陽ではそう簡単にはいかないもの、とでもいいたげに聞かせる。

かかる潘岳の詩に對して、陸機は「答賈長淵」詩をつくって答えている。此の詩には、次のような序が附されている。

余昔爲太子洗馬、賈長淵以散騎常侍、東宮積年。余出補吳王郎中令。元康六年、入為

尚書郎。魯公贈詩一篇。作此詩答之云爾。

余、昔 太子の洗馬爲りしとき、賈長淵は散騎常侍たるを以て、東宮に年を積めり。余出でて吳王の郎中令に補せらる。元康六年、入りて尚書郎と爲る。魯公 詩一篇を贈らる。此の詩を作りて之に答ふと爾云ふ。

此の詩も先の潘岳の詩と同じく、四言十一章から成っている。

答賈長淵（賈長淵に答ふ）

〔其の一〕

伊昔有皇 伊れ 昔 皇有りて
肇濟黎蒸 肇めて黎蒸を濟へり
先天創物 天に先んじて物を創め
景命是膺 景命 是れ膺れり
降及羣后 降りて羣后に及びりて
迭毀迭興 迭ひに毀れ 迭ひに興る
邈矣終古 邈かなる矣 終古
崇替有微 崇替 微有り

〔其の二〕

在漢之季 漢の季に在りて
皇綱幅裂 皇綱 幅裂す
大辰匿耀 大辰は耀りを匿し
金虎習質 金虎は質を習ぬ
雄臣馳騫 雄臣は馳せ騫り
義夫赴節 義夫は節に赴く
釋位揮戈 位を釋てて戈を揮ひ
言謀王室 言に王室を謀る

〔其の三〕

王室之亂 王室の亂るるや
靡邦不泯 邦として泯びざる靡し
如彼墜景 彼の墜ちんとする景の如きは
曾不可振 曾ち振るふ可からず
乃眷三哲 乃ち三哲を眷て
俾乂斯民 斯の民を乂め俾む
啓土綏難 土を啓き難を綏んじ
改物承天 物を改めて天に承けんとす

〔其の四〕

爰茲有魏
 即宮天邑
 吳實龍飛
 劉亦岳立
 干戈載揚
 俎豆載載
 民勞師興
 國玩凱入

爰に茲の有魏は
 宮に天邑に即けり
 吳は實に龍のごとく飛び
 劉も亦た岳のごとく立つ
 干戈 載ち揚がりて
 俎豆 載ち載めらる
 民は師の興るに勞れ
 國は凱の入るに玩ふ

〔其の五〕

天厭霸德
 黃祚告覺
 獄訟違魏
 謳歌適晉
 陳留歸蕃
 我皇登禪
 庸岷稽顙
 三江改獻

天は霸德を厭ひ
 黃祚に覺を告ぐ
 獄訟 魏を違り
 謳歌して 晉に適く
 陳留は蕃に歸り
 我が皇は禪に登る
 庸岷は顙を稽け
 三江も獻を改む

〔其の六〕

赫矣隆晉
 奄宅率土
 對揚天人
 有秩斯祜
 惟公太宰
 光翼二祖
 誕育洪胄
 纂戎于魯

赫なる矣 隆晉
 奄に率土に宅れり
 天人を對揚し
 秩なる斯の祜ひ有り
 惟れ公 太宰として
 光しくも二祖を翼く
 洪胄を誕に育て
 戎に魯に纂がしむ

〔其の七〕

東朝既建
 淑問綏綏
 我求明德
 濟同以和
 魯公戾止
 衮服委蛇

東朝 既に建ち
 淑問 綏綏たり
 我 明德を求め
 同を濟ふに和を以てせんと
 魯公 戾りて
 衮服 委蛇たり

思媚皇儲
高步承華

思に皇儲を媚し
承華に高く歩めり

〔其の八〕

昔我逮茲
時惟下僚
及子棲遲
同林異條
年殊志比
服外義稠
遊跨三春
情固二秋

昔我 茲に逮びて
時に惟れ 下僚たり
子と棲遲して
林を同じくするも條を異にせり
年は殊なれども志は比び
服は外へども義は稠し
遊びは三春を跨えて
情は二秋に固し

〔其の九〕

祇承皇命
出納無違
往踐藩朝
來歩紫微
升降祕閣
我服載暉
孰云匪懼
仰肅明威

祇みて皇の命を承けて
出し納ること違ふ無し
往きて藩朝を踐み
來りて紫微を歩む
祕閣に降り降り
我が服は載ち暉く
孰か懼れずと云はん
仰ぎて明威を肅む

〔其の十〕

分索則易
攜手實難
念昔良遊
茲焉永歎
公之云感
貽此音翰
蔚彼高藻
如玉之闌

分れ索るは則ち易く
手を攜ふるは實に難し
昔の良き遊びを念ひ
茲れ焉に永く歎く
公の感ずる云りて
此の音翰を貽る
蔚たり 彼の高藻
玉の闌の如し

〔其の十一〕

惟漢有木
曾不踰境
惟南有金
萬邦作詠

惟れ漢に木有り
曾て境を踰えしめず
惟れ南に金有り
萬邦も詠を作す

民之胥好 民の胥あひ好よする
猖狂厲聖 猖狂けいきやうも聖せいを厲かく
儀形在昔 在昔いにしへに儀形ぎけいし
予聞子命 予われ子しの命めいを聞かん

賈誼の代作をした潘岳の詩では、呉のことを「南呉伊何、僭號稱王」といい、孫皓を「偽孫」といつていたが、これに對して陸機は、漢が滅び、劉・孫・曹の三哲が天命によって萬民を治めることになったと、その第三章で次のようにうたう。

乃眷三哲 乃ち三哲を眷て
俾乂斯民 斯この民を乂よめ俾しむ

「三哲」とは、すなわち蜀の劉備・呉の孫權・魏の曹操を指すが、陸機はあくまでも呉を魏・蜀と對等に見ているのである。續く第四章でも、

爰茲有魏 爰こゝに茲こゝの有魏は
即宮天邑 宮みやに天邑てんいに即つけり
吳實龍飛 吳ごは實じつに龍りゆうのごとく飛とび
劉亦岳立 劉りうも亦また岳えつのごとく立たつ

と言っている。このように、潘岳が呉の正統性を認めようとしないうのに對して、陸機はそれに異を唱えているのである。更に潘岳が、「在南稱甘、度北則橙」と言ったことに對しては、

惟漢有木 惟ただれ漢かんに木き有り
曾不踰境 曾かつて境きやうを踰こえしめず
惟南有金 惟ただれ南なんに金きん有り
萬邦作詠 萬邦ばんぱうも詠うたを作なす

「あなたの言う通り、漢江の辺りの橋の木は、國境を越えて、北の地に運ぶべきではないが、ただし南の國にはあの南金があり、誰もが質の變わらぬことを讃え詠っている」と述べて、みずからをその「南金」に喩え、北に渡つても、そう簡單には質を變えることとはないと、反論している。

このように、賈誼の文學集團には、立場も違い、性格も異なる多くの文人が集まっていた。ここに集められた文人達は、賈誼の權勢を憚って、その集團に加わったわけであり、いわば非常に政治的な集團であつて、純粹に文學を愛好する仲間が集つたとい性格のものではない。しかし、そのような中にあつても、そこに集う文人達は、互いに競争意識を持

ち、その文學を闘わせるといったこともあったわけで、殊に、北方文壇の代表である潘岳と、南方文壇の代表である陸機とが、その集團に加わっていたということは、南北相互の文學に少なからぬ影響を及ぼしたに違いない。このような意味においては、此の賈誼の文學集團も、張華集團とともに晉代文學史上、注目に値するものの一つであるといえよう。

5 石崇集團—金谷の集い—

石崇（二四九—三〇〇）は、彼自身は賈誼の「二十四友」の中心メンバーであったが、また「金谷」における文會の主催者でもある。

石崇の傳は、『晉書』卷三三にある。

崇、字季倫、生於青州。故小名齊奴。少敏惠、勇而有謀。苞臨終、分財物與諸子、獨不及崇。其母以爲言。苞曰、此兒雖小、後自能得。

崇、字は季倫、青州に生まる。故に小名を齊奴といふ。少くして敏惠、勇にして謀有り。苞 終はるに臨み、財を分ちて諸子に與ふるに、獨り崇に及ばず。其の母 以て言を爲す。苞曰く、「此の兒 小なりと雖も、後に自ら能く得ん」と。

二十數歳の時に、修武の令となり、彼の地をよく治め、入朝して散騎郎となり、城陽の太子に遷った。呉を伐つのに功が有り、安陽郷侯に封ぜられた。しばらくして、黃門郎に拜せられ、散騎常侍・侍中を歴任した。

ところで石崇は、『世說新語』汰侈篇に多くのエピソードを傳えるように、その傲慢奢侈ぶりは有名であった。そのことに關して『晉書』本傳には、次のように記されている。

財産豐積、室宇宏麗。後房百數、皆曳紈繡、珥金翠。絲竹盡當時之選、庖膳窮水陸之珍。與貴戚王愷、羊琇之徒、以奢靡相尚。愷以粕澳釜、崇以蠟代薪。愷作紫絲布步障四十里、崇作錦步障五十里以敵之。崇塗屋以椒、愷用赤石脂。崇愷爭豪如此。

財産は豐積、室宇は宏麗。後房には百數ありて、皆な紈繡を曳き、金翠を珥とす。絲竹は當時の選を盡くし、庖膳は水陸の珍を窮む。貴戚の王愷・羊琇の徒と奢靡を以て相ひ尚ぶ。愷は粕を以て釜を澳め、崇は蠟を以て薪に代ふ。愷は紫絲布の步障四十里を作り、崇は錦の步障五十里を作りて以て之に敵す。崇は屋を塗るに椒を以てし、愷は赤石脂を用ふ。崇・愷の豪を争ふこと此の如し。

ここに王愷という人物が登場するが、彼は武帝（司馬炎）の舅にあたり、いつも石崇と奢侈を競っていた。次に擧げる話も、そのなかの一つである。

石崇與王愷爭豪、竝窮綺麗、以飾輿服。武帝、愷之甥也。每助愷。嘗以一珊瑚樹、高

二尺許賜愷。枝柯扶疎、世罕其比。愷以示崇。崇視訖、以鐵如意擊之、應手而碎。愷既惋惜、又以爲疾己之寶、聲色甚厲。崇曰、不足恨。今還卿。乃命左右悉取珊瑚樹。

有三尺四尺、條幹絕世、光采溢目者六七枚。如愷許比、甚衆。愷惘然自失。

石崇 王愷と豪を争ひ、並びに綺麗を窮め、以て輿服を飾る。武帝は、愷の甥なり。毎に愷を助く。嘗て一珊瑚樹の、高さ二尺許りを以て愷に賜ふ。枝柯扶疎にして、世に其の比ひ罕なり。愷は以て崇に示す。崇 視訖るや、鐵の如意を以て之を撃ち、手に應じて碎く。愷は既に惋惜し、又た以て己の寶を疾むと爲し、聲色甚だ厲し。崇曰く、「恨むに足らず。今、卿に還さん」と。乃ち左右に命じて悉く珊瑚樹を取らしむ。三尺四尺にして、條幹 絶世、光采 目に溢るる者六七枚有り。愷が許りの比ひの如きは、甚だ衆し。愷は惘然自失せり。

『世説新語』汰侈篇に傳える此の話が示すように、石崇の奢侈は、帝の外戚をも凌駕するほどのものであったらしい。

さて、この石崇は、金谷の地に別館を有していた。金谷は、河陽縣に在って、一に梓澤とも言われ、石崇は折りあるごとに此の別館を訪れ、同好の人士を集めては豪遊した。そのことを『晉書』石崇傳には、次のように記している。

崇有別館在河陽之金谷、一名梓澤。送者傾都、帳飲於此焉。

崇に別館の河陽の金谷に在る有り、一に梓澤と名づく。送る者 都を傾けて、此に帳飲す。

或いは洛陽を出て行く者を送別するために、或いは洛陽に歸還する者を迎えるために、このような酒宴が催されたのであろう。征西大將軍・祭酒であった王詡が長安に還るにあたり、やはり此の金谷で送別の宴が開かれた。その時の様子は、石崇の「金谷の詩の敘」に次のように記されている。

余以元康六年、従太僕卿、出爲使持節、監青徐諸軍事、征虜將軍。有別廬在河南縣界金谷澗中。或高或下、有清泉茂林。衆果竹柏、菓草之屬、莫不畢備。又有水碓、魚池土窟。其爲娛目歡心之物備矣。

時征西大將軍、祭酒王詡當還長安、余與衆賢共送往澗中。晝夜遊宴、屢遷其坐。或登高臨下、或列坐水濱。時琴瑟笙筑、合載車中、道路竝作、及住、令與鼓吹遞奏。遂各賦詩、以叙中懷。或不能者、罰酒三斗。感性命之不永、懼凋落之無期。故具列時人官號、姓名、年紀、又寫詩著後。後之好事者、其覽之哉。凡三十人、吳王師、議郎、關中侯、始平武功蘇紹、字世嗣、年五十、爲首。

余は元康六年を以て、太僕卿従り、出でて使持節・監青徐諸軍事・征虜將軍と爲る。別廬の、河南縣界の金谷澗の中に在る有り。或いは高く或いは下く、清泉 茂林有り。衆

果 竹柏、菓草の屬、畢く備はらざるは莫し。又た水碓、魚池、土窟有り。其の爲に目を娛しましめ心を歡ばしむる物 備はれり。

時に征西大將軍・祭酒の王詡の、長安に還るに當たり、余は衆賢と共に送りて澗中に往く。晝夜 遊宴し、屢々其の坐を遷す。或いは高きに登りて下に臨み、或いは水濱に列び坐す。時には琴瑟笙筑を、車中に合せ載せ、道路に並びに作き、住まるに及びては、鼓吹と遞ひに奏せしむ。遂に各々詩を賦して、以て中懷を叙ぶ。能はざる者或らば、罰酒は三斗なり。性命の永からざるに感じ、凋落の期め無きを懼る。故に具さに時人の官號、姓名、年紀を列ね、又た詩を寫して後に箸く。後の好事者、其れ之を覽ん哉。凡そ三十人、吳王の師・議郎・關中侯・始平武公の蘇紹、字は世嗣、年五十を、首めと爲す。

(『世說新語』品藻篇注引)

此の敘に據れば、送別の會に參集した人士は三十人。蘇紹(字は世嗣)が五十歳というこ
とで、筆頭にその官號・姓名・年齢が記されているが、このほかの參會者としては、だれ
がいたのであろうか。

まず此の會の主役である王詡であるが、その名を『晉書』に見ることはできない。ただ
『世說新語』容止篇に、

有人詣王太尉、遇安豐、大將軍、丞相在坐、往別屋見季胤、平子。還語人曰、今日之
行、觸目見琳琅珠玉。

人有りて王太尉に詣り、安豐・大將軍・丞相の坐に在るに遇ひ、別屋に往きて季胤・平
子を見る。還りて人に語りて曰く、「今日の行、觸目 琳琅珠玉を見たり」と。

とある。すなわち、或る人が王太尉(王衍)の許を訪れたところ、たまたま安豐(王戎)
・大將軍(王敦)・丞相(王導)がその場に居合わせており、また別棟に行ったところ、
そこで季胤(王詡)・平子(王澄)に會った、というのであるが、劉注に引く石崇の「金
谷詩序」に、

王詡、字は季胤、琅邪人。

王詡、字は季胤は、琅邪の人なり。

とあり、彼が琅邪の王氏であることが分かる。同じく劉注に引く『王氏譜』には、

詡、夷甫弟也。仕至脩武縣令。

詡は、夷甫の弟なり。仕へて脩武縣の令に至る。

とあり、王詡は王衍(字は夷甫)の弟であることが知られる。もっとも王詡は、此の會の
主役ではあっても、いつも石崇とともにこの金谷に集っていたのではあるまい。

『世說新語』品藻篇では、この時の集まりで、蘇紹が最もすぐれていたと、つぎのよう

に言う。

謝公云、金谷中、蘇紹最勝。紹是石崇姉夫、蘇則孫、愉子也。

謝公云ふ、「金谷中、蘇紹 最も勝る。紹は是れ石崇の姉の夫、蘇則の孫、愉の子なり」と。

つまり石崇の「金谷詩敍」の中で、此の會の時に五十歳であつて、その筆頭とされた蘇紹（字は世嗣）が最もすぐれていたと、謝公（謝安）が言つたというのであるが、崇の姉の夫という間柄から見ても、蘇紹はいつもこの金谷に集つていた人士の一人なのであろう。

また、賈誼の「二十四友」のメンバーであつた劉琨も、『晉書』本傳に、

時征虜將軍石崇、河南金谷澗中有別廬、冠絶時輩。引致賓客、日以賦詩。琨預其間、文詠頗爲當時所許。

時に征虜將軍石崇、河南の金谷澗の中に別廬有りて、時輩に冠絶たり。賓客を引致して、日々以て詩を賦す。琨は其の間に預り、文詠 頗る當時の許す所と爲る。

とあつて、石崇の金谷に集つた仲間の一人である。

また、劉琨の兄の興も、琨と共にこの金谷に集うメンバーの一人であつたようである。

『世説新語』仇隙篇には、次のようにある。

劉興兄弟、少時爲王愷所憎。嘗召二人宿、欲默除之、令作坑。坑畢、垂加害矣。石崇素與興瓊善。聞就愷宿、知嘗有變、便夜往詣愷、問二劉所在。愷卒迫不得諱。答云、在後齋中眠。石便徑入、自牽出、同車而去。語曰、少年何以輕就人宿。

劉興兄弟、少き時 王愷の憎む所と爲る。嘗て二人を召して宿らしめ、之を黙除せんと欲し、坑を作らしむ。坑畢り、害を加ふるに垂んとす。石崇は素より興・琨と善し。愷に就きて宿ると聞き、當に變あるべきを知り、便ち夜往きて愷に詣り、二劉の所在を問ふ。愷は卒迫して諱むを得ず。答へて云ふ、「後齋中に在りて眠る」と。石は便ち徑に入り、自ら牽き出だし、車を同じうして去る。語りて曰く、「少年 何を以て輕く人に就きて宿れる」と。

すなわち、劉興兄弟は若い頃、王愷に憎まれていた。（王愷は）ある時、二人を呼び寄せて家に泊まらせ、ひそかに殺そうと企んで、穴を掘らせた。穴が掘りおわたつたところで、いまにも殺害しようとしたところへ、二人が王愷の所へ泊りに行ったことを聞きつけた石崇が、必ずや何か起こるに違いないと察して、夜中に王愷の所へ出向き、すんでのところで命が助かった、というのである。この話からも分かるように、石崇は劉興・劉琨兄弟を大變に可愛がっており、したがつて金谷へ出向く時にも、いつも同行させていたように思われる。

さて、石崇の「金谷の詩の妓」によれば、王詡の送別の會では、集まった三十人の人士が、それぞれに詩を作り、作ることができなかった者は、罰酒を三斗飲まされたようであるが、現在、この宴會での作品として残っているのは、『文選』卷二十に収められている潘岳の「金谷の集ひにて作りし詩」があるにすぎない。

金谷集作詩（金谷の集ひにて作りし詩）

王生和鼎寶 王生は 鼎寶を和へ

石子鎮海沂 石子は 海沂を鎮めんとす

親友各言邁 親友 各々言に邁げば

中心悵有違 中心 悵として違ふ有り

何以叙離思 何を以てか 離思を叙べん

攜手游郊畿 手を攜へて 郊畿に遊ばんとす

朝發晉京陽 朝に 晉京の陽を發し

夕次金谷湄 夕に 金谷の湄に次る

迴谿繁曲阻 廻れる谿は 曲れる阻を繁り

峻阪路威夷 峻しき阪に 路は威夷し

緑池汎淡淡 緑の池は 汎れて淡淡たり

青柳何依依 青き柳は 何ぞ依依たる

濫泉龍鱗瀾 濫でる泉は 龍鱗の瀾

激波連珠揮 激しき波は 連珠のごとく揮る

前庭樹沙棠 前庭には 沙棠を樹る

後園植烏楸 後園には 烏楸を植う

靈囿繁若榴 靈囿には 若榴繁く

茂林列芳梨 茂林には 芳梨列なる

飲至臨華沼 飲の至りて 華沼に臨み

遷坐登隆坻 坐を遷して 隆き坻に登る

玄醴染朱顏 玄醴もて 朱顔を染め

但憩杯行遲 但だ杯の行ることの遲きを憩ぐ

揚桴撫靈鼓 桴を揚げて 靈鼓を撫てば

簫管清且悲 簫管は 清く且つ悲し

春榮誰不慕 春榮は 誰か慕はざる

歲寒良獨希 歲寒は 良に獨く希なり

投分寄石友 分を投じて 石友に寄す

白首同所歸 白首まで 歸する所を同じくせん

結びの二句については、『世説新語』仇隙篇に、次のような逸話が傳えられている。

孫秀既恨石崇不與綠珠、又憾潘岳昔遇之不以禮。後秀爲中書令、岳省内見之、因喚曰、孫令憶疇昔周旋不。秀曰、中心藏之、何日忘之。岳於是始知必不免。後收石崇、歐陽堅石、同日收岳。石先送市、亦不相知。潘後至。石謂潘曰、安仁、卿亦復爾邪。潘曰、可謂白首同所歸。潘金谷集詩云、投分寄石友、白首同所歸。乃成其讖。

孫秀は既に石崇が綠珠を與へざるを恨み、又た潘岳が昔之を遇するに禮を以てせざりしを憾む。後、秀の中書令と爲るや、岳は省内に之を見、因りて喚びて曰く、「孫令、疇昔の周旋を憶ふや不や」と。秀曰く、「中心 之を藏す、何の日か之を忘れん」と。岳は是に於て始めて必ず免れざらんことを知る。後、石崇と歐陽堅石とを収へ、日を同じくして岳を収ふ。石 先づ市に送られ、亦た相ひ知らず。潘は後れて至る。石、潘に謂ひて曰く、「安仁、卿も亦復た爾る邪」と。潘曰く、「白首まで 歸する所を同じうすと謂ふ可し」と。潘の金谷集の詩に云ふ、「分を投じて石友に寄す、白首まで 歸する所を同じくせん」と。乃ち其の讖を成せり。

互いに相手のことを知らないままに、刑場に送られてきた石崇と潘岳であったが、後れてやってきた潘岳に「安仁よ、君もこうなったのか」と言う石崇に對して、岳は「ともに白髮になるまで、ということだ」と應えたというのであるが、この岳の「白首同所歸」という言葉こそは、かつて金谷での集會で岳が作った詩の一句であったのである。

ところで、『文選』卷五九に収める沈約（休文）の「齊故安陸昭王碑文」の李善注に、潘岳の「金谷の會の詩」が引かれている。それは、

遂擁朱旄 遂に朱旄を擁し

作鎮淮泗 淮泗に鎮と作る

という二句のみであるが、ここで注意されるのは、此の詩が四言のものであるということである。後の東晉における王羲之主催の「蘭亭の會」の時にも、曲水流觴の宴が催され、此の文會に集う四十數名の文人は、おのおの詩をつくったわけであるが、この時にも、四言詩と五言詩とが作られている。おそらく「金谷の會」の時も、五言詩と四言詩とが作られたのであろう。

『文選』には、先に取り上げた潘岳の「金谷詩」を収録するのみであるが、さらに卷三十に収める謝靈運の「南樓中望所遲客詩」の李善注には、杜育の「金谷詩」が引かれている。すなわち、

既而慨爾 既にして爾を慨き

感此離析 此の離析に感ず

という二句であり、これも四言詩である。

詩の作者である杜育は、『晉書』には傳が立てられていない。ただ、『世說新語』品藻篇注に引く『晉諸公贊』には、次のようにその略傳が記されている。

杜育、字方叔、襄城鄧陵人。杜襲孫也。育幼便岐嶷、號神童。及長、美風姿、有才藻。時人號曰杜聖。累遷國子祭酒。洛陽將沒、爲賊所殺。

杜育、字は方叔、襄城・鄧陵の人。杜襲の孫なり。育は幼にして便ち岐嶷、神童と號せらる。長ずるに及び、美しき風姿にして、才藻有り。時人號して「杜聖」と曰ふ。國子祭酒に累遷す。洛陽 將に沒せんとするや、賊の殺す所と爲る。

彼はまた賈謐の「二十四友」のメンバーでもあった。さらに『晉書』劉琨傳には、次のような記述がある。

及惠帝幸長安、東海王越謀迎大駕、以琨父蕃爲淮北護軍、豫州刺史。劉喬攻范陽王琚。琨於許昌也。琨與汝南太守杜育等、率兵救之。

惠帝の長安に幸するに及び、東海王越 大駕を迎へんことを謀り、琨の父蕃を以て淮北護軍・豫州刺史と爲す。劉喬 范陽王琚を許昌に攻むるなり。琨は汝南の太守杜育等と與に、兵を率ゐて之を救はんとす。

これは、『晉書』惠帝（司馬衷）紀に、

（永興二年）九月庚子、豫州刺史劉喬攻范陽王琚於許昌、敗之。

九月庚子、豫州刺史劉喬 范陽王琚を許昌に攻め、之を敗る。

とあるから、永興二年（三〇五）のことであり、「金谷の會」が開かれた元康六年（二九六）からは九年後のことであるが、思うに劉琨と杜育とは、賈謐の二十四友としてそのサロンで面識があり、さらには石崇の「金谷の會」にも加わり、その後、十年近くに亘って親交があったのであろう。このようなことは、ある意味においては、當時の文學集團の性格をよく表しているとも言える。つまり、必ずしも一人の文人が一つの文學集團にのみ屬していたというわけではなく、氣心の知れた者どうしは、また獨自に文會を形成することもあったわけで、いふなれば、その權勢のみを頼んで名だたる文人を集めていた賈謐の坐で、知り合つて打ち解けた者は、それぞれに同好の士が集まつて文會を持っていたのであろう。石崇の「金谷」での文會は、まさしくそういった性格のものであったのではなからうか。

陸雲は、もとより兄の陸機を中心とした南人集團の一員であつて、その中心的な役割を果たしていた人物であるが、彼はまた、同好の文士とともに、『詩經』に基づく古典的な文學を實踐していた。

陸雲の兄への書翰のなかで、雲は次のようなことを言っている。

雲再拜。前省皇甫士安高士傳、復作逸民賦、今復送之。如欲報稱、久不作文、多不悅澤。兄爲小潤色之、可成佳物。願必留思。四言五言非所長、頗能作賦。爲欲作十篇許小者、以爲一分、生於愁思、遂復文。

雲 再拜。前に皇甫士安の『高士傳』を省て、復た「逸民の賦」を作り、今復た之を送る。如に報稱せんと欲するも、久しく文を作らざれば、多く悅澤せず。兄 爲に小しく之を潤色せば、佳物と成る可し。必ず思ひに留めんことを願ふ。四言・五言は長ずる所に非ず、頗か能く賦を作る。爲に十篇許りの小者を作り、以て一分と爲さんと欲、愁思を生ずるも、遂に文に復す。

(「與平原書」其二)

文中に、「四言・五言は長ずる所に非ず」というように、どうも陸雲は詩を作るのが苦手であつたらしい。また、次のようなものもある。

雲再拜。一日會公大欽。欣命坐者皆賦諸詩。了不作備。此日又病極。得思惟立草、復不爲。乃倉卒退還。

雲 再拜。一日、公に會して大いに欽む。欣びて坐する者に命じて皆な諸を詩に賦せしむ。了く備へを作さず。此の日は又た病ひ極まる。思惟して草を立つるも、復た爲さず。乃ち倉卒として退還す。

(「與平原書」其二五)

これは、成都王穎の文會の折に、準備不足もあり、また體調も悪いために、うまく詩が作れなくて、あたふたと退席した、というのである。どうも陸雲は詩を作るのが得意ではなかつたようである。また、別の手紙では、

張公箴誄、自過五言詩耳。但雲自不便五言詩、由己而言耳。

張公の箴・誄は、自ら五言詩に過ぐる耳。但だ雲は自ら五言詩に便ならず、己に由りて言ふ耳。

(「與平原書」其二二)

と云うように、詩の苦手な陸雲は、わけても五言詩はうまく作れなかつたようである。實際に陸雲の詩を見てみると、『陸士龍文集』(四部叢刊本)には、卷二に九首六十六章、

卷二に十四首六十一章、卷四に八首八章の詩が収められているが、このうち、卷二および卷三所収の百二十七章は全て四言詩で、卷四の八章だけが五言詩である。卷四に収める詩も、「答平原」詩は、兄陸機から贈られた詩が五言詩であるために、あえて五言で答えたのであろうし、「答張士然」詩もおそらく同じ理由によるものであろう。また「爲顧彦先贈婦往返」詩四首は、陸機にも同題の五言詩があり、陸機との競作と思われる。要するに陸雲の詩は、そのほとんどが四言詩なのであって、これは陸雲の詩の目立った特徴と言える。

それでは詩があまり得意ではない陸雲が、詩を作る場合には、なぜ四言詩を好んで作ったのであろうか。そのことを考える前に、まず雲の詩を取り上げて見てみよう。

大將軍讌會被命作詩（大將軍の讌會に命を被りて作れる詩）

皇皇帝祜 皇皇たる帝祜

誕隆駿命 誕に駿命を隆んにす

四祖正家 四祖は家を正し

天祿保定 天祿は保んじ定まれり

睿哲惟晉 睿哲なる惟れ晉

世有明聖 世々に明聖有り

如彼日月 彼の日月の

萬景攸正 萬景の正す攸なるが如し

此の詩は『文選』卷二十に収められており、詩は全て六章から成っている。さて、この第一章について、『詩經』に基づく語を取り上げてみると、

〔皇皇〕：魯頌・閔宮「皇皇后帝、皇祖后稷」

〔帝祜〕：大雅・皇矣「既受帝祜、施于孫子」（今の『毛詩』は「帝祉」に作る）

小雅・信南山「曾孫壽考、受天之祜」

〔駿命〕：大雅・文王「宜鑒于殷、駿命不易」

〔保定〕：小雅・天保「天保定爾、亦孔之固」

〔世有明聖〕：大雅・下武「下武維周、世有哲王」

などがある。第二章についても、見てみよう。

巍巍明聖 巍巍たる明聖

道隆自天 道の隆んなる 天自りす

則明分爽 明に則り爽を分かち

觀象洞玄 象を觀て玄を洞く

陵風協極 陵風は極に協ひ

絶輝照淵 絶輝は淵を照らす
肃雍往播 肃雍 往き播り
福祿來臻 福祿 來り臻る

「自天」：大雅・大明「有命自天、命此文王」
「肃雍」：周頌・清廟「於穆清廟、肃雍顯相」（今の『毛詩』は「肃雍」に作る）
「福祿」：大雅・旱麓「豈弟君子、福祿攸降」

このような、四言詩の場合に『詩經』に基づく語句を多用するというのは、なにも陸雲だけに限られたことではないが、陸雲の場合は比較的にそのような語句が多いようである。元来、詩作の得意ではない陸雲は、詩といえは『詩經』という意識が強く、當時、北方文壇において盛んに作られていた五言詩には、なかなか馴染めなかつたのであろう。このような傾向は潘尼にもあり、尼も五言詩は作ってはいるが、その四言詩を見ると、『詩經』に基づく語句を多く用いているのに気付く。例えば、「贈陸機出爲吳王郎中令」詩（『文選』卷二四）は、全六章から成る詩であり、その第三章は、

崑山何有 崑山に何か有る
有瑤有珉 瑤有り 珉有り
及爾同僚 爾と同僚にして
具惟近臣 具に惟れ近臣なり
子涉素秋 子は素秋を涉り
子登青春 子は青春に登れり
愧無老成 愧づらくは老成する無く
爾彼日新 彼の日新に廁れるを

というものであるが、第三句は、『詩經』大雅・板の「我雖異事、及爾同僚」の句をそのまま用いたものであるし、第七句の「老成」の語も、大雅・蕩の「雖無老成人、尚有典刑」を踏まえたものである。續く第四章を見てみると、次のようである。

祁祁大邦 祁祁たる大邦
惟桑惟梓 惟れ桑 惟れ梓
穆穆伊人 穆穆たる伊の人
南國之紀 南國の紀なり
帝曰爾諧 帝曰く 爾 諧げよ
惟王卿士 惟れ王の卿士たれよと
俯僕從命 俯僕して命に従ふ
奚恤奚喜 奚をか恤へ 奚をか喜ばん

「祁祁」：風・七月「春日遲遲、采芣祁祁」

「穆穆」：魯頌・泮水「穆穆魯侯、敬明其德」

「伊人」：秦風・蒹葭「所謂伊人、在水一方」

「南國之紀」小雅・四月「滔滔江漢、南國之紀」

このように、陸雲と潘尼は『詩經』を基礎とした詩作を試みていたようである。そもそも陸雲と潘尼とは、愍懷太子の府で、ともに太子の舎人として仕えていた。二人の交際はこの頃から始まったものと思われるが、やがて陸雲は呉王晏の郎中令として呉に赴いたが、その交遊はその後も續いていたらしく、陸雲の兄機への書翰のなかには、次のようなものがある。

一日見正叔、與兄讀古五言詩。此生歎息、欲得之。

一日 正叔に見ひ、兄の「讀古五言詩」を與ふ。此の生 歎息し、之を得んと欲す。

(「與平原書」其四)

すなわち、陸雲が潘尼と會い、陸機の作った詩を尼に與えたところ、尼は、このような詩を自分も作ってみたいものだ、と歎息した、というのである。このように、二人は時折り會つては、文學について語り合うということをしていたものと考えられる。「讀古五言詩」が、どのような作品か分からないけれども、或いは五言詩があまり得意でない二人が、陸機の作品を手本としていた、ということがあったのかも知れない。

ところで、陸雲と潘尼とを結び付ける要素として、二人の人柄を擧げることができると思う。陸雲は、太子舎人となって、のちに浚儀縣の令として赴任している。浚儀縣は統治しにくい所といわれていたが、任に就いた雲は、かの地をよく治めた。『吳志』陸抗傳に引く『機雲別傳』には、

雲爲吳王郎中令、出宰浚儀。甚有惠政。吏民懷之、生爲立祠。

雲は吳王の郎中令と爲り、出でて浚儀に宰たり。甚だ惠政有り。吏民は之に懷き、生けるときに爲に祠を立てり。

とあり、民衆に慕われていたことが分かる。一方、潘尼は太子舎人から宛縣の令となって赴任しているが、任地での彼は、『晉書』本傳に、

出爲宛令。在任寬而不縱、恤隱勤政、厲公平而遺人事。

出でて宛の令と爲る。任に在りては寬にして縱ならず、隱を恤み政に勤め、公平を厲しくして人事を遺つ。

と云うように、眞面目で思いやりのある政事を施していたようである。このように陸雲も潘尼も、その兄の陸機や従父の潘岳が、表立った行動をとり、激しい氣性であったのに比して、おとなしくて目立たない、よく似た性格であったように思われる。このようならも、兩者を結び付ける理由のひとつであったのではなからうか。

さて、陸雲には「贈顧驃騎」詩二首がある。「有皇」八章と「思文」八章の二首であるが、この二つの詩は、いずれも序を有しており、それは『詩經』の小序に倣ったもので、詩も四字句を基調としたものとなっている。いま、その「有皇」を見てみよう。

有皇

〔序〕

有皇、美祈陽也。祈陽秉文之士、駿發其聲、故能明照有皇、入頭乎晉。國人美之、故作是詩焉。

「有皇」は、祈陽を美するなり。祈陽は秉文の士、駿に其の聲を發き、故より能く明きらかに有皇を照らし、入りて晉に頭はる。國人之を美す、故に是の詩を作る。

〔其の一〕

有皇大晉 皇たる大晉有り
時文憲章 時れ文 章に憲る
規天有光 規天 光り有り
矩地無疆 矩地 疆り無し
神篤斯祐 神篤 斯に祐あり
本頭克昌 本より頭かに克く昌んなり
載生之儁 載ち之の儁を生み
實惟祈陽 實に惟れ祈陽あり
哲問宣猷 哲く問ねて 宣く猷り
考茂其相 其の相を考へ茂んにす

〔其の二〕

於鏐祈陽 於 鏐なる祈陽
誕鍾天篤 誕いに天篤を鍾く
清輝龍見 清輝 龍見し
玄猷淵嘿 玄猷 淵嘿す
沈機響駭 沈機 響駭し
幽神廣覲 幽神 廣く覲る
和以同人 和して以て人に同じくし
歸物時育 物に歸して時に育す

有大惡盈
謙以自牧
思我懿德
萬民來服

大いなる有れば 盈つるを悪む
謙りて以て自ら牧す
我が懿徳を思ひ
萬民 來たり服す

〔其の三〕

吳未喪師
天秩有庸
淵哉若人
弱冠休風
俯翼黃門
以德來忠
端秀蕃后
正色儲宮
徽音鏤穎
邈矣遐踪

吳の未だ師を喪はざるとき
天 秩づれば 庸なる有り
淵い哉 若き人
弱冠にして 休き風あり
翼を黃門に俯め
徳を以て來りて忠なり
蕃后に端秀として
色を儲宮に正す
徽音 穎を鏤かせ
邈かなる矣 遐踪

〔其の四〕

皇維南終
舊邦匪歆
委弁釋位
如龍之潛
考槃穹谷
假樂豐林
子雖藏器
鍾鼓有音
惠風往敬
慶問來尋

皇維 南に終はるや
舊邦 歆くるに匪ず
弁を委てて 位を釋て
龍の潜めるが如し
穹谷に考槃し
豐林に假樂す
子は器を藏むと雖も
鍾鼓 音有り
惠風 往きて敬し
慶問 來たり尋ぐ

〔其の五〕

濟濟元公
相惟天子
明明辟王
思隆多士
帝曰欽哉
有命集止
我咨四方

濟濟たる元公
惟の天子を相く
明明たる辟王
思に隆んなる多士あり
帝曰く 欽まん哉
命有りて集る
我 四方に咨ふに

令問在爾
以朕大賚
乃膺嘉祉
聿來胥步
觀國之紀

令問 爾に在り
大いに賚すに朕あるを以て
乃ち嘉祉を膺く
聿に來りて歩みを胥
國の紀を觀る

〔其の六〕

惟皇建極
緝熙清曜
我有峻民

惟に皇は極を建て
緝熙にして 清く曜く
我に峻民有り

明德來照
大觀在上
主假有廟
顯允顧生

明德 來たり照らす
大觀 上に在り
主は假に廟を有つ
顯允なる顧生

金聲玉振
之子于升
利見大人
龍輝絕跡
有肅清塵

金聲 玉振
之子 于に升る
大人を見るに利し
龍のごとく絶跡を輝かせ
肅たる清塵有り

〔其の七〕

清塵既彰
朝虛好爵
敬子侯度
慎徽百辟

清塵 既に彰かなれば
朝は好爵を虚しくす
子の侯度を敬み
徽たる百辟を慎む

予聞有命
德禮不易
嗟我懷人
瞻言永錫
豐祐東注
惟子之績

予 命有るを聞く
德禮 易らざらん
嗟 我 人を懷ひて
言を瞻て 永く錫はらん
豐祐 東に注ぐは
惟れ子の績なり

〔其の八〕

遵汶涉泗
言告同征
勁風宵烈
湛露朝令

汶を遵き 泗を涉り
言に告げて 同に征く
勁風 宵に烈しく
湛露 朝に令たし

| | |
|------|--------------|
| 雲垂藹下 | 雲は藹下に垂れ |
| 泉冽清冷 | 泉は冽として清冷たり |
| 哀哉行人 | 哀しい哉 行人 |
| 感物傷情 | 物に感じて 情を傷ましむ |
| 從子京邑 | 子に京邑に従ひ |
| 言觀厥成 | 言に厥の成るを觀る |
| 天保祚德 | 天 祚徳を保んじて |
| 式穀以寧 | 式て穀に 以て寧し |

詩は全て八章であるが、この歌い出しの第一章だけをとり上げてみても、多くの句に『詩經』の語句が用いられているのに氣付く。

- 〔有皇〕：小雅・正月「有皇上帝、伊誰云憎」
- 〔無疆〕：大雅・假樂「受福無疆、四方之綱」
- 〔斯祐〕：小雅・信南山「曾孫壽考、受天之祐」
- 〔宣猷・考茂其相〕：大雅・桑柔「秉心宣猷、考慎其相」
- 〔於鑠〕：周頌・酌「於鑠王師、遵養時晦」

このように此の詩は、全篇に『詩經』の語句を用いて、『詩經』に倣った作品となっている。

「思文」の方も、第一章の初めの二字を詩題として、次のような序が付けられている。

思文、美祁陽也。祁陽能明其徳、刑于寡妻、以至于家邦、無思不服。亦頼賢妃貞女、以成其内教。故作是詩焉。

「思文」は、祁陽を美するなり。祁陽は能く其の徳を明らかにし、寡妻に刑し、以て家邦に至るまで、思ひて服せざる無し。亦た賢妃・貞女に頼りて、以て其の内教を成す。故に是の詩を作る。

この詩も『詩經』に倣ったものであり、全篇に『詩經』に依據する語句が見出せる。いまその第一章を見てみよう。

| | |
|------|----------|
| 思文祁陽 | 思れ文なる祁陽 |
| 祁陽克峻 | 祁陽 克く峻たり |
| 天錫淳嘏 | 天 淳嘏を錫ひ |
| 宣茲義問 | 茲の義問を宣ぐ |
| 德音既烈 | 德音 既に烈しく |
| 海外有奮 | 海外 奮ふ有り |

既奮斯音

既に斯の音を奮はせば

祇敬厥德

厥の徳を祇敬す

照治其家

其の家を照治し

覃及邦國

覃きて邦國に及ぶ

永肇儀刑

永く儀刑に肇り

俾民惟則

民をして惟に則ら俾む

〔思文〕：周頌・思文「思文后稷、克配彼天」

〔天錫淳嘏〕：魯頌・閔宮「天錫純嘏、眉壽保魯」

〔宣茲義問〕：大雅・文王「宣昭義問、有虞自天」

〔德音〕：小雅・南山有臺「樂只君子、德音不已」

〔海外有奮〕：商頌・長發「相土烈烈、海外有奮」

〔覃及邦國〕：大雅・蕩「内愛于中國、覃及鬼方」

〔儀刑〕：大雅・文王「儀刑文王、萬邦作孚」

半數近くの句に『詩經』に基づく語句を用いており、まさに倣「詩經」體ともいいうべき作品となっている。

さて、時を同じくして東哲（字は廣微）は、「補亡詩」六首を作った。『詩經』には元來、三二一篇の詩があったのであるが、そのうち六篇は、詩序を残すだけで詩章が失われてしまった。東哲は、失われた六篇の詩章を補う意圖で、「補亡詩」を作ったのである。哲はその序で、次のように言う。

哲、與司業疇人肆脩鄉飲之禮。然所詠之詩、或有義無辭、音樂取節、闕而不備。於是
遥想既往、存思在昔、補著其文、以綴舊制。

哲、司業の疇人と郷飲の禮を肆脩す。然れども詠ぜんとする所の詩、或いは義有りて辭
無く、音樂 節を取らんとするに、闕きて備はらず。是に於て遥かに既往を想ひ、思ひ
を在昔に存し、其の文を補ひ著し、以て舊制を綴る。（『文選』卷十九李善注引）

六首ある「補亡詩」のうち、今その「南陔」を見てみよう。

南陔

〔序〕

南陔、孝子相戒以養也。

「南陔」は、孝子の相ひ戒むるに養ひを以てするなり。

〔其の一〕

循彼南陔

彼の南陔に循ひて

言采其蘭
 眷戀庭闈
 心不違安
 彼居之子
 罔或游盤
 馨爾夕膳
 絜爾晨飧

言に其の蘭を采る
 庭闈を眷戀して
 心 安んずるに違あらず
 彼の居の子
 游盤すること或る罔かれ
 爾の夕膳を馨しくし
 爾の晨飧を絜くせよ

『詩經』の篇題は、第一句の言葉を取るのが例となっているため、束皙は「南陔」の語を第一句目に用いたのである。「南陔」は全三章から成っており、第二・三章は以下のよう
 に續く。

〔其の二〕

循彼南陔
 厥草油油
 眷戀庭闈
 心不違留
 彼居之子
 色思其柔
 馨爾夕膳
 絜爾晨羞

彼の南陔に循ふに
 厥の草 油油たり
 庭闈を眷戀して
 心 留まるに違あらず
 彼の居の子
 色 其の柔らかからんと思へ
 爾の夕膳を馨しくし
 爾の晨羞を絜くせよ

〔其の三〕

有獼有獼
 在河之涘
 凌波赴汨
 噬魴捕鯉
 嗷嗷林烏
 受哺于子
 養隆敬薄
 惟禽之似
 勗增爾虔
 以介丕祉

獼有り 獼有り
 河の涘に在り
 波を凌ぎ汨に赴き
 魴を噬ひ鯉を捕ふ
 嗷嗷たる林烏
 哺を子に受く
 養ひ隆んにして 敬ひ薄きは
 惟れ 禽に似たり
 勗めて爾の虔みを増へ
 以て丕なる祉ひを介けよ

此の「南陔」の他に、「白華」「華黍」「由庚」「崇丘」「由儀」の詩章があり、それらは全て『文選』巻十九に収められている。

『晉書』巻五一にある束皙傳の末尾は、次のように結ばれている。

哲才學博通、所著三魏人士傳、七代通記、晉書紀志、遇亂亡失。其五經通論、發蒙記、補亡詩、文集數十篇、行于世云。

哲は才學博通、著はず所は「三魏人士傳」「七代通記」「晉書紀志」あるも、亂に遇ひて亡失す。其の「五經通論」「發蒙記」「補亡詩」、文集數十篇は、世に行なはると云ふ。

その著述や文集とは別に、「補亡詩」が記されているところからみて、東哲の「補亡詩」は、ことに世に知られていたものと思われる。

ところで、此の時代、「補亡詩」を作ったのは獨り東哲だけではない。すなわち、『世說新語』文學篇には、次のようにある。

夏侯湛作周詩成、示潘安仁。安仁曰、此非徒温雅、乃別見孝悌之性。潘因此遂作家風詩。

夏侯湛、「周詩」を作りて成り、潘安仁に示す。安仁曰く、「此れ徒に温雅なるのみに非ず、乃ち別に孝悌の性を見はず」と。潘は此に因りて遂に「家風詩」を作る。

つまり、夏侯湛が「周詩」を作り、それを潘岳に見せたところ、岳もこれにちなんで「家風詩」を作ったというのである。「周詩」については、劉注に次のように言う。

湛集載其叙曰、周詩者、南陔・白華・華黍・由庚・崇丘・由儀六篇。有其義而亡其辭。湛統其亡。故云周詩也。

湛の集に其の叙を載せて曰く、「周詩」とは、「南陔」「白華」「華黍」「由庚」「崇丘」「由儀」の六篇なり。其の義有りて其の辭は亡ぶ。湛は其の亡びしを続けり。故に「周詩」と云ふなり。

これに據って、夏侯湛の作った「周詩」が、「補亡の詩」を指すことが分かる。そうして劉注には、この「周詩」を載せている。

既殷斯虔 既に殷んに斯れ虔み

仰說洪恩 仰いでは洪恩を説く

夕定辰省 夕に定めて 辰に省み

奉朝侍昏 朝に奉じ 昏に侍す

宵中告退 宵中には 退を告げ

雞鳴在門 雞鳴には 門に在り

萼萼恭誨 萼萼として恭誨し

夙夜是敦 夙夜 是れ敦し

此の詩が、亡失した六篇の詩のうちの、どの篇のものなのかは、それが記してないので分からないけれども、六篇のそれぞれの小序を見てみると、

・南陔、孝子相戒以養也。（「南陔」は、孝子の相ひ戒むるに養ひを以てするなり。）
・白華、孝子之絜白也。（「白華」は、孝子の絜白なり。）
・華黍、時和歲豐、宜黍稷也。（「華黍」は、時和らぎ歲豐かにして、黍稷に宜しきなり。）

・由庚、萬物得由其道也。（「由庚」は、萬物 其の道に由るを得るなり。）
・崇丘、萬物得極其高大也。（「崇丘」は、萬物 其の高大を極むるを得るなり。）
・由儀、萬物之生、各得其儀也。（「由儀」は、萬物の生、各々其の儀を得るなり。）

とあって、その内容から見て、「南陔」の詩であると思われる。

そもそも夏侯湛は、魏國出身の文人であり、劉注に引く『文士傳』には、次のように記されている。

湛字孝若、譙國人、魏西征將軍夏侯淵曾孫也。有盛才、文章巧思、善補雅詞、名亞潘岳。歷中書侍郎。

湛、字は孝若、譙國の人、魏の西征將軍夏侯淵の曾孫なり。盛才有りて、文章は巧思、善く雅詞を補ひ、名は潘岳に亞ぐ。中書侍郎を歴たり。

そうして湛は、潘岳と俱に其の美貌をもって知られている。『世説新語』容止篇には、次のように言う。

潘安仁、夏侯湛、竝有美容、喜同行。時人謂之連璧。

潘安仁・夏侯湛は、竝びに美容有り、喜んで同行す。時人 之を連璧と謂ふ。

劉注に引く『八王故事』には、

岳與湛箸契、故好同遊。

岳は湛と契りを箸び、故に好んで同に遊ぶ。

とあって、ふたりの親交ぶりを傳えている。

一方、潘岳の「家風詩」のほうは、『世説新語』劉注に、

岳家風詩、載其宗祖之德、及自戒也。

岳の「家風詩」は、其の宗祖の徳を載せ、自ら戒むるに及ぶなり。

と言うが、その詩は載せられていない。ただ、『藝文類聚』卷三三には、次のような岳の「家風詩」を収めている。

| | | |
|------|--|-------------------------|
| 綰髮綰髮 | 髮を綰 <small>むす</small> び | 髮を綰 <small>むす</small> び |
| 髮亦鬢止 | 髮は亦た鬢 | |
| 日祗日祗 | 日に祗 <small>つゞ</small> み | 日に祗 <small>つゞ</small> み |
| 敬亦慎止 | 敬みて亦た慎む | |
| 靡專靡有 | 専らにする靡 <small>な</small> く | 有する靡 <small>な</small> く |
| 受之父母 | 之を父母に受く | |
| 鳴鶴匪和 | 鳴鶴 和するに匪 <small>あ</small> ず | |
| 析薪弗荷 | 析薪 荷 <small>に</small> はず | |
| 隱憂孔疚 | 隱憂 孔 <small>ほ</small> だ疚 <small>や</small> み | |
| 我堂靡構 | 我が堂 構 <small>かま</small> ふる靡 <small>な</small> し | |
| 義方既訓 | 義方 既に訓 <small>し</small> へあり | |
| 家道穎穎 | 家道 穎穎たり | |
| 豈敢荒寧 | 豈に敢て荒寧せんや | |
| 一日三省 | 一日に三省す | |

「補亡詩」としないで「家風詩」としてはいるものの、その體は『詩經』に倣い、内容的にも、「南陔」「白華」の小序にあつた孝子を踏まえており、夏侯湛および東哲の作品を十分に意識していることが分かる。この潘岳の「家風詩」と夏侯湛の「周詩」については、葛洪の『抱朴子』外篇卷三十・鈞世篇に、次のように述べられている。

近者夏侯湛、潘安仁、竝作補亡詩。白華、由庚、南陔、華黍之屬。諸碩儒高才之賞文者、咸以古詩三百、未有足以偶二賢之所作也。

近者、夏侯湛・潘安仁は、竝びに「補亡詩」を作る。「白華」「由庚」「南陔」「華黍」の屬なり。諸々の碩儒高才の、文を賞する者、咸みなな以もつてへらく、古への詩三百も、未だ以て二賢の作る所に偶するに足ること有らず、と。

『詩經』の詩も、二人の作品には及ばないと、當時の識者が思っている、と葛洪が言うほどに、兩者の作品も、東哲の「補亡詩」とともに、高い評價を受けていたものと思われる。

ところで、陸雲の詩のなかに、「贈鄭曼季詩」(『陸士龍文集』卷三)というのがある。此の詩は、鄭曼季との往返の詩であり、陸雲から鄭曼季への詩は、「谷風」「鳴鶴」「南陔」「高岡」の四首、鄭曼季から陸雲への返詩は、「鴛鴦」「蘭林」「南山」「中陵」の四首で、陸雲の「谷風」に對して鄭曼季の「鴛鴦」が、「鳴鶴」に對して「蘭林」が、と
いうようにやり取りされたものと思われる。いま、陸雲の「谷風」詩を見てみよう。

「谷風」には、次のような序が附せられている。

谷風、懷思也。君子在野、愛而不見。故作是詩、言其懷而思之也。

「谷風」は、懷思するなり。君子 野に在り、愛すれども見えず。故に是の詩を作り、其の之を懷思するを言ふなり。

これは、『詩經』の小序に倣い、初句の二字をとって篇名としている。詩は全て五章から成り、毎章「習習谷風」で歌い出される。

〔其の一〕

習習谷風

習習たる谷風

扇此暮春

此の暮春を扇ぐ

玄澤墜潤

玄澤 墜ちて潤ひ

靈爽烟煴

靈爽 烟煴たり

高山熾景

高山 景を熾んにし

喬木興繁

喬木 興こり繁る

蘭波清蹕

蘭波 清く蹕り

芳澍増涼

芳澍 涼を増す

感物興想

物に感じては 想ひを興こし

念我懷人

念ひて我は人を懷ふ

〔其の二〕

習習谷風

習習たる谷風

載穆其音

載ち穆たる其の音

流芳鼓物

流芳 物を鼓し

清塵拂林

清塵 林を拂ふ

霖雨嘉播

霖雨 播に嘉く

有滄淒陰

滄たる有りて淒陰たり

歸鴻逝矣

歸鴻 逝きて

玄鳥來吟

玄鳥 來たり吟ず

嗟我懷人

嗟 我 人を懷ふ

其居樂潛

其の居るや 潜めるを樂しむ

明發有想

明發より想ふ有り

如結予心

予が心に結ばれるが如し

〔其の三〕

習習谷風

習習たる谷風

以温以涼

以て温く 以て涼し

玄黄交泰

玄黄 交はり泰り

品物含章

品物 章あやを含む

潜介淵躍

潜介 淵に躍り

飛鳥雲翔

飛鳥 雲に翔る

嗟我懷人

嗟 我 人を懷かこひ

在津之梁

津の梁に在り

明發有思

明發まで思ふ有り

凌波褰裳

波を凌しのぎて裳しやうを褰かぐ

〔其の四〕

習習谷風

習習たる谷風

有集惟喬

集まる有るは 惟これ喬けう

嗟我懷人

嗟 我 人を懷かこひ

於焉逍遙

焉こゝに於おて逍遙せうようす

鸞栖高岡

鸞は高岡たかおかに栖すみ

耳想雲韶

耳みみに雲韶うんせうを想おもふ

拊翼夕墜

翼うしを拊うちて夕ゆふべに墜おち

和鳴興朝

鳴なくに和なして朝あに興おこる

我之思之

我は之こゝれ之これを思おもひ

言懷其休

言ことに其の休やすみからんことを懷かこふ

〔其の五〕

習習谷風

習習たる谷風

其音孔嘉

其の音 孔あなだ嘉よし

所謂伊人

所謂 伊いの人

在谷之阿

谷の阿あに在り

虎質山嘯

虎のごとく質しつにして山やまに嘯せうき

龍輝淵播

龍のごとく輝ひきて淵ふたに播まる

維南有箕

維こゝれ南みなみに箕き有あるも

匪休其和

其の和わを休やすにするに匪あらず

有球天畢

抹またる天畢てんひ有あれば

戢爾滂沱

爾その滂沱ぼうたを戢とめんや

懿厥河漢

懿あやみ 厥その河漢かかん

耿彼大華

彼かの大華たいしを耿たまん

明發有懷

明發あまで懷おもふ有り

我勞如何

我が勞あい 如何いふぞや

全章は『詩經』に倣い、これも先に見た束皙や夏侯湛・潘岳の「補亡詩」と同じ意圖で作

られたものと考えられる。陸雲と詩をやりとりした鄭曼季については、『三國志』卷四七「吳書」吳主傳注に引く『文士傳』に、

(鄭胄)子豊、字曼季、有文學操行、與陸雲善、與雲詩相往反。司空張華辟、未就、卒。

子の豊、字は曼季は、文學操行有りて、陸雲と善く、雲に詩を與へて相ひ往反す。司空張華 辟すも、未だ就かずして、卒す。

とあり、吳國出身の人であることが分かる。張華の招きを辭退して、入洛しないまま亡くなったとすれば、或いは此の陸雲との詩のやり取りは、洛と吳との間で行なわれたものであろうか。

このように、束皙の作った「補亡詩」に觸發されて、北人である夏侯湛は「周詩」を、潘岳は「家風詩」を作ったのであるが、それとは別に、南人の陸雲は『詩經』に倣う詩をやはり南人の鄭曼季と作り合ったのである。さらに陸雲とは仲のよかった潘尼も、この陸雲らの『詩經』に基づく詩作を實踐する集團に加わっていたように思われる。陸雲と潘岳ら北人が、一緒になって文會をもったとは考えにくいので、あるいは潘尼を仲立ちにして北人と南人との間の情報が交換されていたのかも知れない。

ところで、賈誼の「二十四友」の一人でもある摯虞は、その『文章流別論』（『藝文類聚』卷五六所引）で、次のように言っている。

夫詩雖以情志爲本、而以成聲爲節。然則雅音之韻、四言爲正。其餘雖備曲折之體、而非音之正也。

夫れ詩は情志を以て本と爲すと雖も、而も成聲を以て節と爲す。然らば則ち雅音の韻は、四言を正と爲す。其餘は曲折の體を備ふと雖も、而も音の正には非ざるなり。

すなわち摯虞は、四言詩こそが正なるものであって、五言詩などその他の詩型は、それなりの長所があるにしても、それはあくまでも正なるものではない、と言っているのである。かかる主張は、陸雲の目指す詩作と共通の考え方であって、ともあれ西晉文壇には、このような傳統的な『詩經』に基づく詩作を試みる文人集團が存在していたわけで、いふなればこれらの文人集團は、古典派とも呼べるものであろう。

7 成都王司馬穎集團

成都王司馬穎の傳は、『晉書』卷五九にある。

成都王穎、字章度、武帝第十六子也。太康末受封、邑十萬戸。後拜越騎校尉、加散騎常侍、車騎將軍。

成都王穎、字は章度、武帝の第十六子なり。太康の末 封を受け、邑十萬戸なり。後に越騎校尉に拜せられ、散騎常侍・車騎將軍を加へらる。

『晉書』では、武帝司馬炎の第十六子となっているが、『世說新語』言語篇注に引く『八王故事』には、

司馬穎、字叔度、世祖第十九子。封成都王、大將軍。

司馬穎、字は叔度は、世祖の第十九子なり。成都王・大將軍に封ぜらる。

とあり、第十六子ではなく第十九子となっており、字も「章度」ではなく、「叔度」と記されている。

穎の文學集團について考えてゆく前に、先ず穎と陸機との関わりを見てみることにしよう。

陸機・陸雲兄弟の後楯として、二人を常に暖かく見守ってきた張華も、趙王倫が賈后に諂い、録尚書の職を求め、さらにまた尚書令となることを求めたとき、裴頠とともに強硬に反対したのがもとで、倫にひどく怨まれて、ついに刑死させられることになってしまった。『晉書』張華傳には、死を前にした張華と、趙王倫の腹心の張林とのやりとりが、次のように記されている。

華將死、謂張林曰、卿欲害忠臣耶。林稱詔詰之曰、卿爲宰相、任天下事、太子之廢、不能死節、何也。華曰、式乾之議、臣諫事具存。非不諫也。林曰、諫若不從、何不去位。華不能答。

華の將に死せんとするや、張林に謂ひて曰く、「卿は忠臣を害せんと欲する耶」と。林は詔を稱して之を詰めて曰く、「卿は宰相爲りて、天下の事に任ずるに、太子の廢せらるるや、節に死すること能はざるは、何ぞや」と。華曰く、「式乾の議、臣の諫事は具に存せり。諫めざるに非ざるなり」と。林曰く、「諫めて若し従はれざれば、何ぞ位を去らざる」と。華は答ふること能はず。

ついに張華は、前殿の馬道の南で處刑され、三族は皆殺しとなった。永康元年（三〇〇）

時に六十九歳であつた。

かかる亂世にあつて、陸機兄弟もしばしば危難に遇つた。趙王倫は、帝位を篡奪するや、陸機を中書郎としたが、これが機にとつては、はなはだ不都合なこととなつてしまつた。というのも、趙王倫は帝位に即いてわずか三か月あまりで、齊王冏をはじめとする諸王の反亂によつてその位を失ひ、死を賜つたのであるが、冏は、機が中書に務めていたから、倫の下で九錫文や禪位の詔の作成に、必ずや機が關與してゐるであろうという嫌疑をかけたのである。捕えられて廷尉に付せられた陸機は、みずからの無罪を懸命に訴えた。「平原内史を謝するの表」(『文選』卷三七)には、次のようにある。

而横爲故齊王冏所見枉陷、誣臣與衆人共作禪文、幽執圜圍、當爲誅始。臣之微誠、不負天地、倉卒之際、慮有逼迫、乃與弟雲及散騎侍郎袁瑜、中書侍郎馮熊、尚書右丞崔基、廷尉正顧榮、汝陰太守曹武、思所以獲免、陰蒙避迴、岐嶇自列。片言隻字、不關其間。事蹤筆跡、皆可推校。

而も横まに故の齊王冏の爲に枉げ陥れられ、臣は衆人と共に禪文を作ると誣られ、圜圍に幽執せられ、誅始せ爲るに當る。臣の微誠、天地に負かざるも、倉卒の際、逼迫有らんことを慮り、乃ち弟の雲及び散騎侍郎袁瑜、中書侍郎馮熊、尚書右丞崔基、廷尉正顧榮、汝陰太守曹武と、免るるを獲る所以を思ひ、陰かに避迴を蒙り、岐嶇として自ら列す。片言隻字も、其の間に關らず。事蹤筆跡、皆な推校す可し。

この表は、機の命を救つてくれ、機を大將軍の軍事に參與させ、表して平原内史とした成都王穎に對して感謝の氣持ちを述べたものであるが、この中で「片言隻字も、其の間に關らず。事蹤筆跡、皆な推校す可し」と言つてゐるように、自分は九錫文や禪文には關與してゐないと、機は必死の思いで辯明してゐる。また、『文選』李善注に引く王隱『晉書』には、機の「吳王晏に與ふる表」があり、その中でも、

禪文本草、今見在中書。一字一迹、自可分別。

禪文の本草は、今、見在中書に在り。一字一迹、自ら分別す可し。

と、同様のことを述べてゐる。

頼みとなる張華もすでに此の世になく、もはやこれまでと思われたとき、陸機を救つてくれたのは、吳王晏と成都王穎であつた。背後で弟の雲や、同郷の顧榮らの働きかけがあつたであろうことは、先の機の「謝平原内史表」からも窺えるけれども、ともあれ恩赦によつて、機の命は救われた。此の時、陸機は「園葵詩」(『文選』卷二九)を作つて、穎に對しての感謝の氣持ちを表してゐる。

園葵詩

種葵北園中

葵を北園の中に種う

葵生鬱萋萋

葵は生ひて鬱として萋萋たり

朝榮東北傾

朝の榮は 東北に傾き

夕穎西南晞

夕の穎は 西南に晞く

零露垂鮮澤

零露 鮮澤を垂れ

朗月耀其輝

朗月 其の輝りを耀かせり

時逝柔風戢

時逝きて 柔風は戢り

歲暮商志飛

歲暮れて 商志は飛ぶ

曾雲無温液

曾雲 温液無く

嚴霜有凝威

嚴霜 凝威有り

幸蒙高墉德

幸ひに高墉の徳を蒙りて

玄景陰素志飛

玄景は 素志を陰へり

豐條竝春盛

豊かなる條は 春に竝びて盛んに

落葉後秋衰

落つる葉は 秋に後れて衰ふ

慶彼晚彫福

彼の晚彫の福を慶び

忘此孤生悲

此の孤生の悲しみを忘る

『文選』李善注に引く『晉書』に、

趙王倫篡位、遷帝於金墉城。後諸王共誅倫、復帝位。齊王冏譖機爲倫作禪文。頼成都

王穎救之、免死。故作此詩、以葵爲喻、謝穎。

趙王倫 位を篡ひ、帝を金墉城に遷す。後に諸王は共に倫を誅し、帝位を復す。齊王冏

は、機は倫の爲に禪文を作れりと譖る。頼ひに成都王穎 之を救ひて、死を免る。故に

此の詩を作り、葵を以て喻へと爲し、穎に謝す。

とあるように、みずからを葵に喩えて、自分を救ってくれた穎に對して感謝しているの
ある。

ところで、『晉書』陸機傳には、

遂収機等九人付廷尉。

遂に機ら九人を収めて廷尉に付す。

と、此の時、陸機とともに捕えられた者が九人いたことを記しているが、その中の一人で
ある傳祗の傳（『晉書』卷四七）には、次のようにある。

及倫敗、齊王冏收侍中劉逵、常侍駙捷杜育、黃門郎陸機、右丞周導王尊等、付廷尉。

以禪文出中書、復議處祗罪、會赦得原。後以禪文章本非祗所撰、於是詔復光祿大夫。

倫の敗るるに及び、齊王冏は、侍中の劉逵、常侍の駙捷・杜育、黃門郎の陸機、右丞の

周導・王尊らを収め、廷尉に付す。禪文の中書より出づるを以て、復た祗を罪に處せんことを議するも、赦に會ひて原さるるを得たり。後に禪文の草本は祗の撰する所に非ざることをして、是に於て詔ありて光祿大夫に復せらる。

また、ここに見える騶捷についても、『晉書』卷九二・鄒湛傳（鄒は騶に同じ）に、次のように記されている。

子捷、字太應、亦有文才。永康中、爲散騎侍郎。及趙王倫篡逆、捷與陸機等俱作禪文。倫誅、坐下廷尉。遇赦免。後爲太傅參軍。永嘉末、卒。

子の捷、字は太應、亦た文才有り。永康中、散騎侍郎と爲る。趙王倫の篡逆するに及び、捷は陸機らと俱に禪文を作る。倫の誅せらるるや、坐して廷尉に下さる。赦に遇ひて免る。後に太傅參軍と爲る。永嘉の末、卒す。

これらの資料からも分かるように、陸機らは結局は恩赦によって罪を免れたわけであるが、その蔭には陸雲や顧榮らを中心とする南人達の奔走があり、成都王穎や吳王晏の援助があったに違いない。

こうして、辛くも命を救われた陸機は、倫を倒して政治の實權を掌握し、その功績を自慢し、爵を受けても議ることのない齊王冏に對し、「豪士の賦」を書いて、それを風刺した。その序のなかで、次のように言う。

夫惡欲之大端、賢愚所共有。而遊子殉高位於生前、志士思垂名於身後。受生之分、惟此而已。夫蓋世之業、名莫盛焉。率意無違、欲莫順焉。借使伊人頗覽天道、知盡不可益、盈難久持、超然自引、高揖而退、則巍巍之盛、仰邈前賢、洋洋之風、俯觀來籍。而大欲不止於身、至樂無愆乎舊、節彌効而德彌廣、身逾逸而名逾劭。此之不爲、而彼之必味。

夫の惡欲の大端は、賢愚の共に有する所なり。而して遊子は位の生前に高からんことを殉め、志士は名の身後に垂れんことを思ふ。受生の分、惟だ此れ而已。夫れ蓋世の業、名として焉より盛んなるは莫し。意に率ひて違ふ無し、欲として焉より順なるは莫し。借し伊の人をして頗か天道を覽て、盡くせば益す可からず、盈ちては久しく持し難く、超然として自ら引き、高揖して退くを知ら使むれば、則ち巍巍たる盛は、前賢を仰邈し、洋洋たる風は、來籍を俯觀せん。而して大欲は身に止まらず、至樂は舊に愆ふ無く、節は彌効にして徳は彌廣く、身は逾逸にして名は逾劭からん。此れを之れ爲さざれば、彼は之れ必ず味からん。

齊王冏の目に餘る驕慢さに對して、なんとかそれを諫めんとする機の意圖が、ありありと見て取れる。しかるに冏の方は、機の言わんとすることが理解できず、ついに惠帝の弟の長沙王又によって討たれてしまった。太安元年（三〇二）のことである。これより後、長

沙王又・成都王穎・河間王顥の三人が権力の中樞を構成することになる。

こうした状況の下で、陸機は弟の雲とともに、成都王穎にその身を委ねることとなる。
『晉書』陸機傳には、次のようにある。

時成都王穎推功不居、勞謙下士。機既感全濟之恩、又見朝廷屢有變難、謂穎必能康隆
晉室、遂委身焉。穎以機參大將軍軍事、表爲平原内史。

時に成都王穎は功を推りて居らず、勞謙して士に下る。機は既に全濟の恩に感じ、又た
朝廷に屢々變難有るを見、穎は必ず能く晉室を康隆にせんと謂ひ、遂に身を委ぬ。穎は
機を以て大將軍の軍事に參らしめ、表して平原内史と爲す。

穎の上表によつて陸機は平原内史となり、時を同じくして弟の雲も清河内史となっている。
さて、『晉書』陸機傳には、「推功不居、勞謙下士」と、穎のおとなしくて謙虚な人柄
を窺わせる記事があるけれども、穎はまた激しい氣性の持ち主でもあった。すなわち『晉
書』成都王穎傳には、次のように記されている。

賈謐嘗與皇太子博、争道。穎在坐、厲聲呵謐曰、皇太子、國之儲君。賈謐何得無禮。

謐懼、由此出穎爲平北將軍、鎮鄴。

賈謐 嘗て皇太子と博して、道を争ふ。穎は坐に在り、聲を厲しくして謐を呵して曰く、
「皇太子は、國の儲君なり。賈謐 何ぞ禮無きを得んや」と。謐は懼れ、此に由りて穎
を出だして平北將軍と爲し、鄴に鎮たらしむ。

賈謐が皇太子と博打をしているときに、謐の餘りの無禮な態度に我慢ならなかつた穎が、
聲をあらげて叱りつけたというのである。これと同じことは、『晉書』賈謐傳にも記され
ている。

謐既親貴、數入二宮。共愍懷太子遊處、無屈降心。常與太子奕棊争道。成都王穎在坐、
正色曰、皇太子、國之儲君。賈謐何得無禮。謐懼、言之於后、遂出穎爲平北將軍、鎮
鄴。

謐は既に親貴にして、數々二宮に入る。愍懷太子と共に遊ぶ處も、屈降の心無し。常て
太子と奕棊して道を争ふ。成都王穎は坐に在り、色を正して曰く、「皇太子は、國の儲
君なり。賈謐 何ぞ禮無きを得んや」と。謐は懼れ、之を後に言ひ、遂に穎を出だして
平北將軍と爲し、鄴に鎮たらしむ。

穎を恐れた謐は、このことを賈后に告げて、穎を外鎮に出したというのであるが、ここに
穎の激しい氣性を見て取る」ことができよう。

成都王穎に、二陸がその身を委ねた頃のことであろうか。陸雲の兄陸機への書翰のなかに、次のようなものがある。

雲再拜。一日會公大欽。欣命坐者皆賦諸詩。了不作備。此日又病極。得思惟立草、復不爲。乃倉卒退還。猶復多少所定、猶不副意。與頌雖同體、然佳不如頌。不解此意。可以王弘遠去當祖道、似當復作詩。構作此一篇、至積思、復欲不如前倉卒時。不知爲可存錄不。諸詩未出、別寫送。弘遠詩極佳。中靜作亦佳。張魏郡作急就詩、公甚笑燕。王亦似不復祖道弘遠。已作爲存耳。兄園葵詩清工。然猶復非兄詩妙者。雲詩亦唯爲彼一語如佳。先已先得、便自委頓。欲更作之、昔如己身先此篇詩、了不復仿佛識有此語。此語於常言爲佳。謹啓。

雲 再拜。一日、公に會して大いに欽しむ。欣びて坐する者に命じて皆な諸を詩に賦せしむ。了く備へを作さず。此の日は又た病極まる。思惟して草を立つるを得たるも、復た爲さず。乃ち倉卒として退還す。猶ほ復た多少定する所有るも、猶ほ意に副はず。頌と同じくすと雖も、然れども佳は頌に如かず。此の意を解せず。王弘遠の去るを以て祖道に當たる可く、當に復た詩を作るべきに似たり。此の一篇を構作して、思ひを積むに至るも、復た前の倉卒たりし時に如かざらんと欲。爲に存録す可きや不やを知らず。諸詩は未だ出ださざれば、別に寫して送る。弘遠の詩は極めて佳なり。中靜の作も亦た佳なり。張魏郡は急就の詩を作り、公は甚だ笑ひ燕ぶ。王も亦た復た弘遠を祖道せざるに似たり。已に作れば爲に存する耳。兄の「園葵の詩」は清工なり。然れども猶ほ復た兄の詩の妙なる者に非ざるがごとし。雲の詩は亦た唯だ彼の一語の爲に佳なるが如し。先に已に先づ得たれば、便自委頓す。更めて之を作らんと欲するも、昔已に身から此の篇の詩を先にするが如きは、了く復た仿佛として此の語有るを識らず。此の語は常言に於て佳爲り。謹啓。

（「與平原書」其二五）

ここの「公」とは、即ち成都王穎のことである。此の書翰に據れば、穎のもとに人士が集い、そうして穎に命ぜられるままに一坐の者が詩を作ったようである。ただ陸雲はこの時身體の具合が悪く、詩を作ることができなかったらしい。手紙で事の様子を詳しく傳えているところから見て、陸機は此の席にはいなかったようである。

さて、この時の文會では、弘遠の出發にあたり、集まった者が、それぞれに祖道の詩をつくることになった。或いは弘遠の送別の宴が催されたのかも知れない。雲も祖道のため詩をなんとか作ろうとし、あれこれと構想を立てて考えたようであるが、結局、うまくできなかった。ここの「弘遠」とは、賈誼の二十四友のメンバーでもあった王粹の字である。文中に「弘遠詩極佳」とあるので、王粹も詩を作ったのであろう。さらに「張魏郡作急就詩、公甚笑燕」という記述から考えて、その場の雰囲気はとても和やかなものであったように想像される。

手紙の後半にある「園葵詩」というのは、先に取り上げた陸機の詩のことで、陸雲はそれを「清工」であるとして一應は評價しながらも、兄の詩の「妙」なるものではないようだと不満を洩らしている。

『文選』巻二〇には、陸雲の「大將軍の讌會に命を被りて作れる詩」と題する四言詩が収められている。「大將軍」とは成都王穎のことで、このとき雲は、穎に仕える大將軍右司馬であった。詩は全て六章から成っている。

大將軍讌會被命作詩（大將軍の讌會に命を被りて作れる詩）

〔其の一〕

皇帝祐

皇皇たる帝祐

誕隆駿命

誕に駿命を隆んにす

四祖正家

四祖は家を正し

天祿保定

天祿は保んじ定まれり

睿哲惟晋

睿哲なる惟れ晋

世有明聖

世々に明聖有り

如彼日月

彼の日月の

萬景攸正

萬景の正す攸なるが如し

〔其の二〕

巍巍明聖

巍巍たる明聖

道隆自天

道の隆んなる 天自りす

則明分爽

明に則り爽を分かち

觀象洞玄

象を觀て玄を洞く

陵風協極

陵風は極に協ひ

絶輝照淵

絶輝は淵を照らす

肅雍往播

肅雍 往き播り

福祿來臻

福祿 來り臻る

〔其の三〕

在昔姦臣

在昔 姦臣は

稱亂紫微

亂を紫微に稱げり

神風潛駭

神風 潛く駭り

有赫茲威

赫たる有りて茲に威あり

靈旗樹旆

靈旗 旆を樹て

如電斯揮

電の如く斯に揮ふ

致天之届

天の届めを致すこと

于河之沂

河の沂に于てす

有命再集
皇輿凱歸

有命 再び集り
皇輿 凱して歸る

〔其の四〕

頽綱既振
品物咸秩
神道見素
遺華反質
辰星重光
協風應律
函夏無塵
海外有諡

頽綱 既に振り
品物 咸く秩づ
神道は素を見し
華を遺てて質に反る
辰星は光きを重ね
協風は律に應ふ
函夏 塵無く
海外 諡かなる有り

〔其の五〕

芒芒宇宙
天地交泰
王在華堂
式宴嘉會
玄暉峻朗
翠雲崇靄
冕弁振纓
服藻垂帶

芒芒たる宇宙
天地 交はり泰る
王は華堂に在り
式て宴して嘉會す
玄暉 峻朗にして
翠雲 崇靄たり
冕弁 纓を振へ
服藻 帶を垂る

〔其の六〕

祁祁臣僚
有來雍雍
薄言載考
承顏下風
俯觀嘉客
仰瞻玉容
施已唯約
于禮斯豊
天錫難老
如嶽之崇

祁祁たる臣僚
來る有りて雍雍たり
薄か言に載ち考さんとし
顔を下風に承く
俯しては嘉客を觀
仰ぎては玉容を瞻る
己に施すこと唯だ約かに
禮に于て斯れ豊かなり
天 老い難きを錫ひ
嶽の崇きが如し

詩題が示す通り、此の詩は大將軍であった穎のもとで開かれた宴會の席で、穎に命ぜられるままに作ったものである。先の陸雲の「與平原書」其二五のなかに、「了不作備」（了く備へを作さず）という表現があったが、このことから考えると、このような會の時には、

あらかじめ作詩の準備をして、會に臨んだのであろうか。王弘遠を祖道する詩はうまく作れなかつた雲であるが、この度は、比較的長編の詩を作ることができたのであろう。詩の第三章に、

在昔 姦臣 在昔 姦臣は

稱亂紫微 亂を紫微に稱げり

というのは、「姦臣」すなわち趙王倫が帝位を奪つたことを言い、續けて、

神風潜駭

神風 潜く駭り

有赫茲威

赫たる有りて茲に威あり

というのは、「神風」である成都王穎の義軍が、天子の威儀を表したことを言ったものであり、一篇は穎の武功を讃え、ますますの隆盛を壽ぐものとなっている。

陸雲の兄機への書翰のなかには、次のようなものもある。

前日觀習、先欲作講武賦、因欲遠言大體。欲獻之大將軍、才不便作大文。得少許家語。不知此可出不。故鈔以白兄。若兄意謂此可成者、欲試成之。大文難作。庶可以爲關雎之見微。謹啓。

前日 觀習し、先に「講武の賦」を作らんと欲し、因りて大體を遠言せんと欲す。之を大將軍に獻せんと欲するも、才は大文を作るに便ならず。少許 家の語を得たり。此れ出だす可きや不やを知らず。故に鈔して以て兄に白す。若し兄 此れ成る可き者と意謂はば、試みに之を成さんことを欲す。大文は作り難し。庶はくは以て「關雎」の見微と爲す可し。謹啓。

(「與平原書」其十)

これは、関兵をした雲が、「講武賦」を作つて、それを大將軍の穎に献上しようとしているのであるが、それがうまくできないので、兄に手傳つてもらつて、完成させようとしているのである。或いはこれも、成都王穎のもとに文人が集う際に、この賦を發表するといつたことがあつたのであろう。

ところで、『世説新語』賞譽篇注に引く荀綽の『冀州記』に、次のようなことが記されている。

(楊) 淮見王綱不振、遂縱酒不以官事規意、消搖卒歲而已。成都王知淮不治、猶以其名士、惜而不遣、召爲軍咨議祭酒。

淮は王綱の振はざるを見て、遂に酒を縱にして官事を以て意に規さず、消搖として歳を卒ふる而已。成都王は淮の治ならざるを知るも、猶ほ其の名士たるを以て、惜しんで遣

らず、召して軍咨議祭酒と爲す。

國政の亂れたのを見て、酒に浸って政務を執らない楊准を、穎は、そのだらしなさを知りつつも、彼が名士であるので、惜しんで手放すことをせず、召して軍咨議祭酒としたというのであるが、これは、穎が人を集めるときの基準として、その人格・人柄云々よりも、いかに著名であるかということ、考へにいれていたことの證になるのではなからうか。要するに、穎の許に集った文人集團は、穎が己の權勢を誇らんがために、集められたものであったように思われる。この點について言えば、穎の文人集團は、賈謐のそれと似た性格のものといえよう。したがって、先に取り上げた陸雲の書翰（「與平原書」其二五）のなかで、

張魏郡作急就詩、公甚笑燕。

張魏郡は急就の詩を作り、公は甚だ笑ひ燕ぶ。

と、張魏郡が急就の詩（即興の詩のことであろう）を作つて、穎が大笑いして喜んだといひ、いかにも其の場の雰圍氣が和やかなように見えるけれども、それはあくまでも表面的なものであつて、内心では、穏やかならざるものがあつたのかも知れない。

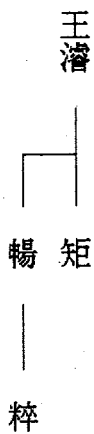
成都王穎の許に集まった文人は、陸機・陸雲兄弟のほか、先に陸雲の書翰のなかに其の名の見えた「王弘遠」なる人物がいるが、次に此の王弘遠と陸機との關わりを見てみよう。

『晉書』卷八九・忠義傳にある嵇含傳（含は紹の從子）に、

時弘農王粹、以貴公子尚主、館宇甚盛。圖莊周于室、廣集朝士、使含爲之讚。含援筆爲弔文、文不加點。其序曰、帝婿王弘遠、華池豐屋、廣延賢彦、……

時に弘農の王粹は、貴公子たるを以て主に尚し、館宇甚だ盛んなり。莊周を室に圖き、廣く朝士を集め、含をして之が讚を爲らしむ。含は筆を援りて弔文を爲り、文は點を加へず。其の序に曰く、「帝の婿の王弘遠、華池 豐屋に、廣く賢彦を延き、……

とあり、これによつて「弘遠」が王粹の字であることが分かる。また、『晉書』卷四二・王濬傳に據れば、王濬（字は士治）の子が矩で、その弟の暢の子が粹ということである。系圖で示せば、次の如くである。



また粹は、太康十年（二八九）、武帝の詔により穎川公主を尙り、魏郡太守となつてゐるが、先に擧げた「嵇含傳」に見える記事は、此の頃のことと思われる。

趙王倫は、永寧元年（三〇一）に惠帝を幽閉し、みずから帝と稱したが、このとき王粹は、劉暉によって罷免させられた。その時の様子は『晉書』卷五四・劉暉傳には、次のように記されている。

暉遷太原内史。趙王倫篡位、假征虜將軍、不受。與三王共舉義。惠帝復阼、暉爲左丞。正色立朝、三臺清肅。尋兼御史中丞、奏免尚書僕射、東安公孫及王粹、董艾等十餘人。朝廷嘉之、遂即眞。

暉は太原内史に遷さる。趙王倫位を篡ふや、征虜將軍を假するも、受けず。三王と共に義を擧ぐ。惠帝復阼し、暉は左丞と爲る。色を正して朝に立ち、三臺清肅す。尋いで御史中丞を兼ね、奏して尚書僕射、東安公孫及び王粹・董艾等十餘人を免ず。朝廷之を嘉とし、遂に眞に即く。

翌、太安元年（三〇二）、成都王穎は河間王顥とともに長沙王乂を討ったが、此の時のことは、『晉書』卷五四・陸機傳には次のようにある。

太安初、穎與河間王顥起兵討長沙王乂。假機後將軍、河北大都督、督北中郎將王粹、冠軍牽秀等諸軍二十餘萬人。機以三世爲將、道家所忌。又羈旅入宦、頓居羣士之右、而王粹、牽秀等皆有怨心。固辭都督、穎不許。機鄉人孫惠、亦勸機讓都督於粹。

太安の初め、穎は河間王顥と兵を起し長沙王乂を討つ。機に後將軍・河北大都督を假し、北中郎將王粹・冠軍の牽秀等の諸軍二十餘萬人を督せしむ。機は以へらく、三世に將爲るは、道家の忌む所なり。又た羈旅入りて宦して、頓に羣士の右に居り、王粹・牽秀等は皆な怨心有り、と。都督を固辭するも、穎は許さず。機の郷人の孫惠も、亦た機に勧めて都督を粹に譲らしむ。

これと同様のことが、『晉書』卷七一・孫惠傳にも記されている。

是時、穎將征長沙王乂、以陸機爲前鋒都督。惠與機同鄉里、憂其致禍、勸機讓都督於王粹。

是の時、穎は將に長沙王乂を征せんとし、陸機を以て前鋒都督と爲す。惠は機と郷里を同じくすれば、其の禍ひを致すことを憂へて、機に勧めて都督を王粹に譲らしむ。

南方呉國出身の機が、北人の王粹・牽秀らの上に立つことを憂慮しての、孫惠の意見であったが、このようなところにも、南人の置かれていた微妙な立場があらわれているように思われる。此の點については、たとえば『吳志』陸抗傳注に引く『機雲別傳』に、

機吳人、羈旅單宦、頓居羣士之右、多不厭服。

機は吳人にして、羈旅の單宦なるに、頓に羣士の右に居れば、厭服せざるもの多し。

といい、また『太平御覽』卷四二〇に引く『三十國春秋』には、

機呉人、而在寵族之上、人多惡之。

機は呉人にして、而も寵族の上に在れば、人の之を惡むもの多し。

と記されている。

結局、陸機は此の忠告を聴き入れず、そのまま軍を率いて出陣した。そうして、「河橋の役」で大敗し、その責任をとらされて誅せられたのであるが、陸機を死に追いやった人物が、王粹とともに機の配下にあつた牽秀なのであつた。『晉書』卷六〇・牽秀傳には、次のようにある。

秀任氣、好爲將帥。張昌作亂、長沙王又遣秀討昌。秀出關、因奔成都王穎。穎伐又、以秀爲冠軍將軍、與陸機、王粹等共爲河橋之役。機戰敗、秀證成其罪、又詔事黃門孟玖、故見親於穎。

秀は氣に任せて、好んで將帥と爲る。張昌 亂を作すや、長沙王又は秀を遣はして昌を討たしむ。秀は關を出で、因りて成都王穎に奔る。穎 又を伐つや、秀を以て冠軍將軍と爲し、陸機・王粹等と共に河橋の役を爲す。機の戰敗するや、秀は其の罪を證成し、又た黃門の孟玖に詔事し、故に穎に親しまる。

王粹も牽秀も、賈謐の「二十四友」のメンバーとして、賈謐の亡くなる永康元年（三〇〇）以前に、謐の坐において陸機とは互いに面識があつたはずである。いわば、かつての文學の仲間が、いまや相手を死に追い詰めることになつてしまつたわけで、西晉という混亂した時代をよく反映していると同時に、ある意味では賈謐の文學集團の性格を示しているとも言えよう。

さて、永嘉二年（三〇八）に、匈奴の劉元海は帝を僭稱し、石勒を持節・平東大將軍とした。勒は鄴に攻め入つたが、此のとき王粹は石勒に執えられている。すなわち『晉書』卷一〇四・石勒載記に次のようにある。

及元海僭號、遣使授勒持節、平東大將軍。校尉、都督、王如故。勒并軍寇鄴。鄴潰、和郁奔于衛國。執魏郡太守王粹于三臺。

元海 僭號するに及び、使ひを遣はして勒に持節・平東大將軍を授く。校尉・都督・王は故の如し。勒は軍を并せて鄴に寇す。鄴 潰れ、和郁は衛國に奔る。魏郡太守王粹を三臺に執ふ。

執えられた王粹は、殺されてしまつたらしく、『晉書』卷五・孝懷帝紀には、

（永嘉二年十一月）己酉、石勒寇鄴。魏郡太守王粹戰敗、死之。

己酉、石勒 鄴を寇す。魏郡太守王粹 戰敗し、之に死す。

と記されている。

「河橋の役」での敗戦の責任が陸機にあると證明し、機を死に追いやったきつかけを作ったのは牽秀であったが、孟玖も陸機を死なせることになった原因をつくった一人である。孟玖は穎に寵愛されていた宦者であるが、彼と陸雲の間には、次のようなことがあった。

成都王長史盧志、與機弟雲、趣舍不同。又黃門孟玖、求爲邯鄲令於穎、穎教付雲。雲時爲左司馬。曰、刑餘之人、不可以君民。玖聞此怨雲、與志讒構日至。

成都王の長史の盧志は、機の弟の雲と、趣舍 同じからず。又た黃門の孟玖は、邯鄲の令と爲らんことを穎に求め、穎は雲に教付す。雲は時に左司馬爲り。曰く、「刑餘の人は、以て民に君たる可からず」と。玖は此れを聞きて雲を怨み、志と讒構すること曰くに至る。

(『世説新語』尤悔篇注引『機別傳』)

すなわち、黃門の孟玖が、邯鄲の令となろうとしたとき(『晋書』陸雲傳では、玖が父親を邯鄲の令にしようとしたことになっている)、長史の盧志らは皆な孟玖におもねりそれに賛成したが、左司馬であった陸雲はそれを認めなかったというのである。これがもとで孟玖は盧志とともに、雲のことを穎に讒言することが多くなっていくのであるが、この盧志も、陸機が初めて入洛したときに、機とやりあった北人なのであった。

盧志於衆坐、問陸士衡、陸遜陸抗、是君何物。答曰、如卿於盧毓盧昶。士龍失色。既出戶、謂兄曰、何至如此。彼容不相知也。士衡正色曰、我父祖名播海內。寧有不知。鬼子敢爾。

盧志 衆坐に於いて、陸士衡に問ふ、「陸遜・陸抗は、是れ君の何物ぞ」と。答へて曰く、「卿の盧毓・盧昶に於けるが如し」と。士龍は色を失ふ。既に戸を出でて、兄に謂ひて曰く、「何ぞ此の如きに至れる。彼は相ひ知らざる容し」と。士衡 色を正して曰く、「我が父祖、名は海内に播けり。寧んぞ知らざること有らん。鬼子 敢て爾す」と。

(『世説新語』方正篇)

孟玖には超という弟がいたが、彼が陸機の率いる長沙王又討伐の軍に加わった。戦さが始まると、孟超は機の命令を無視して、武装も整えないままに敵陣に突入し、死んでしまった。兄の玖は機が弟を殺したに違いないと勘繰り、「機は謀反の心を抱いている」と穎に讒言した。かねてより盧志からも機の悪言を聞かされていた穎は、ひどく怒り、ついに牽秀に命じて機を捕えさせた。『世説新語』尤悔篇注に引く『機別傳』には、

及機於七里澗大敗、玖誣機謀反所致。穎乃使牽秀斬機。

機の七里澗に大敗するに及び、玖は機の謀反の致す所と誣る。穎は乃ち牽秀をして機を

斬らしむ。

と記されている。

もとより陸機の命を救けたのは成都王穎であったが、その命を奪ったのもまた穎であったのである。そうして、穎に機を殺すように誣告した孟玖自身も、今度は自分が穎にその命を奪われてしまう。すなわち、『晉書』卷四三・王澄傳に、次のようにある。

穎嬖豎孟玖譖殺陸機兄弟、天下切齒。澄發玖私姦、勸穎殺玖。穎乃誅之、士庶莫不稱善。

穎の嬖豎の孟玖は陸機兄弟を譖殺し、天下切齒す。澄は玖の私姦を發き、穎に玖を殺さんことを勸む。穎は乃ち之を誅し、士庶善しと稱せざるもの莫し。

穎が寵愛していた孟玖を誅したのは、そうすることによって自己の世間での評価が高くなるであろうことを考えてのことであったのではなからうか。それは穎が陸機の命を救った時にも言えるのではなからうか。

このように、成都王穎の府に集まった文人集團は、穎がみずからの権勢を誇示せんが爲に集めたものであり、同時にまた、そこに集まった文人達は、穎の権勢を頼って集まったのである。そのなかには、陸機・陸雲をはじめとする南人もいれば、二陸に對して敵意をもっていた北人も多くいたわけで、このようなところは、買讒のもとに集まった「二十四友」の文人集團とその性格を等しいものとしている。したがって、穎のサロンでも、穎の御機嫌をうかがうての文學活動が行なわれていたものと思われる。

三 集團相互の関連と各集團の特徴

以上、西晉の文學集團について、活動の時期の順に、それぞれの集團の構成員を中心として、成立の過程にも觸れながら、そこでの活動の様子を見ていったが、次に、西晉という時代のなかでの、それぞれの文學集團の位置付けをしてみたいと思う。

これまで取り上げた文學集團のなかで、最も早い時期に活動したのは、愍懷太子府の文學集團である。司馬懿は、祖父の武帝司馬炎が太熙元年（二九〇）四月に崩じた後、父の司馬衷が即位して惠帝となり、永熙と改元したときに、太子に立った。そうして、翌元康元年（二九一）に、東宮に出た。太子にとっては祖父にあたる武帝司馬炎は、太子の將來

に並々ならぬ期待をかけていた。そのため、太子の取り巻きには、錚々たるメンバーが揃えられたのである。此の時、陸機も太子の洗馬として、太子府に仕えることになった。勿論、陸機の太子府勤務に当たっては、張華の強い後押しがあったものと思われるが、さらに、この陸機の任官に際しては、賈誼の推輓があったのではないかと推測される。元康四年（二九四）陸機は太子洗馬から吳王司馬晏の郎中令として赴任し、やがて元康六年（二九六）に尚書郎として再び入朝したが、このときに魯公であった賈誼から詩を贈られ（潘岳「爲賈誼作贈陸機」）、それに答えた詩「答賈長淵」の序に、次のようにある。

余昔爲太子洗馬、賈長淵以散騎常侍、東宮積年。余出補吳王郎中令。元康六年、入爲尚書郎。魯公贈詩一篇。作此詩答之云爾。

余は昔 太子洗馬爲りしとき、賈長淵は散騎常侍を以て、東宮に年を積めり。余 出でて吳王の郎中令に補せらる。元康六年、入りて尚書郎と爲る。魯公 詩一篇を贈らる。此の詩を作りて之に答ふと爾云ふ。

つまり、賈誼は散騎常侍として東宮に仕えていたわけで、やがて陸機は賈誼の主催する文學集團「二十四友」に加わるが、誼との交わりは已に此の頃から始まっていたのである。

ところで、陸機と時を同じくして洛陽入りした南人の多くが、愍懷太子府に仕えている。例えば、二陸と俱に入洛して「三俊」と稱された顧榮は、太子中舍人となっているし、賀循は太子舍人に、薛兼は太子洗馬になっている。そうしてこれらの南人は、全て張華の推挙によって入洛した人たちであって、太子府勤務も、張華の後押しがあつてのものと思われる。當の張華はと言えば、太子が東宮に出た元康元年（二九一）の前年の永熙元年に、皇太子に立てられた愍懷太子の少傅となっている。

武帝が崩御するや、悼楊后の父である楊駿が政治を輔け、太康三年に卒した賈充の朋黨の勢力を抑えて以来、政治の實権を掌握していた。惠帝の即位後も、やはり楊駿が朝政を専らにした。惠帝は賈充の娘である妃の賈氏を皇后に立てたが、この賈后が楊駿と政権を争い、ついに賈后は元康元年、楊駿を誅殺し、政治の實権を握った。このような混乱した状況の中にあつて、張華は武帝の遺志を察してか、愍懷太子に強い期待を抱いていたと思われる。散騎常侍として太子府に仕えていた賈誼は、賈后の族人として權勢を誇っていたが、その賈誼の勢力に對抗するために、張華は太子府に人材を送り込んでいたように考えられる。張華は早い時期から、幅廣く人材を發掘していたが、賈氏一族の權勢に對抗し、その勢力を牽制するためには、北人よりも、寧ろ政治的なしがらみのない南人の方が都合がよいということもあつたのではなからうか。更に早くから其の才能に注目していた陸機

が、賈誼の「二十四友」に加わっていたことは、張華にとっては却って好都合であったかも知れない。

そもそも張華は、賈充・楊珧・王恂・華廩らの派閥と、對立關係にあつた任愷派に、庾純・温顯・向秀・和嶠とともに名を列ねていたために、賈充とは政敵であつた。やがて賈充の死後、張華は武帝に重用されていたが、たまたま太康八年（二八七）に太廟の屋根が壊れたことで、太常の任を解かれ、武帝の世が終わるまで、列侯として朝見した。惠帝が即位して、その太子少傅となつたが、華は、王戎・裴楷・和嶠とともに徳望があることで、楊駿ににらまれていたために、朝政には關與しなかつた。楊駿が誅されて後、賈后は悼楊皇太后を廢せんとし、群臣がそれに賛成したのに對し、ひとり張華だけは異議を唱えたが、結局この意見は聴き入れられず、皇太后は廢されて庶人となつた。このように、張華は、賈氏一族が權勢を擅にするのを、なんとかして食い止めようと考えていたようである。そうして近い將來、愷懷太子が帝位に就くや、必ず晉朝を隆盛に導いてくれるであろうという思いから、自分の息のかかつた人士を、多く太子府に集めていたのではなからうか。爲に南人も多くそこに集うことになつたと思われる。

さて、このように、武帝にその將來を囑望され、晉王朝の期待を受けて構成されたと言つてもよい此の文學集團では、太子が主催する宴會の席が、その主な活動の場となつた。ここでは、此の集團の性格からして仕方のないことではあるが、太子を稱揚し、太子の機嫌をとるような作品が多く作られることになつた。ただ、この集團に陸機・陸雲らの南方文人も加わっていたということは、遊びの要素が強い宴席であつても、やはり北方文人と南方文人との間で、競争意識が少なからずあつたであろうことは、十分に考えられることである。

愷懷太子府における文學集團の活動は、太子府が開かれた頃は甚だ活發なものであつたが、やがて太子府下の文人達が、次々と地方へ赴任してゆくにつれて、衰微していったと思われる。太子府には、優秀な人材が集められていたが、そのような人材は、やがて晉王朝の安定を謀るために、地方へ赴任させられていったようである。二陸が、呉王司馬晏の郎中令として呉に赴いたのも、そのためであろう。

愷懷太子府集團の活動が弱まつた後、いわゆる賈誼の「二十四友」の活動が始まる。呉王晏の郎中令として洛陽を出た陸機は、二年後、すなわち元康六年（二九六）に、尚書中

兵郎として再び入朝した。陸機が「二十四友」に名を連ねたのも、この頃のことと思われる。

そもそも此の賈謐の文學集團は、賈后の甥として絶大な権勢を誇っていた謐が、自己の名聲を高めんがために集めたものであり、そこに集った文人も、謐の権勢におもねって政治に参画するのがその目的であった。賈謐に誘われるままにその集團に加わった人士が殆どであったなかに、謐の誘いをきっぱりと断り、爲に謐が誅された後、その行爲を認められた人もいた。祗紹がその人である。「晉書」卷八九・祗紹傳には、次のように記されている。

元康初、爲給事黃門侍郎。時侍中賈謐、以外戚之寵、年少居位、潘岳・杜斌等、皆附託焉。謐求交於紹、紹距而不答。及謐誅、紹時在省、以不阿比凶族、封弋陽子、遷散騎常侍、領國子博士。

元康の初め、給事黃門侍郎と爲る。時に侍中賈謐は、外戚の寵あるを以て、年少わかくして位に居り、潘岳・杜斌等は、皆な焉こゝに附託す。謐は交りを紹に求むるも、紹は距みて答へず。謐の誅せらるるに及び、紹は時に省に在り、凶族に阿比せずといふを以て、弋陽子に封ぜられ、散騎常侍に遷り、國子博士を領す。

しかし、このようなことができるのも、祗紹が祗康を父に、祗喜を伯父に持つ北人であればこそ話であって、陸機のような立場の者には、とうてい謐の誘いを断ることなど出来なかつたであろう。「太平御覽」卷五九九に引く葛洪「抱朴子」には、

陸君深疾文士放蕩流遁、遂往不爲虛誕之言。非不能也。

陸君 深く文士の放蕩流遁するを疾にくみ、遂に往むかひて虚誕の言を爲さず。能はざるに非ざるなり。

というように、元來、陸機は賈謐の坐に集う人士達とは相容れないものがあつたはずであるが、南人である彼は意を屈して賈謐の集まりに加わるしかなかつたのであろう。ただ、潘岳をはじめとする北方の人士達が、陸機に對して特別な感情を持つていたであろうことや、この集團が、純粹に文學を愛好する爲のものではなく、非常に政治的色彩の強いものであつたことは、すでに述べたごとく、「晉書限斷」をめぐる一連のやりとりを見ても分かる。

此の賈謐の文學集團と、ほぼ時を同じくして活動していたのが、張華を中心とする文學集團である。張華は、西晉王朝が始まったところから、盛んに優秀な人材を発掘していたが、

殊に、賈后一族がその權勢を擅にするや、賈后勢力に對抗すべく、多くの人材をその下に集めた。賈謐が、専ら自己の宣傳の爲に、いわゆる時の著名なる人士を集めたのに對し、張華のほうは、賈謐の勢力を牽制すべく、寧ろ權力の外にある人を精力的に集めたようである。もちろん、逸早く張華にその才能を認められた陸機も、張華集團にあっては中心的な役割を果たしていた。陸機が、張華集團に身を置きながら、他方、賈謐の集團に属していたというところに、亡國具出身の陸機の微妙な立場がよく表されているが、張華にとつてみれば、信頼できる陸機が、賈謐のサロンに出入りすることは、賈謐側の動きを知り、その情報を得るためには、却って都合がよかつたとも思われる。

もとより賈謐が、多くの文人を集めたということは、謐が文學の愛好者であつたということが言えるかも知れないが、彼自身が優れた文人であつたかどうかは疑わしい。いま、逢欽立輯『全晉詩』に賈謐の名を見ることはできないし、嚴可均輯『全晉文』を見てもその名は見出せない。また陸機に贈った詩を潘岳に代作させたこと（それはそれで意圖することがあつたのではあろうが）も、謐の文才と關わりがあると感じられる。一方、張華はといえば、彼はみずからも一級の文人であつた。このことは、賈謐集團と張華集團との性格の、決定的な違いであつて、その集團のなかで行なわれた活動にも、おのずと違いがあつたものと想像される。謐の坐では、専ら謐におもねり、謐の機嫌をとるための詩文の制作が行なわれたのに對し、張華のところでは、華自身も加わつての文學論が展開されたものと思われる。もちろん、謐の集會においても、或いは文學論を關わせるといったこともあつたかも知れないが、それは張華の文會における議論とは、趣を異にしていたのではなからうか。

以上、永熙元年（二九〇）から、元康六年（二九六）頃までの文壇の様子を、陸機の動きを中心に見てきたのであるが、それでは此の間の、北方文壇の中心人物である潘岳の動きは如何なるものだったのであろうか。

潘岳は、惠帝の永熙元年に、太傅の楊駿に召されてその主簿となつている。すなわち、『晉書』潘岳傳には次のようにある。

楊駿輔政、高選吏佐、引岳爲太傅主簿。

楊駿の輔政するや、吏佐を高選し、岳を引ききて太傅の主簿と爲す。

『晉書』惠帝紀には、

(永熙元年)以太尉楊駿爲太傅、輔政。
太尉楊駿を以て太傅と爲し、政を輔^手けしむ。

とあって、岳が楊駿の主簿になったのは、永熙元年と見て間違いない。これと時を同じくして、實は陸機も楊駿に招かれて祭酒となっているのである。『晉書』陸機傳に云う、

後太傅楊駿辟爲祭酒。

後、太傅楊駿 辟して祭酒と爲す。

と。やがて賈謐のサロンで對抗意識を剥き出しにしてやりあう潘岳と陸機は、こうして一時期、同じ職場にいたのである。

その後、先に見たように、陸機の方は愍懷太子の洗馬として太子府に召されたが、潘岳の方は、楊駿が誅殺されたあと官位を剝奪されている。かつて河陽縣令の時に、厚遇していた公孫宏の計らいによって、死罪からは免れたものの、不遇の日々を送っていた。やがて元康二年(二九二)、岳四十六歳のときに長安令となって、官界に復歸した。此の間の經緯については、潘尼の「獻長安君安仁」詩に詳しい。^(注1)ともあれ陸機・陸雲兄弟や從子の潘尼が、愍懷太子の許で活躍していた時に、潘岳の方は、不遇を託っていたのである。

さてその後、潘岳は元康六年(二九六)に博士に拜せられたが、母の病いのためにそれを辭退している。石崇の「金谷の集い」に参加したのは、この頃のことである。石崇自身は、賈謐の「二十四友」のメンバーであり、潘岳とともに、謐に諂い仕えていた。賈謐のサロンでは、もっぱら謐の權勢を憚って、思う存分な文學活動はできなかったものと思われる。そこで、石崇は金谷の別邸に同好の文士を集めては、文會を開いていたのであるが、此の文會では、誰はばかりことなく、氣心の知れ合ったもの同士の文學活動ができたものと考えられる。思うに、石崇以外の文人達も、それぞれに同好の士を集めては、いわゆる内輪の文會を設けて、独自の文學活動を展開していたのであろう。

なお、陸雲が『詩經』に基づく詩作を仲間の者とともに行っていたのも、このように賈謐の文學集團や張華集團を離れてのものであったと思われる。

當時、西晉文壇では多くの五言詩が作られていたなかであって、陸雲は『詩經』に倣った古典的な四言詩の制作に励んでいた。貴人の主催する文會の席など、いわゆる正式な場においては、やはり四言詩を中心に詩が作られていたようであるが、その他の場合、例えば個人的な詩の贈答などの場合には、五言詩が多く作られていた。なかでも、樂府詩は、

個人的な感情を吐露する時に、詩人は多く此の形式を借りている。陸機に多く残されている一連の樂府詩も、このような傾向の強い作品である。そうしてこのような自己の感情を比較的そのままに表現できる樂府詩は、仲間の者が集まった席で作られ、發表されたのであろう。

鍾嶸が『詩品』の序で、

太康中、三張二陸、兩潘一左、勃爾俱興、踵武前王。風流未沫、亦文章之中興也。

太康中、三張・二陸、兩潘・一左、勃爾として俱に興り、武を前王に踵ぐ。風流未だ沫まず、亦た文章の中興なり。

と、西晉の太康期を、建安期にその第一期黄金時代を迎えた五言詩の、第二期の隆盛期であると言っているのであるが、かかる風潮のなかにあって、陸雲は、潘尼らとともに、古典的な詩の再評價を試みていたのであろう。

この後、張華の努力にもかかわらず、西晉王朝は愈々その混迷の度を深めていく。賈后は目に餘る淫虐なる行爲を繰り返して、ついに愍懷太子を廢嫡させるまでに至る。この時、愍懷太子を陥れる文章を起草したのが、潘岳であった。

愍懷太子は、生れつき聡明であって、その將來を期待されていたのであるが、實は彼の母親は賈后ではなく、側室の謝才人なのであった。太子の名聲が高くなればなるほど、それは賈后にとっては甚だ都合なことであつた。そこで賈后は、宦官を差し向けて太子が淫蕩に溺れるようにさせたのである。太子は宮中に市場をつくり、酒屋や肉屋を並べては宦官を相手に商売をするのであつた。太子の母の謝才人は、もともと肉屋の出であつたが、そのためであろうか、太子は本職そのままに肉の目方を正確に計ることができたという。こうして元康九年（二九九）、賈后はついに太子に手を下したのである。惠帝の病いにかこつけて太子を呼び寄せ、酒の飲めない太子に無理遣りに酒を飲ませて、泥酔したところで潘岳が起草した文章を示して、それを太子に清書させたのである。その文章とは、『晉書』愍懷太子傳にある次のようなものである。

陛下宜自了。不自了、吾當入了之。中宮又宜速自了。不了、吾當手了之。并謝妃共要

剋期而兩發。勿疑猶豫、致後患。茹毛飲血於三辰之下。皇天許當掃除患害。立道文爲

王、蔣爲內主。願成、當三牲祠北君、大赦天下。要疏如律令。

陛下 宜しく自ら了すべし。自ら了せざれば、吾 當に入りて之を了せん。中宮も又た宜しく速かに自ら了すべし。了せずんば、吾 當に手づから之を了せん。謝妃と并せて

共に期を剋りて兩つながら發せんことを要す。疑ふこと勿れ 猶豫せば、後の患ひを致さんことを。毛を茹ひ血を三辰の下に飲む。皇天 當に患害を掃除すべきを許さん。道文を立てて王と爲し、蔣を内主と爲す。願ひの成らば、當に三牲もて北君を祠り、天下を大赦せん。疏して律令の如くするを要す。

これが謀反の證據となつて、太子は廢せられたのである。陸機とやりあつた「晉書限斷の議」も潘岳がつくつたものであり、このように潘岳は、賈氏一族に阿り諂つていたのであつた。

やがて賈謐は永康元年(三〇〇)、趙王倫によつて誅せられるが、それによつて賈謐の文學集團も消滅した。同じ年、張華は死罪となつており、潘岳も石崇・歐陽建とともに處刑されている。

こうして、張華と賈謐を中心とした文學集團は、相次いで消滅し、それぞれのグループに所屬していた文人も分散していった。陸機は、趙王倫に招かれ、その相國參軍となり、賈謐を誅した功績によつて、關中侯を賜つてゐる。それが自らの意思ではないにしても、一時は文會の主催者に戴いてゐた賈謐を誅さねばならなかつた陸機の心中の苦慮は、いかにばかりのものがあつたであらうか。

その後、趙王倫は齊王冏をはじめとする諸王の反亂によつて死を賜わり、陸機も捕えられて最早これまでと思われたときに、成都王穎によつてその命を救われる。時はあたかもいわゆる「八王の亂」の最中であり、穎が陸機の命を救つたのも、自己の名聲を得んがためのものであつたように思われる。そうして穎の許に集つた文人達は、穎の主催する文會において詩文を作り合つたのであつたが、そこでの文學活動も、やはり穎の權勢におもねるものであつて、多分に政治的色彩の濃いものであつた。そうして成都王穎集團と同様に、八王それぞれの府においても、このような文學集團が形成され、同じような文學活動が行なわれていたように想像される。

ところで、このような形成されてはまた解散していった、北人を中心とした文學集團とは別に、陸機を中心とした南方文人集團は、愍懷太子府に二陸が仕えていた頃に形成され、その後も陸機・陸雲や顧榮を中心として、消滅することなく、その活動を續けていった。入洛後の陸機は、張華の庇護のもと多くの南人を北方社會に導き入れていったが、こうして北方社會に入ってきた南人達は、互いの情報を交換するために、ときにはまた北人の文學と對決するための文學を議論するために、南人だけの文學集團を形成していったのであ

る。そうしてこのような南人の文會には、時には潘尼や馮文穎といった、南人に理解のある北人も参加していたようであるが、そのような中から、また新しい文學論が展開され、それが實作にも影響を及ぼしていたものと思われる。

このように、西晉文壇における文學集團は、政治の中樞にある北人を中心に、離合集散を繰り返していたが、南人の代表である陸機は、石崇の「金谷の會」のような北人だけの極めて個人的な文會を除いては、張華集團や、それと敵對關係にあった賈謐集團などに常に参加している。このなかで、張華が純粹に陸機の文人としての才能を認め、陸機とも眞劍に文學論を語り合うということがあった他は、賈謐にせよ、成都王穎にせよ、いずれも陸機の文人としての名聲を頼んで、彼を集團に加えたわけであるが、しかし、立場の弱い陸機などは、文學集團が形成されるたびに、そこに名を連ねざるを得なかつたのであろう。また、そのような文學集團は、ある意味においては、南方文人と北方文人の對決の場でもあり、ために南方文人は、陸機を中心に独自の文學集團を組織して、その北方文人との對決に備えていたものと思われる。そうして、このような南人と北人との對立のなかから、西晉時代独自の華麗にして洗練された文學が生み出されていったものと考えられるのである。

(注)

① 「潘岳と潘尼」(『中國中世文學研究』第二十二號)參照。

四 西晉文壇關係年譜

| 西曆 | 天子・年號 | 事項 |
|-----|--------|---|
| 二六五 | 武帝 泰始元 | 武帝（司馬炎）即位し、西晉王朝はじまる。 |
| 二七〇 | 六 | *この頃から張華集團の活動はじまる。 |
| 二八〇 | 太康元 | 呉、滅亡する。 |
| 二八九 | 十 | このころ陸機は弟雲と相前後して入洛。 |
| 二九〇 | 惠帝 永熙元 | 武帝、死去。惠帝（司馬衷）即位する。愍懷太子、立つ。 |
| 二九一 | 元康元 | 愍懷太子、東宮に出る。 *愍懷太子府集團の活動はじまる。 「陸機は太子洗馬として集團に参加。陸雲は太子舍人」 *南人集團、此の頃に形成される。 |
| 二九四 | 四 | 陸機、雲とともに呉王晏の郎中令となる。 |
| 二九六 | 六 | 陸機・陸雲、再び入朝。 張華、司空となる。 *この頃から張華集團の活動が盛んになる。 「陸機は弟の雲とともに参加する」 *賈謐の「二十四友」集められる。 「陸機は陸雲とともに参加」 |

| | | |
|-----|-----------|--|
| 三二六 | 愍帝 建興四 | 西晉王朝、滅亡。 |
| 三二二 | 六 | 顧榮、死去。 |
| 三二一 | 懷帝 永嘉五 | 永嘉の亂、起こる。 |
| 三〇三 | 二 | 陸機、弟雲とともに穎に殺される。 〔陸機は雲とともに参加〕 |
| 三〇二 | 太安元 | * 成都王穎集團が集められる。 成都王穎に招かれて、平原内史となる。陸雲は清河内史。 |
| 三〇一 | 永寧元 | 八王の亂、始まる。 |
| 三〇〇 | 永康元 | 潘岳・石崇・歐陽建、死刑になる。 張華、死罪となる。 * 張華集團解散。 |
| 二九九 | 九 | 賈后、愍懷太子を廢嫡する。 愍懷太子、殺される。 趙王倫、賈后を廢し、賈謐を誅す。 * 「二十四友」解散。 |

* 石崇の「金谷の會」開かれる。

第二章 陸機を中心とする文學集團——南人集團——

一 南人集團の形成過程と其の目的

前章で見てきたように、西晉文壇には、いくつかの文學集團があつて、その集團の中では、集團それぞれに特色のある文學活動が行なわれていたようである。これらの文學集團の殆どが北方人士を中心としたものであつた中で、陸機を中心とした南人によって構成された文學集團だけは、獨りその性格を異にしていた。政治的影響の強い集團という點から言えば、此の南人集團も多分に政治の影響を受けてはいたが、北人の集團が、集合離散を繰り返すなかにあつて、南人集團だけは、陸機を中心にして、解散消滅することなく、その活動を續けていた。ここでは、此の南人集團の形成の過程を、入洛後の陸機・陸雲の動きを通して見てゆき、さらに南人集團が形成された其の目的についても、考えてみたい。

(1) 二陸入洛以後の状況——二陸に對する北人の態度——

陸機・陸雲兄弟は、吳國滅亡後、舊里の華亭における、およそ十年間の退居ののち、相前後して入洛した。入洛後の二陸は、張華の知遇を得て、次第に北方の社會に同化していったが、北方の人士達のすべてが二陸を快く受け入れたわけではなく、そのほとんどが二陸に對して非常に冷淡な態度をとつた。たとえば北方文壇の中心的存在であつた潘岳なども、これと同じ立場をとつていたようである。しかし、そのような状況の下にありながらも、二陸は張華らの庇護を受けて、北方社會における自分達の足場を徐々に固めてゆき、そうして次には、彼らが中心となつて、張華らの援助を仰ぎながら、同郷の人士を次々と北方社會へ引き入れていった。こうして入洛してきた南方の人士達によって、二陸を中心の一つの集團が形成されていったが、先ずは、入洛後の二陸と北方の文人達との關わりについて見てみよう。

入洛してきた二陸に對し、北方の人士達の多くが、好意的でなく冷淡な態度をとつたことについては、『世說新語』に見える以下の話が、それを如實に物語っている。

陸機詣王武子。武子前置數斛羊酪、指以示陸曰、卿江東何以敵此。陸云、有千里草藥、

但未下鹽鼓耳。

陸機、王武子に詣る。武子は前に數斛の羊酪を置き、指して以て陸に示して曰く、「卿の江東、何を以てか此に敵する」と。陸云ふ、「千里の尊羹有り、但だ未だ鹽鼓を下さざるのみ」と。

(言語篇)

陸士衡初入洛、咨張公所宜詣。劉道眞是其一。陸既往、劉尚在哀制中。性嗜酒。禮畢、初無它言、唯問、東吳有長柄壺盧。卿得種來不。陸兄弟殊失望、乃悔往。

陸士衡、初めて洛に入り、張公に宜しく詣るべき所を咨ふ。劉道眞は是れ其の一なり。陸既に往くに、劉は尚ほ哀制の中に在り。性酒を嗜む。禮畢るや、初めより它言無く、唯だ問ふ、「東吳に長柄の壺盧有り、卿は種を得て來るや不や」と。陸兄弟は殊に失望し、乃ち往くを悔めり。

(簡傲篇)

盧志於衆坐、問陸士衡、陸遜陸抗是君何物。答曰、如卿於盧毓盧瑗。士龍失色。既出戶、謂兄曰、何至如此。彼容不相知也。士衡正色曰、我父祖名播海內。寧有不知。鬼子敢爾。

盧志 衆坐に於て、陸士衡に問ふ、「陸遜・陸抗は是れ君の何物ぞ」と。答へて曰く、「卿の盧毓・盧瑗に於るが如し」と。士龍は色を失ふ。既に戸を出でて、兄に謂ひて曰く、「何ぞ此の如きに至る。彼は相ひ知らざる容し」と。士衡 色を正して曰く、「我が父祖 名は海内に播けり。寧んぞ知らざること有らん。鬼子 敢へて爾す」と。

(方正篇)

このような状況のなかであつて、張華は二陸に對して非常に好意的であつた。そのことは『晉書』陸機傳に、

至太康末、與弟雲俱入洛、造太常張華。華素重其名、如舊相識。曰、伐吳之役、利獲二俊。

太康の末に至り、弟の雲と俱に洛に入り、太常張華に造る。華は素より其の名を重んじ、舊くより相ひ識るが如し。曰く、「吳を伐つ役、利は二俊を獲しことなり」と。

とあることから知られる。

そもそも張華は『晉書』本傳に、

華性好人物、誘進不倦。至于窮賤候門之士、有一介之善者、便咨嗟稱詠、爲之延譽。華は性 人物を好み、誘進して倦まず。窮賤 候門の士に至りては、一介の善き者有れば、便ち咨嗟稱詠して、之が爲に譽れを延ぶ。

とあるように、進んで優秀な人材を推舉した。たとえそれが寒門の出であろうと、また南方出身者であろうと、張華は有能な人材を中央社會へ引き入れることに對し、甚だ積極的

であった。ために張華は、亡國呉の出身である二陸をも、快く迎え入れたのである。

また、『世説新語』文學篇注に引く『文章傳』には、

機善屬文。司空張華見其文章、篇篇稱善、猶譏其作文大冶。謂曰、人之作文、患於不才、至子爲文、乃患太多也。

機は善く文を屬る。司空張華は其の文章を見て、篇篇善しと稱するも、猶ほ其の文を作るの大いに治なるを識る。謂ひて曰く、「人の文を作るや、不才に患ふに、子の文を爲るに至つては、乃ちただ多きを患ふなり」と。

とあり、張華は陸機の文學面における才能を高く評價していたことが分かる。陸機の文名は、夙に北方社會においても知られていたようで、『文選』文賦注に引く臧榮緒『晉書』には、

年二十而吳滅。退臨舊里、與弟雲勤學、積十一年。譽流都華、聲溢四表。

年二十にして吳滅ぶ。退きて舊里に臨み、弟の雲と學に勤め、積むこと十一年。譽れは都華に流れ、聲は四表に溢る。

と、記されている。

さて、このような二陸の入洛に對して、北方文人達は、いかなる對應をしたのであろうか。此の點について、言わば南方文人の代表である陸機と、それに對して北方文人の代表とされる潘岳、すなわち西晉文學界の兩雄と目されていた陸機と潘岳との關わりを取り擧げてみよう。

陸機と潘岳の交わりを示す直接の資料は、潘岳が賈謐の代作をして陸機に贈った「爲賈謐作贈陸機」詩と、それに答えた陸機の「答賈長淵」詩が『文選』（卷二四）に収められているにすぎない。そもそも賈謐が陸機に贈る詩を、潘岳に作らせたということ自體、岳こそが北方文人の代表であるという意識があったためと思われる。潘岳の詩は、太子洗馬から呉王晏の郎中令として赴任していた陸機が、尚書中兵郎として再び入朝した頃に陸機に贈られたもので、或いは賈謐のサロンを通じての作であったかもしれない。詩は全て十一章から成り、その第四章に次のような表現がある。

南吳伊何 南吳は伊れ何ぞ

僭號稱王 僭號して王と稱す

呉の孫權は、黃龍元年（二二九）に帝位に就いたが、そのことを潘岳は「僭號」と言ったのであり、ここには明らかに陸機に對する侮蔑の意圖が込められているように思われる。また、第十章には、

發言爲詩 言に發して詩を爲り
俟望好音 好音を俟ち望む

とあることから、潘岳の陸機に對する挑發とも思われ、潘岳より十五歳も年が若い陸機に對する、潘岳のあからさまな對抗意識が窺える。

また潘岳と陸機は、ともに賈誼の二十四友のメンバーであった。「二十四友」については『晉書』賈誼傳に、次のように記されている。

或著文章稱美誼、以方賈誼。渤海石崇・歐陽建、滎陽潘岳、吳國陸機・陸雲、蘭陵繆微、京兆杜斌・摯虞、琅邪諸葛詮、弘農王粹、襄城杜育、南陽鄒捷、齊國左思、清河崔基、沛國劉瓌、汝南和郁・周恢、安平牽秀、潁川陳珍、太原郭彰、高陽許猛、彭城劉訥、中山劉興・劉琨、皆傳會於誼、號曰二十四友。其餘不得預焉。

或いは文章を著して誼を稱美し、以て賈誼に方ぶ。渤海の石崇・歐陽建、滎陽の潘岳、吳國の陸機・陸雲、蘭陵の繆微、京兆の杜斌・摯虞、琅邪の諸葛詮、弘農の王粹、襄城の杜育、南陽の鄒捷、齊國の左思、清河の崔基、沛國の劉瓌、汝南の和郁・周恢、安平の牽秀、潁川の陳珍、太原の郭彰、高陽の許猛、彭城の劉訥、中山の劉興・劉琨は、皆な誼に傳會し、號して「二十四友」と曰ふ。其餘は預るを得ず。

石崇・歐陽建・潘岳といった、いわば賈誼直系の人物の名が、その初めに示され、それに続いて陸機・陸雲の名が列ねられているように、潘岳・陸機は二十四友の中心メンバーであったことが分かる。

ところで當時、朝廷では『晉書』の起年をいつにするかという「晉書限斷」についての議論がなされていた。正史の編纂にとって限斷、すなわち何時のことから書き始めるかということは、重要な問題であった。朝廷では『晉書』の限斷に關して、これまでもたびたび議論が繰り返されていたが、惠帝の即位後、再びそのことが議論された。このとき秘書監の職にあり、國史の編纂を掌っていたのが賈誼であった。『晉書』賈誼傳にはその時のことが、次のように記されている。

惠帝立、更使議之。誼上議、請從秦始爲斷。於是事下三府。司徒王戎、司空張華、領軍將軍王衍、侍中樂廣、黃門侍郎秘紹、國子博士謝衡、皆從誼議。騎都尉濟北侯荀峻、侍中荀藩、黃門侍郎華混、以爲宜用正始開元。博士荀熙、刁協、謂宜嘉平起年。誼重執奏戎華之議、事遂施行。

惠帝立つや、更めて之を議せしむ。誼は議を上り、秦始より斷を爲さんことを請ふ。是に於て事は三府に下さる。司徒王戎・司空張華・領軍將軍王衍・侍中樂廣・黃門侍郎秘紹・國子博士謝衡は、皆な誼の議に従ふ。騎都尉濟北侯荀峻・侍中荀藩・黃門侍郎華混は、以爲へらく宜しく正始を用て元を開くべしと。博士荀熙・刁協は、宜しく嘉平もて

起年とすべしと謂ふ。諡は重ねて戎・華の議を執奏し、事は遂に施行せらる。

此の時、二十四友の中心であった潘岳が、「晉書限斷の議」を作ったことが、『晉書』潘岳傳に記されている。

諡二十四友、岳爲其首。諡晉書限斷、亦岳之辭也。

諡の二十四友、岳は其の首たり。諡の晉書限斷も、亦た岳の辭なり。

これより前、陸機の方も、秘書監虞濬の著作郎として「晉書限斷の議」を作っていたようで、『北堂書鈔』卷五七に引く王隱『晉書』には、次のようにある。

陸機字士衡、以文學、爲秘書監虞濬所請爲著作郎、議晉書限斷。

陸機、字は士衡は、文學を以て、秘書監虞濬の請ふ所と爲り、著作郎と爲りて、『晉書』の限斷を議す。

いま、『初學記』卷二に、以下のごとき陸機の「晉書限斷の議」の断片を見ることはできるが、この中には『晉書』の起年については觸れられていない。

三祖實終爲臣、故書爲臣之事、不可不如傳、此實錄之謂也。而名同帝王、故自帝王之籍、不可以不稱紀、則追王之義。

三祖は實に終に臣たれば、故より臣たるの事を書し、傳の如くせざる可からず、此れ實錄の謂なり。而も名は帝王に同じければ、故より自ら帝王の籍あり、以て紀と稱せざる可からず、則ち王の義を追へり。

此の陸機の作っていた「晉書限斷の議」に對して、賈諡は新しく潘岳に「晉書限斷の議」を作らせたわけであり、ここにも南方出身者である陸機に對する北人の對立意識を窺うことができよう。さらに賈諡は、束皙を著作佐郎として、陸機の「晉書限斷」を非難させたことが、『北堂書鈔』卷五七に引く干寶『晉紀』に次のように記されている。

秘書監賈諡、請束皙爲著作佐郎、難陸機晉書限斷。

秘書監賈諡は、束皙に請ひて著作佐郎と爲し、陸機の「晉書限斷」を難ぜしむ。

このように、「晉書限斷」をめぐる賈諡・潘岳と陸機との関わりのなかにも、兩者の對立を見ることができるのである。

この潘岳と陸機との關係を、端的に示しているのが、『裴子語林』にある次の話である。

士衡在坐。安仁來、陸便起去。潘曰、清風至、塵飛揚。陸應聲答曰、衆鳥集、鳳皇翔。士衡坐に在り。安仁來るや、陸は便ち起ちて去る。潘曰く、「清風至りて、塵飛揚

す」と。陸は聲に應じて答へて曰く、「衆鳥集ひて、鳳皇翔る」と。

以上のごとく潘岳は、一陸、ことに兄の陸機に對して、彼が南方文人の代表であるということ、激しい對抗意識を持っていたようである。更にまた、潘岳の妻の父である楊肇が、呉の歩聞の叛亂の際に、陸機の父である陸抗に敗れたということも、その一因であつたろう。すなわち、『晉書』羊祜傳に據れば、呉の末に、晉に降つた呉の歩聞とその援軍の晉將楊肇が呉に攻め入つた時、それを迎え撃つたのが陸抗であり、抗は聞を捕らえ肇の軍を撃破した。ために潘岳の岳父の楊肇は庶人におとされてゐる。

陸機の方もこれに對して、自分こそが南方文人の代表であり、その文學は決して北方文人に引けを取るものではないという強い自信を抱いていたのである。

陸機は入洛後、ほどなくして愍懷太子の洗馬となつたが、その時、太子の舍人として潘岳の從子の潘尼も同じ職場にいた。潘岳が陸機にたいして對立的であつたのに反し、潘尼の方は、陸機とは親しく交わつていたようであり、兩者の間には、しばしば詩のやりとりがあつた。それらの贈答詩を見れば、陸機と潘尼の交際の深さを窺ひ知ることができるが、潘尼の「贈陸機出爲吳王郎中令」詩（『文選』卷二四）に「予涉素秋、子登青春」（子は素秋を涉り、子は青春に登れり）というように、潘尼は陸機よりも十數歳年長であつたが、二人はその年齢の差を越えた交際をしていたように思われる。

ところで、愍懷太子の府には、潘尼のほか馮熊（字は文熊）なる人物がいたが、彼も潘尼同様、南方出身者のよき理解者であつたようである。『文選』（卷二四）には、陸機の馮文熊の斥丘赴任にあつたの詩（「贈馮文熊遷斥丘令」）と、その後に贈られた次のような詩が収められている。

贈馮文熊（馮文熊に贈る）

昔與二三子

昔二三子と

遊息承華南

承華の南に遊息す

拊翼同枝條

翼を拊ちて枝條を同じくし

翻飛各異尋

翻飛しては各々尋さを異にす

苟無凌風翮

苟に風を凌ぐの翮無く

徘徊守故林

徘徊して故林を守る

慷慨誰爲感

慷慨して誰が爲にか感ずる

願言懷所欽

願ひて言に欽む所を懷ふ

發軫清洛汭

軫を清洛の汭に發し

驅馬大河陰

馬を大河の陰に驅る

佇立望朔塗

佇立して朔塗を望めば

悠悠迴且深」 悠悠として迴かに且つ深し

分索古所悲 分索は古へも悲しむ所

志士多苦心 志士 心を苦しむること多し

悲情臨川結 悲情は 川に臨みて結ばれ

苦言隨風吟」 苦言は 風に隨ひて吟ず

愧無雜珮贈 愧づらくは雜珮の贈無きを

良訊代兼金 良訊もて兼金に代へん

夫子茂遠猷 夫子 遠猷を茂くして

款誠寄惠音 款誠 惠音を寄せられよ

歌い出しの二句に「昔與二三子、遊息承華南」(かつて君たち二・三の友とともに、承華門の南にある東宮でのどかに仕えていた)というように、陸機と馮文龍との交際は、愍懷太子府時代から始まって、その後もずっと続いてきたようである。

そもそも此の「馮文龍」とは、馮純の子で魏國出身の北方文人である。父の馮純の傳は『晉書』卷三九にある。

馮純、字少胄、安平人也。祖浮、魏司隸校尉。父員、汲郡太守。純少博涉經史、識悟機辯。歷任爲魏郡太守、轉步兵校尉、徙越騎。得幸於武帝、稍遷左衛將軍。承顔悅色、寵愛日隆。賈充荀勗、竝與之親善。

馮純、字は少胄、安平の人なり。祖は浮、魏の司隸校尉。父は員、汲郡の太守たり。純は少くして博く經史を涉り、識悟 機辯なり。歷任して魏郡太守と爲り、歩兵校尉に轉じ、越騎に徙る。幸を武帝に得て、稍く左衛將軍に遷る。顔を承け色を悦び、寵愛 日々に隆んなり。賈充・荀勗は、竝びに之と親善なり。

ここで注目されるのは、馮純が、賈充・荀勗と親密であったということである。そうして此の三人は、いずれも張華と仲が悪かったということである。すなわち『晉書』馮純傳には、次のようにある。

初謀伐吳、(馮)純與賈充荀勗、同共苦諫不可。吳平、^純内懷慚懼、疾張華如讎。及華外鎮、威德大著。朝論當徵爲尚書令。純從容侍帝、論晉魏故事、因諷帝言、華不可授以重任。帝默然而止。

初め吳を伐つを謀るに、純は賈充・荀勗と、同共に苦りに諫めて不可とす。吳平らぐや、純は内に慚懼を懷き、張華を疾むこと讎の如し。華の外鎮に及ぶや、威徳は大いに著はる。朝論 當に徵して尚書令と爲すべしと。純は從容として帝に侍り、晉魏の故事を論じ、因りて帝に諷して言ふ、「華は授くるに重任を以てす可からず」と。帝は默然として止む。

また、『晉書』張華傳には、

初（張）華毀徹士馮恢於帝。紀即恢之弟也。

初め華は徹士の馮恢を帝に毀る。紀は即ち恢の弟なり。

とある。すなわち馮紀は、自分の兄である馮恢を、張華が帝に毀つたということ、個人的にも華を憎んでいたのである。しかるにその子の文麗の方は、張華同様、南方出身者には好意的であり、たとえば吳國出身の顧榮が、身の處し方に窮したときも、それを馮文麗に相談し、文麗の方も、顧榮のために盡力したということが、『晉書』顧榮傳に次の如く記されている。

齊王冏召爲大司馬主簿。冏擅權驕恣。（顧）榮懼及禍、終日昏酣、不綜府事。以情告友人長樂馮熊。熊謂冏長史葛煥曰、以顧榮爲主簿、所以甄拔才望、委以事機。不復計南北親疏、欲平海內之心也。今府大事殷、非酒客之政。煥曰、榮江南望士、且居職曰淺。不宜輕代易之。熊曰、可轉爲中書侍郎、榮不失清顯、而府更收實才。煥然之、白冏、以爲中書侍郎。在職不復飲酒。人或問之曰、何前醉而後醒邪。榮懼罪、乃復更飲。與州里楊彥明書曰、吾爲齊王主簿、恒慮禍及。見刀與繩、每欲自殺。但人不知耳。

齊王冏、召して大司馬の主簿と爲す。冏は權を擅にして驕恣なり。榮は禍の及ばんことを懼れ、終日昏酣し、府事を綜べず。情を以て友人の長樂の馮熊に告ぐ。熊は冏の長史葛煥に謂ひて曰く、「顧榮を以て主簿と爲すは、才望を甄拔し、委ぬるに事機を以てする所以なり。復た南北の親疏を計らずして、海内を平らげんとするの心あるなり。今、府は大いに事は殷なり、酒客の政するに非ず」と。煥曰く、「榮は江南の望士にして、且つ職に居りて日は淺し。宜しく輕しく之を代易すべからず」と。熊曰く、「轉じて中書侍郎と爲す可くんば、榮は清顯を失はずして、而も府も更めて實才を収めん」と。煥は之を然りとして、冏に白して、以て中書侍郎と爲す。職に在りて復た酒を飲まず。人或いは之に問ひて曰く、「何ぞ前には酔ひて後には醒むるや」と。榮は罪を懼れて、乃ち復た更に飲む。州里の楊彥明に書を與へて曰く、「吾、齊王の主簿と爲りてより、恒に禍の及ばんことを慮ふ。刀と繩とを見れば、毎に自殺せんと欲す。但だ人の知らざるのみ」と。

顧榮の置かれていた不安定な立場がよく表れているが、このような状況にあつて、心情を打ち明けることができるほどに、馮熊は顧榮から信頼されていたのであろう。そうしてその信頼は、顧榮のみならず、多くの南方出身者たちの共通のものであつたに違いない。ために陸機とも深く交わることができたものと思われる。

このように、入洛してきた南人に對する強烈な風當たりのなかで、張華をはじめとして數は多くはないけれども潘尼や馮熊など、南人に對して好意的であつた人もいたのである。

(2) 南人集團の形成

さて、北方社會全體が、南方出身者を抑壓せんとしていた状況の中にあつて、當然のことながら、弱い立場にある南方出身者たちは、次第に集團を形成してゆくことになる。ために二陸は、南方出身者のよき理解者である張華らの庇護を受けながら、進んで同郷の人士を北方社會へと引き入れていった。

そうして入洛した南人のなかに、戴淵（字は若思）なる人物がいる。戴若思は、廣陵出身の南人であるが、陸機との出會いは、次の如くであつた。

戴淵少時、遊俠不治行檢。嘗在江淮間、攻掠商旅。陸機赴假還洛、輜重甚盛。淵使少年掠劫。淵在岸上、據胡牀、指塵左右、皆得其宜。淵既神姿峯穎、雖處鄙事、神氣猶異。機於船屋上遥謂之曰、卿才如此、亦復作劫。淵便泣涕、投劍歸機。辭厲非常。機彌重之、定交、作筆薦焉。

戴淵 少き時、遊俠にして行檢を治めず。嘗に江淮の間に在りて、商旅を攻掠す。陸機假に赴きて洛に還るに、輜重、甚だ盛んなり。淵 少年をして掠劫せしむ。淵は岸上に在り、胡牀に據りて左右を指塵し、皆な其の宜しきを得たり。淵 既に神姿峯穎にして、鄙事に處ると雖も、神氣は猶ほ異なり。機は船屋の上より遥かに之に謂ひて曰く、「卿が才 此の如くして、亦復た劫を作すか」と。淵 便ち泣涕し、劍を投じて機に歸す。辭の厲しきこと常には非ず。機は彌々之を重んじ、交りを定め、筆を作りて焉を薦む。

（『世說新語』自新篇）

戴若思の才を認め、共に洛に入った陸機は、彼を趙王倫に推薦したが、その時の機は『晉書』戴若思傳に載せてある。

蓋聞繁弱登御、然後高壙之功顯、孤竹在肆、然後降神之曲成。是以高世之主、必假遠邇之器、蘊匱之才、思託太音之和。伏見處士廣陵戴若思、年三十、清沖履道、德量允塞。思理足以研幽、才鑒足以辯物。安窮樂志、無風塵之慕。砥節立行、有井渫之潔。誠東南之遺寶、宰朝之奇璞也。若得託迹康衢、則能結軌驥騄、曜質廊廟、必能垂光瓊璠矣。惟明公垂神採察、不使忠允之言以人而廢。

蓋し聞く、繁弱は御に登せられ、然る後に高壙の功顯はれ、孤竹は肆に在りて、然る後に降神の曲成れりと。是を以て高世の主は、必ず遠邇の器を假り、蘊匱の才は、太音の和に託せんことを思ふ。伏して見るに處士の廣陵の戴若思は、年三十、清沖にして道を履み、德量 允塞なり。思理 以て幽を研むるに足り、才鑒 以て物を辯ずるに足る。窮に安んじ志を樂しみ、風塵の慕ふ無し。節を砥き行ひを立て、井渫の潔有り。誠に東南の遺寶、宰朝の奇璞なり。若し迹を康衢に託するを得ば、則ち能く軌を驥騄に結び、

質を廊廟に曜かせば、必ず能く光を瓊瑤に垂れん。惟だ明公 神を垂れて採察し、忠允の言をして人を以て廢せしめざらんことを。

ところで陸雲の書翰の中に、次のような記述がある。

近聞若思、未有通塗、每用於邑。

近ごろ聞くに若思は、未だ通塗有らず、毎に用て於邑すと。（「與戴季甫書」其五）

これに據れば、陸雲も同郷の戴若思の就職に心を配っていたということが分かる。また、戴若思に関する次のような書翰もある。

戴會稽、如是便發、分別恨然。一時名士、唯當有此君耳。失分重勞、令人歎息。善得日夕、眞家人。若思望之、清才俊類。一時之彥、善竝得接。九月中、可得達東禮。衡陽長沙、甚快。東人、近未復有見絃者。公進屈久、恒爲邑罔。黨方有清塗、薄國議、在內中、大有好稱。此家一時美德也。在事又佳。甚快甚快。

戴會稽は、是の如くして便ち發し、分別してより恨然たり。一時の名士、唯だ當に此の君有るべきのみ。分を失ひ重ねて勞すれば、人をして歎息せしむ。善く日夕を得ば、眞に家人なり。若思・望之は、清才ありて俊類なり。一時の彥にして、善く竝びに接せらるるを得たり。九月中、東に達して禮するを得可けん。衡陽・長沙は、甚だ快なるも、東人、近ごろ未だ復た絃せらるる者有らず。公は進屈すること久しく、恒に爲に邑罔たり。黨し方に清塗有らば、國議に薄り、內中に在りて、大いに好稱有らん。此の家は一時の美德なり。事に在りても又た佳ならん。甚だ快なり 甚だ快なり。

（「與楊彥明書」其六）

書き出しの「戴會稽」とは、戴若思の父の戴昌のことと思われる。その戴昌が、職に就くことができず、郷里の廣陵に歸ってしまったことを、陸雲が嘆いているのである。手紙では、さらに戴昌の二人の子、若思・望之について觸れ、二人は清才があり立派な人物で、どちらもよく目をかけてもらっており、九月中には東へ歸って、郷里の廣陵で、父子の對面が可能であろう、というのである。「戴若思」に關して言えば、陸機の方は、それを趙王倫に推薦し、その一方で、陸雲は同郷の人士と連絡を取り合うことがあったのであろう。

なお、「望之」とあるのは、戴若思の弟の戴邈のことだ、『晉書』卷六九・戴若思傳に附されているその傳には、

（戴）邈、字望之。少好學、尤精史漢。才不逮若思、儒博過之。弱冠舉秀才、尋遷太子洗馬、出補西陽內史。

邈、字は望之。少くして學を好み、尤も『史』『漢』に精なり。才は若思に逮ばざるも、儒博之に過ぐ。弱冠にして秀才に擧げられ、尋いで太子洗馬に遷り、出でて西陽の内

史に補せらる。

とあり、或いは愍懷太子の洗馬として、陸機・陸雲らとともに、太子府に仕えていたのかも知れない。

ところで、此の手紙の相手の「楊彦明」も、『晉書』顧榮傳にある次の記述によって、會稽出身の南人であることが知れる。すなわち、

時南土之士、未盡才用。榮又言、……會稽楊彦明、謝行言、皆服膺儒教、足爲公望……。

時に南土の士、未だ盡くは才として用ひられず。榮は又た言ふ、「……會稽の楊彦明・謝行言は、皆な儒教を服膺し、公望を爲すに足る……」。

この楊彦明に關しては、陸雲の彼宛ての書翰に、次のように言う。

雲白。欽明去書不悉。彦先來得書、以爲慰。時去苒荏、歲行復半。悲此推移、終然何及。漸已欲熱、想自如常。悠悠守限、良談未日。眇然東望、思以敘至。及反憤罔不多。行矣愛德。往來相聞。

雲 白す。欽明 書を去るも悉さず。彦先 來りて書を得、以て慰めと爲す。時の去ること苒荏たるも、歳の行くこと復た半ばなり。此の推移を悲しむも、終然に何ぞ及ばん。漸已く熱くならんと欲るも、想ふに自ら常の如からん。悠悠として限を守り、良談 未だ日あらず。眇然として東望し、以て敘の至らんことを思ふ。反するに及んで憤罔多からん。行け 徳を愛せよ。往來 相ひ聞せよ。(「與楊彦明書」其一)

此のなかで、「遙か遠く東の方(會稽)を望んでは、任命書の到らんことを思っておりませす」といい、同じく「與楊彦明書」其三では、

階塗尚否、通路今塞、令人惘然。名論允進、遠而有光者。

階塗は尚ほ否にして、通路は今や塞がれ、人をして惘然たらしむ。名論は允に進むも、遠くして光有る者なり。

すなわち「官吏に就く道はやはり閉ざされ、世に出る道は今や塞がれてしまい、わたしをがっかりさせております。評判は非常に高いのですが、遠く地方にいて輝いている者です」と、その任官がなかなかうまくゆかないことについて、洛にいる陸雲が、呉にいる楊彦明にその状況を説明しているのであるが、同郷人に對する陸雲の心遣いがよく表れている。この楊彦明なる人物はそのまま任官されることがなかったようで、これは永嘉元年(三〇七)の頃のことであるが、先にも挙げた『晉書』顧榮傳のなかで、「會稽の楊彦明・謝行言は、皆な儒教を服膺し、公望を爲すに足る」と、やはり吳國出身の顧榮が、楊彦明を推薦している。

次に、「石行文」なる人物について見てみよう。陸雲の張華宛ての書翰(「與張光祿書

其三)に、次のようにある。

加蒙願遇、重以傾倒。惟亮歸誠。石行文、敦素篤遠、道實茂淑。器敏既美、思學又快。南州良德、今者東行。望風自託、其意繾綣。願厚接納。副其乃心。

願遇を加蒙へられ、重ねて以て傾倒せらる。惟亮に誠を歸す。石行文は、敦素篤遠にして、道實茂淑なり。器敏は既に美にして、思學も又た快なり。南州の良徳にして、今者は東行す。風を望んで自ら託し、其の意繾綣たり。願はくは厚く接納されんことを。其れ乃心に副はん。

同じく陸雲の戴季甫宛ての書翰(「與戴季甫書」其七)にも、石行文の名が見える。

石行文在無錫、大有清績、一州之高功長吏。此家行素道實、州閭所稱。疇昔接事、既盡其才。願重榮益、以成其實。

石行文は無錫に在り、大いに清績有り、一州の高功の長吏なり。此の家は行素道實にして、州閭の稱する所なり。疇昔より事に接し、既に其の才を盡くす。願はくは榮益を重ね、以て其の實を成さんことを。

これらの書翰からみて、石行文は無錫にいて、州の役人をしている同郷人のようであるが、その人を陸雲が中央政府に推薦しようとしているのである。「戴季甫」なる人物は、彼宛ての陸雲の全七首の書翰を見るに、張華同様、中央政府の要職にあり、南方出身者に目をかけていた人らしく思われる。すなわち陸雲が、石行文の就職について、張華・戴季甫らに、その依頼をしているのである。

ところで、二陸と俱に入洛した人に、願榮(字は彦先)がいる。すなわち、『晉書』願榮傳には次のようにある。

願榮、字彦先。吳國吳人也。爲南土著姓。祖雍、吳丞相。父穆、宜都太守。榮機神朗悟、弱冠仕吳、爲黃門侍郎、太子輔義都尉。吳平、與陸機兄弟同入洛、時人號爲三俊。願榮、字は彦先。吳國・吳の人なり。南土の著姓爲り。祖は雍、吳の丞相たり。父は穆、宜都太守たり。榮は機神朗悟、弱冠にして吳に仕へ、黃門侍郎、太子輔義都尉と爲る。吳平らぐや、陸機兄弟と同に入洛し、時人は號して三俊と爲す。

此の願榮も、二陸同様、張華に世話になったようである。陸雲がそのことを張華に感謝しているのが、次の書翰である。

願令文・彦先、每宣隆眷、彌泰之惠。懷德惟慙、守以反側。既晞仁風、委心自昵。願令文・彦先、毎に隆眷を宣べられ、彌泰の恵みあり。徳を懷ひて惟に慙ぢ、守るに反側を以てす。既に仁風に晞され、心を委ねて自ら昵む。(「與張光祿書」其二)

このように、南人のよき理解者である張華らの援助によって、北方社會の仲間入りをした顧榮は、次には陸機たちと力を合わせて、南人を北方社會へと引き入れてゆくのである。すなわち、

顧榮・陸機・陸雲、表薦（賀）循曰、伏見吳興武康令賀循、德量遠茂、才鑒清遠。服膺道素、風操凝峻。歷踐三城、刑政肅穆。守職下縣、編名凡萃。出自新邦、朝無知己、恪居遐外、志不自營。年時倏忽、而邈無階緒。實州黨愚知、所爲悵然。臣等竝以凡才、累授飾進、被服恩澤、忝豫朝末。知良士後時、而守局無言、懼有蔽賢之咎。是以不勝愚管、謹冒死表聞。

顧榮・陸機・陸雲は、表して循を薦めて曰く、「伏して見るに吳興・武康令の賀循は、德量 遠茂にして、才鑒 清遠なり。道素を服膺して、風操 凝峻なり。三城に歴踐し、刑政 肅穆たり。職を下縣に守り、名を凡萃に編めり。新邦より出づれば、朝に知己無く、遐外に恪居して、志は自ら営まず。年時 倏忽として、而も邈かにして階緒無し。實に州黨愚知の、悵然たる所なり。臣等 竝びに凡才なるを以て、累りに飾進を授かり、恩沢に服せられ、忝くも朝末に豫れり。良士の時に後るるを知り、而も無言なるは、懼らくは蔽賢の咎有らん。是を以て愚管に勝へずして、謹んで死を冒して表聞す」。

（『吳志』賀邵傳注引虞預『晉書』）

これは、顧榮が陸機や陸雲と俱に、賀循を推舉した時の上表文である。「新邦より出づれば、朝に知己無し」というところに、南方出身者の置かれた立場がよく表れている。此の上表によって、賀循は程なくして中央に召しだされ太子舎人となった。このようなことは数も少なく、立場も弱い南方出身者達が、北方社會で生活してゆくためには、當然の行動であったといえよう。

さて、こうして入洛してきた南人達は、二陸を中心に結束してゆくわけであるが、二陸を中心に南方出身者が集まっていたということは、『晉書』卷五七・吾彦傳にある次の記述によっても知ることができる。

會交州刺史陶瓊卒、以（吾）彦爲南中都督、交州刺史。重餉陸機兄弟、機將受之。雲曰、彦本微賤、爲先公所拔、而答詔不善。安可受之。機乃止、因此每毀之。長沙孝廉尹虞謂機等曰、自古由賤而興者、乃有帝王、何但公卿。若何元幹・侯孝明・唐儒宗・張義允等、竝起自寒微、皆內侍外鎮、人無讖者。卿以士則答詔小有不善、毀之無已。吾恐南人皆將去卿、卿便獨坐也。

會交州の刺史陶瓊卒し、彦を以て南中都督・交州刺史と爲す。重ねて陸機兄弟に餉り、機は將に之を受けんとす。雲曰く、「彦は本と微賤にして、先公の抜く所と爲るに、而るに答詔は善からず。安んぞ之を受く可けんや」と。機は乃ち止め、此れに因りて毎に之を毀る。長沙の孝廉尹虞、機等に謂ひて曰く、「古より賤よりして興る者、乃ち帝王有り、何ぞ但に公卿のみならんや。何元幹・侯孝明・唐儒宗・張義允等の若きは、竝び

に寒微より起こり、皆な内に侍し外に鎮たるも、人の譏る者無し。卿は士則が詔に答ふるに小しく善からざる有るを以て、之を毀りて已む無し。吾は、南人の皆な將に卿を去らんとし、卿の便ち獨り坐するを恐る」と。

吾彦（字は士則）は、もともと寒賤の出であったが、その才を認めて拔擢したのが呉の司馬陸抗であった。呉に仕えた吾彦は、やがて建平太守となったが、その頃のこととして『呉志』孫皓傳注に引く干寶『晉紀』に、次のようなことが記されている。

王濬治船於蜀。吾彦取其流杓以呈孫皓曰、晉必有攻吳之計。宜增建平兵。建平不下、終不敢渡江。

王濬 船を蜀に治む。吾彦 其の流杓を取りて以て孫皓に呈して曰く、「晉、必ずや呉を攻むるの計あらん。宜しく建平の兵を増すべし。建平 下らざれば、終に敢て江を渡らず」と。

（晉の）王濬が蜀で船を建造していたのを、流れてきた木屑を見て氣付いた吾彦が、建平郡の守備を固めることを孫皓に進言した。しかるに孫皓は、その進言に耳を傾けなかった。援軍の望めない吾彦は、鉄の鎖を長江にかけて通路を遮断し、長江ぞいの諸城が次々と陥落してゆくなか、獨り建平を死守したのであった。そのことは、『晉書』吾彦傳には、次のように記されている。

（吾）彦乃輒爲鉄鎖、横断江路。及師臨境、縁江諸城、皆望風降附。或見攻而拔、唯彦堅守、大衆攻之、不能克、乃退舍禮之。

彦は乃輒ち鉄鎖を爲り、江路を横断す。師の境に臨むに及び、江に縁ふの諸城は、皆な風を望んで降附す。或いは攻められて抜かるも、唯だ彦のみ堅く守り、大衆 之を攻むるも、克つ能はず、乃ち舍に退きて之を禮す。

さて、その吾彦について、陸雲が「答詔不善」と言うのは、『晉書』吾彦傳にある、次のことを指している。

帝嘗問（吾）彦、陸喜陸抗二人誰多也。彦對曰、道德名望、抗不及喜、喜不及抗。

帝嘗て彦に問ふ、「陸喜・陸抗の二人、誰か多るか」と。彦對へて曰く、「道德名望、抗は喜に及ばず、立功立事、喜は抗に及ばず」と。

此の「道德名望、抗は喜に及ばず」という言葉が、陸雲には我慢ならなかつたのであろうか。陸機の方は、そのことを忘れていたのか、或いはそれほど氣にしていなかつたのか、雲にそのことを指摘されて、はじめて吾彦に對する態度を改めたのである。このような陸機の吾彦に對する冷たい態度について、長沙の孝廉の尹虞が「吾は、南人の皆な將に卿を去らんとし、卿の便ち獨り坐するを恐る」と注意したというのであるが、ことから、此の

時すでに陸機を中心として、南方出身者が多く集まっていたということが分かる。そうしてその集團では、小さな事をあまり気にしない反面、氣性の激しい所のある陸機は、

雲性弘靜、怡怡然爲士友所宗。機清厲有風格、爲鄉黨所憚。

雲は性は弘靜にして、怡怡然として士友の宗ぶ所と爲る。機は清厲にして風格有り、郷黨の憚る所と爲る。

(『世說新語』賞譽篇注引『文士傳』)

とあるように、仲間の者からは一目おかれていたのであるが、兄とは性格の違う雲は、それをうまく取り成し、表立った行動をとる陸機の蔭にかくれて、同郷人と連絡を取り合いつつながら、上手に南人をまとめていたのであろう。ただ、普段はおとなしい性格の陸雲にも、父陸抗を侮辱する發言をした吾彦のことを許せなかったことに見られるような、意地を通すところもあつたのである。

以上、陸機を中心とした南人集團の形成の過程を、入洛後の陸機・陸雲の動きを通して見ていったが、それでは、二陸が洛に入る以前、すなわち呉における二陸、および洛陽における南人の状況はどのようなものであつたのか。次に、その點について見てみよう。

(3) 二陸入洛以前の状況

晉の太康元年(二八〇)、呉の年號で言えば天紀四年、陸機の故國呉はついに滅亡した。そうして呉の滅亡は、そのまま陸氏一族の滅亡でもあつた。呉の鳳皇三年(二七四)、父抗の亡き後、父の兵を分領していた抗の五子のうち、長子の晏は、呉の天紀四年(二八〇)、西晉の龍驤將軍王濬の別軍に殺され、次子の景もまた害に遇つてしまった。時に景は三十一歳。機は二十歳、雲は十九歳であつた。

呉の滅亡後、機雲兄弟は、舊里の華亭に退居した。華亭については『世說新語』尤悔篇に引く『八王故事』に、

華亭、呉由拳縣郊外墅也。有清泉茂林。吳平後、陸機兄弟共遊於此十餘年。

華亭は、呉の由拳縣の郊外の墅なり。清泉茂林有り。呉の平げられし後、陸機兄弟は共に此に遊ぶこと十餘年なり。

とある。華亭に退居した期間については、『晉書』陸機傳には、

退居舊里、閉門勤學、積有十年。

舊里に退居し、門を閉ざして學に勤め、積みて十年有り。

といい、また、『文選』卷十七「文賦」注に引く臧榮緒『晉書』には、

退臨舊里、與弟雲勤學、積十一年。

退きて舊里に臨み、弟の雲と學に勤め、積むこと十一年。

という。十年、十一年、十餘年と、いささかの異なりはあるけれども、およそ十年間、舊里に退居したものと思われる。『晉書』陸機傳の、

至太康末、與弟雲俱入洛。

太康の末に至り、弟雲と俱に洛に入る。

という記述とも一致する。

さて、この約十年間という期間は、亡國への恨み、過去のものになってしまった陸氏の誇りへの無念さ、將來への不安など、様々な感情を整理し見詰め直すには、陸機・陸雲兄弟にとって、決して長過ぎる時間ではなかったであろう。このような中で、陸機の「辨亡論」は著されたのであった。

「辨亡論」とは、「亡びたるを辨ずる論」で、吳國の興隆と滅亡の原因を論じたものである。二篇あるうちの上篇では、漢末の董卓の亂に對し、群雄が義兵を擧げたことから説き起し、わけても孫堅のごとく忠節の誠を盡くした者はいなかったことを述べる。つづいて孫堅のあとを繼いだ孫策は、張昭・周瑜の二傑を得て、江外の地を安定させたが、大業なかばにして死に、そのあとを繼いだ孫權が、祖父陸遜ら多くの賢能の士を招き、荆吳の地に割據して魏・蜀と對抗し、天下三分の業を成したことを述べる。しかし孫權の死後、孫亮・孫休・孫皓と續くが、すでに補佐の老臣はなく、晉軍によって吳國は滅ぼされてしまふ、というのがその内容である。下篇では、孫權が呉を隆盛に導いたのは、多くの賢臣を擧げ用いたからであるが、その後、吳國が滅亡してしまうのは、我が父陸抗のごとき良將がいなかったからであると言う。陸機は、祖國の滅亡に對する口惜しさを語り、同時にまた祖父陸遜・父陸抗の功業を稱揚して、過去の榮光に對する無念さを述べているのである。

二陸が舊里の華亭に退居している間、晉朝は已に有能なる吳國の人材を洛に招いている。たとえば、陸機の従父兄にあたる陸喜（字は恭仲）ら十五人の吳國の舊臣も、晉朝の詔を受けて入洛している。すなわち、『晉書』卷五四・陸喜傳には、次のようにある。

太康中、下詔曰、偽尚書陸喜等十五人、南土歸稱。竝以貞潔、不容皓朝。或忠而獲罪、或退身修志、放在草野。主者可皆隨本位就下拜除。敕所在以禮發遣、須到隨才授用。乃以喜爲散騎常侍。尋卒。

太康中、詔を下して曰く、「偽尚書陸喜等十五人、南土稱を歸す。竝びに貞潔なるを以て、皓の朝に容れられず。或いは忠にして罪を獲、或いは身を退けて志を修め、放た

れて草野に在り。主者 皆な本の位に随ひ就きて拜除を下す可し。所在に敕して禮を以て遣ひを發し、須らく才に随ひて授け用ふるに到るべし」と。乃ち喜を以て散騎常侍と爲す。尋いで卒す。

陸喜の入洛の時期については、『晉書』には「太康中」とあるだけで、その年を記さないけれども、陸雲の「晉故散騎常侍陸府君誄」（『陸士龍文集』卷五）に、

惟太康五年夏四月丙申、晉故散騎常侍吳郡陸君卒。

惟太康五年夏四月丙申、晉の故の散騎常侍吳郡の陸君 卒す。

と明記されていることから、すくなくとも入洛の年は、それ以前ということになる。『晉書』には、「尋いで卒す」とあるから、陸喜の入洛は太康四年（二九四）頃であろうか。此のほかには、范平も晉朝からたびたび召されていることが、『晉書』卷九一・儒林傳にある范平（字は子安）傳に、次のように記されている。

范平、字子安、吳郡錢塘人也。其先銓侯馥、避王莽之亂適吳、因家焉。平研覽墳素、遍該百氏。姚信、賀邵之徒、皆從受業。吳時舉茂才、累遷臨海太守、政有異能。孫皓初、謝病還家、敦悅儒學。吳平、太康中、頻徵不起、年六十九卒。有詔追加諡號曰文貞先生。賀循勒碑紀其德行。

范平、字は子安、吳郡・錢塘の人なり。其の先 銓侯馥、王莽の亂を避けて吳に適き、因りて家す。平は墳素を研覽して、遍く百氏を諗ぬ。姚信・賀邵の徒は、皆な從ひて業を受く。吳の時 茂才に擧げられ、臨海の太守に累遷し、政に異能有り。孫皓の初め、病と謝して家に還り、敦く儒學を悦ぶ。吳 平きて、太康中に、頻りに徵さるるも起たず、年六十九にして卒す。詔有りて追ひて諡號を加へられて文貞先生と曰ふ。賀循 碑に勒して其の德行を紀す。

これも太康中とあるだけで、晉朝から召された年が明記されていないけれども、陸機の入洛より前のことであろう。

范平は結局、晉には仕えなかったが、やはり吳の老臣石偉も、晉の招きに應じることなく、晉の武帝の太熙元年（二九〇）に、八十三歳で亡くなっている。すなわち、『吳書』孫休傳注に引く『楚國先賢傳』には、次のようにある。

石偉、字公操、南郡人。少好學、脩節不怠、介然獨立、有不可奪之志。舉茂才、賢良方正、皆不就。孫休即位、特徵偉、累遷至光祿勳。及皓即位、朝政昏亂、偉乃辭老耄痼疾乞身、就拜光祿大夫。吳平、建威將軍王戎親詣偉。太康二年、詔曰、吳故光祿大夫石偉、秉志清白、皓首不渝、雖處危亂、廉節可紀。年已過邁、不堪遠涉。其以偉爲議郎、加二千石秩、以終厥世。偉遂陽狂及盲、不受晉爵。年八十三、太熙元年卒。

石偉、字は公操は、南郡の人なり。少くして學を好み、節を脩めて怠らず、介然として獨立し、奪ふ可からざるの志有り。茂才・賢良方正に挙げらるるも、皆な就かず。孫休即位するや、特に偉を徵し、累遷して光祿勳に至る。皓の即位するに及び、朝政は昏亂し、偉は乃ち老老痼疾と辭して身を乞ひ、就ち光祿大夫に拜せらる。吳平ぐや、建威將軍王戎は親ら偉に詣る。太康二年、詔して曰く、「吳の故の光祿大夫石偉は、志を乗ること清白にして、皓首まで渝らず、危亂に處ると雖も、廉節紀とす可し。年は已に過邁なれば、遠く渉るに堪へず。其れ偉を以て議郎と爲し、二千石の秩を加へ、以て厥の世を終はらしめよ」と。偉は遂に陽はり狂ひて盲に及び、晉の爵を受けず。年八十三、太熙元年卒す。

王戎がみずから石偉のもとを訪れたというが、このことは、『晉書』卷四三・王戎傳には、

戎嘉其清節、表薦之。

戎は其の清節を嘉とし、表して之を薦む。

とあり、王戎が上表して偉を取り立てるように薦めたと記している。

さて、この資料で注目されるのは、吳が亡んだ翌年の太康二年には、已に南人を晉朝に招いていたということである。すなわち、これらの資料によって、陸機が入洛する以前には、もう已にかなりの數の南人が、洛陽に赴いていたということが考えられるのである。

入洛後の南人が、北方社會で冷遇され、北方人士の輕蔑を受けたことは、『世説新語』に傳える入洛した陸機と北人とのやりとりが、何よりもそのことを物語っている。即ち、言語篇に言う王濟（字は武子）との羊酪をめぐるやりとりや、簡傲篇の劉寶（字は道眞）との壺盧をめぐる話、そうして、次に擧げる方正篇に見える父祖をめぐる盧志とのやりとりなどである。

盧志於衆坐、問陸士衡、陸遜陸抗是君何物。答曰、如卿於盧毓盧誕。士龍失色。既出戶、謂兄曰、何至如此。彼容不相知也。士衡正色曰、我父祖名播海內。寧有不知。鬼子敢爾。

盧志 衆坐に於て、陸士衡に問ふ、「陸遜・陸抗は是れ君の何物か」と。答へて曰く、「卿の盧毓・盧誕に於けるが如し」と。士龍は色を失ふ。既に戸を出でて、兄に謂ひて曰く、「何ぞ此の如きに至る。彼は相ひ知らざる容し」と。士衡 色を正して曰く、「我が父祖 名は海内に播けり。寧んぞ知らざること有らん。鬼子 敢へて爾す」と。

此のほかにも、北と南の對立を示す幾つかの例がある。たとえば、吳郡出身の孫秀（字は彦才）についての、次のような話もその一つである。

孫秀降晉、晉武帝厚存寵之、妻以姨妹蒯氏。室家甚篤。妻嘗妬、乃罵秀爲貉子。秀大不平、遂不復入。蒯氏大自悔責、請救於帝。時大赦、群臣咸見。既出、帝獨留秀、從容謂曰、天下曠蕩、蒯夫人可得從其例不。秀免冠而謝、遂爲夫婦如初。

孫秀 晉に降るや、晉の武帝は厚く之を存寵し、妻すに姨妹の蒯氏を以てす。室家 甚だ篤し。妻 嘗て妬し、乃ち秀を罵りて貉子と爲す。秀 大いに平らかならず、遂に復た入らず。蒯氏は大いに自ら悔責し、救ひを帝に請ふ。時に大赦あり、群臣 咸な見ゆ。既に出づるに、帝 獨り秀を留めて從容として謂ひて曰く、「天下 曠蕩たり、蒯夫人も其の例に従ふを得可きや不や」と。秀は冠を免いで謝し、遂に夫婦爲ること初めの如し。 (『世説新語』惑溺篇)

晉に降った孫秀を厚く寵愛した武帝(司馬炎)は、秀を妻の妹の蒯氏と結婚させた。仲睦まじき夫婦であったが、ある時、嫉妬した妻が、孫秀のことを「貉子」と罵ったというのである。「貉子」とは、北人が南人を罵倒するときの言葉であるが、それを言われた孫秀が、それっきり二度と妻の部屋に入らなかつた、ということ、さらには武帝のとりなしによつて、やっと妻を許したということから見ても、此の言葉がいかに輕蔑の意味を含んでいるかが分かる。

此のようなことは、『晉書』陸機傳の中にも記されている。

初宦人孟玖弟超、竝爲穎所嬖寵。超領萬人爲小都督。未戰、縱兵大掠。機錄其主者。

超將鉄騎百餘人、直入機麾下奪之、顧謂機曰、貉奴能作督不。

初め宦人の孟玖と弟の超とは、竝びに穎の嬖寵する所と爲る。超は萬人を領して小都督と爲る。未だ戰はざる時、兵を縦にして大いに掠す。機は其の主者を録す。超は鉄騎百餘人を將る、直ちに機の麾下に入りて之を奪ひ、顧みて機に謂ひて曰く、「貉奴 能く督と作るや不や」と。

その初め、宦者の孟玖と弟の超とは、成都王穎に可愛がられていた。孟玖は、かつて自分の父を邯鄲の令に取り立ててもらおうとした際に、陸雲の強い反対にあって、それがかなわず、それからというもの、陸兄弟を深く怨んでいた人物である。その孟玖の弟の超が、陸機の率いる長沙王討伐の軍に加わっており、小都督となっていたが、戦さの始まる前に勝手に兵を動かして掠奪をほしのままにしていた。たまりかねた陸機が、その首謀者を捕えたところ、超は鉄騎百人ほどを引き連れて、機の陣内に突入し、部下を奪い返して、振り向きざまに機に、「きさまなどに大都督の能があるものか」と言った、というのである。ここの「貉奴」というのも、先の孫秀の妻が言った「貉子」と同じく、南人を侮蔑する言葉であつて、さぞかし陸機のプライドを傷つけたことであろう。この二つの例が示すように、北人には常に南人に對する侮蔑感情があつたものと思われる。そうして、このような感情は、様々な形となつて表面化している。例えば、『吳書』虞翻傳注に引く『江表傳』

には、孫策がかつて壽春に出かけ馬日磾に會つた時に、中原の人士達が、「東方の人士は才能はあるにはあるが、學問が博くないために、議論するとなると、中原の者には及ばないのが残念である」と言ったのを聞いたということ、虞翻に告げることが、次のように書かれている。

(策)謂翻曰、孤昔再至壽春、見馬日磾。及與中州士大夫會、語我東方人多才耳。但恨學問不博、語議之間、有所不及耳。……

翻に謂ひて曰く、「孤は昔 再び壽春に至り、馬日磾に見ゆ。中州の士大夫と會するに及び、我に語るに、東方の人は多才なる耳。但だ恨むらくは學問 博からず、語議の間、及ばざる所有る耳と。……」

これに據れば、北方における南人蔑視の風潮は、早くからあったようであり、そうしてこのような風潮は、呉が滅亡した後もずっと續いていくのである。例えばまた、呉が平定された後、晉の侍中の庾峻らが、孫皓の侍中であつた李仁に、「呉の主君が人の顔を剝いたり、足を切つたりしたというが、それは本當か」、「歸命侯(孫皓)は人の目を抉り取つたというが、本當なのか」といったことを問ねている。すなわち、『吳書』孫皓傳の裴松之注に、次のように言う。

吳平後、晉侍中庾峻等問皓侍中李仁曰、聞吳主披人面、剝人足、有諸乎。……又問曰、云歸命侯乃惡人橫睛逆視、皆鑿其眼、有諸乎。

吳 平ぎて後、晉の侍中庾峻ら、皓の侍中李仁に問ねて曰く、「吳主は人の面を披き、人の足を剝ると聞く、諸れ有るか」と。……又た問ねて曰く、「歸命侯は乃ち人の横睛逆視を惡み、皆な其の眼を鑿つと云ふ、諸れ有るか」と。

このように、北方社會全體が南方出身者を侮蔑し、南人に對して冷淡である風潮のなかで、南人達は、それに對抗するために、集團化していったものと思われる。入洛した南人が、ばらばらであつては、所詮、北人には對抗できない。北方社會にあつて、少しでも自分達の立場を安定させるためには、先ず集團を作り、その中で情報を交換し合い、北人に立ち向かうための手立てを検討する必要があるのではなからうか。しかし、入洛した南人が結束し、集團化を計るためには、どうしてもその核となる人物が必要であつた。そこで洛陽にいる南人をまとめるための中心となるに相應しい人として、名門陸氏の出である陸機に白羽の矢が立ったのであろう。つまり、洛陽にいる南人達をまとめるために、陸機にどうしても入洛してもらわねばならなかつたのである。そのことを窺わせる資料が、次に擧げる二首の詩である。即ち、陸機の「贈顧令文爲宜春令詩」と、陸雲の「答大將軍祭酒顧令文詩」である。詩題に見える「顧令文」なる人物については、陸雲が張華に宛てた書翰「與張光祿書」其二のなかに、

顧令文、彦先、每宣隆眷、彌泰之惠。

顧令文・彦先には、毎に隆眷を宣べられ、彌泰の恵みあり。

とあって、「令文」は、顧榮（字は彦先）の兄か従兄であると思われるが、詳しいことは分からない。

それでは先ず、陸機の「贈顧令文爲宜春令詩」から見てみよう。此の詩は今の『陸士衡文集』（四部叢刊本）には収められておらず、『文館詞林』卷一五六に見える。全五章か成る此の詩は、詩題が示す通り、宜春（安成郡宜春縣）の令として赴任する顧令文に贈ったものである。

その第一章では、呉の名門の出である顧令文のすばらしさを、次のように詠う。

藹藹芳林 藹藹たる芳林

有集惟嶽 集まる有るは 惟れ嶽

壘壘明哲 壘壘たる明哲

在彼鴻族 彼の鴻族に在り

淪心渾無 心を渾無に淪め

遊精大樸 精を大樸に遊ばす

播我徽猷 我に徽猷を播き

□彼振玉 彼に振玉を□

盛んに茂る芳しき林、多くの鳥が集まっているのは高い山である。（このように多くの人材がいる中でも）勉め励まされる聡明なるあなたは、呉の名族であられた。心をすべて無にして、何物にも捉われることはなく、私をうまく導いて下され、……

第四句に「鴻族」とあるが、顧氏は、呉の四姓、すなわち「朱・張・顧・陸」の一つであった。なお、第八句は、その初めの字を欠いている。

続く第二・三章では、令文の才をもってすれば、宜春縣はきつとよく治まるであろう、と言う。

彼玉之振 彼の玉 之れ振すれば

光於厥潜 厥の潜めるを光かせ

大明貞觀 大明 貞觀せば

重泉匪深 重泉も深きに匪ず

我有好爵 我に好爵有らば

相爾在陰 爾を相けて陰に在らん

翻飛名都 名都に翻り飛んで

宰物於南 物を南に宰めん

あなたの才をもつてすれば、潜めるところをも輝かせ、その大いなる明哲さをもつて正しく示せば、深い泉もその深さを感じさせることがないように（よく治まるであろう）。私に立派な爵位があれば、北の方（洛陽）にあって（蔭ながら）あなたにお力添えもできるでしょうに。（あなたは）名都（宜春）に赴任して、南の方をよく治められるでしょう。

禮弊則偽 禮の弊れなば 則ち偽あり

樸散在華 樸の散ずれば 華に在り

人之秉夷 人の秉夷なる

則是惠和 則ち是れ惠和ならん

變風興教 風を變じて 教へを興すは

非徳伊何 徳に非ずして 伊れ何ぞ

我友敬矣 我が友は敬せられ

俾人作歌 人をして歌を作ら俾めん

禮が廢れば虚偽が行なわれ、素朴さが失われれば華美になるものである。人民がよく治まるのは、それはあなたの慈しみによるものであろう。風俗を變え 教えを興すのは、徳でなければ いったい何がそれをしようか。我が友（であるあなた）は（人民から）敬われ、人々に歌われることであらう。

このように、令文の徳化によって宜春がよく治まるであらうことを述べたあと、続く第四章では、令文との交わりの深いことを言い、別れにあたっての思いを次のように綴っている。

交道雖博 交はりの道は 博しと雖も

好亦勤止 好んで亦た勤む

比志同契 志を比して同に契るは

惟予與子 惟だ予と子とあるのみ

三川既曠 三川は既に曠かに

江亦永矣 江も亦た永し

悠悠我思 悠悠たる我が思い

託邁千里 託して千里に邁かん

多くの人と交わってはいしたが、皆ともよく付き合った。志を一つにしてともに語り合ったのは、ただ私とあなただけである。三川（の流れる洛陽）からは既に遙か遠ざかり、長江（の流れる南の方）は長く遠い。悠悠たる我が思いを、千里の彼方に託すことにしよう。

そうして終わりの第五章で、次のように結んでいる。

吉甫之役 吉甫 役に之き

清風既沈 清風 既に沈めり

非子之艶 子の艶なるに非ざれば

詩誰云尋 詩は誰か云に尋がん

我來自東 我の來たるや 東自りし

貽其好音 其の好音を貽らる

豈有桃李 豈に桃李有らんや

忽子瓊琛 子が瓊琛に忽づ

將子無矧 將ふ 子 矧かること無かれ

屬之翰林 之を翰林に屬せしめん

變彼靜女 變女たる彼の靜女

此惟我心 此れ惟だ我が心なるのみ

吉甫が行役したために、清風のごとき詩はまったく作られなくなった。あなた（の作る詩）の艶やかさでなければ、いったい誰が（清風のごとき）詩を歌い継ぐことができようか。私はもともと東からやってきたが、（そのとき、あなたは）東方のよき知らせを傳えて下さった。（私には、あなたに贈るべき）桃や李のような立派な詩はできません。ただただあなたの美玉のごとき詩に恥じ入るばかりです。どうか（外地での勤務が）長くないように。また共に詩文を作り合ひましょう。美しきかの娘（を待つ人）、これが今の私の心境です。

第一聯の「吉甫之役、清風既沈」は、『毛詩』大雅・烝民に「吉甫作誦、穆如清風」（吉甫 誦を作る、穆にして清風の如し）とあるのに拠る。すなわち、仲山甫が天子の命を受けて齊に赴いた時、吉甫は詩を作って贈ったのであるが、その吉甫が役に赴いてしまつては、清風のごとき詩を作れる者は誰もいない、つまり令文を吉甫に喩え、あなたが宜春に行けば、洛陽にはよい詩を作れる人がいなくなつてしまふ、というのである。また、結びの聯「變彼靜女、此惟我心」は、『毛詩』邶風・靜女に「靜女其妹、俟我於城隅。愛而不見、搔首踟躕」（靜女 其れ妹、我を城隅に俟つ。愛すれども見えず、首を搔きて踟躕す）とあるのを踏まえ、令文を靜女に喩えて、その再會をひたすら待つことを言ったものである。

以上が、陸機が顧令文に贈った詩の内容であるが、今、注目されるのは、此の詩の第五章である。即ち、そのなかで、「我來自東、貽其好音」（我の來たるや 東自りし、其の好音を貽らる）とすることから、陸機の入洛以前に、既に顧令文は洛陽にいたことが知られる。つまり陸機の入洛に際し、顧令文は洛陽にあって、その根回しをしていたとも考え

られるのである。そのことを一層はつきりとさせるのが、次に擧げる陸雲の詩である。

陸雲の「答大將軍祭酒顧令文詩」は、『陸士龍文集』卷三および『古詩紀』卷三六に収められている。詩の内容から考えて、詩題の「大將軍」とは、惠帝(司馬衷)が即位した永熙元年(二九〇)に位を大將軍に進められ、翌永康元年(二九一)に薨じた秦王東のこと思われる。その東に(軍謀)祭酒として仕えていた顧令文に答えたのが、此の詩である。詩は全て五章から成り、先ずその第一章では、令文が祭酒となった経緯について觸れ、次のように言っている。

惟林有鸞

惟れ林には鸞有り

惟淵有螭

惟れ淵には螭有り

顯允明德

顯允 明德にして

實邦之基

實に邦の基なり

先后陟恪

先后 陟恪にして

子配于茲

子は茲に配せらる

遵彼玉堂

彼の玉堂に遵ひ

受言遘之

受けて言に之を遘ふ

林には鸞がおり、淵には螭がいるように、聡明で真心があり 明德あるあなたは、まことに國の基である。先王(武帝)が登遐されて、あなたは此の職に就けられた。かの玉堂に仕え、(大將軍の)相談に與かった。

第五句の「先后」とは、太熙元年(二九〇)に崩御した武帝(司馬衷)を指すと思われる。のち惠帝(司馬衷)が即位して永熙と改元し、同じ年に秦王東が大將軍に任じられている。恐らく顧令文は、この時に大將軍秦王東の(軍謀)祭酒となったのであろう。

これに續く第二・三章では、令文の人柄を稱賛して次のごとく詠う。

中原有軌

中原 軌あるも

世鮮克蹈

世に克く蹈むもの鮮なり

先民有懷

先民 懷ひ有り

子探其妙

子は其の妙を探れり

心猶水鑿

心は猶ほ水鑿のごとく

函景内照

景を函んで 内に照り

名若振炎

名は振炎の若く

攄光外耀

光を攄げて 外に耀く

天下には(踏み行なうべき)道があるが、世の中で(その道を)実践できる者はめったにいない。古えの賢者が抱いていた思いについては、あなたはその奥妙を探っておられ

た。その心は水鏡のように、景を含んで内に照り、その名は燃え上がる炎のごとく、光をあげて外に輝いている。

相彼水鑒 彼の水鑒に相るは

民胥攸臨 民の胥な臨む攸なり

矧曰明德 矧んや曰に明德あり

人誰弗欽 人誰か欽まざらんや

寫我朶頤 我が朶頤を寫き

即爾澄心 爾の澄心に即かん

義隆自古 義の隆きこと古へ自りし

好逸在今 好みは逸かにして今に在り

水鏡のごとき人を見ては、人民は皆それを手本とする。まして明らかなる徳あるあなたを、人民の誰がつつしまないことがあるうか。我が食りの心を除き去って、あなたの澄みきった心につきたいものである。その義は古えからずっと高く、好誼は今の世に至るまで續いている。

第四章では、惠帝のもとで、必ずや令文のよき評判が高くあがるであろうと、次のように述べている。

大人有作 大人 作る有りて

興雲自天 興雲 天自りす

之子于升 之の子 子に升り

亦躍于淵 亦た淵に躍らんとす

景曳清霄 景は清霄を曳き

響發鳴弦 響きは鳴弦より發る

義問弘集 義問 弘く集まり

淑風載鮮 淑風 載に鮮かなり

有徳の君（惠帝）が即位されて、雲は天から湧き起こった。あなたは天に昇り、また淵に躍り上がらんとしている。（あなたが世に出たならば）その光は澄みきった大空をわたり、音は鳴り響く弦から起こるかのようであろう。（そのように）あなたのよき評判は廣く集まり、麗しき風評も鮮やかなことであろう。

そうして結びの第五章では、令文の好誼に對して感謝の氣持ちを表している。

企子朔都 子を朔都に企せしむるは

非子孰念 子に非ずんば孰か念はん

豈無弱翰 豈に弱翰無からんや

才不克贍」 才の克く贍かならず

惠音聿來 惠音 聿に來り

瓊華玉艷 瓊華 玉艷なり

無德不報 德無くして 報いられず

念辭惟忝 辭を念ひて 惟に忝づるのみ

私に朔の都（洛陽）へ來るように計らってくれたのは、あなたでなければ 誰が（私のことを）思ってくれようか。（私には）筆が無いわけではないが、豊かなる才がありません。あなたからの詩をいただきましたが、（それは）まことに美玉のごとく麗しいものです。（私には）徳が無いために（あなたに）報いることができません。（あなたの）お言葉を思つては 恥じ入るばかりです。

以上が、陸雲が顧令文に贈った詩の内容である。これに據つて雲と令文との關係を考えてみるに、第五章の第一聯に「企予朔都、非子孰念」（予を朔都に企せしむるは、子に非ずんば 孰か念はん）というのは、「朔都」すなわち洛陽に雲を呼び寄せたのが、令文であつたらしいことを窺わせるものである。先の陸機の「贈顧令文爲宜春令詩」のなか（第五章）にも、「我來自東、貽其好音」（我の來たるや東自りし、其の好音を貽らる）とあつたが、このこと考え合わせれば、二陸の入洛以前に、すでに令文は洛陽におり、その令文がどうしても二陸に入洛してもらいたいが爲に、南人に好意的であり、有能な人材集めに意を注いでいた張華らの力を借りて、二陸の洛陽入りの準備を進めていたのであろう。『文選』卷十七「文賦」李善注に引く臧榮緒『晉書』には、

年二十而吳滅。退臨舊里、與弟雲勤學、積十一年。譽流都華、聲溢四表。

年二十にして吳滅ぶ。退きて舊里に臨み、弟の雲と學に勤め、積むこと十一年。譽は都華に流れ、聲は四表に溢る。

とあつて、陸機の文人としての名聲は、すでに洛陽で廣まっております、張華もそのような陸機を入洛させるために、進んで協力したものと思われる。入洛後の顧令文ら南人達は、北方社會において結束するための中心となる人物を缺いていた。ために北人と對抗できうるだけの器量と才能を有した人物を必要としており、そこで陸機の入洛を望んでいたのであろう。

(4) 陸雲の働き

さて、このように洛陽にいる南人からの強い要請によつて入洛した陸機を中心にして、南方出身者の集團が形成されてゆき、そうして、洛陽における南人集團をより大きくする

ために、南方人士を多く洛陽に導き入れていったことについては、先にも述べた通りであるが、南人を入洛させるに當たっては、陸機の蔭にかくれての、陸雲のこまめな働きがあったようである。

陸雲には、呉にいる鄭曼季なる人物に贈った詩（「鄭曼季に贈る詩」）がある。詩は全て四首あり、それぞれが『詩經』の形式に倣ったもので、その全ての詩に對して鄭曼季からも、詩が返されている。陸雲からの詩の第一首は「谷風」という全五章から成る詩であり、次のような序が附せられている。

谷風、懷思也。君子在野、愛而不見。故作是詩、言其懷而思之也。

「谷風」は、懷思するなり。君子 野に在り、愛すれども見えず、故に是の詩を作り、其の之を懷思するを言ふなり。

「君子在野」とは、君子なる鄭曼季が仕官しないで、野に隠れていることをいう。「愛而不見」とは、『毛詩』邶風・靜女に「愛而不見、搔首踟蹰」（愛すれども見えず、首を掻きて踟蹰す）とあるのに拠り、鄭曼季のことをいとおしく思っても會うことができない、ということを示すのである。ところで、『毛詩』には、小雅に「谷風」詩があり、その詩序で「谷風は、幽王を刺るなり。天下 俗薄く、朋友の道絶ゆ」とあり、集傳に「此れ朋友相い怨むるの詩なり」というように、「谷風」の詩は、朋友の道の棄絶したことを怨傷したものである。思うに陸雲も、此の意を借りて作詩したのであろう。

先ず、第一章では、穏やかな暮春の情景を歌い、あなたのことが思われてならないと、次のように述べる。

習習谷風 習習たる谷風

扇此暮春 此の暮春を扇ぐ

玄澤墜澗 玄澤 墜ちて潤ひ

靈爽烟燼 靈爽 烟燼たり

高山熾景 高山 景を熾んにし

喬木興繁 喬木 興こり繁る

蘭波清蹕 蘭波 清く蹕り

芳澍増涼 芳澍 涼を増す

感物興想 物に感じては 想ひを興こし

念我懷人 念ひて我は人を懷ふ

和らぎ吹く東風は、此の暮春にゆらめく。奥深き澤は墜ちて潤い、靈妙なる爽やかさが立ちこめている。高い山に日は輝き、背の高い木は盛んに茂っている。美しい波は清らに打ち寄せ、芳しき波は涼しさを増す。あれこれと感じ入っては想いを起こし、あなたのことが思われてならない。

續く第二章から第四章までも、第一章と同様に、暮春の美しく穏やかな情景を述べ、あなたのことばかりを考えていると、それぞれの章を結んでいる。

習習谷風

習習たる谷風

載穆其音

載ち穆たる其の音

流芳鼓物

流芳 物を鼓し

清塵拂林

清塵 林を拂ふ

霖雨嘉播

霖雨 播に嘉く

有淒淒陰

淒淒たる有りて淒陰たり

歸鴻逝矣

歸鴻 逝きて

玄鳥來吟

玄鳥 來たり吟ず

嗟我懷人

嗟 我 人を懷ふ

其居樂潛

其の居るや 潜めるを樂しむ

明發有想

明發より想ふ有り

如結予心

予が心に結ばれるが如し

和らぎ吹く東風は、ここに美しく音をたてている。馨しい風は音をたてながら、清らかに林の中を吹き渡る。春の長雨は種を播くにはよく、雨雲が沸き起こり垂っている。北へ歸る鴻は行ってしまい、(こんどは)燕がやってきて鳴きだした。ああ、あなたのことが思われてならない。(が、その)あなたの方は野に潜むことを楽しんでおられるのだ。夜が明けるまで(あなたのことを)想いつづけ、私の心は結ばれるばかりです。

習習谷風

習習たる谷風

以温以涼

以て温く 以て涼し

玄黄交泰

玄黄 交はり泰り

品物含章

品物 章を含む

潜介淵躍

潜介 淵に躍り

飛鳥雲翔

飛鳥 雲に翔る

嗟我懷人

嗟 我 人を懷ひ

在津之梁

津の梁に在り

明發有思

明發まで思ふ有り

淩波襲裳

波を淩ぎて裳を襲ぐ

和らぎ吹く東風は、温かくて(また)涼しい。天と地が相通じ、萬物みな内に徳をおさめている。潜める亀は淵に踊り、飛ぶ鳥は雲に翔る。ああ、私はあなたのことを思って、川岸の石の上にいる。夜の明けるまで(あなたを)思い續け、波をわけて裳をかかっている。

習習谷風

習習たる谷風

有集惟喬

集まる有るは 惟れ喬

嗟我懷人

嗟 我 人を懷ひ

於焉逍遙

焉に於て逍遙す

鸞栖高岡

鸞は高岡に栖み

耳想雲韶

耳に雲韶を想ふ

拊翼夕墜

翼を拊ちて夕べに墜ち

和鳴與朝

鳴くに和して朝に興くる

我之思之

我は之に之を思ひ

言懷其休

言に其の休からんことを懷ふ

和らぎ吹く東風の中、鶴が集まっている。ああ、私はあなたのことを思い、ここまでやって来てさまよっている。鸞は高い岡に棲んで、耳に雲韶の樂を想い、翼を打っては夕べに降りたち、共に鳴き合っては朝に飛ぶ。私は（あなたのことを）思つては、その安らかならんことを願っている。

以上、第一章から第四章までは、暮春の穏やかな情景を述べることによって、晉朝が平穩であることに喩え、あなた（鄭曼季）が入洛するのに良い時期になっている、ということを書いてあるものと思われる。つまり、世の中も落ち着いているので、そろそろ出てきてはいかがでしょうか、というのであろう。そうして第五章で、次のように此の詩を結んでいる。

習習谷風

習習たる谷風

其音孔嘉

其の音 孔だ嘉し

所謂伊人

所謂 伊の人

在谷之阿

谷の阿に在り

虎質山嘯

虎のごとく質にして山に嘯き

龍輝淵播

龍のごとく輝きて淵に播る

維南有箕

維れ南に箕有るも

匪休其和

其の和を休にするに匪ず

有採天畢

採たる天畢有るも

戢爾滂沱

爾の滂沱を戢めんや

懿厥河漢

懿 厥の河漢

耽彼大華

彼の大華を耽まん

明發有懷

明發まで懷ふ有り

我勞如何

我が勞 如何ぞや

和らぎ吹く東風、その音はとても良い。私の愛しい此の人は、谷の下で隠棲している。虎のごとく質實で山に嘯き、龍のごとく輝きをあげて淵に蟠る。南の空には箕星があるが、（我々ふたりを）一つにすることはないし、長い柄をした畢星があっても、流す涙をすくってはくれない。さあ、かの天の河で、おおいに楽しむことにしましょう。夜が明けらるまで（あなたを）思い續けては、この私の苦しみをどうすればいいのでしょうか。

第六聯「懿厥河漢、耽彼大華」（懿 厥の河漢、彼の大華を耽まん）は、「河漢」即ち晉朝で共にやろうではないか、という雲の曼季へのメッセージであり、こちらに出てきて欲しいという、雲の気持ちを言ったものと思われる。

此の陸雲の詩に對して、鄭曼季の方は「鴛鴦」という全六章から成る詩で答えているが、その序には、次のようにある。

鴛鴦、美賢也。有賢者二人、雙飛東岳、揚輝上京。其兄已顯登清朝、而弟中漸、婆娑衡門。然其勞謙接士、吐握待賢、雖姬公之下白屋、洙泗之養三千、無以過也。乃肯垂顧、惠我好音。思與其遊道德之樂、結永好之歡云爾。

「鴛鴦」は、賢を美するなり。賢者二人有り、東岳より雙び飛び、輝を上京に揚ぐ。其の兄は已に顯はれて清朝に登り、而して弟は中漸して、衡門に婆娑たり。然れども其の勞謙して士に接し、吐握して賢を待つこと、姫公の白屋に下り、洙泗の三千を養ふと雖も、以て過ぐる無きなり。乃ち肯へて顧を垂れて、我に好音を惠まる。與に其の道德の樂しみに遊び、永好の歡びを結ばんことを思ひて爾云ふ。（『陸士龍文集』卷三）

二陸を鴛鴦に喩え、「東岳」即ち吳から洛陽に飛びたったことを言う。これに據れば、陸機の方は入洛後、すぐに朝廷でその名を揚げ、陸雲の方は、しばらく官に就くことがなかつたようである。しかしその間に陸雲は、人士を集めるのに奔走していたのであろう。

鄭曼季については、『三國志』卷四七「吳書」吳主傳注に引く『文士傳』に、

（鄭青）子豐、字曼季、有文學操行、與陸雲善、與雲詩相往反。司空張華辟、未就、卒。

子の豐、字は曼季は、文學操行有りて、陸雲と善く、雲に詩を與へて相ひ往反す。司空張華 辟すも、未だ就かずして、卒す。

とあり、張華が彼を招いていることが記されている。このことと、鄭曼季の「鴛鴦」詩の序とを考え合わせるに、入洛後の陸雲は、張華が多くの人材を集めていたのによって、吳の人士を洛陽に導き入れるのに活躍していたようである。このことを示すように、『晉書』陸雲傳には、雲が同郷吳郡出身の張贍なる人物を推薦した、次のような書が載せられている。

移書太常府薦張贍（太常府に移書して張贍を薦む）

蓋聞、在昔聖王、承天御世、殷薦明德、思和人神、莫不崇典謨以教思、興禮學以陶遠。是以、帝堯昭煥、而道協人天、西伯質文、而周隆二代。大晉建皇、崇配天地、區夏既混、禮學將庸。君侯應歷運之會、贊天人以期、博延俊成、熙隆載典。伏見衛將軍舍人同郡張贍、茂德精粹、器思深通。初慕聖門、棲心重仞、啓塗及階、遂升樞奧。抽靈匱於祕宮、披金籙於玄夏、思樂百氏、博採其珍。辭邁翰林、言敷其藻。探微集逸、思心洞神、論道屬書、篇章光覲。含奇宰府、婆娑公門。棲靜隱寶、淪虛藏器、駸裳襲錦、緇衣被玉。曾泉改路、懸車將邁、考盤下位、歲聿屢遷。搢紳之士、具懷愾恨。方今太清闕宇、四門啓籥、玄綱括地、天網廣羅。慶雲興以招龍、和風起而儀鳳。誠巖穴耀穎之秋、河津託乘之日也。而瞻沈淪下位、群望悼心。若得端委太學、錯綜先典、垂纓玉階、論道紫宮、誠帝室之瑰寶、清廟之偉器、廣樂九奏、必登昊天之庭、韶夏六變、必饗上帝之祀矣。

蓋し聞く、「在昔 聖王、天を承けて世を御し、殷んに明德を薦めて、人神を和さんことを思ひ、典謨を崇んで以て教思し、禮學を興んにして以て遠きを陶かざるは莫し」と。是を以て、帝堯は昭らかに煥やかに、道は人天に協ひ、西伯は質文にして、周は二代よりも隆なり。大晉は皇を建て、天地に崇配するも、區夏 既に混れ、禮學 將に庸ならんとす。君侯は歷運の會に應じ、天人の期を贊けんとして、博く俊成を延き、載典を熙め隆んにす。伏して見るに、衛將軍の舍人、同郡の張贍は、茂德 清粹にして、器思 深く通ず。初めより聖門を慕ひ、心を重仞に棲ましめ、塗を啓き階に及び、遂に樞奥に升る。靈匱を祕宮に抽き、金籙を玄夏に披き、百氏を思ひ樂しみ、博く其の珍を採る。辭は翰林に邁え、言は其の藻を敷く。微を探り逸を集め、思心 神を洞め、道を論じて書を屬り、篇章は覲るに光あり。奇を宰府に含み、公門に婆娑たり。靜かなるに棲んで寶を隠し、虚しきに淪んで器を藏め、駸裳もて錦に襲ね、緇衣もて玉を被ふ。曾泉に路を改め、懸車に將に邁かんとするも、下位に考盤し、歲聿に屢々遷る。搢紳の士、具に愾恨を懷けり。方に今、太清 宇を闕き、四門 籥を啓き、玄綱 地を括り、天網 廣く羅す。慶雲 興りて以て龍を招き、和風 起りて鳳を儀す。誠に巖穴 穎を耀かすの秋、河津 乘に託するの日なり。而るに瞻は下位に沈淪して、群望 心を悼ましむ。若し太學に端委し、先典を錯綜し、纓を玉階に垂れ、道を紫宮に論ずるを得ば、誠に帝室の瑰寶、清廟の偉器にして、廣樂 九奏せば、必ず昊天の庭に登り、韶夏 六變せば、必ず上帝の祀に饗せられん。

「その昔、聖王は天命を奉承して天下を治め、さかんに明德ある者を推薦して、人民と天神とを調和させようと思ひ、天謨を尊んで教え導き、禮樂を盛んにして四方を陶冶しないものはなかった、と聞いております。かくして、帝堯は明らかに輝き、その政道は人にも

天にも協ったものであったし、周の文王は文と質を兼ね備え、周代は夏・殷よりも隆盛をきわめたのです」と書き出す此の書は、すぐれた才能を持ちながらも、その能力を發揮できないうままでいる張贍を、是非とも取り立てて欲しいと訴えている。

南人の中心としての陸機、そうして南人を援助する張華、彼らの蔭で陸雲は人材集めに一役買っていたのである。

以上、述べてきたように、入洛後の陸機・陸雲兄弟は、北方社會における南方出身者に對する壓力の中で、張華をはじめとする、南人のよき理解者の援助を仰ぎながら、次第に北方社會へ同化していったようである。そうして次には、同郷の人士を次々と北方社會へ引き入れ、陸機を中心に南人の集團が結成されていったのである。このような行動を取った二陸には、呉國の名家たる誇りと、祖國のためという強い意識があったものと思われるが、そのことは、潘岳の詩（「爲賈謐作贈陸機」詩）に答えた陸機の「答賈長淵」詩のなかに、

吳實龍飛 吳は實に龍のごとく飛び

劉亦岳立 劉も亦た岳のごとく立つ

とあることから類うことができるし、また陸雲が陸典に宛てた書翰（「與陸典書」其五）のなかの、

吳國初祚、雄俊尤盛。今日雖衰、未皆下華夏也。

吳國 初めて祚^{あき}るや、雄俊 尤も盛んなり。今日 衰へたりと雖も、未だ皆は華夏に下らざるなり。

という言葉が、如實にそのことを物語っているように思われる。

(5) 西晉朝廷の對南人政策——南人を南方統治に利用——

北方社會における南人集團の形成の時期は、これまで見てきたように、陸機の入洛前から已にその氣運があり、陸機の入洛をみて、急速に集團化が進んでゆき、そのメンバーも次第にその數を増していったものと考えられるが、それでは、そのような集團化は、どこを中心に行なわれたのであろうか。結論から先に言えば、どうもそれは愍懷太子府を舞台にしていたように思われる。

洛陽に入った陸機は、元康元年（二九一）に、それは恐らく張華の後押しと、さらには賈謐の推輓によるものであろうが、愍懷太子の洗馬として太子府に仕えることになった。愍懷太子の府には、北人のみならず、陸機ら南方人士をも含む多くの文人が集められ、そ

ここに文學集團が存在したことは、すでに第二章において述べた通りであるが、此の太子府には、かなりの数の南人がいたように思われる。太子府に多くの南人が集まっていたという事については、南人集團の構成員について後述する際に詳しく述べることとして、今は、此の愍懷太子府に集められた南人が、再び南方へ赴任させられていたということについて、少しく述べてみたい。

愍懷太子府にあった陸機・陸雲兄弟は、やがて淮南に鎮した吳王司馬晏の郎中令として赴任した。淮南にあった吳王府での二陸の状況については、それを知る手がかりが殆ど無いが、陸機には此の時期に作られたと思われる次のような詩がある。

吳王郎中時從梁陳作（吳王の郎中たる時に梁陳に従ひて作る）

在昔蒙嘉運 在昔 嘉運を蒙り

矯迹入崇賢 迹を矯げて崇賢に入りぬ

假翼鳴鳳條 翼を鳴鳳の條に假り

濯足升龍淵 足を升龍の淵に濯げり

玄冕無醜士 玄冕 醜士無く

冶服使我妍 冶服 我をして妍なら使む

輕劍拂髮厲 輕劍 髮厲を拂ひ

長纓麗且鮮 長纓 麗にして且つ鮮なり

誰謂伏事淺 誰か謂はん 事に伏すこと淺しと

契闊踰三年 契闊して三年を踰えたり

薄言肅後命 薄か言に後命を肅み

改服就藩臣 服を改めて藩臣に就けり

夙駕尋清軌 夙に駕して清軌を尋ね

遠遊越梁陳 遠く遊びて梁・陳を越ゆ

感物多遠念 物に感じては遠念多く

慷慨懷古人 慷慨しては古人を懷ふ

（『文選』卷二六）

むかし、嘉き巡り合わせに會い、足を高くあげて崇賢門に入ることとなった。喜び鳴く鳳凰の止まる枝から翼を借り、天に升る龍の住む淵で足を洗うがごとく東宮で太子に仕えた。大夫の黒き冠をつけている人には才の無い者はいないが、麗しき衣服は私をも立派に装ってくれた。軽やかな剣で大きな垂れ帯を払えば、冠の長い纓は美しくも鮮やかであった。誰が思ったりしよう、太子にお仕えするのが浅かったなどと。心を遣いつつ三年が過ぎていたのだ。今やここに次なる詔命を受け、前の服を脱ぎ替えて吳王の臣下となった。朝早く車の準備をして清らかな道を行き、遠く梁や陳を越えていった。その風物に感じては古えのことをあれこれと思い、慷慨しては古人をしのんだ。

此の詩は、陸機が晏に従って、梁・陳の間に遠遊した時のものであるが、機はかつて都で太子に仕えた華やかな頃をしのびつつ、外地にいる今の自分の身の上を思っている。最終句の「古人」とは、漢代において梁の孝王に仕え、のちに漢の武帝の寵愛を得て天下にその文名を轟かせた枚卓や司馬相如などの文人を指すが、彼らの境遇と今のみずからの身の上とを比べた時、陸機は思わず感慨を催さずにはおれなかったであろう。

また同じ頃、かつて都の太子のもとで共に仕え、今は斥丘の令となつて赴任している馮文龍に贈った「馮文龍に贈る詩」（『文選』卷二四）のなかでは、

昔與二三子 昔 二三子と

遊息承華南 承華の南に遊息す

拊翼同枝條 翼を拊ちて枝條を同じくし

翻飛各異尋 翻飛しては各々尋さを異にせり

苟無凌風翮 苟に風を凌ぐの翮無く

徘徊守故林 徘徊して故林を守る

かつては君たち二・三の友と一緒に、承華門の南にある東宮でのどかに仕えていた。その後は、羽ばたきしては枝を同じくしたり、飛び立ってはそれぞれに高さを異にしたりした。ところが今や風を凌ぐだけの強い翼もなく、もといいた林にじっとしているだけである。

と、かつての都での生活を懐かしみつつ、今の身の上を嘆いている。

そもそも呉王司馬晏、字は平度は、武帝司馬炎の子で、『文選』卷二四・陸機「答賈長淵」詩に引く臧榮緒『晉書』には、

呉王晏、字平度、武帝第二十三子。

呉王晏、字は平度は、武帝の第二十三子なり。

とあり、武帝の第二十三子である。太康十年（二八九）に呉王に封ぜられ、のち射聲校尉・後軍將軍を歴任した。その人となりは慎み深いものがあつたが、才能は人並み以下で、武帝の二十六人の男子の中で、最も劣っていたという。さらに『晉書』卷六四・武十三王傳にある本傳には、

又少有風疾、視瞻不端。後轉增劇、不堪朝覲。

又た少くして風疾有り、視瞻 端ならず。後に轉た劇しきを増し、朝覲に堪へず。

とあり、晏が幼いころ風疾を患い、その後遺症があつたことが記されているが、このような人物に仕えることとなつた陸機・陸雲兄弟には、並々ならぬ苦勞があつたものと想像される。『晉書』陸雲傳には、晏が西園の地に大邸宅を造営した時に、あまりに奢に過ぎて

おり時宜になつていないとした、次の如き陸雲の上奏文が収められている。

臣竊見世祖武皇帝、臨朝拱默、訓世以儉。即位二十有六載、宮室臺榭、無所新營、屢發明詔、厚戒豐奢。國家纂承、務在遵奉。而世俗陵遲、家競盈溢、漸漬波蕩、遂已成風。雖嚴詔屢宣、而侈俗滋廣。每觀詔書、衆庶歎息。清河王昔起墓宅時、手詔追述先帝節儉之教、懇切之旨、形于四海。清河王毀壞成宅、以奉詔命。海內瞻望、咸用欽然。臣愚以先帝遺教、日以陵替。今與國家、協崇大化、追闡前蹤者、實在殿下。先敦素朴、而後可以訓正四方。凡在崇麗、一宜節之以制、然後上厭帝心、下允時望。臣以凡才、特蒙拔擢。亦思竭忠効節、以報所受之施。是以不慮犯迂、敢陳所懷。如愚臣言有可采、乞垂三省。

臣竊かに見るに、世祖武皇帝は、朝に臨んでは拱黙し、世に訓ふるに儉を以てす。位に即きて二十有六載、宮室臺榭は、新たに營む所無く、屢々明詔を發して、厚く豊奢を戒む。國家纂承し、務めは遵奉に在り。而るに世俗は陵遲し、家ごとに盈溢を競ひ、漸浸波蕩して、遂已に風と成る。嚴詔屢々宣ぶと雖も、而も侈俗滋々廣し。詔書を觀る毎に、衆庶歎息す。清河王、昔墓宅を起こす時に、手づから詔して先帝が節儉の教へを追述し、懇切の旨は、四海に形はる。清河王は成宅を毀壞し、以て詔命を奉ず。海内瞻望し、咸な用て欣然たり。臣愚以へらく、先帝の遺教は、日に以て陵替す。今國家の與に、協に大化を崇くし、追いて前蹤を闡かにするは、實に殿下に在り。先づ素朴を敦くして、而る後に以て四方を訓正す可し。凡そ崇麗に在りては、一に宜しく之を節するに制を以てし、然る後に上は帝心に厭き、下は時望に允ふべし。臣は凡才を以て、特に拔擢を蒙る。亦た忠を竭し節を効して、以て受くる所の施に報いんことを思ふ。是を以て犯迂を慮らず、敢へて懷ふ所を陳ぶ。如し愚臣の言采る可きこと有らば乞ふ三省を垂れられんことを。

「世祖武皇帝は、朝廷に臨んでは手を拱いて何も言わず、人民には儉約ということをお教えになられた。在位二十六年の間、宮殿・高殿は新築することもなく、たびたび明詔を下されては、厚く贅澤を戒められた」と、武帝司馬炎が質素儉約に務めたことから説き起こし、「その先帝の遺訓も日に日に廢れているが、それを再び天下に示すのは、殿下しかいない」と言うのである。此の上奏文は、「國起西園第表啓」（國の西園に第を起こすの表啓）として、『陸士龍文集』卷九に収められている二首のうちの一首であるが、この陸雲の諫言は、晏に受け入れてもらうことはできなかったようで、雲は再び「西園第既成有司啓」（西園第既に成りて有司の啓）を上つて、先帝の節用儉約の教えをよく考え、華奢に過ぎる第室の造営を、有司に命じて止めさせるように進言している。『陸士龍文集』卷九には、さらに此の時期のものとして、晏が即位後、賓客を饗應せず、師友を引見しないことを諫めた「王即位未見賓客群臣又未講啓」（王の即位して未だ賓客群臣に見はず、又た

未だ講ぜざるの啓)、晏が入朝しないことを諫めた「輿駕比出啓」(輿駕 出だすに比ぶの啓)などが収められている。眞面目で實直な陸機は、このように事あるごとに呉王晏に苦言を呈していたが、それはうわべだけのものではなく、眞心からのものであったように思われる。

ところで、『裴子語林』(『古小説鈎沈』所収)には、次のような逸話が記されている。

陸士衡在洛、夏日忽思竹篠飲。語劉實曰、吾郷曲之思轉深。今欲東歸。恐無復相見理。言此已、復生三歎。

陸士衡 洛に在り、夏日、忽ち竹篠の飲を思ふ。劉實に語りて曰く、「吾が郷曲の思ひは轉た深し。今、東に歸らんと欲す。恐らくは復た相ひ見ふことの理無からん」と。此を言ひ已はり、復た三歎を生ず。

すなわち、陸機は洛にいた或る夏の日、ふと故郷の竹篠での酒宴を思い出し、ますます望郷の念がつのつた、というのである。また、陸機の「懷土の賦」の序には、

余去家漸久、懷土彌篤。方思之殷、何物不感。曲街委巷、罔不興詠。水泉草木、咸足悲焉。故述斯賦。

余は家を去りてより漸く久しく、土を懐しむこと彌々篤し。之を思ふことの殷きときに方りては、何物にか感じざらん。曲街 委巷、詠を興さざるは罔し。水泉 草木、咸な悲しむに足れり。故に斯の賦を述ぶ。(『陸士衡文集』卷二)

と、故郷を離れてから時間が経つにつれ、望郷の念がつのり、目にするもの全てに感慨を覚えるということを言っている。

このように、入洛後の陸機は、折りに觸れては故郷のことを懐かしみ、機會があれば呉に歸りたいという思いもあったようであるが、實際に暗愚なる晏に従つて彼の地に赴任するや、その生活は決して満足のできるものではなかったようである。しかし、晉朝にしてみれば、名望のある陸機・陸雲兄弟を呉の地に赴任させることは、甚だ都合のよいことであつて、このようなこと、即ち、いったん入洛した南人を暫く洛陽に留めておき、それから再び南方へ赴任させるといった政策を採っていたように思われる。

これと同じことは、會稽から入洛し、裴頠に従つた夏少明なる南人の場合にも言える。陸機が此の夏少明に贈つた詩を見てみると、その状況がよく分かる。陸機の「贈武昌太守夏少明」詩は、武昌太守として赴任する少明に陸機が贈つた詩で、全六章から成る四言詩である。まず其の第一章で次のように言う。

穆穆君子

穆穆たる君子

明德允迪

明德 允に迪む

拊翼負海

翼を負海に拊ち

翻飛上國 上國より翻飛す
 天子命之 天子之に命じ
 曾是在服 曾ち是れ服に在り
 西踰崑岡 西のかた崑岡を踰え
 北臨河曲 北のかた河曲に臨む

天子の命を受けて上國なる洛陽から、負海（遠國）なる武昌へ赴任することを言うのであるが、最後の聯に「西踰崑岡、北臨河曲」というのは、次の第二章で、その徳ある政事によってよく治まり、評判が天下に知れ渡ったという、その政事を施した場所をいうものと思われる。つまり夏少明は、地方官として西に北にと赴いて、そこでの功績が認められて入朝し、太子府に仕えることになったのである。そのことを次のように言っている。

爾政既均 爾の政は既に均にして
 爾化既淳 爾の化は既に淳なり
 舊汙孔修 舊汙 孔だ修まり
 徳以振人 徳は以て人を振ふ
 雍雍鳴鶴 雍雍たる鳴鶴
 亦聞於天 亦た天に聞こゆ
 釋厥緇衣 厥の緇衣を釋きて
 爰集崇賢 爰に崇賢に集へり

最終句に「崇賢」というのは、太子府の宮殿の門である崇賢門のことをいい、地方で評価を得た少明が、「緇衣」即ち太守の服を脱いで、太子府に仕えることになったのを表わしている。續いて第三章では、太子府での様子を次の如く歌う。

羽儀既奮 羽儀 既に奮ひ
 令問不已 令問 已まず
 慶雲烟燭 慶雲 烟燭として
 鴻漸載起 鴻 漸みて 載に起つ
 峨峨紫闥 峨峨たる紫闥
 侯戾侯止 侯れ戻り 侯れ止る
 彤管有煒 彤管 煒たる有り
 納言崇祉 言を納れて祉を崇くす

「羽儀既奮、令問不已」（あなたの儀容は素晴らしいものがあり、よき誉れは止むことがない）というように、少明は太子府での務めを立派に果たした。太子府でも評判の高い少明は、天子の命によって、東のかた武昌を治めることになった。そのことを次の第四章で

は述べている。

| | |
|------|-----------|
| 既考爾工 | 既に爾の工を考し |
| 將胙爾庸 | 將て爾の庸を胙る |
| 大君有命 | 大君 命有りて |
| 俾守于東 | 東を守ら俾む |
| 允文允武 | 允に文 允に武 |
| 威靈以隆 | 威靈 以て隆し |
| 之子于邁 | 之子 于に邁き |
| 介夫在戎 | 介夫として戎に在り |

武昌はもともと呉國にあつては、呉を守るための據點であつた。その地を呉人である少明が治めることになり、武昌の民もそれを望んでいゝであらうと、第五章では、次のように言う。

| | |
|------|---------------|
| 悠悠武昌 | 悠悠たる武昌 |
| 在江之隈 | 江の隈に在り |
| 吳未喪師 | 吳の未だ師を喪はざるるとき |
| 爲蕃爲畿 | 蕃爲り 畿爲り |
| 惟此惠君 | 惟れ此の惠君 |
| 人胥攸希 | 人 胥な希ふ攸なり |
| 亦奔重光 | 亦奔たる重光 |
| 照爾繡衣 | 爾が繡衣を照らす |

ここにあなたは洛陽を離れ、再會はいつになるか分からない。あなたのことを思い慕つては遙か長江のあたりを望んで、此の詩を作つた次第である、と一篇を次のように結んでいゝる。

| | |
|------|-----------|
| 人道靡常 | 人道 常靡く |
| 高會難期 | 高會 期し難し |
| 之子于遠 | 之子 于に遠ざかる |
| 曷云歸哉 | 曷ぞ云に歸らん哉 |
| 心平愛矣 | 心に愛す |
| 永言懷之 | 永く言に之を懷ふ |
| 瞻彼江介 | 彼の江介を瞻て |
| 惟用作詩 | 惟に用て詩を作る |

以上が、詩の内容であるが、これに據って夏少明が、先ず地方官として勤務し、その後、入洛して太子府に任せ、再び南方へ赴任していく、という状況がよく分かる。恐らく先の陸機・陸雲の場合と同じように、中央での様子を見て、やがて人望のある者は、地方へ、それも自分の故郷へと赴任させていたように思われる。

南人に南方を治めさせたといのは、『晉書』卷五七に傳のある陶瑋の例を見ても、そのことが分かる。

陶瑋、字世英、丹楊秣陵人也。父基、吳交州刺史。瑋仕吳歷顯位。

陶瑋、字は世英は、丹楊・秣陵の人なり。父は基、吳の交州刺史たり。瑋は吳に仕へて顯位を歴たり。

このように、陶瑋の父の基は、吳の交州刺史であったが、その後、瑋も交州刺史に任じられている。交州での陶瑋は人民に慕われており、『晉書』本傳には、次のようなことが記されている。

（孫皓）徵瑋爲武昌都督、以合浦太守脩允代之。交土人請留瑋以千數。於是遣還。瑋を徵して武昌の都督と爲さんとし、合浦の太守脩允を以て之に代へんとす。交土の人瑋を留めんことを請ふこと千を以て數ふ。是に於て遣還す。

孫皓が陶瑋を武昌の都督にしようとしたところ、交州の民は、瑋を留めておいて欲しいと請い、ために陶瑋は武昌から還された、というのである。このように民から慕われていた陶瑋は、吳が平定された後も、交州に留まり、前後三十年間に亘って彼の地をよく治めたのである。『晉書』に云う。

在南三十年、威恩著于殊俗。及卒、舉州號哭、如喪慈親。朝廷乃以員外散騎常侍吾彦代瑋。彦卒、又以員外散騎常侍顧祕代彦。

南に在ること三十年、威恩は殊俗に著はる。卒するに及んで、州を擧げて號哭し、慈親を喪するが如し。朝廷乃ち員外散騎常侍吾彦を以て瑋に代ふ。彦卒し、又た員外散騎常侍顧祕を以て彦に代ふ。

陶瑋が死んだ後、朝廷では吾彦を赴任させた。吾彦は『晉書』卷五七に陶瑋傳の次に傳が立てられており、

吾彦、字士則、吳郡吳人也。

吾彦、字は士則は、吳郡・吳の人なり。

というように、吳出身の南人である。さらに此の吾彦が亡くなった後は、やはり南人の顧祕が交州刺史として着任している。この顧祕の交州赴任に當たって、陸機が贈った詩が、

『文選』卷二四に収められている次の如き詩である。

贈顧交趾公眞（顧交趾公眞に贈る）

顧侯體明德

顧侯 明德を體し

清風肅已邁

清風 肅として已に邁し

發迹翼藩后

迹を發して藩后を翼け

改授撫南裔

改め授けられて南裔を撫せんとす

伐鼓五嶺表

鼓を五嶺の表に伐ち

揚旌萬里外

旌を萬里の外に揚げんとす

遠績不辭小

績を遠くするは 小を辭せず

立德不在大

徳を立つるは 大のみに在らず

高山安足凌

高山 安んぞ凌ぐに足らん

巨海猶繫帶

巨海も猶ほ帶を繫らすのごとし

惆悵瞻飛駕

惆悵として飛駕を瞻め

引領望歸旆

領を引きて歸旆を望まん

詩題の李善注に引く『晉百官名』には、

交州刺史顧祕、字公眞。

交州刺史顧祕、字は公眞。

とあり、同じく「發迹翼藩后」句の李善注に引く『顧氏譜』には、

祕爲吳王郎中令。

祕は吳王の郎中令爲り。

という。

このように、南方は信用のできる南人に治めさせる、という政策が、西晉朝廷によって採られていたように考えられるのである。

(1) 陸雲と陸典

二陸や顧榮を中心とした、北方社會における南方人士の集團が次第に形成されてゆくなか、郷里の吳においては、陸典という人物を中心に、その結束が圖られていた。恐らく、そこでは陸典を中心として、吳の人材を北方社會へと送り出すための機關が作られていたのであろう。そうして吳の陸典が、洛陽の陸雲と連絡を取り合いながら、しかるべき人材を北方へと送り出していたものと思われる。次に擧げる書翰は、陸雲がその陸典に宛てたものであるが、これに據れば、陸典が郷里の吳にあり、洛陽の陸雲と連絡を取り合っていた状況がよく分かる。

雲再拜。自曠但爾、已復經時。限制長路、惟親未期。嗟近晨風、傾匡結言。來誨網謬、篤眷彌隆。誦玩千周、以當侍會。靜言莫瞻、翹翹仰慕。大人汜愛、在我尤弘。每銜思戀、何時去心。限此省省、願言用替。遥瞻靈丘、感時情傷。往來信理。自更繼續。如有信、唯不玉音。

雲 再拜。自ら曠くして但だ爾り、已に復た時を経たり。長路に限制され、親を惟ふも未だ期あらず。晨風を嗟近し、匡を傾け言を結ぶ。來誨 網謬にして、篤眷 彌々隆し。誦玩すること千周、以て侍會に當つ。靜言するも瞻る莫く、翹翹として仰ぎ慕ふ。大人の汜愛は、我に在りて尤も弘し。毎に思戀を銜み、何れの時か心を去らん。此に限られて省省たり、願に言に用て替らんとす。遥かに靈丘を瞻み、時に感じて情は傷む。往來信に理あり。自ら更に情を繼がん。如し信有らば、唯に玉音なるのみにあらず。

(「與陸典書」其一)

陸雲が「大人」と呼ぶところからみて、陸典は陸雲のおじにあたる人と思われる。また同じく陸典宛ての別の書翰の中に、

華亭之望、以大人爲宗主。

華亭の望みは、大人を以て宗主と爲す。

(「與陸典書」其十)

とある。「華亭」とは、かつて陸機の祖父の陸遜が華亭侯に封ぜられ、陸機の父の陸抗の時まで、此の地にその第宅があった所である。『元和郡縣圖志』卷二五・華亭縣には、次の如く記されている。

華亭谷在縣西二十五里。陸遜陸抗宅在其側。遜封華亭侯。

華亭谷は縣の西二十五里に在り。陸遜・陸抗の宅は其の側に在り。遜は華亭侯に封ぜらる。

また、『世說新語』尤悔篇注に引く『八王故事』には、

華亭、吳由拳縣郊外墅也。有清泉茂林。吳平後、陸機兄弟共遊於此十餘年。

華亭は、吳の由拳縣の郊外の墅なり。清泉茂林有り。吳の平げられし後、陸機兄弟は共に此に遊ぶこと十餘年なり。

とあって、吳の平定後、陸機兄弟が十年餘りの間、退居していた所である。この陸氏の舊里の華亭に、陸典を中心に陸氏一族、ひいては吳國の人士が結束していたようである。陸雲が、その陸典と絶えず連絡を取り合っていたということは、次に擧げる二つの書翰によつても分かる。

雲再拜。巨卿前行陵、有小事。惟以具聞。事已大了。猶以爲願、行欲取歸。念別方至、豫以愆然。每相見、未嘗不以大人爲言。想令仁士光、令遠公然兄弟、屢數常存思想。想令遠分好、已爲綢固。彦恩復蒙誘掖耳。無因覲對、言不盡心。屢垂誨、以慰遠思。

雲再拜。

雲 再拜。巨卿 前に陵に行き、小事有り。惟ふに以に具に聞せん。事は已に大ぼ了る。猶ほ以て願ひと爲すは、行々歸るを取らんと欲ることを。別れの方に至らんことを念ひ、豫め以て愆然たり。相ひ見ふ毎に、未だ嘗て大人を以て言を爲さずんばあらず。想ふに令仁士光・令遠公然の兄弟は、屢數 常に思想に存せん。想ふに令遠は分好、已に綢固を爲す。彦恩は復た誘掖を蒙らんのみ。覲對するに因無く、言は心を盡くさず。屢々誨へを垂れて、以て遠思を慰められよ。雲 再拜。

(「與陸典書」其七)

雲再拜。巨卿在臺、高譽洋溢。洛邑之内、無不欽敬。東南之貴寶、眞不但會稽之篠蕩也。每會常共歌詠、信無一面不歎吟也。想方周旋攜手、散今日之思耳。雲再拜。

雲 拜拜。巨卿 臺に在り、高譽 洋溢たり。洛邑の内、欽敬せざる無し。東南の貴寶は、眞に但に會稽の篠蕩のみならずなるなり。會する毎に常に共に歌詠し、信に一面として歎吟せざるは無きなり。方に周旋して手を攜へ、今日の思ひを散せんことを想ふのみ。

雲 再拜。

(「與陸典書」其八)

前者は、巨卿なる吳國出身者が、郷里に歸りたいと思つてゐること、またその巨卿と會つた際に、陸典のうわさをしているということが前半に述べられ、後半では、已に入洛している令仁士光と公然、すなわち陸機の從弟の陸曄(字は士光)兄弟についての状況報告などが記されている。後者では、前の書翰に見えた巨卿が、中央にあつて甚だ評判がよいこ

とを述べ、また「會する毎に常に共に歌詠し、信に一面として歎吟せざる無きなり」と、洛陽にいる南方出身者が、しばしば集まっては詩を詠ずるということがあったことを記している。このような南人の集會は、しばしば行なわれたようで、陸雲の「與楊彦明書」其二には、

各爾永高、良會每闌。

各爾ちうちやう 永えいく高たかたるも、良會 毎まゐに闌たげなり。

とあり、また「與戴季甫書」其六にも、

在此會同、每言高重武陵。

此に在りて會同しては、毎に武陵を高重せんことを言ふ。

とあって、そこでの話題は、やはり南方出身者の動向が中心であったようである。「武陵」については、陸雲の「與戴季甫書」其四に、

武陵於荆州、云多人士。聞周孟子、伍令明、潘世長諸人、竝爲美德。心常依依。今日遭遇、良驥展才之秋也。不審達者凡有幾人。無因聽承誨語、咨稟未聞。每懷勤企。表不盡言。

武陵は荆州に於いて、人士多しと云ふ。周孟子・伍令明・潘世長の諸人、竝びに美德を爲すと聞く。心 常に依依たり。今日の遭遇は、良驥 才を展ぶるの秋なり。達者は凡そ幾人有るかを審かにせず。誨語を聽承するに因無く、咨稟 未だ聞せず。毎に勤企を懷ふ。表するも言を盡くさず。

とあり、周孟子・伍令明・潘世長といった人達の名を列挙して、陸雲がそれを戴季甫に推薦している。

また、陸雲の「與楊彦明書」其二には、

重存往會、益以增歎。

重ねて往會を存たもひ、益々以て歎なげきを増す。

とあり、陸雲が呉にいた頃も、仲間が集まるといったことがあったようである。そうしてそのような集會は、洛陽では陸機を中心に、呉では陸典を中心に持たれていたらしく、陸雲の「與陸典書」其二にある、「數會同邪」(數々會同するや)という記述からも、そのことが分かる。

(2) 陸典入洛の計画

ところで、陸雲が陸典に宛てた書翰のなかに、次のようなものがある。

雲再拜。國土之邦、實鍾俊哲。太伯清風、遯世立德、龍蛇東嶽、三讓天下。垂化邁迹、百代所晞、高蹤越於先民、盛德稱乎在昔。續及延陵、繼響馳聲。沈淪漂流、優遊上國。聆音察微、智越衆俊。通幽暢遐、明同聖哲。言偃昭烈於孔堂、員武邁功於諸侯。自秀偉相承、明德繼踵、亦爲不少。吳國初祚、雄俊尤盛。今日雖衰、未皆下華夏也。來誨所及、遐邇同懷。重及二聖、不逮衆子。或生羗狄、或在邊域、勲美之隆、實如嘉誨。愚以東國之士、進無所立、退無所守。明裂皆苦、皆未如意。雲之鄙姿、志歸丘壘。葦門閨室之人、敢晞天望之冀。至於紹季札之遐蹤、結高肝於中夏、光東州之幽味、流榮勲於朝野、所謂闕管以瞻天、緣木而求魚也。重申不列。雲再拜。

雲再拜。國土の邦、實に俊哲を鍾む。太伯は清風ありて、世を遯れて徳を立て、東嶽に龍蛇して、三たび天下を讓る。化を垂れ迹を邁むは、百代に晞るる所にして、高蹤は先民に越え、盛徳は在昔に稱へらる。續いて延陵に及び、響きを繼ぎ聲を馳す。沈淪し漂流し、上國に優遊す。音を聆き微を察し、智は衆俊を越ゆ。幽に通じ遐に暢り、明は聖哲に同じ。言偃は烈を孔堂に昭らかにし、員・武は功を諸侯に邁む。自ら秀偉相ひ受け、明德踵を繼ぎ、亦た少なからずと爲す。吳國初めて祚るや、雄俊尤も盛んなり。今日衰へたりと雖も、未だ皆は華夏に下らざるなり。來誨の及ぶ所は、遐邇懐ひを同じくす。重ねて二聖に及び、下は衆子に逮ぶ。或いは羗狄に生じ、或いは邊域に在るも、勲美の隆なるは、實に嘉誨の如し。愚は東國の士なるを以て、進むも立つ所無く、退くも守る所無し。裂皆の苦しみを明らかにするは、皆な未だ意の如からず。雲の鄙姿なる、丘壘に歸るを志す。葦門閨室の人、敢へて天望の冀ひを晞はんや。季札の遐蹤を紹ぎ、高肝を中夏に結び、東州の幽味を光かせ、榮勲を朝野に流すに至つては、所謂る管を闕ひて以て天を瞻、木に緣りて魚を求むるなり。重ねて申すも列あらず。雲再拜。

(「與陸典書」其五)

「我が國土なる呉には、實に多くの俊哲を集めている」と書き出される此の書翰の前半は、所謂、お國自慢であつて、古くは父の大王の意向を察して、弟の季歴に國を讓り、みずからは呉の地に出奔した周の泰伯に始まり、續いて延陵の季札、孔子の弟子の言偃(字は子游)、楚の平王に父と兄を殺されて呉に逃れた伍員(字は子胥)、呉王闔閭に仕えて戦功を立てた孫武、といった優秀なる人材が、我が呉には多く出たことを述べる。そうして、「吳國初めて祚るや、雄俊尤も盛んなり。今日衰へたりと雖も、未だ皆なは華夏に下らざるなり」と、我が吳國は、まだまだ中國に引けをとることはない、というところに、

雲の率直な氣持が表れている。陸雲が、此の手紙で陸典に言いたかったのは、實はその後に書かれていることである。すなわち、皆さんの期待に副えない自分は、故郷に帰ることを願っている。季札の跡を繼いで、東方を盛んにし、勲功を立てることなど、とうてい自分にはできないし、と言っているのである。

このような手紙を陸典に出した陸雲の意圖は、此の手紙の直後に書かれたと思われる次の書翰を見れば、はっきりと分かる。

雲再拜。每惟大人、挺自然之妙質、稟淵姿之弘毅。克壯其烈、兼詠之道、希文尚武。潜居以娛其志、靜處以育其神、遊歩八素之林、逍遙德化之園。豈如末者牽曳瓌瓌。世道通明、俊乂在官焉。使晞世之寶、久隱岑嶮之山、逸景之迹、永繫幽冥之坂、方將軍乘回輪、束帛箋箋。排金風於太微、跨天路以妙觀。恢皇綱之大烈、垂榮祚乎祖宗。此乃大人之所宜循、非凡夫之可企望也。無因親展、書以言心。心之所積、萬不叙一。雲再拜。

雲 再拜。毎に惟ふに大人は、自然の妙質を挺き、淵姿の弘毅を稟く。克く其の烈を壯んにし、詠の道を兼ね、文を希ひ武を尚ぶ。潜居して以て其の志を娛ませ、靜處して以て其の神を育み、八素の林に遊歩し、徳化の園に逍遙す。豈に末者の瓌瓌を牽曳するが如からんや。世道 通明にして、俊乂 官に在り。晞世の寶をして、久しく岑嶮の山に隠れしめ、逸景の迹をして、永く幽冥の坂に繫がしむるも、方將に車乘 綸を回し、束帛 箋箋たらんとす。金風を太微に排し、天路を跨いで以て妙觀す。皇綱の大烈を恢んにし、榮祚を祖宗に垂る。此れ乃ち大人の宜しく循ふべき所にして、凡夫の企望す可きに非ざるなり。親ら展ぶるに因無く、書して以て心を言ふ。心の積る所、萬に一を叙べず。雲 再拜。

(「與陸典書」其六)

つまり、あなたはこれまで呉にあって靜かに暮らしておられたが、今や世の道は明らかに通り、才能のある者が官に就くようになったから、どうか出てきてほしいと言っているのである。そうして、「皇綱の大烈を恢んにし、榮祚を祖宗に垂る」こと、すなわち、經世の大業を盛んにし、榮んなる祚いを祖宗に垂れることは、他でもない、あなたが行なうべききであつて、私ごとき凡夫の願うことではない、と言ふ。要するに陸雲は、これまで呉に留つて南方人士の世話役をしてきた陸典に、洛陽へ出て來てはどうか、と勧めているのである。

思うに洛陽では、もとより陸機を中心にして南人が集まり、その蔭で陸雲は南人のまじめ役として働いていたのであろうが、更に陸典のような南人から厚く信頼されている、いわば大物が必要であつたのではなからうか。表立つて行動することの苦手な陸雲は、自分に代わつてそのようなことのできる人物として、陸典の入洛を願つていたものと思われる。

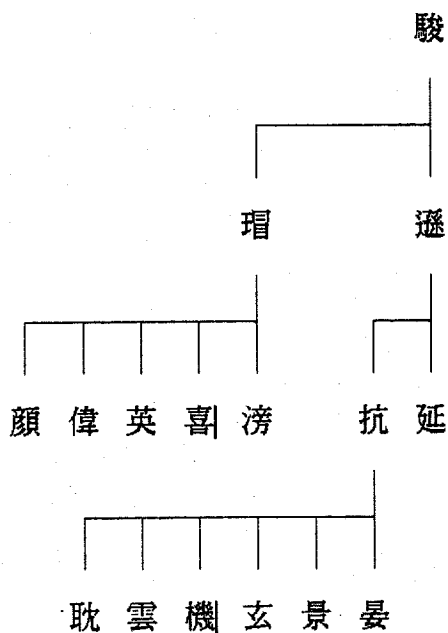
三 南人集團の構成員

北方社會における南人集團は、陸機・陸雲を中心構成されていたわけであるが、二陸以外には、どのような人達が此の集團に加わっていたのであろうか。以下、南人集團の構成員を取り上げて、陸機・陸雲との関わりを中心に、その動向を探ってみる。

南人の入洛は、吳國平定の翌年頃から已に始まっていたようであるが、ここでは先ず、陸機入洛以前に入洛していた南人について見た後、陸機と時期を同じくして入洛した人と、陸機入洛後に洛陽に入った人士とに分けて見てゆくことにする。

(1) 陸機入洛以前

陸機の入洛に先立って洛陽入りした南人に陸喜(字は恭仲)がいる。陸喜は、陸機の従父兄にあたり、陸機との関係を系圖で示せば、次のようになる。



さて、陸喜の傳は『晉書』卷五四にあり、次のように書き出されている。

喜字恭仲。父瑄、吳吏部尚書。喜仕吳、累遷吏部尚書。少有聲名、好學有才思。

喜、字は恭仲。父は瑄、吳の吏部尚書たり。喜は吳に仕へ、累りに吏部尚書に遷る。少

くして聲名有り、學を好んで才思有り。

そうして、二陸が舊里の華亭に退居している間に、晉朝からの詔を受けて、十五人の南人とともに、洛陽に入っている。すなわち、『晉書』本傳には次のようにある。

太康中、下詔曰、偽尚書陸喜等十五人、南士歸稱。竝以貞潔、不容暗朝。或忠而獲罪、或退身修志、放在草野。主者可皆隨本位就下拜除。敕所在以禮發遣、須到隨才授用。乃以喜爲散騎常侍。尋卒。

太康中、詔を下して曰く、「偽尚書陸喜等十五人、南士稱を歸す。竝びに貞潔なるを以て、暗の朝に容れられず。或いは忠にして罪を獲、或いは身を退けて志を修め、放たれて草野に在り。主者皆な本の位に隨ひ就きて拜除を下す可し。所在に敕して禮を以て遣ひを發し、須らく才に隨ひて授け用ふるに到るべし」と。乃ち喜を以て散騎常侍と爲す。尋いで卒す。

陸喜と俱に入洛した十五人が誰であるのか、『晉書』にはその名を記さない。また、入洛の時期については、『晉書』は「太康中」と言うだけで、その年を明記しないが、陸雲の「晉故散騎常侍陸府君誄」（『陸士龍文集』卷五）には、

惟太康五年夏四月丙申、晉故散騎常侍吳郡陸君卒。

惟れ太康五年夏四月丙申、晉の故の散騎常侍吳郡の陸君 卒す。

とあり、陸喜が亡くなったのは太康五年（二九五）であることが分かる。「尋いで卒す」ということから、その入洛は太康四年頃のことであろうか。

この陸喜の他に、陸機入洛より先に洛陽入りした人物として顧令文なる人がいる。顧令文については、『晉書』に其の名を認めることができないが、陸雲の張華宛ての書翰「與張光祿書」其二のなかに、

顧令文、彦先、每宣隆眷、彌泰之惠。

顧令文・彦先には、毎に隆眷を宣べられ、彌泰の恵みあり。

とあって、「令文」は、顧榮（字は彦先）の兄か從兄であると思われるが、それ以上のことは分からない。

ところで、この顧令文に、陸機が贈った詩「贈顧令文爲宜春詩」（『文館祠林』卷一五六）に、次のような句がある。

我來自東 我的來たるや 東自りし

貽其好音 其の好音を貽らる

すなわち、陸機が東のかた吳國からやって來たとき、あなたは私に東方のよき知らせを傳えてくれた、というのであるが、この記述によって、陸機の入洛以前に、既に顧令文は洛

陽にいたことが分かる。さらに、陸雲にも顧令文への詩「答大將軍祭酒顧令文詩」（『古詩紀』卷三六）があり、その中で、

企子朔都 子を朔都に企せしむるは

非子孰念 子に非ずんば 孰か念はん

とあって、陸雲を朔都、すなわち洛陽に入れることを計ったのが顧令文であったことが知られる。つまり、陸機入洛以前にも、数は多くはないものの、既に南人が洛陽入りしており、そうして入洛した南人は、自分達が結束してゆくための中心となる人物を求めて、陸機の入洛を要請したものと思われる。もとより、陸機の入洛に力を貸したのは張華であったが、それには顧令文ら南人の強い働きかけがあったものと考えられるのである。

(2) 陸機入洛の頃

先ず、陸機とほぼ時を同じくして入洛したと思われる、①顧榮、②紀瞻、③賀循、④薛兼、⑤張翰、の五人について見てみよう。

① 顧 榮（彦先）

南人集團にあって、二陸と俱に、その中心的メンバーとして活躍していた人に顧榮（字は彦先）がいる。顧榮は、所謂る呉の四姓「朱・張・顧・陸」のひとつ顧氏の出で、いわば名門中の名門の出身である。四姓については、『世説新語』賞誉篇に、

呉四姓舊目云、張文、朱武、陸忠、顧厚。

呉の四姓 舊目に云ふ、張は文、朱は武、陸は忠、顧は厚なりと。

と、四姓の特長を述べている。また、陸機が「呉趨行」（『文選』卷二八）で、

八族未足修 八族も未だ修るに足らず

四姓實名家 四姓は實に名家たり

と歌うように、呉の人士にとっては、四姓の出であることは、非常な譽れであった。さて、顧榮の傳は『晉書』卷六八にあり、次のように書き出されている。

顧榮、字彦先、吳國呉人也。爲南土著姓。祖雍、吳丞相。父穆、宜都太守。榮機神朗悟、弱冠仕呉、爲黃門侍郎、太子輔義都尉。吳平、與陸機兄弟同入洛、時人號爲三俊。

顧榮、字は彦先は、吳國・吳の人なり。南土の著姓爲り。祖は雍、吳の丞相たり。父は穆、宜都太守たり。榮は機神朗悟、弱冠にして吳に仕へ、黃門侍郎、太子輔義都尉と爲る。吳の平らぐや、陸機兄弟と共に洛に入り、時人は號して「三俊」と爲す。

名門の出である顧榮の評價は、相當に高いものがあつたようではあるが、しかし顧榮も、他の南人と同様に、北方社會での南方出身者に對する軋轢のなかで、苦しめられたようである。すなわち、『晉書』本傳には、次のようなことが記されている。

(榮)恒縱酒酣暢、謂友人張翰曰、惟酒可以忘憂、但無如作病何耳。

恒に酒を縱にして酣暢し、友人の張翰に謂ひて曰く、「惟だ酒のみ以て憂ひを忘る可きも、但だ病を作すを如何ともする無き耳」と。

體調を害することが分かつていながら酒を飲まねばならないほどに、辛いものがあつたのであろう。西晉という波亂に満ちた時代には、南人に限つたことではないが、誰もが身の危険に曝されることが多くあつた。趙王倫が帝位を篡奪し、倫の子の虔が大將軍(『世說新語』注引く『文士傳』は「中領軍」に作る)となつた時に、顧榮はその長史となつた。倫が誅せられるに及んで、榮も捕えられ死刑になるところであつたが、危ういところであつて恩義を施した人によつて、命を救われた。このことには、『世說新語』德行篇に、次のように傳えられている。

顧榮在洛陽、嘗應人請。嘗行炙人有欲炙之色、因輒已施焉。同坐嗤之。榮曰、豈有終日執之、而不知其味者乎。

顧榮 洛陽に在りて、嘗て人の請に應ず。炙を行なふ人に炙を欲するの色有るを覺り、因りて已を輒めて焉に施す。同坐 之を嗤ふ。榮曰く、「豈に終日 之を執りて、其の味を知らざる者有らんや」と。

この時の者が、榮の命を救つたのである。事の経緯は、劉注に引く『文士傳』に、次のように記されている。

曾在省與同僚共飲、見行炙者有異於常僕、乃割炙以啖之。後趙王倫篡位、其子爲中領軍、通用榮爲長史。及倫誅、榮亦被執。凡受戮等輩十有餘人。或有救榮者。問其故、曰、某省中受炙臣也。榮乃悟而嘆曰、一餐之惠、恩今不忘。古人豈虛言哉。

嘗て省に在りて同僚と共に飲するとき、炙を行なふ者に常僕と異なる有るを見て、乃ち炙を割きて以て之に啖はしむ。後、趙王倫 位を篡ひ、其の子は中領軍と爲りて、逼りて榮を用て長史と爲す。倫の誅せらるるに及び、榮も亦た執へらる。凡そ戮を受くるの

等輩は十餘人あり。或いは榮を救ふ者有り。其の故を問ふに、曰く、「某省中にて炙を受けし臣なり」と。榮は乃ち悟りて嘆じて曰く、「一餐の恵み、恩は今にいたるまで忘れず。古人、豈に虚言せんや」と。

後には、東晉創業の基礎固めをして、懷帝(司馬熾)の永嘉六年(三一二)に亡くなった顧榮も、入洛直後から、このように様々な困難にぶつかつたのであるが、南人達の協力や南人に好意的であつた張華や馮熊らの援助によつて、その困難を乗り越えていったのである。陸雲が張華に宛てた書翰に、

顧令文、彦先、每宣隆眷、彌泰之惠。懷德惟慙、守以反側。既晞仁風、委心自昵。

顧令文・彦先には、毎に隆眷を宣べられ、彌泰の恵みあり。徳を懷ひて惟に慙ぢ、守るに反側を以てす。既に仁風に晞され、心を委ねて自ら昵む。(「與張光祿書」其二)

とあるのも、張華の援助に對する感謝の氣持ちを表しているものである。

ところで、『晉書』本傳には、

例拜爲郎中、歷尚書郎、太子中舍人、廷尉正。

例をもつて拜せられて郎中と爲り、尚書郎・太子中舍人・廷尉正を歴たり。

とあつて、入洛して間もない顧榮が尚書郎の職にあつたことが分かるが、實は此の時、南人に對しては非常に高壓的であつた潘岳も、尚書郎として、同じ職場にあつた。すなわち『晉書』卷六〇・索靖傳に、次のようにある。

武帝納之、擢爲尚書郎。與襄陽羅尚、河南潘岳、吳郡顧榮同官、咸器服焉。

武帝 之を納れ、擢きて尚書郎と爲す。襄陽の羅尚・河南の潘岳・吳郡の顧榮と官を同じくし、咸に器服せらる。

陸機に對して見せた、潘岳の南人に向けられたあからさまな敵意は、恐らく南方出身者である顧榮にも、そのまま投げかけられたであろう。酒を飲み耽つていたというのも、此の頃のことであるのかも知れない。そのよな時に陸機から顧榮に贈られたと思われるのが、『文選』卷二四に収める「贈尚書郎顧彦先」詩二首である。その第一首では、時節外れの長雨に心も晴れぬまま、あなたと會つて語り合うこともできないと、心中の憂いを次のように訴えている。

大火貞朱光

大火は朱光を貞し

積陽熙自南

積陽は南自り熙る

續く第二首では、激しい雨の降る中、宿直の夜に、遙か故郷を思いやる氣持ちを次のように詠じている。

望舒離金虎 望舒は金虎に離り

屏翳吐重陰 屏翳は重陰を吐く

凄風迳時序 凄風の時の序るに迳ひ

苦雨遂成霖 苦雨 遂に霖と成る

朝遊忘輕羽 朝に遊んでは 輕羽を忘れ

夕息憶重衾 夕べに息ひては 重衾を憶ふ

感物百憂生 物に感じては 百憂生じ

纏綿自相尋 纏綿として自ら相ひ尋ぐ

與子隔蕭牆 子と蕭牆を隔つのみなるも

蕭牆隔且深 蕭牆 隔たりて且つ深し

形影曠不接 形影は曠かにして接はず

所託聲與音 託する所は聲と音とのみ

音聲日夜闕 音聲 日夜に闕し

何用慰吾心 何を用てか吾が心を慰めん

朝遊遊層城 朝に遊でて 層城に遊び

夕息旋直廬 夕べに息ひて 直廬に旋る

迅雷中宵激 迅雷は中宵に激しく

驚電光夜舒 驚電は光りて夜に舒る

玄雲拖朱閣 玄雲は朱閣に拖き

振風薄綺疏 振風は綺疏に薄る

豐注溢脩雷 豐注は脩き雷に溢れ

黄潦浸階除 黄潦は階除を浸す

停陰結不解 停陰は結びて解けず

通衢化爲渠 通衢も化して渠と爲る

沈稼湮梁穎 沈稼 梁と穎とに湮み

流民沂荆徐 流民 荆と徐とに沂ふ

眷言懷桑梓 眷て言に桑梓を懷ふ
無乃將爲魚 乃ち將に魚と爲ること無からんや

他國にある者の切ない心境が滲み出ている詩であって、このような望郷の念は、北方社會にある南人の共通の思いなのであった。

② 紀瞻（思遠）

顧榮と俱に入洛した南人に、紀瞻（字は思遠）がいる。その傳は『晉書』卷六八の顧榮傳の次に立てられている。

紀瞻、字思遠、丹楊秣陵人也。祖亮、吳尚書令。父陟、光祿大夫。瞻少以方直知名。

吳平、徙家歷陽郡。察孝廉、不行。

紀瞻、字は思遠は、丹楊・秣陵の人なり。祖は亮、吳の尚書令たり。父は陟、光祿大夫たり。瞻は少くして方直を以て名を知らる。吳平ぐや、家を歷陽郡に徙す。孝廉に察せらるるも、行かず。

『晉書』には此の記述の後に、瞻が秀才に挙げられ、その時、尚書郎であった陸機が度々おこなった策問を載せているだけで、やがて永康の初め（三〇〇）に、大司馬の東閣祭酒となるまでの状況はよく分らない。

ところで、陸機が處刑された時、二人の息子の蔚と夏も、父機とともに殺された。『世說新語』尤悔篇注に引く干寶の『晉紀』には、

初陸抗誅步闐、百口皆盡。有識尤之。及機雲見害、三族無遺。

初め陸抗は步闐を誅し、百口皆な盡く。有識は之を尤む。機・雲の害せらるるに及び、三族遺す無し。

とあり、陸氏はその三族が皆殺しにされたことが記されているが、獨り機の女が害を免れていたらしい。『晉書』紀瞻傳には、次のようにある。

（瞻）少與陸機兄弟親善。及機被誅、瞻卹其家周至。及嫁機女、資送同於所生。

少くして陸機兄弟と親善す。機の誅せらるるに及び、其の家を瞻卹すること周至なり。機の女を嫁がしむるに及び、資送は所生に同じなり。

紀瞻はその後、東晉の明帝の頃に、七十二歳で卒している。

③ 賀循（彦先）

『晉書』卷六八・紀瞻傳の次に立てられているのが、賀循（字は彦先）の傳である。

賀循、字彦先、會稽山陰人也。其先慶普、漢世傳禮、世所謂慶氏學。族高祖純、博學有重名。漢安帝時爲侍中、避安帝父諱、改爲賀氏。曾祖齊、仕吳爲名將。祖景、滅賊校尉。父邵、中書令。爲孫皓所殺、徙家屬邊郡。

賀循、字は彦先は、會稽・山陰の人なり。其の先の慶普は、漢の世に『禮』を傳へ、世に所謂る慶氏の學なり。族の高祖純は、博學にして重名有り。漢の安帝の時、侍中と爲り、安帝の父の諱を避けて、改めて賀氏と爲る。曾祖は齊、吳に仕へて名將爲り。祖は景、滅賊校尉たり。父は邵、中書令たり。孫皓の殺す所と爲りて、家屬を邊郡に徙さる。

賀循の父の邵が、孫皓に殺されたことについては、『世説新語』紕漏篇に次のような話が傳えられている。

元皇初見賀司空、言及吳時事問、孫皓燒鋸截一賀頭、是誰。司空未得言、元皇自憶曰、是賀邵。司空流涕曰、臣父遭遇無道。創巨痛深、無以仰答明詔。元皇愧慙、三日不出。元皇 初めて賀司空を見るや、言ひて吳の時の事に及びて問ふ、「孫皓は燒鋸もて一賀の頭を截る、是れ誰か」と。司空 未だ言ふを得ざるに、元皇 自ら憶ひて曰く、「是れ賀邵なり」と。司空 流涕して曰く、「臣の父は無道に遭遇せり。創は巨いにして痛みは深く、以て明詔に仰答する無し」と。元皇は愧慙し、三日 出でず。

驕慢な態度の孫皓に對して、賀邵は、上書してはそれを諫めていたが、皓は却つてそれを恨みに思い、さらに邵の正直を憚る側近が皓に讒言したために、病にあった邵に拷問を加えて死なせてしまったのである。

さて賀循は、『世説新語』言語篇に、

會稽賀生、體識清遠、言行以禮。不徒東南之美、實爲海內之秀。

會稽の賀生は、體識 清遠にして、言行 禮を以てす。徒に東南の美なるのみならず、實に海内の秀爲り。

という、高い評價を受けながらも、長らく朝廷に出ることがなかった。その賀循を推挙したのが、時に著作郎であった陸機である。『晉書』賀循傳には、機の次のような上疏文を載せている。

伏見武康令賀循、德量遠茂、才鑒清遠、服膺道素、風操凝峻。歷試二城、刑政肅穆。

前蒸陽令郭訥、風度簡曠、器識朗拔、通濟敏悟、才足幹事。循守下縣、編名凡悴。訥

歸家巷、棲遲有年。皆出新邦、朝無知己、居在遐外、志不自營。年時倏忽、而遂無階

緒、實州黨愚智所爲恨恨。臣等伏思、臺郎所以使州、州有人、非徒以均分顯路、惠及外州而已。誠以庶士殊風、四方異俗、壅隔之害、遠國益甚。至于荆揚二州、戸各數十萬。今揚州無郎、而荆州江南、乃無一人爲京城職者、誠非聖朝待四方之本心。至於才望資品、循可尚書郎、訥可太子洗馬、舍人。此乃衆望所積、非但企及清塗、苟充方選也。謹條資品、乞蒙簡察。

伏して見るに武康の令賀循は、德量 遠茂にして、才鑒 清遠、道素を服膺して、風操凝峻たり。二城に歴試せられて、刑政は肅穆たり。前の蒸陽の令郭訥は、風度 簡曠にして、器識 朗拔、通濟 敏悟にして、才は事を幹するに足る。循は下縣を守り、名を凡悴に編めり。訥は家巷に歸りて、棲遲して年有り。皆な新邦自り出づれば、朝に知己無く、居りて遐外に在りて、志は自ら營まず。年時 倏忽として、而も遂にして階緒無く、實に州黨愚智の爲に恨恨たる所なり。臣等 伏して思ふに、臺郎 州をして、州に人有らしめんとする所以は、徒に均く顯路を分かち、惠みの外州に及ぶを以てするのみに非ざるなり。誠に庶士 風を殊にし、四方 俗を異にするを以て、壅隔の害は、遠國益々甚だし。荆・揚二州に至つては、戸各々數十萬あり。今、揚州に郎無く、而して荆州江南、乃ち一人として京城の職爲る者無きは、誠に聖朝 四方に待つの本心に非ず。才望 資品に至つては、循は尚書郎たる可く、訥は太子洗馬・舍人たる可し。此れ乃ち衆望の積む所にして、但に清塗に企及し、苟も方選に充たるのみに非ざるなり。謹んで資品を條し、簡察を蒙らんことを乞ふ。

「德行器量が深く豊かで、清く廣い才能見識を備え、道德の基本を身につけ風儀節操も高いものがある」と賀循の人徳を稱揚し、このように優れた人物であるのに、「新しく歸屬した呉國の出身であるために、朝廷に知己も無く、遙かな地方にいるままになっている」賀循を尚書郎として取り立てて欲しいと言うのである。

程なくして、賀循は太子舍人に補せられた。その後、琅邪王司馬睿（後の東晉の元帝）が永嘉元年（三〇七）七月に、安東將軍となった時に、循を呉國內史としたが、先に擧げた賀循の父邵のことを元帝に問われたという話は、『晉書』に據れば、此の時のことである。顧榮とともに東晉創業の基礎を固め、東晉になってからも、政治の中樞に關與し、元帝の太興二年（三一九）に六十歳で卒している。

④ 薛 兼（令長）

『晉書』卷六八は、顧榮・紀瞻・賀循（楊方傳を附す）・薛兼の南人の傳が立てられて

いる。薛兼（字は令長）の傳は次のように書き出される。

薛兼、字令長、丹楊人也。祖綜、仕吳爲尚書僕射。父瑩、有名吳朝。吳平、爲散騎常侍。兼清素有器宇、少與同郡紀瞻、廣陵閔鴻、吳郡顧榮、會稽賀循齊名、號爲五儁。初入洛、司空張華見而奇之曰、皆南金也。察河南孝廉、辟公府、除比陽相。莅任有能名。歷太子洗馬、散騎常侍、懷令。

薛兼、字は令長は、丹楊の人なり。祖は綜、吳に仕へて尚書僕射と爲る。父は瑩、吳朝に名有り。吳平ぎて、散騎常侍と爲る。兼は清素にして器宇有り、少くして同郡の紀瞻・廣陵の閔鴻・吳郡の顧榮・會稽の賀循と名を齊しくし、號して「五儁」と爲す。初め洛に入るや、司空張華は見て之を奇として曰く、「皆な南金なり」と。河南の孝廉に察せられ、公府に辟され、比陽の相に除せらる。任に莅みて能名有り。太子洗馬・散騎常侍・懷の令を歴たり。

張華が薛兼らの南人を「南金」と稱賛していることから、張華が彼らの後押しをしていたであろうことが分かるが、恐らく入洛した南人は、先ず張華の許を訪れていたであろう。その後、東晉の元帝の永昌の初め（三三二）に、王敦が上表して兼を太常としている。同じ年に明帝（司馬昭）が即位して、太寧と改元され、散騎常侍を加えられているが、此の年に亡くなっている。

⑤ 張 翰（季鷹）

張翰（字は季鷹）は吳の人で、『晉書』卷九二・文苑傳に本傳が立てられている。『世說新語』には、その放達ぶりや、賀循・顧榮との交遊を示す逸話が四條あり、『文選』卷二九には、「雜詩」一首が収められている。

『晉書』張翰傳の書き出しは、次のようである。

張翰、字季鷹、吳郡吳人也。父儼、吳大鴻臚。翰有清才、善屬文。而縱任不拘。時人號爲江東步兵。

張翰、字は季鷹、吳郡・吳の人なり。父は儼、吳の大鴻臚たり。翰は清才有りて、善く文を屬る。縱任にして拘らず。時人は號して「江東の歩兵」と爲す。

父の「張儼」については、『吳志』卷三・孫皓傳に、

寶鼎元年正月、遣大鴻臚張儼、五官中郎將丁忠、弔祭晉文帝。及還、儼道病死。

寶鼎元年正月、大鴻臚張儼・五官中郎將丁忠を遣して、晉の文帝を弔祭せしむ。還るに

及び、儼は道に病みて死す。

とあることによつて、寶鼎元年（二六六）に亡くなったことが分かる。さらに裴注に引く『吳録』には、次のように記されている。

儼字子節、吳人也。弱冠知名、歴顯位、以博聞多識、拜大鴻臚。使於晉、皓謂儼曰、今南北通好、以君爲有出境之才、故相屈行。對曰、皇皇者華、蒙其榮耀、無古人延譽之美、磨厲鋒鏑、思不辱命。既至、車騎將軍買充、尚書令裴秀、侍中荀勳等、欲傲以所不知、而不能屈。尚書僕射羊祜、尚書何植、並結綺帶之好。

儼、字は子節、吳の人なり。弱冠にして名を知られ、顯位を歴、博聞多識なるを以て、大鴻臚に拜せらる。晉に使ひするに、皓 儼に謂ひて曰く、「今、南北 通好するに、君を以て出境の才有りと爲せば、故に相ひ屈行せしむ」と。對へて曰く、「皇皇たるは華、其の榮耀を蒙むりたれば、古人が延譽の美無くとも、鋒鏑を磨厲して命を辱めざらんことを思ふ」と。既に至るや、車騎將軍買充・尚書令裴秀・侍中荀勳等、傲るに知らざる所を以てせんと欲するも、屈すること能はず。尚書僕射羊祜・尚書何植、並びに綺帶の好みを結ぶ。

張儼については、その有能ぶりを示す、次のような話もある。すなわち、『吳志』卷十一・朱桓傳に引く『文士傳』に、

張惇子純與張儼及異俱童少、往見驃騎將軍朱據。據聞三人才名、欲試之、告曰、老鄙相聞、飢渴甚矣。夫驃騎以迅驟為功、鷹隼以輕疾為妙。其爲吾各賦一物、然後乃坐。儼乃賦犬曰、守則有威、出則有獲。韓盧宋鶻、書名竹帛。純賦席曰、席以冬設、簟爲夏施。損讓而坐、君子攸宜。異賦弩曰、南嶽之幹、鍾山之銅。應機命中、獲隼高墉。三人各隨其目所見而賦之、皆成而後坐。據大歡悅。

張惇の子の純は、張儼及び異と俱に童少なるとき、往て驃騎將軍朱據に見ふ。據は三人の才名を聞き、之を試みんと欲し、告げて曰く、「老鄙相ひ聞き、飢渴すること甚だし。夫の驃騎は迅驟なるを以て功と爲し、鷹隼は輕疾なるを以て妙と爲す。其れ吾が爲に各々一物を賦し、然る後に乃ち坐せよ」と。儼は乃ち犬を賦して曰く、「守れば則ち威有り、出づれば則ち獲る有り。韓盧・宋鶻は、名を竹帛に書せらる」と。純は席を賦して曰く、「席は冬を以て設け、簟は夏の爲に施す。損讓して坐し、宜なる攸」と。異は弩を賦して曰く、「南嶽の幹、鍾山の銅。機に應じて命中し、隼を高墉に獲たり」と。三人各々其の目に見る所に随ひて之を賦し、皆な成りて後に坐す。據は大いに歡悅す。

このような張儼の文才は、その子の翰に受け継がれていった。張翰は清才があり、文を作るのがうまかったということは、『世説新語』識鑒篇注に引く『文士傳』にも、

翰有清才美望。博學善屬文、造次立成、辭義清新。

翰は清才美望有り。博學にして善く文を屬り、造次にして立ちどころに成り、辭義は清新なり。

と、翰にはすぐれた才能とよき評判があり、博學にして文を作るのが上手で、あつという間に書き上げたものは、言葉も内容も清新なるものであつた、という。『文選』卷一九李善注に引く『今書七志』にも、「文藻新麗なり」とある。

また翰は、氣ままで何物にもとらわれることがなかつたので、當時の人々は彼のことを「江東の歩兵」と呼んだという。「歩兵」とは魏の阮籍のことであり、その文才と放達なるさまを、阮籍になぞらえたのであつた。『世説新語』任誕篇にも此の話を載せて、さらにその放曠ぶりについて、「死後の名聲を氣にしないのか」という或る人の問いかけに對して、「死後の名聲よりも一盃の酒の方がいい」と答えたという逸話が収められている。すなわち、

張季鷹縱任不拘。時人號爲江東歩兵。或謂之曰、卿乃可縱適一時、不爲身後名邪。答曰、使我有身後名、不如即時一盃酒。

張季鷹は縱任にして拘らず。時人、號して「江東の歩兵」と爲す。或ひと之に謂ひて曰く、「卿は乃ち一時に縱適す可きも、身後の名を爲さざる邪」と。答へて曰く、「我をして身後の名有らしめんよりは、即時一盃の酒に如かず」と。

とあり、注に引く『文士傳』では、

翰任性自適、無求當世。時人貴其曠達。

翰は性に任せて自適にして、當世に求むる無し。時人は其の曠達を貴べり。

と記されている。

張翰は、呉が平定されてのち入洛したのであるが、その経緯は實に興味深い。

賀司空入洛赴命、爲太孫舍人。經吳昌門、在船中彈琴。張季鷹本不相識、先在金昌亭。

聞弦甚清、下船就賀、因共話、便大相知說。問賀、卿欲何之。賀曰、入洛赴命、正爾

進路。張曰、吾亦有事北京。因路寄載、便與賀同發。初不告家、家追問迺知。

賀司空 洛に入り命に赴き、太孫舍人と爲らんとす。呉の昌門を經、船中に在りて琴を

弾く。張季鷹 本と相ひ識らず。先に金昌亭に在り。弦の甚だ清きを聞き、船に下りて賀に就き、因りて共に話し、便ち大いに相ひ知説す。賀に問ふ、「卿は何くに之かんと欲」と。賀曰く、「洛に入り命に赴き、正爾に路に進む」と。張曰く、「吾も亦た北京に事有り」と。因りて路に寄載し、便ち賀と共に發す。初めより家に告げず。家は追問して迺ち知れり。

(『世説新語』任誕篇)

すなわち、賀循(彦先)が太孫舍人として洛陽に赴任する途中、呉の昌門で、船の中で琴をひいていたが、たまたま昌門内にあった金昌亭にいた張翰が、その琴の音に感激して、賀循と談笑し、それまで全く面識のなかった二人は、すっかり意氣投合してしまい、張翰は賀循について洛陽へ行き、家には知らせしていなかったため、家人は後になってはじめて知ったというのである。『晉書』賀循傳には、循が太孫舍人となった記述はなく、太子舍人となったことが記されている。循が太子舍人となったのは、著作郎であった陸機が彼を推薦する文を上疏して、しばらくしてからのことであるから、それは陸機が著作郎であった元康三年(二九三)の頃であろうか。ただ、陸機は元康八年(二九八)にも著作郎に補せられており(陸機「弔魏武帝文」序に「元康八年、機始以臺郎出補著作」とあるのに拠る)、そうであれば、その頃ということになる。

入洛した張翰は、齊王冏に召されて大司馬の東曹の掾となった。『晉書』張翰傳には、「冏時執權」とあるが、齊王冏が河間王顥・成都王穎とともに、惠帝を金墉城に幽閉し、みずから帝を僭稱していた趙王倫を討ったのが、永寧元年(三〇一)であり、その後、政治の實権が倫から冏に移り、冏が餘りに驕慢なる態度をとったために長沙王又によって討たれたのが、太安元年(三〇二)であるから、張翰が冏に召されたのは、三〇一―三〇二年の頃のことであると思われる。

同じ頃のことであろう、翰は同郡の顧榮(彦先)に言った、「今や天下は大いに亂れている。四海に名のある人は、退きたいと思ってもなかなか難しい。しかし私は、もともと山林の閑人であり、久しく今の世に望みをかけてもいない。どうかあなたはその明察によつて前を防ぎ、智謀によつて後を考慮して下さい」と。榮はその手をとり、愴然として言った、「私もまたあなたとともに南山で蕨を採り、三江(松江・婁江・東江)の水を飲みたいものだ」と。以上の話は『世説新語』識鑒篇注に引く『文士傳』に見える。すなわち、

大司馬齊王冏、辟爲東曹掾。翰謂同郡顧榮曰、天下紛紛未已。夫有四海之名者、求退良難。吾本山林閑人、無望於時久矣。子善以明防前、以智慮後。榮捉其手、愴然曰、吾亦與子採南山蕨、飲三江水爾。

大司馬齊王罔は、辟して東曹の掾と爲す。翰は同郡の顧榮に謂ひて曰く、「天下は紛紛として、未だ已まず。夫の四海の名有る者は、退くを求むること良に難し。吾は本と山林の閑人にして、時に望む無くして久し。子は善く明を以て前を防ぎ、智を以て後を慮れ」と。榮は其の手を捉り、愴然として曰く、「吾も亦た子と與に南山に蕨を採り、三江の水を飲まん爾」と。

張翰と顧榮とは、相當に親しく交わっていたようで、後述する顧榮の葬儀の時の逸話のほか、『晉書』顧榮傳には、いつも酒びたりであった榮が友人の張翰に心を打ち明けたというところが、次のように記されている。

（榮）恒縦酒酣暢、謂友人張翰曰、惟酒可以忘憂、但無如作病何耳。

恒に酒を縦にして酣暢し、友人の張翰に謂ひて曰く、「惟だ酒のみ以て憂ひを忘る可きも、但だ病を作すを如何ともする無き耳」と。

いったんは入洛したものの、張翰は望郷の思いが強かったようで、『世説新語』識鑒篇には、次のようにある。

張季鷹辟齊王東曹掾、在洛。見秋風起、因思吳中菘菜羹鱸魚膾曰、人生貴得適意爾。何能羈宦數千里以要名爵。

張季鷹は齊王の東曹の掾に辟されて、洛に在り。秋風の起るを見て、因りて吳中の菘菜の羹・鱸魚の膾を思ひて曰く、「人生まれては意に適ふを得るを貴ぶ爾。何ぞ能く數千里に羈宦して以て名爵を要めんや」と。

かかる望郷の思いは、南方出身の人士達の誰もが抱く思いであって、たとえば陸機は「懷土賦」の序で、

余去家漸久、懷土彌篤。方思之殷、何物不感。曲街委巷、罔不興詠。水泉草木、咸足悲焉。

余は家を去りてより漸く久しく、土を懐しむこと彌々篤し。之を思ふこと殷きときに方りては、何物にか感じざらん。曲街 委巷、詠を興さざるは罔し。水泉 草木、咸な悲しむに足れり。

（『陸士衡文集』卷二）

と述べている。ただ、陸機の方はそのまま洛陽に留まったけれども、張翰は病氣を理由にすぐに洛陽を離れて郷里に還ってしまった。

翰が洛陽を離れてから間もなく、齊王罔は敗れてしまった。『世説新語』識鑒篇には、

先の望郷の思いを述べた後につづけて、次のように言う。

遂命駕便歸。俄而齊王敗。時人皆謂爲見機。

遂に駕を命じて便ち歸る。俄にして齊王敗る。時人皆な謂ひて機を見ると爲せり。

多くの人士が混亂の中で、その命を断つていったなかにあつて、張翰は、まさに機を見るに敏であつたといえよう。

郷里に歸つた翰は、孝を盡くし、母が亡くなるや、その嘆き悲しむことは、禮法を越えるものがあつた。以後は老齡を理由に世間の繁事を避け、病で家に卒した。五十七歳であつた。

ところで、先にも張翰と顧榮との深い交際については觸れたが、『世説新語』傷逝篇には、顧榮が亡くなつた時のこととして、次の如き逸話を記している。

顧彦先平生好琴。及喪、家人常以琴置靈牀上。張季鷹往哭之、不勝其慟。遂徑上牀鼓琴、作數曲竟、撫琴曰、顧彦先頗復賞此不。因又大慟、遂不執孝子手而出。

顧彦先、平生 琴を好む。喪に及び、家人は常に琴を以て靈牀の上に置く。張季鷹 往きて之を哭し、其の慟みに勝へず。遂に徑に牀に上り、琴を鼓し、數曲を作し竟るや、琴を撫して曰く、「顧彦先は頗か復た此を賞すや不や」と。因りて又大いに慟し、遂に孝子の手を執らずして出づ。

顧榮は平素から琴が好きだったので、その葬儀のとき、家の者はいつも琴を靈座に置いていた。張翰は出かけてゆき哭禮をしたが、悲しみをこらえることができず、そのまま靈座に上り、琴をひき、數曲をひきおわると、琴を撫でながら言った、「顧彦先は少しは琴を賞してくれたであろうか」と。それからまた大いに慟哭し、とうとう孝子の手もとらずに歸ってしまった。——『晉書』顧榮傳によれば、榮が亡くなつたのは永嘉六年（三二二）であるから、張翰の死は、それよりも後のことになる。

このように、以上の、①顧榮、②紀瞻、③賀循、④薛兼、⑤張翰、の五人は、二陸と略ぼ同じ時期、すなわち太康の末年頃に入洛したものと思われる。

(3) 陸機入洛以後

次に擧げる、⑥戴若思、⑦戴逵、⑧張悛、⑨伍朝、⑩夏靖、⑪孫惠、の六人は、二陸の入洛よりも後れて洛陽入りした人達である。

⑥ 戴若思

戴若思の傳は、『晉書』卷六九にあり、その書き出しは、次のようである。

戴若思、廣陵人也。名犯高祖廟諱。祖烈、吳左將軍。父昌、會稽太守。若思有風儀、性閑爽。少好遊俠、不拘操行。

戴若思は、廣陵の人なり。名は高祖の廟諱を犯す。祖は烈、吳の左將軍たり。父は昌、會稽太守たり。若思は風儀有り、性は閑爽なり。少くして遊俠を好み、操行に拘らず。

『晉書』には、その名が記されていないが、『世說新語』賞譽篇注に引く虞預『晉書』では、

戴儼、字若思、廣陵人。才義辯濟、有風標鋒穎。

戴儼、字は若思は、廣陵の人なり。才義 辯濟にして、風標 鋒穎有り。

と、「若思」はその字で、名は「儼」であるという。ただ次に擧げるように、同じく『世說新語』自新篇では、名を「淵」に作っている。すなわち、この戴若思と陸機との興味深い出会いが、次のように傳えられている。

戴淵少時、遊俠不治行檢。嘗在江淮間、攻掠商旅。陸機赴假還洛、輜重甚盛。淵使少年掠劫。淵在岸上、據胡牀、指麾左右、皆得其宜。淵既神姿峯穎、雖處鄙事、神氣猶異。機於船屋上遙謂之曰、卿才如此、亦復作劫邪。淵便泣涕、投劍歸機。辭屬非常。機彌重之、定交、作筆薦焉。

戴淵 少き時、遊俠にして行檢を治めず。嘗に江・淮の間に在りて、商旅を攻掠す。陸機 假に赴きて洛に還るに、輜重 甚だ盛んなり。淵は少年をして掠劫せしむ。淵は岸上に在り、胡牀に據りて左右を指麾し、皆な其の宜しきを得たり。淵 既に神姿峯穎にして、鄙事に處ると雖も、神氣は猶ほ異なり。機は船屋の上より遙かに之に謂ひて曰く、「卿が才 此の如くにして、亦復た劫を作すか」と。淵は便ち泣涕し、劍を投じて機に歸す。辭の屬しきこと常には非ず。機は彌々之を重んじ、交はりを定め、筆を作りて焉を薦む。

戴淵は若い頃、遊俠にふけり行ないが治まらなかった。いつも江・淮の間にあって、旅商人を襲っては掠奪を働いていた。(ある時)陸機は休暇を終えて洛陽への歸途にあったが、

その荷物は甚だ盛んなものであった。戴淵は、若者をつかつてこれを掠奪させた。淵は風采がとび抜けており、このような鄙しい事をしていても、人並みならぬ趣きがあった。機は船の屋上から、遥かに聲をかけた、「きみの才は、こんなにも勝れているのに、またどうして強盗などするのか」と。すると淵は涙を流し、劍を投げ捨てて機に帰順した。その言葉には非常に激しいものがあつた。陸機はいよいよ彼を重んじて、交わりを結び、文章を書いて推薦した。——これが陸機と戴若思との交際の始まりであつた。その後、孝廉に挙げられて入洛した戴若思を、陸機は趙王倫に推薦したが、その時の箋は劉孝標注に引く虞預『晉書』に載せられている。

蓋聞繁弱登御、然後高壙之功顯。孤竹在肆、然後降神之曲成。伏見處士戴淵、砥節立行、有井渫之潔。安窮樂志、無風塵之慕。誠東南之遺寶、朝廷之貴璞也。若得寄跡康衢、必能結軌驥驂、耀質廊廟、必能垂光瑜璠。夫枯岸之民、果於輸珠、潤山之客、列於貢玉。蓋明暗呈形、則庸識所甄也。

蓋し聞く、繁弱の登御して、然る後に高壙の功顯はれ、孤竹 肆に在りて、然る後に降神の曲成なと。伏して見るに處士の戴淵は、節を砥きめ行ひを立て、井渫の潔有り。窮に安んじ志を樂しみ、風塵の慕ふ無し。誠に東南の遺寶、朝廷の貴璞なり。若し跡を康衢に寄するを得ば、必ず能く軌を驥驂ウツリヤに結び、質を廊廟かみやうに耀かせば、必ず能く光を瑜璠ユハンに垂れん。夫れ枯岸の民、珠を輸いたすを果たし、潤山の客、玉を貢ぐに列せん。蓋し明暗形を呈せば、則ち庸識も甄する所ならん。

これに因つて、趙王倫はすぐに戴若思を召し出し、若思は沁水縣（司州河内郡）の令に除せられたけれども、就かず、武陵の父のもとを訪れた。

その後、東晉朝にあつて、周顛とともに高名を得たが、元帝の永昌元年（三三二）、王敦の反亂の時に殺されてしまふ。

⑦ 戴 遜（望之）

戴若思の弟の遜（字は望之）の傳は、『晉書』戴若思傳の次に立てられている。

遜、字望之。少好學、尤精史漢。才不逮若思、儒博過之。弱冠舉秀才、尋遷太子洗馬、出補西陽内史。

遜、字は望之は、少くして學を好み、尤も『史』『漢』に精なり。才は若思に逮たばざるも、儒博は之に過ぐ。弱冠にして秀才に擧げられ、尋いで太子洗馬に遷り、出でて西陽の内史に補せらる。

此の戴逵については、陸機との関係は詳しくは分からないけれども、陸雲がやはり南人集團の一人である楊彦明に宛てた書翰のなかで、次のように言っている。

若思、望之、清才俊類。一時之彦、善竝得接。

若思・望之は、清才ありて俊類なり。一時の彦、善く竝びに接せらるるを得たり。

(「與楊彦明書」其六)

すなわち、戴若思・望之兄弟は、清き才があり立派な人物で、どちらも(上の者から)よく目をかけてもらっている、ということを楊彦明に傳えているのであるが、このことから考えると、戴逵も入洛後は、兄の若思とともに、南人集團に加わって活動していたものと思われる。

⑧ 張 俊(士然)

『文選』卷三八・表下に「爲吳令謝詢求爲諸孫置守家人表」(吳令の謝詢の爲に、諸孫の爲に冢を守る人を置かんことを求むるの表)が収められている。この表は、李善注に引く孫盛『晉陽秋』に、

元康中、吳令謝詢表爲孫氏置守家人。俊爲文。詔從之。

元康中、吳の令謝詢、表して孫氏の爲に冢を守る人を置かんとす。俊 文を爲る。詔して之に従ふ。

とあり、吳の令の謝詢が、「諸孫」すなわち吳の孫堅一族のために墓守りを置くことを求め、そのための文章を張俊が作った、というものである。謝詢については、同じく『晉陽秋』に、

謝詢、河東人。終於吳令。

謝詢は、河東の人なり。吳の令に終はる。

とある。

此の表の作者の張俊なる人物については、やはり『晉陽秋』に、

張俊、字士然。吳國人也。

張俊、字は士然。吳國の人なり。

とあり、また『晉百官名』には、

俊爲太子庶子。

俊は太子庶子と爲る。

という。そうして、この張俊は二陸とも関わりが深かったらしく、俊から贈られた詩に對して、陸機は次の如き詩で答えている。

答張士然（張士然に答ふ）

繫身躋祕閣 身を繫つくして祕閣ひかくに躋ある

祕閣峻且玄 祕閣は峻として且つ玄なり

終朝理文案 終朝 文案を理とめ

薄暮不違暝 薄暮 暝あるに違いあらず

駕言巡明祀 駕がして言いひに明祀めいを巡めぐり

致敬在祈年 敬を致すこと祈年に在り

逍遙春王圃 春王の圃に逍遙し

躑躅千畝田 千畝の田に躑躅ていす

回渠繞曲陌 回渠くわいは曲陌めいを繞めぐり

通波扶直阡 通波は直阡ちきを扶たすく

嘉穀垂重穎 嘉穀は重穎じゆうを垂たれ

芳樹發華顛 芳樹は華顛かぢうを發かく

余固水鄉士 余は固もとより水郷の士

愬鬱臨清淵 鬱ふさを愬せりて清淵せいに臨まむ

戚戚多遠念 戚戚せきせきとして遠念えんねん多く

行行遂成篇 行き行きて遂つひに篇を成す

（わたしは）身を清めて祕書省の高殿に上る、その祕書省の高殿は高くて奥深い。朝早くから文書を整理し、夜になっても眠るいとまもない。此の度は（天子に従い）車でて神明の祭りを巡り視て、（天子は）敬しみを盡くして豊年を祈られる。春王園をめぐり歩き、千畝もある籍田をゆるやかに進む。回る渠は曲がったあぜみちについてめぐり、流れる水はまっすぐな道に沿っている。よく實った穀物は重い穂を垂れ、芳しい木々は花さくこずえを廣げている。わたしはもともと水郷なる呉の人、手綱をとって清らかな淵に臨んだ。憂えては故郷を慕う思いにかられ、行く行くついにこの一篇を成したまで。

「祕閣に躋る」とあることからみて、此の詩は陸機の著作郎時代に作られたものようである。此の詩は『文選』卷二四に収められているが、張士然について李善は孫盛の『晉陽

秋』を引いて、

張俊、字士然。少以文章與士衡友善。

張俊、字は士然。少くして文章を以て士衡と友として善し。

といい、陸機と張俊とは文章を通じて交友があったことを指摘している。贈答の詩である以上、劉良（五臣注）も「士然、詩を贈る、故に此の答へ有り」と言うように、張俊から陸機への詩があったはずであるが、残念ながら、今はそれを見ることはできない。

さらに『文選』卷二五には、陸雲の張俊への詩も収められている。次に挙げる「答張士然」がそれである。

答張士然（張士然に答ふ）

行邁越長川

行き邁やきて長川を越え

飄颻冒風塵

飄へう颻ようとして風塵を冒す

通波激枉渚

通波 枉渚かうしよに激しく

悲風薄丘榛

悲風 丘榛きうしんに薄る

脩路無窮迹

脩路 窮迹しゅうろ無く

井邑自相循

井邑 自ら相あひ循しんふ

百城各異俗

百城は各々俗を異ことにし

千室非良鄰

千室は良鄰に非ず

歡舊難假合

舊を歡べば假かりにも合あひ難く

風土豈虛親

風土に豈あらに虚むかしく親ひかしまんや

感念桑梓城

桑梓の城に感念し

髣髴眼中人

眼中の人を髣髴ほうふつす

靡靡日夜遠

靡靡ひひとして日夜に遠く

眷眷懷苦辛

眷眷けんけんとして苦辛を懷く

「行き行きて長い川を渡り、風にひるがえる塵をかぶりながら進みゆく。打ち寄せる波は曲がれる渚にうちつけ、悲しげな風は丘の木々に吹きつける。長く続く道はどこまでも盡きることなく、村々は長々と連なっている。多くの村々はそれぞれに風俗を異にし、どこかの家とて親しみあえる良い隣ではない。舊友に親しんでいるので（初めての人と）仲よくできないし、（故郷と）異なる風土には、なかなかなじめない。ふるさとの地をただただなつかしみ、舊友の姿をぼんやりと思いうかべる。長く行き続け、日に夜に遠ざかり、思

い慕っては苦しみがつのるばかり」。此の詩が何時作られたものなのか、劉良（五臣注）は「張士然、平吳の後、洛に入る。雲に贈る有り。雲 故に之に答ふ」と言うが、それが果たして何時のことなのか、断定できない。ただ劉良の言うように、當然、張俊から陸雲に贈られた詩があったはずで、そうしてみると張俊は陸機だけでなく、陸雲とも親しく交わっていたということになる。この張俊なる人物も、吳國出身で二陸と深く関わった、南人集團の一員である。

◎ 伍朝（令明）

陸雲の「與戴季甫書」其四に、次のようにある。

武陵於荊州、云多人士。聞周孟子、伍令明、潘世長諸人、竝爲美德。

武陵は荊州に於て、人士多しと云ふ。周孟子・伍令明・潘世長の諸人、並びに美德を爲すと聞く。

此の書翰を含めて、陸雲が戴季甫に宛てた書翰は、合わせて七條ある。それらの内容から見て、戴季甫なる人物は、張華と同じように中央政府の要職にあつて、陸機・陸雲ら南方出身者に目をかけていた人のようである。此の書翰も「武陵は荊州のなかでも、人士が多」と聞いていることと、周孟子・伍令明・潘世長の諸人は、いずれも美德を成していることと聞いております」と、雲が伍令明らを戴季甫に推薦しているのであろう。

さて、この伍令明なる人は、『晉書』卷九四・隱逸傳のなかに傳のある伍朝（『晉書』は字を「世明」とする）のことであろうと思われる。

伍朝、字世明、武陵漢壽人也。少有雅操。閑居樂道、不修世事。性好學、以博士徵、不就。刺史劉弘薦朝爲零陵太守、主者以非選例、不聽。尚書郎胡濟奏曰、臣以爲當今資喪亂之餘運、承百王之遺弊。進趨者乘國故以僥倖、守道者懷蘊匱以終身。故令敦喪之化虧、退讓之風薄。案朝游心物外、不屑時務。守靜衡門、志道日新。年過耳順而所尚無虧。誠江南之奇才、丘園之逸老也。不加飾進、何以勸善。且白衣爲郡、前漢有舊。宜聽光顯、以獎風尚。奏可、而朝不就、終於家。

伍朝、字は世明は、武陵・漢壽の人なり。少くして雅操有り。閑居して道を樂しみ、世事を修めず。性 學を好み、博士を以て徵さるるも、就かず。刺史の劉弘は、朝を薦めて零陵の太守と爲すも、主者は、選例に非ざるを以て聽さず。尚書郎胡濟 奏して曰く、「臣 以爲へらく、當今 喪亂の餘運を資け、百王之遺弊を承く。進趨する者は國故に乗じて以て僥倖し、道を守る者は蘊匱に懷きて以て身を終ふ。故に敦喪の化を虧かしめ、

退讓の風を薄くせしむ。案ずるに朝は心を物外に遊ばせ、時務を厝しとせず。靜を衡門に守り、道に志して日に新たなり。年は耳順を過ぎて尚ぶ所は虧くる無し。誠に江南の奇才、丘園の逸老なり。飾進を加へざれば、何を以てか善を勧めん。且つ白衣の郡を爲むるは、前漢に舊有り。宜しく光顯して風尚を奨むるを聽すべし」。奏は可さるるも、朝は就かず、家に終はる。

以上が、伍朝傳の全文である。ここに刺史の劉弘が伍朝を零陵の太守に推薦したとあるけれども、此の時の劉弘の上表文が『晉書』卷六六・劉弘傳のなかに収められている。その中で次のように述べられている。

頃者多難、淳朴彌凋。臣輒以徵士伍朝補零陵太守、庶以懲波蕩之弊、養退讓之操。頃者 難多く、淳朴 彌凋る。臣 輒ち徵士伍朝を以て零陵の太守に補し、庶はくは以て波蕩の弊を懲らし、退讓の操を養はんことを。

此の上表文は、張昌が反亂を起した後のもので、太安二年（三〇三）のものと思われる。太安二年といえ、二陸が成都王穎に殺された年である。さきに挙げた陸雲の「與戴季甫書」其四が、いつ書かれたものなのか、恐らく死の数年前であろうが、はっきり分からぬが、その内容と『晉書』の記載とを考え合わせると、伍朝なる人物は相當に徳望のあつた人らしく思われる。

ところで、伍朝（世明）の名は「與戴季甫書」其四のほかに、「與楊彦明書」其五のなかにも見えている。

行言竟行、令人恨之。已嘗至未耶。能少留不。世明篤行至性。如前後所論、語其偶爾。旋已能悟耳。而聞其遠遯、眞使愕然。寧以所不可、虧一國之清格乎。輒便絶意。彦先所一一。

行言は竟に行き、人をして之を恨ま令む。已に嘗た至りたるや未だし耶。能く少しく留まるや不や。世明は篤行 至性なり。前後して論ずる所の如きは、語は其れ偶爾なり。旋つて已に能く悟らん耳。而るに其の遂に遠く遯ると聞けば、眞に愕然たら使む。寧ぞ不可とする所を以て、一國の清格を虧かん乎。輒便ち意を絶つ。彦先の一一する所ならん。

以上がその全文であるが、「世明は、行ないは篤く真心がありません。前後して論じた所などは、その言葉はたまたま口から出たものです。かえってよく反省していることと思いません。それなのに結局、遠く（江を）遯るということなので、本當に驚きました。氣に食わ

ぬことを言ったからといって、どうして一國の才士を欠くのでしょうか。もう、がっかりです」というように、此の時、伍朝が何を議論していたのか、また江を遡ってどこへ行ったのかなど、詳しいことは分からないけれども、此の書翰を見るかぎり、陸雲と伍朝はかなりの親交があったように思われる。

⑩ 夏 靖（少明）

陸雲が楊彦明に宛てた書翰「與楊彦明書」其三の内容は、次の如くである。

彦先來、相欣喜、便復分別。恨恨不可言。階塗尚否、通路今塞、令人惘然。名論允進、遠而有光者。度此顯期、不淹民望耳。廟堂之士、比迹山棲者、悲歎豈惟一人。少明湘公、亦不成遷。名公之舉、且可以爲資。然今恨恨、嘗行行復有宜耳。

彦先 來たりて、相ひ欣喜するも、便ち復た分別す。恨恨として言ふ可からず。階塗は尚ほ否にして、通路は今や塞がれ、人をして惘然たら令む。名論は允に進むも、遠くして光有る者なり。此の顯期を度るに、民望を淹はざる耳。廟堂の士にして、迹を山棲に比する者、悲歎 豈に一人のみならんや。少明・湘公も、亦た遷るを成さず。名公の舉、且つ以て資と爲す可し。然れども今は恨恨たり、嘗に行行復た宜しきこと有るべき耳。

「彦先」は、顧榮の字。その顧榮がやってきて、互いに楽しい一時を過ごしたが、すぐにまた別れてしまい、残念だといひ、或いは其の顧榮からの情報であろうか、あなた（楊彦明）の官吏への道が閉ざされてしまって、落胆しているというのである。しかし、此のよき時代に、民の望みをかなえることができずに山野に隠れている者は、悲しいことに、あなた一人ではなく、あの「少明」も湘公も、うまくいかなかった。しかし名公の推挙によって、そのうちに道も開けるであろう、と言う。名公とは、恐らく張華を指すのであろう。さて、ここでその就職がままならない少明とは、いったい如何なる人物なのであろうか。いま『晉書』には、その名を見ることはできないが、少明なる人物を知る手掛かりとしては、次に挙げる『裴子語林』（『古小説鉤沈』所収）がある。

夏少明在東國不知名。聞裴逸民知人、乃裹糧寄載、入洛從之。未至家少許、見一人著黃皮袴褶、乘馬將獵。少明問曰、逸民家若遠。答曰、君何以問。少明曰、聞其名知人、從會稽來投。裴曰、身是逸民。君明可更來。明往、逸民果知之、又嘉其志局、用爲西門侯。於此遂知名。

夏少明は東國に在りて名を知られず。裴逸民の知人なるを聞き、乃ち裹糧 寄載し、洛

に入りて之に従はんとす。未だ家に至らざること少許にして、一人の黄皮袴褶こしよを着て、馬に乗りて將まさに獵せんとするを見る。少明 問たねて曰く、「逸民の家は若くか遠き」と。答へて曰く、「君、何を以て問ふか」と。少明曰く、「其の知人と名づけらるるを聞き、會稽より来たり投ぜんとす」と。裴曰く、「身は是れ逸民なり。君、明 更めて来たるべし」と。明くるひに往ゆくに、逸民 果たして之を知し、又た其の志局を嘉として、用て西門侯と爲す。此に於いて名なを知らる。

これに據れば、夏少明は東國（會稽）の人で、入洛して裴頠（字は逸民）に従った人である。裴頠は、政治的には張華とともに、賈后一派と對立しており、張華同様に、或いは南人には比較的に好意を持って接していたのかも知れない。張華の推輓を得て北方社會に登場した陸機との関わりも、このあたりにあるのではなからうか。

さて、此の夏少明に陸機が贈った詩が『文館詞林』卷一六五に収められている。更に此の陸機の詩に答えた夏少明の詩が卷一五七にあり、ここでは「西晉夏靖答陸士衡一首」となっているので、夏少明の名が「靖」であることが知られる。それでは、先ず陸機の詩を見てみよう。

贈武昌太守夏少明（武昌の太守夏少明に贈る）

穆穆君子

穆穆たる君子

明德允迪

明德 允に迪む

拊翼負海

翼を負海に拊ち

翻飛上國

上國より翻飛す

天子命之

天子 之に命じ

曾是在服

曾ち是れ服に在り

西踰嶠岡

西のかた嶠岡を踰え

北臨河曲

北のかた河曲に臨む

第一章では、天子の命を受けて武昌に赴くことを歌っている。第三・四句に「拊翼負海、翻飛上國」と言うのは、「負海」即ち遠國の武昌へ赴くために、「上國」即ち洛陽から飛びたつたことをいう。續く第二章では、これまでの少明の治政の功績を稱えて、次のように述べている。

爾政既均

爾の政は既に均にして

爾化既淳

爾の化は既に淳なり

| | |
|------|----------|
| 舊汗孔修 | 舊汗は孔だ修まり |
| 德以振人 | 德は以て人を振ふ |
| 雍雍鳴鶴 | 雍雍たる鳴鶴 |
| 亦聞於天 | 亦た天に聞こゆ |
| 釋厥緇衣 | 厥の緇衣を釋きて |
| 爰集崇賢 | 爰に崇賢に集へり |

結びの句に「崇賢」とあるのは、太子の宮殿の門である崇賢門のことをいい、地方で評判を挙げた少明が愍懐太子の府に召されたことを言っている。第三章では、太子府での誉れが高く、太子によく仕えたと、次のように詠う。

| | |
|------|------------|
| 羽儀既奮 | 羽儀 既に奮ひ |
| 令問不已 | 令問 已まず |
| 慶雲烟燭 | 慶雲 烟燭として |
| 鴻漸載起 | 鴻 漸みて 載に起つ |
| 峨峨紫闥 | 峨峨たる紫闥 |
| 侯戾侯止 | 侯れ戾り 侯れ止る |
| 彤管有輝 | 彤管 輝たる有り |
| 納言崇祉 | 言を納れて祉を崇くす |

太子府でも評判の高い少明は、天子の命によって、東のかた武昌を守ることになった。そのことを第四章で、次のように言う。

| | |
|------|-----------|
| 既考爾工 | 既に爾の工を考し |
| 將胙爾庸 | 將て爾の庸を胙る |
| 大君有命 | 大君 命有りて |
| 俾守于東 | 東を守ら俾む |
| 允文允武 | 允に文 允に武 |
| 威靈以隆 | 威靈 以て隆し |
| 之子于邁 | 之子 子に邁き |
| 介夫在戎 | 介夫として戎に在り |

もともと武昌の地は、呉國にあつては、呉を守るための中央に近い重要な地であつた。その地を呉人である夏少明が治めることになり、民もあなたを望み慕うであらうし、再びお

おいに功績を擧げることになるであらうと、第五章では次のように言ふ。

悠悠武昌 悠悠たる武昌

在江之隈 江の隈に在り

吳未喪師 吳の未だ師を喪はざるとき

爲蕃爲畿 蕃爲り 畿爲り

惟此惠君 惟れ此の惠君

人胥攸希 人 胥な希ふ攸なり

亦弁重光 亦弁たる重光

照爾繡衣 爾が繡衣を照らす

別れてしまえば次にあなたと會えるのも、何時になるか分からない。あなたのことを思い慕って、遙か長江のあたりを望み見て、此の詩を作ったのであると、全六章から成る詩を次のように結んでいる。

人道靡常 人道 常靡く

高會難期 高會 期し難し

之子于遠 之の子 于に遠ざかる

曷云歸哉 曷んぞ云に歸らん哉

心乎愛矣 心に愛す

永言懷之 永く言に之を懷ふ

瞻彼江介 彼の江介を瞻て

惟用作詩 惟に用て詩を作る

此の詩に據れば、夏少明は入朝して、愍懷太子府に仕えており、或いは此の時に、陸機・陸雲とともに太子府に勤務していたのかも知れない。

次に、此の詩に對して夏少明が陸機に答えた詩を見てみよう。此の夏少明の「答陸士衡詩」（陸士衡に答ふる詩）は、『文館詞林』卷一五七に収められている。詩は全て六十四句から成る四言詩で、先ず陸機の人柄を稱揚して、一篇を歌い起す。

大哉乾元 大なる哉 乾元

萬品資生 萬品 資りて生ず

陶育五常 五常を陶育し

惟濁惟清 惟れ濁り 惟れ清し

猗歎君子 猗歎 君子
 誕稟純精 誕いに純精を稟く
 行歸于周 行ひは周に歸し
 忠篤允誠 忠篤 允誠なり
 允誠伊何 允誠とは伊れ何ぞ
 拔羣出俗 羣を抜きて俗を出づ
 華文不修 華文 修めずして
 抱此素樸 此の素樸を抱く
 履謙居沖 謙を履みて沖に居り
 恒若不足 恒に足らざるが若し
 上交不諂 上に交はりて諂はず
 下交不瀆 下に交はりて瀆れず

これに續く四句は、惠帝の即位したことを言う。

俶彼雲漢 俶たる彼の雲漢
 於章于天 章を天に於いてす
 九五翻飛 九五 翻飛し
 利見大人 大人を見るに利し

惠帝が即位すると、陸機は愍懷太子の洗馬となったが、その頃のことを次のように述べている。

大人有命 大人 命有り
 是牧是招 是に牧として是れ招かる
 時行則行 時に行ひて則ち行き
 遂升東朝 遂に東朝に升りぬ
 東朝光光 東朝は光光として
 天同其曜 天は其の曜きを同じくす
 匪徒一臺 徒に一臺のみに匪ず
 天同其照 天は其の照きを同じくせり
 其照爾德 其れ照けり 爾の徳
 又簡爾才 又た簡たり 爾が才
 將登三事 將に三事に登り

百揆是釐 百揆 是に釐（三）まらんとす

尋いで陸機は著作郎となっているが、次の六句は、その時のことを言ったものであろう。

據仁爲本 仁に據るを本と爲し
仗義爲興 義に仗るを興と爲す
經緯三墳 三墳を經緯し
錯綜衆書 衆書を錯綜す
斟酌聖奧 聖奧を斟酌し
與道卷舒 道と卷舒す

そうして陸機に、次第に人望が集まってきたことを、次のように述べている。

靡靡陸生 靡靡（四）たる陸生
帝度其心 帝は其の心を度る
靜恭夙夜 夙夜に靜恭として
莫其德音 莫（五）たる其の德音あり
德音既莫 德音 既に莫として
其美彌深 其の美は彌（六）深し
爲物之主 物の主と爲り
爲人之林 人の林と爲る

やがて陸機は呉王晏の郎中令として洛陽を出たが、郎中令としての陸機の功績を、次のように言う。

天作高山 天 高山を作し
大王荒之 大王 之を荒いにす
蕩蕩荆土 蕩蕩たる荆土
子其康之 子は其れ之を康んず
風俗未敦 風俗 未だ敦からざるを
子其臧之 子は其れ之を臧くす
羣彦未敘 羣彦 未だ敘せられざるを
子其綱之 子は其れ之を綱べり

最後は、陸機の恩情に對する禮を述べて、一篇を結んでいる。

| | |
|------|---|
| 忝榮剖符 | 榮を剖符 <small>ぼうふ</small> に忝 <small>かたじけなく</small> くし |
| 悠悠在茲 | 悠悠 <small>いゆういゆう</small> として茲 <small>こゝ</small> に在り |
| 羔裘豹舄 | 羔裘 <small>かうきう</small> 豹舄 <small>ほうちやく</small> |
| 有愧不能 | 能 <small>あた</small> はざるを愧 <small>は</small> づる有り |
| 乃眷我顧 | 乃ち眷 <small>けん</small> として我 <small>わが</small> を顧 <small>かん</small> み |
| 爰貽休詩 | 爰 <small>こゝ</small> に休 <small>やす</small> き詩 <small>うた</small> を貽 <small>たく</small> らる |
| 嘉觀嘉藻 | 嘉觀 <small>かかん</small> 嘉藻 <small>かそう</small> |
| 以爲清規 | 以て清規と爲す |
| 敢銘妙言 | 敢 <small>あへ</small> て妙言 <small>めうげん</small> を銘 <small>な</small> じ |
| 終始永思 | 終始 永く思はん |

以上が、夏少明が陸機に答えた詩の内容である。ところで、陸雲の兄機への書翰「與平原書」其四のなかに、次のような記述がある。

答少明詩、亦未爲妙。省之如不悲苦、無惻然傷心言。今重複精之。
「少明に答ふる詩」も、亦た未だ妙た爲らず。之を省みるに悲苦せざるが如く、惻然傷心の言無し。今、重ねて復た之を精にせよ。

すなわち、陸機の「答少明詩」は、あまり良い出来ではなく、此の詩を見ても悲苦していないようで、惻々として心を傷めるような言葉が無いので、もう一度よく考えてみてはどうか、というのである。詩の内容からみて、此の「答少明詩」は、先に挙げた「贈武昌太守夏少明詩」を指すとは思われないので、詩は残っていないけれども、それ以外にも、詩のやり取りがあったのであろう。

また、次のような兄宛ての書翰もある。

雲再拜。祠堂贊、甚已盡美、不與昔同。既此不容多説、又皆一事。非兄、亦不可得。見弔少明、殊復勝前。弔蔡君、清妙不可言。漢功臣頌甚美、恐弔蔡君、故當爲最。雲 再拜。「祠堂の贊」は、甚だ已に美を盡つくし、昔と同じからず。既に此れ多説たす容べからず、又た皆な一事なり。兄に非ざれば、亦た得可からず。「弔少明」を見るに、殊に復た前に勝る。「弔蔡君」は、清妙言ふ可からず。「漢功臣頌」は甚だ美なるも、恐らくは「弔蔡君」は、故より當に最爲たるべし。 (「與平原書」其八)

陸機の作品である「祠堂贊」「弔少明」「弔蔡君」「漢功臣頌」を取り上げて、陸雲がその批評をしているのであるが、此のなかにある「弔少明」が、夏少明のことであるとすれ

ば、陸機がその弔文を書いていたことになり、二陸が世を去った太安二年（三〇三）以前に、夏少明は亡くなっていることになる。

⑪ 孫 惠（德施）

孫惠（字は德施）は、『晉書』には、永寧の初め（三〇一）に齊王冏が趙王倫を討った際に、冏のもとに赴いたが、それまでは、蕭・沛の間に寓居していたということだけが記してあり、その間の詳しい状況を知ることにはできない。すなわち、『晉書』卷七一・孫惠傳には、次のようにある。

孫惠、字德施、吳國富陽人。吳豫章太守賁曾孫也。父祖竝仕吳。惠口訥、好學有才識。州辟不就、寓居蕭沛之間。永寧初、赴齊王冏義討趙王倫、以功封晉興侯、辟大司馬戶曹掾、轉東曹屬。冏驕矜僭侈、天下失望。惠獻言於冏、諷以五難四不可、勸令歸藩。辭甚切至。冏不納。惠懼罪、辭疾去。頃之、冏果敗。

孫惠、字は德施、吳國・富陽の人なり。吳の豫章太守賁の曾孫なり。父祖は竝びに呉に仕ふ。惠は口訥にして、學を好んで才識有り。州、辟くも就かず、蕭・沛の間に寓居す。永寧の初め、齊王冏の、義として趙王倫を討つに赴き、功を以て晉興侯に封ぜられ、大司馬の戸曹の掾に辟かれ、東屬の属に轉ず。冏は驕矜僭侈なれば、天下 望みを失ふ。惠は言を冏に獻じ、諷するに五難・四不可を以てし、勸めて藩に歸ら令む。辭は甚だ切至なり。冏は納れず。惠は罪せられんことを懼れ、疾と辭して去る。之を頃くして、冏は果たして敗る。

趙王倫を倒して、その功績を自慢し、爵を受けても譲ることのない冏に對して、孫惠は、「五難」「四不可」をもって諷刺したとあるが、此の時、陸機も「豪士の賦」を書いて、冏を諷刺している。その序文のなかで、機は次のように言っている。

夫惡欲之大端、賢愚所共有。而遊子殉高位於生前、志士思垂名於身後。受生之分、惟此而已。夫蓋世之業、名莫盛焉。率意無違、欲莫順焉。借使伊人頗覽天道、知盡不可益、盈難久持、超然自引、高揖而退、則巍巍之盛、仰遂前賢、洋洋之風、俯觀來籍。而大欲不止於身、至樂無愆於舊、節彌効而德彌廣、身逾逸而名逾劬。此之不爲、而彼之必味。

夫れ惡欲の大端は、賢愚の共に有する所なり。而して遊子は位の生前に高からんことを殉め、志士は名の身後に垂れんことを思ふ。受生の分、惟だ此れ而已。夫れ蓋世の業、

名として焉なほより盛さかんなるは莫なし。意に率ひいて違ちがふ無し、欲として焉なほより順したがなるは莫なし。借かし伊いの人をして、頗さか天道てんたうを覽みて、盡つくせば益えきす可かからず、盈みちては久ひさしく持もつし難がたく、超こ然ぜんとして自ら引ひき、高たか擯へんして退ひくを知ら使しむれば、則すなはち魏ゑい魏ゑいたる盛さかは、前まへ賢けんを仰あやぎし、洋やう洋やうたる風かぜは、來き籍せきを俯ふ觀かんせん。而しかして大だい欲よくは身みに止とまらず、至いた樂らくは舊ふるに愆たがふ無なく、節せつは彌ひ効こうにして德とくは彌ひ廣ひろく、身みは逾ひ逸いつにして名なは逾ひ劭たかからん。此これを之これれ爲なさざれば、彼かは之これれ必かならず味あじからん。

齊王罔のあまりの驕慢さに對して、なんとかそれを諫めようとする陸機の意図が、ありありと窺われる。

その後、孫惠は成都王穎に薦められて大將軍の參軍・領奮威將軍・白沙の督となった。時に、穎は長沙王又を討たんとして、陸機をその前鋒都督とした。このとき孫惠は陸機に、都督を王粹に譲るべきであると勧めている。しかし機は、その忠告に従うことなく、ついに敗戦の責任を取らされて戮せられてしまった。すなわち、『晉書』孫惠傳には次ようにある。

成都王穎薦惠爲大將軍參軍、領奮威將軍、白沙督。是時、穎將征長沙王又、以陸機爲前鋒都督。惠與機同鄉里、憂其致禍、勸機讓都督於王粹。及機兄弟被戮、惠甚傷恨之。成都王穎は惠を薦めて大將軍の參軍・領奮威將軍・白沙の督と爲す。是の時、穎は將に長沙王又を征せんとし、陸機を以て前鋒都督と爲す。惠は機と郷里を同じくし、其の禍ひを致さんことを憂へて、機に都督を王粹に譲らんことを勸む。機の兄弟の戮せらるるに及び、惠は甚だ之を傷恨す。

孫惠の入洛の時期や状況は、はっきりしないけれども、陸機とその行動を共にしており、彼も南人集團の一員と考えられる。

(3) 南人集團形成の據點—愍懷太子府—

以上、陸機を中心とした南人集團の構成員について見てきたが、上記の十一人の關係を見てくると、あることに氣付かされる。それはすなわち洛陽に入った南人の多くが愍懷太子の府に仕えているということである。例えば、顧榮は「太子中舍人」に、賀循は「太子舍人」に、薛兼は「太子洗馬」に、戴逵は「太子洗馬」に、張俊は「太子庶子」に、といったように、入洛後の南人の多くが太子府に仕えているのである。

そもそも愍懷太子（司馬遜）は、祖父武帝（司馬炎）にその將來を囑望され、やがては晉朝を隆盛に導く天子となるべき人物として、厚く期待されていた。しかし武帝が亡くなった後、元康元年（二九一）、政治の實権を握っていた太傅の楊駿は賈后に殺され、賈后がそのまま政権を掌握した。そうして賈后の從舅にあたる郭彰と賈后の妹の子である賈謐とが、楊駿に代わって外戚勢力を形成したのであった。かかる賈氏一族の專横を憂慮していたのが張華であった。『文選』卷五六には張華の「女史箴」が収められているが、その李善注に引く曹嘉之の『晉紀』には、

張華懼后族之盛、作女史箴。

張華は后族の盛んなるを懼れ、「女史の箴」を作る。

と言うように、張華は何とかして、賈氏一族の專横を食い止めようとしていたのである。その手段の一つとして、張華は廣く人材を集めることに力を入れた。張華を中心に形成された文學集團も、このような政策のうちに生まれたと言ってもよい。そうして張華は、混亂した世の中を正すことを、聰明な愍懷太子に期待していたのではなからうか。ために太子府には、多くの優秀な人材が集められたものと思われる。そうして張華のそのようなやり方に乗じて、言葉を変えれば、それを利用して、陸機・陸雲は南人を次々と太子府に集めることができたのではなからうか。

ただ、陸機に限って言えば、その「答賈長淵詩」（『文選』卷二四）の序に、

余昔爲太子洗馬、賈長淵以散騎馬常侍、東宮積年。

余、昔 太子の洗馬爲りしとき、賈長淵は散騎常侍を以て、東宮に年を積めり。

と言うように、陸機が太子の洗馬となるのに賈謐が深く関わっていたこと、そうして賈謐は東宮を管轄していたことが分かる。そうしてみると、陸機が賈謐の「二十四友」に加わり、謐の推挙を得ていたということは、却って張華にとっては都合がよかつたのかも知れない。寧ろ張華の方が、陸機・陸雲を利用して、賈后の息のかかつていない人士を太子府に集めることをしていたということができるのではなからうか。ともあれ、こうした状況のもと、多くの南人が太子府に集められ、そこを據點として南人の集團が形成されていたということが、十分に考えられる。

四 集團における活動

(1) 政治活動

北方社會における南人の會合の中では、就職をはじめとする様々な情報が交わされていたようである。陸雲が陸機に宛てた「與平原書」三十數首は、その殆どが文章制作について論じられている内容のものであるなかに、二首だけその内容を異にする書翰が含まれている。

近得洛消息。滕永適去二十日書。彦先訪爲驃騎司馬。又云、似未成。已訪難解耳。敬屬司馬參軍。此間復失之。恨不得與周旋。戴允治見訪大司馬。謹啓。

近ごろ洛の消息を得たり。滕永 適^{たまたま}二十日の書を去る。彦先は訪ねられて驃騎司馬と爲ると。又た云ふ、未だ成らざるが似しと。已に訪ねられたれば解くこと難からん耳。敬は司馬參軍に屬せらると。此の間、復た之を失す。恨むらくは與に周旋するを得ざりしを。戴允治は訪ね見れて大司馬たりと。謹啓。

(「與平原書」其二八)

洛陽からの情報を得た陸雲が、それを兄に報告しているのであるが、ここに名の見える人のうち、「彦先」は顧榮の字、「敬」については、雲との詳しい関係は不明、「戴允治」は、或いは戴若思の族人かとも思われるが、いずれも吳國出身者であろう。陸機が南人の動向に心を配っていた様子が想像できる。

雲再拜。嵇紹周弼、竝處事不值免。詔甚切。甚念之悚息。胡光祿亡。宿士可痛。含邠還云、滔中書散騎、竝缺。是其才、不知何以乃古之。謹啓。

雲 再拜。嵇紹・周弼は、竝びに事に處して免るるに値はず。詔は甚だ切なり。之を甚念しては悚息たり。胡光祿 亡す。宿士 痛む可し。含邠 還りて云ふ、滔中書・散騎は、竝びに缺けらると。是れ其の才なるも、何を以て乃ち之を古とするかを知らず。謹啓。

(「與平原書」其三三)

嵇紹と周弼は、どちらも事件に關與し、免れることができませんでした、というが、嵇紹(字は延祖)は嵇康の子であり、『晉書』卷八九に傳がある。周弼に關しては『晉書』卷六〇・張方傳に、

(張)方奉帝至弘農。(河間王)顓遣司馬周弼報方、欲廢太弟、方以爲不可。

方は帝を奉じて弘農に至る。顓は司馬周弼を遣はして方に報じて、太弟を廢せんと欲するも、方は以て不可と爲す。

同じく『晉書』卷三五・裴頠傳に、

御史中丞周弼、見(頠)而嘆曰、頠若武庫、五兵縱橫、一時之傑也。
御史中丞周弼、見て嘆じて曰く、「頠は武庫の若く、五兵 縱橫として、一時の傑なり」と。

とその名が見えるだけで、詳しいことは分からない。ただ、秘紹傳では、紹が長沙王又の使持節・平西將軍となつて、河間王顥・成都王穎の軍と戦つて敗れた時、又は捕えられ、紹も廢黜されて庶人におとされているが、或いは陸雲の手紙の事が、此の時のことを言うのであれば、それは、『晉書』卷四・惠帝紀に、

(太安二年)八月、河間王顥、成都王穎、舉兵討長沙王又。
八月、河間王顥・成都王穎は、兵を擧げて長沙王又を討つ。

とあるように、太安二年(三〇三)のことである。このとき陸機の方は、成都王穎の將として又討伐に加わっていたわけで、周弼らの動向は、最も關心のあることであつたに違いない。

このように、これらのことは書翰の例であるけれども、南人集團における話題は、やはり専らこのような南人の動向に關係のある、政治に關わるものが中心であつたと思われる。

(2) 文學活動

しかし、そのような集會ではまた、文學に關する議論も展開されていたように想像される。そのことを暗示するのが、次に擧げる書翰である。

雲再拜。巨卿在臺、高譽洋溢。洛邑之内、無不欽敬。東南之貴寶、眞不但會稽之篠簜也。每會常共歌詠、信無一面不歎吟也。想方周旋攜手、散今日之思耳。雲再拜。

雲 再拜。巨卿は臺に在り、高譽 洋溢たり。洛邑の内、欽敬せざる無し。東南の貴寶は、眞に但に會稽の篠簜のみならざるなり。會する毎に常に共に歌詠し、信に一面として歎吟せざるは無きなり。方に周旋して手を攜へ、今日の思ひを散ぜんことを想ふ耳。

雲 再拜。

(「與陸典書」其八)

書中に、

每會常共歌詠、信無一面不歎吟也。

會する毎に常に共に歌詠し、信に一面として歎吟せざるは無きなり。

というところから見て、南人が集まつては詩を作り、その詩を批評し合うといったような

ことがあったのであろう。

さらに、次のような詩も、南人集團における文學活動の一端を暗示するものである。すなわち陸機が、吳國出身の顧令文が宜春縣の令として赴任するのに贈った全五章の詩「贈顧令文爲宜春令詩」（『文館詞林』卷一五六）の第五章に、次のように言う。

吉甫之役 吉甫 役に之き

清風既沈 清風 既に沈めり

非子之艶 子の艶なるに非ざれば

詩誰云尋 詩は誰か云に尋がん

我來自東 我の來たるや 東自りし

貽其好音 其の好音を貽らる

豈有桃李 豈に桃李有らんや

忽子瓊琛 子が瓊琛に忽づ

將子無矧 將ふ 子 矧かること無かれ

屬之翰林 之を翰林に屬せしめん

變彼靜女 變たる彼の靜女

此惟我心 此れ惟だ我が心なるのみ

第一聯「吉甫之役、清風既沈」（吉甫が行役したために、清風のごとき詩はまったく作られなくなった）とは、『毛詩』大雅・烝民に、

吉甫作誦 吉甫 誦を作る

穆如清風 穆として清風の如し

とあるのを踏まえている。即ち、仲山甫が天子の命を受けて齊に赴いた時に、吉甫は詩を作って贈ったのであるが、その吉甫が役に赴いてしまつては、清風のごとき詩を作れる者は誰もいなくなつてしまふ、つまり令文を吉甫に喩えて、あなたが宜春に赴任してしまふと、もはや都にはよい詩を作れる人はいなくなるではないか、というのである。そうして陸機は、令文の詩を「艶」なるものと認めているのである。更に第五聯で「將子無矧、屬之翰林」（どうか外地での勤務が長くならないように。またともに詩文を作り合ひましよう）と言ひ、洛陽にあつて、陸機と令文が共に詩を作り合つていたことを窺わせるが、おそらくこれは、南人の集會でのことをいうのであろう。

此の陸機の詩とは別に、陸雲にも顧令文に與えた詩が残されている。即ち陸雲の「答大將軍祭酒顧令文詩」（『陸士龍文集』卷三）がそれで、此の詩も全五章から成る四言詩であつて、その第五章に次のようにある。

企子朔都

子を朔都に企せしむるは

非子孰念 子に非ずんば 孰か念はん

豈無弱翰 豈に弱翰無からんや

才不克贍 才の克く贍かならず

惠音聿來 惠音 聿に來り

瓊華玉艷 瓊華 玉艷なり

無德不報 德無くして 報いられず

念辭惟忝 辭を念ひて 惟に忝づるのみ

第三聯に「惠音聿來、瓊華玉艷」(あなたからの詩をいただきましたが、それは美玉のように華やかで艶なるものです)というように、やはり陸雲も、令文の詩を「艶」と評價しており、このような令文の詩に對する陸機・陸雲の共通の評價も、或いは南人の集會において、詩を作り合い、あとでそれを評價する、といったようなことが行なわれていたために生まれたのではなからうか。

そうして、このような文學に關する議論の場には、南人だけではなく、時には北方文人も加わることもあったようである。例えば、南人のよき理解者であった潘尼(字は正叔)は、陸機の作った詩を陸雲から與えられ、いたく感心したということをし、次のように陸雲が陸機に告げている。

一日見正叔、與兄讀古五言詩。此生歎息、欲得之。

一日、正叔に見ひ、兄の讀古五言詩を與ふ。此の生 歎息し、之を得んと欲す。

(「與平原書」其四)

同じく陸雲の兄宛ての書翰に、次のように言う。

間在洛、有所視。已當赦、而比更隆。以今意觀文、見此真更以爲不盡善。文羆云、故日向人歎兄文、人終來同。殆以此爲病。

間ろ洛に在りて、視る所有り。已に當に赦すべきに、比る更に隆んなり。今の意を以て文を觀るに、此れを見れば、眞に更に以て善を盡くさずと爲す。文羆云ふ、「故日、人に向ひて兄の文を歎するに、人 終に來同す」と。殆ど此を以て病と爲す。

(「與平原書」其二)

すなわち、やはり南人に好意的であった馮熊(字は文羆)が、「以前、人々に陸機の文章を稱嘆したところ、皆も賛同してくれた」と言った、というのである。

また次の書翰は、湯仲なる人物が『楚辭』の「九歌」を稱嘆するのを聞いたことを思い出し、以前は『楚辭』を読んでも、あまり好きではなかったが、近頃はすばらしいものと思われるということを、陸雲が兄の機に言ったものである。

雲再拜。嘗聞湯仲歎九歌。昔讀楚辭、意不大愛之。頃日視之、實自清絕滔滔。故自是識者。

雲 再拜。嘗て湯仲の「九歌」を歎ずるを聞けり。昔は『楚辭』を讀むも、意 大いには之を愛まず。頃日 之を視るに、實自に清絶 滔滔たり。故自り是れ識者ならん。

(「與平原書」其十三)

「湯仲」については、『魏志』衛覬傳注に引く『潘岳別傳』に、「尼從子滔、字湯仲」とあり、潘尼の從子の潘滔であることが分かる。

彼らの會合における議論のひとつとして「押韻」に關することもあつたようである。すなわち、北方と南方との音の違ひについては、例えば、顔之推の『顏氏家訓』音辭篇のなかで、具體的な例を示しながら次のように語られている。

南方水土和柔、其音清舉而切詣。失在浮淺、其辭多鄙俗。北方山川深厚、其音沈濁而鈍。得其質直、其辭多古語。然冠冕君子、南方爲優、閭里小人、北方爲愈。易服而與談、南方士庶、數言可辯。隔垣而聽其語、北方朝野、終日難分。而南染吳越、北雜夷虜。皆有深弊、不可具論。其謬失輕微者、則南人以錢爲涎、以石爲射、以賤爲羨、以是爲姦。北人以庶爲成、以如爲儒、以紫爲姦、以洽爲狎。如此之例、兩失甚多。

南方は水土 和柔にして、其の音は清舉にして切詣なり。失は浮淺に在りて、其の辭に鄙俗多し。北方は山川 深厚にして、其の音は沈濁にして鈍なり。得は其の質直にして、其の辭に古語多し。然れども冠冕の君子は、南方 優ると爲し、閭里の小人は、北方 愈ると爲す。服を易へて與に談ずれば、南方の士庶は、數言にして辯ず可し。垣を隔てて其の語を聽けば、北方の朝野は、終日 分ち難し。而も南は吳越に染まり、北は夷虜を雜ふ。皆な深弊有るも、具さに論ずる可からず。其の謬失の輕微なる者は、則ち南人は「錢」を以て「涎」と爲し、「石」を以て「射」と爲し、「賤」を以て「羨」と爲し、「是」を以て「姦」と爲す。北人は「庶」を以て「成」と爲し、「如」を以て「儒」と爲し、「紫」を以て「姦」と爲し、「洽」を以て「狎」と爲す。此の如きの例は、兩失 甚だ多し。

すなわち、「南方は風土がおだやかであるから、その發音は清んでいて輕快で適確なものとなつている。缺點は輕薄な感じがあつて鄙俗な點が多いということである。いっぽう北方は山川の起伏もきびしいので、その發音はさえがなく重たい感じで、齒切れが悪く不明瞭である。よい點としては、素直な氣持ちが現れて古語を多く傳へることである」と述べ、實際の語の例を示している。

かかる北方と南方との音の相違は、南人にとって、詩文を制作する上での大きな障害にな

ったかと思われる。事實、陸雲は兄機への書翰のなかで、たびたび押韻に關することを述べている。

徹與察、皆不與日韻。思惟不能得。願賜此一字。

「徹」と「察」とは、皆な「日」と韻せず。思惟するも得る能はず。願はくは此の一字を賜はらんことを。

(「與平原書」其十七)

これは、陸雲が自分の作品「九愍」のなかで、押韻の箇所に「徹」「察」「日」を用いたが、恐らく、北人に指摘されたのであろう、押韻していないと言われて、それを改めようと、兄に教えを乞うているのである。

九悲多好語、可耽詠、但小不韻耳。

「九悲」は好語多く、耽詠す可きも、但だ小しく韻せざる耳。(「與平原書」其十八)

これは、兄の「九悲」という作品が、少し押韻が亂れているようだ、と雲が言っているのであるが、或いはそのようなことを、北人に指摘されたのであろうか。

李氏云、雪與列韻、曹便復不用。人亦復云、曹不可用者、音自難得正。

李氏云ふ、「雪」と「列」とは韻するも、曹は便ち復た用ひずと。人も亦復た云ふ、曹も用ふ可からざれば、音は自ら正を得難しと。

(「與平原書」其一九)

李氏とは、或いは『聲類』を著した李登(『顔氏家訓』書證篇に見える)のことであろうか。『隋書』經籍志には「魏左校令李登」とある。その李氏が、「雪」と「列」は押韻するにはするが、曹(植)もそれを用いていない、ということをおっしゃっており、またある人も曹(植)も使っていないのなら、正しい音とは言えないであろう、と言うのを、雲が陸機に報告しているのである。たぶん陸機が陸雲の作品で此のふたつの字を押韻の箇所に用いていたのであろう。

さらに、次のような書翰もある。

張公語雲云、兄文故自楚、須作文、爲思昔所識文。乃視兄作誄、又令結使說音耳。兄所撰、願且付之。此有書者、更校善書。送信還。望之。

張公 雲に語りて云ふ、「兄の文は故自り楚なれば、須らく文を作るには、爲に昔に識す所の文を思ふべし」と。乃ち兄の作りし誄を視て、又た結を令て音を説か使むる耳。兄の撰する所、願はくは且く之を付す可し。此に書せし者有るも、更め校せし善書なり。信を送りて還さんことを。之を望む。

(「與平原書」其十五)

陸機に比べて押韻がうまく行かない陸雲は、張華から「陸機の文章は、もとは楚なるものであったから、以前の機の作品を参考にせよ」との指摘を受け、そこで雲は、手許にあつ

た機が昔に作った誄を取り出して見て、さらに結なる人に實際に發音させたりしているのである。陸機の方は、押韻に關しても、すぐに北方の音に慣れていたのであろうか。陸雲の所にある機の作品は、すでに押韻について手の入れているものばかりであるから、添削前のものがあれば送って欲しいというのである。

入洛後の南人たちは、北人と席を共にする機會も多くあったであろうし、かかる席では詩文を作り合うといったこともあったと思われる。その場合、やはり南人にとって、押韻のことは大きな問題のひとつであった。いま、陸雲の書翰で問題にされたような押韻に關する議論は、南人の集會のなかでも、議論されたに違いない。

このような、南方文學と北方文學との接觸は、相互の文學に少なからぬ影響を與えたと思われる。ことに、陸機の文章は當時すでに高い評價を得ていた。すなわち『太平御覽』卷五九九に引く『抱朴子』に、

歐陽生曰、張茂先、潘正叔、潘安仁、文遠過二陸。或曰、張潘與二陸爲比、不徒步驟之間也。歐陽曰、二陸文詞源流、不出俗檢。

歐陽生曰く、「張茂先・潘正叔・潘安仁は、文は遠かに二陸に過る」と。或ひと曰く、「張・潘は二陸と比を爲すに、徒に步驟の間のみにあらざるなり」と。歐陽曰く、「二陸の文詞の源流は、俗檢を出でず」と。

とあり、また、『世說新語』文學篇には、次のようにある。

孫興公云、潘文爛若披錦、無處不善。陸文若排沙簡金、往往見寶。

孫興公云ふ、「潘の文は爛なること錦を披るが若く、處として善からざるは無し。陸の文は沙を排して金を簡ぶが若く、往往にして寶を見る」と。

當時、陸機の文章は、北方文人の代表とされる潘岳の文章と比較されるほどに注目されていたわけで、その陸機が中心となって活動を續けている南人集團は、北方文人にとっては氣になる存在であり、その文學活動に大きな刺激を與えたに違いない。

第二章 陸機の文學（南方文學）と北方文學

一 陸機の文學（南方文學）に對する從來の評價

鍾嶸の『詩品』では、陸機を上品に位置付け、その詩について次のように述べている。

其源出於陳思。才高辭贍、舉體華美。氣少於公幹、文劣於仲宣。尚規矩、不貴綺錯、有傷直致之奇。然其咀嚼英華、厭飫膏澤、文章之淵泉也。張公歎其大才、信矣。

其の源は陳思に出づ。才は高く辭は贍かに、舉體華美なり。氣は公幹より少なく、文は仲宣より劣る。規矩を尚びて、綺錯を貴はず、直致の奇を傷ふ有り。然れども其の英華を咀嚼し、膏澤を厭飫するは、文章の淵泉なり。張公 其の大才を歎ずるは、信なり。鍾嶸は、陸機の詩は陳思王曹植に源流を發すると言う。曹植については、やはり『詩品』では上品に置かれ、

其源出於國風。骨氣奇高、詞彩華茂。

其の源は國風に出づ。骨氣は奇高にして、詞彩は華茂なり。

と、その詩が國風、すなわち『詩經』を源流とするものであると言う。また鍾嶸は、陸機の詩について、「規矩を尚びて、綺錯を貴はず」という評を下しているが、これは過去の規範を繼承し、艶やかなる美しさを好まなかったということを意味する。つまり陸機は、『詩經』の詩風・表現を規範として尊重する、古風を繼承したのであり、それはまた、當時の南方文學の特徴でもあった。

また、劉勰は『文心雕龍』體性篇の中で、

士衡矜重、故情繁而辭隱。

士衡は矜重なれば、故に情は繁にして辭は隱る。

と、陸機は慎重であるから、情緒は複雑なのであるが言葉には華美なところが無い、と言うが、これは『詩經』の風韻を貴ぶ陸機の文學の特徴を捉えたものと思われる。

それでは鍾嶸が、陸機の詩は『詩經』を規範としているということが、實際の作品の中にどのように現れているのか、陸機の作品を、(1) 入洛以前の詩、(2) 入洛に際しての詩、とに分けて、見てみることにしよう。

(1) 入洛以前の詩

陸機が洛陽入りする以前の文學作品としては、吳國滅亡の後、舊里の華亭に退居していた時に作られたと思われる「辨亡論」二篇、また身内の者の誄文として「吳貞獻處士陸君誄」「吳大司馬陸公誄」などがある他には、それと確定できる作品は多くない。殊に詩について言えば、陸機入洛の際に作られたと思われる「赴洛」詩、「赴洛道中作」詩がある以外には、弟の陸雲に與えた「贈弟士龍」詩が、吳國滅亡後間もない頃に作られたと推定できる作品である。

作品の検討に入る前に、陸機の入洛の年について整理しておく必要があると思われる。陸機の入洛の年については、『晉書』陸機傳に、

至太康末、與弟雲俱入洛。

太康の末に至り、弟の雲と俱に洛に入る。

とあることから、太康の末年、即ち太康十年（二八九）頃に洛陽に入ったものと考えられる。ところが、これよりも前に洛陽入りしたという説もある。その據り所は、『南史』卷十三・宋彭城王傳に見える、以下の記述である。

義康素無術學、待文義者甚薄。袁淑嘗詣義康。義康問其年。答曰、鄧仲華^拜衰之歲。義康曰、身不識也。淑又曰、陸機入洛之年。義康曰、身不讀書、君無爲作才語見向。其淺陋若此。

義康は素より術學無く、文義の者に待すること甚だ薄し。袁淑 嘗て義康に詣る。義康は其の年を問ふ。答へて曰く、「鄧仲華が拜衰の歳なり」と。義康曰く、「身 識らざるなり」と。淑又た曰く、「陸機 入洛の年」と。義康曰く、「身は書を読まず、君、才語を爲作して向はるること無かれ」と。其の浅陋なること此の若し。

すなわち彭城王劉義康が、訪ねてきた文人袁淑（四〇八〜四五三）に對して其の年齢を問ねたところ、袁淑は、「鄧仲華が拜衰の歳」「陸機 入洛の年」と答えたという話に據る。後漢の鄧禹（字は仲華）は、光武帝が即位した年に、その大司徒となっており、『後漢書』卷十六・鄧禹傳には、

光武帝即位於鄗、使使者持節拜禹爲大司徒。……禹時年二十四。

光武帝 位に鄗に即くや、使者をして節を持し拜して禹を大司徒と爲らしむ。……禹は時に年二十四。

とあって、禹が二十四歳の時のことであつたことが分かる。これによつて、陸機の入洛を機が二十四歳の時、すなわち太康五年（二八四）とするものである。（注一）

次に、「三都の賦」を著した左思（字は太沖）が、呉の事について陸機に問ねたという記事があつて、これによつて陸機の入洛を太康年間（二八〇～二八九）の初期とするものである。（注二） すなわち、『文選集注』巻第八に収める「三都賦序」の「左太沖」下の鈔に引く王隱『晉書』に、次のようにある。

左思少好經術。嘗習鍾胡書不成、學琴又不成。貌眈口訥、甚有大才。博覽諸經、遍通子史。于時天下三分、各相誇競。當思之時、吳國爲晉所平。思乃賦此三都、以極眩曜。其蜀事訪於張載、吳事訪於陸機、後乃成之。

左思は少くして經術を好む。嘗て鍾胡の書を習ふも成らず、琴を學ぶも又た成らず。貌は眈にして口は訥なるも、甚だ大才有り。博く諸經を覽、遍く子史に通ず。時に于いて天下は三分し、各々相ひ誇競す。之を思ふ時に當たり、吳國は晉の平ぐ所と爲る。思は乃ち此の三都を賦し、以て眩曜を極めんとす。其の蜀の事は張載に訪ね、吳の事は陸機に訪ね、後に乃ち之を成す。

この記事に據れば、左思は「吳都賦」を書くために、陸機を訪問しており、さらに「三都賦」の序文を書いたとされる皇甫謐（字は士安）は、『晉書』巻五一にある本傳によれば太康三年（二八二）に六十八歳で亡くなつており、従つて左思の「三都賦」の成立はそれよりも前ということになる。そうなると、左思の陸機訪問もそれ以前ということになり、陸機は太康の初年には、すでに入洛していたとするのである。

しかるに、『世說新語』文學篇注に引く『左思別傳』には、

思造張載、問蜀事、交接亦疎。皇甫謐西州高士、摯仲治宿儒知名、非思倫疋。劉淵林、衛伯輿並蚤終、皆不爲思賦序注也。凡諸注解、皆思自爲。欲重其名、故假時人名姓也。

思は張載に造り、蜀の事を問ふも、交接は亦た疎なり。皇甫謐は西州の高士、摯中治は宿儒にして名を知られ、思の倫疋に非ず。劉淵林・衛伯輿は並びに蚤に終ふ。皆な思の賦の爲に序注せざるなり。凡そ諸々の注解は、皆な思自ら爲る。其の名を重んぜしめんと欲して、故に時人の名姓を假るなり。

とあって、「三都賦」の序文や注は、全て左思が自分の作品を權威づけるために、當時の名士の名を借りて、みづから書いたものであるとする。また、先の『南史』宋彭城王傳

に見えた袁淑の「陸機入洛之年」という言葉も、それを裏付ける資料がない。翻つて『晉書』陸機傳に、太康の末に入洛したという記事については、『世說新語』尤悔篇注に引く『八王故事』に、

吳平後、陸機兄弟共遊於此十餘年。

吳の平ぎて後、陸機兄弟は共に此に遊ぶこと十餘年なり。

とあり、また『文選』卷十七「文賦」注に引く臧榮緒『晉書』の、

退臨舊里、與弟雲勤學、積十一年。

退きて舊里に臨み、弟の雲と學に勤め、積むこと十一年なり。

という記述とも符合し、陸機の入洛を太康の末年（二八九）として、問題はないように思われる。

さて、陸機が吳國滅亡後ほどなくして作ったと考えられる弟の雲に贈った詩（「贈弟士龍」詩）は、『陸士龍文集』卷三に収められている。詩は全て十章から成る四言詩で、次のような序が附せられている。

余弱年夙孤。與弟士龍、銜卹喪庭。統會逼王命、墨經即戎。時竝繁髮、悼心告別。漸歷八載、家邦顛覆。凡厥同生、彫落殆半。収迹之日、感物興哀。而龍又先在西、時迫當祖載二昆、不容逍遙、銜痛東徂、遺情西慕。故作是詩、以寄其哀苦焉。

余は弱年にして夙に孤たり。弟の士龍と與に、卹ひを喪庭に銜む。続いで王命に逼らるるに會ひ、墨經して 戎に即けり。時に竝びに繁髮して、心を悼めて別れを告ぐ。漸く八載を歴、家邦は顛覆す。凡そ厥の同生、彫落 殆ど半ばなり。収迹の日、物に感じて哀しみを興す。而して龍は又た先に西に在り、時に當に二昆を祖載すべきことを迫られ、逍遙するを容されず。痛みを銜んで東に徂ぎ、情を遺して西を慕ふ。故に是の詩を作りて、以て其の哀苦を寄す。

「漸歷八載、家邦顛覆」とあるが、陸機の父陸抗が亡くなったのは、吳の鳳皇三年（二七四）のことであるから、此の詩が作られたのは太康三年（二八二）、吳國滅亡の二年後以降のことであろうと考えられる。「凡厥同生、彫落殆半」というのは、吳の天紀四年（二八〇）に陸氏兄弟の軍が王濬の率いる晉軍に敗れ、長兄の晏と次兄の景が戦死したことを言うのであろう。陸機には三人の兄がいたが、三兄の玄は早くに亡くなったらしい（「吳貞獻處士陸君誄」）。

全十章から成る詩は、先ず次のように歌い起こされる。

| | |
|------|-------------|
| 於穆予宗 | 於穆たる予が宗 |
| 稟精東嶽 | 精を東嶽に稟けたり |
| 誕育祖考 | 祖考を誕育し |
| 造我南國 | 我を南國に造らしむ |
| 南國克靖 | 南國 克く靖らかなるは |
| 實繇洪績 | 實に洪績に繇る |
| 惟帝念功 | 惟に帝は功を念ひ |
| 載繁其錫 | 載ち其の錫を繁んにす |
| 其錫惟何 | 其の錫とは 惟れ何ぞ |
| 玄冕袞衣 | 玄冕と袞衣となり |
| 金石假樂 | 金石 假樂し |
| 旒鉞授威 | 旒鉞 威に授く |
| 匪威是信 | 威に匪ずして是れ信 |
| 稱乎遠德 | 遠德を稱へらる |
| 奕世台衡 | 奕世 台衡にして |
| 扶帝紫極 | 帝を紫極に扶く |

此のように、第一章では、陸氏の功業を稱賛し、末聯には「奕世台衡、扶帝紫極」と、陸氏一族は代々宰相として天子を輔佐してきたと言う。續く第二章では、戦死した二人の兄（晏・景）について、次のように述べる。

| | |
|------|--------------|
| 篤生三昆 | 篤く三昆を生み |
| 克明克俊 | 克く明にして 克く俊なり |
| 遵塗結轍 | 塗に遵ひて轍を結び |
| 承風襲問 | 風を承けて問を襲ふ |
| 帝曰欽哉 | 帝曰く 欽まん哉 |
| 纂戎烈祚 | 戎が烈祚を纂げよと |
| 雙組式帶 | 雙組 帶に式し |
| 綬章載路 | 綬章 路に載す |
| 即命荆楚 | 即ち荆楚に命ありて |
| 對揚休顧 | 休顧に對揚す |
| 肇敏厥績 | 敏なる厥の績を肇り |
| 武功聿舉 | 武功は聿に舉がれり |
| 煙煴芳素 | 煙煴の芳素 |
| 綢繆江澗 | 江澗に綢繆す |

昊天不吊 昊天 吊おほれまず
胡寧棄予 胡寧なんぞ予よを棄なつるや

末聯の「昊天不吊、胡寧棄予」（天は無慈悲にも兄たちを奪い去り、どうして我を見捨てられたのか）というところに、二人の兄を喪った陸機の悲哀がよく表されている。第三章は、才能の無い自分が、亡き父の兵を授かって出陣することを次のように言っている。

嗟予人斯 嗟あは予われ 人なる
胡德之微 胡なんぞ德とくの微ちひかならんや
闕彼遺軌 彼の遺軌を闕くわき
則此頑違 此の頑違に則したがふ
王事靡盬 王事きごと 靡なきこと靡なし
矜旃屨振 矜あはれ 旃あら 屨あら 振ふるふ
委籍奮戈 籍しよを委すてて戈こを奮ふるひ
統厥征人 厥せの征人しやうじんを統すぶ
祈祈征人 祈いのち 祈いのち 征人しやうじん
載肅載閑 載うち 肅さふみ 載うち 閑ひらふ
駸駸戎馬 駸あら 駸あら 戎馬じやうば
有駟有翰 駟うり 有あり 翰うり
昔予翼考 昔 予が翼考
惟斯伊撫 惟ただ 斯こゝに伊いれ撫なせり
今予小子 今 予 小子
繆尋末緒 繆あやま 尋たづね 末緒まつしよ

第四章では、吳國が敗れたことを歌う。

有命自天 命有り 天自あまりす
崇替靡常 崇替 常靡なし
王師乘運 王師 運うに乘のじ
席江卷湘 江を席し 湘を卷まくす
雖備官守 官守に備はると雖も
守從武臣 守りは武臣に従ふ
守局下列 局を下列に守るは
譬彼飛塵 譬ふれば彼の飛塵のごとし
洪波電擊 洪波 電のごとく撃ち
與衆同泯 衆ともと同一ともに泯なぶ

巔跋西夏 西夏に巔跋し
収迹舊京 迹を舊京に収む
俯慚堂構 俯して堂構に慚ぢ
仰憐先靈 仰ぎて先靈に憐む
孰云忍媿 孰か媿を忍ぶと云はん
寄之我情 之を我が情に寄さん

續く第五章では、弟の雲を励まし、「願爾偕老、攜手黃髮」（願わくはお前とともに年老いて、老人になるまで手を攜えてゆきたいものだ）と結んでいる。

伊我俊弟 伊れ我が俊弟
咨爾士龍 咨爾士龍
懷襲瑰璋 瑰璋を懷襲し
播殖清風 清風を播殖す
非德莫勲 徳に非ずんば勲むる莫く
非道莫弘 道に非ずんば弘むる莫し
垂翼東畿 翼を東畿に垂れ
耀穎名邦 穎を名邦に耀かす
綿綿洪統 綿綿たる洪統
非爾孰崇 爾に非ずんば孰か崇くせん
依依同生 依依たる同生
恩篤情結 恩は篤く情は結ぶ
義存竝濟 義は並びに濟はるるに存す
胡樂之悅 胡の樂しみか之れより悦ばしからん
願爾偕老 願はくは爾と偕に老い
攜手黃髮 手を攜へて黃髮ならん

これに續く第六章では、敗戦の悲しみを次のように詠っている。

昔我西征 昔我西征し
扼腕川湄 腕を川湄に扼せり
掩涕即路 涕を掩ひて路に即き
揮袂長辭 袂を揮ひて長く辭す
六龍促節 六龍節を促し
逝不我待 逝きて我を待たず
自往迄茲 往自り茲に迄るまで

曠年八祀「年を曠むなしくすること八祀なり
 悠悠我思 悠悠たる我が思ひ
 非爾焉在 爾に非ずして焉どこにか在らん
 昔竝垂髮 昔 竝びに垂髮なるも
 今也將老「今や 將に老いんとす
 銜哀茹感 哀しみを銜くはんで感あはひを茹くはひ
 契闊充飽 契闊 充飽す
 嗟我人斯 嗟あはれ我が人
 胡卯之早 胡なんぞ卯うふることの早き

「自往迄茲、曠年八祀」（あれから今に至るまで、八年の歳月が過ぎた）というのは、序のなかで、「漸歴八載、家邦顛覆」というのと同じく、父の陸抗を失ってから、八年が経過したことを言うのである。そうしてその八年間の思いを第七章で、次のごとく述べている。

| | |
|-------|---|
| 天歩多艱 | 天歩 艱み多く |
| 性命難誓 | 性命 誓ひ難し |
| 常懼隕斃 | 常に懼るは 隕斃して |
| 孤魂殊裔「 | 孤魂の殊裔ならんとするを |
| 存不阜物 | 存しては物を阜 <small>ゆか</small> んにせず |
| 没不増壤 | 没しては壤を増さず |
| 生若朝風 | 生きては朝風の若 <small>ごと</small> く |
| 死猶絶景「 | 死しては猶ほ絶景のごとし |
| 視彼浮遊 | 彼の浮遊を視て |
| 方之僑客 | 之を僑客 <small>きやく</small> に方 <small>あ</small> ぶ |
| 眷此黄墟 | 此の黄墟を眷 <small>あ</small> みて |
| 譬之斃宅「 | 之を斃宅 <small>はつち</small> に譬 <small>たと</small> ふ |
| 匪身是吝 | 身を是れ吝 <small>いと</small> しむには匪 <small>な</small> ず |
| 亮會伊惜 | 亮會を伊れ惜 <small>いと</small> しむ |
| 其惜伊何 | 其の惜しむは 伊れ何ぞ |
| 言紆其思 | 言 <small>こと</small> に其の思 <small>おも</small> ひを紆 <small>ゆる</small> げん |
| 其思伊何 | 其の思 <small>おも</small> ひ 伊れ何ぞ |
| 悲彼曠載 | 彼の曠載を悲しむ |

續く第八章では、家に歸還する様子を、次のように述べる。

| | |
|------|---------------|
| 出車戒塗 | 車を出だして塗を戒め |
| 言告言歸 | 言に告げ 言に歸る |
| 蓐食驚駕 | 蓐食して駕を驚かしめ |
| 夙興宵馳 | 夙に興き 宵に馳す |
| 濛雨之陰 | 濛雨 之れ陰り |
| 炤月之輝 | 炤月 之れ輝く |
| 陸陵峻坂 | 陸に峻坂を陵え |
| 川越洪漪 | 川に洪漪を越ゆ |
| 爰届爰止 | 爰に届り 爰に止まり |
| 歩彼高堂 | 彼の高堂を歩む |
| 失爾羽邁 | 爾を失ふこと羽の邁むごとく |
| 良願中荒 | 良に中荒に願ふ |
| 我心永懷 | 我が心は永く懷ひ |
| 匪悦匪康 | 悦ぶに匪ず 康んずるに匪ず |

續けて第九章では、戦死した二人の兄のことを、次のように悲しみ詠う。

| | |
|------|-------------|
| 昔我斯逝 | 昔 我 斯に逝くや |
| 兄弟孔備 | 兄弟 孔だ備れり |
| 今我來思 | 今 我 來るや |
| 或彫或疚 | 或いは彫し 或いは疚す |
| 昔我斯逝 | 昔 我 斯に逝くや |
| 族有餘榮 | 族に餘榮有り |
| 今我來思 | 今 我 來るや |
| 堂有哀聲 | 堂に哀聲有り |
| 我行其道 | 我 其の道を行けば |
| 鞠爲茂草 | 鞠まりて茂草と爲る |
| 我履其房 | 我 其の房を履めば |
| 物存人亡 | 物は存するも 人は亡す |
| 拊膺涕泣 | 膺を拊ちて涕泣し |
| 血淚彷徨 | 血淚して彷徨す |

呉國の滅亡、父陸抗の死、二人の兄の戦死と、悲哀に満ちた八年間の思いを述べてきた陸機は、次のように一篇の詩を結んでいる。

企佇朔路 朔路に企佇し

言告言歸 言に告げ 言に歸る

心存言宴 心は言宴に存し

目想容輝 目は容輝を想ふ

迫彼窈窕 彼の窈窕に迫られ

載驅東路 載ち東路に驅る

繼情桑梓 情を桑梓に繼ぎ

肆力丘墓 力を丘墓に肆す

婉兮變兮 婉たり 變たり

興懷罔極 懷ひを興して極まること罔し

眷言顧之 眷みて言に之を顧み

使我心惻 我が心をして惻ましむ

『詩經』を基調とした此の四言詩には、随所に『詩經』を典據とする語句が用いられている。いま、『詩經』に基づく語句と考えられるものを取り上げて見てみよう。

先ず第一章では、以下の語句が『詩經』に基づくものと考えられる。

〔於穆予宗〕…周頌・清廟「於穆清廟、肅々顯相」

〔誕育祖考〕…小雅・信南山「祭以清酒、從以騂牡、享于祖考」

〔造我南國〕…小雅・四月「滔滔江漢、南國之紀」

〔載繁其錫〕…大雅・皇矣「則篤其慶、載錫之光」

〔其錫惟何〕…召南・何彼禰矣「其鈞維何、維絲伊緝」

〔玄冕袞衣〕…幽風・九罭「我覲之子、袞衣繡裳」

〔金石假樂〕…大雅・假樂「假樂君子、顯顯令德」

第二章についても、『詩經』を踏まえた多くの語句が用いられている。

〔篤生三昆〕…大雅・大明「續女維莘、長子維行、篤生武王」

〔纂戎烈祚〕…大雅・烝民「續戎祖考、王躬是保」

〔綬章載路〕…大雅・皇矣「帝遷明德、串夷載路」

〔對揚休顧〕…大雅・江漢「對揚王休、作召公考」

〔武功聿舉〕…幽風・七月「二之日其同、載績武功」

〔網繆江澍〕…唐風・網繆「網繆束薪、三星在天」

〔昊天不吊〕…小雅・節南山「不弔昊天、不宜空我師」

第三章については、次のようなものがある。

〔嗟予人斯〕…小雅・正月「哀我人斯、于何從祿」

「王事靡盬」：唐風・鴉羽「王事靡盬、不能蓺稷黍」

「發發戎馬」：小雅・采芣「駕彼四牡、四牡發發」

「今予小子」：周頌・閔予小子「閔予小子、遭家不造、嬛嬛在疚」

以下、第十章までの全章に亙って、ここに見てきたように『詩經』に基づく語句を多く用いており、陸機の此の「贈弟士龍」詩は、『詩經』を基調とした作品ということができよう。また、此の詩は祖國の滅亡ということをテーマとしているために、沈んだ内容のものとなっている。さらに二人の兄を失った悲しみが述べられているとともに、後に残された弟の雲に對する思いやりにも溢れた作品である。

此の詩の他に、入洛前のものと断定できる作品は無いけれども、『晉書』本傳に、

伏膺儒術、非禮不動。

儒術を伏膺し、禮に非ずんば動かさず。

と言うように、儒學に基づく傳統的な學問教養を身につけていた陸機の詩は、『詩經』を基本とした古典的なものであったように想像される。そうしてこのような傾向は、陸機の作品のみならず、陸雲の作品にも見られるものであった。次に、此の詩に答えた陸雲の詩「答兄平原」（『陸士龍文集』卷三）を取り上げてみよう。

陸雲の兄への答詩は、全二百四十二句から成る長編の詩である。兄の贈詩と同じく祖國の滅亡を歌うものであるが、陸氏の祖先について述べる書き出しの部分を取り上げてみよう。

伊我世族

伊れ我が世族

太極降精

太極 精を降せり

昔在上代

昔在上代に

軒虞篤生

軒・虞 生を篤くす

厥生伊何

厥の生 伊れ何ぞ

流祚萬齡

流祚 萬齡なり

南嶽有神

南嶽に神有り

乃降厥靈

乃ち厥の靈を降す

誕鍾祖考

誕いに祖考に鍾まり

徹茲神明

茲の神明に徹る

運歩玉衡

歩を玉衡に運び

仰和太清

仰いで太清に和す

| | |
|------|------------|
| 寶御四門 | 四門に寶御し |
| 旁穆紫庭 | 旁く紫庭に穆げり |
| 紫庭既穆 | 紫庭 既に穆ぎ |
| 威聲爰振 | 威聲 爰に振ふ |
| 厥振伊何 | 厥の振ふは 伊れ何ぞ |
| 播化殊鄰 | 化を殊鄰に播く |
| 清風攸被 | 清風 被ふ攸 |
| 率土歸仁 | 率土 仁に歸す |
| 彤弧所彎 | 彤弧の彎く所 |
| 萬里無塵 | 萬里 塵無し |
| 功昭王府 | 功は王府に昭らかに |
| 帝庸厥勲 | 帝 厥の勲を庸ふ |
| 黃鉞授征 | 黃鉞 征に授かり |
| 錫命頻繁 | 命を錫ふこと頻繁なり |
| 闕如虺虎 | 闕ゆること虺虎の如し |
| 肅茲三軍 | 茲の三軍に肅たり |
| 光若辰跲 | 光は辰の跲するが若く |
| 亮彼公門 | 彼の公門に亮かなり |
| 仍世上司 | 仍世 上司にして |
| 芳流慶純 | 芳流 慶純なり |
| 雲和所産 | 雲和の産む所にして |
| 爰育二昆 | 爰に二昆を育む |
| 誕豐岐嶷 | 誕豐 岐嶷にして |
| 夙邁令聞 | 夙に令聞を邁む |

終わりの四句「雲和所産、爰育二昆、誕豐岐嶷、夙邁令聞」とは、陸家に生まれた二人の兄上（晏・景）が立派に成長し、よき評判を得たことをいう。此の部分で、『詩經』に依據する語句を示すと以下のごとくである。

〔昔在〕…商頌・長發「昔在中葉、有震且業」
 〔篤生〕…大雅・大明「篤生武王、保右命爾、燮伐大商」
 〔伊何〕…小雅・巧言「既微且慍、爾勇伊何」
 〔清風〕…大雅・烝民「吉甫作誦、穆如清風」

「率土」……小雅・北山「率土之濱、莫非王臣」

「彤弧」……小雅・彤弓「彤弓召兮、受言藏之」

「鬪如玃虎」……大雅・常武「進厥虎臣、鬪如玃虎」

「令聞」……大雅・文王「疊疊文王、令聞不已」

そもそも『詩經』の詩は、「風」の諸篇は概ね素朴な民歌であり、そこには作者の感情があからさまには表出されていない。「雅」や「頌」に至っては、宮廷の饗宴や宗廟の祭祀の時に雅樂を奏して歌われるものであって、個人的な感情が現れないという傾向はより顕著である。さらに四言という形式が、いつそうその重厚なイメージを作り出す。これに對して南方の楚の地では、早くから楚歌の形式があったが、それは個人の感情が十分に表出されたものであって、形式的にも、四言形式の『詩經』の詩よりも、はるかに情感あふれるものであった。『論語』微子篇に、次のような章がある。

楚狂接輿歌而過孔子曰、鳳兮鳳兮、何徳之衰。往者不可諫、來者猶可追。已而已而、今之從政者殆而。孔子下欲與之言。趨而辟之。不得與之言。

楚の狂接輿 歌ひて孔子を過ぎて曰く、「鳳よ 鳳よ、何ぞ徳の衰へたる。往く者は諫む可からず、來る者は猶ほ追ふ可し。已みなん 已みなん、今の政に従ふ者は殆ふし」と。孔子 下りて之と言はんと欲す。趨りて之を辟く。之と言ふことを得ず。

ここに見られる楚狂の接輿が歌う言葉におけるような情感の豊かさは、決して四言を基調とする『詩經』の詩には見ることでできないものである。そうして、このような情感豊かに歌う『楚辭』の語句を用いるということとは、ただ単に言葉だけを使って軽快で華やかなムードを出すというのではなく、その語句を使うことによって、その『楚辭』における語句が含み持っている情感をも作品の中に盛り込むことができるのである。ために華美な文學を好む當時の北方文壇では、多く『楚辭』風の作品が作られていたのである。

一方、陸機・陸雲に代表される南方文學は、『詩經』の語句、ことに「大雅」「小雅」の言葉を多用することによって、重厚な雰囲気や作品のなかに取り込むことに努めていたのであると思われる。そうして陸機こそは、そのような南方文學を代表する存在なのであった。

(注)

① 高橋和巳「陸機の傳記とその文學」(『中國文學報』第十一・十二冊)

② 興膳宏「左思と詠史詩」(『中國文學報』第二十一冊)

(2) 入洛に際しての詩

それでは次に、入洛に際しての陸機の作品、すなわち「赴洛」詩、「赴洛道中作」詩を取り上げてみよう。

陸機の「赴洛」詩は、二首が『文選』卷二六に収められている。このうち、「羈旅遠遊宦、託身承華側」(羈旅して遠く遊宦し、身を承華の側らに託す)で始まる一首は、入洛後、愍懷太子の洗馬であった時に作られたものである。今、親しい人々と盡きぬ名残を交わし、獨り洛陽に旅行くわびしさについて詠う、もう一首の方を見てみよう。

希世無高符

世を希ふも 高き符無く

営道無烈心

道を営むも 烈き心無し

靖端肅有命

靖端にして有命を肅み

假楸越江潭

楸を假りて江潭を越えんとす

親友贈予邁

親友は予が邁くに贈り

揮淚廣川陰

涙を廣川の陰に揮ふ

撫膺解攜手

膺を撫でて攜へし手を解き

永歎結遺音

永く歎きて遺音を結ぶ

無迹有所匿

迹無くして匿す所有り

寂漠聲必沈

寂漠として聲は必ず沈む

肆目眇不及

目を肆せども眇かにして及ばず

緬然若雙潛

緬然として雙つながら潛るるが若し

南望泣玄渚

南のかた望みて玄渚に泣き

北邁涉長林

北のかた邁きて長林を渉る

谷風拂脩薄

谷風 脩き薄みを拂ひ

油雲翳高岑

油雲 高き岑を翳ふ

疊疊孤獸騁

疊疊として孤獸は騁せ

嚶嚶思鳥吟

嚶嚶として思鳥は吟ふ

感物戀堂堂

物に感じて堂堂を戀ふ

離思一何深

離れの思ひ 一に何を深き

佇立愴我歎

佇立して 愴として我歎き

寤寐涕盈衿

寤寐に 涕は衿に盈つ

惜無懷歸志

惜むらくは 歸を懷ふの志無きを

辛苦誰爲心

辛苦しては誰か心を爲めん

第三・四句に「靖端肅有命、假檝越江潭」（君命を恭しく受けて、舟のかじを借り雇って大江の深みを越えて行くことになった）とあることから見て、この入洛は、あるいは晉朝からの命があったのかも知れない。また、第十七・十八句では「嘒嘒孤獸騁、嚶嚶思鳥吟」（仲間から離れてしまった獸が走り去って行き、友を求める鳥は聲を響かせている）と、「孤獸」「思鳥」に自身を喩えながら、旅のわびしさを切々と歌っている。

梁の鍾嶸は『詩品』の序で、西晉太康年間（二八〇～二八九）の文學について次のように述べている。

太康中、三張二陸、兩潘一左、勃爾俱興、踵武前王。風流未沫、亦文章之中興也。

太康中、三張・二陸、兩潘・一左、勃爾として俱に興り、武を前王に踵ぐ。風流未だ沫まらず、亦た文章の中興なり。

鍾嶸は、太康の文學を建安年間（一九六～二一〇）に第一期黄金時代を迎えた五言詩の第二の隆盛期であると言う。入洛後の陸機は、多くの五言詩を作っているが、入洛に当たったの詩を四言ではなく、五言で作ったというのは、或いは洛陽で盛んに五言詩が作られていたということを意識してのことであろうか。洛陽への道中で作った「赴洛道中作」詩二首も、五言の作品である。

さて、ここで、「赴洛」詩の用語について見てみよう。この詩の中で陸機が典故を用いた語句を全て取り出してみると、次のようである。

〔希世〕…『莊子』讓王篇「原憲謂子貢曰、夫希世而行、比周而友。憲不忍爲也」

〔營道〕…『禮記』儒行篇「儒有合志同方、營道同術」

〔靖端〕…『國語』晉語八「祁午見范宣子曰、若能靖端、諸侯使服聽命於晉國」

〔有命〕…『周易』師卦六五象傳「大君有命」

〔江潭〕…『楚辭』漁父「游於江潭」

〔揮淚〕…『孔子家語』曲禮子夏問「公文文伯卒、敬姜曰、二三婦無揮涕」

〔撫膺〕…『列子』說符篇「撫膺而恨」

〔攜手〕…『毛詩』邶風・北風「攜手同行」

〔永歎〕…『毛詩』小雅・小弁「寤寐永歎」

〔遺音〕…曹植・雜詩「翹思慕遠人、願欲託遺音」

〔有所匿〕…『呂氏春秋』審分覽審分「作則有所匿其塗也」

〔寂漠〕…『淮南子』齊俗訓「寂寞音之主也」

〔眇不及〕…『毛詩』邶風・燕燕「瞻望不及」

〔玄渚〕…西京賦「海若遊於玄渚」

〔油雲〕…『孟子』梁惠王上「油然作雲」

〔孤獸〕…曹植・雜詩（贈白馬王彪）「孤獸走索羣」

- 「嚶嚶」：『毛詩』小雅・伐木「鳥鳴嚶嚶」
 「感物」：古詩「感物懷所思」
 「離思一何深」：曹植・雜詩「離思一何深」
 「佇立」：『毛詩』邶風・燕燕「佇立以泣」
 「寤寐」：『毛詩』曹風・下泉「慨我寤寐」
 「歸志」：『孟子』公孫丑下「浩然有歸志」

先に取り上げた入洛前の作品である「贈弟士龍」詩が、基本的には『詩經』を踏まえて、その語句を多用しているのに比べ、此の詩にはそのような傾向が顕著には認められないものの、五言詩にしては、『詩經』に基づく語句を比較的多く用いているように感じられる。そもそも四言の詩は、四言句を用いるために、『詩經』の語句を利用しやすい。また、『詩經』の詩句をそのままの形で用いることができるために、殊にその傾向が強くなる。それに對して五言詩の場合には、字數の關係で四言を基調とする『詩經』の語句を利用するのが難しいであろう。さらに古典的な『詩經』に基づく語句を用いることから生じる重厚さは、輕快な感じを與える五言詩のリズムに乗りにくいということもあるのではなからうか。そうした条件の中にあっても、陸機は『詩經』の語句を五言詩の中に比較的多く用いる傾向が見られるのは、陸機の文學の基礎が、『詩經』を規範とする南方文壇によって培われたことによるのであろう。

次に、「赴洛道中作」詩を見てみよう。この詩は二首が『文選』卷二六に収められており、陸機が、初めて晉の都洛陽に旅立つ道中で作ったものである。まず、其の第一首を取り上げる。

| | |
|-----------------------|--------------|
| 赴洛道中作（洛に赴く道中の作）——其一—— | |
| 愔愔登長路 | 愔愔を登りて長路に登り |
| 嗚咽辭密親 | 嗚咽して密親を辭す |
| 借問子何之 | 借問す 子 何くにか之と |
| 世網嬰我身 | 世網 我が身に嬰ると |
| 永歎遵北渚 | 永歎して北渚に遵ひ |
| 遺思結南津 | 思ひを遺して南津に結ぶ |
| 行行遂已遠 | 行き行きて 遂已に遠く |
| 野途曠無人 | 野途は曠しくして人無し |
| 山澤紛紆餘 | 山澤 紛として紆餘たり |
| 林薄杳阡眠 | 林薄 杳として阡眠たり |
| 虎嘯深谷底 | 虎は深谷の底に嘯き |
| 雞鳴高樹巔 | 雞は高樹の巔に鳴く |

哀風中夜流 哀風 中夜に流れ
 孤獸更我前 孤獸 我が前を更たり
 悲情触物感 悲情 物に觸れて感き
 沈思鬱纏絲 沈思 鬱として纏絲たり
 佇立望故郷 佇立して故郷を望み
 顧影悽自憐 影を顧みて悽として自ら憐む

第一首は、親しい人々と別れた悲しみが、旅の道中のわびしい風物に觸れて、いよいよ暮ることを歌うもので、實景描寫をもとにした陸機の心情が吐露されている。この中、典故を用いた語句は、以下のごとくである。

- 〔摠轡〕：『孔子家語』執轡「善御者正身以摠轡」
- 〔嗚咽〕：蔡琰・悲憤詩「行路亦嗚咽」
- 〔世網嬰我身〕：江偉・答軍司馬詩「羈紲繫世網、維進退準繩」
- 〔永歎〕：『毛詩』小雅・小弁「寤寐永歎」
- 〔遺思〕：秦嘉・贈婦詩「遺思致款誠」
- 〔野塗〕：『周禮』冬官考工記・匠人「野塗五軌」
- 〔野途曠無人〕：『楚辭』遠遊「野寂寞其無人」
- 〔紆餘〕：司馬相如・上林賦「紆餘逶迤」
- 〔阡眠〕：『楚辭』九懷・通路「遠望兮阡眠」
- 〔虎嘯深谷底〕：『淮南子』天文訓「虎嘯而谷風至」
- 〔雞鳴高樹巔〕：『古今樂錄』「雞鳴高樹巔」
- 〔纏絲〕：張升與任彦堅書「纏絲恩好、庶蹈高蹤」
- 〔佇立〕：『毛詩』邶風・燕燕「佇立以泣」
- 〔顧影〕：丁儀・寡婦賦「賤妾皚皚、顧影爲儔」
- 〔自憐〕：『楚辭』九辯「私自憐兮何極」

續いて第二首の方も見てみよう。

遠遊越山川 遠遊して山川を越ゆ
 山川脩且廣 山川は脩くして且つ廣し
 振策陟崇丘 策を振げて崇丘に陟り
 案轡遵平莽 轡を案へて平莽に遵ふ
 夕息抱影寐 夕べに息ひては影を抱いて寐ね
 朝徂銜思往 朝に徂きては思ひを銜んで往く
 頓轡倚嵩巖 轡を頓めて嵩巖に倚り

側聽悲風響」 聽を側みかてて風の響きを悲しむ
 清露墜素輝 清露は素輝よそまを墜おちし
 明月一何朗 明月 一に何ぞ朗あきらかなる
 撫几不能寐 几かけに撫なりて寐いぬる能あたはず
 振衣獨長想 衣を振かるひて獨り長く想おもふ

第二首の方は、第一首と同様に、山川をはるばる越え行き、一人旅を續ける寂しさを詠じている。この中で、典故を用いた語句は、次の通りである。

- 「遠遊」：『楚辭』遠遊「願輕舉而遠遊」
- 「越山川」：秦嘉妻徐氏・答嘉書「高山巖巖而君是越」
- 「振策陟崇丘」：秦嘉詩「過辭」親墓、振策陟長衢」
- 「案轡」：『漢書』周勃傳「天子案轡徐行」
- 「抱影」：『楚辭』哀時命「廓抱影而獨倚」
- 「振衣」：『新序』雜事「老古振衣而起」
- 「長想」：傅毅・舞賦「遊心無垠、遠思長想」

一見して明らかかなように、『詩經』に基づく語句は殆ど用いられておらず、代わって『楚辭』を據り所とする語句が比較的多く用いられている。實は、陸機が此の「赴洛道中作」詩で示してくれている詩語の用い方こそが、陸機入洛以前の北方文壇での詩風なのであった。初めての洛陽入りに當たって、北方文壇での流行、すなわち『楚辭』の語句を多く用いた華やかで軽やかな文學が盛んであったことを承知していた陸機は、あえてこのような典故を使ったのであろうか。それは北方文壇に對する陸機の心配りであったようにも思われる。

二 北方文學に對する從來の評價

西晉時代の北方文學に對する評價について、北方文壇を代表する潘岳と張華を例として見てみよう。

鍾嶸は『詩品』の中で、潘岳を上品の詩人として位置付け、次のように言う。

其源出於仲宣。翰林歎其翩翩然如翔禽之有羽毛、衣服之有綃縠、猶淺於陸機。謝混云、潘詩爛若舒錦、無處不佳。陸文如披沙簡金、往往見寶。嶸謂、益壽輕華、故以潘爲勝。翰林篤論、故歎陸爲深。余嘗言、陸才如海、潘才如江。

其の源は仲宣に出づ。翰林は、其の翩翩然へんげんぜんとして翔禽の羽毛有り、衣服の綃縠有るが如

きを歎ずるも、猶ほ陸機より浅しとす。謝混云ふ、潘の詩は爛なやかなること錦を舒のべたるが若く、處として佳よからざる無し。陸の文は沙を披ひらいて金を簡えんぶが如く、往往にして寶を見る。嶮かき謂へらく、益壽は輕華なり、故に潘を以て勝れりと爲す。翰林は篤論す、故に陸を歎じて深しと爲す。余嘗て言ふ、陸の才は海の如く、潘の才は江の如しと。

鍾嶸は先ず、潘岳の詩を王粲に源を發すると言う。王粲については、それを上品に配し、

其源出於李陵。發愀愴之詞、文秀而質羸。

其の源は李陵に出づ。愀愴の詞を發し、文は秀づるも而も質は羸し。

と述べ、李陵から出るといふ。さらに李陵については、やはり上品に位置付けて次のように言ふ。

其源出於楚辭。文多悽愴、怨者之流。

其の源は楚辭に出づ。文は悽愴多く、怨む者の流れなり。

つまり、潘岳の詩の系譜をたどれば、『楚辭』に行き着くわけで、鍾嶸は、潘岳を『楚辭』系統の詩人と認めているのである。そうして其の詩について、陸機と對比しながらの、李充の『翰林論』および謝混（字は益壽）の潘岳評を紹介した後で、「陸の才は海の如く、潘の才は江の如し」と自らの評價を下すのである。陸機と潘岳の文學については、『文心雕龍』體性篇でも、

安仁輕敏、故鋒發而韻流、士衡矜重、故情繁而辭隱。

安仁は輕敏なれば、故に鋒は發して韻は流れ、士衡は矜重なれば、故に情は繁にして辭は隱る。

と、兩者の文學を対照的に捉えているが、鍾嶸は、重厚で浮ついたところの無い陸機の文學を「海」に喩え、浅く輕快な潘岳の文學を「江」に喩えたのであろう。

次に張華について見てみよう。鍾嶸は、張華を中品に位置付けて、次のように言ふ。

其源出於王粲。其體華艷、興託不奇。巧用文字、務爲妍冶。雖名高曩代、而疏亮之士、猶恨其兒女情多、風雲氣少。謝康樂云、張公雖復千篇、猶一體耳。今置之中品、疑弱處之下科、恨少。在季孟之間矣。

其の源は王粲に出づ。其の體は華艷なるも、興託は奇ならず。巧みに文字を用ひ、務めて妍冶を爲す。名は曩代に高しと雖も、而も疏亮の士は、猶ほ其の兒女の情多くして、風雲の氣少なきを恨む。謝康樂云ふ、張公は復た千篇と雖も、猶ほ一體のごとき耳と。今、之を中品に置かば、弱きを疑ひ、之を下科に處かば、少なきを恨む。季・孟の間に

在り。

張華の詩の源流を王粲に求める點は、潘岳の場合と同じであり、鍾嶸が、張華の詩を潘岳同様に、『楚辭』の流れを繼承するものと考えていたことが分かる。そうして鍾嶸は、張華の詩を「華艷」と評するが、この點に関しては、劉勰も『文心雕龍』時序篇の中で、

茂先揺筆而散珠。

茂先は筆を揺がせて珠を散ず。

と、張華が華やかな文章をつくったことを言っている。このような、さらびやかで美しい文學こそは、『楚辭』の要素を多く詩の中に取り入れたために生まれたものであり、かかる風潮は、潘岳と張華だけに限られたことではなく、北方文壇に共通する傾向なのであった。

さて、それでは此のような傾向を實作のなかに認めることができるかどうか、先ずは潘岳の作品を取り上げて検討してみたい。

(1) 潘岳の詩

北方文壇の中心的文人である潘岳の詩は、それほど多くのものが残されていないが、その中で『文選』卷二六に収める二篇の詩、「河陽縣作」詩二首、「在懷縣作」詩二首を取り上げて、その點について見てみることにする。まず「河陽縣作」詩であるが、此の詩は潘岳が河陽の令となった太康六年（二八五）、岳三十二歳の時に作られたものである。二首ある詩のうち、「其の一」の方では、中央（洛陽）から地方（河陽）へ出されたことに不満を持ちながらも、縣令として治績をあげようとする心構えを歌い、「其の二」の方では、縣令という低い地位ではあるが、それなりに實績をあげんとする志を述べている。ここでは「其の一」の方を見てみよう。

河陽縣作（河陽縣の作）——其一一

微身輕蟬翼

微身 蟬の翼よりも輕きに

弱冠忝嘉招

弱冠にして嘉き招きを忝くす

在疚妨賢路

疚に在りて賢路を妨げしに

再升上宰相

再び上宰相の朝に升る

猥荷公叔舉

猥りに公叔の舉を荷けて

違陪廁王寮

陪を違りて王寮に廁れり

長嘯歸東山

長く嘯きて東山に歸り

擁耒耨時苗

耒を擁りて時苗を耨る

幽谷茂織葛
峻巖敷榮條
落英隕林趾
飛莖秀陵喬
卑高亦何常
升降在一朝
徒恨良時泰
小人道遂消
譬如野田蓬
幹流隨風飄
昔倦都邑游
今掌河朔俛
登城眷南顧
凱風揚微綃
洪流何浩蕩
脩芒鬱蒼嶠
誰謂晉京遠
室邇身實遼
誰謂邑宰輕
令名患不劬
人生天地間
百歲孰能要
頰如槁石火
瞥若截道颯
齊都無遺聲
桐鄉有餘謠
福謙在純約
害盈猶矜驕
雖無君人德
視民庶不忼

幽谷に織葛を茂らせ
峻巖に榮條を敷く
落英 林の趾に隕ち
飛莖 陵の喬に秀でたり
卑きと高きと 亦た何ぞ常あらん
升と降とは 一朝に在り
徒に恨むは 良時の泰かにして
小人 道遂に消ゆるを
譬ふれば 野田の蓬の
幹流して風に随ひて飄るが如し
昔は都邑の游に倦み
今は河朔の俛を掌る
城に登りて眷て南顧すれば
凱風 微綃を揚ぐ
洪流 何ぞ浩蕩たる
脩芒 鬱として蒼嶠たり
誰か謂はん 晉京は遠しと
室は邇けれども身は實に遼かなり
誰か謂はん 邑宰は輕しと
令名の劬からざるを患ふるのみ
人 天地の間を生くる
百歲 孰か能く要めん
頰なることは石を槁つ火の如く
瞥かなることは道を截るの若し
齊都に遺聲無きも
桐郷には餘謠有り
謙に福ひするは純約に在り
盈を害ふは矜驕に猶る
人に君たるの徳無しと雖も
民を視ること忼からざるを庶ふ

此の詩における語句の典拠を示せば、次の通りである。

「微身輕蟬翼」曹植・表「身輕蟬翼、恩重丘山」
「輕蟬翼」…『楚辭』卜居「蟬翼爲輕也」

〔在疚〕…『毛詩』周頌・閔予小子「覺覺在疚」
〔妨賢路〕…『說苑』至公「楚令尹虞丘子謂莊王曰、臣爲令尹、處士不升、妨群賢路」
〔公叔舉〕…『論語』憲問篇「公叔文子之臣、大夫僕與文子同昇諸公、子曰、可以爲

文矣」

〔連陪廁王寮〕…『論語』季子篇「陪臣執國命」
〔長嘯〕…『楚辭』九歎・思古「臨深水而長嘯」

〔良時〕…李陵・贈蘇武詩「良時不再至」／禰衡・書「衡以良時散而復合」

〔小人道遂消〕…『周易』泰卦・彖傳「君子道長、小人道消」

〔譬如野田蓬、幹流隨風飄〕…『商君書』禁使「今夫飛蓬遇飄風而行千里、乘風之勢也」

〔幹流〕…『鵝冠子』世兵「幹流遷徙」

〔都邑〕…張衡・歸田賦「游都邑以長久」

〔河朔〕…『尚書』泰誓「王次于河朔」

〔凱風〕…『呂氏春秋』有始覽有始「南方凱風」

〔誰謂〕…『毛詩』衛風・河廣「誰謂宋遠」

〔室邇〕…『毛詩』鄭風・東門之墀「其室則邇、其人甚遠」

〔令名〕…『左氏傳』襄公二十四年「子產曰、令名德之與也」

〔人生天地間〕…古詩十九首「人生天地間」

〔百歲孰能要〕…古詩十九首「生年不滿百」

〔警若截道虺〕…張衡・舞賦「警若電滅」／古詩十九首「人生寄一世、奄忽若虺塵」

〔齊都無遺聲〕…『論語』季氏篇「齊景公有馬千駟、死之日、人無德而稱焉」

〔桐鄉有餘語〕…『漢書』循吏傳（朱邑）「朱邑爲桐鄉番夫、廉平不苛、及死、子葬之、桐鄉邑人爲之起冢立祠也」

〔福謙〕…『周易』謙卦・彖傳「鬼神害盈而福謙」

〔純約〕…『左氏傳』昭公二十八年「晉成鯨曰、在約思純」

〔視民不暍〕…『毛詩』小雅・鹿鳴「我有嘉賓、德音孔昭、視民不暍、君子是則是倣」

次に、「在懷縣作」詩は、潘岳が河陽令から、ほどなくして懷令に轉じた時に作られたものである。岳は太康十年（二八九）頃には尚書度支部に補せられているので、此の詩は太康七年から九年ごろの作品と思われる。二首ある詩の「其の一」の方では、地方官としての身の上を改めて感じながら、都への思いが募ることを述べ、「其の二」では、都への思いに心が動かされるが、まずは今の務めに励もうとする心構えが歌われている。ここでは「其の二」を取り上げよう。

在懷縣作（懷縣に在りて作る）——其二——

春秋代遷逝 春秋 代々遷り逝き

四運紛可喜 四運 紛として喜ぶ可し

寵辱易不驚 寵辱に驚かざること易きも

戀本難爲思 本を戀ひては思ひを爲し難し

我來冰未泮 我の來りしときは冰は未だ泮けざるに

時暑忽隆熾 時は暑にして忽ちに隆熾なり

感此還期淹 此の還る期の淹しきに感じて

歎彼年往駛 彼の年の往くの駛きを歎く

登城望郊甸 城に登りて郊甸を望み

遊目歷朝寺 目を遊ばしめて朝寺を歴たり

小國寡民務 小國は 民の務め寡くして

終日寂無事 終日 寂として事無し

白水過庭激 白水は庭に過りて激しく

綠槐夾門植 綠槐は門を夾みて植つ

信美非吾土 信に美なれども吾が土に非ず

祇攬懷歸志 祇に歸るを懷ふの志を攬すのみ

眷然顧鞏洛 眷然として鞏洛を顧みれば

山川遂離異 山川は遂かにして離異す

願言旋舊鄉 願ひて言に舊郷に旋らんとするも

畏此簡書忌 此の簡書の忌めを畏る

祇奉社稷守 祇みて社稷の守りに奉へ

恪居處職司 恪居して職司に處らん

語句の典據を示せば、次のごとくである。

「春秋代遷逝」：『楚辭』離騷「春與秋其代序」

「四運」：『莊子』知北遊「黃帝曰、陰陽四時、運行各得其序」

「紛可喜」：『楚辭』九章・橘頌「綠葉素榮、紛其可喜」

「寵辱易不驚」：『老子』第十三章「寵辱若驚、何謂寵辱、寵爲下、得之若驚、失之

若驚、是謂寵辱若驚」

「戀本」：『禮記』檀弓上「太公封於營丘、比及五世、皆反葬於周、君子樂其所自生

禮不忘其本」

「我來」：『毛詩』邶風・東山「我來自東」

「冰未泮」：『毛詩』邶風・匏有苦葉「迨冰未泮」

- 「年往駛」……『楚辭』九辯「年洋洋而日往」
 「遊目」……『楚辭』離騷「忽返顧以遊目」
 「小國寡民務」……『老子』第八十章「小國寡民」
 「寂無事」……陸賈『新語』至德篇「君子之治也、混然無事、寂然無聲」
 「信美非吾土」……王粲・登樓賦「雖信美而非吾土」
 「祇攬」……『毛詩』小雅・何人斯「祇攬我心」
 「歸志」……『孟子』公孫丑下「浩然有歸志」
 「眷然顧羣洛」……『孔叢子』記問「眷然顧之、慘焉心悲」
 「離異」……『楚辭』九章・惜誦「終免獨離異」
 「願言」……『毛詩』邶風・二子乘風「願言思子」
 「簡書」……『毛詩』小雅・出車「豈不懷歸、畏此簡書」
 「社稷守」……『論語』先進篇「子路使子羔爲費宰、子路曰、有民人焉、有社稷焉」
 「恪居」……『左氏傳』襄公二十三年「鉏曰、敬恭朝夕、恪居官次」

鍾嶸が五言詩の隆盛期と指摘する西晉太康期の文壇では、このように『楚辭』に基づく語句を多く詩の中に取り込み、『詩經』を踏まえた語句はあまり用いられなくなっていた。四言詩を基調とする『詩經』の語句が、五言詩に利用し難いということは當然のこととして考えられるけれども、これは、劉勰が『文心雕龍』明詩篇のなかで、

晉世羣才、稍入輕綺。

晉世の羣才は、稍や輕綺に入る。

と、西晉時代の詩風を捉えているように、輕快で華美な文學が主流であった當時の文壇にあつては、古典的で重厚、そうして素朴なイメージを持つ『詩經』の語句は敬遠され、代わって華やかなで輕快な印象を與える『楚辭』の語句が多く取り込まれていったものと考えられる。

潘岳の詩は、今日それほど多くのものが残されていないために、ここに取り上げた詩のほかには、『楚辭』に依據した語句を多用する當時の文壇の流行を顯著に示してくれる作品を見ることができないが、彼の賦の中には、それを窺わせてくれるものがある。すなわち、「寡婦の賦」(『文選』卷十六)がそれである。その序に次のように言う。

樂安任子咸、有韜世之量。與余少而歡焉、雖兄弟之愛、無以加也。不幸弱冠而終。良友既没、何痛如之。

樂安の任子咸は、韜世の量有り。余と少くして歡し、兄弟の愛と雖も、以て加ふる無きなり。不幸 弱冠にして終る。良友 既に没す、何の痛みか之に如かん。

岳と兄弟のように付き合ってきた任子威が二十歳で死んだというところから考えて、此の賦は、陸機入洛以前の作品と推測できる。

さて此の賦は、その書き出しこそ、『詩經』に基づく語句を多く用いているが、中ごろに、葬儀が終わり昔を思い出す寡婦を描く場面では、次に示すように、そこに用いられた語句の多くが『楚辭』を踏まえたものとなっている。

時曖曖而向昏兮

時は曖曖として昏に向かひ

〔時曖曖〕…離騷

日杳杳而西匿

日は杳杳として西に匿る

〔日杳杳〕…九歎・遠逝

雀羣飛而赴楹兮

雀は羣れ飛びて楹に赴き

雞登棲而斂翼

雞は棲に登りて翼を斂む

歸空館而自伶兮

空館に歸りて自ら伶み

〔自伶〕…九辯

撫衾綯以歎息

衾綯を撫して以て歎息す

思纏綿以蒼亂兮

思ひは纏綿として以て蒼亂し

〔蒼亂〕…九辯

心摧傷以愴惻

心は摧傷して以て愴惻す

〔心摧傷〕…九章・惜誦

曜靈曄而遙邁兮

曜靈、曄きて遙く邁き

〔曜靈曄〕…遠遊

四節運而推移

四節、運りて推移す

天凝露以降霜兮

天は露を凝らし以て霜を降らし

木落葉而隕枝

木は葉を落し枝を隕す

仰神宇之寥寥兮

神宇の寥寥たるを仰ぎ

瞻靈衣之披披

靈衣の披披たるを瞻る

〔靈衣之披披〕…九歌・大司命

退幽悲於堂隅兮

退いては堂隅に幽悲し

〔幽悲〕…九歎・離世

進獨拜於牀垂

進みては牀垂に獨拜す

耳傾想於疇昔兮

耳、疇昔を傾想し

目仿佛乎平素

目、平素を仿佛す

〔仿佛〕…遠遊

これは賦の例ではあるが、詩と共通した語句を用いる賦の作品に、このような傾向のものがあるということは、潘岳の詩にも、『楚辭』に依據した作品があったことを想像させるが、残念ながらそのような詩は残されていない。

(2) 張華の詩

それでは次に、張華の詩を見てみよう。張華には「雜詩」と題する五言詩があり、『文選』卷二九に収められている。

晨度随天運

晨度 天に随ひて運り

| | |
|-------|--------------|
| 四時互相承 | 四時 互ひに相ひ承く |
| 東壁正昏中 | 東壁 正に昏に中し |
| 固陰寒節升 | 固陰 寒節升る |
| 繁霜降當夕 | 繁霜 當夕に降り |
| 悲風中夜興 | 悲風 中夜に興る |
| 朱火青無光 | 朱火も青くして光無く |
| 蘭膏坐自凝 | 蘭膏も坐に自ら凝る |
| 重衾無暖氣 | 衾を重ぬるも暖氣無く |
| 挾纈如懷冰 | 纈を挾むも氷を懷くが如し |
| 伏枕終遙昔 | 枕に伏して遙き昔を終へ |
| 寤言莫予應 | 寤言するも予に應ふる莫し |
| 永思慮崇替 | 永く思ひて崇替を慮り |
| 慨然獨撫膺 | 慨然として獨り膺を撫つ |

この詩に用いられた語句のうち、典故に據つたものとしては、以下のようなものがある。

- 〔四時互相承〕：『荀子』天論「四時代御」
- 〔東壁正昏中〕：『禮記』月令「仲冬之月、日昏東壁中」
- 〔固陰寒〕：『左氏傳』昭公四年「申豐曰、深山窮谷、固陰沍寒」
- 〔繁霜〕：『毛詩』小雅・正月「正月繁霜」
- 〔朱火青無光〕：古詩「朱火然其中、青煙隨其間」
- 〔蘭膏〕：『楚辭』招魂「蘭膏明燭華容備」
- 〔挾纈〕：『左氏傳』宣公十二年「師人多寒、王巡三軍拊而勉之、三軍之士、皆如挾纈」

續

- 〔伏枕〕：『韓詩』檜風・澤波「寤寐無爲、展轉伏枕」
- 〔寤言〕：『毛詩』衛風・考槃「獨寤寐言」
- 〔永思〕：『楚辭』九懷・匡機「永思兮內傷」
- 〔崇替〕：『國語』楚語下「君子獨居、思前世之崇替」
- 〔撫膺〕：『列子』說符「撫膺而恨」

次に、同じく『文選』卷二九に収める「情詩」二一首を見てみよう。

〔其の一〕

| | |
|-------|-----------|
| 清風動帷簾 | 清風は帷簾を動かし |
| 晨月照幽房 | 晨月は幽房を照らす |
| 佳人處遐遠 | 佳人 遐遠に處り |

| | |
|--------|---------------|
| 蘭室無容光」 | 蘭室 容光無し |
| 襟懷擁靈景 | 襟懷に靈景を擁くも |
| 輕衾覆空牀 | 輕衾は空牀を覆ふ |
| 居歡愒夜促 | 歡びに居ては夜の促きを愒み |
| 在感怨宵長 | 感に在りては宵の長きを怨む |
| 拊枕獨嘯歎 | 枕を拊でて 獨り嘯歎し |
| 感慨心内傷 | 感慨して 心は内に傷む |

此の詩は、家に残る妻が、一人旅に出ている夫のことを慕い、獨り寝のわびしさを嘆いたという内容のもので、對句が効果的に使われている。語句の典據を示せば、次の二例がある。

「蘭室」…古詩「盧家蘭室桂爲梁」
「容光」…曹植・離別詩「人遠精魂近、寤寐夢容光」

〔其の二〕

| | |
|-------|-----------------|
| 遊目四野外 | 目を四野の外に遊ばしめ |
| 逍遙獨延佇 | 逍遙して 獨り延佇す |
| 蘭蕙綠清渠 | 蘭蕙 清渠に綠り |
| 繁華蔭綠渚 | 繁華 綠渚を蔭ふ |
| 佳人不在茲 | 佳人 茲に在らず |
| 取此欲誰與 | 此を取りて誰にか與へんと欲する |
| 巢居知風寒 | 巢居は風寒を知り |
| 穴處識陰雨 | 穴處は陰雨を識る |
| 不曾遠別離 | 曾て遠く別離せずんば |
| 安知慕儔侶 | 安んぞ儔侶を慕ふを知らんや |

此の詩も「其の一」と同じく、家にあつて遠く旅に出ている夫を慕い續ける妻の心情を歌うもので、語句の典據としては、次の三例がある。

「遊目」…『楚辭』離騷「忽反顧以遊目」
「延佇」…『楚辭』離騷「結幽蘭而延佇」
「巢居く穴處く」…『春秋漢含華』「穴藏先知雨、陰暄未集、魚已噉喙、巢居之鳥、先知風、樹木搖、鳥已翔」

此の二首の詩を見ると、『楚辭』に依據した語句を用いている以外には、典故に基づく語

句を多く用いていない。鍾嶸が「巧みに文字を用い、務めて妍冶を爲す」と言い、劉勰が「筆を揺して珠を散らす」と言うのは、このように古い語句を用いないで、自己の感情をそのままに表現するために、新しい語句を用いていることをいうのであろうか。

三 入洛後の陸機の文學

(1) 陸機の文學について

入洛後の陸機の文學は、その作品を見るかぎりにおいて、それまでの『詩經』を規範とした古典的なものから（入洛以前の作品は少ないけれども）、北方文學の影響を受けながら、次第にその様相を変えていったようである。つまり、古典的な面はそれとして残しながら、華やかで軽やかな雰囲気を出すために『楚辭』の語句を作品の中に取り入れ、新しい語句を多用することによって、それまでとは違った傾向の作品を生み出していったのである。以下、このような作品を生み出した陸機の文學觀・文章觀が如何なるものであったのか、この點について、陸雲の「與平原書」を中心に述べてみたい。

此の陸雲の「與平原書」は、入洛後の陸雲が兄の陸機に宛てた書翰であり、三十五首ある書翰のうち、その殆どは二陸の死んだ太安二年（三〇三）の前、數年間に書かれたものである。

その内容は、兄弟相互の添削の過程を、具體的な作品の名を擧げて示すものであるが、時には作品の語句を實際に示しながら、陸雲が自分の意見を述べている。また、兄陸機の作品について、それを稱賛するもの、或いは不満を述べるもの、さらには前人の作品や張華ら時の文人の意見を交えて評價するものなどが、多く含まれている。これら陸機の作品に對する陸雲の批評を見てゆくことによって、陸機の抱いていた文章・文學觀を考察することができるとはどうかと考える。

此の他にも張華の文會での討論の内容や、成都王穎の文會での出來事を報告する内容のものもある。

1 陸雲「與平原書」三十五首に見られる文學觀

陸雲が兄の機に與えた三十五首の書翰「與平原書」のなかでは、しばしば文章制作に關することが述べられている。そもそも此の書翰は、その口語表現の多用からも分かるように、極めて親しい間柄の兄に對して、打ちとけた氣持ちで書かれたものであり、そこには非常に具體的に文章制作の狀況が語られているのである。今、その一首を取り上げてみよう。

雲再拜。仲宣文如兄言、實得張公力、如子桓書、亦自不乃重之。兄詩多勝其思親耳。登樓賦無乃煩感丘。其弔夷齊、辭不爲偉。兄二弔自美之。但其呵二子小工、正當以此言爲高文耳。文中有於是爾乃、於轉句誠佳、然得不用之、益快。有故不如無。又於文句中、自可不用之、便少。亦常云、四言轉句、以四句爲佳。往曾以、兄七羨回煩手而沈哀結上、兩句爲孤。今更規定、自有不應用。時期當爾、復以爲不快。故前多有所去。喜靈俯煩習均、弔誠重離、此下重得如此語爲佳。思不得其韻。願兄爲益之。謹啓。

雲 再拜。仲宣の文は兄の言の如く、實に張公の力を得たるも、子桓の書の如きは、亦た自ら乃ち之を重んぜず。兄の詩は多く其の「思親」に勝る耳。「登樓の賦」は乃ち「感丘」より煩なること無からんや。其の「弔夷齊」は、辭 偉と爲さず。兄の二弔は自ら之より美なり。但だ其の「二子を呵す」るは小しく工みにして、正當に此の言を以て高文と爲すべき耳。文中に「於是」「爾乃」有るは、轉句に於ては誠に佳なるも、然れども之を用ひざるを得ば、益々快ならん。有るは故より無きに如かず。又た文句中に於ては、自ら之を用ひざる可きは、便ち少く。亦た常に云ふ、四言の轉句は、四句を以て佳と爲すと。往曾て以へらく、兄の「七羨」の「回煩手而沈哀結」の上、兩句 孤と爲ると。今 更めて規定するに、自ら應に用ふべからざる有り。時期 當に爾るべきも、復た以て快ならずと爲す。故に前に去る所有ること多し。「喜靈」の「俯煩習均、弔誠重離」、此の下 重ねて此の如き語を得ば佳と爲らん。思ふも其の韻を得ず。願はくは兄 爲に之を益さんことを。謹啓。

(「與平原書」其十二)

すなわち、前半においては、王粲(仲宣)の詩文と兄のそれとを比較しつつ、陸雲の評價が述べられており、次いで文章制作における「轉句」についての詳細で具體的な意見が述べられている。それは、句を轉ずる際には「於是」「爾乃」といった句端の語を用いない方がよい、四言句の場合は四句で句を轉ずるべきである、といった陸雲の考え方である。またその次には、兄弟相互の具體的な添削の様子が記されている。ここに言う「七羨」と

は、兄機の作品であり、雲がそれを添削したのである。そうして「喜露」とは、弟の雲が作った賦で、その添削を兄に依頼しているのである。

このように、雲の三十五首の手紙の中には、兄弟相互の添削の様子が、具体的な作品名あるいは具体的な語句を示しつつ、繰り返し述べられている。以下、此の「與平原書」を中心として、文章制作の實態を考察しながら、そこに示されている兩者の文學觀について考えてみたい。

先ず、兄弟の間で問題にされている事柄を、

- ① 文章の表現
- ② 文章の内容
- ③ 文體

の三つの項目に分けて見てゆくことにする。その結果、彼等の抱いていた文章觀が、あらかまし把握できると思う。

① 文章表現について

文章表現に関することについては、さらに、

- a 用語
- b 句
- c 一篇の構成

の三つの項目に分けて見てゆくことにする。

I 用語について

陸雲には「南征賦」という作品があり、この「南征賦」の草稿の一部と思われるものが、「與平原書」の中にある。今これと、兄との添削を経た後の完成稿と考えられる『陸士龍文集』（四部叢刊本）所収の「南征賦」とを比較してみると、兩者の間に文字の異同の多いのが目につく。

(草稿)

命屏翳以夕降

(完成稿)

命屏翳以夕降

| | |
|---------|---------|
| 式飛廉而朝興。 | 式飛廉以朝升。 |
| 塗蒙雨而後清。 | 塗蒙雨而復清。 |
| 景帶天而先澄。 | 景帶天而光澄。 |
| 陪峻臣於彫輅。 | 陪武臣於彫軒。 |
| 列名僚於後乘。 | 列名僚於後乘。 |
| 猛將起而虎嘯。 | 猛將起而虎嘯。 |
| 商風肅其來應。 | 商飈肅其來應。 |
| 士憑勢而響駭。 | 士憑威而嚮駭。 |
| 馬噓天而景凌。 | 馬歔天而景凌。 |

此の中には、「塗」と「塗」のようにただ単に字體の違いによるもの、また「而」と「以」のようにほとんど同じように用いられるもの、あるいは「先」と「光」のように字形がよく似ているための誤りとも思えるものなどもあるが、その他の異同を見る限りにおいては、添削の過程において、用語についての細かな検討がなされていたようである。以下、陸機と陸雲の間で議論された「用語」についての問題を、

- a 新奇（從來見られなかった表現の新鮮さと、人の意表を突く発想を含む言葉）
- b 綺語（使いふるされていない、きらびやかな言葉）
- c 出語・出言（文章の要点をはっきりと表現するためのポイントとなる言葉）

の三点について、見てゆくことにする。

a 新奇

陸雲は「新奇」なる語の重要性について、兄への書翰のなかで次のように述べている。

兄頓作爾多文、而新奇乃爾。眞令人怖、不當復道作文。
 兄は頓に爾（いはやうやく）き多の文を作り、而も新奇は乃ち爾（しよ）り。眞に人をして怖れしめ、當に復た文（ま）を作るを道（い）ふべからず。
 （「與平原書」其七）

すなわち、「兄上は忽ちのうちに多くの文章を作り、しかも『新奇』な語が見られる。これでは私は頭が上がらないし、もう文章を作っているなんて言えない」というのである。

また別の書翰（其十六）では、次のようにも言っている。

作文、臨時輒自云佳、小久報、不能視。爲此故息意爾。今視所作、不謂乃極、更不自信。恐年時間、復捐棄之。徒自困苦爾。兄小加潤色、便欲可出。極不苦作文、但無新奇、而體力甚困瘁耳。

文を作り、時に臨んで輒ち自ら佳なりと云ふも、小や久しくして報ずるに、視る能はず。此の爲の故に息意する爾。今 作る所を視るに、乃ち極なりと謂はず、更に自ら信ぜず。恐らくは年時の間、復た之を捐棄されん。徒自に困苦する爾。兄 小しく潤色を加ふれば、便ち出だす可かん。極めて文を作るに苦しまざるも、但だ新奇無くして、體力 甚だ困瘁する耳。

「文章を作った時には素晴らしい出来栄であると思ったが、しばらくして兄に送ってのち更めて見てみるに、とても見られたものではなく、そのために書くのをやめてしまう。この作品も、つまらないとは思わないが、どうも自信がない。一年そこらのうちに棄てられてしまうかもしれない。ただ勞苦するばかりである。しかし、兄に少し潤色してもらえば、世に出せるであろう。私は文章を作ること是一向に苦にならないが、ただその文章に『新奇』な語が無く、體だけが疲れてしまふ」と。

どうも陸雲には、「新奇」なる語がなかなか思いつかなかつたようであるが、この點こそは、陸機の得意とするところであつたらしい。

陸機の「文賦」に、

収百世之闕文、採千載之遺韻。謝朝華於已披、啓夕秀於未振。

百世の闕文を収め、千載の遺韻を採る。朝華を已に披けるに謝り、夕秀を未だ振かざるに啓く。

と言っているのは、陸雲のいう「新奇」なる語について言っているものと思われる。また『文心雕龍』體性篇では、「新奇」について、

新奇者、擯古競今、危側趣詭者也。

新奇とは、古を擯けて今を競ひ、危側して詭に趨く者なり。

と云う。つまり「新奇」とは、これまで見られなかつた表現の新鮮さと、人々の思いもつかなかつた發想を含む言葉、というほどの意味であろうか。「文賦」に、

或藻思綺合、清麗千眠。炳若縹繡、悽若繁絃、必所擬之不殊、乃閤合乎曩篇。雖杼軸於予懷、忭佗人之先我。苟傷廉而愆義、亦雖愛而必捐。

或いは藻思綺合して、清麗千眠。炳として縹繡の若く、悽として繁絃の若きも、必ず擬

する所に殊ならず、乃ち間に曩篇に合ふことあり。予が懐に杼軸すと雖も、佗人の我に先んずるを怵る。苟に廉を傷りて義を愆れば、亦た愛すと雖も必ず捐つ。

「どんなに気に入った言葉であつても、前人と偶然に一致した場合には、残念であるが捨ててしまふ」と言うのは、それではもはや「新奇」とは言えないからであり、「新奇」なる語を求める陸機の姿勢を示している。

いま實際に、陸機の「文賦」を例に見てみると、随所に「新奇」なる語句を見ることが出来る。たとえば、

佇中區以玄覽　　中區に佇ちて以て玄覽し

頤情志於典墳　　情志を典墳に頤ふ

遵四時以歎逝　　四時に遵ひて以て逝くを歎き

瞻萬物而思紛　　萬物を瞻て思ひは紛る

悲落葉於勁秋　　落葉を勁秋に悲しみ

喜柔條於芳春　　柔條を芳春に喜ぶ

心慄慄以懷霜　　心　慄慄として以て霜を懷き

志眇眇而臨雲　　志　眇眇として雲に臨む

詠世徳之駿烈　　世徳の駿烈を詠じ

誦先人之清芬　　先人の清芬を誦す

遊文章之林府　　文章の林府に遊び

嘉麗藻之彬彬　　麗藻の彬彬たるを嘉す

慨投篇而援筆　　慨として篇を投じて筆を援り

聊宣之乎斯文　　聊か之を斯の文に宣ぶ

此の部分だけを見ても、李善が典故を擧げているものは、「玄覽」「典墳」「慄慄」「懷霜」「世徳」「彬彬」「援筆」などであり、李善が用例を擧げないものに、「歎逝」「思紛」「勁秋」「芳春」「臨雲」「駿烈」「清芬」「林府」「投篇」などがあり、これらの中でも「歎逝」「勁秋」「林府」「投篇」といった語は、恐らく陸機の造語であり、「新奇」なる語と言ふことができよう。

しかし、「新奇」な語が多いというのは、逆に言えば典故をふまえる語が少ないということにもなる。陸雲もその點について、次のように述べている。

張公昔亦云、兄新聲多之不同也。典當故爲未及。彦藏亦云爾。

張公も昔亦た云ふ、「兄の新聲　多くは之れ同じくせざるなり。典は當に故より未だ及

ばすと爲すべし」と。彦藏も亦た爾りと云ふ。

(「與平原書」其十九)

つまり、「張華や彦藏が、兄の『新聲』は、ほとんどまねることはできないが、逆に『典』なる、落ち着いた要素(典故を用いることによる内容的な落ち着きをいうのであろう)には缺けており、まだまだである、と言っている」というのであるが、これは「新聲」、すなわち「新奇」なる語が餘りに多過ぎて、かえって文章がうわついたものになっていることを指摘したものであろう。

陸機の典故技法については、劉勰も『文心雕龍』事類篇の中で次のように言っている。

陸機園葵詩云、庇足同一智、生理各萬端。夫葵能衛足、事譏鮑莊、葛藟庇根、辭自樂豫。若譬葛爲葵、則引事爲謬、若謂庇勝衛、則改事失眞。斯又不精之患。夫以子建明練、士衡沈密、而不免於謬。

陸機の「園葵の詩」に云ふ、「足を庇ふは同じく智を一にし、生理は各々萬端」と。夫れ葵の能く足を衛るは、事は鮑莊を譏り、葛藟の根を庇ふは、辭は樂豫自りす。若し葛を譬へて葵と爲せば、則ち事を引きて謬りを爲し、庇の衛に勝ると謂へば、則ち事を改めて眞を失ふ。斯れ又た不精の患なり。夫れ子建の明練、士衡の沈密を以てするも、而も謬りを免れず。

すなわち、陸機の「園葵詩」に、

庇足同一智 足を庇ふは同じく智を一にし

生理各萬端 生理は各々萬端

という句があるが、「葵」が足もとを「衛」というのは、孔子が鮑莊子を譏った時の言葉、すなわち、『左氏傳』成公十七年に、

仲尼曰、鮑莊子之知不如葵。葵猶能衛其足。

仲尼曰く、「鮑莊子の知は葵に如かず。葵すら猶ほ能く其の足を衛る」と。

とあるものであり、「葛藟」が根を「庇」というのは、同じく『左氏傳』文公七年に、

昭公將去羣公子。樂豫曰、不可。公族公室之枝葉也。若去之、則本根无所庇陰矣。葛藟猶能庇其本根。故君子以爲比。況國君乎。……

昭公 將に羣公子を去らんとす。樂豫曰く、「不可なり。公族は公室の枝葉なり。若し之を去らば、則ち本根 庇陰する所无からん。葛藟も猶ほ能く其の本根を庇ふ。故に君

子は以て比と爲す。況んや國君をや。……」。

と、樂豫が宋の昭公を諫めた時の言葉であるから、もし「葛」を譬えて「葵」にしたのであれば、典故の引き違いであるし、「庇」の方が「衛」よりもよいと考えたのならば、事實をまげてしまったことになる、と陸機が典故の用い方に軽率であったと批判している。しかし思うに、典故の用い方を誤ったというよりは、むしろ「新奇」を求める陸機が、作爲的に新しい典故の用い方をしたと考えられるのではなからうか。従来のものとは違った用い方をするこゝによって、「新奇」さを生み出そうとしたのではないかと思われる。ところが陸雲の方は、

兄園葵詩、清工。然猶復非兄詩妙者。

兄の「園葵詩」は、清工なり。然れども猶ほ復た兄の詩の妙なる者には非ず。

(「與平原書」其二五)

と、「兄の『園葵詩』は、あか抜けのした巧みな作品ではあるが、しかしそれは兄の詩の妙なるものではない」と言っている。それは恐らく劉勰の指摘しているような點について言っているのであろう。「典故」の用い方に嚴格な陸雲と、自由な用い方をする陸機との相違點を見ることが出来る。

陸雲はまた、「新綺」ということも言う。

然此文、甚自難。事同又相似、益不古。皆新綺。用此已自爲洋洋耳。

然れども此の文、甚自だ難し。事同じく又た相ひ似たるも、益々古ならず。皆な新綺なり。此を用て已自に洋洋爲る耳。

(「與平原書」其四)

「此の種の文章は、とても作り難いものである。しかし兄の(「祠堂頌」)は、使われている事柄は他の人と同じで、またよく似たものであるが、表現に古さが無く、どれも『新綺』なために立派な作品となっている」と言う。ここに言う「新綺」とは、使い古されていない綺うつくしい語のことであろう。使い古された所の無い「新」という点では「新奇」と共通しているが、「新奇」が、これまで誰も思いつかなかつたという、その珍しさに重點があるのに對し、「新綺」の方は、その色どりの美しさに重點が置かれているようである。

では次に、「綺語」に関する議論を見てみよう。

b 綺語

陸雲は、陸機の「新奇」「新綺」なる語を、高く評価しているが、その「綺語」については、

文賦甚有辭、綺語頗多、文適多體、便欲不清。

「文賦」は甚だ辭あるも、綺語頗^や多く、文は適^{あた}に體多く、便^{すなは}ち清ならざらんとす。

(「與平原書」其七)

と述べている。すなわち、「『文賦』は、表現は豊かであるが、『綺語』がいささか多く、文體(著述の體)が多すぎるのは、『清』ではないようだ」と言う。文章における「清」なる要素を重要視する陸雲にとっては、兄の「文賦」は、やや「綺語」が多過ぎたのであろう。文章にとって「綺語」は必要であると感じていた陸雲ではあるが、それが多過ぎると、かえって「清」という別の条件を缺くことになる。「綺語」は適度に用いることが、何より大切であると、雲は考えていたようである。

實際、陸機の文章には、實にきらびやかな語が多く用いられている。例えば「文賦」を例にとってみても、以下の如く多くのものが目に付く。

○播芳蕤之馥馥 發青條之森森

粲風飛而委豎 鬱雲起乎翰林

○或藻思綺合 清麗千眠

炳若緜繡 悽若繁絃

○石韞玉而山輝 水懷珠而川媚

彼榛栝之勿翦 亦蒙榮於集翠

また、先に引用した陸雲の「南征賦」の草稿に、

若疾流之繞駿沈 驚飈之靡狂塵

という句があったが、これは兄機の添削の結果、完成稿では、

若扶桑之振華葉 皓天之散朝霞

のようになっており、このような點こそは、陸機の得意とするところであった。しかし、「綺語」の多用は、なにも陸機だけに限ったことではなく、『文心雕龍』明詩篇に、

晉世羣才、稍入輕綺。

晉世の羣才、稍や輕綺に入る。

といい、同じく通變篇に、

魏晉淺而綺。

魏・晉は淺にして綺。

というように、當時の文壇においては「綺」の要素が貴ばれていたのであり、「綺語」の多用を戒める陸雲の方が、むしろ例外的な存在であったということができよう。

陸雲はまた、その文章の中心となる「出語」の重要性についても問題にしている。

c. 出語・出言

「出語」について、雲は次のように言う。

祠堂頌已得省。兄文不復稍論常佳。然了不見出語、意謂非兄文之休者。前後読兄文、一再過、便上口語。省此文、雖未大精、然了無所識。

「祠堂の頌」は已に省るを得たり。兄の文は復た稍や常に佳なりとは論ぜず。然れども了く出語を見ざるは、兄の文の休き者に非ずと意謂ふ。前後して兄の文を読むに、一再過すれば、便ち口語に上る。此の文を省るに、未だ大いには精ならずと雖も、然れども了く識る所無し。

(「與平原書」其四)

すなわち、「『祠堂の頌』を見たが、兄の文章はいつも佳いと、仮にも言うわけにはゆかない。それにしても全く『出語』が無いのは、兄の文章のよいものではない。いつもなら一・二度讀めば、すぐに覚えらるるのに、この文章は、まだ詳しく讀んだわけではないにしても、全く記憶に残らない」と言うのである。

また、「出語」と同じ意味であろうが、「出言」ということも言う。

劉氏頌極佳、但無出言耳。

「劉氏の頌」は極めて佳なるも、但だ出言無き耳。

(「與平原書」其五)

「劉氏の頌」はとても立派ではあるが、ただ「出言」が無い、という。つまり、「祠堂頌」も「劉氏頌」も、よい作品ではあるが、「出語」「出言」が見られないので、物足りぬというわけである。

この「出語」というのは、「文賦」に、

立片言而居要、乃一篇之警策。雖衆辭之有條、必待茲而效績。亮功多而累寡、故取足而不易。

片言を立てて要に居る、乃ち一篇の警策なり。衆辭の條有りとも雖も、必ず茲を待ちて績を效す。亮に功多くして累寡し、故に足るを取りて易へず。

つまり、「ちよつとしたよい言葉をポイントに置けば、その一篇の警策となり、必ず効果を上げるであろう」と言うものと、指しているのは同じであろう。

また、『文心雕龍』鎔裁篇に、

草創鴻筆、先標三準。履端於始、則設情以位體。舉正於中、則酌事以取類。歸餘於終、則撮辭以舉要。

鴻筆を草創するには、先ず三準を標す。端を始めに履めば、則ち情を設けて以て體を位す。正を中に擧ぐれば、則ち事を酌みて以て類を取る。餘を終りに歸すれば、則ち辭を撮りて以て要を擧ぐ。

と述べてあるが、この「撮辭以舉要」とは、要點を示すためにポイントとなる言葉を用いる、ということであり、すなわち「出語」と同じことを言うのであろう。要するに、その文章の要點をはっきりと表現するためのポイントとなる語が、すなわち「出語」「出言」であり、文章には、そのような「出語」がなければならぬと云うのである。これはただ単に、表現的に目立つ語というのではなく、そこに文章の流れの中での要點となる内容が含まれたものでなくてはならないようである。従つて、このような「出語」のある文章は一・二度讀めば、すぐに口遊むことができるわけで、先の「祠堂頌」は、この「出語」が無いために、全く記憶に残らないと云うのである。

Ⅱ 句について

以上の如く「語」について、陸機・陸雲それぞれに細かな配慮がなされていたようであるが、次に、句に関する意見を見てみよう。

句については、

a 對句

b 轉句

c 押韻

についてのものが見られる。

a 對句

先ず、對句に関する議論を見てみよう。添削の過程において、次のような意見が述べられている。

扇賦腹中愈首尾。發頭一而不快。言烏云龍見、如有不體。

「扇の賦」は、腹中は首尾に愈る。發頭は一なるも快ならず。「烏云」「龍見」と言ふは、體ならざる有るが如し。 (「與平原書」其七)

すなわち、「『扇の賦』は、中ごろは前後の部分よりもすぐれている。書き出しはまとまっているがあまりよくない。「烏云」「龍見」と言うのは、文章を成していないようである」と言っている。ここに言う「扇賦」とは、陸機の「羽扇賦」のことで、その中ごろに、

隱九皋以鳳鳴。九皋に隠れて以て鳳鳴き

游芳田而龍見。芳田に游んで龍見はる

という對句がある。書翰に言うように、恐らく上句の「鳳鳴」は、もとは「烏云」(「烏」は「鳥」の誤りであろう)となっていたのを、陸雲に、對句として適切ではないと指摘されて、改めたものと思われる。確かに「龍」に對して「鳥」を配したのでは、そぐわないようである。

しかし、陸機の方は、そのようなことは元來あまり氣にしていなかったらしく、例えば陸機の「文賦」には、

或虎變而獸擾。或いは虎變して獸擾し

或龍見而鳥瀾。或いは龍見して鳥瀾す

という對句がある。「虎」に對して「龍」、「獸」に對しては「鳥」と使っており、それぞれの句についてみると、「虎」に「獸」はいいとしても、「龍」に「鳥」では合わないような感じがする。しかし陸機はそれを改めていない。陸雲は完成後の作品の推敲について、それがすでに世に行なわれている作品であっても、さらに立派なものにするために、後からいろいろと手を加えていたようであるが、陸機は「文賦」の此の部分をもそのままにしているのである。組み合わせとして適切でないとと思われる「龍」と「鳥」の組み合わせも、陸機にとっては、それほど氣にならなかつたのであろう。

次には、轉句についての議論を見てみよう。

b 轉句

文章の途中で句の内容・形式を轉ずる場合の留意點として、陸雲は次のようなことを述べている。

文中有於是爾乃、於轉句誠佳、然得不用之、益快。有故不如無。又於文句中、自可不用之、便少。

文中に「於是」「爾乃」有るは、轉句に於ては誠に佳なるも、然れども之を用ひざるを得ば、益々快ならず。有るは故より無きに如かず。又た文句中に於ては、自ら之を用ひざる可きときは、便ち少く。

(「與平原書」其十二)

「文の途中で「於是」(是に於て)「爾乃」(爾して乃ち)を用いる場合、轉句の時にはよいが、使わずにすめば、さらによい。むしろ無いのがよい。文句中においては用いなくともよい場合は、省いた方がよい」というのである。一般に、句を轉ずる場合には、「於是」「爾乃」といった句端の語を用いるが、陸雲は、なるべく用いない方がよいと言う。

實際に雲の作品を見ると、その使用頻度が極めて低いことに氣付く。たとえば『文選』に収められている、陸雲とほぼ同時代の人の作品を見てみるに、潘岳の「射雉賦」は、七七二字から成る作品であるが、「于是」「爾乃」「或乃」「亦有」「若夫」「若乃」「此則」といった句端の語が、八回用いられている。また成公綏の「嘯賦」は、七八五字から成るが、「于時」「是故」「若乃」「故能」「若夫」といった語が、七回用いられている。これに比べ、ほぼ同じ長さの七六〇字から成る陸雲の「歲暮賦」は、「夫何」「于是」が一回ずつ用いられているにすぎない。もちろん、陸雲の他の作品には、比較的多く用いられているもの(「寒蟬賦」「登臺賦」)もあり、潘岳にも、それほど用いていない作品(「秋興賦」「西征賦」)もあるが、全體的にみて陸雲はあまり用いておらず、漢代の賦などが轉句ごとに「於是」「爾乃」などを使っているのに比べると、はるかにその數は少ない。

さて、それでは陸雲は、句を轉ずる際には、句端の語を全く用いないことを理想としていたのか、というに、必ずしもそうではない。それは、例えば「南征賦」の草稿には、轉句のために「羊腸轉時」(羊腸として時を轉じ)「元兵時」(元なる兵は時に)といった句端の語が用いられているからである。陸雲は、句を轉ずるための語として「於是」「爾乃」といった、言ってみれば平凡なものではなく、「羊腸轉時」「元兵時」といった、かなり特殊なものを考えていたようである。轉句の際に、このような句を用いることは極めて珍しいことで、當時の他の文人の作品を見ても、「羊腸轉時」「元兵時」といったよう

な句は見られない。しかし、雲のこの新しい試みに、兄の機は同意しかねたようで、完成稿では、「羊腸轉時」は「爾乃」と改められ、「元兵時」は削られてしまっている。そうして陸雲の他の作品を見ても、「爾乃」「是故」「而後」「於是」「于時」「若夫」「既乃」というようなごく普通のものしか見當たらぬ。恐らく「羊腸轉時」のようなものは添削の途中で、兄に削られてしまったのであろう。

また、先の書翰（「與平原書」其十二）には、續けて次のように述べる。

亦常云、四言轉句、以四句爲佳。

亦た常に云ふ、四言の轉句は、四句を以て佳と爲すと。

これは、賦においては四言句の場合は四句で轉句するのがよい、ということであり、「四字句は四句」というのが、陸雲の理想であったようである。實際に「南征賦」の草稿を見てみると、四字句は全て四句でまとめられていることが分かる。すなわち、以下の如くである。

爾乃使熊羆之士、虎虜之將。雄聲泉踊、逸氣風亮。超三軍以奔厲、賈餘勇以成壯。兆洪音於寂莫、先無聲而高唱。

元兵時、紛若屯雲、煥若積波。授教斯諭、靜言勿譁。鼙鼓隱其雲戒、萬夫翕而威和。治安步以止立、應金奏而靡戈。進總干以乘言、退揮旅而星羅。

禮既畢、歸旅將振。尋發員轉、因瀨蓋旋。若疾流之繞駿沈、驚颯之靡狂塵。

羊腸轉時、命屏翳以夕降、式飛廉而朝興。涂蒙雨而後清、景帶天而先澄。陪峻臣於彫輅、列名僚於後乘。猛將起而虎嘯、商風肅其來應。士憑勢而響駭、馬噓天而景凌。

爾して乃ち熊羆の士、虎虜の將を使はす。雄聲は泉のごとく踊き、逸氣は風のごとく亮かなり。三軍を超えて以て奔厲し、餘勇を買きて以て壯を成す。洪音を寂莫に兆し、聲無きに先んじて高唱す。

元なる兵は時に、紛として屯雲の若く、煥として積波の若し。教へを授けて斯に諡かに靜言して謹しきこと勿し。鼙鼓は隱として其れ雲のごとく戒め、萬夫は翕りて威く和らぐ。安歩を治めて以て止立し、金奏に應じて戈を靡かす。進んでは干を總べて以て乘言し、退きては旅に揮して星のごとく羅ならしむ。

禮は既に畢り、歸旅將に振へんとす。尋發員轉し、瀨に因りて蓋ひ旋る。疾流の駿沈を繞らせ、驚颯の狂塵を靡かすが若し。

羊腸として時を轉じ、屏翳に命じて以て夕に降らしめ、飛廉を式で朝に興らしむ。涂

は雨を蒙りて後に清く、景は天を帯びて先に澄む。峻臣を彫駱に陪へ、名僚を後乘に列ぬ。猛將 起ちて虎嘯し、商風 肅として其れ來り應ず。士は勢ひに憑りて響駭し、馬は天に嘘きて景を凌ぐ。

これが、陸雲の「南征賦」の草稿と思われるものの全文である。もともと此の草稿は、書き出しに「雲再拜」の三字を冠し、『陸士龍文集』では「與平原書」其六の次に収められているが、恐らく手紙に同封されて一緒に送られた草稿と思われる。さて、このなかで、冒頭の「爾乃使」を除いた以下の四句が四字句となっており（熊羆之士、虎鬪之將。雄聲泉踊、逸氣風亮）、また第二段の「元兵時」を除く以下が四字句が四句（紛若屯雲、煥若積波。授教斯謐、靜言勿譁）、さらに第三段は始めの句が三字（禮既畢）であるが、たぶんこれは一字を闕いたのであろうが、ここも四字句が四句となっている（禮既畢、歸旅將振。尋鬃員轉、因瀨蓋旋）。

陸雲はまた、四字句が二句だけで終わってしまうのは「孤」であると考えており、同じく先の書翰（「與平原書」其十二）に續けて、次のように言う。

往曾以兄七羨回煩手而沈哀結上、兩句爲孤。今更規定、自有不應用。時期當爾、復以爲不快。故前多有去。

往曾て兄の「七羨」の「回煩手而沈哀結」の上、兩句を孤と爲す。今、更めて規定するに、自ら應に用ふべからざる有り。時期 當に爾るべきも、復た以て快ならずと爲す。故に前に去る所有る多し。

「兄の『七羨』の」回煩手而沈哀結「句の上は、二句が孤立しているから省いた方がよく、文章の流れからして此の二句を使いたいであろうが、私はやはりよくないと思うので、以前から削ってきた」と。また續けて、

喜霽俯煩習均、弔誠重離、此下重得如此語爲佳。思不得其韻。願兄爲益之。

「喜霽」の「俯煩習均、弔誠重離」、此の下 重ねて此の如き語を得ば佳と爲らん。思ふも其の韻を得ず。願はくは兄 爲に之を益さんことを。

「自分の作品『喜霽賦』も、四字句が二句だけで孤立してしまっているから、さらに二句を加えて四句にすればよいと思うのだが、考えてみても適當な韻字が見つからないので教えて欲しい」と兄に頼んでいる。ところが、陸機にも適當な韻字が見つからなかったようで、『陸士龍文集』の「喜霽賦」の此の部分は、このままになっている。

陸雲の作品（賦）を見ると、四言二句が七例、六句が五例、八句が一例あるだけで、あとの二十七例は全て四言四句である。また兄陸機の作品（賦）を見ても、四言二句が三例、六句が六例、八句が一例で、残りの二十例は皆な四言四句であるところからみて、四言句は四句でまとめる、という陸雲の考え方は、陸機にも受け入れられたらしく、この点に関しては、兄弟の意見が一致しているようである。これに對し、當時の他の文人の作品には四言句が十句以上続くものがあり、例えば潘岳の作品（賦）では、四言十六句を最高に（「橘賦」）、十句以上のものが十例、成公綏などは、四言句を三十二句も続けているもの（「天地賦」）がある。

陸機は「文賦」において、

或託言於短韻、對窮跡而孤興。俯寂寞而無友、仰寥廓而莫承。譬偏絃之獨張、含清唱而靡應。

或いは言を短韻に託し、窮跡に對して孤興る。俯しては寂寞として友無く、仰いでは寥廓として承くる無し。偏絃の獨り張れるに譬へ、清唱を含んで應ずる靡し。

「句の短かいまとまりを作ると孤立してしまい、一本の絃だけで、それに共調する音が無いようだ」と述べるが、これは陸雲の、四言句を二句だけ用いると、文章の中で孤立するという考え方と相通ずるものである。

○ 押韻

句を轉ずる場合には、往々換韻が行なわれるが、その場合の押韻についても、しばしば問題にされている。

徹與察、皆不與日韻。思惟不能得。願賜此一字。

「徹」と「察」とは、皆な「日」と韻せず。思惟するも得る能はず。願はくは此の一字を賜はらん。

（「與平原書」其十七）

「徹」と「察」は、どちらも「日」と韻が合わない。考えてみても適當な韻字が思い付かないので、教えてほしい、と言う。これは陸雲の「九愍」という作品についてのもので、その文中に、

君在初之嘉惠、每成言而永曰。

怨谷風之攸歎、彌九齡而未徹。

願自獻於承間、悲黨人之造闕。
舒幽情其曷訴、卷永懷而淹恤。

とあるから、こここの「膝」「恤」のどちらかは、もとは「察」であったものを、兄に添削してもらって改めたものと思われる。ただ「徹」はそのままだになっており、恐らく兄の機にも適當な韻字が見つからなかったのか、或いは別に換えなくても、このままでよいと考えたのであろう。

このように、弟にしばしば韻に関する添削を頼まれる陸機ではあるが、『文心雕龍』聲律篇では、陸機の押韻について、次のように言う。

又詩人綜韻、率多清切。楚辭辭楚、故訛韻實繁。及張華論韻、謂士衡多楚。文賦又稱、知楚不易。可謂銜靈均之聲餘、失黃鐘之正響也。

又た詩人の韻を綜ぶるは、率ね清切多し。『楚辭』は辭楚なり。故に訛韻實に繁たり。張華の韻を論ずるに及び、士衡は楚多しと謂ふ。「文賦」も亦た稱す、「楚と知るも易へず」と。靈均の聲餘を銜み、黃鐘の正響を失すと謂ふ可きなり。

ここに張華が陸機の韻は「楚」（南方楚地の音韻）が多いと述べたというのは、「與平原書」其十五に、

張公語雲云、兄文故自楚、須作文、爲思昔所識文。

張公雲に語りて云ふ、「兄の文は故自り楚なれば、須らく文を作るには、爲に昔に識す所の文を思ふべし」と。

と述べているのによる。

ところで、此の「與平原書」其十五には、音に関する事についてやや詳しく述べてあるので、ここに引いた部分の前後を含めて見てみよう。

前登城門、意有懷。作登臺賦、極未能成。而崔君苗作之、聊復成前意、不能令佳。而羸瘁累日。猶云愈前二賦、不審兄平之云何。願小有損益一字兩字。不敢望多。音楚、願兄便定之。兄音與獻彥之屬、皆仲宣、須賦。獻與服繁。張公語雲云、兄文故自楚、須作文、爲思昔所識文。乃視兄作誄、又令結使說音耳。兄所撰、願且可付之。此有書者、更校善書。送信還。望之。謹啓。

前に城門に登り、意に懷ふこと有り。「登樓の賦」を作るも、極めて未だ成す能はず。

而るに崔君苗 之を作り、聊か復た前意を成すも、佳なら令むる能はず。而して羸瘁して日を累ぬ。猶ほ前の二賦に愈ると云ふは、兄 之を平すること云何なるかを審かにせず。願はくは小しく一字兩字を損益すること有らん。敢て多きを望まず。音は楚なれば、願はくは兄 便ち之を定せよ。兄の音は獻・彦の屬と、皆な仲宣を願ひ、賦に須む。獻と服とは繁たり。張公 雲に語りて云ふ、「兄の文は故自り楚なれば、須く文を作るには、爲に昔に識す所の文を思ふべし」と。乃ち兄の作りし誄を視て、又た結を令て音を説か使むる耳。兄の撰する所、願はくは且く之を付す可し。此に書せし者有るも、更め校せし善書なり。信を送りて還さんことを。之を望む。謹啓。

つまり、陸雲は「登臺の賦」を作りかけていて、完成させていなかったが、崔君苗がやはり「登臺の賦」を作ったのに刺激されて自分も再び手をつけたが、うまく行かないので、兄に手を入れて欲しい、というのである。それは恐らく韻字についてのことであろう。また、「兄の音は獻・彦の屬と、皆な仲宣を願ひ、賦に須む」とあることから見て、陸機は押韻に關しては、王粲の賦を参考にしていたことが分かる。さらに陸雲は、張華の忠告に従って兄が以前に作った文章を見て、それを實際に結（人名）に発音させてみるといったこともしていたようである。

先の「九愍」の例でもわかるように、雲は押韻に關してはあまり自信がなかったようで、それ故に、音に關しては神經質なほど嚴格であったのではないかと思われる。南方出身の彼にとっては、その音が「楚」であることが、非常に氣になっており、またなかなか北方の音がマスターできなかつたらしい。一方、兄の機は、洛陽に出てからは「楚」の音を残しながらも、北方出身の文人（王粲ら）の作品を参考にして、北方の音をほぼマスターしていたようである。

Ⅲ 一篇の構成

以上みてきたように、陸機・陸雲兄弟は、語や句に氣を配りながら、一篇の文章を作り上げてゆくのであるが、彼らは數百字にも及ぶ文章を、一體どのような順序で構成していたのであろうか。このことを示す資料として、次のようなものがある。

四言五言非所長、頗能作賦。爲欲作十篇許小者、以爲一分、生於愁思。

四言・五言は長ずる所に非ず、頗か能く賦を作る。爲に十篇許りの小者を作り、以て一

分と爲さんとし、愁思を生ず。

(「與平原書」其三)

これに據ると、陸雲は四言・五言の詩は苦手であるが、賦なら少しはましに作れる、と言
い、以下、その作り方を具體的に示している。つまり、先ず幾つかのまとまりを作ってお
いて、そうしてそれぞれを作品の部分として、後で一篇の作品にまとめ上げていったよう
である。また、

歳暮賦、甚欲成之、而不可自用。得此百數十字。今送。

「歳暮の賦」は、甚だ之を成さんと欲するも、而も自ら用ふ可からず。此の百數十字を
得たり。今 送る。

(「與平原書」其五)

と、「歳暮の賦」を完成させようと思うのだが、うまく出来ない。此の數百字を得たので
同封する、と言っていることから見て、凡そ百數十字くらいのまとまりを、各々の部分に
していたようである。

また、このことの傍證になり得るのが、すでに引用した「南征賦」の草稿である。これ
は恐らく、陸雲が兄に添削を依頼した際に、手紙に同封されたものと思われるが、当時は
このように、手紙に詩文を同封して、添削を依頼していたらしい。さて此の草稿であるが、
これは「南征賦」の一部分で、一九一字から成っており、先の百數十字というのとはほぼ一
致する。このように、先ず百數十字くらいのまとまりを幾つか作っておいて、後でそれを
組み立てて、一篇の作品にまとめ上げていたようである。

それでは、作品の構成についての添削の實態を、此の「南征賦」の草稿を例として見て
みよう。この篇は、さらに四つの部分から構成されている。すなわち、

- ① 戦いのようす
- ② 戦いの終わるようす
- ③ 歸還のようす
- ④ 歸還のようす(進軍のようす)

の四つの部分である。

〔草稿〕

①爾乃使熊羆之士、虎鬪之將。

雄聲泉涌、逸氣風亮。

超三軍以奔厲、賈餘勇以成壯。

兆洪音於寂莫、先無聲而高唱。

②元兵時、紛若屯雲、煥若積波。

授教斯謐、靜言勿譁。

敵鼓隱其雲戒、萬夫翕而咸和。

「治安步以止立、應金奏而靡戈。

進總干以乘言、退揮旅而星羅。

③禮既畢、歸旅將振。

尋繁員轉、因瀨蓋旋。

若疾流之繞駿沈、驚颯之靡狂塵。」

④羊腸轉時、命屏翳以夕降、式飛廉而朝興。

塗蒙雨而後清、景帶天而先澄。

陪峻臣於彫軀、列名僚於後乘。

猛將起而虎嘯、商風肅其來應。

士憑勢而響駭、馬噓天而景凌。

〔完成稿〕

④爾乃「命屏翳以夕降、式飛廉以朝升。

塗蒙雨而復清、景帶天而光澄。

陪式臣於彫軀、列名僚於後乘。

猛將起而虎嘯、商風肅其來應。

士憑威而響駭、馬歛天而景凌。」

臨川屯於廣陸、武騎被乎中陵。

……

……（五十二句省略）

①乃有「熊羆之旅、虎鬪之將。

雄聲泉涌、逸氣風亮。

超三軍以奔厲、賈餘勇而成壯。

兆洪音於寂漠、先無形而高唱。

②紛若屯雲、煥若積波。

遁陰匿景、靜言勿譁。

絕倡寂其既収、萬夫翕而咸和。

敵鼓隱而重戒、景燧暉而星羅。」

烈蒙陰而仰假、曜憑陽而登遐。

……

④の部分は③を承けて、兵士の歸還して行くようすと考えられるが、また、「羊腸として時を轉じ」て、再び進軍して行くようすともとれよう。

さて、草稿では上の段のような構成になっていたものが、兄との添削を経た後の完成稿（下段）では大きく変わってしまっている。すなわち草稿の④の部分が、完成稿では冒頭の「羊腸轉時」四字が「爾乃」と改められて①の前に置かれ、進軍のようすとして使われている。その理由を考えてみるに、此の④の部分を歸還のようすにとれば、はじめの「屏翳」「飛廉」という神々の登場が、歸還の場面としては相應しくないと考えた兄の機が、構成に手を入れて、この部分をそのまま進軍の場面に置き換えたものと思われる。というのも、従來の傳統的な文章では、「屏翳」「飛廉」という神々は、例えば『楚辭』におい

ては天上界へ昇って行く主人公の先導として、また楊雄の「羽獵賦」などにおいては、狩り場に向かう時の先導として登場するのであって、これを陸雲のように歸還の場面に使ったのでは、今までの伝統的な文章構成法と合わなくなってしまふからであろう。またこの④の部分を進軍のようすととった場合は、いったん歸還しかけて、その後、いろいろなことがあって再び進軍という複雑な筋立てが、兄の機には氣に入らなかつたのであろう。このように、話の筋が變えられた完成稿では、この④の後に、「臨川屯於廣陸、武騎被平中陵」という二句が加えられ、次の部分、すなわち出陣の儀式が行なわれる場面へと、みごとに繋がれている。

また、草稿の②の後半「治安歩以止立」から③の終わり「驚飄之靡狂塵」までの部分は完成稿ではすっかり除かれてしまっている。もっとも、完成稿の「南征賦」では、歸還のようすは述べられていないので、この部分は必然的に除かれるはずのものである。そもそも「南征賦」は、『吳書』陸抗傳注に引く『機雲別傳』に、

於時朝廷多故、機雲竝自結於成都王穎。穎用機爲平原相、雲清河內史。尋轉雲右司馬。甚見委仗。無幾而長沙王構隙、遂舉兵攻洛、以機行後將軍、督王粹牽秀等諸軍二十萬。士龍著南征賦、以美其事。

時に於いて朝廷に故多く、機・雲竝びに自ら成都王穎と結ぶ。穎は機を用て平原の相と爲し、雲を清河内史とす。尋いで雲を右司馬に轉ず。甚だ委仗せらる。幾くも無くして長沙王と隙を構へ、遂に兵を擧げて洛を攻め、機を以て後將軍と行し、王粹・牽秀等の諸軍二十萬を督せしむ。士龍は「南征の賦」を著はし、以て其の事を美す。

というように、陸機の出陣に際してのものであり、これに歸還の場面を入れることは、やはり相應しくないであろう。

また、削られてしまった部分(②の後半と③)の直前の二句、

- (a) 嚴鼓隱其雲戒
- (b) 萬夫翕而咸和

は、完成稿では、次のように四句になっている。

- (d) 絕倡寂其既収
- (b) 萬夫翕而咸和
- (a) 嚴鼓隱而重戒
- (c) 景燧曄而星羅

これを見ると明らかのように、もとの二句をそのまま利用して、(b)の句に新しく(d)の句を加えて二句とし、さらにもとは(b)の句と對を成していた(a)の句に、あらたに(c)の句を配して、もともと二句であったものを、四句にしている。句數を増添する場合には、このような方法が用いられていたのであろう。また増添された(c)の句の「星羅」という語は、先に削られてしまった部分にあった語であり、この他にも、「靡戈」「總干」「驚颯」「狂塵」といった語が、削り去られてしまわずに、完成稿の他の部分に使われている。このように陸機自身の氣に入った語、好きな言葉は、削ってしまわずに、そのまま他の部分に、ひいては他の作品に、更には自分の作品にも使っていたようである。二陸の作品の間に共通して用いられている語が非常に目につくのも、そのことによるのであろう。

ところで、「南征賦」の草稿の第四の場面、すなわち「羊腸轉時」以下の部分を、陸雲は非常に氣に入っていたようであって、兄への書翰のなかで、次のようなことを言っている。

羊腸轉時、極佳。問人皆不解、何以作此轉。雖云欲相泄、恐此正自取好耳。說之不能工。願兄試一說之。

“羊腸轉時”は、極めて佳なり。人に問ふも皆な解せず、何を以て此の轉を作るかを。相ひ泄さんと欲と云ふと雖も、此れ正自に好を取る耳なるを恐る。之を説くこと工みなる能はず。願はくは兄の試みに一たび之を説かんことを。(「與平原書」其六)

“羊腸轉時”は、大變すばらしい出来だと思つては、人に問ねてみても、誰もどうして此の轉を作ったのか分かつてくれません。自分で説明しようと思つたのですが、自分の好みの表現を使ったにすぎないかと思われて心配です。うまく説明できないので、どうか兄上から説明していただけませんか——つまり陸雲は、「羊腸轉時」以下の段落が、非常に氣に入っており、兄ならば、自分が何故このような段落を作ったのか、よく分かつているであろうから、それを説明して欲しい、というのである。そうして陸雲は、此の「羊腸轉時」以下の段落が、相當に氣に入っていたようで、自分の「九愍」という作品のなかでも、殆どそのままの形で、此の段落を用いている。陸雲の「九愍」(『陸士龍文集』卷七)は、その序に、

昔屈原放逐、而離騷之辭興。自今及古、文雅之士、莫不以其情而玩其辭、而表意焉。遂廁作者之末、而述九愍。

昔、屈原 放逐せられて、「離騷」の辭興る。今より古へに及ぶまで、文雅の士、其の情を以て其の辭を遊び、意ひを表はさざるは莫し。遂に作者の末を廁ぎて「九愍」を述

ぶ。

とあるように、屈原の意を継ぐものであり、特に『楚辭』の「九章」に倣って作られている。「修身」「涉江」「悲郢」「行吟」「紆思」「考志」「感逝」「□征」「□□」「□□」(第八章は一字目を、第九章は二字を欠く)の九章から成る陸雲の「九愍」の第八章「□征」に、先の「羊腸轉時」以下の段落が用いられているのである。すなわち、

哀時命之險薄

時命の險薄なるを哀しみ

懷斯類以結憂

斯類を懷ひて以て憂ひを結ぶ

手拊膺而永歎

手は膺を拊ちて永く歎じ

形顧景而長愁

形は景を顧みて長く愁ふ

生遺年而有盡

生の年を遺して盡くすること有り

居靜言其何須

居りて靜言して其れ何をか須めん

將輕舉以遠覽

將に輕舉して以て遠覽し

眇天路而高遊

天路に眇かにして高く遊ぶ

結垂雲之翠虬

垂雲の翠虬を結び

駕琬琰之玉輿

琬琰の玉輿に駕す

揮采旄以煙指

采旄を揮ひて以て煙指し

靡華旌而電舒

華旌を靡かせて電舒す

命日月以清天

日月に命じて以て天を清め

吾將遊乎九閼

吾 將に九閼に遊ばんとす

命屏翳以夕降

屏翳に命じて以て夕べに降り

式飛廉以朝興

飛廉を式て朝に興らしむ

塗蒙雨而後清

塗は雨を蒙りて後に清く

景貞暉而先澄

景は暉きを貞して先に澄む

陪湘妃於彫輅

湘妃を彫輅に陪へ

列漢女以後乘

漢女を後乘に列ぬ

瓊娥起而清嘯

瓊娥は起ちて清らに嘯き

神風穆其來應

神風は穆として其れ來たり應ず

駢憑雲而響駭

駢は雲に憑りて響駭し

驂嘘天而景凌

驂は天に嘘きて景を凌ぐ

| | |
|--------|-----------------|
| 望紫微以振策 | 紫微を望みて以て策を振るひ |
| 躡太階而遂升 | 大階を躡みて遂に升る |
| 飛芝蓋之翼翼 | 芝蓋の翼翼たるを飛ばし |
| 回雲車之駘駘 | 雲車の駘駘たるを回す |
| 朝總轡於扶桑 | 朝に轡を扶桑に總す |
| 夕飲馬於天津 | 夕べに馬に天津に飲ふ |
| 伐河鼓以解徵 | 河鼓を伐りて以て徵を解き |
| 迄昆崙而凱振 | 昆崙に迄りて凱振す |
| 軌凌虛而遺迹 | 軌は虚を凌ぎて迹を遺し |
| 塵蒙颯而絶輪 | 塵は颯を蒙りて輪を絶てり |
| 豈遠遊之無樂 | 豈に遠遊に之れ樂しみ無からんや |
| 懷故都而傷情 | 故都を懷ひて情を傷ましむ |
| 靡龍首以還顧 | 龍首を靡かせて以て還顧し |
| 轉瑤衡而回紫 | 瑤衡を轉じて回紫す |
| 泝凱風以流吟 | 凱風に泝りて以て流吟し |
| 悲舊邦之穢傾 | 舊邦の穢傾するを悲しむ |
| 眷南雲以興悲 | 南雲を眷みて以て悲しみを興し |
| 蒙東雨而涕零 | 東雨を蒙りて涕零す |
| 凌百川而絶踏 | 百川を凌ぎて踏を絶ち |
| 仰濯髮於崢嶸 | 仰いで髮を崢嶸に濯ふ |
| 豈沈瘁之足弭 | 豈に沈瘁の足の弭まんや |
| 將蟬蛻於長生 | 將に長生に蟬蛻せん |

「□征」の第十五句から第二十四句までの十句は、「南征賦」の「陪峻」を「湘妃」に、「名僚」を「漢女」に、「猛將」を「瓊娥」にと、内容に合うように置き換えて、ほとんどそのままの形で用いている。このように、作品を構成する一部分を、内容に合うように少しずつ語句に手を入れて、そのまま別の作品にも用いるというようなこともしていたのであろう。

一篇を構成する文章の長さについて陸雲は、あまり長くしない方がよいと考えていた。そのため、兄の文章が長すぎることに気が入らず、いくらか遠慮はしながらも、その点についてたびたび不満をもらしている。

二祖頌、甚爲高偉。雲作雖時有一佳語、見兄作、又欲成貧儉家。無緣當致兄此謙辭、又雲亦復不以苟自退耳。然意故復謂之微多。民不輟歎一句、謂可省。

「二祖の頌」は、甚だ高偉爲り。雲の作 時に一佳語有りと雖も、兄の作を見れば、又た貧儉の家と成らんと欲。當に兄に此の謙辭を致すべきに縁無く、又た雲も亦復た以て苟も自ら退かざる耳。然れども意に故より復た之を微や多しと謂ふ。「民不輟歎」の一句は、省く可しと謂ふ。
(「與平原書」其五)

「『二祖の頌』は、言うことはない立派な作品である。自分などは時々「佳語」を持ってはいるが、兄に比べると、何も持っていない貧乏人になったようだ。兄にこんな謙辭を言うべきではないし、自分も遠慮することはしないが、しかし、やはり少し長すぎるように「民不輟歎」の一句は、省いた方がよからう」。

また、次のようなことも言っている。

兄文章之高遠絶異、不可復稱言。然猶皆欲微多。但清新相接、不以此爲病耳。若復令小省、恐其妙欲不見可復稱極。不審兄由以爲爾不。

兄の文章の高遠絶異なるは、復た稱して言ふ可からず。然れども猶ほ皆な微や多からんと欲。但だ清新相ひ接すれば、此を以て病と爲さざる耳。若し復た小しく省か令めば、恐らくは其の妙 復た極と稱す可きを見ざらんと欲。兄の由ほ以て爾りと爲すや不やを審らかにせず。

「兄の文章はこの上もなく素晴らしいが、どれも少し長すぎるようだ。ただ『清新』さがあるので缺點にはなっていないが、もう少し短くすれば、他人も真似ることのできないほど立派な作品になるであらう」。

このように、弟の雲に、その文章が長すぎると指摘される陸機であるが、彼自身も「文賦」の中で、

要辭達而理舉、故無取乎冗長。

辭達して理舉がらんことを要す、故に冗長を取ること無し。

と、長ったらしい文章は冗長でよくないと言っている。ただ陸機の長さの概念と、雲のそれとは、かなりの隔たりがあったようである。「文心雕龍」才略篇においても、

陸機才欲窺深、辭務索廣。故思能入巧、而不制繁。士龍朗練、以識檢亂。故能布采鮮淨、敏於短篇。

陸機は才は深を窺はんとし、辭は廣を索めんことに務む。故に思ひは能く巧に入れども、繁を制せず。士龍は朗練にして、識を以て亂を檢す。故に能く采を布くこと鮮淨にして、短編に敏なり。

と、陸機の文章は、思考は巧みであるが繁多であり、陸雲の文章は、新鮮清淨で短編にすぐれていると、作品の長さについて、兄弟を對照的に捉えている。

陸雲はまた、具體的に作品の長さを示して、次のように述べる。

有作文唯尚多、而家多猪羊之徒。作蟬賦二千餘言、隱士賦三千餘言。既無藻偉體、都自不似事。文章實自不當多。

文を作るは唯だ多きを尚ぶこと有るのみにして、家に猪羊の徒多し。「蟬の賦」二千餘言、「隱士の賦」三千餘言を作る。既に藻偉の體無く、都自て事に似ず。文章は實自に當に多かるべからず。

(「與平原書」其二一)

「文章はただ長ければいいという文章家が多く、二千字・三千字もある作品を作っている。こうなると『藻偉』(飾りたてた美しさ)が無いばかりでなく、賦とは思えないものになってしまう。文章は本當に長くないのがいい」と言うのである。實際に陸雲の作品を見ても、賦で最も長いものは「南征賦」の七二二字であり、他の作品はどれも五百字前後のものばかりである。ところが、例えば『文選』に収められる陸機の「文賦」は一五五〇字、潘岳の「西征賦」ともなれば、四三六六字にも及ぶ長大な作品である。陸雲としては、ただ長いだけの文章には價值を認めず、短く引き締まった文章を理想としていたようである。

② 文章の内容について

これまで、陸雲の「與平原書」を中心として、文章表現に見られる陸機・陸雲の文學觀を考察してきたが、ここでは文章の「清」と「情」に關する兩者の意見を窺ってみることにする。

I 文章における「清」

陸雲は、兄の作品について、しばしば「清」のつく語を用いて批評を下している。すなわち、

○省述思賦、流深情至言、實爲清妙、恐故復未得爲兄賦之最。

「述思の賦」を省るに、深情至言を流し、實に清妙爲るも、恐らくは故より復た未だ兄の賦の最爲るを得ざらん。

(「與平原書」其七)

○弔蔡君、清妙不可言。

「弔蔡君」は、清妙言ふ可からず。

(「與平原書」其八)

○漏賦、可謂清工。

「漏の賦」は、清工と謂ふ可し。

(「與平原書」其七)

○兄園葵詩、清工。

兄の「園葵の詩」は、清工なり。

(「與平原書」其二五)

○丞相贊云披結散紛辭中原、不清利。

「丞相の贊」に、披結散紛して中原を辭するを云ふは、清利ならず。

(「與平原書」其八)

○兄丞相箴小多、不如女史清約耳。

兄の「丞相の箴」は小しく多く、「女史」の清約なるに如かざる耳。

(「與平原書」其二二)

これらの例を見ると、陸雲は「清」ということを、文章の、主として表現についての必要條件として考えていたようである。「清」なる文章について、雲は次のように言う。

雲今意視文、乃好清省、欲無以尚。意之至此、乃出自然。張公在者必罷、必復以此見調。

雲は今、意に文を視るに乃ち清省を好み、以て尚ふること無からんと欲す。意の此に至るや、乃ち自然に出づ。張公、在せば、必ず罷めんも、必ず復た此を以て調め見れん。

(「與平原書」其十一)

すなわち、雲は「清省」なる文章、言い換えれば「繁」でないものを理想としており、そうして「清省」ということを心掛けておれば、自然な文章ができるのだと言う。「もし、張華が生きていたならば、そのような文章を否定するであろうが、同時にまた、その故にこそ、そのような私の文章を認めてくれるであろう」と言う。そこには陸雲の、自分の文章觀に對する自信のほどを窺うことができよう。

このように、「清省」なる文章を理想とする陸雲にとって、「綺語」が多く、文體が繁雜で長く、とかく「清」の要素に缺ける傾向のある兄機の文章は、いつも氣になっていたとみえて、先に挙げたように、常に「清」ということを持ち出して批評しているが、もう少し具體的にその批評の内容を見てみよう。

陸雲は、兄の「文の賦」について、

文賦甚有辭、綺語頗多、文適多體、便欲不清。

「文の賦」は甚だ辭有るも、綺語頗や多く、文は適に體多く、便ち清ならざらんと欲す。

(「與平原書」其七)

と、表現が豊かで「綺語」が多く、文章は敘述の「體」が煩わしくて、「清」ではない、と評している。なるほど陸機の「文賦」を見てみると、實に様々な「體」によって構成されていることに氣付く。先ず書き出しは、六字句が十四句續いた後、

其始也、

皆収視反聽、耽思傍訊。

精驚八極、心遊萬仞。

其致也、

情曖曖而彌鮮、物昭晰而互進。

傾群言之瀝液、漱六藝之芳潤。

浮天淵以安流、濯下泉而潛浸。

於是、

沈辭佛悅、若遊魚銜鉤而出重淵之深。

浮藻聯翩、若翰鳥纓鉤而墜曾雲之峻。

収百世之闕文、採千載之遺韻。

謝朝華於已披、啓夕秀於未振。

觀古今於須臾、撫四海於一瞬。

然後、

選義按部、考辭就班。

抱景者咸叩、懷響者畢彈。

或因枝以振葉、或沿波而討源。

或本隱以之顯、或求易而得難。

或虎變而獸擾、或龍見而鳥瀾。

或妥帖而易施、或詘語而不安。

と、「其始也」「其致也」「於是」「然後」の下に、それぞれ四字句、六字句、四字・十一字句、六字句、四字句、五字句と目まぐるしく變化し、その後「或」の形の六字句が八句も続く。かかる叙述の「體」の目まぐるしい變化を、陸雲は「體多」くして「清」ではないと言っているのであろう。陸雲の賦では、まずこのようなものは見られない。その賦はほとんどが四字句、六字句の繰り返しであり、形式としては単調であるが、どれも五百字前後の短編のために、その単調さを感じさせないのであろう。長大な作品であれば、「體」の變化や「新奇」な語、「綺語」によって、その長さが氣にならないようにカバーしなければならぬが、雲はそのようなことが不得手であった。

兄に對して、雲は次のようなことも言う。

兄往日文、雖多瑰鏤、至於文體、實不如今日。

兄の往日の文は、瑰鏤多しと雖も、文體に至りては、實に今日に如かず。

(「與平原書」其二)

「兄の昔の文章は、『瑰鏤』(きらびやかで目新しい)な言葉は多いのだが、敘述の體は今のものには及ばない」と言い、同じ書翰の中で、

張公文無他異、正自情省、無煩長。作文正爾、自復佳。

張公の文は他異無きも、正自に情省にして煩長無し。文を作りて正に爾らば、自ら復た佳なり。

「張華の文章は『情省』で『煩長』な所が無く、それで立派な作品たり得てゐるではないか」とも言っている。「煩長」とは、別の手紙(「與平原書」其二七)で、

尋得李寵勸封禪草。信自有才、頗多煩長耳。

尋いで李寵の「封禪を勸むる」の草を得たり。信自に才有るも、頗や煩長多きのみ。

「李寵の『封禪文』の草稿を手に入れた。本當に才の有る者であるが、少し『煩長』な所が目につく」とあるのを参考にすれば、こたことと長つたらしいことを言うのであろうが、そのような所の無い、引き締まった文章こそ、陸雲が兄機に望むものであった。

陸雲と陸機のこのような違いについては、『文心雕龍』鎔裁篇でも、

至如士衡才優、而綴辭尤繁、士龍思劣、而雅好清省。及雲之論機、忝恨其多。而稱清新相接、不以爲病。蓋崇友于耳。

士衡の才優るが如きに至つては、辭を綴ること尤も繁に、士龍は思ひ劣れども、雅より清省を好む。雲の機を論ずるに及び、「亟ば其の多きを恨むも、清新相ひ接すれば、以て病と爲さず」と稱するは、蓋し友于を崇びし耳。

と、陸機の「繁」と陸雲の「清省」とを對照的に捉えている。「亟恨其多」とは、先にも述べたように、機の作品が長過ぎることに對する不満であるが、その「多」過ぎる中にも、表現に「清新」さがあるからこそ、その缺點が補われているのだと言うのである。

Ⅱ 文章における「情」

陸雲には、「九愍」という作品がある。その序に、

昔屈原放逐、而離騷之辭興。自今及古、文雅之士、莫不以其情而玩其辭、而表意焉。遂廁作者之末、而述九愍。

昔、屈原 放逐せられて、「離騷」の辭興る。今自ら古へに及ぶまで、文雅の士、其の情を以て其の辭を遊び、意ひを表はさざるは莫し。遂に作者の末を廁ぎて「九愍」を述べ。

と言うように、この「九愍」は、屈原の意を繼ぐものであり、特に『楚辭』の「九章」に倣つて作られたものである。

さて、此の「九愍」の添削をめぐる議論が展開されている次のような書翰がある。

雲再拜。誨九愍如所勅、此自未定、然雲意自謂、故當是近所作上近者。意又謂、其與漁父相見以下盡篇爲佳。謂兄必許此條。而淵弦意呼作脱可行耳。至兄唯以此爲快。不知雲論文、何以當與兄意、作如此異。此是情文、但本少情、而頗能作汜說耳。又見作九者、多不祖宗原意、而自作一家說。唯兄說、與漁父相見、又不大委曲盡其意。雲以原流放、唯見此一人、當爲致其義。深自謂佳。願兄可試更視與漁父相見時。語亦無他異、附情而言、恐此故勝淵弦。兄意所謂不善、願疎勅其處緒。亦欲成之令出、意莫更感如惡所在。以兄文、雲猶時有所得言、雲前後所作。謹啓。

雲 再拜。「九愍」を誨へて勅す所の如きは、此れ自ら未だ定せざるも、然れども雲の意自ら謂へらく、「故より當に是れ近ごろ作る所の上近なるべき者」と。意に又た謂へらく、「其の漁父と相ひ見ふ以下の盡篇は佳爲り」と。兄 必ず此の條を許めんと謂ふ。而るに淵弦は、意 脱を作して行ふべきと呼ぶ耳。兄に至りては唯だ此を以て快と爲すのみ。雲の文を論ずるや、何を以て當に兄の意と、此の如き異を作すかを知らず。此れ

は是れ情文なるも、但だ本より情少なくして、頼る能く汜説を作す耳。又た「九」を作る者を見るに、多く原の意を祖宗とせずして、自ら一家の説を作す。唯だ兄は、「漁父」と相ひ見ふを、又た大いには委曲に其の意を盡くさず」と説くのみ。雲は原の流放せられて、唯だ此の一人に見ふのみを以て、當に其の義を致すと爲すべし。深自く佳と謂ふ。願はくは兄の試みに漁父と相ひ見ふ時を更視す可けんことを。語に亦た他異無きも、情を附して言ひたれば、恐らくは此れ故より淵弦に勝らん。兄の意 善からずと謂ふ所、願はくは其の處緒を疎勅せんことを。亦た之を成して出ださ令めんと欲するも、更に惡の在る所の如きを感じずる莫し。兄の文を以てすら、雲は猶ほ時に言ふを得る所有り。雲の前後して作る所をや。謹啓。

(「與平原書」其二十)

これに據ると、陸雲は、自分の作品はよくできており、特に「漁父と相ひ見う」こと以下、一篇の終りまでが素晴らしい、と言う。すなわち陸雲は、漁父と出合うことを言うことによつて、此の文章に「情」をもち込もうとしたのである。ところが兄の方はこれに反對で、淵弦の言うように、「漁父と相ひ見う」ことを省いた方がよい、と考えていた。ただ陸雲は、近ごろの「九」の作者は、屈原の意を祖宗とせず、勝手に一家の説を成しており、自分の作品の「漁父と相ひ見う」ことこそが、屈原の意を祖宗として「情」を込めたものである、と主張する。「情」とは、その作品の主題について、作者の懐いている心情のことであろうが、この「情」をいかに作品にもり込むかに関して、兄弟の意見が全く食い違っている。

陸雲はさらに別の書翰で、次のように言う。

九愍如兄所誨、亦殊過望。雲意自謂當不如三賦。情難。非體中所長。欲徧周流、雲意亦謂爲佳耳。然不云其愈於與漁父。

「九愍」、兄の誨ふる所の如きは、亦た殊に望みに過ぐ。雲の意 自ら謂へらく、「當に三賦に如かざるべし」と。情は難し。體中の長ずる所に非ず。徧く周流せんと欲るは、雲の意「亦た佳と爲す」と謂ふ耳。然れども其れ「漁父と」より愈るとは云はず。

(「與平原書」其十七)

つまり、「『情』は本當に難しく、自分の得意とする所ではないが、兄が徧く周流せんとす」ることだけを言い、「漁父と出合う」ことを言わないのは、それはそれでよいとは思ふが、やはり「漁父と(相ひ見う)」ことを言う方が、よりすぐれている」と言うのである。陸雲は、あくまでも「漁父と相ひ見う」という事柄を述べることによつて、その心情を表現しようとするのであるが、兄の方は、そのような事柄を言わずに心情を述べる

のが望ましいと言う。それは恐らく、事柄によらなくても、語句や表現の工夫次第で、文章に「情」をもち込むことはできると、陸機が考えるためであろう。

このように、兄弟の間で添削が繰り返されて出来上がった「九愍」であるが、陸雲は自分の意見押し通したと見え、今の『陸士龍文集』に収める「九愍」では、

遇漁父之戾止 漁父の戾止するに遇ひ

興譴言而來憩 譴言を興して來たり憩ふ

と、漁父との出合いを述べている。

陸雲が、「情言」が苦手であったことは、別の書翰にも次のようにある。

情言深至、述思自難希。

情言 深く至れば、思ひを述ぶること自ら希ひ難し。 (「與平原書」其十八)

「あまりに心情のこもった言葉ばかりを連ねると、自分の思いをそのままに述べることは難しくなるように思われる」と。しかし陸雲は、自分が不得手とする「情言」を、何とかこなそうとする努力も一方ではしている。

往日論文、先辭而後情、尚潔而不取悅澤。嘗憶兄道張公父子論文、實自欲得。今日便

欲宗其言。

往日 文を論ずるや、辭を先にして情を後にし、潔を尚びて悦澤を取らず。嘗に憶ふ(兄の

「張公父子の文を論ずるは、實自に得んと欲すと道ふ」を。今日、便ち其の言を宗ばんと欲す。 (「與平原書」其十一)

すなわち「以前は『辭』つまり表現の方を先にして、『情』は後回しにしていたが、兄が張華らの文章論を話すのを聞いて、その考えを改めた」という。言うまでもなく、適度な「情」は、文章には不可缺の要素なのであって、『文心雕龍』情采篇でも、

爲情者、要約而寫眞、爲文者、淫麗而煩濫。

情の爲にする者は、要約にして眞を寫し、文の爲にする者は、淫麗にして濫に煩ふ。

と「自分の心情を表現するための文章は、簡潔でよく眞實を寫しているが、美文のための文章は、華美にすぎて眞實を失ってしまう」と言っている。このことは陸雲自身も感じていたようで、先に挙げた書翰(「與平原書」其二十)の中でも、

此是情文、但本少情、而頗能作汎說耳。

此れは是れ情文なるも、但だ本より情少なくして、頗る能く汎説を作す耳。

「『九』體の文章は、感情を込めて書かねばならないが、自分はもともと情が少なく、こたごたと餘分な言葉を並べたてているにすぎない」と言っている。雲の志す「清省」なる文章は、「情言」を適度に用いることによって、更に理想的なものになるはずであった。しかし陸雲から言えば、兄の「情」は、あまりに「繁」でありすぎた。文章に「情」を込めすぎて表現すると、かえって「清」ではなくなってしまう。文章に「情」を込める、その加減が難しいのである。『文心雕龍』定勢篇に、

效騷命篇者、必歸艷逸之華。

騷に效ひて篇を命ずる者は、必ず艷逸の華に歸す。

と、『楚辭』に倣った作品は、「艷逸」な華やかさがあるというが、押韻においてさえかなり意識的に「楚」であった陸機の作る文章は、あまりに「情」がこもりすぎたものであったのであろう。

③ その他

これまで、「與平原書」に見られる文學觀を、文章表現と文章の内容に関わることを取り上げて見てきたが、書翰の中では此の外にも、文學についてのさまざまな問題が議論されている。以下、その中から、『吳書』の撰作と、「三都賦」「二京賦」の創作に関する議論を取り上げて見てみることにする。

I 『吳書』の撰作について

『吳書』といえは、陳壽の『三國志』の「吳書」が思い浮かぶが、實は陸機も『吳書』を書いていた。結局、陸機の『吳書』は、未完成のままに終わってしまったのであるが、ここでは、「與平原書」の中で展開される陸機と『吳書』をめぐる議論を見てみよう。

陸雲の「與平原書」の中に、次のようなものがある。

雲再拜。吳書是大業、既可垂不朽、且非兄述此、一國事遂亦失。兄諸列人、皆是名士。不知姚公足爲作傳不、可著儒林中耳。不大識唐子正事、愚謂、常侍便可連於尚書傳下。書定自難。雲少作書、至今不能令成。日見其不易。前數卷、爲時有佳語。近來意亦殊

已莫莫。猶當一定之、恐不全。此七卷、無意復望增。欲作文章、六七紙卷十分。可令皆如今所作輩、爲復差徒爾。文章誠不用多。苟卷必佳、便謂此爲足。今見、已向四卷比五十可得成。但恐胸中成痛爾。恐兄胸疾、必述作之。故計、兄凡着此之自損胸中、無緣不病。作書猶差易。讚叙亦復無幾。年歲限之。猶當小復。謹啓。

雲 再拜。『吳書』は是れ大業にして、既に不朽に垂る可く、且た兄の此れを述ぶるに非ざれば、一國の事は遂に亦た失はれん。兄の諸列の人は、皆な是れ名士なり。姚公は爲に傳を作るに足るや不やを知らざるも、「儒林」中に著す可き耳。大いには唐子正の事を識らざるも、愚 謂へらく、常侍は便ち「尚書傳」の下に連ぬ可しと。「書」は定自て難し。雲も少しく「書」を作るも、今に至るまで成ら令むる能はず。日々其の易からざるを見る。前の數卷、時に佳語有りと爲す。近來、意 亦た殊已に莫莫たり。猶ほ當に之を一定すべきも、恐らくは全からざらん。此の七卷、復た増すを望むを意ふこと無し。文章を作らんと欲すれば、六七紙にて卷は十分なり。皆な今作る所の輩の如から令む可くんば、復た差徒を爲す爾。文章は誠に多きを用ひず。苟も卷 必ず佳なれば、便ち此を謂ひて足れりと爲す。今 見るに、已に四卷に向とし五十の比ひ成すを得可し。但だ 胸中 痛を成すを恐るる爾。恐らくは兄は胸疾あるも、必ず之を述作せん。故に計るに、兄の凡そ此に着けば之れ自ら胸中を損し、縁りて病まざる無からん。書を作るは猶ほ差易にせんことを。讚叙も亦復た幾も無し。年歲 之を限る。猶ほ當に小しく復すべし。謹啓。

(「與平原書」其二四)

これに據つて、陸機が『吳書』を作っていたことが分かるが、以下、此の陸機の『吳書』について、更には二陸と陳壽との關わり等について見てみよう。

陸機が『吳書』を書くにあたっては、弟の雲の強い勧めがあつたようである。すなわち「與平原書」其九には、次のようにある。

雲再拜。誨欲定吳書。雲昔嘗已商之兄。此真不朽事、恐不與十分好書同、是出千載事。兄作、必自與昔人相去。

雲 再拜。誨へて『吳書』を定せんと欲す。雲は昔嘗て已に之を兄に商る。此れ真に不朽の事にして、恐らくは十分の好書と同じからず、是れ千載に出づる事ならん。兄の作らば、必自昔人より相ひ去らん。

これと同じことは、先にも擧げた「與平原書」其二四の中に、

吳書是大業、既可垂不朽、且非兄述此、一國事遂亦失。

『吳書』は是れ大業にして、既に不朽に垂る可く、且た兄の此を述ぶるに非ざれば、一國の事は遂に失はれん。

と記されている。つまり陸雲は、『吳書』を書くこと、言い換えれば、吳の歴史を書き残すことを不朽の大事と考えており、そうしてその仕事を成しうる人は、兄機を除いては有り得ないというのである。

また、このような陸雲の勧めによって、『吳書』を書き始めていた陸機の胸中にも、自分こそが『吳書』を書けるのだという強い自負があったものと思われる。そもそも陸機の祖父の陸遜は吳の丞相として数々の戦功を立て、吳國の中心的人物であった。この遜が、孫権の兄策の女を娶り、二人の間に生まれたのが陸抗、すなわち機の父である。陸抗も父遜と同様に吳國の中樞にあった人物であった。かかる名門の出である陸機は、當然のことながら強い誇りと自信を抱いていたはずであり、自分こそが『吳書』を書けるという氣持が機にあったであろうことは、十分に考えられる。

陸雲の兄機への書翰のなかに、陸雲が曹操の遺跡を訪問し、その状況を兄に細かく報告した次のようなものがある。

一日案行、并視曹公器物。牀薦席具、寒夏被七枚。介憤如吳憤、平天冠遠遊冠具在。嚴器方七八寸、高四寸餘、中無膏、如吳小人嚴具狀。刷膩尙可識。疎批剔齒織紵皆在。拭目黃絮二在。垢垢黑目淚所沾滲。手衣臥籠挽蒲棋局書箱亦在。奏案大小五枚書車。又作歧案、以臥視書。扇如吳扇、要扇亦在。書箱想兄識彦高書箱、甚似之。筆亦如吳筆、硯亦爾。書刀五枚。琉璃筆一枚、所希聞、景初三年七月、劉婕妤析之。見此期、復使人悵然有感。器物皆素。今送鄴宮。大尺間、數前已白其總帳及望墓田處。是清河時臺上諸奇變無方。常欲問曹公。使賊得上臺、而公但以變譎、因旋避之。若焚臺、當云何。此公似亦不能止。文昌殿北有閣道、去殿丈。內中在東。殿東便屬陳留王、內不可得見也。

一日 案行し、曹公の器物を并せ視る。牀・薦席 具はり、 寒夏の被七枚あり。介憤は吳憤の如く、平天冠・遠遊冠も具な在り。嚴器は方七八寸、高さ四寸餘、中に膏無く、吳の小人の嚴具の状の如し。刷膩する處は尙ほ識る可し。疎批・剔齒・織紵 皆な在り。拭目の黃絮二つ在り。垢垢として黒きは目涙の沾滲する所なり。手衣・臥籠・挽蒲・棋局・書箱も亦た在り。奏案大小五枚・書車あり。又た歧案を作り、以て臥して書を視る。扇は吳扇の如く、要扇も亦た在り。書箱は想ふに兄の識る彦高の書箱、甚だ之に似たり。筆も亦た吳筆の如く、硯も亦た爾り。書刀五枚あり。琉璃筆一枚、希聞する所は、景初

三年七月、劉婕妤^{りゅうせつよ}之を析^さくと。此を見る期^{とき}、復た人をして悵然^{たうぜん}として感ずる處有ら使む。器物は皆な素なり。今 鄴宮^{りやうきゆう}に送る。大尺の間、數々前^{まへ}已^まに其の總帳^{そうちやう}及び墓田を望む處を白す。是れ清河の時の臺上の諸奇變も方^{かた}ぶる無し。常に曹公に問はんと欲す。賊をして臺に上るを得さ^い使め、而して公は但だ變譎^{へんご}を以て、因^よりて之を旋避^{せんひ}するのみ。若し臺を焚^やかれれば、當^はた云何^{いみん}せん。此れ公は亦た止むる能はざるに似たりと。文昌殿の北に閣道有り、殿を去ること丈なり。内中は東に在り。殿の東は陳留王^{ちんりゆう}に屬し、内は見ること得可^いからざるなり。

（「與平原書」其一）

そもそも陸機は曹操を非常に尊敬していた。もちろんそれは曹操の文學的才能に對してのものであるが、父祖にすぐれた武人を持つ陸機には、曹操の武人としての才能に對しても尊敬の念を抱いていたものと思われる。元康八年（二九八）、著作郎になった機は、宮中の藏書の中から曹操の遺令を見つけ、「弔魏武帝文」（『文選』卷六〇）を作っている。すなわち、その序文には次のように言う。

元康八年、機始以臺郎、出補著作、遊乎祕閣、而見魏武帝遺令。愴然歎息、傷懷者久之。

元康八年、機は始めて臺郎を以て、出でて著作に補せられ、祕閣に遊んで、魏の武帝の遺令を見る。愴然として歎息し、懷を傷ましむる者 之を久しうす。

同じく序文の中で、つぎのようにも言う。

又曰、吾婕妤^{せつよ}妓人、皆著銅爵臺、於臺堂上、施八尺牀總帳、朝晡上脯糒^{ほくべい}之屬。月朝十五、輒向帳作妓。汝等時時登銅爵臺、望吾西陵墓田。

又た曰く、吾が婕妤^{せつよ}妓人、皆な銅爵臺に著^かき、臺堂の上に於て、八尺の牀 總帳を施し、朝晡^{ちうへ}に脯糒^{ほくべい}の屬を上げ。月の朝十五には、輒ち帳に向かひて妓^きを作せ。汝等 時時銅爵臺に登り、吾が西陵の墓田を望めと。

これは、曹操の遺令の一つを取り上げたものであるが、先に挙げた陸雲の「與平原書」其一中にも、

大尺間、數々前已白其總帳及望墓田處。

大尺の間、數々前已に其の總帳 及び墓田を望む處を白す。

とあり、兩者の間には、明らかに内容の上での關わりが認められる。

また、次に舉げる書翰（「與平原書」其三〇）は、その内容からみて、「與平原書」其

一の後に書かれたものようである。

近日、復案行曹公器物。取其剔齒穢一箇、今送以見兄。于道有古方泉、其銘如此。不審兄頗曾見此書種穢不。近因魯引、以問祕書中。謹啓。

近日、復た曹公の器物を案行す。其の剔齒穢一箇を取り、今送りて以て兄に見す。道に古への方泉有り、其の銘は此の如し。兄の頗か曾て此の種穢を見たるや不やを審かにせず。近ごろ魯引に因りて、以て祕書中に問ふ。謹啓。

ここで「例の爪楊枝を一本取ったので、同封して兄上にお見せしましょう」というのは、或いは陸雲からの前書で、曹操の剔齒穢（爪楊枝）の存在を知った機が、それを送るよう雲に依頼したのかもしれない。更に雲は道中にあつた方泉の銘文を書き写して、恐らく手紙に同封したのであろうが、それを機に送っている。これらは、あたかも陸機のために雲が取材に出かけているかの如くであり、陸機が作品を制作するにあたっては、このような事が行なわれていたのであろうか。ここに挙げた例の他にも、雲が兄の機に資料を提供していることは、たとえば、

頃借其釋詢二十七卷、當欲百餘紙寫之。不知兄盡有不。

頃ろ其の『釋詢』二十七卷を借りて、當に百餘紙もて之を寫さんと欲すべし。兄の盡く有するや不やを知らず。 （「與平原書」其二九）

と、雲が（曹志苗なる人物から）借りた『釋詢』二十七卷を書寫し、陸機にそれを持っていくかどうかを尋ねて（もし持っていないければ、雲が送ろうとして）いることや、また、

尋得李寵勸封禪草。信自有才、頗多煩長耳。令送。

尋いで李寵の「勸封禪」の草を得たり。信自に才有るも、頗や煩長多き耳。送ら令む。 （「与兄平原書」其二七）

と、李寵の「封禪文」の草稿を入手した雲が、それを機に送っている。

これらのことから、陸機が『吳書』を書くに際しても、當然、雲からの資料提供があつたものと想像されるが、それを裏付けるように、陸雲の書翰の中には、つぎの如き記述が見られるのである。

陳壽吳書有魏賜九錫文、及分天下文、吳書不載。又有嚴陸諸君傳。今當寫送。

陳壽の『吳書』に「魏賜九錫文」有るも、「分天下文」に及びては、『吳書』は載せず。又た嚴・陸諸君の傳有り。今、當に寫して送るべし。 （「與平原書」其九）

これは、陳壽の『呉書』には「魏賜九錫文」はあるが、「分天下文」は載せていないと、やはり『呉書』を書いていた陳壽のものについての情報を、雲が機に傳えているものである。ここに言う「魏賜九錫文」が、三國・魏の潘勗が書いた「冊魏公九錫文」のことであるとすれば、これは今の『三國志』魏書の武帝紀に収められている。「分天下文」とは、三國鼎立に関する文章であろうが、陳壽の『呉書』にはそれが無いので、兄のものには収載するようには言っているのかもしれない。また「嚴陸諸君傳」については、今の『三國志』呉書には「嚴峻傳」「陸遜傳」等があり、或いは此れを指すのかと思われる。恐らく陳壽の書いたものを陸雲が入手して、それを陸機が『呉書』を書くための資料として、書き寫して送ったのであろう。

此の他にも、

弟彦長、昔作呉事、云三十卷。可令欽求。

弟の彦長は、昔『呉事』を作り、三十巻と云ふ。欽をして 求め令むる可し。

(「與平原書」其三)

と、(令伯倫なる人物?)の(弟の彦長が、『呉事』三十巻を作ったそうですから、どうか欽(人名)に求めさせて下さいという。『呉事』とは恐らく『呉書』と同じようなものであり、それを入手して参考にして下さいというのであろう。

『呉書』を作っていたのは陸機や陳壽ばかりでなく、ここにある彦長なる人物もその一人であるが、他にもあったことが、つぎに擧げる書翰の記述によって知られる。

諸人所作、多不盡理。兄作之、公私並叙。

諸人の作る所、理を盡くさざるもの多し。兄の之を作るは、公私 並びに叙べらる。

(「與平原書」其二)

すなわち、他の人たちの作る『呉書』は、どれもいい加減であって、兄上の作るものは、公私共に書かれていてよい、というものである。また、次の如き記述もある。

可令皆如今所作輩、爲復差徒爾。

皆な今作る所の輩の如から令む可くんば、復た差徒を爲す爾。(「與平原書」其三)

すべて今つくる連中のようにすれば、つまらないものになってしまうでしょう——ここに「今所作輩」というように、時を同じくして『呉書』を作っていた文人が何人かいたことが分かる。

いずれにせよ多くの文人が『呉書』を作るなかで、やはり陸機のもののが正統であり、陸機が書いてこそ後世に傳うべき『呉書』ができる。と陸雲は考えており、陸機自身もそう思っていたに違いない。そうしてその思いの強い陸雲は、兄に對してしばしば意見を述べている。

從雲兄來作之、今略已成。甚復可惜、事少功夫、亦易耳。猶可得五十卷。

雲に従ひて兄は來ろ之を作り、今は略ぼ已に成る。甚だ復た惜しむ可きは、事 功夫少なければ、亦た易き耳。猶ほ五十卷とするを得可し。 (「與平原書」其二二)

私の勧めで兄上は近頃『呉書』をお作りになられ、今はほぼ完成しそうです。ただ残念なのは、時間をあまりかけることができないので、大作にならないのではないかとということです。さらに五十卷は欲しいところです。——つまり陸雲は、『呉書』のために十分な時間をかけて大作に仕上げたいというのである。また、次のようなことも言う。

文章誠不用多。苟卷必佳、便謂此爲足。今見、已向四卷、比五十可得成。

文章は誠に多きを用ひず。苟も卷ごとに必ず佳なれば、便ち此を謂ひて足れりと爲す。

今 見るに、已に四卷に向とし、五十の比ひ成すを得可し。 (「與平原書」卷二四)

文章は本當に長くしなくてもいいのです。一卷ごとにすばらしければ、それでいいのです。今見てみると、四卷が完成しただけで、(この調子だと、兄上が)五十歳になる頃に完成するでしょう。——『呉書』を大作にしてもらいたい陸雲にとって、思うように仕事が進まないことが、はなはだ氣掛かりであったようである。

思うに、南方文人の代表たる陸機は、北方社會のなかにあつて相當に多忙な日々を送つており、詩や文章を作る際にも十分な時間的餘裕の無いこともあつたのであろう。そのよくな時に、陸雲は兄の爲に或いは取材に赴き、或いは資料を収集し、それらを整理しては兄のもとへ送っていたのではなからうか。陸機の方は、そうして送られてきた資料を參考にして詩文を制作していたのであろう。『呉書』を書くにあたつても、このようなことが行なわれていたものと思われる。

陸雲の書翰の中に云う、

前數卷、爲時佳佳語。近來意亦殊已莫莫。猶當一定之、恐不全。

前の數卷は、時に佳語有りと爲す。近來、意 亦た殊已に莫莫たり。猶ほ當に之を一定すべきも、恐らくは全からざらん。

(「與平原書」其二四)

「前數卷」とは、此の前、兄から送られてきた『呉書』の數卷、という意であり、陸機は雲から提供された資料によって『呉書』を書き、それが少しまとまったら雲に送って手直しをさせていたようである。要するに、陸機と陸雲の關係は、あたかも今日の人氣作家と編集者のごときものであり、作家である陸機の必要に応じて、編集者たる雲は取材をし、資料を集め、そうして出来てきた原稿を整理して浄書するといったものであったのではなからうか。まさしく陸雲は、陸機の蔭にかくれて、兄のためにこまめに動いていたのである。

陸雲が、陸機の『呉書』撰作の爲の資料、殊に陳壽の『呉書』に関する資料を多く入手できたということは、陸雲と陳壽とが、比較的に近い關係にあったということを窺わせるものである。結論から言えば、二人の交わりは、張華を通じてのものであったと考えられる。

當時、張華のサロンには、二陸や陳壽の他に、成公綏・束皙・左思らの文人がいたことは、先にも述べた通りである。これら言ってみれば西晉文壇の主要な文人達が張華の知遇を得て、當時の文壇に登場したわけであるが、このような中であって、氣性が激しく、とかく表立った行動をとる陸機とは反對に、おとなしく穏やかな陸雲は、他の文人達ともうまく付き合っており、それによって多くの資料、すなわち他の文人達の作品の完成稿や草稿などを入手することができたのではなからうか。そうして手に入れた資料を兄の機に送っては、機の詩文の制作を援助していたのであろう。

さて當時、陳壽の『三国志』が、已に高い評價を得ていたということは、『晉書』陳壽傳にある次の記述によって分かる。

撰魏吳蜀三国志、凡六十五篇。時人稱其善叙事、有良吏之才。夏侯湛時著魏書、見壽所作、便壞己書而罷。張華深善之、謂壽曰、當以晉書相付耳。其爲時所重如此。

魏・吳・蜀の『三国志』を撰し、凡て六十五篇あり。時人其の善く事を叙し、良吏の才ありと稱す。夏侯湛は時に『魏書』を著し、壽の作る所を見るや、便ち己が書を壞ちて罷む。張華は深く之を善しとし、壽に謂ひて曰く、「當に『晉書』を以て相ひ付すべし」と。其の時の重んずる所と爲ること此の如し。

張華は陳壽に『三国志』のみならず『晉書』までも書かそうとし、また『魏書』を著していた夏侯湛は、陳壽のものを見て、自分の作品を破り捨てたという。しかし二陸はそうではなかった。寧ろ陸雲などは陳壽の『呉書』を見て、やはり兄の機が書かなければ、とい

う思いを強く抱いたに違いない。そうしてその思いが、陸機に勧めて『呉書』を書かしたたのであり、そのための資料集めを雲が積極的に行なっていたということも、十分に肯けることである。

さて、陸機の書いていた『呉書』がいかなるものであったのか、それを知ることができないけれども、いま『三國志』巻五二「呉書」顧譚傳注に、次のような陸機の作った「顧譚傳」が引かれている。

宣太子正位東宮、天子方隆訓導之義、妙簡俊彦、講學左右。時四方之傑畢集、太傅諸葛恪等雄奇蓋衆、而譚以清識絶倫、獨見推重。自太尉范曄、謝景、羊徽之徒、皆以秀稱其名、而悉在譚下。

宣太子 位を東宮に正すや、天子は方に訓導の義を隆んにせんとして、俊彦を妙簡し、學を左右に講ぜしむ。時に四方の傑は畢く集ひ、太傅の諸葛恪らは雄奇もて衆を蓋ひ、而して譚は清識 絶倫なるを以て、獨り推重せらる。自ら太尉の范曄・謝景・羊徽之徒は、皆な秀を以て其の名を稱せらるるも、而も悉く譚の下に在り。

おそらくこれは、陸機の書いていた『呉書』の一部なのであろう。以上、陸機の『呉書』撰作のことについて見てきたが、次に「三都賦」「二京賦」創作についての議論を取り上げてみよう。

Ⅱ 「三都賦」「二京賦」の創作について

陸機は、多くの詩とともに、『文選』に収める「歎逝賦」「文賦」を始めとした、たくさんさんの賦も残している。なかでも、「賦」のスタイルを借りて文學論を述べた其の「文の賦」は、陸機文學の集大成とでも言うべき作品として、後世の文學批評に多大の影響を与えた。

一方、弟の陸雲も、「逸民賦」「歲暮賦」「南征賦」（いずれも本集所収）といった作品を残しているが、雲にとって甚だ氣掛かりであったことは、「三都賦」「二京賦」といった、『文選』の篇目で言えば「京都」に當たる賦を、いまだ兄陸機が作っていないことであった。そこで雲は、兄に「三都賦」制作を度々勧めるのであるが、次に此の問題に關することを試みよう。

陸雲の兄陸機への書翰のなかに、次のようなものがある。

雲再拜。蔡氏所長、唯銘頌耳。銘之善者、亦復數篇、其餘平平耳。兄詩賦、自與絕域、不當稍與比較。張公昔亦云、兄新聲、多之不同也。典當故爲未及。彦藏亦云爾。又古今兄文、所未得與校者、亦惟兄所道數都賦耳。其餘雖有小勝負、大都自皆爲雌耳。張公父子亦語雲、兄文過子安、子安諸賦、兄復不皆過。其便可、可不與供論。雲謂兄作二京、必得無疑。久勸兄爲耳。又思三都世人已作是語。觸類長之、能事可見。幽通寶戲之徒、自難作。寶戲客語可爲耳。答之甚未易。東方士所不得全其高名、頗有答極。謹啓。

雲 再拜。蔡氏の長ずる所は、唯だ銘と頌のみ。銘の善き者も、亦復た數篇にして、其餘は平平たる耳。兄の詩賦は、自ら絶域に與り、當に稍かも與に比較ぶるべからず。張公も昔 亦た云ふ、「兄の新聲、多くは之れ同じくせざるなり。典は當に故より未だ及ばずと爲すべし」と。彦藏も亦た爾りと云ふ。又た古今の兄の文、未だ與校ぶるを得ざる所の者は、亦た惟だ兄の道ふ所の數都の賦のみ。其餘は小勝負有りと雖も、大都自ら皆な雌爲る耳。張公父子も亦た雲に語る、「兄の文は子安に過ぐるも、子安の諸賦は、兄は復た皆は過ぎず」と。其れ便ち可ならんも、與に論に供せざる可し。雲 謂へらく、兄が「二京」を作らば、必ず疑ひ無きを得ん。久しく兄に爲らんことを勸むる耳。又た思ふに「三都」は世人 已に是の語を作る。類に觸れて之を長ずれば、能事見はる可し。「幽通」「寶戲」の徒は、自ら作り難し。寶戲の客語は爲す可き耳。之に答ふるは甚だ未だ易からず。東方の士の全くは其の高名を得ざる所は、頗る答への極る有ればなり。謹啓。

（「與平原書」其十九）

此の書翰のなかで陸雲は、張華父子が「陸機の文章は、大體のところ成公綏（字は子安）のものよりも勝れているけれども、成公綏の賦について言えば、陸機も及ばないものもある」と言ったのを聞いて、「其れ便ち可ならんも、與に論に供せざる可し」（それはそう言えるかもしれないが、取り上げて議論すべきものでもないでしょう）と不満を漏らしているのである。成公綏と言えば後世に賦の大家として其の名を留めているが、彼の賦は當時すでに相當に高い評價を得ていたようで、陸雲の書翰のなかでも、

近日視子安賦、亦對之歎息絶工矣。兄誨又爾。故自是高手。

近日、子安の賦を視て、亦た之に對して絶工なるを歎息す。兄の誨へも又た爾り。故自り是れ高手なり。

（「與平原書」其十八）

と言っている。しかし陸雲から言わせれば、兄陸機の方が成公綏よりも勝っており、そのことを證明するためにも「二京の賦」を作つて欲しいと兄に勧めているのである。「二京賦」とは、あの張衡が作った「二京賦」のようなもの、という程の意味であろう。そうして陸雲は、「三都の賦」をすでに左思が作つてはいるが、もしも兄が作れば、これ以上のものが出来るはずである、というのである。

左思の「三都賦」といえば、張華が班固・張衡の流れを嗣ぐものであると稱賛し、洛陽の人々は競い合つてそれを傳え寫し、爲に洛陽の紙價を高めたと言われるほどに、高い評價を得ていた作品である。すなわち、『晉書』左思傳には、次のようにある。

司空張華見而歎曰、班張之流也。使讀之者盡而有餘、久而更新。於是豪貴之家、競相傳寫、洛陽爲之紙貴。

司空張華 見て歎じて曰く、「班・張の流なり。之を讀む者をして盡きて餘り有り、久しくして更に新たならしむ」と。是に於いて豪貴の家は、競ひて相ひ傳へ寫し、洛陽之が爲に紙貴し。

更に『晉書』には、これに續けて次のようなことを記している。

初陸機入洛、欲爲此賦。聞思作之、撫掌而笑、與弟雲書曰、此間有倉父、欲作三都賦。須其成、當以覆酒甕耳。及思賦出、機絶歎伏、以爲不能加也。遂輟筆焉。

初め陸機は洛に入り、此の賦を爲らんと欲す。思の之を作るを聞き、掌を撫ちて笑ひ、弟の雲に書を與へて曰く、「此の間に倉父有りて、『三都の賦』を作らんと欲す。其の成るを須ちて、當に以て酒甕を覆ふべき耳」と。思の賦の出づるに及び、機は絶だ歎伏し、以爲へらく、加ふること能はざるなりと。遂に筆を輟く。

これに據れば、陸機も入洛してから「三都賦」を作ろうとしていたらしい。左思が「三都賦」を作っていると聞いた機は、「出来たら酒甕を覆う蓋にでもしよう」と弟の雲に手紙で語っていたが、出来上がった思の作品を見て、そのすばらしさに筆をおいてしまったというのである。このようにやる氣のなくなってしまった兄陸機に對して、陸雲は兄が作れば、きつと左思以上の作品ができるに違いないとして、是非とも作つて欲しいと言っている。

そもそも二陸と左思は、ともに賈誼の「二十四友」のメンバーに名を連ねており、同時に張華のサロンにも出入りするという間柄であった。そうしていざれも亡國の徒としての悲哀を北方社會のなかで味わつてきている文人である。陸機は、左思の「三都賦」の評判が非常に高く、また自身もその作品の出来榮えを見て、ある意味では、素直に文學的評価を與えたのであろう。しかるに、陸雲の方は、それが我慢できなかつたようである。なんとかして兄に左思よりも勝れた「三都賦」を書いて欲しい、そうして南方人士の代表としての面目を躍如めて欲しいという強い思いが、陸雲にはあつたのではなからうか。普段はおとなしい陸雲も、時に意地を張るところがあつた。

さて、そうした陸雲が車茂安なる人物に宛てた興味深い書翰がある。車茂安なる人物については詳しいことは分からない。『晉書』『世說新語』などに其の名を認めることはできないが、ただ『太平御覽』卷七〇八に引く王隱『晉書』に、

車永爲廣州刺史。永子溢使工作象牙細簞、工患之。

車永、廣州刺史と爲る。永の子溢は、工をして象牙の細簞を作らしむるに、工は之を患ふ。

とあり、また『藝文類聚』卷六九に引く王隱『晉書』にも、

車永爲廣州刺史。永子溢多使工作象牙細簞、工患之、乃共舉出永。

車永、廣州刺史と爲る。永の子溢は、工をして象牙の細簞を作らしむること多く、工は之を患ひ、乃ち共に舉げて永のもとを出づ。

とあって、恐らく此の人を指すのではないかと思われる。

さて、陸雲の書翰というのは、この車永（字は茂安）からの書翰に對する返書である。先ず、車永から陸雲に宛てられた書翰を見てみよう。此の書翰は「車茂安書」として、『陸士龍文集』卷十に陸雲の書翰、更には車茂安が再び雲に返した書翰「車茂安又答書」とともに収められている。

車茂安書（車茂安の書）

永白。間因王弘季有書、怪足下無答。外甥石季甫、忽見使爲鄧令。除書近下、因令便道之職、得此罔然。老人及姉、自聞此問、三四日中、了不能復食。姉晝夜號泣、不可忍視。外甥之中、老人眞自愛恤季甫、恒在目下。卒有此役、舉家慘感、不可深言。昨全伯始有一將來。是句章人、具說、此縣既有短狐之疾、又有沙虱害人。聞此消息、倍益憂慮。如其不行、恐有節目。良爲愁憤。足下可具示土地之宜。企望來報。車永白。永白す。間ろ王弘季に因りて書有らしむるも、足下の答ふる無きを怪む。外甥の石季甫は、忽ち鄧の令と爲ら使め見る。除書は近ごろ下され、因りて便道して職に之か令めんも、此を得て罔然たり。老人及び姉は、此の問を聞きし自り、三四日中、了く復た食する能はず。姉は晝夜號泣し、視るに忍ぶ可からず。外甥の中、老人は眞自に季甫を愛恤し、恒に目下に在り。卒に此の役有り、家を舉げて慘感すること、深く言ふ可からず。昨、全伯より始めて一將の來たる有り。是れ句章の人にして、具さに説くに、此の縣は既に短狐の疾有り、又た沙虱の人を害する有りと。此の消息を聞き、倍益憂慮す。如し其れ行かずんば、恐らくは節目有らん。良に爲に愁憤す。足下、具さに土地の宜しきを示す可し。來報を企望ふ。車永白す。

「永、申し上げます。近ごろ王弘季に手紙をことづけましたのに、あなたのお返事がないので、どうしたのかと思っておりました。外甥の石季甫は、突然に鄧縣の令に任命されました。任命書は先ごろ下され、それで近道して任地に行かせようと思いましたが、このことがあってからというものの心配のあまり茫然としております。母上も姉上も、此の知らせを聞いてから、三四日は、全く食が進みません。姉は晝も夜も號泣し、とても見てはおれま

せん。外甥の中でも、母上は殊に季甫を可愛がり、いつも手許においておりました。とうとうこのような任務が決まり、家の者はみな愁い悲しんでいること、とても口では申せません。昨日、金伯からはじめて使いの者がやって來ました。その人は句章出身の人で、鄧縣には短狐の疾がある上に、さらに沙虱が人を害することなど、詳しく話してくれました。此の知らせを聞いて、いよいよ憂慮している次第です。もし赴任しなかつたら、恐らく咎めがあるでしょう。本當に心配でたまりません。あなたはどうか彼の地のよい所を詳しくお知らせ下さい。お返事をお待ちしております。車永 敬具——すなわち、車永が、外甥の鄧縣赴任にあたって、鄧縣の様子を陸雲に問ねているのである。句章は揚州會稽郡にある縣で、鄧の隣りの縣である。その出身の人が、鄧縣には短狐や沙虱（短狐も沙虱も毒虫の名）がいると言うことを聞いて、なおさら心配が募っているので、どうか更に詳しく土地の様子を知らせてくれるように、と陸雲に頼んでいる。

此の車永からの書翰に對し、陸雲は次のような返書をしたためている。

答車茂安書（車茂安に答ふる書）

雲白。前書未報、重得來況。知賢甥石季甫、當屈節令、尊堂憂灼、賢姉涕泣、上下愁勞、舉家慘慙。何可爾耶。輒爲足下、具說鄧縣土地之快。非徒浮言華艷而已、皆有實徵也。

縣去郡治、不出三日。直東而出、水陸並通。西有大湖、廣縱千頃。北有名山、南有林澤。東臨巨海、往往無涯。汎船長驅、一舉千里。北接青徐、東洞交廣。海物惟錯、不可稱名。

過長川以爲陂、燔茂草以爲田。火耕水種、不煩人力。決泄任意、高下在心。舉鋤成雲、下飯成雨。既浸既潤、隨時代序也。官無通滯之穀、民無飢乏之慮。衣食常充、倉庫恒實。榮辱既明、禮節甚備。爲君甚簡、爲民亦易。

季冬之月、牧既畢。嚴霜隕而兼葭萎、林鳥祭而麋羅設。因民所欲、順時遊獵。結官繞堙、密罔彌山。放鷹走犬、弓弩亂發。鳥不得飛、獸不得逸。眞光赫之觀、盤戲之至樂也。

若乃斷過海浦、隔截曲隈、隨潮進退、采蚌捕魚、鱸鮓赤尾、鯪齒比目、不可紀名。鱸鰒、炙蟹、烝石首、腫蟹、眞東海之俊味、肴膳之至妙也。及其蚌蛤之屬、目所希見、耳所不聞、品類數百、難可盡言也。

昔秦始皇帝、至尊至貴。前臨終南、退燕阿房。離宮別館、隨意所居。沈綸淫滑、飲馬昆明。四方奇麗、天下珍玩、無所不有、猶以不如吳會也。鄉東觀滄海、遂御六軍、南巡狩、登稽嶽、刻文石、身在鄧縣、三十餘日。

夫以帝王之尊、不憚爾行。季甫年少、受命牧民。武城之歌、足以興化。桑弧蓬矢、丈夫之志。經營四方、古人所歎、何足憂乎。且彼吏民、恭謹篤慎、敬愛官長。鞭朴不施、聲教風靡。漢吳以來、臨此縣者、無不遷變。

尊大夫賢婦上下、當爲喜慶、歌舞相送。勿爲慮也。足下急啓諭寬慰、眞說此意。吾不虛言也。停及不一。陸雲白。

雲 白す。前書、未だ報ぜざるに、重ねて來況を得たり。賢甥の石季甫の、當に鄧の令に屈すべく、尊堂 憂灼し、賢姉 涕泣し、上下 愁勞して、家を擧げて慘感するを知る。何ぞ爾る可けん耶。輒ち足下の爲に、具さに鄧縣の土地の快なるを説かん。徒に浮言華艶なる而已に非ず、皆な實徵有るなり。

縣は郡治を去ること、三日を出でず。直ちに東して出づれば、水陸 並びに通ず。西に大湖有り、廣縦なること千頃なり。北は名山有り、南に林澤有り。東は巨海に臨み、往 往 漚り無し。船を汜べて長驅すれば、一擧 千里なり。北は青・徐に接し、東は交・廣に洞る。海物は惟に錯はり、名を稱す可からず。

長川を遏めて以て陂と爲し、茂草を燔きて以て田と爲す。火耕水種、人力を煩はさず。決泄 意に任せ、高下 心に在り。鋤を擧ぐれば雲を成し、鋤を下せば雨を成す。既に浸り既に潤ひ、隨時 代序するなり。官に遭滞の穀無く、民に飢乏の慮ひ無し。衣食 常に充ち、倉庫 恒に實てり。榮辱 既に明らかに、禮節 甚だ備はれり。君爲るや甚だ簡にして、民爲るや亦た易し。

季冬の月、牧は既に畢る。嚴霜 隕りて、兼葭 萎れ、林鳥 祭られて、罽羅 設けらる。民の欲する所に因り、順時 遊獵す。罝を結んで埭に繞らせ、罔を密にして山に彌し。鷹を放ち犬を走らせ、弓弩 亂りに發す。鳥は飛ぶを得ず、獸は逸るを得ず。眞に光赫の觀、盤戲の至樂なり。

若し乃ち海浦を斷遏し、曲隈を隔截せば、潮の進退に隨ひて、蚌を採り魚を捕へ、鱸・鮑・赤尾・鰓・比目、名を紀す可からず。蟹・鱧を鱸にし、蟹・鮓を炙り、石首を蒸し、魚を臠にするは、眞に東海の俊味、肴膳の至妙なり。其の蚌蛤の屬に及びては、目に希に見る所、耳に聞かざる所にして、品類は數百あり、盡言す可きこと難きなり。

昔、秦の始皇帝は、至尊至貴なり。前みて終南に臨み、退いて阿房に燕す。離宮 別館、意の隨に居る所なり。綸を涇・渭に沈め、馬に昆明に飲ふ。四方の奇麗、天下の珍玩、有らざる所無きも、猶ほ以て呉・會に如かざるなり。郷に東のかた滄海を觀て、遂に六軍を御し、南に巡狩し、稽嶽に登り、文を石に刻み、身は鄧縣に在ること、三十餘日なり。

夫れ帝王の尊を以てすら、爾の行を憚らず。季甫は年少くして、命を牧民に受く。武城の歌、以て化を興すに足らん。桑弧蓬矢、丈夫の志あり。四方を經營するは、古人の歎く所なるも、何ぞ憂ふるに足らん乎。且つ彼の吏民は、恭謹 篤慎にして、官長を敬愛す。鞭朴 施さずして、聲教 風のごとく靡く。漢・吳以來、此の縣に臨みし者は、遷變せざるは無し。

尊大夫・賢婦・上下、當に爲に喜愛し、歌舞して相ひ送るべし。慮を爲す勿れ。足下

急ぎ諭りを啓きて寛く慰むるために、眞に此の意を説かん。吾は虚言せざるなり。停及
不一一。陸雲 白す。

「雲 申し上げます。先のお手紙にまだお返事もしておりませんが、またお便りをいた
だきました。(あなたの)甥の石季甫が、鄧縣の令で我慢されるといふことなので、御母
堂も御心配なされ、お姉様も涙を流しておられ、お宅の皆様は愁い悲しみ、家を擧げて心
を痛めておられるといふことを知りました。どうしてそのような心配されることがありま
しょうか。そこで、あなたのために、鄧縣の土地のすばらしさを詳しく申し上げることに
します。いたずらに嘘や大げさなことを言うのではなく、全て實際のことなのです」――
此のように書き出される書翰は、ここまでが言わば挨拶の部分であつて、以下、車永から
の要請に應えるべく、鄧縣の様子を事細かに述べている。

鄧縣は會稽郡の役所から、三日もかかりません。まっすぐ東に行けば、水路と陸路が
通じております。西には大きな湖があり、廣々として千頃もの廣さがあります。北には
名山があり、南には林や澤があります。東は海に面しており、どこまでも涯も無く、船
で行けば、一氣に千里の彼方に行きます。北は青州・徐州に接し、東は交州・廣州に通
じており、海産物は様々で、その名を擧げきれないほどです。

長い川をせき止めて堤とし、茂った草を焼いて田を作る。土地を焼き払って耕し、水
を入れて田を作り、人手を煩わすこともありません。水量の調節は思いのまま、水流も
自由に操れます。てぼこを擧げれば雲を成し、てぼこを下ろせば雨が降る。浸したり潤
したり、その時々に応じてやっております。役所には(國への)未納の穀物は無く、人
民は飢乏の心配もありません。衣食は常に充分で、倉庫はいつもいっぱいです。人々は
榮辱をよく知り、禮節もよく備わっています。長官となれば甚だ治めやすく、人民もま
た暮らしやすい所です。

冬十二月、牧はずでに終わり、厳しい霜が下りて兼葭はしおれ、林に棲む鳥は祭られ
て、麝羅が仕掛けられます。人民の欲するままに、その時々には狩獵が行なわれます。置
を岡に繞らせ、罔を山いっばいに張り、鷹を放ち犬を走らせ、弓や弩を亂射すれば、鳥
は飛ぶことができます、獸は逃げるできません。まことに輝かしい觀めであり、こ
の上ない樂しみです。

もし、海浦を閉ざし、隈曲を仕切つてしまえば、潮の満干のうちに、蚌を取り魚を捕
えることができ、鱧・鮪・赤尾・鰻・比目など、その名を書ききれないほどたくさんい
ます。鮑・鯨の鱗、鮓・鮓の炙り物、石首の蒸し物、鮫魚の膾は、本當に東海の珍味で
あり、この上ないすばらしい料理です。そこで採れる貝類は、めったに見られない、耳
に聞き慣れないものばかりで、何百もの種類があり、とても言い盡くせません。

その昔、秦の始皇帝は、この上なく尊貴でした。進んでは終南山に臨み、退いては阿

房宮にくつろぎました。離宮や別館に、思うままに行き、涇水・渭水に綸を垂れ、昆明湖で馬に水を飲ませました。このように四方の奇麗な品々、天下の珍玩が、すべてそろっておりましたが、それでもなお呉や會稽には及びませんでした。そのため、はじめに東で滄海を眺め、そのまま六軍を御して、南方を巡守し、會稽山に登り、石碑を建て、鄞縣に三十餘日も留まっていた。

そもそも帝王の如き尊いお方ですら、このような遠行を憚ることはなかったのです。まして季甫は年若くして、民を治める任を受けました。子游が武城の宰としてよく民を治めたように、季甫もよく人民を教化するでありましょう。天地四方に赴く、そこに丈夫の志があるのです。四方を經營するのは、古えから苦しいこととされていますが、どうして憂慮するに及びましょう。そのうえ、縣の吏民は、謹み深く眞面目で、上役を敬愛しております。鞭朴を使わなくても、簡単に教化することができましょう。漢・呉よりこのかた、此の縣に赴いた者は、必ず他縣に遷って行くのです。

このように述べた後、次のように結んでいる。——「お母様・お姉様をはじめ、お宅の方々も喜んで、歌い舞って送り出してやって下さい。心配ご無用です。あなたは急いで、皆様によく分かせ安心させるために、これらのことをお話し下さい。私は虚言は申しません。不一。陸雲 敬白」。

此の陸雲からの手紙を受け取った車永は、さっそく次のような返書を雲に送っている。

車茂安又答書（車茂安 又た答ふる書）

永白。即日得報。披省未竟、懽意踊躍。輒於母前、伏讀三周、舉家大小、豁然忘愁也。足下此書、足爲典誥。雖山海經、異物誌、二京、南都、殆不復過也。恐有其言、能無其事耳。雖爾、猶足息號泣、懽笑也。府君入後月、當西出。足下可豫至界上。吾欲先一日、與卿相見也。答不復多。車永白。

永白す。即日 報を得たり。披省して未だ竟はらざるに、懽意 踊躍す。輒ち母前に於いて、伏讀すること三周、家を擧げて大小、豁然として愁ひを忘るるなり。足下の此の書、典・誥と爲すに足る。山海經・異物誌・二京・南都と雖も、殆ど復た過ぎざるなり。其の言有りて、能く其の事無きを恐るる耳。爾りと雖も、猶ほ號泣を息め、懽喜して笑ふに足るなり。府君 後月に入らば、當に西に出づべし。足下、豫め界上に至る可し。吾 一日を先にして、卿と相ひ見はんと欲すればなり。答ふるも復た多からず。車永白す。

「永 申し上げます。さっそくお返事をいただきました。開いてまだ見終わらないのに、あまりのうれしさに踊り上がって喜びました。そこで母上の前で、三度も読みましたが、家中の者すべてが、からりと愁いを忘れてしまいました。あなたの此のお手紙は、『書經』

の（典と誥とするに足るものです。『山海經』『異物誌』『二京（の賦）』『南都（の賦）』であつても、到底これには及びません。ただ言葉だけで、実際にはそのようなことが無いのでは、ということが氣にかかるのですが、それはそれとして、號泣を止め、喜び笑うに足るものであります。府君は來月になったら、西の方に出發します。あなたはあらかじめ國境に行つておいて下さい。私は（出發の）一日前に、あなたにお會いしたいのです。お返事にもなりません。車永 敬白——陸雲からの手紙を、『山海經』『異物誌』や張衡の「二京賦」「南都賦」に喩えているのであるが、確かに雲の書翰の中程の部分は、そのまま賦と言つてもよさそうな内容のものとなつてゐる。ここで注目されるのは、車永が、張衡の「二京賦」を引き合ひに出していることである。陸雲は、先にも取り擧げたが、「與平原書」其十九の中で、

雲謂兄作二京、必得無疑。久勸兄爲耳。

雲 謂へらく、兄が「二京」を作らば、必ず疑ひ無きを得ん。久しく兄に爲らんことを勸むる耳。

と、兄陸機に「二京賦」を作つてくれるようにと、ずっと勧めていたのであつたが、陸機の方は、その要請に應えてはいないようである。車永からの問いかけに、陸雲が賦の形式を借りて返事をしたというのは、或いは陸機に對しての意思表示であつたのではないだろうか。自分でも、これくらいの文章は作れるのであるから、まして兄ならばどんなに優れた作品が出来ようか、という思いが、そこにはあつたのであろう。車永からの依頼に答えるという機會を借りての、雲の試みであつたのではなからうか。陸雲が、自分の書や車永からの返書を兄機に見せたかどうかは分からないが、かりに見せるようなことがなかつたにしても、なんらかの形で兄の耳に入るであらうことを予想しての、雲の企てであつたように感じられる。陸機の方が、小さなことに餘り拘ることがなく、あっさりとしてゐるのに對して、陸雲の方はいったん思い込んだらやり遂げなければ氣が済まないという側面を持つていたようであつて、「二京賦」に對する思い入れ、延いては左思の「三都賦」に對抗するだけの作品を、どうしても陸機に作つてもらいたいという強い思いが、陸雲をしてかかる行動を取らせたのものと思われ。

以上、見てきたように、陸雲が兄陸機に與えた書翰「與平原書」のなかでは、文章制作の過程が、實に具體的に語られており、それを詳細に検討してゆくことによつて、陸雲の抱いていた文學觀を理解することができ、さらにそれを通して兄陸機の文學觀を知ることが出来る。

そもそも此の書翰は、入洛後、それも殆ど二陸の死の前、數年間に書かれたものようである。それは、この書翰の中で取り上げられている作品に據つて知ることが出来る。そ

これは、例えば先にも取り上げた陸雲の「南征の賦」であるが、この賦には次のような序が附されている。

太安二年秋八月、姦臣羊玄之、皇甫商、敢行稱亂、凌逼乘輿、天子蒙塵于外。自秋徂冬、大將軍敷命羣后、同恤社稷。乃身統三軍、以謀國難。自義聲所及、四海之内、朔漠之表、蒸徒羸糧而請奮、胡馬歛塞而思征。四方之會、衆以百萬。軍旅之盛、威靈之著、自古已來、未之有也。粵十月、軍次于朝歌、講武治戎、以觀兵于殷墟。於是美義征之舉、壯師徒之盛、乃作南征賦、以揚匡霸之勲云爾。

太安二年秋八月、姦臣羊玄之・皇甫商は、敢て稱亂を行ひ、乘輿に凌逼し、天子は塵を外に蒙る。秋自り冬に徂くや、大將軍 命を羣后に敷き、同に社稷を恤む。乃ち身づから三軍を統べ、以て國難を謀る。義聲の及ぶ所自り、四海の内、朔漠の表、蒸徒は糧を贏みて奮はんことを請ひ、胡馬は塞を歛きて征せんことを思ふ。四方の會するもの、衆きこと百萬を以てす。軍旅の盛んなる、威靈の著る、古へ自り已來、未だ之れ有らざるなり。粵に十月、軍は朝歌に次り、武を講じ戎を治めんとし、以て兵を殷墟に觀す。是に於いて義征の舉を美とし、師徒の盛を壯として、乃ち「南征の賦」を作り、以て匡霸の勲を揚ぐと爾云ふ。

(『陸士龍文集』卷一)

「與平原書」其六のなかでは、此の賦の草稿についての議論が展開されているのであるから、此の手紙は、太安二年(三〇三)頃のものと考えられるのである。そうして「與平原書」其十では、

前日觀習、先欲作講武賦、因欲遠言大體。

前日 觀習し、先に「講武の賦」を作らんと欲し、因りて大體を遠言せんと欲す。

と言うが、これも「南征賦」の序に見える、殷墟における觀兵のことを言っているものと思われる。

此の他にも、「與平原書」其五に、

歲暮賦、甚欲成之、而不可自用。

「歲暮の賦」は、甚だ之を成さんと欲するも、而も自ら用ふ可からず。

といい、「與平原書」其三四に、

頃哀思、更力成歲暮賦。適且畢、猶未大定。

頃ろ哀思するも、更に力めて「歲暮の賦」を成す。適且に畢らんとするも、猶ほ未だ大いには定せず。

というが、やはり陸雲の「歲暮賦」(『陸士龍文集』卷一)には序が附せられていて、そ

こでは、

余祗役京邑、載離永久。永寧二年春、忝寵北郡、其夏又轉大將軍右司馬於鄴都。
余は京邑に祗役して、載^{すなは}離ること永く久し。永寧二年春、忝くも北郡を寵^めまれ、其の夏 又大將軍右司馬に鄴都に轉ず。

と述べられていることによって、此の書翰が書かれたのが永寧二年(三〇二)であることが分かる。さらに書翰のなかで、しばしば張華のことが語られていることも、此の書翰が入洛後のものであることを示すものである。さて、それでは陸雲の「與平原書」に見られる文章觀・文學觀を整理してみよう。

陸雲の文章觀のなかで先ず注目されるのは、「清」ということが、大きな位置を占めていたということである。そのことは、陸雲が、陸機の作品を批評する際に、次に挙げるように、「清」のつく言葉を多く用いていることから窺われる。

○省「述思賦」、流深情至言、實爲清妙。(其七)

○「弔蔡君」、清妙不可言。(其八)

○「漏賦」、可謂清工。(其二五)

○「丞相贊」云、披結散紛辭中原、不清利。(其八)

○兄「丞相箴」小多、不如「女史」清約耳。(其十三)

此の他にも、「清美」(其十一)、「清絶」(其十三)、「清新」(其十一)などと見え、合わせて十二回の用例を数えることができる。

また陸雲は、「清」なる文章について、次のように述べている。

雲今意視文、乃好清省、欲無以尚。意之至此、乃出自然。張公在者必罷、必復以見調。雲は今、意に文を視るに、乃ち清省を好み、以て尚^ほふること無からんと欲す。意の此に至るや、乃ち自然に出づ。張公在せば、必ず罷^やめんも、必ず復^たた此を以て調^められん。
(「與平原書」其十一)

すなわち陸雲は、「清省」なる文章を理想としており、「清省」ということ、言い換えれば、簡約で無駄のないことに心がけておれば、自然な文章ができるのであり、もし張華が生きていたならば、そのような文章を否定するであろうが、同時にまた、その故にこそ私的那种のような文章を認めてくれるであろう、と言う。このように、「清」なる文章を主張する陸雲は、兄陸機の文章に、きらびやかな「綺語」が多過ぎることが不満であった。陸雲は、陸機の「綺語」について次のように述べている。

文賦甚有辭、綺語頗多。文適多體、便欲不清。

「文賦」は甚だ辭あるも、綺語頗^や多し。文は適^{あた}に體多く、便^{すなは}ち清ならざらんと欲^す。
(「與平原書」其七)

すなわち、「文賦」は表現が豊かであるが、「綺語」がすこし多過ぎて「清」ではない、
と言う。「清」を重要視する陸雲にとって、陸機の「文賦」は「綺語」が多過ぎたのであ
ろうが、しかし、「綺」の要素を貴ぶのは、陸機に限ったことではない。『文心雕龍』明
詩篇で「晉世の羣才、稍や輕綺に入る」といい、通變篇で「魏・晉は淺にして綺」とい
うように、當時の文壇においては「綺」の要素が貴ばれていたのであって、此の點に關して
いえば、むしろ「綺語」の多用を戒める陸雲の方が、例外的な存在であったといえる。

元來、儒教を教養の基礎においた陸機の文學は、『詩經』を踏まえた古典的なものであ
った。その陸機の文學が、陸雲から「綺語」が多過ぎると言われるほどに、その趣を変え
ていったのは何故であろうか。考えられる一つの理由は、陸機が北方文學の影響を受けて、
その文學の内容を変えていったということである。言い換えれば、陸機が北方文壇の時流
に乗ろうとしていたということができるのではなからうか。しかし、いくら華やかで輕や
かな要素を強く求めていた北方文學の時流に乗ろうとしても、十分なる才能がなければそ
れはできない。更に言えば、もともと華やかな要素をいくらかでも持ち合わせていなけれ
ば、俄にその文學の傾向を変えてゆくことは困難なことと思われる。すなわち、陸機の文
學には、もとより華やかな要素をも含んでいたというのが、もう一つの理由である。入洛
に際して陸機が作った「赴洛道中」詩を四言ではなく五言で作り、さらにその中に『楚辭』
の語句を取り入れたように、陸機の文學には元來、派手な要素があり、さらにその豊かな
る才能によって、北方文壇のなかにあっても、十分に北方文人と對抗できたのであろう。

入洛後の陸機は、「新奇」なる語句をも多くその作品の中に取り込んでゆく。陸雲は次
のように言う。

兄頓作爾多文、而新奇乃爾。眞令人怖、不當復道作文。

兄は頓に爾^{いはん}き多^くの文を作り、而も新奇なること乃ち爾^{なり}。眞に人をして怖れ令め、當
に復た文を作るを道^{みち}ふべからず。
(「與平原書」其七)

すなわち、兄上は忽ちのうちに文章を作り(それは美しい表現にあふれ)、しかも「新奇」
なる語が見られる。これでは私は頭が上がらないし、もう文章を作っているなんて言えな
い、と言うのであるが、かかる「新奇」なる要素を多く取り入れた文章は、入洛後の陸機
が、北方文學が求めていた文學を具現したものであつたらう。

しかし、「新奇」さを求めるあまり、時に陸機の文學は、文學としての枠を越えてしま
うこともあつた。それは、對句をめぐる陸雲の意見のなかに見ることができる。

扇賦、腹中愈首尾。發頭一而不快。言烏云龍見、如有不體。

「扇の賦」は、腹中は首尾に愈る。發頭は一なるも快ならず。「烏云」「龍見」と言ふは、體ならざる有るが如し。

(「與平原書」其七)

これは、陸機の「羽扇賦」(『陸士衡文集』卷四)のことを言うのであり、その中ごろには、

隱九皋以鳳鳴 九皋に隠れて以て鳳鳴き

游芳田而龍見 芳田に遊びて龍見あひはる

という對句がある。陸雲が言うように、恐らく上句の「鳳鳴」は、もとは「烏云」「烏」は「鳥」の誤りであろう)となっていたのを、對句としては適切でないと指摘されて改めたものと思われる。また、典故の使い方については、劉勰が次のような指摘をしている。

陸機園葵詩云、庇足同一智、生理各萬端。夫葵能衛足、事譏鮑莊、葛藟庇根、辭自樂豫。若譬葛爲葵、則引事爲謬、若謂庇勝衛、則改事失眞。斯又不精之患。

陸機の「園葵の詩」に云ふ、「足を庇ふは同じく智を一にし、生理は各々萬端」と。夫れ葵の能く足を衛るは、事は鮑莊を譏り、葛藟の根を庇ふは、辭は樂豫自りす。若し葛を譬へて葵と爲せば、則ち事を改めて眞を失ふ。斯れ又た不精の患なり。

則ち事を引きて謬りを爲し、若し庇の衛に勝ると謂はば、

(『文心雕龍』事類篇)

これは、陸機の「園葵詩」(『藝文類聚』卷八二)に、

庇足同一智 足を庇ふは同じく智を一にし

生理各萬端 生理は各々萬端

という句について言ったものである。すなわち、「葵」が足元を「衛」というのは、孔子が鮑莊子を譏った時の言葉であり、「葛藟」が根を「庇」というのは、樂豫が宋の昭公を諫めた時の言葉であるから、もし「葛」を譬えて「葵」にしたのならば、典故の引き違いであるし、「庇」の方が「衛」よりもよいと考えたのならば、事實をまげてしまったことになる。陸機が典故の用い方に輕率であったと批判しているのである。しかしこれは、典故の用い方を誤ったというよりも、むしろ「新奇」を求める陸機が、作爲的に新しい典故の使い方をしたのではなからうか。従來のものとは違った用い方をするることによって、自分の作品に「新奇」を生み出そうと考えたのではないかと思われる。

ところが陸雲の方は、

兄園葵詩、清工。然猶復非兄詩妙者。

兄の「園葵の詩」は、清工なり。然れども猶ほ復た兄の詩の妙なる者には非ず。

と言うが、これは劉勰の指摘するような事について言ったものであろう。

さらに、「新奇」なる要素が多過ぎるといふことは、逆に言えば、典雅な趣に缺けることになってしまふ。つまり「新奇」さを追い求めるあまりに、却ってそれが缺點になってしまうこともある。その點について、陸雲は次のように言っている。

張公昔亦云、兄新聲多之不同也。典當故爲未及。彦藏亦云爾。

張公も昔亦た云ふ、「兄の新聲は、多くは之れ同じくせざるなり。典は當に故より未だ及ばずと爲すべし」と。彦藏も亦た爾りと云ふ。

(「與平原書」其十九)

つまり、「張華や彦藏が、兄の“新聲”はほとんど真似ることはできないが、逆に“典”なる落ち着きに缺けてしまい、まだまだである、と言っている」というのであるが、これは「新奇」なる語があまりに多過ぎるために、かえって文章が浮ついたものになっている點を指摘したものであろう。また、次のようなことも言う。すなわち、

文章當貴經綺、如謂後頌、語如漂漂、故謂如小勝耳。

文章は當に經綺を貴ぶべきも、後頌に謂ふが如きは、語は漂漂たるが如く、故より小勝の如しと謂ふ耳。

(「與平原書」其一七)

「文章は本當に“經綺”を貴ぶべきであるが、後者の頌などは、言葉は漂漂とただようかのようで、もとよりまあまああつた出来である」というのであるが、ここに言う“經綺”とはきちんとした美しさをいうのであつて、浮ついたところの無い美しさを陸雲は目指していたようである。

陸雲から「綺語」が多過ぎると指摘され、張華をして其の文章が「典」なる趣に缺けるものであると言わしめた陸機の文學は、まさしく北方文壇の時流を先取りせんとするものであつた。

(注)

- ① 森野繁夫「六朝漢語の研究—陸雲『平原に與うる書』の場合—」(『廣島大學教育學部紀要』第二十八號)

2 陸機の文學における北方文學の影響

元來、陸機の文學は『詩經』の内容・表現を基本とした古典的なものであり、かかる傾向は、陸機・陸雲のみならず、もとより南方文壇に共通したものであった。これに對して潘岳・張華に代表されるように、北方の文壇においては、『楚辭』の要素を多く取り入れた華やかで輕やかな文學がその主流を成していた。洛陽に入った陸機は、持ち前の豊かな文學的才能によって、北方文壇の時流に乗るべく、『楚辭』の内容・表現を自己の文學の中に取り込みながら、新たな文學を生み出していった。そのような状況の中で、陸機はそれまであまり注目していなかった故國の文學『楚辭』を再評價することになる。つまり、『北方文學が基本に置いている『楚辭』こそは我が南方の文學なのであって、それは南人の自分であつて初めて理解できるものである」という、強い自負が陸機の中に生まれてきたのである。このような南方文學についての自負は、弟の陸雲とも共通した思ひであつて、それは陸雲の兄宛ての書翰「與平原書」の中に見ることがができる。

又見作九者、多不祖宗原意、而自作一家說。

又た「九」を作る者を見るに、多く原の意を祖宗とせずして、自ら一家の說を作す。

（「與平原書」其二十）

「『九』の作者を見ても、多くの者が屈原の意を祖宗としないで、自分勝手に一家の說を成している」という陸雲の言葉には、『楚辭』の正統を繼ぐ者としての自負を見てとることがができる。また別の『楚辭』を論じた書翰では、兄に對して次のように言っている。

思兄常欲其詩文、獨未作此曹語。若消息小往、願兄可試作之。兄復不作者、恐此文獨單行千載間。

思ふに兄は常に其の詩文を作らんと欲するも、獨り未だ此曹の語を作らざるのみ。若し消息しうし小しく往ゆかば、願はくは、兄 試みに之を作る可けんことを。兄 復またた作らざるば、恐らくは此の文 獨ひとり單り千載の間に行はれん。

（「與平原書」其十三）

「兄は“此曹の語”すなわち『楚辭』風の文章だけは、まだ作っておられない。もし兄が作らなかつたら、『楚辭』だけが千載の間に行なわれるであろう」と言う。陸雲は、兄を『楚辭』の後繼者と見ていたのである。

また、陸機の押韻について、『文心雕龍』聲律篇では、

又詩人綜韻、率多清切。楚辭辭楚。故訛韻實繁。及張華論韻、謂士衡多楚。文賦亦稱、知楚不易。可謂靈均之餘聲、失黃鍾之正響也。

又た詩人の韻を綜ぶるは、率ね清切多し。『楚辭』は辭楚なり。故に訛韻實に繁たり。張華の韻を論ずるに及び、「士衡は楚多し」と謂ふ。「文賦」も亦た稱す、「楚と知るも易へず」と。靈均の餘聲を衿み、黃鍾の正響を失すと謂ふべきなり。

と言う。ここに張華が陸機の韻は「楚」、すなわち南方楚地の音韻が多いと述べたというのは、「與平原書」其十五に、

張公語雲云、兄文故自楚、須作文、爲思昔所識文。

張公雲に語りて云く、「兄の文は故自り楚なれば、須らく文を作るには、爲に昔識す所の文を思ふべし」と。

と言っているのに據る。このように、張華や劉勰によって、その音が「楚」であると評された陸機ではあるが、彼自身は、そのことをあまり気にしていないようである。恐らく陸機にも、自分こそが『楚辭』の流れを繼ぐ者であるという自負があり、韻についても、その楚音を『文心雕龍』の中で指摘されるような「訛」ったものとは思っていなかったのではなからうか。「その音が『楚』であるが、私は改めない」と、「文賦」の中で陸機に言わせたのも、そのためであろうと思われる。

これらのことから見て、陸機・陸雲兄弟には、自分たちこそが『楚辭』の後を繼ぐ者であるという強い自負があり、かかる共通の意識があつてこそ、互いに異なった文章觀を持ちながらも、相互批評を通して、文章制作に励むことができたのであらうと考えられる。そうして、このような『楚辭』の正統を繼承する者であるという強い意識は、陸機をして華麗で輕快なる文學を生み出させることになった。入洛後の陸機は、それまでの文學には見ることのできなかつたような華やかできらびやかな語句を用い、典故技法の面においても、從來のものとは異なった新しい考え方を持ち込んでいった。張華は陸機を評して、次のように言つたという。

司空張華見其文章、篇篇稱善、猶譏其作文大冶。謂曰、人之作文、患於不才、至子爲文、乃患太多也。

司空張華 其の文章を見て、篇篇善しと稱するも、猶ほ其の文を作るの大いに治なるを譏る。謂ひて曰く、「人の文を作るや、不才に患ふに、子の文を爲るに至りては、乃ちただ多きに患ふなり」と。

(『世說新語』文學篇注引『文章傳』)

「あなたが文章を作る時には、才能が多過ぎるのが却って困る」という此の張華の言葉の裏には、あまりに「新奇」なる表現を求め、「綺語」を多用する陸機に對しての、張華の率直な意見であつたと思われる。此の點については、陸雲の書翰のなかに興味深い発言がある。

古今之能爲新聲絕曲者、無又過兄。兄往日文、雖多瑰鏘、至於文體、實不如今日。間在洛、有所視。已當赦、而比更隆。以今意觀文、見此眞更以爲不盡善。文熙云、故日向人歎兄文、人終來同。殆以此爲病。張公文無他異、正自情省無煩長。作文正爾、自復佳。

古今の能く新聲絶曲を爲す者も、又た兄に過ぐる無し。兄の往日の文は、瑰鏘多しと雖も、文體に至りては、實に今日に如かず。間ろ洛に在りて、視る所有り。已に當に赦すべきに、比る更に隆なり。今の意を以て文を觀るに、此れを見れば眞に更に以て善を盡くさずと爲す。文熙云ふ、「故日 人に向かひて兄の文を歎ずるに、人 終に來同す」と。殆ど此を以て病と爲す。張公の文は他異無きも、正自に情省にして煩長無し。文を作りて正に爾らば、自ら復た佳なり。

(「與平原書」其二)

「古今の斬新で素晴らしい文章を作る者で、兄に勝る者はいない。兄の以前の文章には、さらびやかで派手な言葉は多いが、文章の叙述の體にいたっては、今のものには及ばない」と兄陸機の文章を認めていた陸雲ではあつたが、「最近になって、そのようなところが善くないと思われてきた」と言う。そうして「文熙（北方文人である馮熊の字）が兄の文章を皆に稱嘆したために、兄が文章に手を入れようとしないことが、缺點になつてゐる」と言うのである。さらに「張華の文章は、別に取り立ててすぐれた所はないが、あつさりとして煩長な所がないので、それで立派なのだ」と、すっきりとしていて、ごたごたと長つたらしい所の無い張華の文章を評價する。張華はもともと北方文壇にあって活躍した文人であり、その文學は華やかで軽やかなものであつたが、陸雲から見れば、そのような張華の文章よりも陸機の方が更に派手でさらびやかなものと思われたようである。

このように、入洛後の陸機の文學は、北方文壇の中に身を置くことによつて、北方文學の影響を受けながら、次第にその内容を変化させてゆき、却つて北方文學をリードして行くまでになつていった。しかし、二十代後半までを南方呉で過ごし、南方文壇で培われた彼の基本的な文學、すなわち『詩經』を規範とした古典的な文學は、入洛後も依然としてその文學の基調として認めることができたと思われる。東晉の孫綽（字は興公）は潘岳と陸機の文學を比較して次のように言つてゐる。

孫興公云、潘文淺而淨、陸文深而蕪。

孫興公云ふ、「潘の文は淺にして淨、陸の文は深にして蕪なり」と。

(『世說新語』文學篇)

潘岳を「淺・淨」、陸機を「深・蕪」と捉えている此の孫綽の陸機評は、陸機の文學が根底においては古典的であつて、それはそのような所の無い潘岳の文學とは對比的なものであつたことを示しているのではなからうか。そうして、入洛後も持ち續けられた陸機文學のこのような古典的な一面は、大いに北方文人の刺激となり、その文學にも影響を及ぼすこととなつたが、この點について次に述べたい。

(2) 陸機(南方)文學が北方文學に與えた影響

陸機の文學に象徴される『詩經』を規範とする古典的な南方文學は、北方文壇に如何なる影響を及ぼしたのであろうか。この點に關して、入洛後の陸機の作品と潘岳の作品、さらには陸雲の書翰に見られる張華の意見などを取り上げて考えてみたい。

入洛後の陸機の作品のうち、先ずは『文選』に収められている五言の詩を取り上げて見てみよう。陸機は入洛して五年後の元康四年(二九四)に、吳王司馬晏の郎中令となつたが、その頃に作られたのが次に擧げる「吳王郎中時從梁陳作」詩(『文選』卷二六)である。

在昔蒙嘉運

在昔 嘉運を蒙り

矯迹入崇賢

迹を矯げて崇賢に入る

假翼鳴鳳條

翼を鳴鳳の條に假り

濯足升龍淵

足を升龍の淵に濯ぐ

玄冕無醜士

玄冕 醜士無く

冶服使我妍

冶服 我をして妍なら使む

輕劍拂盤厲

輕劍 盤厲を拂ひ

長纓麗且鮮

長纓 麗にして且つ鮮なり

誰謂伏事淺

誰か謂はん 事に伏すること淺しと

契闊踰三年

契闊して三年を踰ゆ

薄言肅後命

薄か言に後命を肅み

改服就藩臣

服を改めて藩臣に就く

夙駕尋清軌

夙に駕して清軌を尋ね

遠遊越梁陳

遠遊して梁陳を越ゆ

感物多遠念　物に感じては　遠念多く
慷慨懷古人　慷慨して　古人を懷ふ

此の詩は、陸機が呉王晏に従って、梁・陳の間に遠遊した時のものであるが、機は、かつて都で愍懷太子に仕えていた華やかなころを偲びつつ、外地にいる今の自分の身の上を思っている。最終句の「古人」とは、漢代において梁の孝王に仕え、のち漢の武帝の寵愛を得て天下にその文名を轟かせた枚臯や司馬相如らの文人を指すが、彼らの境遇と今の自らの身の上とを比べた時、陸機は思わず感慨を催さずにはおれなかったであろう。此の詩で踏まえている典拠を挙げれば、次のようである。

- 〔矯迹〕…孫放・詩「矯迹步玄闈」
- 〔崇賢〕…張衡・東京賦「昭仁惠於崇賢」
- 〔鳴鳳條・升龍淵〕…應璩・與劉公幹書「鶉鷄棲翔鳳之條、龜鼈遊升龍之川」
- 〔玄冕〕…周禮「春官・司服「夫玄冕」
- 〔擊虜〕…禮記「内則「男擊革也」／『毛詩』小雅・都人士「垂帶而厲」
- 〔伏事〕…周禮「地官・大司徒「頒職事、十有二曰、服事」
- 〔契闊〕…毛詩「邶風・擊鼓「死生契闊」
- 〔薄言〕…毛詩「召南・采芣「薄言旋歸」
- 〔後命〕…左氏傳「僖公九年「宰孔謂齊侯曰、且有後命、無下拜」
- 〔藩臣〕…漢書「吳王　傳「稍失藩臣禮」
- 〔夙駕〕…毛詩「邶風・定之方中「星言夙駕」
- 〔遠遊〕…楚辭「遠遊「願輕舉而遠遊」
- 〔懷古人〕…毛詩「邶風・綠衣「我思古人、實獲我心」

典故を持つ語句を挙げるとこのようになるが、これを見ると五言詩としては『詩經』に基づく語句を比較的多く用いているようである。元來、儒教をその教養の基礎に置いていた陸機の作品には、このように『詩經』に基づく語句を多用する傾向が強いけれども、入洛後の作品には、西晉文壇の時流に乗ったと思われる作品も見出せる。

陸機と同郷の呉人である顧祕（字は公眞）は、交州の刺史となって任地に向かったが、その時（元康年間のことであろう）に陸機が贈った次のような五言詩（『文選』卷二四）がある。

贈顧交趾公眞（顧交趾公眞に贈る）
顧侯體明德　顧侯　明德を體し
清風肅已邁　清風　肅として己に邁し

發迹翼藩后 迹を發して藩后を翼け
 改授撫南裔 改め授けられて南裔を撫んぜんとす
 伐鼓五嶺表 鼓を五嶺の表に伐ち
 揚旌萬里外 旌を萬里の外に揚げんとす
 遠績不辭小 績を遠くするは小を辭せず
 立德不在大 徳を立つるは大のみに在らず
 高山安足凌 高山 安んぞ凌ぐに足らん
 巨海猶繫帶 巨海も猶ほ帶を繫すがごとし
 惆悵瞻飛駕 惆悵として飛駕を瞻め
 引領望歸旆 領を引きて歸旆を望まん

語句の典據を擧げると、以下の如くである。

「體明德」：『周易』乾卦・文言傳「君子體仁、足以長人」／『尚書』梓材「先王既勤用明德」

「清風」：胡廣・書「建鴻徳流清風」

「発迹」：楊雄・解嘲「驃騎發迹於祈連」

「南裔」：蔡邕・陳球碑「遠鎮南裔、近撫侯服」

「五嶺」：『漢書』張耳傳「秦北爲長城之役、南有五嶺之戍」

「揚旌萬里外」：『漢書』陳湯傳「龍向上疏曰、甘延壽懸旌萬里之外」

「遠績」：『左氏傳』昭公元年「劉子謂趙孟曰、子盍亦遠績禹功而大庇民焉」

「立德」：『左氏傳』襄公二十四年「大上有立德、其次立功」

「巨海猶繫帶」：古辭異博遊「衆星累累如連貝、江河四海如衣帶」

「惆悵」：『楚辭』九辯「惆悵兮而私自憐」

「引領」：『左氏傳』襄公十六年「穆叔謂晉侯曰、引領西望曰庶幾乎」

この詩には、『詩經』を踏まえた語句が全く用いられていない。これは極端な例ではあるが、陸機の五言詩には、この詩のように、『詩經』に基づく語句を殆ど用いないものが多い。いま、入洛して數年後（元康三年頃のことであろう）、陸機が從兄（『晉書』陸曄傳では從弟となつてゐる）に贈つた詩「贈從兄車騎」（『文選』卷二四）を見てみよう。

孤獸思故藪 孤獸は故の藪を思ひ
 離鳥悲舊林 離鳥は舊の林を悲しむ
 翩翩遊官子 翩翩たる遊官の子
 辛苦誰爲心 辛苦して誰が心を爲めん

| | |
|-------|-----------------|
| 髣髴谷水陽 | 髣髴たり 谷水の陽 |
| 婉孌崑山陰 | 婉孌たり 崑山に陰 |
| 管魄懷茲土 | 管魄は茲の土を懷ひ |
| 精爽若飛沈 | 精爽は飛沈するが若し |
| 寤寐靡安豫 | 寤寐に安豫する靡く |
| 願言思所欽 | 願ひて言に欽む所を思ふ |
| 感彼歸塗艱 | 彼の歸塗の艱しきを感じ |
| 使我怨慕深 | 我をして怨慕すること深からしむ |
| 安得忘歸草 | 安んぞ忘歸の草を得て |
| 言樹背與衿 | 言に背と衿とに樹ゑん |
| 斯言豈虛作 | 斯の言 豈に虚しく作さん |
| 思鳥有悲音 | 思鳥 悲しみの音有り |

典據を示せば、次のようなものがある。

- 〔故藪〕…『周禮』天官・大宰「藪牧養蕃鳥獸」
- 〔遊官〕…『漢書』淮南 王長傳「薄昭與淮南王書曰、游官事人」
- 〔髣髴〕…『楚辭』遠遊「時髣髴以遙見」
- 〔谷水陽〕…『穀梁傳』僖公二十八年「水北曰陽」
- 〔婉孌〕…班固『漢書』敘傳下「婉孌董公、惟亮天工」
- 〔管魄〕…『老子』第十章「載管魄抱一能無離乎」／『左氏傳』昭公二十五年「樂祈

曰、心之精爽是謂魂魄」

- 〔懷茲土〕…『論語』里仁篇「子曰、小人懷土」
- 〔安豫〕…張衡・東京賦「膺多福以安余」
- 〔願言〕…『毛詩』邶風・二子乘舟「願言思子」
- 〔思所欽〕…嵇康・贈秀才詩「思我所欽」
- 〔怨慕深〕…『孟子』萬章章句上「萬章問曰、舜往于田、日號泣於旻天、何謂其號泣也、孟子曰、怨慕也」

〔言樹背與衿〕…『韓詩』衛風・伯兮「焉得諠草、言樹之背」

この詩の場合も、『詩經』に基づく語句は、わずかに「願言」「言樹背與衿」の二つだけである。また、次に挙げる「爲顧彦先贈婦」詩（『文選』卷二四）の其二も、『詩經』に基づく語句は用いられていない。

爲顧彦先贈婦（顧彦先の爲に婦に贈る）——其二——
 東南有思婦 東南に思婦有り

| | |
|-------|---|
| 長歎充幽園 | 長歎 幽園 <small>いゆうえん</small> に充 <small>み</small> つ |
| 借問歎何爲 | 借問 <small>しやくもん</small> す 歎 <small>なげ</small> ずるは何 <small>た</small> の爲 <small>ため</small> ぞ |
| 佳人眇天末 | 佳人 <small>かひじん</small> 天末 <small>てんまつ</small> に眇 <small>はる</small> かなり |
| 遊官久不歸 | 遊官 <small>ゆうくわん</small> して久 <small>ひさ</small> しく歸 <small>かへ</small> らず |
| 山川脩且闊 | 山川 <small>さんせん</small> は脩 <small>なが</small> くして且 <small>かつ</small> つ闊 <small>ひろ</small> かなり |
| 形影參商乖 | 形影 <small>かたちかげ</small> は參商 <small>さんしやう</small> のごとく乖 <small>あは</small> ま |
| 音息曠不達 | 音息 <small>おんそく</small> も曠 <small>あひ</small> しく達 <small>た</small> せず |
| 離合非有常 | 離合 <small>りがふ</small> は常 <small>つね</small> 有 <small>あ</small> るに非 <small>あ</small> らず |
| 譬彼弦與括 | 彼 <small>か</small> の弦 <small>つる</small> と括 <small>くわく</small> とに譬 <small>たと</small> へらる |
| 願保金石軀 | 願 <small>ねが</small> はくは 金石 <small>きんせき</small> の軀 <small>み</small> を保 <small>たも</small> ち |
| 慰妾長飢渴 | 妾 <small>めかけ</small> が長飢渴 <small>ながうまひ</small> を慰 <small>なぐさ</small> めんことを |

此の詩の典據は、次のようである。

- 〔有思婦〕：曹植・七哀詩「上有愁思婦、悲歎有餘哀」
- 〔幽園〕：張衡・西京賦「重闈幽園」
- 〔眇天末〕：張衡・東京賦「眇天末以遠期」
- 〔遊官〕：『漢書』淮南厲王長傳「薄昭與淮南王書曰、游官事人」
- 〔形影參商乖〕：『左氏傳』昭公元年「子產曰、昔高辛氏有二子、伯曰閼、伯季曰實沈、居曠林、不相能、曰尋干戈、以相征討、后帝不臧、遷閼伯于商丘、主辰、商人是因、故辰爲商星、遷實沈于大夏、主參、唐人是因以服事夏商、其季世曰唐叔、故參爲晉星」／『法言』學行「吾不睹參辰之相比也」
- 〔離合非有常〕：『呂氏春秋』「夫萬物成則毀、合則離、離則復合、合則復離」
- 〔金石〕：古詩十九首「人生非金石、豈能長壽考」
- 〔長飢渴〕：李陵・別詩「思得瓊樹枝、以解長飢渴」

入洛後の陸機の作品には、このように『詩經』を踏まえた語句をあまり用いないで、却つて後漢の張衡や魏の曹植ら比較的新しい作品に依據した語句を多用する傾向が見られるが、^(注1)此の點に關して、陸雲は次のように述べている。

張公昔亦云、兄新聲多之不同也。典當故爲未及。彦藏亦云爾。
 張公も昔亦た云ふ、「兄の新聲、多くは之れ同じくせざるなり。典は當に故より未だ及ばずと爲すべし」と。彦藏も亦た爾りと云ふ。
 (「與平原書」其十九)

つまり、「張華や彦藏が、兄の“新聲”はほとんど真似ることはできないが、逆に“典”なる落ち着きに缺けており、その點、まだまだである、と言っている」というのである。

これは新しい語句が多過ぎるために、かえって落ち着きのない作品になっていることを指摘したものと思われるが、更には、『詩經』に基づく語句が餘りに少ないために、作品が浮ついたものになっていることを言ったものとも考えられる。

それでは次に、陸機の四言詩を見てみよう。入洛以前の陸機の詩は、本章の初めに取り上げた「贈弟士龍」詩という四言詩が残っているだけで、その詳細はよく分からないが、入洛後の作品と断定できるものは比較的多くある。そうして入洛後の陸機は、五言詩を多く作っているが、四言の詩も作っている。いま、その中から『文選』卷二四に収める「贈馮文龍遷斥丘令」詩を取り上げてみよう。此の詩は全て八章から成り、愍懷太子の府で俱に仕えた馮文龍が斥丘の令として赴任するのに贈った詩である。此の詩の中で、『詩經』を踏まえた語句を取り上げると、下段のごとくである。

〔其の一〕

於皇聖世

於皇しきかな 聖世

〔於皇〕…周頌・般

時文惟晉

時れ文にして惟れ晉む

受命自天

命を受くること天自りし

〔有命自天〕…大雅・大明

奄有黎獻

奄いに黎獻を有つ

閭闔既闢

閭闔 既に闢き

〔奄有〕…大雅・皇矣

承華再建

承華 再び建つ

明明在上

明明として上に在り

〔明明〕…大雅・大明

有集惟彦

集ふ有るは 惟れ彦なり

〔其の二〕

奕奕馮生

奕奕たる馮生

哲問允迪

哲く問ねて 允に迪めり

天保定子

天は子を保んじ定めて

〔天保定子〕…小雅・天保

靡德不鏘

徳として鏘からざるは靡し

邁心玄曠

心を邁ふこと 玄曠にして

矯志崇遜

志を矯ぐること 崇遜なり

遵彼承華

彼の承華に遵ひて

其容灼灼

其の容は灼灼たり

〔灼灼〕…周南・桃夭

〔其の三〕

嗟我人斯

嗟我 人なる

〔嗟我〕…周南・卷耳

戢翼江潭

翼を江潭に戢む

〔人斯〕…小雅・巧言／小雅・何人斯

有命集止

命有りて集れば

〔戢翼〕…小雅・鴛鴦／小雅・白華

翻飛自南

翻り飛びて南自りす

〔有命〕…大雅・大明

出自幽谷
及爾同林
雙情交映
遺物識心

幽谷自り出でて
爾と林を同じうす
雙情は 交々映じ
物を遺れて心を識る

〔其の四〕

人亦有言
交道實難
有頌者弁
千載一彈
今我與子
曠世齊歡
利斷金石
氣惠秋蘭

人亦た言へる有り
交はりの道は 實に難しと
頌たる有る者は弁
千載に一たび弾けり
今 我と子と
世を曠しくして 歡びを齊しくす
利は金石を斷ち
氣は秋蘭よりも惠なり

〔其の五〕

羣黎未綏
帝用勤止
我求明德
肆于百里
僉曰爾諧
俾民是紀
乃眷北徂
對揚帝祉

羣黎 未だ綏んぜず
帝 用て勤む
我 明德を求め
百里に肆ねしめんと
僉な曰く 爾 諧げん
民をして是に紀め俾めんと
乃ち眷みて北に徂き
帝祉を對揚す

〔其の六〕

疇昔之遊
好合纏繇
借曰未洽
亦既三年
居陪華幄
出從朱輪
方驥齊鑣
比迹同塵

疇昔の遊は
好合すること纏繇たり
借ひ未だ洽ねからずと曰ふとも
亦た既に三年なり
居りては華幄に陪り
出でては朱輪に従ふ
驥を方べて鑣を齊しくし
迹を比べて塵を同じくす

〔其の七〕

之子既命

之子 既に命ぜられ

〔四牡項領〕…小雅・節南山

四牡項領
 逵塗遠蹈
 騰軌高駘
 慶雲扶質
 清風承景
 嗟我懷人
 其邁惟永

四牡 項領たり
 塗に逵ひて遠く蹈み
 軌を騰げて高く駘す
 慶雲 質を扶け
 清風 景を承く
 嗟 我 人を懷ふ
 其の邁くこと 惟れ永し

〔嗟我懷人〕…周南・卷耳

〔其の八〕

否泰苟殊
 窮達有違
 及子春華
 後爾秋暉
 逝將去我
 陟彼朔垂
 非子之念
 心孰爲悲

否と泰と 苟に殊なり
 窮と達と 違ふこと有り
 子の春華に及ぶも
 爾が秋暉に後る
 逝きて將に我を去り
 彼の朔垂に陟らんとす
 子を之れ念ふに非ずして
 心は孰が爲にか悲しまん

〔陟彼朔垂〕…周南・卷耳／小雅・車

牽

一見して明らかなように、全章に亘って『詩經』に基づく語句を用いているが、かかる點こそが、陸機の詩の特徴なのであった。

當時、西晉の文壇においては五言詩が盛んに作られており、寧ろ此の作品のように『詩經』に倣う四言詩が作られることは、それほど多くはなかった。しかし、『詩經』に基づく古典的な詩を作る陸機が入洛したことは、北方文人に『詩經』を再認識させることになったものと思われる。その一つの現われが、潘岳の「爲賈謐作贈陸機」詩（『文選』卷二四）である。此の詩は、元康六年（二九六）、賈謐が陸機に贈る詩を潘岳に代作させたものであり、南方文人の代表である陸機に對抗すべく、北方文壇の代表的文人の潘岳に代作させたものである。潘岳は、陸機に贈る詩を作るのに、五言詩ではなく、あえて古典的な四言詩を選んだ。すべて十一章から成る此の詩の、書き出しの第一章と第二章を見てみよう。

〔其の一〕

肇自初創
 二儀烟燭
 粵有生民
 伏羲始君
 結繩闡化
 八象成文

肇め初創せし自り
 二儀 烟燭たり
 粵に生民有りて
 伏羲 始めて君たり
 繩を結びて化を闡き
 八象 文を成す

芒芒九有 芒芒たる九有
區域以分 區域 以て分かれたり

このうち、典故を持つ語句としては、次のようなものがある。

〔二儀〕：『周易』繫辭傳上「易有太極、是生兩儀」

〔烟燼〕：『周易』繫辭傳下「天地烟燼、萬物化醇」

〔粵有生民〕：楊雄・劇秦美新「爰初生民」

〔結繩〕：『周易』繫辭傳下「上古結繩而治、後世聖人易之以書契」

〔八象〕：『周易』繫辭傳下「古者包犧氏之王天下也、始作八卦、以通神明之德、以類萬物之情」

〔芒芒〕：『左氏傳』襄公四年「魏絳曰、虞人之箴曰、芒芒禹跡、畫爲九州」

〔九有〕：『毛詩』商頌・玄鳥「方命厥后、奄有九有」

〔其の二〕

神農更王 神農 更りて王たり

軒轅承紀 軒轅 紀を承く

畫野離壇 野を畫り壇を離ちて

爰封衆子 爰に衆の子を封ず

夏殷既襲 夏殷 既に襲ぎ

宗周繼祀 宗周 祀を繼げり

綿綿瓜瓞 綿綿たる瓜瓞

六國互峙 六國は互ひに峙てり

やはり、語句の典拠を示せば次のようになる。

〔神農・軒轅〕：『史記』五帝本紀「軒轅爲天子代神農氏」

〔畫野離壇〕：『漢書』地理志「昔在黃帝畫疆分州、得百姓之國萬區」

〔既襲〕：『楚辭』九懷・陶壅「思堯舜兮襲興」

〔宗周〕：『毛詩』小雅・正月「赫赫宗周」

〔綿綿瓜瓞〕：『毛詩』大雅・綿「綿綿瓜瓞」

第一章では『易』に基づく語句を多用して、古典的な趣を出そうとしたのであろうが、實は、『易』は陸機の得意とするものであった。というのも、陸機の祖父陸遜の從兄陸績には『周易』注十五卷があったことが『隋書』經籍志に記されており、『易』は陸氏にとつては家學のごときのものであったように思われるからである。或いは潘岳の方は、そのようなことを承知の上で、あえて『易』を持ち出してきたのかも知れない。ともあれ潘岳が五

言ではなく四言により、さらには『易』や『詩經』に依據した語句を用いて詩を作ったということは、ある意味での、陸機の北方文壇に及ぼした影響の大きさの現われということが出来るのではなからうか。

一方、潘岳から贈られた詩に對して、陸機は「答賈長淵」詩（『文選』卷二四）を作っているが、此の詩も四言の詩で、潘岳の詩と同じく全十一章から成っている。その第一章と第二章を見てみよう。

「其の一」

| | |
|------|-------------|
| 伊昔有皇 | 伊れ昔 皇有りて |
| 肇濟黎蒸 | 肇めて黎蒸を濟へり |
| 先天創物 | 天に先んじて物を創め |
| 景命是膺 | 景命 是れ膺れり |
| 降及羣后 | 降りて羣后に及びりて |
| 迭毀迭興 | 迭ひに毀れ 迭ひに興る |
| 邈矣終古 | 邈かなる矣 終古 |
| 崇替有徵 | 崇替 徵有り |

〔有皇〕…『毛詩』小雅・正月「有皇上帝」
〔黎蒸〕…司馬相如・封禪文「覺悟黎蒸」
〔先天〕…『周易』乾卦・文言傳「先天而天弗違」
〔創物〕…『周禮』冬官・考工記「智者創物」
〔景命〕…『毛詩』大雅・既醉「君子萬年、景命有僕」
〔是膺〕…『毛詩』魯頌・閟宮「戎狄是膺」
〔迭毀迭興〕…『史記』律書「遞興遞廢、能者用事」
〔終古〕…『楚辭』九歌・禮魂「春蘭兮秋菊、長無絶兮終古」
〔崇替〕…『國語』楚語下「藍尹愈謂子西曰、吾聞、君子唯獨居、思念前世之崇替、於是乎有歎」

「其の二」

| | |
|------|----------|
| 在漢之季 | 漢の季に在りて |
| 皇綱幅裂 | 皇綱 幅裂す |
| 大辰匿耀 | 大辰は耀りを匿し |
| 金虎習質 | 金虎は質を習ぬ |
| 雄臣馳騫 | 雄臣 馳騫し |
| 義夫赴節 | 義夫 節に赴く |

釋位揮戈 位を釋てて戈を揮ひ

言謀王室 言に王室を謀る

〔皇綱〕…班固・答實戲「廓帝紘恢皇綱」

〔馳騫〕…楊雄・解嘲「世亂則聖哲馳騫而不足」

〔釋位〕…『左氏傳』昭公二十六年「諸侯釋位以間王政」

〔言謀王室〕…『左氏傳』僖公八年「會于洮謀王室也」

陸機の方は、やはり『詩經』を踏まえた語句を多用し、また『易』の語も用いている。さらに第一章の「終古」の語は『楚辭』を典故とするもので、これも北方文人である潘岳を意識してのことと考えられる。

陸機の入洛によって、北方文人が『詩經』に基づく古典的な詩を再認識したことに代表されるように、陸機入洛後の北方文人は、南方文學の影響を少なからず受けたようであるが、それと同時に、南方文人も、北方文學の影響を受けることになった。陸機などは、はやくから五言詩をも作り、十分にそれに對處することができたようであるが、五言詩が苦手な陸雲などは、寧ろ四言詩のなかに北方文壇で好まれていた要素を取り入れようとしたようである。そのことを示しているのが、次に挙げる「大將軍謙會被命作詩」（『文選』卷二〇）である。此の詩は、大將軍であった成都王穎の宴席に參列した陸雲が、命に應じて作った詩である。詩は『詩經』に倣う全六章から成る四言詩であるが、その第三章に次のように言う。

在昔姦臣 在昔 姦臣ありて

稱亂紫微 亂を紫微に稱げり

神風潛駭 神風 潛く駭り

有赫茲威 赫たる有りて茲に威あり

靈旗樹旆 靈旗 旆を樹てて

如電斯揮 電の如く斯に揮ふ

致天之届 天の届めを致すこと

于河之沂 河の沂に于てす

有命再集 有命 再び集りて

皇輿凱歸 皇輿 凱して歸る

〔有赫〕…大雅・皇矣

〔致天之届〕…魯頌・閔宮

〔有命〕…大雅・大明

『詩經』に基づく語句を示せば下段の三例があるが、此の詩で注目されるのは、『楚辭』を踏まえた語句を二か所に用いているということである。すなわち、第五句目の「靈旗」の語は、『楚辭』九懷・尊嘉に、

靈旗兮電驚

靈旗は電のごとく驚せ

倏忽兮容裔

倏忽として容裔す

に基づき、そうして「靈旗」という語を用いただけでなく、『楚辭』を踏まえて「靈旗樹旆、如電斯揮」と表現したのである。さらに最終句の「皇輿」の語も、『楚辭』離騷に、

豈余身之憚殃

豈に余が身之れ殃を憚らん

恐皇輿之敗績

皇輿の敗績を恐るるなり

とあるのを聞いたものである。

そもそも北方の文壇においては、五言詩に『楚辭』を取り込むことによって、華やかで軽やかな趣を出していたのであるが、陸雲はその伝統的なスタイルを繼承せんとする文學觀のゆえに、四言詩には用い難い『楚辭』の言葉を敢えて取り入れることによって、北方文學の趨勢に乘ろうとしたのであろう。このような試みは、陸雲の「南征賦」の草稿に見られた「羊腸轉時」「元兵時」といった「句端の語」の試みに通じるものがあるように思われる。「句端の語」における試みは、兄陸機によって退けられてしまったが、四言詩に『楚辭』を取り入れる試みも、うまくいかなかったようである。陸雲の兄宛ての書翰の中に次のようなものがある。

雲今意視文、乃好清省、欲無以尚。意之至此、乃出自然。張公在者、必罷、必復以此見調。

雲は今 意に文を視るに、乃ち清省を好み、以て尚ふること無からんと欲す。意の此に至るや、乃ち自然に出づ。張公 在せば、必ず罷めんも、必ず復た此を調め見れん。

(「與平原書」其十一)

すなわち、「元來、清省なる文章を好んできたわたくし陸雲は、なんとかして自分の文章に華やかな要素を取り入れようと様々な工夫を凝らしてきたが、今になって、やはり清省なる文章がよいことに気付いた。そのように考えることによって自然な文章ができる」と言うのである。さらに「張華がもし生きていたならば、きっとそのような文章はだめだと言われるであろうが、しかしその故にこそ、かえって認められるのではなからうか」と言う。つまり張華は、陸雲の派手さを押さえた地味な文章、詩で言えば、『詩經』に基づく古典的な作品も評價していたのである。張華に見られるこのような意識は、陸機・陸雲の入洛によって初めて生まれたものと考えられるのであって、ここに陸機ら南方文人の北方文人に與えた影響の大きさを見て取ることができる。

以上、入洛後の陸機の文學について考察を加えてきたが、その結果をふまえて「西晉文學」とはいかなるものであるのか、その特質は何であるのか、ということについて述べて

みたい。入洛以前、すなわち南方吳國の文壇における陸機の作品は、先に取り上げた「贈弟士龍」詩という四言詩が、その時期のものであると断定できる他には、その他の作品を見出しえない。ただ、陸機の此の詩に答えた陸雲の四言詩を見ることはできる。陸機は、『晉書』本傳に傳えるがごとく儒教に基礎をおいた教養を身につけおり、これは陸雲の場合も同じである。また、陸機・陸雲入洛の後、多くの南人が洛陽入りしたが、その時に南人を推挙するに當たつての賛辭として、儒學の素養があつたということが多く述べられている。これらのことから推測するに、陸機入洛以前の南方文壇においては、『詩經』を規範とした古典的な文學がその主流であつたように思われる。

これに對し、北方洛陽の文壇では、世情の安定にともなつて、華やかで輕やかな文學が隆盛であり、それは『楚辭』に依據する華麗な文學であつた。このように異なつた文學が南北の文壇で行なわれていた時に、南方文壇の代表である陸機は入洛し、異質の文學がぶつかり合うことになつた。初めは互いに對立意識をもつていた南北の文人は、やがては互いの文學に影響されながら、すなわち、『楚辭』と『詩經』とを基礎にしながらも、これまでに見ることのできなかつた新しい文學を生み出していったのである。當時、北方の文壇では、華やかで輕やかな要素を『楚辭』に求めていたが、それは屈原に代表される激しい感情の表出である『楚辭』の語句を作品の中に取り入れることによつて、表現だけではなく、感情をも盛り込もうとしたためであらうと思われる。そうして詩の形式としては、單純で變化の乏しい四言詩よりも、輕快なリズムを持つ五言詩の方が喜ばれた。しかし、餘りに華美で輕快な文章は、却つて落ち着きに缺け、浮ついたものになつてしまいがちである。北方文人たちも、自分たちの文學が華美であり過ぎるために、むしろそれが缺點となつていくことに氣づき始めていたのではなからうか。そのような時に、陸機ら南方文人の『詩經』を規範とした傳統的な文學に觸れ、北方文人は『詩經』を再認識したのである。つまり浮つて典雅な趣きに缺ける文章に、『詩經』の語句を用いることによつて、落ち着いた感じを出そうとしたのであつた。

一方、陸機ら南方文人は、北方文壇における『楚辭』に依據した文學に觸れたことによつて、『楚辭』を再認識させられる。入洛後の陸機・陸雲は、『楚辭』に影響されて自分の作品にいかにかに情を盛り込めばよいかということを考えていた。それは次章で詳述する陸機の「文賦」や陸雲の「與平原書」の中で、文章における「情」について議論されていることから窺える。もともと『楚辭』は、南方楚地で生まれた文學であつて、ために陸機らは北方文學の特質とでも言える『楚辭』を素直に受け入れることができた。つまり『詩經』に基づく變化に乏しく派手さを押さえた文章に、『楚辭』風の表現・内容を取り入れようとしたのである。元來、派手な要素を持っていた陸機は、その豊かな文才によつて、舊來のものとは異なつた新しい文學を生み出してゆくのである。かくして表現に洗練された新しさ美しさを持ちながらも、尚も基本的には『詩經』『楚辭』を踏まえた文學、いわ

ゆる「西晉文學」が生まれたのである。

ここで、西晉の詩を代表すると思われるもののうち、陸機の「園葵の詩」と潘岳の「悼亡詩」を挙げておこう。

陸機は、惠帝の永寧元年（三〇一）、帝位を篡奪した趙王倫の中書郎となったが、その倫は帝位に即いてわずか三か月あまりで、齊王冏をはじめとする諸王の反亂によって帝位を失い、死を賜わった。冏は、陸機が中書省に務めていたから、九錫文や禪位の詔の作成に必ずや機が關與しているであろうとの嫌疑をかけ、機を捕えてしまう。もはやこれまでと思われたとき、陸機の命を救ってくれたのが、吳王晏と成都王穎であった。陸機は「園葵の詩」を作り、成都王穎に感謝の氣持ちを表したのである。

陸機の「園葵詩」は二首あり、先ず『文選』卷二九に収めるものを取り上げる。

種葵北園中

葵を北園の中に種う

葵生鬱萋萋

葵は生ひて鬱として萋萋たり

朝榮東北傾

朝の榮は東北に傾き

夕穎西南晞

夕べの穎は西南に晞く

零露垂鮮澤

零露鮮澤を垂れ

朗月耀其輝

朗月其の輝りを耀かせり

時逝柔風戢

時逝きて柔風は戢り

歲暮商志飛

歲暮れて商志は飛ぶ

曾雲無溫液

曾雲溫液無く

嚴霜有凝威

嚴霜凝威有り

幸蒙高壙德

幸ひに高壙の徳を蒙りて

玄景蔭素蕤

玄景は素き蕤を蔭へり

豐條竝春盛

豊かなる條は春に並びて盛んに

落葉後秋衰

落つる葉は秋に後れて衰ふ

慶彼晚彫福

彼の晚彫の福ひを慶び

忘此孤生悲

此の孤生の悲しみを忘る

葵を北のかたの園中に移し植えたところ、やがて次第に延び廣がってこんもりと茂ってきた。

朝には花は東北に傾き、夕べには花は西南に向かいながらよく日を受けた。

夜に降る露は葉の上に新鮮な恵みを與え、さやけき月がそれを美しく照らしている。」

やがて時は移り行き春の風もおさまり、年が暮れて秋風が吹くころとなった。

重なり合う雲は穏やかな雨をもたらすこともなく、厳しい霜が猛威をふるうばかりであった。」

かかる時にも、幸いにも高い垣のお蔭を蒙り、その深い影で白き花を守ることができた。豊かなる枝には春には葉を茂らせ、秋には萬物に後れて凋むことになった。

この他の物に後れて凋むことの幸いを喜び、孤獨に生きる悲しみを忘れてしまった。

葵をみずからに喩えて、成都王穎に感謝の気持ちを表わすというテーマの下に作られている此の詩は、初めの六句で南方呉國から北にやってきた自分が、それなりに順調であったころのことを言っている。續く四句では、陸機を取り巻く状況が秋の霜のように厳しいものになったことを述べ、そのような時に、あなたの温かい庇護によって、他の草々よりも長生きできた喜びを、終わりの六句で歌っている。

さて此の詩は、成都王穎に對する感謝の気持ちを詠ずるというのが、その一番の目的であり、それを最も効果的にするために、陸機は「葵」を比喻として選んだのであった。葵は絶えず太陽の光を求めて其の方向に向かう。入洛後の陸機は、まさしくこのように、自分を取り立ててくれる人物を求めて、時の實力者のもとを轉々としたのであった。そうして今は、成都王穎が陸機にとっての太陽であり、また自分の命（素羸）を救ってくれた高き徳を備えた人物（高壩徳）なのである。陸機は、自己の感情をできるだけ抑えて、みずからを喩えた「葵」を客觀的に描くことによって、却って命を救われた喜びを巧みに表出することに成功している。

此の詩の中で、例えば、

朝榮東北傾　朝の榮は　東北に傾き

夕穎西南晞　夕べの穎は　西南に晞く

豊條竝春盛　豊かなる條は　春に並びに盛んに

落葉後秋衰　落つる葉は　秋に後れて衰ふ

などの對句は、當時の文壇における傾向をよく示したもので、すなわち華やかで軽やかな表現といえよう。

次に、此の詩の中で『楚辭』に依據した表現は、中ごろの第七・八・九・十句、

時逝柔風戢　時逝きて　柔風は戢り

歲暮商_は飛 歲暮れて 商_はは飛ぶ

曾雲無溫液 曾雲 溫液無く

嚴霜有凝威 嚴霜 凝威有り

の部分であり、これはすなわち『楚辭』七諫・沈江に、

忠臣貞而欲諫兮 忠臣 貞にして諫めんと欲するも

讒諛毀而在旁 讒諛 毀りて旁に在り

秋草榮其將實兮 秋草 榮えて其れ將に實らんとするも

微霜下而夜降 微霜 下りて夜降る

商風肅而害生兮 商風 肅として生を害し

百草育而不長 百草 育つも長ぜず

とあるのを踏まえた表現である。陸機は趙王倫の中書令であったために、九錫文や禪文の制作に關與しているであろうと疑われ捕らえられたのであるが、その時、陸機はみずからの無罪を懸命に訴えている。「平原内史を謝するの表」（『文選』卷三七）には、次のようにある。

而横爲故齊王罔所見枉陷、誣臣與衆人共作禪文、幽執圜、當爲誅始。

而も横に故の齊王罔の爲に枉げ陥れられ、臣は衆人と共に禪文を作ると誣られ、圜に幽執せられ、誅始せ爲るるに當る。

讒言にあつて陥れられたのであるということを書いているのであるが、このように、陸機を取り巻く状況が非常に厳しいものであったことを『楚辭』の表現を借りることによって、自分は無實であり、讒言によってこのようなことになったのだという思いを、効果的に表出していると思われる。ここに『楚辭』を用いることによって、そのような危険な状態にいる私を、あなたは救ってくださいといったという此れに續く、

幸蒙高墉德 幸ひに高墉の徳を蒙りて

玄景蔭素蕤 玄景は素き蕤を蔭へり

の部分が生かされてくるのである。次に『詩經』に基づく表現としては、

零露垂鮮澤 零露 鮮澤を垂れ

朗月耀其輝 朗月 其の輝りを耀かせり

のなか、第五句目の「零露」の語がある。即ちこれは、『毛詩』鄭風・野有蔓草に、

野有蔓草

野に蔓草有り

零露漙漙

零露 漙漙たり

とあるのを踏まえる。ところで此の「野有蔓草」の詩序には「時に遇ふを思ふなり。君子の澤、下流せず。民は兵革に窮し、男女は時を失ひ、期せずして會するを思ふ」とあって、鄭の國が亂れて、君子の恩澤が及ばされることがなく、爲に民は戦に疲れ、男女は婚姻の時を失っている、と言う。「入洛後の私は幾人かの有力者にその身を委ねてきたが、その人たちはいずれも私の理想とする人物ではなかった。しかし此の度あなたに我が身を任せることになるが、あなたこそは私の理想とする人物である」というような意味をも含ませているのではなからうか。さらに五言の詩はリズムが軽快なために落ち着いた趣きに缺ける傾向があるが、こうした場合、『詩經』に基づく語句を取り込むことによって、詩の中に落ち着いた雰圍氣を醸し出すこともできる。それは『詩經』の詩が、「風」の諸篇は素朴な民歌であり、「雅」や「頌」は宮廷の饗宴や宗廟の祭祀の時に雅樂を奏して歌われるものであって、いずれも個人的な感情があらさまに表出されることがないことによって生まれてくるのである。

このように、ここに取り上げた陸機の「園葵の詩」は、『楚辭』や『詩經』に基づく表現を効果的に用いた五言詩であって、西晉文學の特質を示した作品ということが出来る。

次に、もう一首の「園葵詩」を見てみよう。こちらの詩は、『藝文類聚』卷八二および『古詩紀』卷二五に収められている。

翩翩晚彫葵

翩翩たる 晚彫の葵

孤生寄北蕃

孤り生ひて 北蕃に寄る

被蒙覆露惠

覆露の恵みを被蒙り

微軀後時残

微軀は 時に後れて残れり

庇足周一智

足を庇るは 周ねく智を一にし

生理各萬端

生理は 各々萬端

不若聞道易

道を聞くの易きに若かざるも

但傷知命難

但だ命の知り難きを傷むのみ

ふらふらと揺れる他の草木に後れて凋む葵は、獨りぼっちで北のまがきに生えている。露に潤される恵みを蒙り、この私は他の人に後れて生き残ることができた。」

足を庇うのは普く共通の知恵であり、生きる道は種々さまざまである。

道を聞くことの容易いのにこしたことはないが、ただ命を知ることの困難なことだけが痛まれる。

こちらの詩は陸機の本集にも収められておらず、或いは此の部分以外の句が缺けているのかも知れない。前半は前詩と同じく孤獨に北方で成長した葵が、恵みによって生き永らえることができたことを喜び、後半は、しかしこれから先、またどうなることか分からないという不安を述べている。

さて、此の詩の歌い出しの「翩翩」の語は、『毛詩』小雅・四牡に、

翩翩者騅

翩翩たる騅

載飛載下

載ち飛び

載ち下る

とあるのを踏まえている。「四牡」の詩は、詩序に「四牡は、使臣の來るを勞するなり。功有りて知ら見れば則ち説ぶ」とあって、ここの「翩翩者騅、載飛載下」は、八幡鳩が休む暇もなく飛び上がり、また飛び下りるといふように、使臣たる我が身は休む暇もなく奔走している、という意である。「翩翩」の語を用いることによって、呉からやって來た自分分は、これまで休む暇もなく西晉王朝の爲に奔走してきた、ということをおうとしたのであろう。さらに、漢代以後、經書の一つとして重んじられた『詩經』の言葉を用いることによって、自分の詩に典雅な雰圍氣を與えている。此の詩も先の詩と同じく、恐らく成都王穎に寄せて作ったものであるから、このような落ち着いた感じで歌い出したのである。

さて、此の「園葵詩」については、劉勰の『文心雕龍』事類篇のなかで取り上げられ、その典故技法のことが次のように述べられている。

陸機園葵詩云、庇足同一智、生理各萬端。夫葵能衛足、事譏鮑莊、葛藟庇根、辭自樂豫。若譬葛爲葵、則引事爲謬、若謂庇勝衛、則改事失眞。斯又不精之患。夫以子建明練、士衡沈密、而不免於謬。

陸機の「園葵の詩」に云ふ、「足を庇ふは同じく智を一にし、生理は各々萬端」と。夫れ葵の能く足を衛るは、事は鮑莊を譏り、葛藟の根を庇ふは、辭は樂豫自りす。若し葛を譬へて葵と爲せば、則ち事を引きて謬りと爲し、庇の衛に勝ると謂へば、則ち事を改めて眞を失ふ。斯れ又た不精の患なり。夫れ子建の明練、士衡の沈密を以てするも、而

も謬りを免れず。

すなわち、此の陸機の「園葵詩」にある、

庇足同一智　　足を庇ふは　同じく智を一にし　「周」字、「文心雕龍」作「同」
生理各萬端　　生理は　各々萬端

という句について、「葵」が足元を「衛」というのは、孔子が鮑莊子を譏った時の言葉即ち『左氏傳』成公十七年に、

仲尼曰、鮑莊子之知不如葵。葵猶能衛其足。

仲尼曰く、「鮑莊子の知は葵に如かず。葵すら猶ほ能く其の足を衛る」と。

とあるものであり、「葛藟」が根を「庇」というのは、同じく『左氏傳』文公七年に、

昭公將去羣公子。樂豫曰、不可。公族公室之枝葉也。若去之、則本根无所庇陰矣。葛藟猶能庇其本根。故君子以爲比。況國君乎云云。

昭公　將に羣公子を去らんとす。樂豫曰く、「不可なり。公族は公室の枝葉なり。若し之を去らば、則ち本根　庇陰する所无からん。葛藟も猶ほ能く其の本根を庇ふ。故に君子は以て比と爲す。況んや國君をや云云」。

と、樂豫が宋の昭公を諫めた時の言葉であるから、もし「葛」を譬えて「葵」にしたのであれば、典故の引き違いであるし、「庇」の方が「衛」よりもよいと考えたのなら、事實をまげてしまったことになる、と陸機が典故の用い方に輕率であったと批判するのである。しかしこれは、當時の文壇においては新奇なる要素が求められており、ために陸機は二つの典故を一つにまとめて使うという従来とは異なった典故技巧を用いることによって、そこに新しさを出そうとしたのではなからうか。西晉の文學は修辭に意を凝らした新しい文學なのであったが、陸機の典故におけるこのような試みも、その現われではないかと思われる。

以上、陸機の「園葵詩」を取り上げてみたが、そこには典故の用い方などに従来のものとは異なった新しい試みをして、新しい文學を生み出す工夫が見られるが、猶も『詩經』『楚辭』の要素を効果的に用いたものとなっている。ここに西晉詩らしさを見て取ることができよう。それでは潘岳の詩はどうであろうか。

潘岳は惠帝の元康八年（二九八）ごろに妻の楊氏を亡くしている。此の妻を亡くした悲しみを詠じたのが「悼亡詩」であり、三首が『文選』卷三に収められている。ここではこのうち、第一・二首を取り上げる。先ず其の第一首を見てみよう。

| | |
|-------|-------------------|
| 荏苒冬春謝 | 荏苒として 冬春謝り |
| 寒暑忽流易 | 寒暑 忽ちに流易す |
| 之子歸窮泉 | 之子 窮泉に歸し |
| 重壤永幽隔 | 重壤 永く幽隔す |
| 私懷誰克從 | 私懷 誰か克く從はん |
| 淹留亦何益 | 淹留するも亦た何の益かあらん |
| 僊僊恭朝命 | 僊僊として朝命を恭み |
| 迴心反初役 | 心を迴らせて 初役に反る |
| 望廬思其人 | 廬を望んでは 其の人を思ひ |
| 入室想所歷 | 室に入りては 歷し所を想ふ |
| 帷屏無髣髴 | 帷屏に 髣髴たること無きも |
| 翰墨有餘跡 | 翰墨に 餘跡有り |
| 流芳未及歇 | 流芳は 未だ歇くるに及らず |
| 遺挂猶在壁 | 遺挂は 猶ほ壁に在り |
| 悵恍如或存 | 悵恍として 存すること或るが如く |
| 周遑忡驚惕 | 周遑として 忡へて驚き惕ぶ |
| 如彼翰林鳥 | 彼の翰林の鳥の |
| 雙栖一朝隻 | 雙び栖むも 一朝にして隻なるが如し |
| 如彼遊川魚 | 彼の遊川の魚の |
| 比目中路析 | 目を比ぶも中路にして析るるが如し |
| 春風緣隙來 | 春風は 隙に緣りて來り |
| 晨雷承檐滴 | 晨雷は 檐を承けて滴る |
| 寢息何時忘 | 寢息 何れの時にか忘れん |
| 沈憂日盈積 | 沈憂 日々に盈ち積る |
| 庶幾有時衰 | 庶幾にも 時有りて衰ふれば |
| 荏苒猶可擊 | 荏苒 猶ほ擊つ可し |

いつしか月日は流れ冬や春も去り、寒さ暑さも忽ちのうちに移り變わっていった。我が妻は黄泉路に行つてしまい、幾重にもかさなつた土が永久に隔ててしまった。このままだつまでも妻のことを慕うこともできず、いつまでも悲しみに浸つてばかりは

おれない。

氣分を引き立ててお上の命に従い、もとの公務に還ることにした。」

家を見渡すと亡き妻のことが忍ばれ、部屋に入ればこれまでのことが思い出される。

とぼりや屏風の辺りにも妻の面影は見えず、ただ筆墨のあたりに書き付けた文字が残っている。

衣にたきこめた香はまだ消えることもなく、残された衣類なども壁にかかったままである。

ぼんやりしてはなお生きているのではないかと思い、憂い悲しみ恐れ慌ててはとまどってばかりいる。」

思えば、あの林に飛びかう鳥の、つがいで棲んでいたのに一朝にして一羽となったかのようであり、

川に遊ぶ魚の、目を並べて仲良くしていたのが途中で離れ離れになったかのような我が身の上である。」

おりしも春の風が戸の隙間から部屋に入りこみ、早朝の雨垂れが軒から滴り落ちてくる。寝ても覚めても忘れることができず、深い憂いは日増しにつのるばかり。

いつしか憂いの衰えるときが来れば、あの荘子のように缶を撃ちならしめたいと願っている。

五言二十六句に及ぶ此の詩は、初めから八句目までの第一段で、妻が亡くなったこと、そうして一年間の服喪を終え、再び公務に戻ったことを歌う。続く第十六句目までの第二段では、亡き妻を忍ぶ内容となっており、これに続く末句までの第三段では、日増しに暮る悲しみを詠じている。

テーマが亡き妻を悼むということであるために、全體が暗く沈んだ調子の詩になっているように思われる。そのためか、派手な印象を與える語句は用いられていない。『楚辭』に依據した語句も、第六句「淹留亦何益」の「淹留」だけで、これは『楚辭』哀時命に、

倚躊躇以淹留兮 倚りて躊躇して以て淹留す

日饑饉而絶糧 日々に饑饉して糧を絶つ

とあるのを典故としている。これに對し、その語句や表現を取り込むことによって、落着いた雰囲気を作ることのできる『詩經』に基づく語句は、第三・四句、

之子歸窮泉 之の子 窮泉に歸し
重壤永幽隔 重壤 永く幽隔す

に見ることができ。すなわち、『毛詩』周南・桃夭に、

之子于歸 之の子 于き歸ぐ
宜其室家 其の室家に宜しからん

とあるのを殆どそのままの形で用いている。「窮泉」とは黄泉路をいう。『毛詩』の「桃夭」の場合は、若い娘が納まるべき家に嫁いでゆくという意味に用いられていた「歸」を、潘岳は、人はだれしも最終的にあの世に歸着するという意味に使った。本来の意味を變えて自己の作品に取り込んでいる。もとより「桃夭」の詩は嫁ぎ行く若い娘を祝福するものであるが、或いは此の詩の中に、今は亡き妻の、新婚の頃の面影を見ているのかも知れない。『詩經』の詩を實にうまく自分の詩に取り込んでおり、潘岳の工夫の跡が見られる。また第七・八句、

僂僂恭朝命 僂僂として朝命を恭み
迴心反初役 心を迴らせて 初役に反る

の「僂僂」の語は、『毛詩』小雅・十月之交に、

黽勉從事 黽勉 事に従ひ
不敢告勞 敢へて勞を告げず

とあるのに據っている。「僂僂」（黽勉）とは、務め励むさまをいい、「十月之交」の詩のように、敢えて苦勞を告げずに仕事に務めよう、と言っているのである。

此の詩の第二段は、亡き妻の形見の品々を見ては、心を傷めていることを述べているがその終りの二句、すなわち、

悵悵如或存 悵悵として存すること或るが如く
周遑忡驚惕 周遑として忡へて驚き惕ぶ

の部分には、心理状態を示す語が多く用いられており、殊に「悵悵」「忡」「惕」といった「忡」偏の字を連ねたことは、詩は元來うたうものではあるが、作品として書き寫した時の効果は大きなものがあるように感じられる。

次に第二首を取り上げる。此の詩は換韻によって三つの部分に分けることができる。

皎皎窓中月

皎皎たる 窓中の月

照我室南端

我が室の南端を照らす

清商應秋至

清商は 秋に應じて至り

溽暑隨節闌

溽暑は 節に随ひて闌ぬ

凜凜涼風升

凜凜として 涼風は升り

始覺夏衾單

始めて夏の衾の単なるを覺ゆ

豈曰無重纒

豈に重纒無しと曰はんや

誰與同歲寒

誰と與にか歲寒を同じくせん

歲寒無與同

歲寒の與に同じくするもの無し

朗月何朧朧

朗月 何ぞ朧朧たる

展轉眇枕席

展轉して 枕席を眇れば

長單竟牀空

長單は 牀の空しきに竟る

牀空委清塵

牀空しくして 清塵を委み

室虛來悲風

室虚しくして 悲風を來く

獨無李氏靈

獨り李氏の靈の

髣髴觀爾容

髣髴として 爾の容を觀すること無し

撫衿長歎息

衿を撫でて 長く歎息すれば

不覺涕霑胸

覺えず 涕の胸を霑す

霑胸安能已

胸を霑す 安んぞ能く已めん

悲懷從中起

悲懷 中從り起る

寢興目存形

寢興にも 目に形を存し

遺音猶在耳

遺音は 猶ほ耳に在り

上慙東門吳

上は東門吳に慙ぢ

下愧蒙莊子

下は蒙の莊子に愧づ

賦詩欲言志

詩を賦して志を言はんと欲すれども

此志難具紀

此の志 具には紀し難し

命也可奈何

命なる也 奈何す可き

長戚自令鄙

長く戚へて自ら鄙しから令む

白く輝く窓に差し入る月が、部屋の南端の入り口を照らしている。

さわやかな風が秋になると吹いてきて、うっとうしい暑さも衰えた。
やがて冷たい風が吹き起り、夏の単衣であったことにやっと気がついた。

かさねの綿入れが無いわけではないが、それとともに着て歳の暮れの寒さを過ごす人もいない。」

歳の暮れの寒さをともにしのぐ人もいないが、ただ明月だけがしらじらと照っている。
寝返りをうちながら枕もとや席のあたりを見ると、長い敷物が妻のいない寝台に敷かれている。

寝台は妻がいままに薄い塵を積もらせ、部屋はがらんとして悲しげな風が吹き込んでくる。

あの（漢の武帝の）李夫人の霊が、うすぼんやりと姿を見せるようなこともない。
衾もとを撫でながら長いため息をついていると、思わず涙があふれて胸元を濡らす。」

涙が胸元を濡らすのをどうして止めることができようか、悲しみは心の底から沸き起こってくる。

寝ても覚めてもまぶたの中に妻の姿が浮かび、生前の言葉がいまだに耳の中に残っている。

このようでは、（子の死を憂えなかった）東門呉に對して恥じ入り、また（妻の死にも泣かなかつた）蒙の荘子に對しても恥ずかしい。

詩を歌って悼みの心を述べようと思うが、私の心を述べ盡くすことなどできはしない。
これも運命であつてどうすることもできないが、いつまでも愛い續けてみずからを卑しめるほかはない。

初めの段は、季節の推移によって妻の亡くなった悲しみを今更のように感じていることを詠い、第二段では、亡き妻の寝台を目にしては、在りし日の妻を忍んでいる。終わりの段では、妻のことがどうしても忘れられないと言ひ、一篇の詩を結んでいる。

先にも言ったように、此の詩は換韻して内容が三段に分かれるが、第一段の終わりの句にあつた「歳寒」の語を第二段の初めに用ひ、同じように、第二段末の「霑胸」の語を第三段の初めに用ひている。いわゆる尻取り形式であるが、これは古くは『毛詩』大雅・既醉の詩などに見られる技法である。すなわち、

既酔以酒

既に酔ふに酒を以てし

爾殺既將

爾の殺既に將ふ

君子萬年

君子 萬年

介爾昭明

爾の昭明を介まほにす

昭明有融

昭明 融やうたる有り

高朗令終

高朗にして終まりを令まくす

令終有傲

終りを令まくし 傲はめ有り

公戸嘉告

公戸こうこ 嘉告かこくす

陸機の「悼亡詩」は、妻の死を悼むものであり、その亡き妻への連綿として絶えることのない感情を表現すあらわすには、この技法は効果的である。換韻して意味の斷絶が起こりそうなのを、この方法によって巧みにカバーしている。

此の詩の第一段から第二段にかけては、いわゆる状態語が多く用いられている。即ち、「皎皎」「凜凜」「朧朧」「展轉」などがそれである。此の詩はテーマが妻の死を悼むということから、華やかな表現を用いることは難しい。そうかといって、あまりに沈痛な表現ばかりを連ねたのでは、詩が重苦しく、また単調なものになってしまう。そこで、このような状態語を多用し、季節の推移を輕快に表現することによって、詩の中に輕やかさを表現しようとしたのではなからうか。

さて、此の詩の歌い出し「皎皎窓中月、照我室南端」は、「古詩十九首」其十九の、

明月何皎皎

明月 何ぞ皎皎たる

照我羅床幃

我が羅らの床幃じやうひを照らす

に做ったものである。同じく第三句「清商隨節闌」も、「古詩十九首」其五に、

清商隨風發

清商 風に隨ひて發し

中曲正徘徊

中曲 正ただに徘徊す

とあるのに據ったものである。また第五句「凜凜涼風升」は、「古詩十九首」其十六の、

凜凜歲云暮

凜凜として 歲は云いに暮れ

蟪蛄夕鳴悲

蟪蛄かいこ 夕べに鳴き悲しむ

に依據したものである。ここに引かれた「古詩十九首」の〈其十九〉は、長く旅に出ている人が望郷の憂愁を歌ったものであり、〈其五〉は夫を失った女の悲嘆を寫したもので、〈其十六〉は遠く別れている妻が夫を慕うあまり、夢のなかで會うことができたが、それもほんの束の間で、再び現實に返ったことの悲しみを歌うのもである。つまり「古詩十九

首」に依據する表現を多用することによって、潘岳は、亡き妻を思う氣持ちを表出しようとしたものと思われる。元來、「古詩十九首」は鍾嶸の『詩品』によれば、『詩經』の「國風」を繼承するものであるが、表現が輕快であり、またそこには『詩經』には見られない作者の個人的な感情が表出されている。しかし、あまりに自己の感情を出しすぎると、作品それ自體が浮ついたものになってしまう。そこで潘岳は、『詩經』の表現を借りて、作品に落ち着きをもたせようとした。すなわち、第一段の終わりの二句「豈曰無重纊、誰與同歲寒」は、『毛詩』秦風・無衣の、

豈曰無衣 豈に衣無しと曰はんや

與子同袍 子と袍を同じくせん

を踏まえた表現であり、「無衣」の詩と直接に内容上の關わりはないが、五言詩に取り入れ難い四言詩を巧みに取り込んで、此の詩を落ち着かせる働きをしている。

續く第二段では、やはり第一句に『詩經』の句を用いている。すなわち、『毛詩』抑風・旄丘の詩に、

叔兮伯兮 叔や伯や

靡所與同 與に同じくする所靡し

というのに依據したものであるが、これも上述の理由によるものと思われる。また、此の段の第九句「撫衿長歎息」は、魏の武帝の「苦寒行」に、

延頸長歎息 頸を延して長く歎息し

遠行多所懷 遠く行きて懷ふ所多し

を踏まえ、第十句「不覺涕霑胸」は、魏の文帝の「燕歌行」に、

憂來思君不敢忘 憂ひ來りて君を思ひ 敢へて忘れず

不覺淚下霑衣裳 覺えず 涙の下りて衣裳を霑す

に據っている。陸機の場合もそうであるが、潘岳は魏の作品に依據した語句を多用する傾向がある。これは新しい典故を用いることによって、作品に新味を出そうとしたためであり、これも西晉詩の持つ傾向のひとつと言える。

以上、陸機と潘岳の詩を取り上げて、いわゆる「西晉詩」の特質を具體的に見ていった

が、ここに取り上げた詩は、いずれも陸機ら南方文人が入洛してから十年前後が経過してからの作品であり、ここには南北文學が對立し、やがて雙方の文學が調和して生まれた新しい文學を反映したものと云える。それは言葉の使い方や句造り、典故の用い方といった細かな所に意を配りながら、舊來の文學には見ることでできなかった新らしさを生み出すとしたものであるが、なおも基本的には『詩經』『楚辭』に依據した文學なのであった。そうして此の従來からの傳統的な文學である『詩經』『楚辭』をいかに自分の作品に取り込んでゆくかということが、最大の要點であつて、その巧拙によって文人の優劣が競われたのである。もともと『詩經』を規範としていた陸機の文學と、『楚辭』に依據していた潘岳の文學とは、互いに刺激を受けながら、ついにはここに取り上げたような、それぞれに個性の違いはあるものの、根底においては『詩經』『楚辭』を基本とした新しい文學、西晉文學を生み出したのである。

(注)

① 小尾郊一「陸機の『文賦』の意圖するもの」(『廣島大學文學部紀要』第二八卷)

四 従來の西晉文學批評に對する意見

劉勰は、『文心雕龍』明詩篇の中で、西晉の詩風について次のように述べている。

晉世羣才、稍入輕綺。張左潘陸、比肩詩衢。采緡於正始、力柔於建安、或析文以爲妙、或流靡以自妍。此其大略也。

晉世の羣才、稍ヤや輕綺に入る。張・左・潘・陸は、肩を詩衢なうに比ぶ。采は正始よりも緡にして、力は建安よりも柔に、或いは析文もと以て妙と爲し、或いは流靡きう以て自ら妍とす。此れ其の大略なり。

つまり劉勰は、西晉を代表する文人として、張(載・協・亢)、左(思)、潘(岳・尼)、陸(機・雲)を挙げ、「稍や輕綺に入る」と、彼らの文學を「輕綺」の語で評している。これは、沈約が「宋書謝靈運傳論」の中で、

降及元康、潘陸特秀。律異班賈、體交曹王。緡旨星稠、繁文綺合。

降りて元康に及ぶや、潘・陸 特たつとり秀づ。律は班・賈に異なり、體は曹・王に變ず。緡

旨は星のごとく稠く、繁文は綺のごとく合ふ。

と、西晋・元康年間の特に優れた文人として潘岳と陸機を挙げ、二人の詩文は、「緝旨は星のごとく稠く、繁文は綺のごとく合ふ」すなわち、美しい内容が星のごとくちりばめられ、飾りたてた表現があや絹のように織り成されていると言うのと同じである。つまり、劉勰も沈約も、西晋の文學の特徴を、華やかで美しく、軽快なものとして捉えているのである。

これに對して鍾嶸は、『詩品』の序で、

太康中、三張二陸、兩潘一左、勃爾俱興、踵武前王。風流未沫、亦文章之中興也。

太康中、三張・二陸、兩潘・一左、勃爾として俱に興り、武を前王に踵ぐ。風流未だ沫まず、亦た文章の中興なり。

と、劉勰と同じく西晋を代表する文人として陸機・潘岳らの名を挙げ、太康年間を五言詩の中興の時代であるとする。そうして、陸機の詩を上品に位置付け、その詩は『詩經』に源を發するものであるとして、次のように述べる。

才高辭贍、舉體華美。氣少於公幹、文劣於仲宣。尚規矩、不貴綺錯。

才は高く辭は贍かに、舉體華美なり。氣は公幹より少なく、文は仲宣より劣る。規矩を尚びて、綺錯を貴ばず。

すなわち、華やかで美しい陸機の文學ではあるが、その基本には、「規矩を尚びて、綺錯を貴ばず」という過去の規範を繼承し、艶やかなる美しさを好まなかった、と言っているのである。そうしてこれは、劉勰が『文心雕龍』體性篇の中で、

士衡矜重、故情繁而辭隱。

士衡は矜重なれば、故に情は繁にして辭は隱る。

と、陸機の文學は「情は煩雜であるが言葉には浮ついた華やかさが無い」というのと、共通した見方であると思われる。

このように、一見、矛盾しているかのように思われる、沈約・鍾嶸・劉勰らの西晋文學に對する評價は、その特徴の皮相を捉えただけで、その本質を押さえたものでないために、抽象的で分かりにくいものとなっているのである。

それでは、西晉文學の本質とは何か。それはこれまで見てきたように、西晉文壇に存在した幾つかの文學集團の活動のなかから生み出されたのであり、殊に陸機を始めとした南方文人の入洛によって、それまで直接に交渉を持つことのなかった北方と南方の文學とが接觸したことによって生まれたものなのである。つまり、『楚辭』の要素を多く取り入れた北方の文學と、『詩經』を基本とした古典的な南方の文學とが互いに影響し合うことによって、従來の文學とは違った新しい文學が生み出されたのである。

それまで華やかで軽やかな要素を『楚辭』に求め、詩においては軽快なリズムをもった五言詩が盛んに作られていた北方文壇では、陸機ら南方文人が作る『詩經』を踏まえた古典的な詩は、大きな刺激となった。そうして北方の文人は、それまであまり注目していなかった『詩經』を再認識することになる。一方、南方出身の文人は、『楚辭』の表現を多く取り入れた北方の文學に觸れることによって、改めて自國の文學である『楚辭』を再評價することになり、殊に陸機・陸雲兄弟は、『楚辭』の正統なる繼承者としての自負を強めていった。そうして、北方文學と南方文學とが相いに影響し合うことによって、それまで見られなかったような新しい文學が生まれたのである。陸機の文學について言えば、元來の『詩經』を規範とする古典的な面は、それはそれとして残しながらも、華麗で軽快な『楚辭』の要素を、自らの文學に取り込んでいった。そうして徐々に北方文學の時流に乗りながら、やがてはその主流となってゆくのである。かくして、文辭に彫琢を凝らしながらも、尚お『詩經』『楚辭』の風を失うことのない、いわゆる「西晉文學」といえるものが生まれたのである。従來の文學批評では、このような陸機文學の變遷の過程を把握することなく、陸機文學の特徴を一面的にしか捉えていなかったために、その文學批評が抽象的で分かりにくいものとなっていたのである。

第四章 陸機の文學 — 「文賦」を中心として —

一 「文賦」に見られる陸機の文學觀

「文賦」には、陸機の抱いていた文學觀が、「賦」の形式を借りて語られている。此の賦は入洛後の陸機が、張華の文會での議論や、弟の陸雲との間で文學・文章論を語り合うことを通して、それまで書き續けていた文學・文章論に加筆し、修正を加えて出来上がったものであり、言わば陸機文學の集大成と呼ぶことのできる作品である。以下、此の「文賦」を取り上げて、その内容を分析し、陸機の文學論に検討を加えてみたい。

(1) 「文賦」について

盛唐の杜甫が、その「醉歌行」という詩のなかで、

陸機二十作文賦 陸機は二十にして「文の賦」を作る

汝更少年能綴文 汝は更に少年にして能く文を綴る

と述べて以來、「文賦」の著作年代に關して、さまざまな議論がなされてきた。果たして二十歳代の若さで、このような文學論を語ることができるのか。典故の使用に嚴格なる杜甫が言うことであるから、必ずや根拠があるに違いない。かかる事柄がこれまで長期にわたって問題にされてきた。以下、この問題をも含めて、まず「文賦」の制作の過程について述べることにする。

1 「文賦」の制作過程

「文賦」著作年代の問題については、結論から先に言えば、太康の末年（二八九）、陸機二十八歳の時に洛陽に入り、その後、に何度か手直しをされた結果、陸機の亡くなった太安二年（三〇三）の数年前に、その完成を見たものと考えられる。それより先、すなわち

入洛以前には、已にその原案とでも言うべき「文賦」は出来ていたが、入洛後、北方文學の影響を受けて、自己の文學論をも変えていった陸機は、「文賦」に部分的に修正の手を入れていたように考えられるのである。杜甫が「陸機二十作文賦」（陸機は二十にして「文の賦」を作る）といった「二十」とは、概数をいったにすぎず、入洛前、二十七歳の時には已に「辨亡論」を作っていた陸機であるから、二十歳代で「文賦」のもとになるものを作るだけの力は十分にあったであろう。

さて、陸雲が兄の陸機に宛てた「與平原書」の中では、二陸が自分たちの作品に手を入れては、よりよいものに仕上げたことが、詳しく語られている。そうしてこのような改作は、未発表の作品に限られたわけではなく、すでに公にされた作品であっても、それに手を加えることがあったようである。すなわち、次のような書翰がある。

頃哀思、更力成歲暮賦。適且畢、猶未大定。自呼前後所未有。是雲文之絶無。又憶兄常云、文後成者、恒謂之佳。貞小爾恐數自後轉不如今。

頃ろ哀思するも、更に力めて「歲暮の賦」を成す。適且に畢らんとするも、猶ほ未だ大いには定せず。自ら前後に未だ有らざる所と呼ぶ。是れ雲の文の絶えて無きものならん。又た兄の常に「文は後に成る者は、恒に之を佳なりと謂ふ」と云ふを憶ふ。貞だ小爾數自ば後に轉ずるは今に如かざるを恐る。

（「與平原書」其三四）

「私は近頃、ふさぎこんでおりましたが、なんとか頑張つて『歲暮の賦』を完成させました。もう少しで出来上がるのですが、まだあまり手を入れておりません。（しかし）これまでも、またこれからさきも、作ることができないような（すばらしい）文章です。このようなものは、私の文章の絶えて無かつたものです。また兄上がいつも『文章は後で手を加えて出来たものが、つねにすばらしいのだ』と言われたのを思い出しますが、ただ少しばかり、しばしば後で手を加えたものが、かえて今のものに及ばないことが心配です」。ここに陸機みずからが言うように、完成した作品であっても、後で手を加えることをしていたようである。次のような書翰もある。

不審此何成、已出之、故爲存不棄耳。

此れ何に成るかを審かにせざるも、已に之を出だせば、故より爲に存して棄てざる耳。

（「與平原書」其二六）

「此の文章がどうなるのかよく分かりませんが、すでに世に出してしまつたからには、留

めておいて棄てるわけにはいきません」と言うのであるが、それは後で手直しをするためであり、発表した作品であっても、このように手を入れることがあったと思われる。さらに、

九悲多好語、可耽詠、但小不韻耳。皆已行天下、天下人歸高如此。亦可不復更耳。

「九悲」は好語多く、耽詠す可きも、但だ小しく韻せざる耳。皆な已に天下に行なはれ、天下の人 高に歸すること此の如し。亦た復た更めざる可き耳。(「與平原書」其十八)

「『九悲』は好語が多く、深く詠ずることはできませんが、少し押韻が亂れているようです。しかし、どれも今や天下に行なわれ、評判もよいようです。それで改めなくてもよいのです」と言うのは、本當は押韻の箇所に手を入れたいのだが、その作品の評判がいいので、その必要もない、というのである。また、次に擧げる書翰は、陸機が發表後の作品に手を入れようとしないうちに對して陸雲が不満をもらしているものである。すなわち、

間在洛、有所視。已當赦、而比更隆。以今意觀文、見此真(更)以爲不盡善。文麗云、故日向人歎兄文、人終來同。殆以此爲病。

間(二)る洛に在りて、視る所有り。已に當に赦すべきに、比(三)る更に隆(四)なり。今の意を以て文を觀るに、此れを見れば眞に更に以て善を盡くさずと爲す。文麗云ふ、「故日 人に向かひて兄の文を歎ずるに、人 終(五)に來同す」と。殆ど此を以て病と爲す。

(「與平原書」其二)

「近ごろ洛にあつて、兄上の文章を見ましたが、もう我慢しようと思つていたのに、いよいよ盛んに注意しようと思つようになりました。今、これらの文章を見てみるに、このよ(六)うな所は、やはりすべていいとは思われません。文麗は、『以前、人々に兄上の文章を稱嘆したところ、みんなも賛同してくれました』と言いましたが、それで兄上は直されようと思はず、缺點になつてゐるのです」といふものである。

これらの書翰から分かるように、陸機の「文賦」も、入洛以前に已に作品として出來上がつていたのであるが、入洛後にたびたび手を入れて、最終的に『文選』に収めるような形になつていたのであろう。それを窺わせるのが、『文心雕龍』聲律篇に見える以下の記述である。

及張華論韻、謂士衡多楚。文賦亦稱、知楚不易。

張華の韻を論ずるに及び、「士衡は楚多し」と謂ふ。「文賦」も亦た稱す、「楚と知るも易(七)はず」と。

「張華は韻を論じて、『陸機には楚の訛韻が多い』と言ひ、『文の賦』のなかでも、『楚の音が多いことは知っているが、あえて改めたりしない』と言つてゐる」と、劉勰は言うのであるが、今の「文賦」には「知楚不易」の句は見當らない。

また、『文心雕龍』鎔裁篇にも、

文賦以爲、榛栝勿剪、庸音足曲。

「文賦」に以爲へらく、『榛栝も剪る勿れ、庸音も曲を足す』と。

とあるが、こちらの方は、今の「文賦」にも、

彼榛栝之勿剪、亦蒙榮於集翠。

彼の榛栝の剪ること勿き、亦た榮を集翠に蒙る。

故蹠躑於短垣、放庸音以足曲。

故に短垣に蹠躑し、庸音を放にして以て曲を足す。

というように見えている。

さらに此の事の傍證となるのが、『世説新語』文學篇注に引く『左思別傳』にある次のような記述である。

其三都賦改定、至終乃止。初作蜀都賦云、金馬電發於高岡、碧雞振翼而雲披。鬼彈飛丸以礮礮、火井騰光以赫曦。今無鬼彈、故其賦往往不同。

其の「三都の賦」の改定は、終るに至りて乃ち止む。初め「蜀都の賦」を作りて云ふ、

「金馬 高岡に電發し、碧雞 翼を振ひて雲披す。鬼彈 丸を飛ばして以て礮礮たり、火井 光を騰げて以て赫曦たり」と。今、「鬼彈」無く、故より其の賦は往往 同じからず。

すなわち、「左思は『三都の賦』に手を入れることを、死ぬまで止めなかつた。初め『蜀都の賦』を作つて、『金馬電發於高岡、碧雞振翼而雲披。鬼彈飛丸以礮礮、火井騰光以赫曦』と記したが、今は「鬼彈」の句は無く、其の賦は往々異なつてゐる」というものである。いま『文選』巻四に収める「蜀都賦」を見るに、ここの部分は次のようになっている。

金馬 馳光而絶景

金馬 光を馳せて景を絶ち

碧雞 儻忽而曜儀

碧雞 儻忽として儀を曜かす

火井 沈燐於幽泉

火井 燐を幽泉に沈め

高烟 飛煽於天垂

高烟 煽を天垂に飛ばす

このように、「文賦」は陸機の入洛以前にすでに一應の形が出来ており、それに折りこまれて改作の手を加えていったものと思われる。こうして完成された「文賦」こそは、陸機の文學理論の集大成と言えるものであり、それを見ることによつて、陸機の抱いていた文學觀を理解することが可能であると考えられる。それでは次に、「文賦」の内容を見てみよう。

2 「文賦」の内容

陸機の「文賦」は、『文選』卷十七に収められている。『文選』では、賦を「京都」「郊祀」「耕籍」「畋獵」「紀行」「遊覽」「宮殿」「江海」「物色」「鳥獸」「志」「哀傷」「論文」「音樂」「情」に分類して収めているが、「文賦」は「論文」の中に、此の作品のみが収録されている。

「文の賦」とは、文章を如何に書けばよいのかという問題について、賦の形式を借りて述べられた文學・文章論であり、全體は序を含めて十六段から成っている。以下、陸機の主張を詳細に知るために、その全文を挙げることにする。

まずその序では、「文賦」制作の動機と、その内容について、次のように述べる。

余每觀才士之所作、竊有以得其用心。夫放言遺辭、良多變矣、妍蚩好惡、可得而言。每自屬文、尤見其情。恒患意不稱物、文不逮意。蓋非知之難、能之難也。故作文賦、以述先士之盛藻、因論作文之利害所由。佗日殆可謂曲盡其妙。至於操斧伐柯、雖取則不遠、若夫隨手之變、良難以辭述。蓋所能言者、具於此云。

余 才士の作る所を觀る毎に、竊かに以て其の用心を得る有り。夫れ言を放にし辭を遣ること、良に變多きも、妍蚩 好惡、得て言ふ可し。自ら文を屬する毎に、尤も其の情を見る。恒に意は物に稱はず、文は意に逮ばざるを患ふ。蓋し知るの難きに非ず、能くするの難きなり。故に「文の賦」を作りて、以て先士の盛藻を述べ、因りて作文の利害の由る所を論ず。佗日 殆ど其の妙を曲盡すと謂ふ可し。斧を操りて柯を伐るに至りては、則を取る事遠からずと雖も、夫の手に隨ふの變の若きは、良に辭を以て逮び難し。蓋し能く言ふ所の者、此に具すと云ふ。

私は文才のある人の作品を見るたびに、その心遣いをうかがい知ることが出来る。そもそも言葉の使い方は實に多様ではあるが、その巧拙優劣については、指摘することが出来る。自分で文章を書いてみれば、ことに其の様子がよく分かる。いつも氣に掛かることは、我が氣持ちが對象をうまく捉えられていなかったり、氣持ちがうまく表現できな

かったりすることである。要するにこれは認識の難しさではなく、表現することの難しさであろう。そこで、私は「文の賦」を作つて、ここに先人の勝れた文章について述べて、次いで創作の際に、いかにしたら好いもの悪いものができるかを論じた。後日見ると、創作の要點は完全に盡くしてあるといえるように思われる。さて、斧を手にして斧の柄を切り取ろうとするとき、手本は身近にあるけれども、それを切るとき力の入れ具合などは、とても言葉では表現できない。とはいえ、文章について考えられるだけのことは、以下に述べ盡くしたつもりである。

- ①用心——創作における心理をいう。
- ②放言遺辭——言語表現。
- ③其情——文章の實情。
- ④非知之難能之難也——『尚書』說命中に「之を知ることの難きにあらず、之を行なふこと、惟れ難し」とある。
- ⑤操斧伐柯——『毛詩』邶風・伐柯に「柯を伐る 柯を伐る、其の則 遠からず」とある。手本が身近にあることに喩える。
- ⑥若夫隨手之變 良難以辭逮——『莊子』天道篇にある輪扁の話に基づく。

『莊子』天道篇にある輪扁の話、すなわち「輪を斲るに、徐ろにすれば則ち甘にして固からず、疾かにすれば則ち苦にして入らず。徐ろならず疾かならざるは、之を手にて得て心に應ず。口 言ふこと能はず、數の焉を其の間に存する有り」と、言葉では言い表し難い微妙な力の入れ具合、つまりは文章制作における要點を、全て述べ盡くしてある、というのである。

さて、最初の段では、文章制作における創作の動機について述べられている。

(1) 佇中區以玄覽、頤情志於典墳。遊四時以歎逝、瞻萬物而思紛。悲落葉於勁秋、喜柔條於芳春。心慄慄以懷霜、志眇眇而臨雲。詠世徳之駿烈、誦先人之清芬。遊文章之林府、嘉麗藻之彬彬。慨投篇而援筆、聊宣之乎斯文。

中區に佇ちて以て玄覽し、情志を典墳に頤ふ。四時に遊ひて以て逝くを歎き、萬物を瞻て思ひは紛る。落葉を勁秋に悲しみ、柔條を芳春に喜ぶ。心は慄慄として以て霜を懷き、志は眇眇として雲に臨む。世徳の駿烈を詠じ、先人の清芬を誦す。文章の林府に遊び、麗藻の彬彬たるを嘉す。慨として篇を投じて筆を援り、聊か之を斯の文に宣ぶ。

しかるべき所に佇んで深く萬物を觀察し、三墳五典の書を読んで思いを養っていると、四時の推移に従ってその過ぎ去るのを嘆いたり、萬物をながめながら、感情の亂れることがある。厳しい秋には落葉を見て悲しんだり、かぐわしい春になると柔らかな枝を見て喜んだりすることがある。また、心が引き締まってくると清らかな霜のことが思われ

るし、志が遠大になってくると高い雲に對する思いが沸いてくる。また、徳のある人の行ないを詠じたり、前代の優れた人の美しい行ないを歌ったりする。また、文章の林や倉に遊んで多くのものを読んだり、文質彬彬たる美しい文章を楽しんだりする。このようにしているうちに感興がわいてきて、古い書物を打ち捨てて筆を執り、それを文章に述べようと考へる。

①典墳—三墳（伏犧・神農・黃帝の書）と五典（少昊・顓頊・高辛・唐・虞の書）をいう。②彬彬—うまく均整がとれているさま。『論語』雍也篇に「子曰く、質、文に勝てば則ち野。文、質に勝てば則ち史。文質彬彬として、然る後に君子なり」とある。

萬物を觀察し、三墳五典の書を読むことによつて情志を養ひ、その情志が四時の推移によつて刺激を受け、また徳を有する人の行ないや前代のすぐれた文章に刺激された結果、文章制作の欲求が起ることを言う。次の段では、文學における想像力の必要性を述べる。

(2)其始也、皆収視反聽、耽思傍訊。精鶩八極、心遊萬仞。其致也、情瞳矐而彌鮮、物昭晰而互進。傾羣言之瀝液、漱六藝之芳潤。浮天淵以安流、濯下泉而潛浸。於是沈辭佛悅、若遊魚銜鉤而出重淵之深。浮藻聯翩、若翰鳥纒繳而墜會雲之峻。収百世之闕文、採千載之遺韻。謝朝華於已披、啓夕秀於未振。觀古今於須臾、撫四海於一瞬。

其の始めや、皆な収視反聽、耽思傍訊す。精 八極に鶩せ、心 萬仞に遊ぶ。其の致るや、情 瞳矐として彌々鮮やかに、物 昭晰にして互ひに進む。羣言の瀝液を傾け、六藝の芳潤に漱ぐ。天淵に浮んで以て安流し、下泉に濯いで潛浸す。是に於て沈辭佛悦として、遊魚の鉤を銜んで重淵の深きを出づるが若し。浮藻聯翩として、翰鳥の繳に纒りて會雲の峻きより墜つるが若し。百世の闕文を収め、千載の遺韻を採る。朝華を已に披けるに謝り、夕秀を未だ振かざるに啓く。古今を須臾に觀、四海を一瞬に撫す。

文章を作ろうとするとき、初めは、何も見ず何も聽かず、精神を集中して考えを巡らし、精神を八極の外にまで馳せ、心を萬仞の高さにまで遊ばせる。文を作る氣持ちは熱すると、作者の思いは明らかにになり、ますますはつきりとしてくるし、書く對象とするものも次第にはつきりしてくる。かくて、多くの言葉の滴りのすべてを傾け注いでその中で氣持ちを洗い、六藝の芳潤の中で氣持ちを洗っていると、天の川に浮かんで安らかに流れるがごとく、地下の泉で身を洗い深々と浸るがごとく氣持ちが落ち着いてくる。そこで、重い言葉がぼつぼつと出てくるが、それは泳いでいる魚が釣り針に掛かって深い淵

の深みから出てくるよう。軽い言葉がひらひらと出てくるが、それは飛ぶ鳥が後いんぐさに掛かって高い雲の彼方から落ちてくるようなものである。百世の間、見ることもなかった表現をとり、千年このかた使われたことのない言葉を採用して書こうとする。開いてしまった朝の花は捨てて、まだ開かない夕べの花を開かせようとする。かくして古今を瞬間に見て取り、四海を一瞬にとらえてしまふ。

①八極—世界の果て。 ②六藝—易・詩・書・禮・樂・春秋を言う。 ③浮天淵以安流濯下泉而潛浸—文思が定まってくることを表現したもの。 ④闕文—疑問のため、空格にされた文字。『論語』衛靈公篇に「子曰く、吾は猶ほ史の缺文に及ぶなり」とある。 ⑤撫四海於一瞬—『莊子』在宥篇に「老聃曰く、人心は其の疾すさまじかなること、俛仰ふいあうの間にして、再び四海の外を撫す」とある。

次の段では、構想と著述の問題について述べる。

(3) 然後選義按部、考辭就班。抱景者咸叩、懷響者畢彈。或因枝以振葉、或沿波而討源。或本隱以之顯^①、或求易而得難。或虎變而獸擾、或龍見而鳥瀾。或妥帖而易施^②、或岨山而不安。磬澄心以凝思、眇衆慮而爲言。籠天地於形内、挫萬物於筆端。始躑躅於燥吻、終流離於濡翰。理扶質以立幹、文垂條而結繁。信情貌之不差^③、故每變而在顏。思涉樂其必笑、方言哀而已歎。或操觚以率爾、或含毫而遂然。

然る後 義を選び部を按じ、辭を考へ班に就く。景を抱く者は咸く叩き、響きを懐く者は畢く彈ず。或いは枝に因りて以て葉を振るひ、或いは波に沿つて源を討ぬ。或いは隱に本づいて以て顯に之き、或いは易きを求めて難きを得。或いは虎變して獸擾し、或いは龍見して鳥瀾す。或いは妥帖して施し易く、或いは岨語して安からず。澄心を磬して以て思ひを凝らし、衆慮を眇かにして言を爲す。天地を形内に籠め、萬物を筆端に挫く。始めには燥吻に躑躅し、終りには濡翰に流離す。理は質を扶けて以て幹を立て、文は條を垂れて繁を結ぶ。信に情貌の差はざる、故に毎に變じて顔に在り。思ひ樂しみに涉れば其れ必ず笑ひ、方に哀しみを言ひて已に歎く。或いは觚を操りて以て率爾たり、或いは毫を含んで遂然たり。

さてそれから、内容のいかんによって段落をつけ、表現のいかんによって排列を考えることになる。書く對象に形があれば、あちこち叩き盡くして形をとらえようとし、音が出るものなら、それをあれこれ弾き試して音を知ろうとする。さて、表現の方法は時には枝を頼りにして葉を茂らすこともあるし、時には流れに沿って水源を尋ねることもあ

る。また、時には隠すことを中心としながら、明らかに becoming していくこともあるし、易しくしようとしながらも難しいものになってしまうこともある。また、時には虎の毛が変わるごとく美しく、また、獣の亂れ走るがごとく模様のあることもある。時には龍が雲の上に現れるように勢いがあり、また、鳥が波間に浮かぶようにゆったりとしたものになることがある。時には穏やかで書きやすい表現のこともあるし、時には出入りがあった不安定な表現のこともある。かくて、表現の方法が定まってくると、ここで清き心を盡くしつづつ思いを凝らし、あらゆる考えを盡くして言葉を考え出す。天地の廣さも文章の中に閉じこめられ、萬物もすべて筆端に書き取られてしまう。書き始めは、言葉は出てこないで、口先も乾いて筆は進まないが、終わりには、濡れた筆から墨が流れ出て、どンドン筆が進む。要するに文章というものは、その内容は木が根によって幹を立てているようなものであるし、表現は木が枝を垂れて葉を茂らせているようなものである。誠に心情と容貌とが一致しているようなもので、心情の変わることと顔に現われ、内容と表現とは一致するものである。とはいえ、書くときには紙を取ればすぐできあがるときもあるし、筆を口に含みつづばんやり考えているときもある。

①或本隠以之顯——抽象的筆法から、やがて具體的なものになる。②虎變——虎の毛が季節につれて抜け變わり、模様が美しく變わること。『周易』革卦・象傳に「大人は虎のごとく變ず、その文炳かなり」とある。③龍見——龍のような現われかたをする。『莊子』在宥篇に「故に君子、苟も能く其の五臟を解く無く、其の聰明を擢く無くんば、尸のごとく居りて龍のごとく見はる」。④妥帖——施しやすいさま。⑤岨嶠——安定しないさま。⑥爲言——『周易』説卦傳に「神なるものは、萬物に妙にして言を爲すものなり」とある。⑦躑躅——行き悩むさま。⑧性情貌之不差——『楚辭』九章・惜誦に「言と行と其れ跡づくべく、情と貌と其れ變らず」とある。⑨操觚——「觚」は方形の木板で、古人はそれに字を書いた。木簡。

これに續いて、文章の價值と効用について、次のように述べる。

(4)伊茲事之可樂、固聖賢之所欽。課虛無以責有、叩寂莫而求音。函綿邈於尺素、吐滂沛乎寸心。言恢之而彌廣、思按之而逾深。播芳蕤之馥馥、發青條之森森。粲風飛而森豎、鬱雲起乎翰林。

伊れ茲の事の樂しむ可き、固に聖賢の欽ふ所なり。虚無に課して以て有を責め、寂莫を叩いて音を求む。綿邈を尺素に函み、滂沛を寸心に吐く。言を恢にして彌々廣く、思ひ之を按じて逾々深し。芳蕤馥馥たるを播き、青條の森森たるを發す。粲として風

のごとく飛んで登し、鬱として雲のごとく翰林に起る。

さて、文章を作る楽しさは、もとより聖人賢人の重視していたことである。虚無から考へだして有を求め、聲なきものから叩き出して音聲を求めるようなものであり、限りない想像を一尺の絹に載せ、盛んに沸き出る想像を一寸の胸の中から吐き出す。言葉は使えば使うほど廣がってくるし、内容は考えれば考えるほど深まってくる。その文章の美しさは、例えてみると芳しい花が馥郁たる香を出し、青い枝がこんもり茂っており、鮮やかに風のごとく飛び、つむじ風のごとく舞い立って、盛んに雲が筆の林から起るようなものである。

①伊茲事之可樂固聖賢之所欽——『左氏傳』襄公二十五年に「仲尼曰く、志に之あり、言以て志を足し、文以て言を足すと。言はざれば誰か其の志を知らん。言の文無きは、行はれて遠からず」とある。

續く段では、文體について述べ、具體的に「詩・賦・碑・誄・銘・箴・頌・論・奏・説」の文體を擧げて、それぞれについて其の要點を説いている。

(5)體有萬殊、物無一量。紛紜揮霍、形難爲狀。辭程才以效伎、意司契而爲匠。在有無而僂俛、當淺深而不讓。雖離方而邀員、期窮形而盡相。故夫夸目者尚奢、恆心者貴當。言窮者無隘、論達者唯曠。詩緣情而綺靡、賦體物而瀏亮。碑披文以相質、誄纏綿而悽愴。銘博約而溫潤、箴頓挫而清壯。頌優遊以彬蔚、論精微而朗暢。奏平徹以閑雅、説煒曄而譎誑。雖區分之在茲、亦禁邪而制放。要辭達理舉、故無取乎冗長。

體に萬殊有り、物に一量無し。紛紜として揮霍し、形 状を爲し難し。辭は才を程して以て伎を效し、意は契を司りて匠を爲す。有無に在りて僂俛し、淺深に當りて讓らず。方を離れて員を邀ると雖も、形を窮めて相を盡くさんことを期す。故に夫の目に夸る者は奢を尚び、心に恆ふ者は當を貴ぶ。窮を言ふ者は隘無けんや、達を論ずる者は唯だ曠なり。詩は情に緣りて綺靡なり、賦は物を體して瀏亮たり。碑は文を披いて以て相質なり、誄は纏綿として悽愴なり。銘は博約にして溫潤なり、箴は頓挫して清壯なり。頌は優遊して以て彬蔚なり、論は精微にして朗暢なり。奏は平徹にして以て閑雅なり、説は煒曄にして譎誑なり。區分かれて茲に在りと雖も、亦た邪を禁じて放を制す。辭達して理舉がらんことを要す、故に冗長を取ること無し。

文體にはいろいろあるし、萬物は同じ形ばかりではない。兩者は入り亂れて變化し、その様子は名状しがたいほどである。そこで文章を作るときには、言葉は我が才能を現し

て技巧的にし、内容は要點をつかんで組み立てるようになる。無から有を生ずるように
思いを巡らして努力し、軽い言葉・重い言葉のどちらもおろそかにせず、うまく使いこ
なす。かくして文章は變化するが、いづれも萬物の形を極め、その相を盡くそうとする。
しかし、萬物の形や相が異なっているので、それをとらえる人によって文章も変わって
くるものである。その人が視覚を問題にすれば、その人の文章は浮艶を尊び、納得のい
くことを喜ぶ人は筋の通った文章を尊ぶ。困窮や貧賤を口にする者は狭苦しい文章を書
くし、世事を超越したことを論ずる者は伸び伸びした文章を書く。そこで文體には次の
ようなものがある。〈詩〉は情を本にして美しいもの、〈賦〉は萬物を映して清らかに
すべきもの、〈碑〉は文をつけて質を助け、〈誄〉は情が長々と痛ましく、〈銘〉は内
容が廣く、表現は締まりつつ穩やかに、〈箴〉は屈折があつて清壯に、〈頌〉はゆつた
りとして華やかに、〈論〉は詳しく伸びやかに、〈奏〉は分かりやすく上品に、〈説〉
ははっきりしていて人をやり込めるように。かくのごとく文體に區別があるとはいへ、
それぞれにおいて横道にそれたり出過ぎてはいけない。要は、表現は意味を十分に傳え
ていることであり、内容は對象をうまくとらえていることである。したがって、長つた
らしいのはよくない。

- ① 司契——『老子』第七十九章に「有徳のひとは契を司り、無徳のひとは徹を司る」とある。
② 在有無而僂僂——「僂僂」は努めに努めること。『毛詩』邶風・谷風に「何をか有りとし何をか無しとせん、びだん黽勉して之を求む」とある。
③ 詩縁情而綺靡——以下は文體の解説。曹丕の『典論』論文と比べると、〈議・書〉が無くなり、〈碑・箴・頌・説〉が増えている。
④ 碑——人の功徳を述べ、石碑に記すための文體。
⑤ 誄——死者を悼み、哀れみを述べる文體。
⑥ 銘——人の功徳を稱して、後世子孫に示すための文體。
⑦ 箴——得失を諷刺するための文體。
⑧ 頌——功績をほめたたえるための文體。
⑨ 論——善悪を評議するための文體。
⑩ 奏——上奏文。
⑪ 説——義理を解釋し自己の意見を述べるための文體。
⑫ 辭達——『論語』衛靈公篇に「子曰く、辭は達するのみ」とある。

文體についてこのように述べた後、文章における音調の調和の必要性について、次のように言う。

- (6) 其爲物也多姿、其爲體也屢遷^①。其會意也尚巧、其遣言也貴妍。暨音聲之迭代、若五色之相宣。雖逝止之無常、固崎錡^②而難便。苟達變而識次、猶開流以納泉。如失機而後會、恒操末以續顛。謬玄黃之袞敘、故渙忍而不鮮^③。

其の物爲るや姿多く、其の體爲るや屢々遷る。其の意に會するや巧を尚び、其の言を遣るや妍を貴ぶ。音聲は迭ひに代はるに暨んでは、五色の相ひ宣ぶるが若し。逝止の常無く、固に崎錡として便し難しと雖も、苟に變に達して次を識らば、猶ほ流れを開いて以て泉を納るるがごとし。如し機を失ひて後に會し、恒に末を操りて以て顛に續けば、玄黄の袂敝を謬り、故に澳忍として鮮やかならず。

といったい、萬物は多様な姿をしているものだが、それを映す文章の形もしばしば變化するものである。とはいえ、文章の筋の立て方は巧みにやらねばならないし、言葉遣いは美しさを目標とする。かくて文章のリズムが整ってくると、それは例えてみると五色の糸が組み合わされてあや絹となるようなものである。リズムというものは變化して常のないもので、誠に落ち着かなくて捉えにくいものであるが、もしもその變化を理解してその流れを了解すれば、うまくリズムに文章を乗せることができ、あたかも流れを切り開いて泉を導き入れるようにたやすくできるものである。もし、文章のリズムの變化の時機を誤り、順序を間違ったり、終わりのものを始めの方に續けてばかりいると、それはあたかも縫い取りが黒と黄の順序を誤ったために、ごちゃごちゃになって美しくないようなものである。

①其爲體也屢遷——『周易』繫辭傳下に「易の書たるや遠くすべからず、道たるや屢々遷る。變動して居らず、六虚に周流す」とある。②會意——意に了解すること。文章の内容、筋の立て方をいう。③崎錡——落ち着かないさま。『楚辭』招隱士に「敦岑崎錡として、硠硠磳磳たり」とある。④玄黄——黒と黄。『禮記』祭義に「良日に及びて、夫人纁纁。三たび手を盆にす。遂に之を朱緑にし、之を玄黄にし、以て黻黻文章に爲る」とある。⑤澳忍——汚らわしいさま。垢濁。『楚辭』九歎・惜賢に「澳忍の流俗を切す」とある。

次に、文章には法則があり、この法則に従って、文章を作らなければならないということ述べる。

(7)或仰逼於先條、或俯侵於後章。或辭害而理比、或言順而義妨。離之則雙美、合之則兩傷。考殿最於錯銖、定去留於毫芒。苟銓衡之所裁、固應繩其必當。

或いは仰いで先條に逼り、或いは俯して後章を侵す。或いは辭害ありて理比し、或いは言順にして義妨ぐ。之を離るれば則ち雙び美しく、之に合すれば則ち兩つながら傷る。殿最を錯銖に考へ、去留を毫芒に定む。苟に銓衡の裁する所、固に繩に應じて其れ必ず

當る。

文章には前後の法則があり、後のものが前の文章に近づいたり、また始めのものが後の文章に入り込んだりするのはいくつかない。前段と後段で、言葉には互いに相違があるが内容は連なっていたり、言葉は連なっているが内容は互いに違っていたりするのはいくつかない。このような文章は、切り離すとそれぞれ立派であるが、合わせるとどちらもまづくなる。文章を作るには、銚銖のような細かい點にまで言葉の適不適を考え、毫芒のような細部にわたって言葉の取捨選択をしなければならぬ。もしこのようにきちんとやれば、言葉は法則どおりにうまく使われるであろう。

①殿最—最上位を「最」とし、最下位を「殿」という。上功と下功。②銚銖—どちらも微少な重さの単位。③毫芒—「毫」は毛、「芒」は稻の穂先。班固の「答賈戲」に「獨り意を宇宙の外に擡べ、思ひを毫芒の内に鋭くす」とある。④銚銜—「銚」は分銅、「銜」は秤のさお。量り調べること。⑤應繩—墨なわにびったり合う。『莊子』馬蹄篇に「匠人曰く、我 善く木を治む。曲がれる者は鉤に中り、直なる者は繩に應ず」とある。

文章における警策のことばの必要性については、次のように言う。

(8)或文繁理富、而意不指適。極無兩致、盡不可益。立片言而居要、乃一篇之警策。雖衆辭之有條、必待茲而效績。亮功多而累寡、故取足而易。

或いは文は繁く理は富めども、意 指適せず。極まりて兩つながら致す無く、盡きて益す可からざるとき、片言を立てて要に居る、乃ち一篇の警策なり。衆辭の條有りと雖も、必ず茲を待ちて績を效す。亮に功多くして累ひ寡し、故に足るを取りて易へず。

言葉をたくさん使い、内容を豊富に盛り込んでも、意圖するところが十分に表現できないことがある。このときには内容的にはこのうえ盛り込むことはできないし、言葉もこれ以上使うものがない。かかる場合、ちよつとしたよい言葉を取り出してポイントに置けば、その一篇の警策となるであろう。さまざまな言葉が使われていても、この警策の言葉を使えば、必ず効果を上げるものである。誠に警策の言葉を使えば効果は多く、缺點は少なくなる。言葉を一つ加えるだけで文章を改変しなくてもよいことになる。

①片言—『論語』顔淵篇に「子曰く、片言 以て獄を折むべき者は、其れ由なるか」とある。②警策—曹植の「應詔詩」に「僕夫 警策し、平路に是れ由る」とある。

「警」は戒める、「策」は鞭。すなわち馬に鞭を當てて足を速くさせるように、「片言」を用いて文章に鮮明さを加えることを「警策」というのである。そうして文章を作る際にもしも前人と偶然に一致した表現があった場合には、それを捨てるべきであると、次のように述べる。

(9) 或藻思綺合、清麗千眠^①。炳若緝繡^②、悽若繁絃^③。必所擬之不殊、乃閨合乎囊篇^④。雖杼軸^⑤於予懷、忱侘人之我先。苟傷廉而愆義、亦雖愛而必捐。

或いは藻思綺合して、清麗千眠。炳として緝繡の若く、悽として繁絃の若きも、必ず擬する所に殊ならず、乃ち閨に囊篇に合ふことあり。予が懷に杼軸すと雖も、侘人の我に先んずることを怵る。苟に廉を傷りて義を愆れば、亦た愛すと雖も必ず捐つ。

文章の構想があや絹のように美しくまとまり、美しく光り輝いたものとなり、彩れる縫い取りのごとく美しく、激しい演奏のごとく人を感動させるものとなって、それが前人の文章と同じであり、偶然に一致することがある。そのときは、自分自身でまとめた構想ではあっても、他人が自分よりも先に立てたものであることを残念に思い、廉恥の道を傷つけ道義を誤るものとして、その文章が好きであっても捨ててしまう。

①千眠—光色の盛んなさま。 ②緝繡—「緝」は色とりどりであること。「繡」は五色の備わっていること。 ③繁絃—蔡邕の「琴の賦」に「繁絃 既に抑へられ、雅音復た揚がる」とある。 ④囊篇—「囊」は昔。古人の作った文章。 ⑤杼軸—「杼」は機の横糸を通すための具、「軸」は縦糸を受ける具。杼と箴。文章を組み立てることに例えた。

続く段では、文章中の優れた語句が對偶となる言葉を求められない場合があるけれども、それはそれでよく、また、つまらない語句でも、それはそれとしての働きがあるということとを述べている。

(10) 或考發穎豎、離衆絶致。形不可逐、響難爲係。塊孤立而特峙、非常音之所緯。心牢落而無偶、意徘徊而不能埒。石鑑玉而山輝、水懷珠而川媚。彼榛栝之勿翦、亦蒙榮於集翠。綴下里於白雪、吾亦濟夫所偉。

或いは考ののごとく發し穎のごとく豎ち、衆を離れ致を絶つ。形 逐ふ可からず、響き係を爲し難し。塊として孤立して特り峙ち、常音の緯する所に非ず。心 牢落して偶無く、

意 徘徊して掃る能はず。石は玉を韞んで山は輝き、水は珠を懷きて川は媚ぶ。彼の榛栝の翦ること勿き、亦た榮を集翠に蒙る。下里を白雪に綴るも、吾亦た夫の偉とする所を濟す。

また、文章の中の言葉が、昔の花のごとくぱつんと開いていたり、穎のごとく獨り立ちしていて、衆辭と懸け離れたり、すばらしい趣を持っていたりすることがある。その言葉のすばらしさは、影に例えてみれば、形も追いつくことはできぬものであり、音聲に例えてみれば、響きもつなぎ止められぬものである。それはただ一つの衆辭の中に孤立していて、普通の言葉の匹敵しうるものではない。かかるすばらしい言葉を書いた作者の心は、對偶となる言葉を求められぬ寂しさのあまり、その言葉を捨ててしまおうとするが、そうもできないでいる。しかし、このすばらしい言葉があることは、たとえ石の中に美玉があつて、山が美しく見えたり、水の中に珠玉があつて、川の流れが美しく見えるのと同じである。また、榛や栝のごときつまらぬ木であっても、翡翠がやつて來れば美觀を増すものである。下里の俗語と白雪の雅樂とはいっしょに續けられぬものはあるが、それを續けてみると、また優れたものにすることもできる。

①石韞玉而山輝水懷珠而川媚——『荀子』勸學篇に「玉 山に在りて草木は潤ひ、淵珠を生じて崖は枯れず」とある。②榛栝——「榛」は小栗、「栝」は矢幹を作るに適した木。『毛詩』大雅・旱麓に「彼の旱麓を瞻れば、榛栝は濟濟たり」とある。

③綴下里於白雪——「下里」は俗語。「白雪」は師曠が作ったという雅なる曲。宋玉の「對楚王問」に「客に郢中に歌ふ者あり。其の始めに下里・巴人を曰ふに、國人屬きて和する者、數千人。其の陽阿・薤露を爲すや、國中屬きて和する者、數百人。其の陽春・白雪を爲すや、國中屬きて和する者、數十人に過ぎず」とある。

これに續く段では、文章の「五病」、すなわち、短文を綴ること、不健全な文章を作ること、筋を通すことを考えないで珍しさを狙った文章を書くこと、感情にまかせて調子よく文章を書くこと、あっさりとし過ぎた簡約な文章を書くこと、について次のように述べている。

(11)或託言於短韻、對窮跡而孤興。俯寂寞而無友、仰寥廓而莫承。譬偏絃之獨張、含清唱而靡應。或寄辭於瘁音、徒靡言而弗華。混妍蚩而成體、累良質而爲瑕。象下管之偏疾、故雖應而不和。或遺理以存異、徒尋虛以逐微。言寡情而鮮愛、辭浮漂而不歸。猶絃么而徽急、故雖和而不悲。或奔放以諧合、務嘈囋而妖冶。徒悅目而偶俗、固高聲而曲下。

寤防露與桑間、又雖悲而不雅。或清虛以婉約、每除煩而去濫。闕大羹之遺味、同朱絃
一之清汎。雖一唱而三歎、固既雅而不艶。

或いは言を短韻に託し、窮跡に對して孤り興る。俯しては寂寞として友無く、仰いでは
寥廓として承くる莫し。偏絃の獨り張れるに譬へ、清唱を含んで應ずる靡し。或いは辭
を瘁音に寄せ、徒に言を靡にして華ならず。妍蚩を混じて體を成し、良質を累ねて瑕を
爲す。下管の偏疾に象たり、故に應ずと雖も和せず。或いは理を遺てて以て異を存し、
徒に虚を尋ねて微を逐ふ。言は情寡くして愛鮮く、辭は浮漂して歸らず。猶ほ絃の玄に
して微の急なるがごとし、故に和すると雖も悲しまず。或いは奔放して以て諧合すれば、
務めて嗜嚙して妖冶たり。徒に目を悦ばせて俗に偶するも、固に聲高くして曲下る。防
露と桑間とを寤る、又た悲しと雖も雅ならず。或いは清虚にして以て婉約なれば、毎に
煩を除いて濫を去る。大羹の遺味を闕き、朱絃の清汎なるに同じ。一唱して三歎すと雖
も、固に既に雅にして艶ならず。

短文を綴ることは、行く道が盡きて一人ぼつんと立っているようなもので、孤立の文章
となる。その文章は前を向いても寂しくて類するものがなく、後ろを向いても受け継ぐ
ものがまったくないという状態である。例えてみると、一本の弦を張っただけで澄んだ
音は出るが、それに共調する音がないのと同じである。また、不健全な文章を作れば、
ただ表現がなよよしているばかりで光がない。よいものと悪いものを一緒にすれば、
よいものを傷つけることになる。例えてみれば、下管の音楽はやたらに急激であるから、
他の音楽と一緒になくても調和しないようなものである。また、筋を通すことを忘れて
珍しいことにとらわれた文章を書くとき、ただ上辺ばかりをねらい、あいまいな表現ばか
りを追い掛けて、言葉には感情がこもらず、作品に對する作者の熱意が見られぬし、言
葉は浮ついて内容と一致しない。例えてみれば、弦が細くて調べが急であるから、調和
はするが、あまりにせわしくて悲しい感情が出ないようなものである。また、文章の調
子は、感情の赴くままに調子よく書くと、それは特にさらさらと美しくできあがる。そ
して、それは人々の目を喜ばせ通俗にかなったものとなるが、もとより音聲はよくても
曲調はつまらぬものである。例えてみると、「防露」と「桑間」の詩は意味はよく分か
るが、悲しみの感情は催しても此の詩は雅音ではないのと同じである。また、あっさり
とした簡約な文章を書くとき、それはいつも複雑さが除かれ亂雑さがなくなっているもの
である。例えてみると、大羹においては五味は持たぬがしかるべきこくがある、そのこ
くが無くなったり、清廟の朱絃の音楽が淡く質朴であるのと同じようなものである。一
人がまず唱して三人が嘆ずるとはいえ、雅にすぎて艶でない。

①瘁音—淫靡な言葉、道徳的でない言葉。②徒靡言而弗華—「華」は内容のある美しさ、「靡」は内容のない美しさ。③象下管之偏疾—「下管」は、儀式のときに堂下で笙などの管楽器を主として行なわれる音楽。「禮記」明堂位に「清廟を升歌し、下管は武を象る」とある。④不歸—いつもふらふらして落ち着かない。

⑤徽急—「徽」は調べのこと。『淮南子』主術篇に「鄒忌 一たび徽して、威王の終夕悲しむは、憂ひに感ずればなり」とある。⑥寤防露與桑間—「防露」は、古えの淫曲の名か。「桑間」は、亡國の音。「禮記」樂記に「桑間濮上の音は、亡國の音なり」とある。⑦闕大羹之遺味—固既雅而不艶—「大羹」とは調味料を用いない肉汁。「朱紘」は煮て水に浸し、柔軟にした朱糸で作った弦。聲は濁っている。「一唱而三歎」は、一人が歌い、三人がそれに和すること。「禮記」樂記に「清廟の瑟は、朱紘にして疏越、壹倡して三嘆し、遺音あるものなり。大饗の禮は、玄酒を尚び、腥魚を俎にし、大羹 和せず、遺味あるものなり」とある。つまり、清廟の樂は、音楽としては聞くに足らないようなものであるが餘韻があり、先王を祭るための大饗の飲食は、味は大したことはないが、餘味があり、いずれも人々に徳を忘れざらしめるものであるという。

續いて文章の變化の微妙な點については、口では説明できないものであり、體驗によつて理解することが必要であることを述べる。

(12) 若夫豐約之裁、俯仰之形、因宜適變、曲有微情。或言拙而喻巧、或理朴而辭輕。或襲故而彌新、或沿濁而更清。或覽之而必察、或妍之而後精。譬猶舞者赴節以投袂、歌者應絃而遺聲。是蓋輪扁所不得言、故亦非華說之所能精。

夫の豐約の裁、俯仰の形の若きは、宜しきに因り變に適へば、曲に微情有。或いは言拙にして喻へ巧みに、或いは理朴にして辭輕し。或いは故に襲りて彌々新に、或いは濁に沿りて更に清し。或いは之を覽て必ず察し、或いは之を妍いて而る後に精し。譬へば猶ほ舞者の節に赴きて以て袂を投じ、歌者の絃に應じて聲を遺るがごとし。是れ蓋し輪扁も言ふを得ざる所、故より亦た華説の能く精しうする所に非ず。

多彩な表現や簡潔な表現といった體裁、文勢の強弱といった調子については、それぞれにふさわしい場合には、それぞれの變化をみせるもので、文章の調子には微妙な變化が含まれていて一様ではない。表現がまずくても比喩的に巧みなものもあり、内容は質朴であっても表現が浮ついているものもある。古い表現を襲いながら新味を出すこともあ

り、重苦しい文章を書いても清らかな文章になることもある。これらは文章に微妙な變化があるからそうなるのである。その文章の微妙な點は、よくみれば必ず理解できるし、よく検討すれば精通できるものである。例えてみれば、舞を舞う者は音楽につれてそでを翻して舞うし、歌を歌う者は琴の弦に應じて聲を出すようなもので、音節や弦曲にはそれぞれ微妙な變化は、輪扁がかつて言ったごとく、口では言えないものだし、もとよりいかに言辭を費やしても明らかにできぬものである。

①微情—微妙な實情。變化のニュアンス。「楚辭」九章・抽思に「微情を結んで以て詞を陳ね、矯げて以て夫の美人に遺る」とある。②投袂—「左氏傳」宣公十四年に「楚子これを聞き、袂を投りて起つ」とある。③華說—効果のない説明。「論衡」起奇篇に「虚談は華葉の言に竟り、根の深き無し。安危の際、文人は與らず、徒に能く華說の効あるのみ」とある。

次の段では、立派な文章は、ほんの一すくいにしか満たないほど少ないものであり、またすぐれた文章は、小さな才知からは生まれえないということ述べている。

(13) 普辭條與文律、良余膺之所服。練世情之常尤、識前脩之所淑。雖濬發於巧心、或受於拙目。彼瓊敷與玉藻、若中原之有菽。同囊籥之罔窮、與天地乎竝育。雖紛諱於此世、嗟不盈於予掬。患挈瓶之屢空、病昌言之難屬。故蹠蹠於短垣、放庸音以足曲。恒遺恨以終篇、豈懷盈而自足。懼蒙塵於叩缶、顧取笑於鳴玉。

辭條と文律を普くするは、良に余が膺の服する所なり。世情の常尤を練ばば、前脩の淑しとする所を識らん。濬く巧心に發せりと雖も、或いは拙目を拙目に受く。彼の瓊敷と玉藻とは、中原に菽有るが若し。囊籥の窮まり罔きに同じく、天地と與にして竝び育す。此の世に紛諱すと雖も、嗟予が掬に盈たず。挈瓶の屢々空しきを患へ、昌言の屬ぎ難きを病ふ。故に短垣に蹠蹠し、庸音を放にして以て曲を足す。恒に恨みを遺して以て篇を終ふ、豈に盈を懷きて自ら足れりとせんや。塵を蒙りて缶を叩くを懼れ、顧て笑ひを鳴玉に取る。

文章の章句や音律について廣く見渡すことは、私の常に心掛けているところである。そうすることによって、今の世人のいつも陥る缺點をよく知り、前賢の長所をよく知るのである。作者の熟練した心の奥から出てくる文章でも、文章を見る目のない者から笑われることがある。しかし瓊を敷き詰めたような、また玉藻のような立派な文章は、「野

原に豆があつて人々がこれを拾うが、そのように人々はよい道を踏み行なう」というように、人々に愛されるものである。また、ふいごから風がいつまでも出るように、立派な文章はいつまでも天地とともに残つてゆくものである。さて、この世の中に文章はたくさん作られるが、立派な文章はほんの一すくいにしか満たぬのが残念である。手に持つ瓶はしばしば空になる、そのように小さな才知はしばしば盡きてしまうのは困つたことだし、立派な言葉が次々と出てこないのも困つたことである。そこで今の人材は才の不足から、短い文章をいじくり回し、平凡な表現で一篇を作り上げてしまふが、これではいつも不満足のうち書き上げることになるので、心中、満足なことがあるか。言つてみれば、ほこりをかぶつた缶をたたいて音が出ないのを氣にし、かえつて、澄んで鳴る玉から笑われるようなものであり、これは困つたことである。

①良余膺之所服——『禮記』中庸に「回や一善を得れば、則ち拳拳として服膺し、之を失はず」とある。②前脩——前代の、徳を修めた人。『楚辭』離騷に「審いかな吾は夫の前脩に法る、世俗の服するところに非ず」とある。③玉藻——天子の冠の飾り。

④若中原之有菽——『毛詩』小雅・小宛に「中原に菽あり、庶民これを采る。螟蛉、子あり、蜾蠃これを負ふ。爾の子を教誨するに、穀を式て之に似せしめん」とある。

⑤同爰籥之罔窮與天地乎竝育——『老子』第五章に「天地の間は、其れ猶ほ爰籥のごときか。虚にして屈さず、動きて愈々出づ」とある。廣大な宇宙には何もものもないが、無盡藏のエネルギーをその中に秘め、ふいごを動かせばいくらでも風が出てくるように、動けば動くほど、その中から萬象が現れてくるという意。

⑥不盈於予掬——「掬」は両手。『毛詩』小雅・采芣に「終朝、緑を采るも、一匊に盈たず。予が髪は曲局す、薄か言に歸りて沐せん」とある。⑦挈瓶——手に提げる小さな

なかめ。小知の人に喩える。『左氏傳』昭公七年に「挈瓶の知ありと雖も、守りて器を仮さざるは禮なり」とある。⑧昌言——正しいことば、立派なことば。『尚書』益稷に「帝曰く、來たれ、禹。汝も亦た昌言せよ」と。⑨蹠蹠——片足で歩くさま。

『莊子』秋水篇に「夔に謂ひて曰く、吾一足を以て蹠蹠して行く。予如ぶ無し。今、子は萬足を使ふ、獨り奈何」とある。夔は一本足の動物。蛇は百足。

⑩短垣——低いかき。ここは短い文章、つまらない文章の意。⑪終篇——班固の「答賈戲」に「顔淵は、簞瓢を樂しみ、孔は篇を西狩に終ふ」とある。⑫缶——瓦器。たたいても鳴らない。

續いて作文の感情の問題に觸れて、次のように言う。

(14) 若夫應感之會、通塞之紀、來不可遏、去不可止。藏若景滅、行猶響起。方天機之駿利、夫何紛而不理。思風發於胸臆、言泉流於脣齒。紛威蕤以馭遠、唯毫素之所擬。文徽以溢目、音泠泠而盈耳。及其六情底滯、志往神留。兀若枯木、豁若涸流。攬營魂以探蹟、頓精爽於自求。理翳翳而愈伏、思乙乙其若抽。是以或竭情而多悔、或率意而寡尤。雖茲物之在我、非余力之所勦。故時撫空懷而自惋、吾未識夫開塞之所由。

夫の應感の會、通塞の紀の若きは、來りて遏む可からず、去りて止む可からず。藏るること景の滅ゆるが若く、行くこと猶ほ響きの起こるがごとし。方に天機の駿利なる、夫れ何ぞ紛として理まらざる。思風 胸臆に發し、言泉 脣齒に流る。紛威蕤として以て馭遠たり、唯だ毫素の擬する所のままなり。文 徽徽として以て目に溢れ、音 泠泠として耳に盈つ。其の六情 底滯して、志の往きて神の留まるに及んでは、兀たること枯木の若く、豁たること涸流の若し。營魂を攬りて以て蹟を探り、精爽を頓して自ら求む。理は翳翳として愈々伏し、思ひは乙乙として其れ抽づるが若し。是を以て或いは情を竭して悔い多く、或いは意に率ひて尤め寡し。茲の物の我に在りと雖も、余が力の勦する所に非ず。故に時に空懷を撫して自ら惋む、吾 未だ夫の開塞の由る所を識らざるなり。

作者の感情が物事に感應するときや、文を作ろうとする感情が高まつたり低くなつたりする際のしくみは、なかなかとらえにくく、これらがやってくるときは防ぎようもなく、消え去るときには引き止めようもなく、人の力ではどうすることもできない。こうした感情は、隠れるときには日の光の消えるように、行き渡ることは音聲の響きわたるようである。これを優れた働きを持つ自然に比べてみると、なんとも亂れて法則のないものである。作文の感情は、胸のなかに風のようにわき起こり、その言葉は口から泉のように流れ出る。その勢いは盛んで群がってやってきて、ただそれを紙に書きつければ、ここにすばらしい文章が出来上がる。その文章は彩り美しく目もあやに、音調は涼やかに耳に満つるばかり。六情が働かなくなると、作者の志が動こうとしても精神がとどまらず動かぬからどうにもならず、あたかも枯れ木のように活動力がなく、かれた泉のように乾いてしまう。心を盡くして文章の眞理を探り出そうとし、心を込めてそれを追求しようとするが、眞理は覆われてますます隠れ、作文の感情を引き出そうとしても、なかなか引き出せない。かく作文には通と塞とがあり、作者の感情を込めて作っても残念に思うことがあるし、また、かつてにやっても誤りのないこともある。文を作ることは自分がやることではあるが、自分の力の及ぶところではない。そこで、しばしばむなししい思いをして嘆いたりする。私は作文の感情がなぜ高まつたりするのか、よく分からない。

①通塞——うまくいくことといかないこと。『周易』節卦の象傳に「戸庭を出でざるは、通塞を知らんとするなり」とある。②來不可遏去不可止——『莊子』達生篇に「生の來たるや却ぐ能はず、其の去るや止むる能はず」とある。③天機——自然の機能。『莊子』秋水篇に「螭なみか、蛇に謂ひて曰く、吾 衆足を以て行きて、子の足なきに及ばざるは、何ぞやと。蛇曰く、夫れ天機の動くところ、何ぞ易ふべけんや。吾 安んぞ足を以ひんやと」とある。④威蕤——盛んなさま。⑤馭よ迷——多いさま。⑥盈耳——『論語』泰伯篇に「子曰く、師し、藝の始め、關雎くわんしよの亂りは、洋洋乎として耳に盈みてるかな」とある。⑦六情——喜・怒・哀・樂・好・惡をいう。⑧兀若枯木——『莊子』齊物論篇に「顔成子游、前に立侍す。曰く、何の居やまぞ、形は固より槁木かうぼくの如くならしむ可く、心は固より死灰の如くならしむ可きか」とある。槁木は枯れた木、死灰は冷えきった灰で、ともに生氣のないもの。⑨管魂——ふらふらとして定まらない魂。『楚辭』遠遊に「管えん魄はくを載せて登霞とうかし、浮雲に掩おほはれて上征す」とある。⑩探蹟——隠れて明らかでないものを探り求めること。「蹟」は深く隠れて見えないもの。『周易』繫辭傳上に「蹟せきを探り隠かくを索もとめ、深く鉤かぎし遠を致し、以て天下の吉凶を定め、天下の變い壘がを成す者は、蒼せい龜きより大なるは莫なし」とある。⑪精爽——『左氏傳』昭公二十五年に「心の精爽、是を魂魄と謂ふ」とある。⑫乙乙——難出のさま。⑬竭情——『左氏傳』昭公二十五年に「夫子の家事 治まり、晉國に言ふに、情を竭して私なし」とある。⑭多悔——『淮南子』人間訓に「是の故に、人は皆な小害を輕んじ、微事を易かんず。是を以て悔い多し」とある。⑮寡尤——『論語』爲政篇に「子曰く、多く聞きて疑はしきを闕かき、慎みて其の餘りを言へば、則ち尤寡いそし」とある。

「夫の應感の會、通塞の紀の若きは、來りて遏む可からず、去りて止む可からず」（作者の感情が事物に感應したり、感情が高まったり低くなったりする仕組みについては、これがやられて來るときは防ぎようもなく、消え去るときには引き止めることもできない）と、作文の通塞について述べているが、結局のところ、「吾 未だ夫の開塞の由る所を識らざるなり」（私には作文の感情が何故に高まったり低くなったりするのか、よく分からないのである）と、陸機自身も此の問題については、明確な答を出していない。續く段では、文章の効用について以下のごとく述べて一篇を結んでいる。

(15) 伊茲文之爲用、固衆理之所因。恢萬里而無闕、通億載而爲津。俯貽則於來葉、仰觀象乎古人。濟文武於將墜、宣風聲於不泯。塗無遠而不彌、理無微而弗綸。配霑潤於雲雨、象變化乎鬼神。被金石而德廣、流管絃而日新。

伊れ茲の文の用爲る、固に衆理の因る所なり。萬里を恢いにして闕無からしめ、億載に通じて津を爲す。俯しては則を來業に貽し、仰いでは象を古人に觀る。文武を將に墜ちんとするに濟ひ、風聲を泯びざるに宣ぶ。塗遠きとして彌らざるは無く、理微なるとして綸めざるは無し。霑潤を雲雨に配し、變化を鬼神に象る。金石に被らしめて徳廣く、管絃に流して日に新たなり。

この文章の効用は、實にすべての事柄が、これによって通ずることである。萬里の地域にわたってどこにでも通ずるし、億年にわたって通ずる渡り場となる。文章によって法則を未來に傳え、また古人を文章によって見習うことができる。上は文王・武王の道に落ちぬようにさせ、下は風教を宣揚して滅びないようにする。文章はいかなる道理をも含んでしまふし、いかなる小さな道理までもつないでしまふ。雲雨の潤いと同じように人々を教育し、鬼神の變化と同じように計り知れない變化をする。すばらしい文章は、金石に刻まれ、また管絃に乗せられて、人々の盛徳を廣く傳え、永久に衰えぬようにさせるのである。

① 貽則——班固の「幽通の賦」に「巨天に浴りて夏を泯し、考愍みに違ひて以て行々語ふ。終に己を保ちて則を貽し、上仁の慮するところに里る」とある。② 仰觀象乎古人——『尚書』益稷に「帝曰く、予古人の象を觀さんと欲す」とある。③ 濟文武於將墜——『論語』子張篇に「衛の公孫朝、子貢に問ひて曰く、仲尼は焉くにか學べると。子貢曰く、文武の道、未だ地に墜ちずして人に在り。賢者は其の大なる者を識り、不賢者は其の小なる者を識る。文武の道の有らざること莫し」とある。

④ 風聲——『尚書』畢命に「王曰く、嗚呼父師。今予祇んで公に命ずるに周公の事を以てす。善を彰し惡を瘞ましめ、之が風聲を樹てよ」とある。⑤ 不泯——『毛詩』大雅・桑柔に「亂生じて夷がず、國として泯れざる靡し」とある。

⑥ 金石——「金」は鍾や鼎、「石」は碑や碣をいう。⑦ 徳廣——『毛詩』周南・漢廣の序に「漢廣は徳廣の及ぶところなり。文王の道南國に被り、美化江漢の域に行はれ、亂を犯すを思ふもの無し」とある。⑧ 日新——日々に新たに、一刻もやむことがない。『周易』繫辭傳上に「富有をこれ大業と謂ふ。日新をこれ盛徳と謂ふ」とある。

以上が「文賦」の内容であるが、次に此の「文賦」の中で述べられている文學論を、① 創作過程、② 表現・内容、とに分けてまとめてみる。

① 創作過程

陸機は「文賦」の中で、文章を創作する動機について、次のように述べている。(引用文の下の數字は段落番号を示す。)

佇中區以玄覽、頤情志於典墳。遵四時以歎逝、瞻萬物而思紛。(1)

中區に佇ちて以て玄覽し、情志を典墳に頤ふ。四時に遵ひて以て逝くを歎き、萬物を瞻て思ひは紛る。

つまり文章の創作は、「萬物を觀察し、古典を読むことにより、情志が刺激を受ける」と言うのであり、このことが文章創作の動機となつて、心中に沸き起る感興を文章に述べようと思ふようになるのだという。そこで大切なのが想像力である。文學には現實に取材することや經驗することも大切なことであるが、「豊富な想像力こそ、文學創作の要素である」と次のように言う。

其始也、皆収視反聽、耽思傍訊。精奮八極、心遊萬仞。其致也、情瞳矐而彌鮮、物昭晰而互進。(2)

其の始めや、皆な収視反聽、耽思傍訊す。精八極に奮せ、心萬仞に遊ぶ。其の致るや、情瞳矐として彌々鮮やかに、物昭晰にして互ひに進む。

かくして文章を書き始めることになるが、沸き起る心中の感興を無秩序に書いてはダメなのであつて、段落をつけ、排列を考えながら、文章の法則に従つて書き進めなければならぬといふ。

選義按部、考辭就班。(3)

義を選び部を按じ、辭を考へ班に就く。

或仰逼於先條、或俯侵於後章。或辭害而理比、或言順而義妨。離之則雙美、合之則兩傷。(7)

或いは仰いで先條に逼り、或いは俯して後章を侵す。或いは辭害ありて理比し、或いは言順にして義妨ぐ。之を離るれば則ち雙び美しく、之に合すれば則ち兩つながら傷る。

文章には「前後の法則」なるものがあつて、前後の關係に配慮して文章を書かなければならないといふのである。此のほか、次節に述べる語句や内容についての細かな配慮がなさ

れて出来上がった文章には、大いなる効用がある。すなわち、

伊茲文之爲用、固衆理之所因。恢萬里而無闕、通億載而爲津。……被金石而德廣、流管絃而日新。(15)

伊れ茲の文の用爲る、固に衆理の因る所なり。萬里を恢いにしして、億載に流して、管絃に流して日に新たなり。

そこには實に世界の衆理が集められており、すべての事柄をそれによって通じさせることができる。それは、萬里にわたり、億年にわたって人々の盛徳、人の世の道理を傳え、永久に衰えることは無いという。

② 表現・内容について

文章の表現と内容について、従来は内容の方に重きが置かれていて、表現はその次と考えられていた。しかし陸機は、表現の方も大切にしなければならぬとしている。すなわち兩者の關係について、陸機は次のように述べている。

理扶質以立幹、文垂條而結繁。信情貌之不差、故每變而在顔。思涉樂其必笑、方言哀而已歎。(3)

理は質を扶けて以て幹を立て、文は條を垂れて繁を結ぶ。信に情貌の差はざる、故に毎に變じて顔に在り。思ひ樂しみに涉れば其れ必ず笑ひ、方に哀しみを言ひて已に歎く。

つまり「『理』すなわち内容と、『文』すなわち表現とは、心情と容貌のごときものであり、心が楽しいときには笑い、悲しいことを言うときには嘆くように、作者の心は文章に現われ、内容と表現とは一致するものである」というのである。

それでは先ず、表現に關わることについての意見を見てみよう。陸機は、言葉の使い方について次のように言っている。

考殿最於錙銖、定去留於毫芒。苟銓衡之所裁、固應繩其必當。(7)

殿最を錙銖に考へ、去留を毫芒に定む。苟に銓衡の裁する所、固に繩に應じて其れ必ず當る。

「文章を作るには、錙銖のような細かい點にまで言葉の適不適を考え、毫芒のような細部にわたって言葉の取捨選択をしなければならぬ。もしこのようにきちんとやれば、言葉は法則どおりにうまく使われるであろう」。

さらに言葉の使い方について、「警策の言葉」が一篇の文章には必要であると、

或文繁理富、而意不指適。極無兩致、盡不可益。立片言而居要、乃一篇之警策。雖衆辭之有條、必待茲而效績。亮功多而累寡、故取足而不易。(8)

或いは文繁く理富めども、意指適せず。極まりて兩つながら致す無く、盡きて益す可からざるとき、片言を立てて要に居る、乃ち一篇の警策なり。衆辭の條有りとも雖も、必ず茲を待つて績を效す。亮に功多くして累ひ寡なし、故に足るを取りて易へず。

「言葉をたくさん使い、内容を豊富に盛り込んでも、意圖することが十分に表現できないことがある。このような時には、内容も言葉も、もうこれ以上用いることができない。かかる場合に、ちょっととした氣のきいた言葉を取り出して要所に置けば、その一篇の警策となるであろう。さまざまな言葉が使われていても、此の“警策の言葉”を使えば効果は多く、缺點は少なくなる。言葉を一つ加えるだけで文章を改変しなくてもすむのである」とたった一言の言葉を用いて、文章に鮮明さを加えることができるというのである。

また、文章を作る際に、まったく偶然に前人の表現と同じ表現になってしまうことがある。そのような場合の處置について、次のように述べている。

或藻思綺合、清麗千眠。炳若緝繡、悽若繁絃。必所擬之不殊、乃閨合乎曩篇。雖杼軸於予懷、恍佗人之我先。苟傷廉而愆義、亦雖愛而必捐。(9)

或いは藻思綺合して、清麗千眠。炳として緝繡の若く、悽として繁絃の若きも、必ず擬する所に殊ならず、乃ち閨に曩篇に合ふことあり。予が懷に杼軸すと雖も、佗人の我に先んずることを怵る。苟に廉を傷りて義を愆れば、亦た愛すと雖も必ず捐つ。

つまり、「文章の構想があや絹のように美しくまとまり、彩れる縫い取りのごとく美しいものであっても、それが前人の文章と同じであったり、偶然に一致していた場合には、残念であるが、捨ててしまふ」というのである。それは、もしそのままにしておくと「廉恥の道を傷つけ道義を誤るものになってしまふから」であり、ここには陸機の文章に對する心構えをも見て取ることが出来る。

語句の問題に關しては、次のようなことも言っている。

或若發穎豎、離衆絶致。形不可逐、響難爲係。塊孤立而特峙、非常音之所緯。心牢落而無偶、意徘徊而不能埽。石韞玉而山輝、水懷珠而川媚。彼榛栝之勿翦、亦蒙榮於集翠。綴下里於白雪、吾亦濟夫所偉。(10)

或いは吾のごとく發し穎のごとく豎ち、衆を離れ致を絶つ。形 逐ふ可からず、響き係を爲し難し。塊として孤立して特り峙ち、常音の縛する所に非ず。心 牢落として偶無く、意 徘徊して掃る能はず。石は玉を盤んで山は輝き、水は珠を懐いて川は媚ぶ。彼の様格の翳ること勿き、亦た榮を集翠に蒙る。下里を白雪に綴るも、吾 亦た夫の偉とする所を濟す。

「文章の中の言葉が、他の語句と離れていながら素晴らしい趣を持っていることがある。このような素晴らしい言葉が衆辭の中で孤立してしまい、それと對偶になる言葉を求められない時には、その言葉を捨ててしまおうとするが、しかしそれはそれでよいのである」と言い、また「つまらない言葉であっても、すぐれた言葉の添え物として使うこともできる」とも言う。つまり、文章の中では、よい言葉も、そうでない言葉も、それなりに使いはあるのだということ述べている。

このように、表現の面においては語句のことを中心に、様々な指摘がなされているが、それでは次に、内容に関わることについての意見を窺うことにしよう。

文章にとって「情」は大切な要素の一つであるが、その情の通塞のことに關して、「文章を作るためには感情が必要なのであるが、「六情」（喜・怒・哀・樂・好・悪）が働かなくなると、いかに文章に感情を込めようとしてもうまくいかない」ということを、次のように述べる。

及其六情底滯、志往神留。兀若枯木、豁若涸流。攬宮魂以探蹟、頓精爽於自求。理翳翳而愈伏、思乙乙其若抽。是以或竭情而多悔、或率意而寡尤。(14)

其の六情 底滯して、志往き神留るに及んでは、兀たること枯木の若く、豁たること涸流の若し。宮魂を攬りて蹟を探り、精爽を頓して自ら求む。理は翳翳として愈々伏し、思ひは乙乙として其れ抽づるが若し。是を以て或いは情を竭して悔い多く、或いは意に率ひて尤め寡し。

しかし、「文章を作るのは自分がやることではあるが、作文の感情がなぜ高まったり低くなったりするのはよく分からない」と陸機自身、上文に續けて次のように言う。

雖茲物之在 我、非余力之所勦。故時撫空懷而自惋、吾未識夫開塞之所由。(14)
茲の物の我に在りと雖も、余が力の勦する所に非ず。故に時に空懷を撫して自ら惋む、吾 未だ夫の開塞の由る所を識らざるなり。

文章の内容については、次のようなことも言っている。

或寄辭於瘁音、徒靡言而弗華。混妍蚩而成體、累良質而爲瑕。象下管之偏疾、故雖應

而不和。(11)

或いは辭を瘁音に寄せ、徒らに言を靡にして華ならず。妍蚩を混じて體を成し、良質を累ねて瑕を爲す。下管の偏疾に象たり、故に應ずと雖も和せず。

「瘁音」とは、淫靡の言葉の意で、道德的でない言葉をいう。つまり、「不健全な文章を作ると、表現がなよなよするばかりで光がない。良いものと悪いものを一緒にすれば、良いものを傷つけることになる。それは下管（大祭などの儀式の時に堂の下で吹奏される管樂）の音楽はやたらに急激であるから、他の音楽と一緒になくても調和しないようなものである」という。

また、「筋を通すことを忘れて珍しいことにとらわれた文章を書くとき、ただ上辺だけをねらい、あいまいな表現ばかりを追い掛けて、言葉に感情がこもらない」とし、そうしてこのような文章には、「作品に對する熱意が見られないし、言葉は浮ついて内容と一致しない。例えてみると、弦が細くて調べが急であるから、調和はするが、あまりにせわしなくて悲しい感情が出ないようなものである」と言うことを、次のように述べる。

或遺理以存異、徒尋虛以逐微。言寡情而鮮愛、辭浮漂而不歸。猶絃么而徽急、故雖和

而不悲。(11)

或いは理を遺てて以て異を存し、徒らに虚を尋ねて微を逐ふ。言は情寡なくして愛鮮なく、辭は浮漂して歸らず。猶ほ絃の么にして徽の急なるがごとし、故に和すると雖も悲しまず。

また、「あまりに感情のままに文章を書くとき、美しい文章ができて人々にうけるものとなるが、しかし、もとより音聲はよくても曲調のつまらないものになってしまう」と、次のようにも言う。

或奔放以諧合、務嘈囋而妖冶。徒悅目而偶俗、固高聲而曲下。寤防露與桑間、又雖悲

而不雅。(11)

或いは奔放して以て諧合すれば、務めて嘈囋として妖冶たり。徒らに目を悦ばせて俗に偶するも、固に聲高くして曲下る。防露と桑間とを寤る、又た悲しと雖も雅ならず。

このような文章は、「『防露』『桑間』の詩は、意味はよく分かるが、悲しみの感情は僅しても此の詩は雅音ではない」と同じことになる。

これと反對に、「あっさりとした簡約な文章」を書くことについて、次のように言う。

或清虚以婉約、每除煩而去濫。闕大羹之遺味、同朱絃之清汎。雖一唱而三歎、固既雅而不艷。(11)

或いは清虚にして以て婉約なれば、毎に煩を除いて濫を去る。大羹の遺味を闕き、朱絃の清汎なるに同じ。一唱して三歎すと雖も、固に既に雅にして艷ならず。

つまり、「あっさりとした簡約な文章を書く」と、それは複雑さが除かれ亂雑さがなくなるが、それは例えてみると、大羹（宗廟の祭祀に供えられる味付けのされていない肉のスープ）の持つ味わいが無くなったたり、清廟の朱絃の音楽が淡く質朴であるのと同じようなものである。一人が唱して三人が歎ずるとはいえ、雅に過ぎて艶ではない」と言うわけである。

以上、「文賦」の中で述べられている文學論を見てきたが、これは前代の文學論である魏の文帝曹丕の『典論』論文と比較して、更に充實した内容のものとなっている。すなわち曹丕は『典論』論文の中で、「氣を以て文を論じ」て、

文以氣爲主、氣之清濁有體、不可力強而致。譬諸音樂、曲度雖均、節奏同檢、至於引氣不齊、巧拙有素。雖在父兄、不能以移子弟。

文は氣を以て主と爲し、氣の清濁には體有り、力強て致す可からず。諸を音樂に譬ふれば、曲度は均しと雖も、節奏 檢を同じうするも、引氣 齊しからざるに至りては、巧拙に素有り。父兄に在りと雖も、以て子弟に移す能はず。

「文章は才氣が中心となっており、才氣の清濁は、それぞれ資質の差異によるのであり、むりやりに作り上げるわけにはいかない。これを音樂に喩えてみるに、曲調が同じとしても、演奏の仕方が同じであっても、呼吸の仕方の違いについては、巧拙の生まれつきがあって、父兄の身にそれが備わっていても、子弟に移すことはできない」と述べており、「建安の七子」については、

徐幹時齊氣。

徐幹は時に齊の氣有り。

應瑒和而不壯。

應瑒は和やかなるも壯ならず。

劉楨は壯而不密。

劉楨は壯さかんなれども密ならず。

孔融は體氣高妙。

孔融は體氣 高妙なり。

と評している。

また、従來の分類方法である「經・史・子・集」の中から「集」を取り出して、

蓋奏議宜雅、書論宜理、銘誄尚實、詩賦欲麗。

蓋し奏・議は雅なるが宜しく、書・論は理なるが宜しく、銘・誄は實を尚たうび、詩・賦は麗しきを欲す。

「奏・議の文章は典雅であるのがよいし、書・論の文章は論理が通っているのがよいし、銘・誄の文章は事實に合っていることが大切であるし、詩・賦の文章は美しいことが望ましい」と述べて、最後に、

蓋文章經國之大業、不朽之盛事。

蓋し文章は經國の大業にして、不朽の盛事なり。

「そもそも文章は國を治めるうえの重要な仕事であり、永遠に朽ち果てることのない偉大な営みである」と言い、時間を惜しんで著述に努めなくてはならないとする。

以上のように主張する『典論』論文は、確かに儒學の束縛から抜け出して、文學の特徴と規律を探り、文學の觀念を明確にし、文學の價值と社會的地位を高めんとしたものであるが、なおその文學論は觀念的で、具體性に缺ける。これに對して陸機の「文賦」は、具體的な作家・作品論こそ無いが、その文學論は『典論』論文に比較するとより具體性を帯びており、文章の表現・内容に互る幅広い議論が展開されている。その主張は、凡そ以下の三點に要約できると思われる。すなわち、

第一に、「内容と表現の兩方を重視する」點である。漢代以來、文章においては「義理」即ち、内容が重んじられていた。しかし陸機は、内容は素より大切なものであるが、さらに文章の表現もおろそかにしてはならないと言っているのである。第二に、「感興と想像を重視する」點である。いかに充實した内容と素晴らしい表現の文章を書こうとしても、豊かな感受性がなければそれはできない。敏感な感受性と豊かな想像力が、文章制作には必要であると言う。第三に、「獨創性を重視する」點である。陸機は「文賦」の中で、自分の作

品の表現が、前人の表現と偶然に一致した場合、

雖杼軸於予懷、祇佗人之我先。苟傷廉而愆義、亦雖愛而必捐。(9)
予が懷に杼軸すと雖も、佗人の我に先んずることを懼る。苟に廉を傷りて義を愆れば、
亦た愛すと雖も必ず捐つ。

「自分でまとめた構想ではあっても、他人が自分より先に立てたものであることを残念に
思い、廉恥の道を傷つけ道義を誤るものとして、その文章が好きであっても捨ててしま
う」と言うが、それは獨創を重視するからなのである。

このように、陸機の「文賦」は、曹丕の『典論』論文の基礎の上に、更に大きな一歩を
進めており、次の劉勰『文心雕龍』の文學理論に、多大な啓發と影響を及ぼすものであ
った。

(2) 陸機の文學觀—陸雲「與平原書」に見られる文學觀との比較—

これまで「文賦」に見られる陸機の文學論について見てきたが、次に此の「文賦」の中
で述べられている文學論と、先に取り上げた陸雲の、兄陸機の文學・文章について、「與
平原書」の中で語られている内容とを比べてみたい。

「與平原書」に見られる陸雲の意見は、陸機の作品に對するものが主であるが、その内
容は、陸機の作品を稱賛するもの、反對に不満を述べるもの、更には張華ら他の文人の意
見を交えて批評を加えるもの等に分けることができる。これらの事について、「文賦」と
「與平原書」との比較をしてゆくわけであるが、比較をするに當たり、大きく表現の面と
内容の面とに分けて見てゆくことにする。

1 表現面について

① 語について

陸雲は「與平原書」の中で、文章における「新奇」なる語の重要性について、

兄頓作爾多文、而新奇乃爾。眞令人怖、不當復道作文。

兄は頓に爾き多くの文を作り、而も新奇は乃ち爾り。眞に人をして怖れ令め、當に復た

文を作るを道ふべからず。

(「與平原書」其七)

と言ひ、また、

作文、臨時輒自云佳、小久報、不能視。爲此故息意爾。今視所作、不謂乃極、更不自信。恐年時間、復捐棄之。徒自困苦爾。兄小加潤色、便欲可出。極不苦作文、但無新奇、而體力困瘁耳。

文を作り、時に臨んで輒ち自ら佳なりと云ふも、小や久しくして報ずるに、視る能はず。此の爲の故に息意する爾。今、作る所を視るに、乃ち極なりと謂はず。更に自ら信ぜず。恐らくは年時の間、復た之を捐棄されん。徒自に困苦する爾。兄、小しく潤色を加ふれば、便ち出だす可からんと欲。極めて文を作るに苦しまざるも、但だ新奇無くして、體力甚だ困瘁する耳。

(「與平原書」其十六)

と言っている。すなわち前者では、兄の文章が「新奇」なる表現に覆われていることを稱賛し、後者においては、自分の作品はそのような「新奇」なる要素に缺けているから、手を入れて欲しいと言うのである。これによって陸雲が、文章における「新奇」なる要素、つまりこれまで見ることでできなかったような表現の新鮮さと、思いもつかなかった發想を含む言葉を、重要視しているということが分かる。

此の點については、「文賦」にも、

収百世之闕文、採千載之遺韻。謝朝華於已披、啓夕秀於未振。(2)

百世の闕文を収め、千載の遺韻を採る。朝華を已に披けるに謝り、夕秀を未だ振かざるに啓く。

「百世の間、見ることもなかった表現をとり、千年このかた使われたことのない言葉を採用して書こうとする。開いてしまった朝の華は捨てて、まだ開かない夕べの花を開かせようとする」とあって、これは陸雲のいう「新奇」なる語について言っているものと思われる。さらに「文賦」には、

必所擬之不殊、乃闇合乎曩篇。雖杼軸於予懷、怵佗人之我先。苟傷廉而愆義、亦雖愛而必捐。(9)

必ず擬する所に殊ならず、乃ち闇に曩篇に合ふことあり。予が懷に杼軸すと雖も、佗人の我に先んずることを怵る。苟に廉を傷りて義を愆れば、亦た愛すと雖も必ず捐つ。

と「どんなに氣に入つた言葉であっても、前人と偶然に一致した場合には、残念であるが

捨ててしまふ」と言うのは、それではもはや新奇とは言えないからであり、ここには新奇なる語を求め続ける陸機の姿勢が示されているようである。このような文章における「新奇」なる要素の重要性については、元來、陸機自身もこのように考えていたのか、或いは陸雲の意見を取り入れたのか明らかでないが、「文賦」の中にも、その點について觸れている。これは兄弟の意見が一致した例といえる。

陸雲はまた、「出語」「出言」すなわち、文章の中で要點をはっきりと表現するためのポイントとなる言葉の重要性について、次のように述べている。

祠堂頌已得省。兄文不復稍論常佳。然了不見出語、意謂非兄文之休者。前後讀兄文、一再過、便上口語。省此文、雖未大精、然了無所識。

「祠堂の頌」は已に省るを得たり。兄の文は復た稍や常に佳なりとは論ぜず。然れども了く出語を見ざるは、兄の文の休き者に非ずと意謂ふ。前後して兄の文を讀むに、一再過ぎれば便ち口語に上る。此の文を省るに、未だ大いには精ならずと雖も、然れども了く識る所無し。

(「與平原書」其四)

劉氏頌極佳、但無出言耳。

「劉氏の頌」は極めて佳なるも、但だ出言無き耳。

(「與平原書」其五)

すなわち「『祠堂頌』も『劉氏頌』も、よい作品ではあるが、「出語」「出言」が見られないために、物足りない」と、陸機の作品に對して不満を漏らしているのである。

さて、この點について「文賦」では、次のように言う。

立片言而居要、乃一篇之警策。雖衆辭之有條、必待茲而效績。亮功多而累寡、故取足而不易。(8)

片言を立てて要に居る、乃ち一篇の警策なり。衆辭の條有りと雖も、必ず茲を待ちて績を效す。亮に功多くして累寡し、故に足るを取りて易へず。

つまり「ちよっとした良い言葉をポイントに置けば、その一篇の警策となり、必ず効果をあげるであろう」と言うのであるが、此の「一篇之警策」こそは「出語」「出言」のことを言っているのであり、これも陸雲の指摘を受けて、そのことを「文賦」の中に取り上げたのかも知れない。

このように、語に関する議論を見る限りにおいては、或いは、もともと陸機も陸雲と同じような問題意識を持っていたのであろうか、陸雲が「與平原書」で語る意見がそのまま

「文賦」にも記されている。

② 句について

陸雲は、四字句の文章の場合、四句で句を轉ずるのがよいと考えていた。すなわち「與平原書」其十二のなかで、次のように述べている。

亦常云、四言轉句、以四句爲佳。

亦た常に云ふ、四言の轉句は、四句を以て佳と爲すと。

そうして、四字句が二句だけで終ってしまうのは「孤」であると考えており、先の書翰に續けて次のようにも言う。

往曾以兄七羨回煩手而沈哀結上、兩句爲孤。今更規定、自有不應用。時期當爾、復以

爲不快。故前多有所去。

往曾かって以かへらく、兄の「七羨」の「回煩手而沈哀結」の上、兩句 孤と爲ると。今、更あらためて規定するに、自ら應まに用ふべからざる有り。時期 當しに爾しるべきも、復またた以て快ならずと爲す。故に前に去る所有ること多し。

(「與平原書」其十二)

これは、陸機の「七羨」という作品の中の「回煩手而沈哀結」の上が、二句だけで孤立してしまっているということに對して、陸雲が不満を述べているのである。此の陸雲の考え方、つまり「四言句を二句だけ用いると、文章の中で孤立してしまう」というのは、陸機の「文賦」のなかにある、次の意見と相通するものがある。すなわち、

或託言於短韻、對窮跡而孤興。俯寂寞而無友、仰寥廓而莫承。譬偏絃之獨張、含清唱

而靡應。(11)

或いは言を短韻に託し、窮跡に對して孤興る。俯しては寂寞として友無く、仰いでは寥廓として承くる無し。偏絃の獨り張れるに譬へ、清唱を含んで應ずる靡し。

「句の短かいまとまりを作ると孤立してしまい、それは一本の弦だけで、それに協調する音が無いようなものだ」と言っている。これも或いは陸雲の意見を參考にして、「文賦」の中に取り込んでいたのであろうか。或いはもとより陸機も陸雲と同じ問題意識を持っていたのであろうか。

③ 文章の長さについて

一篇を構成する文章の長さについて、陸雲はあまり長くしない方がよいと考えていたようである。ために、陸機の文章が長大であることについて、次のように不満をもらしている。

二祖頌、甚爲高偉。雲作雖時有一佳語、見兄作、又欲成貧儉家。無緣當致兄此謙辭、又雲亦復不以苟自退耳。然意故復謂之微多。民不輟歎一句、謂可省。

「二祖の頌」は、甚だ高偉なり。雲の作 時に一佳語有りと雖も、兄の作を見れば、又た貧儉の家と成らんと欲す。當に兄に此の謙辭を致すべきに縁無く、又た雲 亦復た以て苟も自ら退かざる耳。然れども意に故より復た之を微や多しと謂ふ。「民不輟歎」の一句は省く可しと謂ふ。
(「與平原書」其五)

「二祖の頌」は、たいへん立派な作品である。自分などは時に佳い言葉を持つてはいるが、兄上に比べると、何も持たない貧乏人になったような気がする。兄上にこのような謙辭を言ういわれはないし、また遠慮したりはしないが、やはり長過ぎるようで、「民は歎くを輟めず」の一句は省くべきだと思ふ」と、陸機の作品である「二祖頌」が長過ぎることを指摘している。

兄文章之高遠絶異、不可復稱言。然猶皆欲微多。但清新相接、不以此爲病耳。若復令小省、恐其妙欲不見可復稱極。

兄の文章の高遠絶異なるは、復た稱して言ふ可からず。然れども猶ほ皆な微や多からんと欲。但だ清新相ひ接すれば、此を以て病と爲さざる耳。若し復た小しく省か令めば、恐らくは其の妙 復た極と稱す可きを見ざらんと欲。
(「與平原書」其十一)

「兄上の文章のこの上もなく素晴らしいのは、口では言えないほどであるが、どれも少し長過ぎるようだ。ただ清新さがあるので、缺點にはなっていないが、もう少し短くすれば、他人も真似ることのできないような立派な作品となるでしょう」と、やはり文章が長過ぎることを言っている。

陸雲は更に、具體的に文章の字数を持ち出して、次のように言う。

有作文唯尚多。而家多猪羊之徒、作蟬賦二千餘言、隱士賦三千餘言。既無藻偉體、都自不似事。文章實自不當多。

文を作るは唯だ多きを尚ぶのみなるもの有り。而して家に猪羊の徒多く、「蟬の賦」「二千餘言」、「隱士の賦」三千餘言を作る。既に藻偉の體無く、都自て事に似ず。文章は實

自に當に多かるべからず。

(「與平原書」其二二)

「文章はただ長ければよい」という文章家が多く、一二千字・三千字もある文章を作っている。こうなると文章の美しさが無くなるばかりでなく、描こうとする事物が描かれていないものになってしまう。文章は本當に長くしないのがよいのである」と言うのである。

このような文章の長さに関しては、陸機の「文賦」のなかでも、

要辭達而理舉、故無取乎冗長。(5)

辭達して理舉がらんことを要す、故に冗長を取ること無し。

と、「長つたらしい文章はよくない」と言っている。陸雲がたびたび文章の長さについて「與平原書」の中で兄陸機に意見を述べるものだから、陸機の方もそのことについて「文賦」の中で觸れたのであろうか。ちなみに陸機の「文賦」は、一五五〇字から成っており、元來、長大な文章を書く陸機が、陸雲に遠慮したためであるのかも知れない。

以上、文章の表現面における議論を中心に見てきたが、次は文章の内容面に関わる意見を取り上げてみる。

二 内容面について

内容面に關する「情」のことについて、「文賦」では、次のように言う。

及其六情底滯、志往神留。兀若枯木、豁若涸流。攬營魂以探蹟、頓精爽於自求。理翳翳而愈伏、思乙乙其若抽。是以或竭情而多悔、或率意而寡尤。(14)

其の六情底滯して、志往き神留るに及んでは、兀たること枯木の若く、豁たること涸流の若し。營魂を攬りて以て蹟を探り、精爽を頓して自ら求む。理は翳翳として愈々伏し、思ひは乙乙として其れ抽づるが若し。是を以て或いは情を竭して悔い多く、或いは意に率ひて尤め寡し。

要するに、文章にとって「情」は大切なものであるが、文章にいかにも感情を盛り込むかということは、極めて難しい問題であることを言っている。文章における「情」の必要性については、陸雲の書翰のなかでも、

往日論文、先辭而後情、尚矜而不取悅澤。嘗憶兄道張公父子論文、實自欲得。今日便

欲宗其言。

往日 文を論ずるや、辭を先にして情を後にし、けつ整を尚たごびて悦澤を取らず。嘗つねに憶おもふ、
「兄の「張公父子の論文は、實まこと自に得んと欲す」と道みちふ」を。今日 便たうとち其の言を宗ちゆうばんと欲す。
(「與平原書」其十一)

とあつて「もともと辭(表現)を第一にして情を後回しにしていた陸雲が、兄が「張華の文章に對する議論を、本當に得たいものだ」と話すのを聞いて、今になってその言葉が大切に思われてきた」と言うが、これは「文賦」のなかで言われているのと、同じ内容のことであろう。これなどは、もともと陸機は文章における情の問題に關心を持っていて、それを「文賦」のなかで取り上げていたものを、後になって陸雲も、兄陸機と同じような問題意識を持ったものと考えられる。

もとより文章に「情」を盛り込むことは、文章制作にとっての大切な要素の一つではあるが、それをどのようにして、またどの程度のものにするかということとは、甚だ難しい問題であつて、陸雲の「與平原書」のなかでも、たびたび取り上げられて議論されている。陸雲は、文章における「情言」すなわち、心情のもつた言葉の使い方について、次のように言っている。

情言深至、述思自難希。

「情言」深至なれば、思ひを述ぶること自ら希ゆかひ難し。(「與平原書」其十八)

「あまりに心情のもつた言葉ばかりを連ねると、自分の思いをそのままに述べることは難しくなるように思われる」と。

このように「情」の苦手な陸雲は、『楚辭』の「九章」に倣つて「九愍」という作品を作っているが、此の作品にいかにも情を盛り込むかということについて議論したのが、次の書翰である。

雲再拜。誨九愍如所勅、此自未定、然雲意自謂、故當是近所作上近者。意又謂、其漁父相見以下盡篇爲佳。謂兄必許此條。而淵弦意、呼作脫可行耳。至兄唯以此爲快。不知雲論文、何以當與兄意、作如此異。此是情文、但本少情、而頗能作汎說耳。又見作九者、多不祖宗原意、而自作一家說。唯兄說、與漁父相見、又不大委曲盡其意。雲以原流放、唯見此一人、當爲致其義。深自謂佳。願兄可試更視與漁父相見時。語亦無他異、附情而言、恐此故勝淵弦。兄意所謂不善、願疏勅其處緒。亦欲成之令出、意莫更

感如惡所在。以兄文、雲猶時有所能得言。雲前後所作。謹啓。

雲 再拜。「九愍」を誨へて勅す所の如きは、此れ自ら未だ定せざるも、然れども雲の意自ら謂へらく、「故より當に是れ近ごろ作る所の上近なる者」と。意に又た謂へらく、「其の漁父と相ひ見ふ以下の盡篇は佳爲り」と。兄、必ず此の條を許めんと謂ふ。而るに淵弦の意、呼びて脱して行ふべしと作すのみ。兄に至りては唯だ此れを以て快と爲すのみ。雲の文を論ずるや、何を以て當に兄の意と、此の如き異を作すかを知らず。此れは是れ情文なるも、但だ本より情少なくして、頗る汎説を作すのみ。又た「九」を作る者を見るに、多く原の意を祖宗とせずして、自ら一家の説を作す。唯だ兄は、「漁父と相ひ見ふは、又た大いには委曲に其の意を盡くさず」と説くのみ。雲は原の流放せられて、唯だ此の一人に見ふのみを以て、當に其の義を致すと爲すべし。深自く佳と謂ふ。願はくは、兄 試みに漁父と相ひ見ふ時を更視す可けんことを。語に亦た他異無きも、情を附して言ひたれば、恐らくは此れ故より淵弦に勝らん。兄の意、善からずと謂ふ所、願はくは其の處緒を疏効せんことを。亦た之を成して出ださしめんと欲するも、意に更に惡の在る所の如きを感じる莫し。兄の文を以てすら、雲は猶ほ時に能く言ふを得る所有り。雲の前後して作る所をや。謹啓。

(「與平原書」其二十一)

これに據ると、陸雲は「自分の作品『九愍』はよくできており、特に『漁父と相ひ見ふ』こと以下、一篇の終りまでがよいできだと思ふ」と言う。すなわち陸雲は、漁父と出合うことを言うことによつて、この文章に「情」を込めようとしたのである。ところが兄の方はこれに反對で、淵弦の言うように、「漁父と相ひ見ふ」ことを省いた方がよい、と考へていた。ただ陸雲は、「近ごろの『九』の作者は、屈原の意を祖宗とせず、勝手に一家の説を成しており、自分の作品の『漁父と相ひ見ふ』ことこそが、屈原の意を祖宗として、『情』を込めたものである」と主張する。「情」とは、その作品の主題について作者の懐いている心情、人物についての心情を言うのであろうが、この「情」を作品にどのような盛り返むかに関して、兄弟の意見が食い違っている。此の問題について、陸雲は別の書翰でも次のように述べている。

九愍如兄所誨、亦殊過望。雲意自謂當不如三賦。情難。非體中所長。欲徧周流、雲意亦謂爲佳耳。然不云其愈於與漁父。

「九愍」、兄の誨ふる所の如きは、亦た殊に望みに過ぐ。雲の意 自ら謂へらく、「當に三賦に如かざるべし」と。情は難し。體中の長ずる所に非ず。徧く周流せんと欲るは、雲の意 亦た佳と爲すと謂ふのみ。然れども其れ『漁父』とより愈るとは云はず。

(「與平原書」其十七)

つまり「『情』は本當に難しく、自分の得意とするところではないが、兄が『徧く周流せんとする』ことだけを言い、『漁父と出合う』ことを出さない方がよいとするのは、それはそれでよいと思うが、やはり『漁父と（相ひ見ふ）』ことを言う方が、よりすぐれていると思う」と言うのである。陸雲はあくまでも『漁父と相ひ見ふ』という事柄を述べることによつて、屈原に對する心情を表現しようとするのであるが、陸機の方は、そのような事柄を言わなくても、語句や表現の工夫によつて、文章に「情」を盛り込むことができると考えたのであろう。

元來、文章における「情」の問題についてあまり關心のなかつた陸雲が、張華や陸機が「情」を問題にすることに影響されて、それを意識し始め、やがて陸機と「情」のことについてやり合うようになっていったのであろう。

文章における「情」のことを考慮するようになった陸雲は「與平原書」の中で、文章における「清」の重要性について主張していたが、この「清」と「情」との関係について、「文賦」のなかで次のようなことが説かれている。

若夫豐約之裁、俯仰之形、因宜適變、曲有微情。或言拙而喻巧、或理朴而辭輕。或襲故而彌新、或沿濁而更清。(12)

夫の豐約の裁、俯仰の形の若きは、宜しきに因り變に適へば、曲さに微情有り。或いは言拙にして喻巧みに、或いは理朴にして辭輕し。或いは故に襲りて彌新に、或いは濁に沿りて更に清し。

「多彩な表現や簡潔な表現といった體裁、文勢の強弱といった調子については、それぞれにふさわしい場合に、それぞれの変化を見せ、文章の調子には微妙な實情が含まれていて一樣ではない」という。「微情」とは、微妙な實情、ニュアンスのことをいうのであろうが、これは文章のスタイルと情との関わりの大切さを述べたものである。このような文章の體裁と情との関わりの中から、「表現がますぐるでも比喩的に巧みなものもあり、内容は質朴であっても表現が浮ついているものもある。古い表現を襲いながら新味を出すこともあるし、重苦しい文章を書いても『清』なる文章になることもある」のである。ここに「襲故」というのは、いわゆる典故のことを言うのであろうが、「典」については、陸雲の「與平原書」其十九に、次のようなことが言われている。

張公昔亦云、兄新聲多之不同也。典當故爲未及。彦藏亦云爾。

張公も昔亦た云ふ、「兄の『新聲』、多くは之れ同じくせざるなり。『典』は當に故よ

り未だ及ばずと爲すべし」と。彦藏も亦た爾りと云ふ。

「張華や彦藏が、兄の“新聲”はほとんどまねることはできないが、逆に“典”なる落ち着きに缺けており、まだまだである、と言っている」というのであるが、これは“新聲”すなわち“新奇”なる語句や表現が多過ぎて、却って文章が浮ついたものになっていることを指摘したものである。しかし陸機は、“典”を用いることによって文章に新味を出そうというのであって、文章における“典”なる要素に對する陸機・陸雲の意見が異なっている。

さて、文章における「清」について、陸機の「文賦」では、それを「雅」ということと関連付けて、次のように言う。

或奔放以諧合、務嘈囋而妖冶。徒悅目而偶俗。固高聲而曲下。寤防露與桑間、又雖悲而不雅。或清虛以婉約、每除煩而去濫。闕大羹之遺味、同朱絃之清汜。雖一唱而三歎、固既雅而不艷。(11)

或いは奔放して以て諧合すれば、務めて嘈囋として妖冶たり。徒らに目を悦ばせて俗に偶するも、固に聲高くして曲下る。防露と桑間とを寤る、又た悲しと雖も雅ならず。或いは清虚にして以て婉約なれば、毎に煩を除いて濫を去る。大羹の遺味を闕き、朱絃の清汜なるに同じ。一唱して三歎すと雖も、固に既に雅にして艷ならず。

「奔放して以て諧合す」、すなわち「感情の赴くままに調子よく文章を書く」と、それは美しく出来上がり、人々の目を喜ばせ通俗にかなったものになるが、音聲はよくても曲調はつまらないものになってしまう」といい、このような文章は、「雅」と言えないものであると結論づける。一方、「清虚にして以て婉約」、すなわち「あっさりとした簡約な文章を書く」と、それはいつも複雑さが除かれ亂雑さがなくなっている」といい、そのような文章は「雅」に過ぎて「艷」ではないと規定するのである。つまり、「情」の込め具合によって、文章が雅になったり、艷になったりするわけで、その加減が難しいというのは、陸雲と同じである。

以上、陸機の「文賦」と陸雲の「與平原書」に見られる文章・文學觀を比較した結果、文章における「典」の扱い方などに、相違点は見られるものの、表現においても、また内容の面でも、兩者の文章・文學觀は基本的には共通したものである。それは、陸雲が「與平原書」の中で語る文章に關する意見や自分の作品に對する批評を、陸機が參考に

しながら自分の文學・文章觀をまとめあげていったためであろうと思われる。すなわち、「與平原書」の中で、陸雲が實際に作品の語句や表現を示しながら具體的に文章論を展開しているのを、陸機は賦という形式を借りて、それを総合的な文章・文學論にまとめあげていったのである。ただ、「文賦」に見られる文章・文學論は、あくまでも理念であつて、それが作品の上に、そのままに具現されるというわけのものではない。ために劉勰が『文心雕龍』の中で、

陸機才欲窺深、辭務索廣。故思能入巧、而不制繁。士龍朗練、以識檢亂。故能布采鮮淨、敏於短篇。

陸機は才は深を窺はんとし、辭は廣を索めんことに務む。故に思ひは能く巧に入れども、繁を制せず。士龍は朗練にして、識を以て亂を檢す。故に能く采を布くこと鮮淨にして、短篇に敏なり。(才略篇)

と言ひ、また、

至如士衡才優、而綴辭尤繁、士龍思劣、而雅好清省。

士衡の才優るが如きに至りては、辭を綴ること尤も繁に、士龍は思ひ劣れども、雅より清省を好む。(鎔裁篇)

と云うように、必ずしも實作の面では、共通した傾向の作品ばかりが生まれているわけではない。しかし、二人の抱いていた文學觀は、根底においては脈絡をもっていたのである。そうしてそのような文學觀は、入洛後、それまでの南方文壇の中では見られなかったであろう異なった傾向を持つ北方文壇の影響を受けつつまとめられていったのであつて、このようにして育まれていった文章觀・文學觀が語られている「文賦」こそは、まさしく陸機文學の集大成と呼ぶことのできる作品なのであり、またその理論が西晉文學の背景として存在していたのである。

二 文學批評史における「文賦」の意味

陸機の「文賦」に見られる文學・文章論は、夙に梁の劉勰の『文心雕龍』の中で取り上げられている。すなわち「鎔裁篇」に、

文賦以爲、榛栝勿剪、庸音足曲。其識非不鑒、乃情苦芟繁也。

「文の賦」に以爲へらく、榛栝も剪ること勿れ、庸音も曲を足す」と。其の識は鑿みざるに非ず、乃ち情の繁を芟るに苦しむなり。

「陸機の『文賦』には、「つまらない木でも切つてはいけない、平凡な音も楽曲の足しにはなる」と言う。陸機の見識からすれば、鎔裁の重要性を考慮しなかったわけではないが、繁多な字句を刈り取るのに苦しんだのである」とあり、「聲律篇」には、

及張華論韻、謂士衡多楚。文賦亦稱、知楚不易。可謂銜靈均之餘聲、失黃鍾之正響也。張華の韻を論ずるに及び、「士衡に楚多し」と謂ふ。「文の賦」も亦た稱す、「楚と知るも易へず」と。靈均の餘聲を銜みて、黃鍾の正響を失すと謂ふ可きなり。

「張華は韻を論じて、「陸機の作品には楚の訛韻が多い」と言い、陸機の『文賦』でも、「楚の音が多いことは承知しているが改めたりしない」と言っている。これは楚の屈原の聲韻の流れをくんで、音律の正調を失ったものといえる」とあって、「文賦」の内容を引用している。また、「序志篇」では、

詳觀近代之論文者多矣。至於魏文述典、陳思序書、應瑒文論、陸機文賦、仲治流別、弘範翰林、各照隔隙、鮮觀衢路。

詳かに觀るに、近代の文を論ずる者は多し。魏文の述典、陳思の序書、應瑒の文論、陸機の文賦、仲治の流別、弘範の翰林に至りては、各々隔隙を照らすも、衢路を觀ること鮮なし。

と、近代において文學を論ずる者が多くいるとして、魏の文帝の『典論』論文、陳思王の書翰（「楊徳祖に與ふるの書」）、王瑒の『文論』、陸機の「文賦」、摯虞の『文章流別志論』、李充の『翰林論』などを挙げ、「それぞれに文學の問題に関してその一部分を照らしだしてはいるが、全體を大觀したものは稀である」と述べ、そうして陸機の「文賦」については、

陸賦巧而碎亂。

陸の賦は巧みなれども碎亂なり。

「陸機の『文賦』は巧妙であるが、不統一で総合性に缺ける」と評している。その缺けている点については、鍾嶸の『詩品』の序においても、

陸機文賦、通而無貶、李充翰林、疏而不切。王微鴻寶、密而無裁、顏延論文、精而難

曉。摯虞文志、詳而博贍、頗曰知言。觀斯數家、皆就談文體、不顯優劣。

陸機の「文賦」は、通にして貶無く、李充の『翰林』は、疏にして切ならず。王微の『鴻寶』は、密にして裁無く、顔延の『論文』は、精にして曉り難し。摯虞の『文志』は、詳にして博贍、頗る知言と曰ふ。斯の數家を觀るに、皆な就きて文體を談じ、優劣を顯はさず。

と、「陸機の『文賦』は、文學全般によく行き互っているが、作家・作品論に缺けている」と評している。

陸機の「文賦」はこのように早くから、その新鮮な文章・文學論が注目されていたようである。

當時は、文學・文章論が人々によって語られることがよくあつたようである。魏の時代には曹丕の『典論』論文の他に、曹植の「楊徳祖に與ふる書」、應瑒の『文論』があり、西晉では、陸機の「文賦」の他に、摯虞の『文章流別志論』があつた。その後も東晉には李充の『翰林論』、宋代には王微の『鴻寶』があり、顔延之にも「論文」なるものがあつたらしい。

文學・文章論の内容は様々であつたが、例えば「文體」（文章のジャンル）についての議論は、曹丕が最初に『典論』論文の中で問題意識を持ち、次のように論じている。

夫文本同而未異。蓋奏議宜雅、書論宜理、銘誄尚實、詩賦欲麗。此四科不同、故能之者偏也。唯通才能備其體。

夫れ文は本同じくして未異なり。蓋し奏・議は雅なるが宜しく、書・論は理なるが宜しく、銘・誄は實を尚び、詩・賦は麗を欲す。此の四科は同じからず、故に之を能くする者は偏る。唯だ通才のみ能く其の體を備ふ。

文體として、「奏・議・書・論・銘・誄・詩・賦」の八體を挙げ、それぞれの要點を端的に述べている。

この「文體」に関する議論を陸機が受けて、「文賦」のなかで再び取り上げた。すなわち、

體有萬殊、物無一量。紛紜揮霍、形難爲狀。辭程才以效伎、意司契而爲匠。在有無而儼倪、當淺深而不讓。雖離方而遯員、期窮形而盡相。故夫夸目者尚奢、恆心者貴當。言窮者無隘、論達者唯曠。詩緣情而綺靡、賦體物而瀏亮。碑披文以相質、誄纏綿而悽愴。銘博約而溫潤、箴頓挫而清壯。頌優遊以彬蔚、論精微而朗暢。奏平徹以閑雅、說

煒曄而譎誑。雖區分之在茲、亦禁邪而制放。要辭達而理舉、故無取於冗長。(5)
體に萬殊有り、物に一量無し。紛紜として揮霍し、形・状を爲し難し。辭は才を程して以て伎を效し、意は契を司りて匠を爲す。有無に在りて僂佞し、淺深に當りて讓らず。方を離れて員を遷ると雖も、形を窮めて相を盡くさんことを期す。故に夫の目に在る者は奢を尚び、心に愜ふ者は當を貴ぶ。窮を言ふ者は隘無けんや。達を論ずる者は唯だ曠なり。「詩」は情に縁りて綺靡なり、「賦」は物を體して瀏亮たり。「碑」は文を披いて以て相質なり、「誄」は纏綿として悽愴なり。「銘」は博約にして温潤なり、「箴」は頓挫して清壯なり。「頌」は優遊して以て彬蔚なり。「論」は精微にして朗暢なり。「奏」は平徹にして以て閑雅なり、「説」は煒曄にして譎誑なり。區分れて茲に在りとも、亦た邪を禁じて放を制す。辭達して理舉がらんことを要す、故に冗長を取ること無し。

曹丕は「奏・議・書・論・銘・誄・詩・賦」の八つの文體を擧げていたが、陸機の「文賦」では、「議・書」の二體が無くなり、かわって「碑・箴・頌・説」の四體が増えている。このような文體に関する議論は、當時の文壇での一つの議論の對象であったのか、摯虞の文章論である『文章流別志論』は、文體によって古えの文章を整理したものであったずなわち『晉書』摯虞傳には、

又撰古文章、類聚區分爲三十卷、名曰流別集。各爲之論、辭理愜當、爲世所重。
又た古への文章を撰し、類聚 區分して三十卷と爲し、名づけて『流別集』と曰ふ。各之が論を爲し、辭理 愜當にして、世の重んずる所と爲る。

とあり、想うにそれは、古えからの文章を文體別に分類し、各文體ごとに摯虞が意見を述べたものであったらしい。

陸機の「文賦」は先にも述べたように、前代の文學論である曹丕の『典論』論文に比べて、より総合的に文學全般を論じており、その内容も優れたものとなっている。ために近時、中國では多くの中國文學評論の著述が出されているが、その殆ど全てのものが、西晉文學を論ずる際には必ず陸機の「文賦」を取り上げている。例えば、黃海章『中國文學批評簡史』（一九六二年・廣東人民出版社）では、第五章「魏晉的文學批評」の中で、曹丕・陸機・葛洪の三人を取り上げ、陸機について次のように記している。

陸機是晉太康（晉武帝年号）時有名的作家。司馬氏結束了三國分崩離析之局、獲得了暫時的統一、太康時代、呈現着短期的繁榮、一般文人、炫耀于繁榮的表象、而且多出

身于上層社會、和人民有着很遠的距離。所以他們的作品、多屬內容空虛、競逐辭藻和聲律。陸機也是“詞旨敷淺、但工塗澤”（沈德潛標語、見『古詩源』）的、可是他的「文賦」在文學批評史上、却有相當的地位。

陸機は晉の太康（晉の武帝の年号）の時の著名な作家である。司馬氏が三國分裂の局面を收拾し、暫時の統一を果したが、その太康時代は、短期間のうちに著しい繁栄をもたらし、文人達は、繁栄の象徴としてではやされた。しかも多くの文人は上流社會の出身であり、民衆とは大きな隔たりがあったため、その作品は内容が空疎で、表現や聲律の美を求めたものが多かった。陸機の作品も“詞旨 淺を敷けども、但だ澤を塗するに工みなり”というものであるが、しかしその「文賦」は文學批評史上に相當の位置を占めている。

此の他にも、郭紹虞『中國文學批評史』（中華民國三十六年・商務印書館）、朱東潤『中國文學批評史大綱』（一九八三年・上海古籍出版社）、王運熙・楊明『魏晉南北朝文學批評史』（一九八九年・上海古籍出版社）等、いずれも陸機の「文賦」を取り上げて、西晉文學の説明をしている。

以上、見てきたように、「文賦」は陸機の入洛後、南北の文學が接触し、互いに對立して、やがては兩者が調和してゆく中で書かれたものであって、わけても弟の陸雲と文學論を語り合つてゆく過程で何度も書き改められて完成したものと思われる。そうして、そこに語られている文學・文章論は、従來、内容の方に重點が置かれ、表現はその次であるとされていた文章觀を、内容と表現とは表裏一體のものであって、いずれも文章にとって大切なものであるということを主張し、特に、文章の表現を重視した初めての文章論であつて、それは當時からすでに新しい文章・文學論として注目されていた。陸機は、「文賦」に先立つ文學論である曹丕の『典論』論文の後を受けて「文賦」を書き、それは以後の劉勰の『文心雕龍』や鍾嶸の『詩品』を導き出す存在となつたのであり、ここに文學批評史における「文賦」の意味があるように思われる。

終章

西晉文學とは、いかなる状況のもとに生み出され、そうして具體的にはどのような特質を持った文學であったのか。かかる問題を解決するために、まず當時の文學界の實態を捉え、そこで活動していた文人の動きを詳細に調査して、その文學活動を見て行き、そうしてそこにどのような文章・文學が生まれていったか、ということ考察するのが、本論文の目的であった。ここでは、此の研究で明らかにし得たことをまとめ、さらに西晉時代の前後の文學との関わりについても、觸れておこうと思う。

一 西晉文學の本質—西晉文學における陸機の位置付け—

(1) 西晉文學集團と陸機

西晉文學を特徴づけるものとして、文學集團の存在を見逃すことはできない。すなわち西晉時代には、政治的、あるいは文壇の中心人物を中心とした幾つかの文學集團があつて、その集團の中で文學活動が行なわれていた。たとえば惠帝司馬衷の賈后の甥として權勢を誇っていた賈謐は、當時の名のある文人を集めて所謂「二十四友」を主催した。『晉書』賈謐傳には、次のようにある。

或著文章稱美謐、以方賈誼。渤海石崇・歐陽建、滎陽潘岳、吳國陸機・陸雲、蘭陵繆微、京兆杜斌・摯虞、琅邪諸葛詮、弘農王粹、襄陽杜育、南陽鄒捷、齊國左思、清河崔基、沛國劉瓌、汝南和郁・周恢、安平牽秀、潁川陳昉、太原郭彰、高陽許猛、彭城劉訥、中山劉興・劉琨、皆傳會於謐、號曰二十四友。其餘不得預焉。

或いは文章を著して謐を稱美し、以て賈誼に方ぶ。渤海の石崇・歐陽建、滎陽の潘岳、吳國の陸機・陸雲、蘭陵の繆微、京兆の杜斌・摯虞、琅邪の諸葛詮、弘農の王粹、襄陽の杜育、南陽の鄒捷、齊國の左思、清河の崔基、沛國の劉瓌、汝南の和郁・周恢、安平の牽秀、潁川の陳昉、太原の郭彰、高陽の許猛、彭城の劉訥、中山の劉興・劉琨は、皆

な諡に傳會し、號して「二十四友」と曰ふ。其の餘は預るを得ず。

そこには石崇・歐陽建・潘岳といった北方文人に交じって、陸機・陸雲兄弟の名も見える。そもそも此の賈諡の文學集團は、『太平御覽』卷四〇七に引く『晉中興書』に、

年皆長諡、竝以文才、降節事諡、共相朋昵、號曰二十四友。

年は皆な諡より長じたるも、並びに文才を以て、節を降して諡に事へ、共に相ひ朋昵して、號して「二十四友」と曰ふ。

とあるように、その文會では眞劍に文學論を闘わせたり、作品の優劣を競い合ったりというのではなく、諡の權勢を憚って、あくまでも諡の御機嫌を取るためのものであったようであるが、しかし、當代一流の文人が多く集まり、北方文人のたくさんいる中に、南方出身の陸機・陸雲がいたということは、當然そこに競争意識が生まれ、それが互いの文學に影響を及ぼし合うことになったことは十分に考えられる。

そうして此のような文學集團は、賈諡集團の他にも、幾つかのものが存在した。すなわち、張華にその才能を見出されてその許に集まった人々の文學集團、愍懷太子司馬遼の府に集まった文學集團、八王の亂の最中、成都王司馬穎の許に集まった文學集團などがそれであるが、陸機はこれら西晉文壇に存在した主な文學集團のいずれにも参加しており、その一方で、みずからも南方文人の領袖として、南方出身の文人たちを率いて南人文學集團を構成し、その活動の中心となっていたのである。

(2) 西晉文壇における陸機

陸機は、故國呉が滅亡した後、舊里の華亭に約十年のあいだ退居し、太康の末年（二八九）に洛陽入りした。もとより洛陽に入って來た陸機を快く受け入れたのは、西晉文壇の中心的人物の張華であった。やがて陸機は、張華の庇護を受けながら、武帝司馬炎の悼楊后の父として絶大なる権力を有していた楊駿に招かれた。しかし、その楊駿が恵帝司馬衷の賈后に殺されるや、賈后の甥である賈諡の「二十四友」に名を連ねて、その交わりを深めた。やがて賈后が趙王司馬倫に廢され、賈諡が誅殺された時には、陸機は趙王倫側について、賈后一党誅滅に加担している。倫が齊王司馬冏・河間王司馬顥・成都王司馬穎らによって討たれると、機は成都王穎に命を救われて其の身を穎に委ねたが、ついにはその穎によって殺されてしまう。

このように、入洛後の陸機の行跡を見てゆくと、機は常に政治的な有力者、つまり時々

の権力の中心にあった人の許に、その身を寄せていることに氣付く。これは、あたかも陸機が、みずから進んで権力の中心に身を置き、それは機の権力志向の表われであるかのようにも見えるけれども、亡國呉の出身である陸機が、北方社會のなかで生き延びてゆくためには、そのような行動をとることも仕方のないことであった。

ところで、張華ら北方社會の有力者が陸機を自分の許に招いたのは、機の文學的才能によるところが大きい。陸機の文學が、その入洛以前からすでに洛陽にあつても知られていたということとは、臧榮緒『晉書』（『文選』卷十七「文賦」李善注所引）に、

年二十而吳滅。退臨舊里、與弟雲勤學、積十一年。譽流都華、聲溢四表。

年二十にして吳滅ぶ。退きて舊里に臨み、弟の雲と學に勤め、積むこと十一年。譽れは都華に流れ、聲は四表に溢る。

と傳える通りである。そうして『晉書』本傳に「儒術を伏膺し、禮に非ざれば動かず」と記されているように、儒學の教養を身につけ、『詩經』を規範とした古典的な文學觀を持つていた陸機の文學は、北方文人たちの大きな衝擊となった。當時の北方文壇では、華やかで軽やかな文學が盛んであつて、ために『楚辭』に依據した語句や表現を多用した作品が多く作られていた。このような西晉文壇の中に、陸機が登場した意味は何か。

劉勰は『文心雕龍』明詩篇の中で、

晉世羣才、稍入輕綺。

晉世の羣才は、稍や輕綺に入る。

「晉代の多くの文人たちは、次第に繊細微弱の美を追い求めるようになった」と、晉代の詩風を捉えている。また、沈約は「宋書謝靈運傳論」の中で、

縉旨星稠、繁文綺合。

縉旨は星のごとく稠く、繁文は綺のごとく合ふ。

と「美しい内容が星のようにちりばめられ、飾りたてた表現があや絹のように織り成された」と、西晉の文學を特徴づけている。西晉文學に對するこのような見方は、ある意味においては、その特徴をよく捉えているものではあるが、それではまだ十分ではない。實は西晉の文學とは、南方吳において培われた陸機の文學が、その入洛によって北方文壇に持ち込まれ、両者が渾然一體となつて生み出されたものなのである。陸機が西晉文壇に登場したことこそが、前代の様式とは異なつた新たな文學を創造する契機となつたのである。

(3) 陸機の「文賦」と陸雲の「與平原書」

さて、南北の文學が相互に影響を及ぼし合う中であつて、陸機の文章觀・文學觀も次第に變化していったが、そのことを如實に示しているのが、陸雲が兄陸機に宛てた三十五首の書翰「與平原書」である。この書翰の中で、具體的な作品の添削過程を通して、その頃の陸機・陸雲の文章觀を鮮やかに見て取ることができるのである。入洛後の陸機は、北方文學集團のなかで、自己の作品を發表するに際して、相當に意を配っていたようである。勿論、南人の文會の中では、北人に對抗するための文學に関する様々な問題が議論されていたであろうが、これ以外にも、弟の陸雲と絶えず書翰をやりとりして、作品を添削し、文章や文學に関する議論を展開していた。このような議論を通して形成された文章觀・文學觀が記されているのが、陸機の「文賦」なのであり、その中には、「與平原書」において語られる文章・文學觀と共通する事項が多い。

例えば用語について、陸機は「文賦」の中で、「片言を立てて要に居る、乃ち一篇の警策なり」と、「ちよつとしたよい言葉をポイントに置けば、その一篇の警策となり、必ず効果を上げるであろう」と言うが、これは陸雲の「與平原書」に見える「出語」「出言」と同じことを言ったものである。

また句については「文賦」では、「或いは言を短韻に託し、窮跡に對して孤おこる。俯しては寂寞として友無く、仰いでは寥廓として承うくる莫なし。偏絃の獨り張れるに譬たとへ、清唱を含んで應ずる靡なし」と、「句の短いまとまりを作ると孤立してしまい、一本の弦だけでそれに共調する音が無いようだ」と述べるが、これは「與平原書」で、文中で二句だけでまとまってしまうのは「孤」である、という意見と通ずるものである。

此の他、文章の長さについても、陸雲は文章はあまり長くしない方がいい、と言っているが、「文賦」にも「辭達して理擧がらんことを要す、故に冗長を取ること無し」と「長つたらしい文章はよくない」と言っている。

「文賦」は、已に陸機入洛以前に一應まとめられていたようであるが、入洛後に文學に對する考え方が次第に變化してゆくにつれ、それに手が加えられてゆき、最終的に今の形になったものと思われる。要するに「文賦」は、陸機文學の集大成であつて、それは趣を異にする南北の文學がぶつかり合ったことによつて完成した文學論と言ふことができる。

さてそれでは、以上のごとく西晉文學は、中國文學史上、どのような位置付けがなされるのか。以下、西晉文學と前代の文學である建安・正始文學との関わり、次代の文學である東晉文學との関わりについて、本論文の結果をふまえて述べてみたい。

二 中國文學史上における西晉文學の位置付け

西晉王朝（二六五～三一六）五十二年間は、文學史上、陸機の動きを中心に三つの時期に分けることができる。すなわち西暦二六五年、魏・晉の間で禪讓が行なわれ司馬炎（武帝）が即位して西晉王朝が始まったが、武帝の泰始年間（二六五～二七四）、それに続く咸寧年間（二七五～二七九）は、なおも混亂した状況であった。西暦二八〇（武帝の太康元年）、呉が西晉に滅ぼされ、中國が西晉によって統一された以後十年の間、すなわち武帝の太康年間（二八〇～二八九）が、西晉王朝にあって最も安定した時代であった。そうして西晉に滅ぼされた呉國出身の陸機が、西晉の都洛陽に入ったのは太康の末年（二八九）のことであり、西晉王朝が誕生した二六五年から陸機が入洛した二八九年までの二十五年間が、西晉文學史における第一期であって、ことに太康年間は、洛陽を中心に『楚辭』を據り所とした華美で輕快な文學が盛んに行なわれていた。

西暦二九〇、武帝司馬炎が死去し、惠帝司馬衷が即位した。以後、陸機が害に遇った惠帝の太安二年（三〇三）までの十四年間は、西晉文學史における第二期なのであって、この時期は政治的に混亂をきたした時期でもあった。かかる混亂した状況のなかで、文學の面では、政界・文壇の中心人物の下に幾つかの文學集團が構成され、その活動が行なわれていた。殊に注目されるのは、南方呉國出身の陸機・陸雲を始めとする南方文人が多くその活動に加わっていたということである。すなわち、呉においては『詩經』を規範とした古典的な文學が盛んであったが、そのような古典的な文學が北方文壇に持ち込まれたことによって、従來のものとは違った新しい文學が生み出されたのである。本論文の主な研究対象は、まさに此の時期、すなわち西晉文學における第二期であって、基本的に異なる文學觀を抱いていた南北文學が、陸機の入洛を契機として交流を持ち、いかに變化し、その結果、いかなる文學が生まれたのかということを考察することにあつた。

さて、陸機の死後、西暦三〇七年には惠帝司馬衷が世を去り、懷帝司馬熾が即位し永嘉と改元した。此の永嘉五年（三一三）には、世に言う「永嘉の亂」が始まり、西暦三二三には、懷帝司馬熾が殺されて、愍帝司馬業が長安で即位し、改元して建興とした。建興四

年(三二六)、劉曜が長安を攻略し、愍帝は降伏して、ここに西晉王朝は滅亡した。陸機の死後、西晉の滅亡までの十三年間が、西晉文學の第三期で、此の時期、東晉に盛んとなる玄言詩の流行が始まる。

西晉文學は上記の如く、陸機の動きを中心に次の三つの時期に分けることができる。

〔第一期〕(二六五～二八九)

二六五(武帝・泰始元年) 西晉王朝、誕生。

二八〇(武帝 太康元年) 吳、滅亡。

〔第二期〕(二八九～三〇三)

二八九(武帝・太康十年) 陸機、入洛。

三〇三(惠帝・太安二年) 陸機、殺される。

〔第三期〕(三〇三～三二六)

三二一(懷帝・永嘉五年) 永嘉の亂、始まる。

三二六(愍帝・建興四年) 西晉王朝、滅亡。

先にも述べたように、本論文では、このうち主に第二期の陸機の文學を中心に考察してきたが、以下、前後の時期をも含めて、さらにそれ以後の後漢末の「建安文學」、魏の「正始文學」、西晉以後の「東晉文學」との関係について見てゆくことにする。

(1) 建安・正始文學との関わり

劉勰の『文心雕龍』明詩篇では、晉代の詩風について、次のように述べている。

晉世羣才、稍入輕綺。張左潘陸、比肩詩衢。采縟於正始、力柔於建安、或析文以爲妙、

或流靡以自妍。此其大略也。

晉世の羣才は、稍や輕綺に入る。張・左・潘・陸は、肩を詩衢に比ぶ。采は正始よりも縟にして、力は建安よりも柔に、或いは析文以て妙と爲し、或いは流靡以て自ら妍とす。此れ其の大略なり。

「晉の世の作家たちは、(その作風が)次第に柔弱の美に流れていった。張(載・協・亢)、潘(岳・尼)、左(思)、陸(機・雲)らが、肩を詩壇に並べたが、文飾は正始時代よりも華麗で、氣力は建安時代よりも柔弱。分析的に文辭を細かくすることを巧妙と考える者

もあり、文辭を流麗にすることを美しいと考える者もあった。これが西晉時代のあらましである」。ここに劉勰は、「采緝於正始、力柔於建安」というが、具體的にはどのような點を指して言っているのであろうか。劉勰は、建安の詩風を、

慷慨以任氣、磊落以使才。

慷慨 以て氣に任じ、磊落 以て才を使ふ。

「激昂しては意氣の躍るに任せ、細かい事にこだわること無く才能を發揮した」と言っているので、晉代の作品には、そのような點があまり見られないというのであろう。つまり迫力に缺け、あまりに表現面の細かいことにこだわり過ぎることをいうものと思われる。

そもそも後漢・獻帝の建安年間（一九六～二一九）は、曹操の「蒿里行」に、

鎧甲生蟣虱 鎧甲 蟣虱を生じ

萬姓以死亡 萬姓 以て死亡す

白骨露於野 白骨 野に露はに

千里無鷄鳴 千里 鷄鳴無し

生民百遺一 生民 百に一を遺す

念之斷人腸 之を念へば 人の腸を斷つ

（『古詩紀』卷二二）

といい、蔡邕の「悲憤詩」に、

城郭爲山林 城郭 山林と爲り

庭宇生荆艾 庭宇 荆艾生ず

白骨不知誰 白骨 誰か知らず

從橫莫覆蓋 從橫に覆蓋する莫し

（『古詩紀』卷十四）

というように、後漢末に起こった黄巾の亂や、それに續く董卓・曹操の舉兵によって、大いに混亂を極めた時代であった。かかる時代にあつて、みずからも寒門出身の曹操は、人材を確保するために漢代から傳統的に行なわれていた儒學の教養を基礎においたやり方を改め、その出自や儒家的教養の如何にかかわらず、多くの人材を擧用した。此の時期に曹操は、「求賢令」「求逸才令」「擧賢勿拘品行令」等を次々と出している。このようにして多くの人材が集められたことは、文學の面においても、或る變化を生むことになった。漢代の文學は、「詩は志の之く所なり」（『詩經』詩序）、「詩は志を言ふ」（『書經』

堯典」ということを重視してはいたが、實作の面では、却って儒家思想の束縛を受けて自由な感情を発露した作品は多くは生まれなかった。その殆どは「質朴」なる作品である。ところが、後漢末から三國時代にかけて、儒家的思想の束縛から文人たちが次第に開放されてゆき、沈約の「宋書謝靈運傳論」に、

——至建安曹氏基命、三祖陳王、咸蓄盛藻。甫乃以情緯物、以文被質。

建安に至りて、曹氏 命を基め、三祖・陳王、咸な盛藻を蓄ふ。甫めて乃ち情を以て物を緯し、文を以て質に被らしむ。

「建安年間に至り、曹氏が國を建てると、曹操・曹丕・曹叅と曹植が現れたが、いずれも盛んな文才に恵まれており、ここにはじめて情性に基づいて物事を表現し、美しい表現で内容を包むようになった」と言うように、文學に自己の感情をストレートに表出するようになったのである。すなわち、『詩經』『楚辭』や漢代の樂府民歌の形式を繼承しながらも、そこに自らの精神を盛り込んでいったのである。そうしてその精神とは、國家が分裂してしまつて戰亂の續く今の世の中を、再び統一したい、そのためには功を建て業を立てたいという慷慨なのであつて、こうして生まれたのが所謂「建安の風骨」であろうと考える。世の中が混亂し、據るべき地盤を失つた人士の慷慨が、建安の風骨を生み出したのである。

此の建安の時代には、前漢時代からの辭賦に代わつて五言詩が盛んに作られた。それは此の五言詩という文學形式が、建安文人の慷慨を表出するのに最も適していたためでもある。鍾嶸は『詩品』の序で、次のように言っている。

夫四言文約意廣、取效風騷、便可多得。每苦文繁而意少。故世罕習焉。五言居文辭之要、是衆作之有滋味者也。故云會於流俗。豈不以指事造形、窮情寫物、最爲詳切者邪。夫れ四言は文約にして意廣く、效を風騷に取らば、便ち多く得可し。毎に文繁にして而も意少なきに苦しむ。故に世に習ふもの罕なり。五言は文辭の要に居り、是れ衆作の滋味有る者なり。故に流俗に會すと云ふ。豈に事を指し形を造り、情を窮め物を寫すに、最も詳切爲る者を以てならずや。

すなわち、「四言詩は表現が簡約で内容は廣く、『詩經』『楚辭』の風格に學ぶならば、多くの成果を得ることが出来る。しかし、往々にして表現ばかり繁多になつて内容は少ないということにもなりかねない。ために四言詩に習熟する者は稀である。一方、五言詩は文學の中樞に位置し、諸々の形式のうちで最も味わい深いものである。ゆえに大衆の間で

強い普遍性を持っていると言われている。それは五言詩が、事柄を示し物を形象し、心情を吐露し事物を描寫するのに、最も適切であるからではなからうか」と、四言詩よりも五言詩のほうが、事物の表現や心情の吐露に適していることを言う。

かくして建安文學は、内容的には氣力に満ち溢れているところ、形式的には豊かな表現を可能にする五言形式の多用が、その特徴といえる。

曹操は、後漢・獻帝の建安二十一年（二一六）に魏王となり、延康元年（二二〇）に死去した。同じ年に曹操の子の丕が後漢の獻帝より帝位を禪讓され、ここに後漢王朝は滅び、魏王朝が始まった。曹丕は魏の文帝となり、黄初と改元した。翌黄初二年（二二一）、劉備が蜀において帝位に即き、翌年の黄初三年（二二二）には、孫權が呉を建て、魏の明帝曹叡の太和三年（二二九）には帝を稱した。かくして以後、三國鼎立時代が続いてゆく。世情はやはり混亂した状態であったことには變わりないが、この時期には一應の落ち着きを取り戻してゆく。

やがて魏の明帝（曹叡）が死去し、太子の芳が即位して曹爽が政治の實権を手中にした。齊王芳の正始年間（二四〇～二四七）には、清談が流行し、建康文學に繼ぐ文學隆盛の一時期を迎える。正始に續く嘉平元年（二四九）にもともと曹爽とともに太子芳を輔佐していた司馬懿が政變を起こし、曹爽・桓範・何晏といった重臣を殺害する。正始以後、嘉平（二四九～二五三）、正元（二五四～二五五）、甘露（二五六～二五九）、景元（二六〇～二六三）の二十數年間は、晉が魏王朝から帝位を奪うために恐怖政治が行なわれた時代であった。正始以後の時期はまさしく司馬懿が帝位を篡奪するための準備段階の時期であって、多くの文人は自己の保全のために、老莊思想を語り、禮法名教を無視するといった態度をとった。つまり知識人たちは現實から逃避するために、かかる態度をとるのであり、清談が盛んであった理由もここにある。趙翼の『二十二史劄記』卷八に、魏晉の清談の變遷について、次のように述べられている。

清談起於魏正始中。何晏王弼祖述老莊、謂天地萬物、皆以無爲本。無也者、開物成務、無往而不存者也（王衍傳）。是時阮籍亦素有高名。口談浮虛、不遵禮法（裴頠傳）。

籍嘗作大人先生傳、謂世之禮法君子、如螽之處禪（阮籍傳）。其後王衍樂廣慕之、俱宅心事外、名重於時。天下言風流者、以王樂爲稱首（樂廣傳）。後進莫不競爲浮誕、遂成風俗（王衍傳）。

清談は魏の正始中に起る。何晏・王弼は老莊を祖述し、「天地萬物は、皆な無を以て本と爲す。無なる者は、物を開き務めを成し、往くとして存せざる者無きなり」と謂ふ

(王衍傳)。是の時、阮籍も亦た素より高名有り。口に浮虚を談じ、禮法に違はず(裴頠傳)。籍嘗て「大人先生傳」を作りて、「世の禮法の君子は、蝨の禪に處るが如し」と謂ふ(阮籍傳)。其の後、王衍・樂廣は之を慕ひ、俱に心を事外に宅き、名は時に重んぜらる。天下の風流を言ふ者、王・樂を以て稱首と爲す(樂廣傳)。後進競ひて浮誕を爲さざる莫く、遂に風俗と成る(王衍傳)。

何晏・王弼が亡くなったのは、嘉平元年(二四九)のことであるから、二人が活躍したのはもっぱら正始年間ということになる。阮籍(二一六〜二五三)・嵇康(二二三〜二六二)はそれにやや後れ、王衍(二五六〜三一)・樂廣(?〜三〇四)は西晉の太康以後の人である。

正始を代表する詩人としては、阮籍と嵇康とを挙げることができる。いま、『文選』卷二三に収める阮籍の「詠懷詩」十七首の其の第一首を取り上げてみよう。

| | |
|-------|--------------|
| 夜中不能寐 | 夜中なるも寐ぬる能はず |
| 起坐彈鳴琴 | 起き坐して 鳴琴を彈ず |
| 薄帷鑑明月 | 薄き帷は 明月に鑑り |
| 清風吹我衿 | 清き風は 我が衿を吹く |
| 孤鴻號外野 | 孤鴻は 外の野に號び |
| 朔鳥鳴北林 | 朔鳥は 北の林に鳴く |
| 徘徊將何見 | 徘徊して將た何をか見る |
| 憂思獨傷心 | 憂思して獨り心を傷ましむ |

秋の夜、沸き起こつてくる何とも言われない不安を詠じた此の作品に見られるように、時の政治に對する不満や抵抗、そうしてそこから起こる深い悩みをあからさまにぶつけるのではなく、抑えた表現で吐露している阮籍の詩は、まさしく當時の混亂した政治状況に對する反抗精神の表出であった。

西晉の太康年間(二八〇〜二八九)、それに續く元康年間(二九一〜二九九)の二十年間は、政治的には比較的安定した時代であった。劉勰が『文心雕龍』明詩篇で、

采縛於正始、力柔於建安。

采は正始よりも縛にして、力は建安よりも柔なり。

と言う此の時期の文學は、かかる比較的安定した社會状況が生み出したものといえる。

つまり、據るべき所を失い戦亂が絶えることのなかつた建安の風骨は、世情が安定するにもなつて次第に消えてゆき、また、司馬氏の恐怖政治に怯えた正始の頃の詩風、すなわち時の政治に對する反抗精神を抑えた表現で吐露する詩は影を潜め、それらに代わつて華やかで輕やかな文學が誕生したのが、西晉の太康年間であつた。それが劉勰の言う、

或析文以爲妙、或流靡以自妍。

或いは析文以て妙と爲し、或いは流靡以て自ら妍とす。

「分析的に文辭を細かくすることを巧妙と考え、文辭を流麗にすることを美しいと考える」ことになつたのである。世情が平穩であつたために、文學が盛んになり、その文學は安定した世情を反映して、混亂を極めていた前代よりも、華麗で美しい文章を生むことになつたと言ふことができよう。そうしてこのような時代を鍾嶸は、建安年間に次ぐ五言詩の第二の隆盛期と捉えたのである。すなわち、『詩品』の序に、

太康中、三張二陸、兩潘一左、勃爾俱興、踵武前王。風流未沫、亦文章之中興也。

太康中、三張・二陸、兩潘・一左、勃爾として俱に興り、武を前王に踵ぐ。風流未だ沫まず、亦た文章の中興なり。

と、太康年間に「文章の中興」と考えるのがそれである。また、沈約が「宋書謝靈運傳論」の中で、

降及元康、潘陸特秀。律異班賈、體變曹王。緝旨星稠、繁文綺合。綴平臺之逸響、采南皮之高韻。遺風餘烈、事極江右。

降りて元康に及ぶや、潘・陸 特り秀づ。律は班・賈に異なり、體は曹・王に變ず。緝旨は星のごとく稠く、繁文は綺のごとく合ふ。平臺の逸響を綴り、南皮の高韻を采る。遺風 餘烈、事は江右に極まれり。

「元康年間には、潘岳と陸機がずば抜けた存在であつたが、その調子は班固や賈誼とは異なつており、様式は曹植や王粲とは變わつていて、美しい内容が星のごとくにちりばめられ、飾りたてた表現があや絹のごとくに織り成された。平臺に侍つた司馬相如のすばらしい響きが綴られ、南皮に遊んだ建安の文人たちの高い調べが奏でられて、前代の遺風は、西晉の世において最後の輝きをあげた」と言い、檀道鸞が『續晉陽秋』の中で、

自司馬相如王褒楊雄諸賢、世尚賦頌、皆體則詩騷、傍綜百家之言。及至建安、而詩章大盛。逮乎西朝之末、潘陸之徒、雖時有質文、而宗歸不異也。

司馬相如・王褒・楊雄の諸賢自り、世々賦頌を尚^{たつ}び、皆な體は『詩』『騷』に則^つり、百家の言を傍^{たつ}綜す。建安に至るに及び、詩章 大いに盛んなり。西朝の末に逮^{たつ}ぶや、潘・陸の徒は、時に質文有りと雖も、宗歸は異ならざるなり。

「司馬相如・王褒・楊雄の諸賢以來、世々賦頌をたつとび、みな『詩經』『楚辭』の體に則つて、百家の言を網羅していた。建安に至つて、詩文がいよいよ盛んになった。西晉の末になると、潘岳・陸機らは、時に質と文の違いはあったが、その依據した基本は異なることはなかった」と言っているのも、いずれも同じことを言うのである。

以上、後漢の建安年間の文學から魏の正始年間、そして西晉の太康・元康年間に至るまでの文學の變遷を見ていったが、そこには政治状況、すなわち世情の状況が大きく關係していることが分かる。つまり戦亂の絶えることのなかった建安の時代には、據り所のない文人はその慷慨を文學の中に表出することになった。かかる文人の慷慨が文學に表されたものが、所謂「建安の風骨」であつて、このような「風骨」は、三國鼎立の時代、すなわち一時的にであれ戦火が下火になつてゆくとともに、文學のなかからも消えてゆくことになる。やがて、司馬氏の恐怖政治が行なわれるや、文人たちは混亂した世情を逃避するかのように清談に耽り、自己の深い苦悩を抑壓した詩を生むことにもなつた。これが魏の正始年間から西晉王朝が始まるまでの文學の状況である。やがて、西晉の武帝が即位して西晉王朝が始まる太康年間、政治的にも最も落ち着いていた時期であつて、文學は次第に華美な傾向のものとなつてゆく。そして陸機ら南人が入洛して、南北文學が渾然一體となつて従來には見ることでできなかつた新しい文學が生み出されたのである。

それでは、その新しい文學とは何か。劉勰・鍾嶸・沈約・檀道鸞らの説明では、なおも抽象的で分かり難い西晉文學の特質は何か、ということを説明するのが本論文の目的であつた。それは先にも述べたごとく、西晉の太康年間、洛陽では世情の安定に伴つて文學は華美なものとなつていった。北方文壇では、文學を華やかで軽やかなものにするための要素を『楚辭』に求めた。『楚辭』の語句や表現を取り込むことによって、文章を華美で軽快なものにしようとしたのである。そして詩では、自己の感情を思うままに表現しにくい『詩經』に基づく四言詩よりも、感情の表出もしやすく、軽快なリズムをもつた五言詩を盛んに作つた。かかる傾向の北方文學に對して、南方吳國では、『詩經』を規範とした古典的な四言詩がその主流であつた。このように、互いにまったく異なつた文學を獨自に作つていた南北文學が交渉を持ち、刺激を受け合う契機となつたのが、太康の末年、陸機の入洛であつた。陸機は南方吳國を代表する文人であり、その彼が北方文壇のなかに入

つて来たことによつて、南北文學が對立し、やがては融合して、新しい文學が生み出されることになったのである。それは『詩經』と『楚辭』のそれぞれの要素を取り込んでゆくというものであったが、それを如何に効果的に自己の作品の中に盛り込んでゆくか、どのようにすれば、美しい文章になるか、といった修辭に關わる問題を文人たちに考えさせることにもなった。その結果として従來の、内容を重視していた文學に代わつて、表現の面が重視されることになった。すなわち、語の使い方・句の作り方・典故の用い方といった修辭的な面に意を注いだ文學が多く生み出されていったのである。

その後、西晉王朝は「永嘉の亂」をきっかけに、混亂に向かつてゆくが、これ以後のことについて、すなわち西晉末の永嘉年間から東晉にかけての文學の變遷の狀況を次に見てゆくことにする。

(2) 東晉文學との關わり

劉勰の『文心雕龍』明詩篇では、東晉の詩風について、次のように論じている。

江左篇製、溺乎玄風、嗤笑徇務之志、崇盛亡機之談。袁孫已下、雖各有雕采、而辭趣一揆、莫與爭雄。所以景純仙篇、挺拔而爲俊矣。

江左の篇製は、玄風に溺れ、徇務の志を嗤笑し、亡機の談を崇盛す。袁・孫已下、各々雕采有りと雖も、辭趣一揆をにし、與に雄を争ふ莫し。景純の仙篇、挺拔して俊と爲る所以なり。

すなわち、「東晉時代の作品は、老荘の思想に溺れた結果、眞面目に世事に務める精神をさげすみ、清談を崇んだ。袁宏・孫綽をはじめとする人々の作品には、それぞれに形式的な美しさはあるけれども、その内容は畫一的で、これといった勝れたものはない。郭璞の『遊仙詩』がひとときわ優れていとされる所以はここにある」と、東晉になると、その作品は老荘の思想に溺れ、眞面目に仕事に励むことを嘲笑し、清談が盛んになったと言う。

また、鍾嶸の『詩品』では、西晉末の懷帝の永嘉年間（三〇七〜三一三）の文學について、

永嘉時、貴黄老、稍尚虚談。於時篇什、理過其辭、淡乎寡味。

永嘉の時、黄老を貴び、稍く虚談を尚ぶ。時に於いて篇什は、理 其の辭に過ぎ、淡乎として味はひ寡なし。

と、「永嘉年間には、老荘の學が貴ばれ、虚無の談論を尊重する風潮が高まっていった。この頃の詩歌は、哲学性が文學性を越えて過剰となり、道家的な淡泊さに支配されて文學的な風味に乏しくなった」と、老荘の學や虚無の談が流行したことを述べ、其の後、東晉になつて、建安時代の風力が盡きてしまつたと、次のように言う。

爰及江左、微波尚傳。孫綽許詢桓庾諸公、詩皆平典、似道德論、建安風力盡矣。

爰に江左に及び、微波 尚ほ傳はれり。孫綽・許詢・桓・庾の諸公、詩は平典にして、道德論に似、建安の風力は盡きたり。

「やがて東晉の時代になつても、玄言の風潮は依然として傳わつていた。孫綽・許詢や桓温・庾亮の諸公は、その詩は平板で、内容は道家の哲學論文のごときものであり、かくして建安の活力は盡きてしまつた」。

このように、西晉末から東晉初めにかけては、もっぱら玄言詩が一世を風靡した時代であつたが、その時に、かかる風潮に抵抗した文人がいたことを、次のように述べている。

先是郭景純用儁上之才、創變其體、劉越石仗清剛之氣、贊成厥美。然彼衆我寡、未能動俗。

是より先、郭景純は儁上の才を用て、其の體を創變し、劉越石は清剛の氣に仗りて、厥の美を賛成す。然れども彼は衆くして我は寡なく、未だ俗を動かす能はず。

「此の時期、すなわち西晉末から東晉初めにかけての時期よりも先に、郭璞はその天才によつて、五言詩の風を變革し、劉琨は清澄剛直の氣によつて五言詩の美の完成に努力した。しかし、衆寡敵せずであつて、世の趨勢を動かすことはできなかった」と、郭璞と劉琨の二人は、玄言の風に流されることなく、文學の美の完成に力を注いだと言う。

次に、沈約の「宋書謝靈運傳論」(『文選』卷五〇)では、

在晉中興、玄風獨扇、爲學窮於柱下、博物止乎七篇。馳騁文辭、義殫於此。自建武暨于義熙、歷載將百。雖比響聯辭、波屬雲委、莫不寄言上德、託意玄珠。遒麗之辭、無聞焉爾。

晉の中興に在りて、玄風 獨り扇んに、學を爲すや柱下に窮まり、物を博むるや七篇に止る。文辭を馳騁する、義は此に殫く。建武自り義熙に暨ぶまで、載を歴ること將に百ならずとす。比響 聯辭、波のごごとく屬き雲のごごとく委ると雖も、言を上徳に寄せ、意を玄珠に託せざるは莫し。遒麗の辭、聞く無きのみ。

「晉が中興すると、老荘の風だけが盛んで、學問をするといえは『老子』だけ、廣く知るといっても『莊子』の七篇にすぎず、文章をいくら書いても、その内容は老荘ばかりという事になった。建武年間から義熙年間に及ぶまで、百年近くを経過し、たくさんの文章が作られて、波のごとく續き、雲のごとく重ねられたが、いずれも言葉を『老子』上徳に借り、思いを『莊子』玄珠に託するものばかりで、美しい文章は見ることができなかつた」と、東晉になると老荘の風だけが盛んになり、建武年間（三一七―三一八）から義熙年間（四〇五―四一八）に及ぶまで百年近くの間多くの詩文が作られたが、それらはいずれも老荘の言葉を借りたものばかりであつたと述べている。

さらに、檀道鸞の『續晉陽秋』（『世説新語』文學篇注所引）では、

至過江、佛理尤盛。故郭璞五言、始會合道家之言而韻之。

江を過ぐるに至り、佛理尤も盛んなり。故より郭璞の五言は、始めて道家の言を會合して之を韻す。

「東晉になつてからは、佛教がもっとも盛んになつた。もとより郭璞の五言詩は、始めて道家の言を集めてこれを詠じたものであつた」と、論じている。佛教は夙に後漢の頃には行なわれていたようであるが、東晉になつていよいよ盛んになつた。例えば『世説新語』文學篇には、康僧淵が、殷浩（字は淵源）の坐で多くの賓客を前にして哲學の議論をしたことが、次のように記されている。

康僧淵初過江、未有知者、恒周旋市肆、乞索以自營。忽往殷淵源許、值盛有賓客。殷使坐、粗與寒溫、遂及義理。語言辭旨、曾無愧色、領略粗舉、一往參詣。由是知之。康僧淵初めて江を過ぎ、未だ知る者有らず、恒に市肆に周旋し、乞索して以て自ら營む。忽ち殷淵源の許に往き、盛んに賓客有るに値ふ。殷坐せしめ、粗ぼ與に寒溫し、遂に義理に及ぶ。語言辭旨、曾て愧づる色無く、領略粗舉し、一往にして參詣す。是に由りて之を知る。

このように、東晉になると老荘の思想に佛教が加わり、議論の場においても詩作においても、佛教の影響が強くなつていった。

さて、これら諸家の意見は、いずれも西晉末から東晉の初めにかけて、玄言の詩が盛んになつたことを、その時代の文學の特徴として捉えたものであるが、此の時期、なぜ玄言詩が流行したのであろうか。

西曆三〇六年、すなわち惠帝の光熙元年十一月、惠帝は顯陽殿において、その四十八年の生涯を終えた。即位した懷帝司馬熾は、翌年（三〇七）、永嘉と改元した。西晉王朝は「八王の亂」によって大いに混亂した状態であったが、此の混亂に乗じて匈奴の酋長劉淵は、惠帝の永興元年（三〇四）に左國城に據つて王位に即き、國を漢と號した。劉淵は、東方の羯族の石勒や漢族流民の首領王彌らを歸屬させ、その勢力を擴張していった。時に西晉王朝は、東海王司馬越がかりうじてその基盤を維持していたものの、懷帝の永嘉五年（三一）に東海王越が死去するや、西晉の軍は石勒に敗られ、洛陽は劉曜・王彌らによって陥落させられ、懷帝は平陽に連れ去られた。いわゆる「永嘉の亂」である。このように、西晉時代は、武帝司馬炎の太康年間（二八〇～二八九）こそ比較的安定した状態であったが、その後は混亂が絶えることなく、ついに「永嘉の亂」を迎えるのである。捕えられた懷帝は、二年後（三一三）に殺され、代わつて愍帝司馬業が長安で即位した。しかし猶おも混亂は止むことなく、愍帝の建興四年（三一六）、劉曜が長安を攻略し愍帝が降つて、ここに西晉王朝は滅亡した。かかる状況を、干寶は「晉紀總論」（『文選』卷四九）の中で、次のように論じている。

武皇既崩、山陵未乾、楊駿被誅、母后廢黜、朝士舊臣、夷滅者數十族、尋以二公楚王之變。宗子無維城之助、而閼伯實沈之郤歲構、師尹無具瞻之貴、而顛墜戮辱之禍日有。至乃易天子以太上之號、而有免官之謠。民不見德、唯亂是聞。朝爲伊周、夕爲桀跖。善惡陷於成敗、毀譽齊於勢利。

於是輕薄干紀之士、役姦智以投之、如夜蟲之赴火。内外混淆、庶官失才、名實反錯、天綱解紐、國政迭移於亂人、禁兵外散於四方。方嶽無鈞石之鎮、閼門無結草之固。李辰石冰、傾之於荆揚、劉淵王彌、撓之於青冀、二十餘年、而河洛爲墟、戎羯稱制、二帝失尊、山陵無所。何哉。樹立失權、託付非才、四維不張、而苟且之政多也。

武皇は既に崩じて、山陵は未だ乾かざるに、楊駿は誅せられ、母后は廢黜せられ、朝士舊臣の、夷滅せらるる者は數十族、尋ぐに二公 楚王の變を以てす。宗子 維城の助け無くして、閼伯 實沈の郤 歲ごとに構へ、師尹には具瞻の貴無くして、顛墜 戮辱の禍ひ日々に有り。乃ち天子に易ふるに太上の號を以てし、免官の謠有るに至る。民は徳を見ずして、唯だ亂を是れ聞くのみ。朝には伊周と爲り、夕べには桀跖と爲る。善惡は成敗に陥り、毀譽は勢利に齊かざる。

是に於いて輕薄 干紀の士、姦智を役して以て之に投ずること、夜蟲の火に赴くが如し。内外は混淆し、庶官は才を失ひ、名實は反錯し、天綱は紐を解き、國政は迭ひに亂人に移り、禁兵は外に四方に散ず。方嶽に鈞石の鎮無く、閼門に結草の固め無し。李辰・石

冰は、之を荆・揚に傾け、劉淵・王彌は、之を青・冀に撓し、二十餘年にして、河洛は墟と爲り、戎羯は制を稱し、二帝は尊を失ひ、山陵は所無し。何ぞ哉。樹立するに權を失ひ、託付するに才に非ず、四維は張らずして、苟且の政の多ければなり。

武帝の崩御の後、御陵の土が乾かないうちに、楊駿は誅殺され、太后は退位させられ、朝士や舊臣で殺された者は數十族を数え、それに續いて二公（汝南王司馬亮と太保衛玠）と楚王瑋の事件が起こった。嫡子には城のような守りとなる援助者もなく、闕伯と實沈のごとき兄弟の争いが年ごとに起こり、大臣には仰ぎ見られるほどの尊さはなく、落ちぶれと辱めの災いが日々に生じた。かくて「天子」に代えて「太上」の號を與え、「免職された天子」の歌まで作られるに至った。人民は、徳は見ようにも見られず、ただ亂を見るばかりであった。朝方には伊尹・周公のごとき賢相であった存在が、暮れには桀・王・盜跖のごとき悪者に成り下がり、善か悪かは成功するか失敗するかによって決まり、非毀か稱賛かは權勢に脅かされて決まる。

このようになると、輕薄で規律を破る士が、悪知恵を働かせて政務に乗り出し、そのさまはまるで夜の虫が火に群がり集まるかのようであった。國は内も外も入り亂れ、役人連中は才能を發揮せず、名と實とは引つ繰り返り、天の綱紀は亂れ、國の政治は次々に反逆者の手に渡り、近衛兵は四方にばらばらになった。諸王族には混亂を鎮壓するだけの重みもなく、國境には草を結んで人を倒すほどの固めもない。李辰や石冰は、荊州・揚州を危うくし、劉淵や王彌は、青州・冀州を亂し、二十數年にして長安・洛陽は廢墟となり、戎の劉曜・劉粲が政治を執り、懷帝・愍帝は尊號を失ってしまい、御陵の作り場所さえない。それはなぜかといえ、王位を樹立するに權力を失い、政務を付託するに人材を得ず、國政の根本を行なわずして、その場しのぎの政治が多かったからである。

こうした世の亂れが續くなかにあっては、知識人は現實逃避の方向に向かう。これは先に見たように、魏の正始年間（二四〇～二四七）に、多くの知識人が自己の保全のために清談に耽り、老莊を語ったのと同じ現象である。そうして玄學の流行にともなうて、文學の面においても、玄言詩が盛んになってゆくのである。西晉末の永嘉年間（三〇七～三一二）は、まさしくこのような時代であった。

しかし、かかる風潮は、西晉の末になって俄かに起こったものではない。つまり、西晉の元康年間（二九一～二九九）の頃にも、已にその傾向があったと考えられる。いま、そのことを陸機・陸雲について見てみることにしたい。

陸雲が、張華に宛てた書翰のなかに、次のようなものがある。

長幼之序、人倫大司。季世多難、失敬在昔。敢希令典、求思自邁。謹奏下敬、以藉虔款。

長幼の序は、人倫の大司なり。季世 難多く、敬を在昔に失ふ。敢へて令典を希ひ、求めて自ら邁かんことを思ふ。謹んで下敬を奏し、以て虔款を藉す。

(「與張光祿書」其一)

「長幼の序は、人として守るべき大きな務めですが、季の世になって困難なことが多く、目上の者を敬う習わしはすでに失われてしまいました。なんとか善き教えを願ひ、自ら務めて行きたいと思っております。謹んで愚見を奏し、誠の心を述べた次第です」。「長幼の序」すなわち、年長者と年少者との間の守るべき秩序について語られている此の書翰と同じ内容の書翰が他にもある。すなわち、朱光祿・嚴宛陵（いずれも陸雲との詳しい関係は不明）なる人物に宛てた書翰がそれである。

少長之禮、教化所崇。中葉陵遲、舊章廢替。追惟前訓、思遵在昔。敢慕高義、謹奏下敬。

少長の禮は、教化の崇ぶ所なり。中葉に陵遲し、舊章 廢替す。前訓を追惟し、在昔に遵はんことを思ふ。敢へて高義を慕ひ、謹んで下敬を奏す。

(「與朱光祿書」)

「少長の禮は、教化の尊ぶものです。(しかし、それも)中葉に次第に衰え、古えの禮典は廢れてしまいました。私は前人の訓えを追慕し、昔に違いたいと思っております。それで敢えてあなたの高義をお慕ひし、謹んで愚見を申し上げた次第です」。

少長之序、禮之大司。晚節陵替、舊章殘棄。瞻言令典、既慕欽承。仰憑高風、實副邦民。謹奏下敬、以藉虔款。思復未遠、庶免悔吝。

少長の序は、禮の大司なり。晚節 陵替し、舊章 殘棄す。令典を瞻言し、既に欽み承けんことを慕ふ。仰いで高風に憑り、實に邦民に副はん。謹んで下敬を奏し、以て虔款を藉す。復た未だ遠からざらんことを思ひ、悔吝を免れんことを庶ふ。

(「與嚴宛陵書」)

「少長の序は、禮の大法です。(しかし)後の世になると次第に衰え、古えの法令も廢れてしまいました。古えの善き教えを遠く思い、謹んで継承したいと願っております。仰いではあなたの高き風格を頼み、まことに邦民の願ひに副わんことを思っております。謹ん

で愚見を奏し、私の本心を申し上げました。今のうちに元に戻すことを考えて、憂慮することのないようにと願うばかりです」。

嚴宛陵に宛てた此の書翰に對しては、嚴宛陵から次のような返書が寄せられている。

奉詠美旨、流風綽遠。復禮興仁、命世之作。獲尚齒之況、無尊賢之報、抱此永懷愧歎。何有君子弘道厚文無施。是用釋筆、歸于神要。

美旨を奉詠するに、流風 綽遠なり。禮に復り仁に興すは、命世の作。尚齒の況を獲るも、尊賢の報無く、此を抱きては永く懷ひ愧歎す。何ぞ君子の、道を弘め文を厚くして施す無きもの有らんや。是を用て筆を釋き、神要に歸せん。 (「嚴宛陵答書」)

「お便りを頂きましたが、(あなたのお手紙には)先人の遺した美風がのこっております。禮に復り仁に興すことは、名世なる者の務めです。すばらしきお便りを頂きながら、それに向まくお返事することもできず、このことを思っではいつまでも愧じいるばかりです。どうして君子であって、道を弘め文を厚くして、施すことのないものがありますか。このようなわけで筆を擱き、あなたのお考えにまかせる次第です」。

これらの書翰の内容から見ると、或いは張華の坐においてのことであろうか、同一のテーマのもとに談論が行なわれ、以後、その問題について、書翰をやりとりしたものと思われる。當然、このような談論の場では、老荘をテーマとした所謂「清談」も行なわれていたであろうと考えられる。

陸雲の「與戴季甫書」其四に、次のようにある。

武陵於荊州、云多人士。聞周孟子、伍令明、潘世長諸人、竝爲美德。心常依依。

武陵は荊州に於いて、人士多しと云ふ。周孟子・伍令明・潘世長の諸人は、並びに美德を爲すと聞く。心は常に依依たり。

ここに名に見える「潘世長」なる人物は、『晉書』卷九〇・良吏傳にある潘京(字は世長)のことと思われる。すなわち、

潘京字世長、武陵漢壽人也。弱冠郡辟主簿、太守趙夔甚器之。

潘京、字は世長、武陵・漢壽の人なり。弱冠にして郡主簿に辟す。太守の趙夔は甚だ之を器とす。

とある。さらに『晉書』には、潘京が秀才に擧げられて洛陽入りしてからの事として、次

のようなことを記している。

尚書令樂廣、京州人也。共談累日、深歎其才。謂京曰、君天才過人。恨不學耳。若學必爲一代談宗。京感其言、遂勤學不倦。時武陵太守戴昌、亦善談論。與京共談、京假借之。昌以爲不如己、笑而遣之、令過其子若思。京方極其言論。昌竊聽之、乃歎服曰、才不可假。遂父子俱屈焉。

尚書令樂廣は、京州の人なり。共に談じて日を累ね、深く其の才を歎ず。京に謂ひて曰く、「君は天才 人に過ぐ。恨むらくは學ばざること耳。若し學ばば必ずや一代の談宗と爲らん」と。京は其の言に感じ、遂に勤學して倦まず。時に武陵太守の戴昌も、亦た善く談論す。京と共に談ずるに、京は之を假借せり。昌は以て己に如かずと爲し、笑ひて之を遣り、其の子の若思に過らしむ。京は方に其の言論を極む。昌は竊かに之を聴き、乃ち歎服して曰く、「才は假す可からず」と。遂に父子 俱に屈せり。

武陵太守の戴昌が、自分の子の若思と潘京とを談論させたというが、戴若思とは、陸機と交わりを結んで入洛した南方人士であり、もちろん陸雲とも交際のあった人である。このことから考えて、陸機ら南人の間でも談論が行なわれていたということが考えられる。また樂廣といえは談論の名手であり、『世說新語』言語篇には、次のごとき話が傳えられている。

諸名士共至洛水戲。還樂令問王夷甫曰、今日戲樂乎。王曰、裴僕射善談名理、混混有雅致。張茂先論史漢、靡靡可聽。我與王安豐說延陵子房、亦超超玄著。

諸名士 共に洛水に至りて戯る。還りて樂令 王夷甫に問ひて曰く、「今日の戯は樂しかりしや」と。王曰く、「裴僕射は善く名理を談じ、混混として雅致有り。張茂先は史漢を論じ、靡靡として聽く可し。我と王安豐とは延陵・子房を説き、亦た超超として玄著なり」と。

すなわち、時の名士たちが連れだつて洛水に遊びに出かけ、歸つてきたところへ樂廣が、王衍（字は夷甫）に「今日の遊びは樂しいものであったか」と問ねると、王衍は「裴頠は巧みに名理の論を談じ、混混として優雅な趣きがあり、張華は『史記』や『漢書』を論じて、靡靡として傾聴させるものがあつた。私と王戎は延陵（呉の季札）や子房（漢の張良）について語つたが、これもまた超超として深い趣きがあつた」と答えた、というのであるが、これによつて、南人に好意的であつた張華や裴頠らも談論をしていたということが分かる。

さて陸機には、隱遁を主題とした「招隱詩」という作品がある。「招隱」とは、漢の淮南王劉安が、在野の學才の士を招くために作らせたという、『楚辭』の「招隱士」から始まるもので、晉代には多く山中の隱者を尋ねたり、隱逸の生活を求めることを主題としたものが作られた。陸機には今に傳わる「招隱詩」が二首（『陸士衡文集』卷三）あるが、いま、そのうち『文選』卷二二に収めるものを取り上げる。

明發心不夷

明發まで 心は夷はず

振衣聊躑躅

衣を振へて聊か躑躅す

躑躅欲安之

躑躅して安くにか之かんと欲する

幽人在浚谷

幽人 浚谷に在り

朝採南澗藻

朝に南澗の藻を採り

夕息西山足

夕べに西山の足に息ふ

輕條象雲構

輕き條は雲構に象り

密葉成翠幄

密れる葉は翠幄を成す

激楚佇蘭林

激楚は蘭の林に佇り

回芳薄秀木

回芳は秀しき木に薄く

山溜何泠泠

山溜 何ぞ泠泠たる

飛泉漱鳴玉

飛泉 鳴玉を漱す

哀音附靈波

哀音は靈波に附き

頽響赴會曲

頽響は會れる曲に赴く

至樂非有假

至樂は假れる有るに非ず

安事澆醇樸

安んぞ醇樸を澆くするを事とせん

富貴苟難圖

富貴は苟に圖り難し

稅駕從所欲

駕を稅して欲する所に從はん

美しい自然をたたえながら、憂いの多いこの世を捨てて隱遁したいと歌う此の詩は、『易經』や『莊子』の語句を用いながら、表現面においても内容的にも玄言詩の要素を多く含んだ作品と言える。

『文選』卷二二には、陸機の「招隱詩」の他に、左思の作品を二首収めている。今、その第一首を見てみよう。

杖策招隱士

杖を杖いて隱士を招ねんとす

荒塗橫古今

荒塗 古今に横れり

巖穴無結構

巖穴には結構無きも

丘中有鳴琴

丘中には鳴琴有り

白雪停陰岡

白雪 陰岡に停り

丹葩曜陽林

丹葩 陽林を曜す

石泉漱瓊瑤

石泉は瓊瑤を漱ぎ

織鱗亦浮沈

織鱗も亦た浮沈す

非必絲與竹

絲と竹とを必ずるに非ず

山水有清音

山水に清音有り

何事待嘯歌

何ぞ事として嘯歌を待たん

灌木自悲吟

灌木 自ら悲吟す

秋菊兼糗糧

秋菊は糗糧を兼ね

幽蘭閒重襟

幽蘭は重襟に閒る

躊躇足力煩

躊躇して 足力煩ふ

聊欲投吾簪

聊か吾が簪を投ぜんと欲す

『楚辭』の語句を多く借りて、山中の趣き深いきさまさまざまな景物に目をやり、煩いの多い俗世を去って、この山中にとどまりたいという願いを詠じている。此の他、張華にも「招隱詩」がある（『古詩紀』卷三二）が、或いは共通したテーマのもとに作られたものであるうか。

ところで、『晉書』陸雲傳には、次のような話が記されている。

初、雲嘗行、逗留故人家。夜暗迷路、莫知所從。忽望草中有火光。於是趣之、至一家、便寄宿。見一少年、美風姿、共談老子、辭致深遠。向曉辭去、行十許里、至故人家。

云此數十里中無人居。雲意始悟。却尋昨宿處、乃王弼家。雲本無玄學、自此談老殊進。初め、雲 嘗て行き、故人の家に逗留せんとす。夜暗くして路に迷ひ、従ふ所を知る莫し。忽ち草中に火の光有るを望む。是に於いて之に趣き、一家に至り、便ち寄宿す。一少年の、美しき風姿なるに見ひ、共に『老子』を談ずるに、辭は深遠を致す。曉に向として辭し去り、行くこと十許里にして、故人の家に至る。云ふ、「此の數十里中 人居無し」と。雲は意に始めて悟る。却きて昨 宿せし處を尋ぬるに、乃ち王弼の家なり。雲は本より玄學無きも、此れ自ら『老』を談ずること殊に進めり。

「その初め、雲は古馴染みの家に出かけて行き、宿泊しようとしたことがあった。夜、暗

くなつて道に迷い、道順が分からなくなつてしまつた。ふと、草の中から火の光が見えたので、それに向かつて行くと、一軒の家に至り、そこに泊めてもらった。一人の容貌の美しい少年がいて、一緒に『老子』を語つたが、その話す言葉は奥義を究めていた。夜明け方に辭去し、十數里歩いて、古馴染みの家に到着した。その人が言うことには、『この數十里の中には、人家はありません』と。雲はやつと氣がついた。そこで昨晚、泊まつたところを尋ねてみると、なんと王弼の墓であつた。雲にはもともと玄學は無かつたが、それより後、『老子』を語ることがことに多くなつた」という話であるが、これと同様の話が『水經』穀水注に引く「袁氏王陸詩敘」では、陸機のこととして次のように記されている。

機初入洛、次河南之偃師。時忽結陰、望道左若民居者、因往逗宿。見一少年、姿神端遠、與機言玄。機服其能、而無以酬折。前致一辯、機題緯古今、綜檢名實、此少年不甚欣解。將曉去、稅駕逆旅。媪曰、君何宿而來。自東數十里無村落。止有山陽王家墓。機乃怪悵、還睇昨路、空野霾雲、攢木蔽日。知所遇者、審王弼也。

機は初め洛に入り、河南の偃師に次る。時に忽ち結陰りて、道の左に民居の若き者を望み、因りて往きて逗宿す。一少年の、姿神 端遠なるに見ひ、機と玄を言ふ。機は其の能に服して、以て酬折する無し。前みて一辯を致し、機は古今を題緯し、名實を綜檢するに、此の少年は甚だしくは欣解せず。將に曉ならんとするに去り、駕を逆旅に税く。媪曰く、「君は何くに宿りて來たるか。東數十里より村落無し。止だ山陽の王家の墓有るのみ」と。機は乃ち怪悵みて、還りて昨の路を睇むるに、空野に霾雲ありて、攢木日を蔽ふ。遇ふ所の者に知するに、王弼なるを審かにするなり。

事の眞偽は別にしても、陸機・陸雲兄弟と玄學との關係を示す資料として興味深い。ただ元來、儒教を基礎においた教養を身に付けていた陸機は、『太平御覽』卷五五九に引く葛洪『抱朴子』に、

陸君深疾文士放蕩流遁、遂往不爲虛誕之言。非不能也。

陸君は深く文士の放蕩流遁するを疾み、遂に往て虚誕の言を爲さず。能はざるに非ざるなり。

と云うように、うわべだけ老荘の議論に耽る人士とは、相容れないものを持っていたように思われる。

これまで述べてきた西晉の元康年間に見られる老荘思想への傾斜の兆候は、やがて世の中が混亂してゆくに從つて、次第にその度を深めてゆく。そうして、西晉末の永嘉年間か

ら東晉への、玄言詩の流行に連なってゆくのである。しかし陸機らによって形づくられた「西晉文學」、すなわち『詩經』『楚辭』を基盤とし、その上に修辭を凝らして生まれた華麗で美しい文學は、決して消え去ることなく、玄言の風に流されることのなかった郭璞・劉琨に受け継がれ、東晉末の義熙年間には、謝混がその後を繼承し、さらに宋代には謝靈運が現れて、その山水詩の中に「西晉文學」が生かされてゆく。修辭にあまり意を用いることのなかった舊來の文學を華麗な文學に作り替えたところに、中國文學史上における西晉文學を位置付けることができるように思われる。

三 今後の課題

その特徴がどこにあるのか、從來、明確な答えが出ていなかった西晉文學の本質を解明するために、本論文では、南方呉の文學を代表し、後に北方の晉の文壇に加わり、やがてその代表的な作家となった陸機を中心に、その作品を通して考察を行なっていた。西晉時代には、幾つかの文學集團が形成され、相互に關連を持ちながら、それぞれに特徴ある独自の文學活動を行なっていた。かかる文學集團の活動において最も注目されるのが南北文學の接觸である。すなわち、それまで直接の交渉を持つことのなかった北方西晉の文學と南方呉の文學が、陸機ら南人の入洛を契機に始まったことである。南方呉國を代表する陸機の詩文は、入洛以前のものとして断定できる作品こそ多くはないものの、かなりの作品が今日に残されており、またその文章・文學觀を考察する上での恰好の資料となる陸機自身の手になる「文賦」と弟陸雲の「與平原書」が伝えられている。陸機を中心に西晉文學を見ていったわけは、そのことにもよる。

本論文を通して、いわゆる「西晉文學」なるものが、南方呉で行なわれていた『詩經』を規範とした古典的な文學と、北方洛陽の文壇での『楚辭』に依據した華やかで軽やかなる文學とが相互に影響し合い、やがて融合してゆくなかで生まれたものであるということ^{（文歩）}が明らかになった。しかし、西晉北方文學の特色を明らかにするためには、更に張華・潘岳らの北方文壇を代表する個々の文人についても見てゆく必要があった。しかし、入洛後の陸機の作品が多く残されているのに反し、張華・潘岳らには残された作品は少なく、考察は十分にはできなかった。また、陸機入洛以前の南方呉の文壇の状況も、作品の作られた時期がはっきりしないために、考察が不十分であった。今後、更にこれらの點について研究を続けなければならぬと思っている。

また、此の度の論文では、詩を中心に考察を進めたが、西晋文學の特質を探るには、詩以外の韻文である賦について、さらには散文をも取り上げて見てゆく必要があると思われる。

初めにも述べたように、本論文では、西晋文學界を代表する文人である陸機を中心に研究を行なった。ためにその対象とした時期が、陸機入洛後から陸機の卒するまでに限定されてしまった感がある。もとより陸機が世を去ってから西晋が滅亡するまでの時期は、次の東晋文學出現までの過渡期に當たるわけで、中國文學史上においても、それは重要な時期である。西晋末の文學、そうしてそれに連なる東晋文學についても引き続き研究を行ない、西晋のみならず、東晋をも含めた晉代文學研究に發展させて行きたいと考えている。